
モンスターハンター ～漆黒の業火～

朱里奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター ～漆黒の業火～

【Nコード】

N1383L

【作者名】

朱里奈

【あらすじ】

ユミナ・アリアスは幼いころ、一人の少年に助けられた。

その少年の、圧倒的な強さに惹かれて、彼についていくためにハンターになる事を決意する。ユミナは立派なハンターになる事は出来るのか！？

そして、少年に再び出会うことはできるのか！？

プロローグ（前書き）

一応、連載小説にしようと思っています。

更新などは不定期です。

モンハンらしくないところも在るので、
そこが許せない方はすみません。

ブローグ

ブローグ

ハアハアハアッ！

少女は密林を駆けている。

その少女はとても、必死に生き延びようとしていた。

ダツダツダツ！

密林を駆け抜けて、少女は開けた場所に出た。

振り返ってみると、自分を追っている気配は無い。

すると、少女は安心したのかその場に座り込んだ。

逃げ切ったと思ったからだ。

息を整えようとしていると、不意に影が差した。

何かと思い、顔を上げるとそこには

リオレウス
王者がいた。

少女は直感した。

何故ランポスは追って来なかったのか？

リオレウス テリトリ
王者の領域に自分が入ってしまったから。

自分はここで死ぬ。その考えに至って少女は恐怖した。

（死にたくない。私はまだ死にたくない！）

しかし、少女の望みは虚しくリオレウスは、少女へと向かってくる。

少女は動けなかった。

リオレウスの圧倒的な威圧感と死への恐怖で。

少し離れた木の影で、ランポスが食べこぼしを期待して様子を伺っている。

ガアアアアー！

遂にリオレウスが自分を食べようと襲ってきた。

（もう……だめ！）

少女は死を覚悟した。

ドゴーツー!!

少女は、信じられないものを目にした。

さっきまで自分を食べようとしていたリオレウスが、離れた所で倒れていたのである。

そして目の前には少年がいた。

漆黒と言えるほどの黒衣を、身に纏っている。

顔は整っていて、線は細いが体つきはしっかりとしている。

こちら辺ではあまり見ない、黒髪・黒眼である。

倒れているリオレウスは彼が倒したのかと思った。

しかし、彼は武器らしい武器を持ってはいなかった。

(まさか……素手で、あのリオレウスを倒した!?)

……そんなはずは無いか、ならどうやって?)

少年はこちらを振り返った。

「……怪我は無いか?」

「はっ、はい! 無いです!」

「……そうか」

そう言つて彼は表情を和らげた。

グアアアアー！！！！！

さつきまで倒れていた、リオレウスが立ち上がり咆哮した。

怒り狂っているようだ。

私は青褪めて彼を見た。

彼は特に気にした様子もなく、私を立ち上げらせて言った。

「……あぶないから、下がってる」

「はい！！」

そう言つて私は、その場から少し離れた所まで来た。

そして彼は、リオレウスと対峙した。

ガアアアー！！！！

リオレウスは突進してきた。

そして彼もリオレウスへと向かった。

少年とリオレウスの距離が縮まったその刹那。

ザシュザシュザシュ！！！！ ドサアッ！！

それは一瞬であった。

彼がどこからとも無く剣を取り出し、目にも止まらない速度でリオレウスを切り刻んだのである。

血塗れで絶命するリオレウスに対して、彼は無傷であり、いつの間にか剣も消えていた。

彼は王者をリオレウス一瞬で殺したのだ。

何の冗談かと目を疑う。

しかし、リオレウスは全く動かず少女の前で、絶命している。

「……………大丈夫か？」

「……………えっ！？ はい、大丈夫です」

すると彼は悲しそうな顔をした。

「…やはり怖いか？ 無理しなくてもいい、俺は化け物みたいだろ……………」

そう自嘲するよつに言い、

「怖がれるのは慣れてるからな……………」

とても悲しそうにそう告げた。

少女は絶対に嘘だと思った。

彼はかなり無理したような悲しそうな顔をしていたからだ。

そして自分の愚かさに気付いた。

（私は、何て事を……。助けてもらった人に恐怖するなんて、馬鹿みたい！

彼に謝らなくちゃ……）

「……ごめんなさい！！」

「……はっ？　なんで？」

「私助けてもらったのに、貴方を悲しませてしまった。

本当にごめんなさい！　あの時驚いたのは、少し考え事してたところを急に、

声を掛けてきたからビックリしただけで……。別に貴方を怖がったわけじゃないの。

だって貴方は私を助けてくれた、優しい人だから……」

そういうと彼は「……俺が怖く無いのか？」と、驚いたように聞い
てきた。

「ええ、貴方はとても優しい人だから」

「……そうか」と、嬉しそうに呟いてた。

彼は笑顔でこういった。

「……ありがとう」

「「ちら」そ、ありがとうございます！」

私たち二人は笑いあった。

「貴方はハンターなんですか？」

「いや、別に違うよ。ただ旅をしているだけさ」

「……そうなんですか」

「村に着いたみたいだな」

「もう行ってしまおうのですか？」

「ああ」

「また逢えますか？」

「さあな」

「私ハンターになろうと思います。ハンターになっていつか貴方に会いに行きます！」

「そうか」

「いつか会いに行きますから、待っていてください！」

「……わかった。待ってるよ……じゃあな」

「私の名前は、ユミナ・アリアス！ 貴方の名前は？」

「……俺の名か？ オレの名は

とても懐かしい夢を見た。

私がハンターになろうと決めたあの日の夢だ。

四年も前の話だ。

一人の少年に助けられて、その強さにあこがれて、
彼についていきたいと願い、強くなるために必死に頑張った。

自分の第一歩が始まるこの日まで。

死ぬ気で頑張ってきた。

今日から、ハンター養成学校（いわゆる、訓練所である）の卒業
試験が始まる。

この試験を無事に合格すれば、ハンターになれる。

（ カイト、元気かな？）

(もうすぐだよ。この試験に合格して、ハンターになって、もっともっと強くなって！)

(カイト 貴方に会いに行くから!!)

プロローグ（後書き）

始めまして！

初めて小説を書きました。

なので、誤字・脱字や意味不明なところがあつたら是非いつてください。

ご意見・ご感想などがありましたら、お願いします。

第一話「卒業試験開始！」（前書き）

第一話な第二話です！…ややくしやく

今回はちゃんとモンハンな気がします。

よろしくお願いします！

第一話「卒業試験開始！」

第一話「卒業試験開始！」

朝、いつもの様に少女は目を覚ました。

「ん~~~~~！ はあっ……眠い」

今日は一週間も続く卒業試験の、前日であった。

この卒業試験とは、最初の二日がハンターとしての基礎知識が試される、
ペーパーテストである。（主に、モンスターの生態や、調合の知識など）

そして残りの五日が、ハンターとしての実技……サバイバルである。
密林で五日かけて、指定されたモンスターを狩り、
自給自足で仲間と共に生き抜くことが、試験の内容である。

勿論、死ぬ可能性もあるが、基本的に教官が影から付いてくるので、死ぬ事は少ない。

しかし、この試験に落ちると、留年してしまう。

そして、来年にまたこの試験を受けなければならなくなる。

この試験に合格する事で卒業し、ルーキーのハンターとして狩りに行く事が出来る様になる。

(この試験に合格する事で、私の夢の第一歩が踏み出せる！)

そう思い、眠気を吹っ飛ばしてから、朝の支度を始めた。

勿論、学校へ行く為の準備だ。

適当に朝の支度を終え、ユミナは学校へと急いだ。

教室に入ると、早かった為かまだあまり揃ってないように感じた。

「おはよ〜ユミナ!」

「おはよう。アイ」

私に挨拶をしてきた少女は、「アイ・フローズ」と言う名の少女である。

彼女は私の大親友であり、良きパートナーでもあった。

「ねえねえ！ 今日さ〜夢でね、ケーキを沢山食べる夢を見たんだ！

そして目が覚めたらね何も無かったの。悲しかったよ……」

この通り、少々天然なところがあるが、これも彼女の魅力の一つである。

「おはよう。ユミナ！ アイ！」

「おはよ〜キイ君」

「おはよう。キイ」

私に挨拶をしてきた少年は、「キイ・レディルト」と言う名の少年である。

（はっ！？ デジャヴ 疎外感）

私の数少ない異性の友人の一人である。

平凡なのだけれど、かなりのツツコミを有している。

（人は彼のことをこう呼ぶ。……ツツコミマスターと！！）

「ねえ？　なんか、かなり失礼な事を言われてる気がするけど……」

「「気のせいだよ〜！！」」　鋭い！！

何はともかく、私を含めたこのメンバーで、パーティーを組んでいく。

アイはライトボウガン。

キイは片手剣。

私は太刀。

なかなかバランスの取れたチーム構成である。

「明日は、ついに卒業試験だね」

「そうだね。僕は筆記の方は何とかなるけど、実技がね」

「大丈夫だよ、私もユミナもいるから」

「そうね。実技の方は心配ないと思うから、まずは筆記の方に集中しなきゃ」

「さすが、学年上位者は言う事が違うね……」

私の成績は、学年で五位ぐらいに入る成績。

アイの成績は、いつも学年の上位の方に居るぐらいの成績。

そしてキイの成績は、中の上。よくて、上の下である。

やはり平凡。しかし、普通は優秀な部類に入る成績である。

「まあ、明日にならない事には始まらないけどね」

「そうね」

「うんうん……」

「席に着けー！出席を確認するぞ！」

「先生来たね。また後で」

「ええ」

「また後でね」

それぞれの席についた。

「えー、明日から卒業試験だ。各々気を引き締めてがんばってくれ！以上だ！」

きりっつ、れい！

「……ありがとうございますー！」」「」「」

ガラガラガラーピシャン！

「一時間目、何だっけ？」

「調合の講義じゃなかったっけ？」

「確か……そうだったね。実際に調合もするらしいよ。」

「そっなんだ〜！」

「失敗しなければいいね」

「……洒落になってないよっ！？」

「さて、行こっか！」

「うん！」

私達は教室を去った。

夜。

ユミナは明日に向けての準備をしていた。

明日、明後日は筆記の試験なので勉強しなければならない。

なので、軽く復習をしていた。

ある程度復習すると、ユミナはとある人物の事について考えていた。

（ 元気かな？ ……カイト ）

「カイト・シイナ」四年も前、モンスターに襲われていたユミナを、助けてくれた少年である。（正確には、椎名 海斗である）

圧倒的強さを持った少年だ。

なんせ、あのリオレウスを素手でぶっ飛ばし、一瞬にしてスタスタに引き裂いたのだから。

（私はカイトに付いていく為に頑張ってるよ……）

(だから、待っててね……?)

ウトウトし始めたユミナは、ベッドに横になり、眠りに付いた。

筆記の試験が終わった。

残りは、実技のみとなった。

「アイ！ キイ！ 皆で明日頑張ろう！！」

「うん！！」

試験が開始された。

私たちのターゲットは、

ランポス20頭、

ブルファンゴ5頭、

ドスランポス1頭である。

「さて、まずは密林の散策から始めよ！

眠れそうな場所を探して、飲み水の確保してその後に食料調達よ。

「

私達は集団で密林の散策を始める。

しばらくすると、開けた場所に出た。

そこは、雨風もしのげて川も近いという絶好のポジションだった。

「ここを拠点にしよう」

「うん！」

「これからどうするの？」

「そうだね……少しランポスを狩ろっか？ 戦闘に慣れておかないといけないしね。」

それで、ランポスを狩った後は、アプトノスから生肉をとって食事にしよー！」

「「わかった」「」

「それじゃあ行くよ！」

そう言って私達は密林へと駆けていった。

第一話「卒業試験開始！」（後書き）

誤字・脱字や意味不明な所があったら是非言つて下さい！

ご意見・ご感想をお待ちしております。

次回から戦闘シーンになります。

慣れてないので無茶苦茶になるかもしれませんが、まあ何とか頑張りたいと思います！

第二話「ハプニング！」（前書き）

今回は少し長いです。

初の戦闘シーンですから、
気合が入りすぎてしまいました。（笑）

第二話「ハプニング！」

第二話「ハプニング！」

ギヤアギヤア！

ランポスは鳴きながら跳びかかる。

それをユミナはかわして、太刀を抜き斬りかかった。

「ハアッ！！」

ザシュツ！

ギヤアー！

一撃で斬り飛ばされたランポスは、絶命した。

ギヤアギヤア！ ギヤア！

仲間を殺されたランポスたちは、警戒するように鳴き声を上げている。

ランポスたちはユミナを囲むように動きだした。

ズガガガン!!

ズシャズシャズシャズシャ!!!

後ろに居たアイが、ユミナを囲もうとしていたランポスたちに散弾を打ち込んだ。

ギャギャアー!!

ランポスたちが怯んでいるうちに、ユミナは一匹のランポスに斬りかかる。

「 ていつ! 」

ズシャ! ザシュツ!

ギャアーーツ!

ランポスは絶命した。

怒り狂ったランポスたちは、次々と跳びかかった。

しかし、ユミナたちは慌てる事もなく対処した。

アイは近くに来た奴に散弾を撃ち。

ユミナは散弾で怯んでいる奴らに斬りかかった。

この連携の前に、ランポスたちは次々と死んでいった。

一匹のランポスが連携をかわし、アイへと跳びかかった。

ザシユ!

横からの斬撃にランポスは吹っ飛ばされた。

キイの一撃である。

吹っ飛ばされたランポスは、起き上がろうとしたがキイに追撃されて絶命した。

「終わったね」

今死んだランポスが最後の一匹であった。

「さあ、剥ぎ取ろう?」

ユミナたちは、死んだランポスの皮や鱗や牙などを剥ぎ取っていた。

ランポスを倒した証拠として、素材が必要なのだ。

「ふう〜。さすがに疲れたね」

「うん、7頭も倒したもんね」

「えっと、これから食料調達?」

「そうだよ。まあアプトノスから肉をとるだけだね」

「じゃあエリアーに行くの?」

「そうなるね」

「お腹〜ペコペコだよ〜」

「ふふつ。そうだね、早く行こっか」

「「うん!」」

「さて、肉を焼こっ」

そういつと皆は、それぞれの肉焼き器で肉を焼き始めた。

「〜」

しばらくすると肉はいい感じに焼けてきた。

「はい、上手に焼けましたっ」と

こんがり肉を手に、みんなの所に向かった。

「あう〜こげ肉になったよ〜」

アイは泣きそうな様子でこげ肉を見つめていた。

「しょうがないなあ……私のをあげるよ」

「いいの？」

「うん、私は新しいのを焼くから」

「ありがとう」

そう言ってアイは抱きついてきた。

「ユミナ大好き」

「はいはい、分かったから」

アイを引き離すと、こんがり肉を渡して新しいのを焼き始めた。

「……上手に焼けましたっ」と

「あれ？ ユミナって、肉焼き歌を歌うんだ？」

そう言って、肉を焼き終わったキイがこっちに来た。

「うん、そうだね。割とこの歌気に入っているし、確実だからね」

肉焼き歌とは、焼き加減が分かるハンター独自の歌である。

「へえ〜そうなんだ」

「アイも歌いながら肉を焼けばいいんじゃない？」

「そうかもね。じゃあ今度からそうするよ」

「キイは歌わないの？」

「いえ、僕も歌って焼いているよ」

「そうなの？」

「うん。でもこの歌を歌いながら焼く人って、あまり居ないんだよね」

「へえ、確かにそうかもね」

「ねえ、もう食べようよ、お腹ペコペコだよ」

「わかってる……さあ、食べよ！」

そう言って皆はこんがり肉を食べ始めた。

あらかた食べ終わると、明日の事について話し始めた。

「明日の事だけど……」

「うん」

「明日は密林を本格的に散策して、使えそうなアイテム集めや、ドスランポスの巣を探そう。途中でモンスターに出会ったら、倒すことにしよう」

「わかったよ」

「わかった」

「じゃあ今日はもう早く寝よー!」

「うん!」

そうして、ユミナたちは眠りに付いた。

密林での生活で3日が過ぎ4日目の夜中。

目的のランポス、ブルファンゴは目標数だけは狩り終えた。

残るわ、ドスランポス1頭の討伐であった。

そして今はそのドスランポスとの戦闘中であった。

ギアアギヤー! ギアア!

「ハッ!」

ザシユ!

「てやっ!」

ズシャ!

ギヤアアアアア！！！！

斬られたドスランポスは、鳴きながら後ろへと跳んだ。

そこに、「くらえー！」とアイがLV1貫通弾を打った。

バンバンバンバン！

全てドスランポスの体に命中した。

貫通弾を食らい隙ができたドスランポスに、キイが連撃を食らわす。

ザシユザシユドカツ、ズバン！

ギヤアアアアアアアア！！！！

畳み掛けるようにユミナは、太刀を振るった。

「ハアアアア！！！」

ズシャー！

ギヤアアアアアアア！！！！

ドスランポスは、相手に背を向け洞窟へと走り去っていった。

「逃げた！ 相手は弱ってるから、回復させちゃ駄目！ 追っよ！」

ユミナたちはドスランポスを追い洞窟へと入っていった。

洞窟の広い場所に出るとドスランポスが待ち伏せていた。

周りにはランポスが群がっている。

「アイは周りのランポスを！ キイは私の援護をして！」

「はい！」

アイは散弾や貫通弾を使い周りのランポスたちを掃討していく。

キイはユミナにあわせて動き、ユミナの周りのランポスたちを倒して、

陽動としても動いていた。

そしてユミナは、ランポスを蹴散らしながらドスランポスへ攻撃を加えていった。

ギヤア！ ギヤギヤア！

ギヤアギヤア！

ギヤアアアアアア！

見る見るうちにランポスは減っていき、ドスランポスも追い詰めていったが、

ユミナたちは次第に疲労が溜まっていき、敵が多すぎて砥石で砥ぐ暇もないので、

切れ味は悪くなっていき苦戦を強いらせきた。

「！ しつこい！！ ハアアー！！」

ザシュ！

「皆さん目を瞑って下さい！」と、キイが言った。

閃光玉を投げるつもりなのだろう。

カツ！ ピカーーーーー！！！！

ギヤアアーーーー！

「今です！」

「いい加減にくたばれえ！」

怯んでいるドスランポスに、ユミナは渾身の一撃を叩き込んだ。

ぎゃあああああああ！！！！

ドスランポスは断末魔を上げながら絶命した。

頭を失ったランポスたちは混乱している。

勝利を確信したその瞬間……信じられないものを見た。

新しいドスランポスが居たのだ、それも1頭ではなく軽く5頭ぐら
いは居た。

「そ、そんな……馬鹿な！」

退路はすでにランポスたちによって、断たれている。

ドスランポスが5頭以上も同じところに居るなどは、絶対に在り得ない事だ。

しかし、その在り得ない事が目の前で起こっている。

戦う覚悟をユミナは決めた。決めるしかなかった。

「……戦うしかない！」

「えっ！ どうやって!?!」

「閃光玉はまだある？」

「あるけど……」

「私が合図したらそれを使って！」

そして全員が怯んでいるうちにアイは、教官たちを呼びに行つて！」

「そんな！ ユミナ達はとうするの!?!」

「私たちは囿よ、教官たちが来るまでの時間を稼ぐ」

「そんなの無茶だよ！ 私も戦うよ！」

「駄目よ！ 貴方はガンナーで、しかも弾もあまり残ってない。

それに、こんな密集地帯じゃ貴方は不利よ」

「でも！」

「だからアイには、教官たちを急いで呼びに言って欲しいの。このままじゃ、私達は確実に……全滅する。だけど、教官たちさえ居れば何とかなると思う。だから、呼びに言って欲しいの！」

「皆で逃げればいいんじゃないか？」

キイは自分の疑問をぶつけた。

「駄目。多分逃げても、疲労している私たちじゃすぐに追いつかれる。」

「だから足止めが必要なの」

「なるほど……」

「なるほどじゃないよ！ そんな危ない事駄目！」

泣きそうになりながら、アイはユミナに訴える。

「大丈夫よ心配しないで……私達はこんな所で死なない！」

「でもお〜！」

尚も食い下がってくるアイにユミナは告げた。

「今、私達を助けられるのはアイししか居ない。だから、頼んだよ！」

「……………」

「……………」

「……………わかった」

「そう。頼んだ！　じゃあ、2人共行くよ！」

「「はい!!」」

ユミナはタイミングを計る。

「今よ！　閃光玉を投げて！」

「はい！」

カツ！　ピカー………!!!!

ギヤアア………!

「いってきます！　絶対に死なないでね!!」

アイは怯んでいるランポスたちの間をすり抜けて洞窟を後にした。

「今のうちに準備を！」

そう言ってユミナたちは砥石などを始めた。

「ごめんね、キイ」

「気にしないで。それよりも頑張ろう！」

「そうだね……」

（カイト……私は頑張るから。私を守って）

「さて、そろそろ……」

「そうですね」

「いくよー！」

ユミナ達はランポスの群れに突撃した。

第二話「ハプニング！」（後書き）

書いていてとても楽しいです、はい。

まだまだ慣れていないところがあるので、
誤字・脱字や意味不明なところがあるかもしれません。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

第三話「試験終了」（前書き）

新米の筈なのに強すぎませんか？

まあそこら辺は、しじま嬌としじまゆで。

第三話「試験終了」

第三話「試験終了」

ダツダツダツダ！

密林を縦横無尽に駆け抜けて、教官が居るであろうベースキャンプ周辺へと向かっている。

「ハアハアハア！」

少女^{アイ}は、ひたすら走り続ける。

今にも泣きそうになりながら。

懸命に走り続ける。

「ハアハア、ユミナ、待っててね、死なないでね！」

もう少しでベースキャンプに着くところで、アイは囲まれてしまった。

ドスランポスとその群れに。

「嘘っ!？」

(ユミナ達が、ちゃんと足止めしているはずだから、アレはまた別の奴!?)

驚愕した。

同じ密林で何頭もドスランポスが、出てくる事に。

ギヤアギヤア! ギヤアー!!

「こんな所で……! 負けるわけにはいかないの!!」

ライトボウガンを構えると、残り少ない散弾で、ランポスたちを蹴散らしながら、走り抜けようとした。

しかし、ドスランポスが居るので、そう上手くはいかず、すぐに回り込まれて、また囲まれてしまった。

「……ユミナ、ごめん。約束守れそうに無いかも」

そう言っつて、今も戦っているであろう親友の方を向いて呟いた。

「……ごめんね」

ギヤアギヤ!

アイを囲んでいたランポスたちが、襲い掛かってきた。

アイは死ぬ事を覚悟して、目を瞑った。

.....。

(.....?)

何時までたつても、衝撃や痛みが来ない。

不審に思っけて目を開けてみると、そこには。

ランポス達を蹴散らして戦う教官の姿が。

「.....教官!？」

「応! 何ぼさつとしてんだ! 武器を構えろ!！」

「はっ、はい!！」

そういうと教官は、次々とランポスたちを倒して行き、ドスランポスもあつという間に倒してしまった。

「大丈夫か?」

「はい.....」

そうして自分がここに何をしに来たか思い出した。

「きよ、教官! ユミナが、ユミナたちが.....!！」

教官に今起こっている事を全て話す。

「何だと!! 馬鹿野郎それを早く言え!!
すぐに行くぞ! お前は弾を補充してから来い!」

「はい!」

(なんてこつた……ドスランポスが群れをなすだと!?
在り得ない筈だ! 何が起こっている……?)

教官は洞窟へと急いで向かった。

「ハッ!」

ザシュツ!

「ていつ!」

ズシャッ!

「イヤアアー!!」

ズバンツ!!

無数に湧き出てくるランポスたちを蹴散らしていく。

「……まだまだ!」

ユミナは、そう言って必死にランポスたちを倒していく。

ユミナは、目に見えて傷が増えてきている。

大きな傷はまだ負ってないが、時間の問題である。

「でえやああー!!」

隣に居る、キイが連撃をランポスたちに喰らわせていく。

しかし、いくらランポスたちを倒しても限が無い。

既に、ランポスは20頭ぐらい倒して、ドスランポスを1頭を、倒している状態だが、未だ敵の数は減らない。

二人にどんどんと傷と疲労が蓄積していく。

「教官は、まだなの!?!」

「時間的には、あと少しじゃないかな?」

「……そう、じゃあ、もう少しがんばろう!」

「うん」

「閃光玉を」

ユミナがそう言うと、キイはすぐに閃光玉を投げた。

カッ!ピカーーーーーッ!!

ギヤアアー!!

ランポスたちが怯んでいる間に、砥石で切れ味を戻して、回復薬を飲み、敵を減らすためにランポスに斬りかかった。

それを幾度となく繰り返していった。

「もう……閃光玉がない……」

「……そう。じゃあ、後は己の腕のみね？」

「無茶言わないでくよ……」。

僕達は、まだ新米ハンターにすら劣るんだよ？」

「でも私たちは、まだ生き残ってるじゃない？
だから、きつと、将来有望なのよ」

「……そうかも、ね」

「じゃあ、いくよ。それぞれ違う頭を叩く」
トスランポス

「わかった。最後の悪あがきだね？」

「違うよ、だって最後じゃないから」

「……そうだね」

「いくよ……」

「はい……」

キイが慌ててユミナの元に行こうとしたが、ドスランポスに吹き飛ばされ、阻まれた。

「ぐはあっ！」

吹き飛ばされたキイは、すぐに体勢を立て直す。

ユミナの肩は幸い繋がっていた。

「うぐっ、ハアア！！」

ユミナは右手に持っていた太刀で、全力でドスランポスの首を斬り払った。

すると、ドスランポスの首が飛び、絶命した。

すかさずユミナは体勢を立て直す。

「ハアッ！ハアッ！、ツハア！」

一目見ただけで分かるほどに肩の傷は大きすぎた。

「ユミナ！ 大丈夫！？」

「……大丈夫に……見える？」

「いや、全然」

「……そう。さすが……にヤバ……いわね……」

「逃げる?」

「いえ、逃げ……ないわ。最……後まで……戦うわ!」

「……分かった。最後まで戦うよ」

ユミナとキイはそう言って武器を構えた。

「いくよ……」

「……はい」

2人はランポスの群へと飛び込んでいく。

ザシュ!

ドシュ!

ズバツ!

ドガ!

バキツ!

ズバンツ!!

「……ハア、ハアッハア!」

ユミナは疲労困憊で、さすがにもう動けそうになかった。

(……カイト、私はもう駄目かもしれない。でも最後まで、諦めずに頑張れたよ……)

(もう一度……会えるかな……?)

ランポスが一匹跳びかかってきた。

(……さよなら)

ズバンッ!!

ギヤアアアア!

ユミナへと跳びかかってきたランポスが、突然真っ二つになった。

「えっ!?!」

「待たせたな!」

「ユミナ!! 助けに来たよ」

ランポスを真っ二つにしたのは、アイが連れてきた教官であった。

「……来てくれたんだ」

ユミナは安堵した瞬間、視界がブラックアウトした。

慌ててアイは、ユミナの元へ駆けつけて体を支える。

「ユミナ!!」

「大丈夫だ。後ろに下がって治療をしてくれる」

「はい!」

「お前も下がっておけ!」

教官は、未だ戦い続けていたキイを下がらせる。

「はっ、は……い」

「ここからは、オレが相手だ!!」

ギャギャア!

教官はランポス達へ立ちはだかり、叫びながら突っ込んでいく。

夜。ユミナは目を覚ました。

「……ここは?」

「ベースキャンプだ」

「教官……」

ユミナの呟きに答えたのは教官だった。

「肩は大丈夫か？」

「うっ！まだ痛いけど大丈夫です」

「そうか」

教官と話していると、今にも泣き出しそうな顔のアイが来た。

「……………っ！？ ユミナちゃんっ！！??」

アイは現れるといきなりユミナへと抱きついた。

「よかった〜！！ 生きててくれて本当に良かったよ〜！！」

「アイ、痛い、痛いって」

傷口を抑えて抱きつくアイに、ユミナは痛がりながら離す様に促す。

「はう〜。ごめんなさい〜！」

「ふふっ！ ありがとう。私は大丈夫だから。

そっいえば、なんで“ちゃん”付けなの？」

「えへへ、それはね。仲良しのしるし……………かな？」

「そっか……………そっいえば、キイは？」

「疲れて、まだ寝ている」

ユミナの問いに答えたのは教官だった。

「教官……」

ユミナは教官に窺うように尋ねる。

「なんだ？」

「私たちは合格ですか……？」

「ふつ。ふふつ、ハツハツハツ！」

「「????」」

ユミナとアイは突然笑い出した教官を不思議そうに見つめている。

教官は不敵に笑うと、告げた。

「当たり前じゃないか！ あの大量のドスランポスを相手に生き残ったのだからな」

「それじゃあ……!!」

「勿論、合格だ！ おめでとう！」

「「やったーっ!!」」

2人は嬉しさで思わず抱き合ってしまった、ユミナは激痛が走って悶える。

「さて続きは学園に帰ってからだ。今は休め！」

「はいっ……！」

こうして、長かった卒業試験が終わりを告げた。

第三話「試験終了」(後書き)

もうすぐ、ハンターになれます！

誤字・脱字や意味不明なところがあったら、是非言ってください！

ご意見・ご感想をお待ちしております。

第四話「卒業」(前書き)

二回も文章が消えたときはショックでした!!

二度目の正直で書きました!(笑)

第四話「卒業」

第四話「卒業」

”あの”卒業試験から約一ヶ月が経った。

あの卒業試験とは、密林でドスランポスが大量発生して、しかも、「ドスランポス同士が群れを成す」という前代未聞の事件である。

その為、密林は危険地帯となってしまうたので、ハンターに依頼を出して、ある程度安全になるくらいまで狩ったそうだ。

しかし、いまだに「どうして、ドスランポス同士が群れを成したのか」については、何も分かっておらず、お手上げ状態。

当事者である私達も、沢山話しを聞かれた。

一部では、ドスランポスよりも上の、統率固体が現れたんじゃないかと噂されている。

まあ、根も葉もない噂だけだね。

そんなことよりも、明日はついに待ちに待った、卒業式である。

卒業試験を無事に合格した、私達は明日卒業すると、
新米ハンターとして依頼クエストを受ける事が出来る。

（ついに明日は卒業式！ 私の夢の第一歩が踏み出せる日！
もっとももっと強くなって、カイトに逢いに行く！）

そう嬉しく思う気持ちもあれば、また逆の気持ちも感じていた。

（明日で、アイやキイともお別れ……）

私は少しさびしい気持ちがこみ上げてきた。

ハンターである限り、何時かまた逢えるとは分かっているけれども悲しいものだ。

だからこう思った。

（「さよなら」なんて言わない！ 絶対に「またね」って、笑顔で
別れよう！）

そう心に決めたのである。

（卒業したら如何しよう？）

卒業後如何するか、私はまだ決めていなかった。

アイやキイは、自分の村に帰ってハンターとしての腕を磨くらしい。その為に、アイは荷造りをしていて、キイは別れるであろう友人たちと、最後の一日を過ごしている。

（私も村に帰ろうかな？ それとも、カイトのように旅に出る？）
どうするかを試行錯誤を重ねた結果、
村に帰ってハンターとしての腕を磨く事に決めた。

今旅に出てもカイトの役には立てないからだ。

「さて、鍛錬の続きをしようかな？」

私は卒業試験で左肩に大怪我を負ってしまい、一ヶ月まともに鍛錬が出来ず、
体が鈍ってしまっていた。

それを何とかする為に、闘技場（訓練場の施設）を借りて、鍛錬をしている最中である。

太刀を鞘から抜く。

スーッシャキン

「ハアッ！ ていつ！ タアアッ！」

ブンブンブン！！！！

「ハッ！ ハッ！ イヤアアッ！！！」

ブオン！ ブオン！ ブオンッ！！

「ハアーッ！！！！」

ゴオウッ！！！！

私は、気付いたら夜遅くまで鍛錬に打ち込んでしまっていた。

卒業式当日。

私は朝早く目が覚めてしまったので、教室へと向かうことにした。

今まで過ごし、学んできた教室を目に焼き付ける為に。

そこにはすでにアイが来ていた。

「あれ、ユミナちゃん？ 早いね」

「そういつ、アイも珍しく早いじゃない」

「そうかも。理由は同じかな？ ユミナちゃん」

「多分おなじね。それと、おはようアイ！」

「おはようっ！！ ユミナちゃん！！」

卒業試験以来、アイは私の事をちゃん付けで呼ぶようになった。

なにやらこの方が呼びやすくて、響きも可愛いからであるらしい。

最初は仲良しの印って聞いたけど……ころころ理由が変わってる気が……。

「今日は〜ついに卒業式だね〜」

アイが突然話を切り出してきた。

「そう……だね……」

「私は、ユミナちゃん達と別れるの、寂しいよ……」

泣きそうな顔でアイは告げてくる。

「私も……とても、悲しい」

私も泣きそうな顔になりながら答えた。

けれど、何とか頑張って笑顔を作る。

「でも、また逢える。何時だって何回だって私達は逢える！」

「そうだね……」

「だから、泣かないで。笑ってお別れしよ？」「またね」って。ね？」

「うん……そうだね。私が笑わないとユミナちゃんも、何時までも笑えないよね。でも、今だけは泣かせて……」

「うん、今だけは一緒に泣こう？」

「うっ、ん、 ひっく、うぐ、え、うっ」

「 ひっく、うっ、う、えあ」

「「うわー！ん！！？？」」

二人で思いっきり泣いた。

何時までも続くように泣いた。

そして、二人で笑った。

「ユミナちゃん顔がひどい事になってるよ〜ふふっ」

「そっいうアイもひどいよ。ははっ」

「「あははははははっ！〜！」」

「たくさん泣いたね！」

「たくさん笑ったね！」

「じゃあ、元気に行きましょうか！」

「うんっ！」

こうして二人で卒業式へ行く為の準備へ向かった。

卒業式が終わった……。

アイ、キイ、ユミナの三人は集まっていた。

「最後ね……」

「うん」

「何時までも友達だよ？」

「あたりまえだよ！」

「当然だね！」

「じゃあ誓おうか……」

「うん……」

「私（僕）達は今ここに誓う……」

「何時までも変わらない友である事を……」

「それぞれの道を歩んだとしても！」

「何時かまた、再びめぐり合い！」

「助け合い、ともに笑いあう事！」

「私たちの絆は永遠である……！」

皆で笑いあった。

「じゃあ……」

「……またね……！」

それぞれの道へと別れた。

私は皆と別れた後、竜車に乗って生まれ故郷であるレーユ村へと向かった。

（カイト……皆……何時か逢う日まで、私は強くなって見せるから！）

その日を夢見て、私は強く心に刻んだ。

第四話「卒業」(後書き)

次回からユミナー一人での狩りになります。

誤字・脱字や意味不明なところがありましたら、是非言ってください！

ご意見・ご感想をお願いします。

EX:01「黒の者達」(前書き)

カイト編です！

カイトの事がほんの少しだけ分かるようになり
なるかもしれません！

まあ、あくまで”かも”ですが…。

EX:01「黒の者達」

EX01:「黒の者達」

暁の朝。

一人の少年が考え事をしていた。

その少年は漆黒ともいえる格好を携えていた。

その漆黒の少年は、人について考えていた。

人は傲慢だ。

人は強欲だ。

人は怠惰だ。

人は憤怒だ。

人は暴食だ。

人は淫欲だ。

人は嫉妬だ。

人はこのような事を学ばずに、無為に生きている。

「七つの大罪」は、まさに人間自身を顕していると言えるだろう。

人にろくなものはない。

皆が皆、身勝手である。

人は自分とは違うものに恐怖し、差別を行い。

全てを奪う……そう、命さえも。

だから、人は嫌いである。

信用できないし、信用されないから。

そう言う俺も人であった……。

しかし、人であることに絶望して、人であることを捨てた身だが。

人は大嫌いである。

だが、人の中にもやはり変わり者はいる。

こんな俺のことを優しい人といって、何時か一緒に旅をするといった娘。

こんな俺に待っててねと言ってくれた奴がいた。

これは四年も前に約束した話である。

リオレウスに襲われていた所に、偶然いた俺が助け出した少女。

俺の力を目の当たりにしても、変わらず優しいと、ありがとうとい
った少女。

名は ユミナ・アリアス。

この少女は不思議と嫌いには、なれなかった。

むしろ好きであるといえる。

少女はハンターになって、強くなり、俺についていくといった。

今頃どうしているだろうか？

約束は覚えていてくれるだろうか？

元気になっているのだろうか？

逢いたいな……。

でも、まだ早い。

もう少し時間が必要。

「…………ユミナ、死ぬなよ」

俺はそう静かに呟いた。

ガサガサッ！

背後から音がした。

誰が来たのが、わかっているので慌てる必要はない。

「…………お兄様。ここに居たの」

もう一人の変わり者、俺の義妹である。

「シズクか…………」

少女の名前はシズク・シイナ。

(正確には、椎名 雫)

右目は蒼、左目は朱鷺、のオッドアイを有した美少女であり、俺と同じ黒の髪である。

「…………シズクか、じゃない！」

「?????」

「…………心配した。急に居なくなるから」

「そうか、すまなかつたな」

そう言って笑った。

「……笑い事じゃない」

「まあ、気にするな」

「……いいけど」

彼女は稀に見る「オッドアイ」というだけで、

「魔眼」「邪眼」「悪魔の目」イビルアイだと、虐げられてきた。

俺は彼女が五歳のときに偶然であった。（十年前のことである）

この世の全てに絶望したような瞳は、綺麗な瞳を侵していた。

お前は何に絶望している？

っ！！！？？

何をそんなに怖がる必要があるんだ？

……みんな、うっ、この目を怖がって、ひっく、痛いことして
くるの、っぐ。

そうなのか？ こんなに綺麗な瞳なのに……勿体無いな。

……綺麗？ 怖くないの？

ああ！ とても綺麗だよ。怖くなんてあるわけない！

うれしい！ 始めてそんなこといわれた！

そうか……じゃあ俺と、一緒に来るか？

うん！

俺が彼女を絶望から救い出し、行動を共にするようになった。

それからしばらくすると、彼女が住んでいた村から煙が見えた。

村に行くと、リオレウスが村を襲っていた。

村の人たちは逃げ惑い、俺たちを目にとめると助けを求めてきた。

「たすけてくれー！！」

助けを呼ぶその声に俺は虫唾が走った。

「ふざけるな人間！！ お前らはこの子が同じ事を言ったとき、お前らはどうした！！」

身勝手な事ばかり言うな！！」

「悪魔の子をどうしようが俺らの勝手じゃねえか！！」

俺はその一言で完全に切れた。

「……もういい、お前はここで死ね」

一瞬であった。

さっきまで生きていた奴を一瞬で消滅させる。

「……屑が。もういい、行くぞ！ シズク」

「……待つて。こんな、どうしようもない人たちだけ、

一応私の故郷の人たち。あのモンスターだけでも倒してくれませんか？」

「……お前は、こいつらの事を許すというのか？」

「……いいえ、絶対に許せない。けど、私はあの人たちとは違うから、困っている人は助けたいと思うの。……だめ、かな？」

「……。。……つく、くくく、はっははは！！」

「????？」

突然笑い出した俺を不思議そうに見つめてくる雫。

「お前は、変わり者のお人よしだな」

「……お兄様ほどじゃない」

「わかった。少し待つててくれ」

「……はい！」

そう言い残すとリオレウスの所へ向かった。

「俺の愛妹のお願いだ。お前に罪はないが、死んでもらう！」

そういつて、俺は異空間にしまつてある、武器を出した。

「 進れ、雷光！ ……雷切！」

雷を帯びた刀を振るつた

ズザアアーン！！

グギヤアオオオー！！

雷を纏つた一撃の下にリオレウスを葬り去つた。

「……………」

後ろでシズクが、ポカンとじていた。

（しまった！ これは、やりすぎたか！？）

俺は慌てて弁解しようとする。

「 えっと、これは、つまり……………」

「 ……すじこー！」

「 へっ？ 」

俺はいきなりのことについていけず、素っ頓狂な声を上げてしまつ。

「……強いの！ かつこいい！」

「そっ、そっ？」

「……うん！ 私にも教えて！」

「別にいいけど……。お前って、やっぱり変わってるな」

「……そっ、かな？」

「そっだ。普通は怖がるぞ……」

「……怖くない！ お兄様は優しい人だから。」

私を絶望から救い出して、生きる希望をくれた優しいお兄様だから……！

「……そっか」

「……そっ」

「じゃあ、いくか……！」

「……はい……！」

「……様っ！ お兄様！」

「ん？」

「……聞いてる？」

「すまん、考え事をしていた」

「……まったく、お兄様は……一体何を考えてたの？」

「お前に出会った日のことだ」

「……そう」

「あとは、ユミナのことだ」

「……ユミナさんのこと？」

「ああ、お前と同じことを言った、変わり者の一人だ」

「……そう、早く会って見たい」

「まだ早い」

「……わかってる。でも気になる」

「……なにがだ？」

「……人が嫌いなお兄様が、興味を示す女性ひとだなんて

「そうだな。俺も早く逢いたいよ」

「……ハンターになるの？」

「そうらしい」

「……強くなるかな？」

「分からん」

「……まあ、いずれ会えるよね？」

「そうだな。じゃあそろそろいくか？」

「……はい！ お兄様」

ユミナ。死ぬなよ。

俺たちは終わらない旅へと戻った。

EX:01「黒の者達」(後書き)

カイトとシズク。

個人的にめちやくちや好きな組み合わせです。

次からは、ユミナの話に戻ります。

誤字・脱字や意味不明なところがありましたら、是非言ってください！

ご意見・ご感想をお待ちしております。

第五話「帰郷」(前書き)

短いです、すみません。

なんか色々と描写が無くて、
わかりにくい気がしてきます…。

無茶苦茶すぎかもしれません。

第五話「帰郷」

第五話「帰郷」

「お客さん。着きましたよ」

竜車を先導していた、おじさんはそう告げた。

「そう。ありがとう」

私はお礼を告げて、お金を渡した。

あたりを見渡すと懐かしい風景が目映る。

そこは平和を体現したかのような、のどかな村だった。

村の名前は、「レエーユ村」という。

私の生まれ故郷^{ユミナ}だった。

「久しぶりだな」

村の中に入り、少し村の様子を見ることに決めた。

村の中は全く変わった様子が無く、何もかもが懐かしいと感じた。

雑貨屋の近くを通ると、見知ったおじさんが声を掛けてきた。

「おっ、もしかして……ユミナちゃんかい？」

「うん。久しぶりおじさん」

「お、久しぶりだね。ハンターになれたのかい？」

「はい！」

「そうかい！ これからは物を買うときは、うちをひいきしておく
れ」

「ふふっ。わかった」

「そりゃよかった」

「じゃあ、また今度」

「応！ がんばりな！ 選別だ。これをもっていきな！」

おじさんはそう言うと、私に袋を投げ渡した。

中に入っていたのは、とても瑞々しく美味しそうな果物であった。

「ありがとう！」

おじさんと別れた後、私は工房へと向かう。

「ツバサさん？ いますか？」

「あゝはいはい！ いますよゝ、ちょっと待っておくれや」

奥から若い女性が出てきた。

「おゝ？ ユミナちゃんかい？ 大きくなっただねゝ」

「はい、お久しぶりです！ これからお世話になります！」

「久しぶりゝ。てことは、ハンターになれたんだね？」

「はい！」

「おめでとゝ！ 武器・防具のことは、あたしに任せておきな！」

「はい。頼りにしています。では、私はこれで」

「また来てねゝ」

工房を後にした。

そのあしで、酒場にいる村長に挨拶に行った。

酒場に入ると、昼間だというのに酒やタバコのおいが充満していた。

少しキツイ……。

カウンターに座っていた村長に声を掛けた。

「お久しぶりです。今戻りました」

「お、久しぶりじゃの！」

「無事ハンターになることが出来ました」

「そうか、そうか！それは良かった。」

「私は強くなるために、ここを狩りの拠点とするつもりです。
私の家はまだ残っていますか？」

「まだ残って居るぞ。それと、畏まる必要はないぞ」

「そう……それは良かった！」

「そういえば……サラとデュークは？ 見当たらないけど」

サラもデュークも昔からの幼馴染である。

年上であるが、昔からずっと一緒に遊んでいたので敬語とかは無い。

「サラもデュークも別々の依頼に行つて、しばらくは帰らんぞ」

サラもデュークも私よりも先にハンターになり、
そして、村を守っている二人である。

ここに居ないことを知ると、少し残念な気がした。

(話したい事が一杯あったのに……)

「ほっほっほ！ お主も早速何か依頼クエストをつけるかの？」

「私でも出来るのあるかな？」

「ランポスの討伐があるぞ？」

「じゃあ、それで。何頭？」

「十頭じゃな。場所はすぐその森丘で、期間は五日じゃ！」

「わかった。一度家に戻って、準備をしてからまた来るよ」

「わかった。そうそう、それとドラランポスが出るかもしれぬから、気をつけていきなさい」

「うん！」

酒場を後にして、自分の家に向かった。

久しぶりに帰ってきた家は、特に何も変わってはいなかったが、埃まみれで少し掃除をする必要があった。

(これは……酷い。帰ってきたら先ず掃除をしなくちゃ)

「まあ、……ただいま」

とりあえず、狩りの準備を始める事にした。

(回復薬、砥石、薬草、肉焼き器、あとは……一応、閃光玉つと)

「こんなものかな？」

チエーン装備を身に纏い、骨刀【狼牙】を背負い、ポーチを持つと、家を出て酒場に向かった。

「来たか。準備はいいかの？」

「うん！ 勿論だよ！」

「わかった。村の前に竜車を準備させておる、頑張ってくるよ」とい

「はい！ 行ってきます」

竜車に乗って森丘へと向かった。

第五話「帰郷」(後書き)

次回からは、当分戦闘です。(多分)

長く続けばいいですけど…。(笑)

誤字・脱字や意味不明なところがありましたら、是非言ってください！

ご意見・ご感想をお待ちしております！

第六話「依頼(クエスト)」(前書き)

戦闘シーンをなるべく詳しく書けるように頑張ってみたのですが、
まだまだ修行が足りませんでした。

頑張って生きたいと思います。(今後の課題です。)

第六話「依頼（クエスト）」

第六話「依頼」クエスト

少女は背に背負っていた、骨刀【狼牙】を引き抜いた。

その刃はランポスへと、流れるように食い込み、切り裂く。

ザシュツ！！

体を引き裂かれたランポスは、悲鳴を上げ仰け反る。

ギヤアアアー！！

振り切った骨刀を反し、再び斬りつける。

ズシャ！

ギヤアアアア！

二度も切り裂かれたランポスは絶命した。

反しの刃で、ユミナはそのまま次のランポスへと斬りかかった。

ギヤア！

その攻撃をランポスはかわして、反撃に転じてきた。

ツギヤア！

それをまともに喰らい、吹き飛ばされるユミナ。

「ウツ！」

しかし、受け身を取り、すぐさま体勢を立て直した。

ギヤア！

襲い掛かってくるランポスを、横跳びでかわし、骨刀で叩き斬った。

ザシユ！

ギヤアアアー！！

ランポスが斬られ、仰け反った時、ちょうど他の二頭と重なった。

好機チャンスと思い骨刀を振るった。

真一文字に一閃。

袈裟切り。

逆袈裟切り。

「村長。ただいま帰りました」

「お、帰ったか。して依頼のほうは？」

「はい。無事に成功しました。ランポスの素材です」

「うむ。くろづじや。ゆっくりと休め」

「はい！ ありがとうございます」

「そういえば……サラもデュークも帰って来とるぞ」

「本当ですか!？」

「うむ。意外と早く帰って来よったわい」

「家にいますか?」

「うむ」

「じゃあ、いってきます!」

ユミナはそう言って酒場を出ると、サラとデュークのもとに向かった。

「サラ！ デューク！」

「お、ユミナか！ 久しぶりだな」

「ユミナ！ 久しぶりね」

「二人とも久しぶりー！」

「お！ ついに俺たちと同じ、ハンターになったのか！」

「うん！ そうだよ！」

「何時帰ってきたの？」

「五日前だよ」

「見掛けなかったけど……？」

「帰ってきてすぐに、依頼に行ったから」

「そうなの」

「二人は何時帰ってきたの？」

「二日前だ（です）！」

「そ、そう」

見事にハモっていた……。

「何の依頼に行っていたの？」

「俺はババコンガの討伐依頼だ」

「私はダイミヨウザザミの討伐依頼です」

「へえ〜！ やっぱりすごいね二人は！！」

「そんな事はないぜ！」

「ええ、貴方もいつかこれ位普通に、出来るようになってるわ」

「私にはまだまだ、全然無理だよ。ずっとずっと先の話だね」

「そういうお前は、何の依頼に行っていたんだ？」

「そうよ。話を聞きたいわ！」

「えっとね、ランポス十頭の討伐だよ」

「……………」

ユミナがそう告げると2人は黙り込んで沈黙が流れた。

「えっ？ ど、どうしたの？」

「一人、か（ですか）？」

「うん…………、帰ってきたばかりで、ハンターとしての初めての依頼だから」

「いや、すごいわ」

「えっ？」

「確かに、すごいです」

「な、何が？」

「新米ハンター、それも初めての依頼でランポス十頭は……」

「普通は絶対に無理……というか、まず引き受けません」

「そうなの？」

「当たり前だぜ。一匹は弱くても、複数を相手にしなければなら
ないからな」

「奴らの連携はわりと厄介ですから……」

「とてもきつかったよ？ 皆で戦うのになれていたから……」

「なおさらすげ〜けどな！」

「ユミナはやはり、才能がありますね」

「そうかな？ うん、がんばるよ！」

それからも三人で、今までのことを話し合った。

話は盛り上がり夜中まで続いた。

三人は楽しく夜を過ごした。

それから、一週間。

ユミナはランポスの討伐依頼や、採集以来などをたくさんこなしていった。

ある日の事であった。

「ユミナよ。森丘にドスランポスが現れたようじゃ」

「そうなの！？ すぐに討伐しないと！」

「そうじゃ。だが、生憎とサラモデュークも今はおらぬ。だから、おぬしが討伐に行ってくれぬか？」

「え！？ だけど私は、まだ新米ハンターで……」

「そんな事はわかっておる。じゃが、今のお主なら出来ると信じておる！」

「いずれは相手をせねばならぬのじゃ。無理にとは言わぬが、やってくれぬか？」

「……うん。わかったよ！ 私が倒す！」

「……そうか。無理はせぬようにな！絶対に死ぬなよ！」

「はい！！」

「出発は明日じゃ！今日のうちにしっかりと準備をするように」

「はい！」

返事をしてすぐに家へと戻った。

私は、ドスランポスを倒す為の準備を始めた。

(回復薬、砥石、ペイントボール、薬草、シビレ罨、閃光玉、
調合用、肉焼き器、こんなものかな？)

骨刀【狼牙】は、砥石できちんと砥ぎ、
チェーン装備は、不備がないかを点検した。

「よし！準備は完了ね！」

わずか一週間でドスランポスを、一人で狩りに行くとは思わなかった。

自分で大丈夫だろうか？そんな心配がよぎるが、
(自分を信頼してくれているんだ、その信頼には応えないと……)
そう思い、心配を掃った。

「明日の為に今日は早めに寝とかなきゃ」

(カイト、私は少しずつでも前に進んでいるから、待っててね)

ユミナは眠りについた。

第六話「依頼（クエスト）」（後書き）

ドスランポスの戦闘はなるべく、

長く書いてみたいと思います。（二、三話かけて）

無理かもしれませんが…。（笑）

誤字・脱字や意味不明なところがありましたら、

是非言ってください！

ご意見・ご感想をお待ちしております。

第七話「ドスランポス」(前書き)

ドスランポスの討伐です！

この話と次の話はドスランポス討伐の話です。

第七話「ドスランポス」

第七話「ドスランポス」

朝。私は目を覚ました。

今日は森丘に現れた、ドスランポスを討伐しに行く日である。

一人でドスランポスを倒すのは初めてなので、少し緊張気味であるが、いつもどおりの朝を過ごす、昨日準備してあった荷物を持って酒場に向かった。

酒場に入ると、村長が待っていたかのように現れた。

「おはようございます」

「おはようじゃ。準備は出来たか？」

「うん。いつでも大丈夫だよ」

「うむ。村の前に竜車を用意させてある。
行く前に、クエストの確認をしておこうかの」

村長はそう言って、ひとつひとつ確認をしていく。

「目標はドスランポスの討伐。期間は五日。場所は森丘。

以上じゃが、何か質問は？」

「ありません」

「そうか、気を付けて行って来るといい！」

「はい！」

「……死ぬなよ」

「はい!!」

私は酒場をあとにし、竜車に乗って森丘へと向かった。

ベースキャンプがある場所に着いた。

そこでまずは腹ごしらえをしようと、エリア1に向かった。

エリア1とはエリアごとに割り振られている番号のことで、地図に地形と一緒に番号が記載されている。

森丘のエリア1は、緩やかに流れる大きな川と隣接していて、あまり広くはないが生き物がいる。

肉食竜は滅多に現れなく、飛竜などは狭すぎて降りれない。

ここに居るのは、大概がアプトノスだ。

アプトノスは草食竜で気性が大人しいので、滅多な事では攻撃してこない。

その為、竜車を牽いたり、食用として飼われている。

しかし、草食竜とはいってもアプトノスの攻撃は痛い。

攻撃があたれば、軽くても打撲はするだろう。

ドシンッ！

私の太刀で切り裂かれて、アプトノスは倒れた。

絶命したところで剥ぎ取りを始めた。

的確にナイフを動かし、肉を切り取っていく。

取れた生肉は、持ってきていた肉焼き器で焼き始めた。

「
」

しばらくすると、こんがりと焼けてきた。

「上手に焼けましたっ」と

「いただきます!」

私はお腹を満たすと、これからについて考え始めた。

(うーん、どうしょ? 何処にいるかな?)

ドスランポスなどは、徘徊するルートが一応決まっている。

基本的に、エリア2、3、10番のどこかにいると考えられる。

しかし、それ以外の場所にも姿を現すときがある。

それを考えると、慎重に行かなければならない。

(エリア2、3、10番を順番に回っていこうかな。)

ランポスは襲ってくるまで放置。襲って来たら倒す)

「よし。出発!」

私はまずはエリア2へと向かった。

グルルルウウーッ

少し離れた場所にランポスが三頭いた。

私は見つからないように、慎重に進んだ。

(ここにはドスランポスは居ないみたい……)

そう思い、次のエリアに進もうとしたとき。

バキッ！

枝を踏み折ってしまった。

(しまった!?)

その音に気が付いたランポスは、こちらへと近づいてきた。

ギャギャア！

ランポスは仲間に敵がいることを、伝えるかのように鳴いていた。

3頭のランポスは、完全にこちらに気が付いた。

(戦うしかない!)

あまりもたまたしていると、騒ぎに気付き、ドスランポスがやってくる可能性がある。

しかも、ランポスの大群を連れて。

それだけは回避したい。

ユミナは覚悟を決めると、ランポスに斬りかかった。

「ハッ！」

上段からの一撃は、ランポスを切り裂いた。

ザシュツ！

刀を流し、横の斬撃。これは複数のランポスを切り裂いた。

ズシヤ！

一頭のランポスが絶命した。

そのまま刀を反し、もう一度斬り払った。

ザシュ！

ギヤアア！

残りの二頭も絶命した。

「ふう」

一息ついて周りを見回した。

幸いドスランポスは来てないようだ。

（よかった〜）

倒したランポスたちを剥ぎ取ると、エリア3に向かった。

エリア3。ここにもランポスは居た。

しかも、さっきよりも少し多い。

(やはり、ドスランポスの影響かな)

6頭は居た。

(とりあえず、砥石をしておこう。)

砥石で、少し刃こぼれしていた骨刀を砥いだ。

「いくか」

ランポスたちは倒す事に決めた。

未だ自分に気付いていないランポスの背後をにより、抜刀した。

「ハッ！」

ザシュ！

ギヤアアー！

背後からの一撃で、ランポスは絶命した。

ギヤアギヤアー！

ランポスは私に気付き、近寄ってきた。

そして、私は一番近くにいた奴へと斬りかかる。

「ふんっ！」

ズシヤツ！

逆袈裟から一気に斬り払った。

ギヤア！！

思いっきり斬り付けられたランポスは絶命した。

左右から二頭のランポスが跳びかかってきた。

それを前転で回避した。

ドガツ！

互いに体をぶつけたランポスは、地面に倒れ伏した。

そこを私は逃さず、2頭ごと叩き斬った。

あとは2頭、これならいける。

そう思い倒そうとするど。

尚も近づいてきたランポスを切り捨てながら、そう思った。

(よし！ 閃光玉だ！)

「そらっ！」

カツ！ ピカアーーーーー！！

ギヤアアーーーーー！

「くらえ！」

ドスランポスの周りにいた奴らを斬り殺しながら、ドスランポスへと向かった。

「ハアアアアーーーーー！！」

ザシュ！ ザツ！ ズバンツ！！

ドスランポスへ斬りかかり、さらに踏み込んで切り裂いた。

ギヤアアアアアアアアーーーーー！！

さすがに視力は回復したのか、ドスランポスは後ろに下がった。

そこを追撃しようとしたら、ランポスがまた邪魔をしてきた。

「くっ！」

さすがに避けきれなくなり、数発くらった。

慌てて間を取った。

そこにドスランポスが飛び込んできた。

爪が肩に掠った。

「ぐう！」

しかし、私は飛び込んできた勢いを利用して、斬り払った。

ギヤアアー！

互いに大きく間を取った。

するとドスランポスは踵を返し、エリア10へと向かった。

数頭のランポス連れ、3頭だけ残して行った。

足止めのつもりだろう。

（弱ったのか！？）

チャンスだと思い、追いかけようとしたら、

残ったランポスたちが、襲ってきた。

「邪魔！！」

数分でそれを片付けると、準備をしてから向かった。

第七話「ドスランポス」（後書き）

誤字・脱字や意味不明な点ありましたら、是非言ってください！

ご意見・ご感想をお待ちしております。

第八話「蒼の智策」(前書き)

すいません!!!

遅れました!!!

本当は間に合わせるつもりだったんだけど…。

ゆるして〜!(誰に言ってるんだろ?)

第八話「蒼の智策」

第八話「蒼の智策」

バサバサバサツ！

ドスランポスを追って、エリア10に来たものの、
肝心のドスランポスは見当たらず、辺りは静まり返っていた。

(……どこに行ったんだろう?)

エリアの中央付近に近づいてきた、その奥に何かがいた。

(あれかな?)

近づいてみた。それはドスランポスの後姿だった。

(チャンス!)

武器を手に取り、気付かれる前に攻撃しようとした瞬間。

辺りから大合唱とも呼べる、泣き声の連鎖が始まった。

ギャギャアギャアア!

連撃にドスランポスは叫ぶ。

すると視力が回復したのか、襲い掛かってきた。

連撃の隙を衝かれもろに喰らう。

バキィ！！

「キヤア！？」

かなり後ろの方へと吹き飛ばされてしまい、慌てて受け身を取り、すぐに体勢を立て直した。

しかし、後ろにもランポスがいて、私へと噛み付いてきた。

「うぐう！」

噛み付かれた痛みを我慢して、左手で掌撃をランポスの顔面に叩き込んだ。

ドガア！！

ギャー！！

掌撃を喰らったランポスは、堪らず腕を放した。

そのまま太刀で斬り捨てた。

しかし、その時にはもう既にランポス達に囲まれていた。

(……不味いね。逃げる……無理そうね)

辺りを見回して頭を降る。

(戦う……厳しいね。でも、仕方がない。やるしかない！)

骨刀を手に私はドスランポスへと斬りかかった。

時間は戻って、ユミナが依頼を受けてからの一日後。

二人のハンターが同時に帰還した。

サラとデュークだ。

「ふう〜。疲れたぜ」

「私も疲れたわ」

「流石にリオレイアを二人でわな〜」

「そうね。でも……」

「? どうした?」

「ユミナに土産話が出来たわ」

嬉しそうにサラは微笑んだ。

「そうだな。驚くだろうな」

「ええ、驚くでしょう」

そこで、村がいつもよりも浮き足立っている事に、デュークは気付いた。

「村の中が少し騒がしくないか？」

「……確かに少し様子がおかしいわね」

「どうしたんだろうな？」

「村長に聞いてみましょう」

二人は報告のついでに、村長にどうしたのかを聞きに行くと、二人は驚愕した。

「……村長。今、なんて？」

「……ユミナが、ドスランポスを討伐に行っている」

「「ッ!？」」

新米のハンターになったばかりのユミナが、ドスランポスを討伐に行くなんて、普通はありえない話である。

「本当ですか？」

「ああ………本当じゃ」

「何故だ!？」

「ユミナなら出来ると」

「………無茶な」

「村長。私たちも今から向かいます!」

「そうだな、いいよな?」

「うーん、仕方ない。今回は特別にじゃ。………ワシからも頼む」

「では、行って参ります!」

「………急いで!」

二人は急いで竜車に乗ると、森丘へと急いだ。

ユミナを驚かせるどころか、自分たちが大変驚かされてしまった。と思う、デューク達であった。

時間戻って、ユミナ。

激戦はどちらも一歩退かず、激しさを増すばかりであった。

ユミナは大量のランポスを葬っていき、ランポスは少しずつユミナを弱らせていった。

ユミナは閃光玉を使い、隙を作りその間に砥石をしたりして、戦い続けていった。

ランポスは数で押し切り、ジワジワと攻撃し、弱るのを待っている。

「ハアッ！ てい！ タア！」

「フン！ ハッ！ ダアアー！！ えい！」

ギヤギヤアアアー！

ギヤアギヤアアアアアアアア！

一頭また一頭と、ランポスが倒れていく。

ユミナの限界も近づいてくる。

「ハアッ！ ハア、ハアハア！」

（まだ、いるの？ 私は、ランポス、との、相性が、悪いかもしれない）

ユミナは心の中で呟き苦笑する。

（いつも、こんな、ばかりだから）

また一頭と、ランポスを葬りながら思う。

毎回助けが入るが、今回は期待できそうにもない。

(…………どうしよう)

ランポスと戦いながら、ずっと打開策を考えていたが、ユミナは何も思いつかなかった。

(…………やばいね)

ずっと後ろにいた、ドスランポスが急に前に出てきた。

そのドスランポスに向けて一閃。

顔面に見事に当たった。

ガキイ！

「……………!!!?!」

骨刀に斬られながらも、骨刀を噛み掴んでいた。

「……………しまった!?!」

ユミナは慌てて太刀を引き抜こうとしたが、全然ビクともしなかった。

周りのランポスが攻撃態勢をとる。

「クッ！」

判断が遅かった。

1頭のランポスに噛み付かれた。

「うっぐう」

他のランポスたちも噛み付こうとしてきた。

その時！

バンバンバンバンバン！！！！！！！！

銃声が当たりに鳴り響くと、周りにいたランポス達が一瞬で絶命した。

「!?!」

「ユミナ!?!」

「えっ……サラ？ デューク？」

「この、無茶しやがって!」

「大丈夫？」

「うっ、うん」

「ひとまず退散だ！」

「いくわよ！」

ユミナは手を牽かれエリア10をあとにした。

「何で二人がここに？」

「心配してだよ！」

「そっ、そっ」

何故か声を合わせて叫ぶ二人に、ユミナは驚いて肩をビクリとさせる。

「とにかく傷の手当てをしたあとに、倒しに行くぞ！」

「わかった」

「俺たちは周りのランポスを倒すから、

ドスランポスは、ちゃんとお前が倒せよ！ ユミナ」

「えっ？ 私？」

「そうよ。貴方の受けたクエストなんだから」

「うん、ありがとう！」

話している間に傷の手当てが終わった。

「じゃあ、いこっか？」

「「応（ええ）！！」」

3人でエリア10番に向かった。

（体が軽い。今なら何でも倒せそう。そんな気がする）

私は抜刀しながら、ドスランポスに向かった。

「ユミナ！ こいつらは俺たちが足止めしとく、その間に頑張れよ
」！」

「がんばってね」

「うん！」

ドスランポスに向かって、

一閃。

二閃。

三閃。

血飛沫が舞う。

ギャアーーーー!!!

「タアアアアーーーー!!!」

互いにぶつかり合う。

体の奥底から力が溜まって行く感覚がある。

不意に感じた

ここだ！

体が勝手に動いた。

ザンツ！

ザンツ！

ザシュザシュ！！

ドゴンツ!!!

ドスランポスは断末魔の叫びを上げて、絶命する。

「　ハアハア！　今のは、まさか!?」

鬼刃斬り。

そこで私の意識は途切れた。

第八話「蒼の智策」(後書き)

何気に次回に続きました。

ついに、ユミナが鬼刃斬り(？)が、
使えるようになりました！

誤字・脱字や意味不明な点がありましたら、
是非いつてください！

ご意見・ご感想をお待ちしております。

第九話「クエストクリア」(前書き)

遅れを取り戻しました。

急展開かもしれませんが(笑)
でも、勘弁してください。

第九話「クエストクリア」

第九話「クエストクリア」

真っ白な世界。

誰かが私を呼ぶ。

誰かが私に話しかけてくる。

辺りを見回した。

そこには、女の子が膝を抱えて眠っていた。

。

わからない。

よく聞き取れなかった。

なぜか眠っているはずの女の子から、聞こえてくるが、聞き取る事は出来ない。

。

今度も聞き取る事は出来なかった。

不意に、

チリン。

と鈴の音が聞こえた。

私の意識はそこで途切れた。

体が揺れている。

誰かの声も聞こえる。

「ミナ！ ユミナッ！！」

「う……ん？」

「ユミナ！？ 目を覚ましたのね！！」

「うん」

どつちやら自分は気絶していたようだ

「よかった！ 目を覚まさなかったらどつちよつかと……」

そこにデュークが来た。

「おっ！ 起きたのか」

「おはよう？」

「心配したぜ、急に倒れるからな」

「えっと、……何で倒れたの私？」

「鬼刃斬りのせいね」

「鬼刃斬り！？ 私、使えたの！？」

驚いた。アレは夢ではなかったのかと。

「ああ、確かに使ってたな」

「使えるようになったんだ……」

どこか嬉しかった。

「でも危険すぎるわ。現に貴方は倒れた」

「そうだよな。慣れないうちは危険すぎるな」

「ええ、じゃあどうするの？」

「使う条件を決めましょう。条件が整ったときだけ使う、それでいいわね？」

「条件は？」

「1、仲間が居る時！」

「うんうん」

「2、使わなければならない状況に陥ったとき！」

「うんうん」

「3、大切なものの為に使う！」

「うんうん」

「この三つを守りなさい！」

「慣れてきたら、仲間を守るときに使えばいい。」

「わかった！！！」

約束をして、話が終わると、気になっていたことを聞いた。

「そういえば……クエストは？」

「成功よ」

「お前が倒したんだぜ！」

「よかった〜！」

「それじゃあ……」

「帰りましょう」

「帰るぜ！」

「帰ろう！」

三人の声が重なり、森丘に溶け込んでいった。

無事に村まで帰りつくと、歓声が上がった。

よくやった！ とか、おかえり！ とか、次々と言葉が飛んできた。

ユミナは村長が近づいてきた事に気付くと、こういった。

「村長！ ドスランポス、無事に討伐しました！」

「うむ！ よくやってくれた！ 今日は祝いじゃ！！」

オーーーーー！！！！ — 際大きな歓声が上がった。

「ユミナよ……クエストクリアじゃ！」

「はい！」

こうして夜遅くまで祝いは続き、疲れ切ったところで、私は家に帰り眠りに付いた。

それからユミナは、ドスランポスの討伐や、他にもランポスたちの討伐、

たくさんの採集クエストをこなした。

今のユミナの装備は、ランポスシリーズに鉄刀【襖】である。

時間が余った日には、練気を使った練習をしている。

そんなユミナが今日も、クエストを受けに酒場に行く。

サラとデュークと村長が話していた。

「みんなどうしたの？」

「うん？ ユミナか」

「ちょうどいいところに来たのじゃー！」

「????？」

よく話が見えてこず、首を傾げるユミナ。

「村長！ ……まだユミナには早すぎるのでは？」

「しかし……」

「何が？」

「実はな、ユミナ」

「うん」

「お前に怪鳥イャンクックを倒してもらおうという話だ」

「へえ〜……つて、えええええええー！！！！ どういうこと！
？」

「つまりだ、実力も付いてきたから、そろそろいいんじゃないかな
つと」

「私はまだ早いと思います……」

「うん」

ユミナは迷っていた。

イャンクックといえば、ハンターとしての登竜門とも言える存在、
自分もいつかは倒さなければならぬのである。

それが今来た。

（私は勝てるだろうか…）

飛竜種のなかでも、そこまで強くはない。（実は鳥竜種である。）

だが、自分が今まで相手にしてきたランポスたちとは、

次元が違う相手である。

一歩間違えば大怪我、もしかしたら死ぬだろう、そんな相手だ。

「どうするかは、ユミナ。お前が決める」

「私は……」

ユミナがふと思い出した少年の姿は、あまりにも遠かった。

(……カイト)

「私は……やります！ イャンクックを倒して見せます！」

「よくいった！ その意気だ！」

「もう！ デューク！ 勝手すぎますよ！ ユミナ……無茶はしないでね。」

「うん、気をつけるよ」

「うむ、決まりじゃな！！」

ユミナよ、怪鳥イャンクックの討伐！ 場所は密林、期間は一週間ほどじゃー！」

「はい！」

「いつもどおり、竜車は村の入り口に用意してある。準備が出来たら行くといい」

「はい」

「無事に帰って来いよ！」

「勿論！」

「無茶はしないでね」

「分かってるよ。では行つてきます！」

改めて家に帰って、準備を済まし竜車に乗った。

（ついにイヤンクックと戦う）

ユミナは自然と微笑んでいた。

（がんばらなくちゃ！）

ユミナは密林へと向かった。

第九話「クエストクリア」（後書き）

物語の一部が垣間見えた気がします。

次はついにイヤンクックと激突です！

えっ？ 早過ぎないか？

これぐらいがちょうどいいはずですよ。……多分。

誤字・脱字や意味不明な点がありましたら、是非言ってください！

ご意見・ご感想をお待ちしております。

EX:02「白の少女」(前書き)

また遅れました(涙)

不定期更新ですけどね(笑)

EX:02「白の少女」

EX:02「白の少女」

真っ白な世界の中、真っ白な少女が一人で立っていた。

少女の表情は悲しそうにしている。

どこからか鈴の音が聞こえる。

チリン。

少女は何かを告げるように口を開く。

「ナ、 に てよ」

少女は懸命に繰り返す。

「 覚 たし ら 」

しかし、その声は誰にも届かなかった。

「なんで、届かないの……」

少女は泣き始めた。

「くう、ううう、……ぐすつ、なんで？」

「私の、うつ、マスター、ひぐつ、私に気付いてよー！！」

「私は、くっ、ここに、います！」

「はやく、うづう、気付いてよー、寂しいよ」

「マスター……」

少女は泣きつかれたのか、深い眠りへと就いていった。

真っ白な世界に静寂が訪れる。

そして、世界は眠りに付いた。

「……！……今のは？」

「……どうしたの？ お兄様」

漆黒の少年が、何かに気付いたようにつぶやくと、隣にいたオッドアイの少女が、話しかけた。

「……この感覚は……姫神真白か？」

「……………？ ……誰？」

「ああ、シズクか。いやな、昔の知り合いだ」

「……………そう？ どんな人？」

「うーん、俺とは対極の存在だ」

「……………どんな風に？」

「なんて言うか、真っ白だ」

「……………よく分からない！」

八八ハツと少年は笑うと、また考え事に戻った。

(姫神真白……………百年ぶりか、懐かしいな。この感じ、西の方からか)

西と言えば、あの少女に出会ったのも西の方だったな、と思い出した。

(コミナ……………気になるな。少し西にいつてみるか？)

姫神真白のことも確認したいしな)

「……………お兄様？ 次はどこへ行く？」

「西の方に行こう」

「……………西？」

「ああ、真白が気になるし、ユミナも見てみたいからな」

少年はユミナと言ったところで顔を赤らめた。

「……ユミナさんに会える!？」

シズクは嬉しそうに聞いた。

「いや、直接はまだ会わないよ。見るだけ」

「……そう」

シズクは少し残念そうに呟いた。

「そう残念そうにするな」

「……真白さんは？」

「あいつか……さっきの気配で西の方に居るとはわかったが、詳しい事はわからない」

「……お兄様でも？」

シズクは驚いたように聞き返した。

「ああ、あいつは今封印されているはずだからな」

「……封印？」

「あいつは強い。だが、前の戦争で力を使い果たした。」

だから自分で自分を、回復するまで封印している。それも、人中でな」

「……そう。お兄様とどっちが強い？」

「勿論、俺だ」

「……そう」

シズクは嬉しそうに笑った。

「とりあえず、西を目指すか。っと、そのまえに敵だな」

「……お兄様。私が行く」

「うん？ 別にいいよ。いってらっしゃい。」

「……いってきます」

シズクは接近してきていた、無数のモンスターたちに向かった。

そこには、リオレウス、リオレイアが無数にいた。

「……出でよ、冥府の鎌」

手を合わし、何もない空間から大きな鎌を取り出した。

「ハデス！」

一閃。

спанツ!

リオレウスたち数頭がバラバラになった。

「…………死になさい。」

残りを片付けるように、舞った。

その舞は残虐で、でもどこか美しい。そんな舞であった。

数分もしたら、辺り一面は死体と血で埋め尽くされていた。

シズクは返り血を浴びる事もなく舞い続け、敵を殲滅した。

大鎌を消すと、少年の元に向かった。

「…………お兄様、終わった」

「ん、早かったな」

「…………お兄様と比べたら、まだまだ」

「そつでもないよ」

「…………い」

「ああ、わかってる」

少年は西へと向かいながら、昔のことを少し思い出していた。

どうやら、お別れですね。

そうか……。

最後に、約束してください。

なんだ？

この先、貴方にも大切な人が出来るはずです。

それは、本当か？

本当に俺にそんなのが出来るのか？

ええ、もちろんです。だから、この約束を守って下さい。

そうか……出来たら、守ってやるよ。

ありがとう。では……さよなら、です

ああ、またな。

ずっと昔、仲間だと思えた数少ない奴との最後の会話。

(あの時の大切な人って……ユミナのことか？ それともシズクか？)

カイト
俺はアイツの言ったことを思い出す。

(それとも、まだこの先に現れるのか……？)

まっ、考えても今は答えは出ないだろうな)

思考を頭を振って払う。

(さて、これからどうするべきかな？)

まあいいかと、行き当たりばったりで楽に行こうと思った。

「さあ、いこうか。西へ！」

EX:02「白の少女」(後書き)

ユミナとカイトが逢うのは、
当分先です。残念。

次はついに、イヤンクック討伐です。

二話〜三話にしたいと思います。

誤字・脱字や意味不明な点がありましたら、
是非いつてください！

ご意見・ご感想をお待ちしております。

第十話「大怪鳥イヤンクック」(前書き)

クックの説明、ちょっと適当です。
間違っているかもしれません。

第十話「大怪鳥イヤンクック」

第十話「大怪鳥イヤンクック」

大怪鳥イヤンクック。

飛竜 鳥竜種。

主に木の実や昆虫などを主食としていて、人は食べない。
しかし、自分の縄張りに入った者は容赦なく襲ってくる。

大きな耳をしていて、音に敏感である。

ハンターにとっては、登竜門的な存在で、ある程度熟練したハンターは、
あまり手を出さないの、イヤンクックは新人の仕事と暗黙の了解がある。

鳥竜種といっても、ランポスとは各が違い、プレスなども使ってくる。

新人じゃなくても油断をすれば、ひとたまりもない。

密林。

密林の中をユミナは駆け回っていた。

「ハア！ ハアハア！」

（何でこんな事になっているのやら……）

少し前、ユミナはイヤンクックを探そうと、密林を探し回っていた。

そこにランポスが数頭でた。

後々、狩っていた方がいいと思い、近づいてみると……

そこには、大量のランポスがいた。

流石に驚いて、引き返そうとしたが、運悪く枝を踏み折ってしまった。

バキイ！

ギヤア？

そして、ユミナを見つけて、

ギヤアア！ギヤアア！

襲い掛かってきた。

ユミナはこんな所で無駄に消費はしたくないと思い、逃げた。

そして、今に至る。

「ハア！ ハア！ しっ、こいよ！」

何頭ものランポスが、ユミナの後について来ていた。

「あっ！ あそこを、登ればっ！」

ユミナは、目に付いた高台に急いで登ると、壁に伝っていたツタの葉に手をかけ、登っていった。

「ハアハアハア！ なん、とか……撒けた」

登りきったところで、ユミナは腰を下ろして一休みする。

少し休んでいると大きな影が差した。

「んっ」

今日は雲一つなかったはずと思い、空を見上げた。

すると、そこには。

巨大な鳥のような姿。

ピンク色の体。

大きな嘴、大きな耳。

そう、正に

正に、大怪鳥イヤンクックがそこに現れた。

「……………嘘でしょ」

ユミナの気分は最嫌だった。

ランポスとマラソンをして、たどり着いた場所にはイヤンクック。

悪い冗談にしか思えなかった。

「まあ、……………探す手間が省けたわね」

ほんの些細な強がりだった。

「はぁー、仕方ないか……………」

ユミナは諦めて、鉄刀【楔】に手を伸ばし、抜刀して斬りかかった。

すると、イヤンクックはユミナに気付き、威嚇した。

ウガガガガ！ クウワーン！！

ユミナは咄嗟に斬りかかるのを止め、少し離れてペイントボールをぶつけた。

クウワ！ クウワ！

イヤンクックは啄み攻撃を仕掛ける。

それをかわして、足に斬りかかった。

ガシュ！

(っ！ 硬い！)

弾かれはしなかったものの、硬かったので腕が少し痺れた。

クワー！

隙が出来たユミナに、イヤンクックが尻尾を振り回して攻撃してきた。

それを回転して回避した。

頭上を尻尾が通過していった。

そして、体勢を立て直し、また斬りかかった。

ザシュツ！

こんどは翼を狙ったので、よく斬れた。

続けて斬る。

ザシュ！ ザシュ！

クワアー！！

イヤンクツクは、変な角度から啄もうとしてきた。

不意打ちだったが、それを何とかかわした。

すると、尻尾を振り回してきた。

慌ててイヤンクツクと距離をとった。

イヤンクツクは首を持ち上げて、一步を踏み出し、何かを吐き出した。

「っ！？」

咄嗟にそれをかわした。

ボガン！！

さきほどまでユミナが立っていた場所が爆発していた。

（今のが、火炎液！）

アレを喰らったらひとたまりもないと恐怖した。

遠くにいるのは危険だと判断し、一気に踏み込んで斬り付けた。

「ハアアー!!」

ザシュツ!

斬られたイヤンクツクは急に翼を広げ、飛び上がった。

まともに風圧を受けて、とばされるの堪えた。

降りてきて、またもや風圧を受けた。

「くっ!」

そこに回転して尻尾をぶつけてきた。

ドゴツ!

「カハツ!?!」

数メートル先まで、ぶつとばされた。

「ぐっ! うう……」

どうにか起き上がったが、ダメージは大きい。

(少し、ヤバイ)

ポーチの中を探り、閃光玉を出して投げつけた。

カッ!ピカアアー!!!!!

クワアアアアーーー！！！！

視力を奪われたイヤンクックを背にして、このエリアから抜け出した。

「ううゝ、痛い」

幸い骨は折れておらず、打撲で済んだ。

とりあえず、支給品の応急薬を飲んで回復を待った。

(やっぱり、強いな。私はまだまだだね……がんばらなくちゃ)

しばらくすると、だいぶ痛みはなくなった。

「そろそろ、大丈夫ね」

くんくん。

ペイントの匂いを追ってみた。

「エリア3ね……。さあ、反撃開始よ！」

ユミナは急いでエリア3へと向かった。

第十話「大怪鳥イヤンクック」(後書き)

クック戦です！

次回に続く！(笑)

もう言わないんだから！(分かる人は、分かりますよね？)

でも、意見ぐらいなら聞いてあげてもいいわよ？

別に待ってなんて、ないんだからね！！

第十一話「反撃開始」(前書き)

なんか投稿時間がずれてきています(泣)

第十一話「反撃開始」

第十一話「反撃開始」

エリア3

そこでイヤンクックを見つけた、ユミナは気付かれる前に一気に、間合いを詰めた。

そして、最速の一閃。

「喰らえーッ！！」

ザンッ！

クワアアアー！？

イヤンクックは突然の奇襲に混乱した。

そのチャンスを逃さず、ユミナは連撃を放った。

「たあ！ てやあー！ ハアアアー！！」

見る見るうちに傷が増えていく。

そこにイヤンクツクの、反撃の一撃。

それをヒラリとかわすと、ポーチから閃光玉を出して投げつけた。

カツ！ ピカアーーーー！！！！

クワアアアーーーー！！！！

視力を奪われたイヤンクツくに、畳み掛けるように攻撃した。

「ハアー！」

ザン！

「てや！」

ズシヤ！

「ふん！」

ドス！

「イヤア！」

ザシユ！

「たああああー！！！！」

ザシユ！ ザシユ！ ズシヤ！

次々と攻撃を加えていく。

堪らずイヤンクックは、一度飛び上がった。

それを上手に回避して、離れた。

降りてきた途端、暴れだした。

クワアアアー！！！！　クワア！！

嘴からは、火炎液が漏れ出している。

「あれは、怒り状態！」

イヤンクックは怒号の攻撃に怒り狂ったのである。

イヤンクックとはいえ怒り状態になると、とても手強くなってしま
う。

クワアー！！

一気に突っ込んできた。

それをかわして、側面に回り込もうとしたら、火炎液を撒き散らし
てきた。

ドガンッ！

ドガンッ！

ドガンッ！

ギリギリのところでもかわす事ができた。

「危なっ！？」

かわしたところで、またもやイヤンクックは突っ込んできた。

回避して斬りつける。

ザシュ！

クワアーー！！！！

斬り付けたら、さらに怒りを増した。

敵を近づけまいと、あたり一面に火炎液を撒き散らした。

ドガンッ！

ドゴー！

ズガン！

ドゴッ！

周りの木々が燃えている。

「やばいわね……」

木を燃やされた為か、木々に隠れていたランポスが出てきたのである。

「さらに、やばいわ……」

考えた末に閃光玉を投げた。

カツ！ ピカアーーーー！！！！

ギヤアアアーーーー！！

ランポスの悲鳴は聞こえたが、肝心のイヤンクツクのは聞こえなかった。

「なっ！？」

火炎液を撒き散らして、閃光が運悪く視界に入らなかったようだ。

もう一度投げた。

カツ！ ピカアーーーー！！！！

しかし、またもや喰らわなかった。

「くっ！！」

カツ！ ピカアーーーー！！！！

カツ！ ピカアーーーー！！！！

必死に投げたが、どれ一つ喰らわなかった。

「何故!?」

閃光玉は尽きてしまった。

「くっ！ ハアアア！！！」

間合いを一気に詰めて一閃。

しかし、その一撃も外れた。

イヤンクックが飛び上がったのだ。

そのままどこかに飛んでいってしまった。

残ったのは、燃える木々、ランポス、ユミナだけであった。

くんくん。

ペイントの匂いを必死に追ったが、既にペイントの効果は切れていた。

「……まずは、ここを何とかしないと」

イヤンクックが居なくなっても、まだランポスには囲まれていた。

ギャア！！

「ハア！」

ランポスたちの数を減らしていく。

ある程度減らしたところだ。

不意に風が動いた。

ゴウツ！！！

クワアアー！！！！

「！！？」

ドガア！！！！

「っ！　　！？」

完全に油断していたところに、空中奇襲を喰らった。

咄嗟に体を動かしたが、少しだけしかダメージを減らす事しか出来なかった。

数メートルもぶっ飛ばされた。

何度も転がり、壁に激突してようやく止まった。

「っ！　カハツ！！！」

体が動かない。

完全な失態だ。

勝利を確信したのが、イヤンクツクは雄叫びを上げていた。

生き残っていたランポスたちは、餌を手に入れるため待っていた。

手を必死にポーチへと伸ばした。

「くっ！」

動かすたびに激痛が走る。

ポーチの中を探る。

イヤンクツクは一步一步、近づいてくる。

（急がないと……）

必死に目当ての物を探す。

いざという時の為に掛けていた保険。

コツッ。

（あつた……）

イヤンクツクはすぐそこに居た。

目当てのものを掴んで、その場に投げたのと、
イヤンクックが火炎液を吐くモーションをしたのは、同時だった。

リン。

ドゴン！

火柱が上がったそこには、もう既に誰も居なかった。

ベースキャンプに弱りきったユミナがいた。

ユミナが最後に使った道具は、モドリ玉である。

モドリ玉とは、詳しい事は未だ分かってはいないが、
使えば何故か、瞬時にベースキャンプに戻ることが出来るのである。

今回ユミナは、念のためにこれを持って来ていたが、
運良く役に立った。

これがなかったら、死んでいただろう。

「くう………！ うっ！」

這いずりながらベッドを目指す。

ベッドにたどり着くと、傷の手当てをした。

そして、意識が途切れて、深い眠りに就いた。

そのとき彼女は涙を流していた。

夢……夢を見ている。

これは少し昔の夢だ。

アイと、なんでハンターになりたいのかを、話していたときのことである。

ユミナちゃんは、何でハンターになりたいの？

私は、……追いつきたい人がいるから。

追いつきたい人？

うん。昔、私の命を救ってくれた人。

そうなの！？ 強いなの？

とても強いよ。リオレウスを一瞬で倒すくらい。

リオレウスを一瞬で！？ すごい！！

信じるの？ 普通の人には信じないのに。

信じるよ。ユミナちゃんは嘘付かないもん！

ありがとう……。

それでね、その人と別れるときに約束したの。

なんて約束したの？

私はハンターになって、強くなったら貴方についていく！って。

へえ〜そうなんだ。その人のこと好きなの？

すっ、好き！？ ベベ、別に、好きなわけじゃ……ない。

ふふっ、好きなのね！

う、うう〜……違うのに。

でもいい事だよ？ じゃあ、もっともっと強くならなくちゃね？

うん！ 強くなるよ！

がんばろうね？

がんばろう！

……そこで夢は途切れた

「 今のは……」

夜、ユミナは目を覚ました。

「うぐっ！」

傷はまだ痛んだ。

「昔の……約束」

「アイ……カイト……」

「わたしっ！ まだっ、まだ全然、弱いよー……」

ユミナは泣き出した。

「ひっぐ、くっうっう……うわーん」

月の光が優しくユミナを照らす。

「うぐっ、わたし！ つよく、なりたい……つよ、ひっぐ、くなるー！」

「今は、くっ！ まだ駄目、だけど……いつか、うっ、貴方たちに、胸を張って、

言えるくらいに、うぐ、強くなるー！」

「……つよく、な……る……」

ユミナの意識はまた途切れた。

朝。ユミナは目を覚ます。

そして

ぱんっ！

頬を思いっきり叩いた。

「くう、……よし！ くよくよするのは終わり！

今は、全力でイヤンクツクを倒す！」

そう、気合を入れて準備を始めた。

準備が終わると、イヤンクツクを探しにベースキャンプを去った。

今度は負けない、絶対に勝つ！

ユミナは心に刻み、歩き出した。

第十一話「反撃開始」(後書き)

ユミナも心が成長しました！
次回は決着です。

第十二話「決戦イヤンクック」

第十二話「決戦イヤンクック」

カキン！ カキン！！

クワアアアアアアアアアア！！

ドゴーン！

ザシュ！

クワ！ クワ！

ザン！

ザシュ！ ズシャ！

クワアアアア！！

ブンッ

夜の密林で、ピンクの軌跡と蒼の軌跡が、
激しい攻防を繰り広げていた。

ピンクの軌跡とは、大怪鳥イヤンクツクのことであり、蒼の軌跡とは、ランポス装備のユミナである。

「タアアアアアア……!!」

カキン!

弾かれる。

クワアア!

ブンッ

尻尾が迫る。

紙一重でよける。

「ハアアアアアア……!!」

そして反撃。

ズシャア!

クウワアアアアア……!!

怯む。

怯んでいるうちに、無茶な姿勢から放った、一撃の体勢を立て直す。

クアア！

火炎液が迫る。

横に飛び、かわす。

一気に間合いを詰めて、一閃。

ズサー！

反撃の啄み攻撃。

鉄刀【楔】にあたった。

カカン！ カッ！

「クッ！」

腕が痺れる。

鉄刀を落とさないようにして、イヤンクツクの股下を前転した。

イヤンクツクは飛び上がる。

風圧を喰らう範囲から抜け出して、砥石で切れ味を回復させる。

カシャ、カシャ、シャキン！

最低限、砥石で砥ぐと、降り始めたイヤンクツクに突っ込んだ。

「ていやああー!!」

ズバン!

クワアアアアアアアアアアアア!

翼への一撃。

イヤンクツクは堪らず、落下した。

ズドン!

ユミナはチャンスを逃さず、斬りつけた。

一撃、二撃、三撃

バキンツ!

イヤンクツクの耳が壊れた、部位破壊の成功だ。

六撃、七撃、八撃。

最後に斬り払いをして、充分に間合いを取った。

起き上がる。

クワアアアアアアアアアアアア!

嘴から火炎液が漏れ出す。

怒り状態だ。

「今度は負けないから」

そう言って、

「喰らいなさい！」

斬りかかった。

「ごめんなさい……約束を、破ります！」

紅い気を纏う。

練気である。

「タアアアア……！」

ブン！

ザシユ！

ブウン！！

ズシャ！！

ブン！ ブン！ ズガン！！

ズサ！ ズサ！ ズバン！！

クアワアアアアー！！！

辺りが真っ赤に染まる。

クックワッ！

イヤンクックは後ろに飛び下がった。

クワア

耳を折りたたんだ。

弱った証である。

そして足を引きずり、移動を始めた。

しかし、ユミナは追撃できない。

なぜなら、慣れていない練気を使ったから、体力を使いすぎたのだ。

「くっ、待ちなさい！」

必死に体力の回復に努めるが、なかなか回復しない。

イヤンクックは飛び去った。

寝る為に、巣に戻ったのである。

ドサッ！

ユミナはその場に座り込んだ。

「やっぱり……まだまだね」

しばらくその場で休んだ。

だいぶ回復すると、急いで巣へと向かった。

くうー

イヤンクックは見事に眠っていた。

飛竜などの大型種は弱ると、巣に戻り休眠して回復する。

今もイヤンクックが、少しづつ回復している。

眠っているときに攻撃すると、無防備なのでいつもより、ダメージが大きい。

なのでユミナは、気付かれる前に奇襲することにした。

「タアアアア！……！」

渾身の一撃。

ズシャ！

ツクワアアアアアアー！！！！

絶叫を上げた。

すぐに起きて攻撃をしてきた。

ドゴン！

「くっ！ このっ！」

必死にかわして、攻撃を加え。

それから、数十分も攻防が続いた。

ユミナが攻撃しては反撃して。

反撃をいなしては、攻撃を与える。

互いにボロボロである。

ハアアア！！

クワアアア！

カキン！

ドゴン！

「はあはあ、はあ………」

カキン！ カキン！！

そして、ついに……

「ハアアアー！！ くらえー！！」

ズドツ！

クアワアアアアー！！！！

イヤンクツクは力尽きた。

ドシン！

「……」

「……か」

「勝ったー！！！！」

ついにイヤンクツクに勝った。

「……勝ったよ」

虚空の空にそっと呟く。

夜空に輝く月は、勝利したユミナを照らし、
静かに祝福しているようだった。

朝、村に帰り着いた。

ワアアアアアア！！

歓声が上がった。

「ユミナよ、よく帰ってきた」

「ただいま」

「「ユミナ！！」」

「大丈夫か？」

「大丈夫！」

「ユミナ……」

「大丈夫だってば……」

「うむ、それでどどどじやったのじゃ？」

「」

「「「「？？？？」」」

「勝ったー！！」

ウオオオオオオ！！

歓声が上がった。

祝いだ！ 勝ったぞー！ 頑張ったな！ よくやった！

次々と声を掛けられる。

「おめでとう！ これでルーキー卒業じゃ！」

「おめでただ！！ よくやった！」

「おめでとう！ ユミナ」

「ありがとう！」

すぐさま祝宴といって、酒場で騒ぎ出した。

夜遅くまで続き、夜は更けていった。

白。真っ白な世界。

夢だと一目で分かった。

そして、前と同じで白い少女が居た。

少女は必死に話しかけてくる。

だが、少しも言葉は聞こえない。

悲しそうにたたずんでいる。

意識が薄れる。

ああ、夢が覚めるな。と思った。

全てがぼんやりとしてくる。

その中で一つだけきこえた。

がんばったね

リーン。

鈴の音だけがあとに残った。

リーン。

第十二話「決戦イヤンクック」(後書き)

次回は一緒に狩りをする、仲間が出来ます！

第十三話「アイ・フローズ」

第十三話「アイ・フローズ」

村の前に一人の少女が居た。

「ここに……ユミナちゃんが」

そう呟く少女の名は「アイ・フローズ」

ユミナの親友である。

何故ここに彼女が居るのかというと、ある程度力が付いたので、ユミナと一緒に狩りがしたいから、ここまでやって来たのである。

「久しぶりだな〜元気かな〜？」

上機嫌でスキップしながら村へと足を踏み入れた。

「まずは、村長さんに挨拶しなきゃ！」

そう言つと、村長の居る酒場へと向かった。

酒場に入ると、村長らしき人が現れた。

「うむ、誰じゃ？」

「はじめまして、アイ・フローズといます！」

ハンターをやっつて、ユミナちゃんと友達で逢いに来ました！」

「ほづ。ユミナの友達か！」

「はい！一緒に狩りがしたいので、ここを拠点としてもいいですか？」

「かまわん！こちらからお願いしたいぐらいじゃ！」

「ありがとうございます〜！」

「さて、住む場所じゃが……今空き家はないのじゃ」

「う〜ん、困りましたね〜」

二人して困っていると。

カランカラン。

「村長いますか？」

ユミナちゃんが入ってきた。

「…………ユミナちゃん？」

「…………え、アイ？」

「ユミナちゃーん!!!」

アイはユミナに抱きついた。

朝。

いつも通り過ぐすと、狩りに行くつと最低限準備してから、酒場へと向かった。

酒場から村長の声が聞こえてきた。

今日はいつもより、少し賑やかなようだ。

カランカラン。

酒場に入ると村長に声を掛けた。

「村長いますか？」

村長はどこか見覚えのある少女と話をしていたようだ。

少女が、声を掛けた瞬間にバツと振り向いた。

すると声を発した。

「……………ユミナちゃん？」

そう言われた瞬間、バツと記憶が巡った。

ユミナちゃん！

任せて〜！

お肉がこげたよ〜！

約束だよ？

……ユミナちゃん？

（この子は……アイ・フローズ？）

目の前にはザザミ装備のガンナーがいた。

柔らかい雰囲気、気品が漂う佇まい、間延びした声。

どれをとってみても親友のアイ・フローズだった。

「……え、アイ？」

そう確認するように聞いた。

すると

「ユミナちゃん……！！！！」

そう叫び抱きついてきた。

(アイだ……久しぶりだな)

「アイ？ 本当にアイなの？」

「うん！ そうだよ！ 久しぶりだねユミナちゃん！」

「うん！ 久しぶり！ どうしてここに？」

「ユミナちゃんと、狩りがしたかったからだよ……。
私のパートナーになってくれるかな？」

「そんなの、もちろんよ！」

そうやって話が盛り上がっていくと、村長が話しに入ってきた。

「うむ、どうやら話はまとまったみたいじゃの。」

そうじゃー！ アイさん、ユミナと一緒に暮らすといい

「ええー！ いいんですか！？」

「うむ、ユミナが良いと言えば、良い」

「ユミナちゃん、家に住ませてくれる？」

「うん！ もちろんだよ！」

「本当？ やったー！！ ユミナちゃん！」

「何？ アイ」

「これから、色々とよろしくね！」

「うん。こちらこそよろしく！」

互いに握手をして、話を続けた。

結局、話は家に帰ってからすることにしたので、狩りにいくのは中止にした。

夜。ユミナ家。

ご飯を食べて、お風呂も済ました二人は、ベッドで横になって話をしていた。

これまでの狩りの話や、これからについて延々と話していた。

「最近のドスランポスって、何故か無駄に、知能が上がってきてるのよね」

「ユミナちゃんが初めて狩った時の？」

「うん、それもあるけど普通によ」

「確かにそうかもね……前より倒しにくいつつ思うときがあるし」

「うん、そういえばアイってザザミ装備だよな？」

「そっだよ〜」

「ダイミヨウザザミ倒したの？」

「そりゃあ、倒さないと作れないよ〜」

「すごいねー！ 私はまだ見たこともないよ！」

「そのうち見ることが出来ると思うよ〜？」

「そっだね、ずっと一人で狩りしてたの？」

「うん、ユミナちゃんもだよね？」

「そっだよ。」

「あ、そっだ！」

「うん？」

「明日、何か狩りに行くっしょ〜！」

「いいね！ 行くっしょか」

「そっつと決まったら、早く寝ようっしょ〜？」

「寝ようっか」

「おやすみ〜！」

「おやすみ」

そう言っつてユミナたちは、眠りについた。

次の日。

私たちは、朝早くからたたき起こされて、酒場に呼ばれた。

「何ですか……村長？」

「うむ、来たか」

「実はじゃ、砂漠でうちに来る商人たちを乗せている竜車が、ドスゲネポスたちに襲われたのじゃ」

「ハンターは一緒じゃなかったのですか!？」

ユミナは驚いた。

裁くなどの危険遅滞を超える時、普通はハンターを雇うからだ。

「襲われたときに、逃げたようじゃ……」

愕然とした。

「そんな！ 商人たちはどうしたんですか？」

「洞窟に逃げ込んで、救援を待っておるようじゃ。急がねば、3日と持つまい……」

「つまり、私たちが、助けに行けばいいのですね？」

そうアイは言った。

「うむ、その通りじゃ！……行ってくれるか？」

「はい!!」

「まかせてください!!」

「緊急依頼の確認じゃ！ 目的は、商人たちを安全なところまで運ぶ事。」

「それと、ドスゲネポス二頭の討伐。」

「……二頭ですか？」

ユミナはドスゲネポスを狩ったことがない。

ドスランポスと基本は一緒だが、未知の相手だ。

それが二頭。

「アイはドスゲネポス狩ったことある？」

「あるよ!!」

「そっか」

ユミナは安堵した。

「…続けるぞ？ 期限は大体2週間ほどで、場所は砂漠じゃ！
竜車は、いつも通り準備しておく。砂漠は遠いので急いで準備を
して、向かってくれ」

「はい！！」

「準備は出来た？」

「オツケだよ〜！」

「私たちの初めてのクエストね」

「そっだね、がんばらなきゃ！！」

ユミナは軽く笑い、アイは笑顔だった。

「急ぐわよ！」

「うん！」

一瞬にして真面目な顔になった二人は、急いで向かった。

砂漠へと。

第十三話「アイ・フロース」(後書き)

アイ登場です！久しぶりですね。

仲間はあと一人か二人、いつか増やそうと思っています。

一人は想像つきますか？

第十四話「砂漠とキャラバン」

第十四話「砂漠とキャラバン」

砂漠の岩石地帯に2人の人影と、1頭の草食竜が居た。

人影の方は少女で、名を片方はユミナ、もう片方がアイである。

草食竜はアプケロスといい、草食竜の中でも気性が荒く、好戦的である。

アイは肩に掛けていたボウガンを構え、弾を放った。

ズガガガン！！

うおーん！

バンバンバンバン！

うおーん！！

ズガガガン！！

うお

ドシンッ！

チャカツ、バン！

……沈黙が支配する。

アプケロスが死んだ事を確認すると、アイはユミナの方を向いた。

「終わりました〜！」

「さすがね、ボウガンなのに早すぎるよ」

手際よく倒した事をほめると、

「そんなことないよ〜」と、照れくさそうに言った。

「さて、キャラバンは洞窟にあるって言うってたけど、どこの洞窟かな？」

「う〜ん、砂漠地帯だから……エリア2とかは？」

「ふむ……そうね、行ってみよう」

「うん分かったよ〜」

「ちゃんと、クーラードリンク飲むのよ？」

「わかってるよ〜」

二人はクーラードリンクを飲み干して、砂漠地帯へと足を踏み入れ

た。

ジリジリジリッ！ と太陽の光が差す。

ジャリッ。

砂を重そうに踏み歩く。

光によって鎧が熱されていく。

ついさっき、クーラードリンクを飲んだというのにとても暑い。

「あ、……暑……い」

「本当だよ……」

「毎回思いつけど……倒す前に暑さにやられそう」

「そうだね……、でも火山はもっと暑いらしいよ」

「うわっ……あまり行きたくないね」

「うん……でも鉱石がね」

「確かに……。でも先ずは、今をどうにかしよう」

「そうだね……」

「そろそろエリア二番に着くはずだけど」

「あつ！ あそこにゲネポスが！」

「洞窟の周りにたくさん居るね……あそこに居るのかな？」

「行ってみようよ！」

「そうね」

二人はゲネポスへと急いで近づいた。

それぞれの武器を構える。

ギヤアア！

1頭のゲネポスがこちらに気付いた。

それと同時に攻撃を始めた。

ズバツ！

バンバンバン！！！！

ズシャ！ ザシユツ！

ズガガガガン！！

バシユ！ ドシヤア！

バキュン！ バキュン！

しばらくするとそこにいた、10頭近くのゲネポスは全滅していた。

「お疲れ、ナイスよ！」

「おつかれ〜流石だね！」

二人は互いに労うと、洞窟の中に入っていった。

洞窟の中は意外に広く、外よりも少し涼しかった。

奥に進むと竜車が並んでいた。

「誰か居ますかー？」

すると、竜車の中から人が出てきた。

「君たちは誰だい？」

「私はユミナ、こっちはアイといいます。

襲われたと聞いてので、救助に来たハンターです」

「そうか……助けてくれ！」

「分かっています、外のゲネポスは片付けましたので、今のうちになるべく進みましょう」

「ああ、わかったよ。」

そう言って、移動する準備した。

そこで確認の為に聞いた。

「ドスゲネポス2頭に襲われたんですよね？」

「そうです。確かに2頭でした。」

「そうですか。ありがとうございました」

(2頭か……厄介だな)

思考を巡らせていると、準備が整ったようだ。

「準備が出来ました」

「じゃあ、すぐに出発しましょう」

洞窟を出た。

休憩をしながらも、1時間位移動した。

そんなときであった。

「ユミナちゃん」

アイがいきなり話しかけてきた。

「何？」

「あっち、右の方から何か来る」

「……あれは！」

右の方から大量のゲネポスと、ドスゲネポス二頭が近づいてくる。

「急いでください！！ ドスゲネポスたちが来ました！」

ギヤアアギヤア！！

ギヤアー！！ ギヤ！

ドンドン接近してくる。

「私たちが足止めをします！ 急いでこの区域から抜けてください！！」

行くよ！ アイ！！

「うんっ！ー！！」

近づいてくるゲネポスを、ユミナは斬り捨てて、アイは散弾で足止めをする。

ギヤアギヤア！！

「行かせない！！」

ズバツ！

次々と襲い掛かってくる。

それを蹴散らしていく。

ズガガガガン！！

スパンツ！

バンバンバン！！！！

ズシャ！ グシャ！

バンバン！ ズガガガガン！！！！

ザシュ！ ズシャ！ ズバン！

バン！ バキューン！！ ドカーン！！

ギヤアアア！！

ギャ！ ギャ！ ギャツ！！

ギヤアアアギヤアア！

ギヤアアア！！！！

ギャツ！ カツ！

ギャワーン!!

ギャアアアー!

ゲネポスたちは次々と死んでいく。

しかし、ユミナたちはダメージというダメージを、負ってはいない。痺れを切らしたのか、ドスゲネポスが出てきた。

「来たよ!!!!」

「はい!!!!」

ドスゲネポスが出てきた事に注意を促した。

グギャアアア!! ギャアアアア!!

戦いは激しさを増した。

ドスゲネポスが2頭、直接で指示を出しているので、ゲネポスの動きが格段とよくなった。

そして、2頭の連携攻撃。

しかし、ユミナたちも負けることなく、息のあった連携で、次々と倒していく。

それがしばらく続くと、ゲネポス側は弱ったのか退散を始めた。

少しすると、全て逃げてしまった。

「ハア！ ハア！ ハアッ！ ……逃げたようね。」

キャラバンも無事に逃がしたし、戻ろうか」

「戻ろうって、大丈夫？」

「大丈夫よ」

見事にゲネポスたちを撃退した二人は、キャラバンに追いつくために急いだ。

夜。

ようやくキャラバンに追いつくと、もう安全な事を伝えた。

「ありがとうございます！」

「いえいえ、こちらこそ泊めて頂き、ありがとうございます」

ユミナたちは、キャラバンの童車に泊めてもらうことにしたのだ。

自分たちが寝る童車に行った。

「今日は疲れた……」

「本当だね」

「寝よつか？」

「寝よう」

「おやすみ、アイ」

「おやすみ、ユミナちゃん」

二人は仲良く眠りについた。

明日のために。

第十四話「砂漠とキャラバン」(後書き)

次回決着です！

えっ？ まだ倒したわけじゃありませんから(笑)

第十五話「強襲ドスゲネボス」(前書き)

今回は少し短いです。

第十五話「強襲ドスゲネポス」

第十五話「強襲ドスゲネポス」

「ハアアー!!!」

ザシユ!

ギヤアア!!!

ゲネポスは斬り裂かれ、道が開く。

「急いで!!!」

ユミナの号令と共に竜車が、開いた道を走り抜ける。

ギヤアツ!!!

それをゲネポスは襲おうとしてくる。

「させないよ!」

バンバンバンバン!!!

ギャアー!!

アイは近づく敵を一掃していく。

「タアアアー!!」

ユミナは怯んだ奴らを片っ端から斬り捨てていく。

ドスゲネポスが率いているので、ゲネポスたちの猛攻は止まらない。

ギャアアー!!

「ハアアアー!!」

ズパン!

「くらくらく!!」

ズガガガガン!!　ズガガガガン!!

ユミナたちも、竜車に指一本すら触れさせないほどの迎撃である。

「アイ!　竜車に乗って」

「?　わかった!」

「そのまま先に進んで、私は足止めするから、ちゃんと送ったら私を助けに来てね!」

「うん!」

「止めきれなかった奴や、他の敵は竜車から殲滅して」

「わかったよ」

「喰らいなさい!!」

閃光玉を投げる。

カツ！ ピカアーーーーー!!!

ギアアアアアア!!!

ゲネポスたちは怯む、その間に竜車は狭い一本道を通っていく。

ユミナも一本道の入り口に來ると、一閃。

ガキンツ!!!

地面に線を引いた。

「この線から一歩でも進もうとした奴から斬る!!」

左右は壁で、一本道以外通る場所などない。

必然的にゲネポスたちは、そこに集まる。

視力を回復したゲネポスたちは、一本道へと殺到した。

「ッ!!!」

一閃！

スパンツ！！！！！！！！！！

ギャア！！！！

殺到したゲネポスたちは、一刀両断された。

ギャア！

ゲネポスたちの勢いが緩んだ。

すると

ギャアアアギャギャアアーーーー！！

二頭のドスゲネポスが雄叫びを上げ、そこでゲネポス達の勢いが元に戻った。

ギャアー！！

ギャアー！！

ゲネポス達が次々と殺到していく。

近づく奴だけを斬り裂いていく。

ギャアアアアー……！！！！

離れたところでドスゲネポス2頭が、唸りを上げる。

ユミナは叫ぶ。

「いくらでもかかって来なさい！ でも、ここから先には行かせないから！」

ギャアアギャアアーツ!!!

2時間経過した。

「ハアツ！ ハア……ツハア！」

ゲネポスの数も残り少なくなり、ドスゲネポスにも疲労が見えてきた。

しかし、ユミナにはそれ以上の疲労が見えていた。

そしてユミナは構えを解いた。

シーーン。

静寂が包み込む。

いきなりの場の空気の変化に、ドスゲネポスは怪しんだ。

そしてドスゲネポスは、相手の体力が尽きたと思い、自ら襲い掛かった。

ギヤアア！！

勢いよく跳び掛る。

もう少しで牙が、爪が、ユミナを切り裂こうとした。

その時。

バン！ バン！ バン！

ユミナの横を通り、弾がドスゲネポスに命中した。

ギヤツ！！？

「……………来た」

「遅くなりました〜！」

「待ってたよ？」

「これでも急いで帰ってきたんだよ〜！」

「わかってる」

ドカン！ ドカン！ ドカン！

ドスゲネポスに命中した弾が爆発した。

LV1 徹甲榴弾である。

見事に全て喰らい、ドスゲネポスは絶命した。

「あと、1頭よ」

「頑張りますよー!!」

「いくわよー!!」

「はい!!」

ドスゲネポスへと間合いを詰めた。

1時間後、あっさりとドスゲネポスを仕留めて、残ったゲネポスも狩り終えた。

「疲れた〜ッ!」

「お疲れ様〜!」

「クエストクリアね」

「初クエスト、初クリアだね!」

二人で笑いあった。

「ははっ、……帰ろっか?」

「ふふっ、帰ろっよ?」

「そうだね、帰ろっ」

「うん!」

2人一緒に初めてのクエストが幕を閉じた。

第十五話「強襲ドスゲネポス」（後書き）

次回からは、いろんなモンスターと戦っていきます！

……多分（笑）

近いうちに、新しい小説を書くかもしれません。

あくまで、“かも”です！

もし見かけたら、是非読んでみてください！

基本はこっちを中心に書くつもりなので、

更新が大幅に遅れたりはしません。

……多分（笑）

でもしばらくは、遅れるかもしれません。

テストが近いので（泣）

第十六話「砂漠の盾」

第十六話「砂漠の盾」

ドスガレオスがブレスを吐く。

ウゴオオー！！！！

砂の塊が飛んでくる。

かわすと砂の塊は、地面に直撃した。

バンツ！

砂埃が舞い上がる。

間合いを詰めて、抜刀。

「フツ！！」

スパン！

ウゴオオオ！！！！

ユミナは追撃せずに横へ回り込む。

そして、銃弾がドスガレオスに殺到した。

ズガガガガン！！

ウゴオオ……！！

堪らずにドスガレオスは怯んだ。

そこで横に回りこんでいた、ユミナが腹に一撃を加えた。

ザシュツ！！

グゴオオー！！

尻尾を振り回して反撃する。

尻尾を掻い潜り、一度距離をとった。

その間にアイの猛攻が始まった。

バン！ バン！ バン！

L V 1 徹甲榴弾がドオガレオスに命中した。

続いて爆発が起こった。

ドガン！ ドガン！ ドガン！

グゴオオ……

怯んでいる間にLV2散弾に換えて乱射する。

ズガガガガ！ ズガガガガ！ ズガガガガ！ ズガガガガン！！！！

ウガアアアアーツ！！

動けないドスガレオスに、正面からユミナは突っ込んだ。

「ユミナちゃん！？」

無謀だと、心配しながら対応を始める。

ドスガレオスの攻撃範囲に入ったユミナを、ドスガレオスは噛み砕こうと、

首を振って迎撃する。

ブンツ　　！　カツ！

ドスガレオスのアギトは、何も捕らえられていなかった。

噛み付く寸前に、目の前からユミナが消えたのである。

ドスガレオスの顔に影が差す。

「ハアアアアアーツ！！！！」

ユミナは噛み付かれる寸前に、上へと跳んだのである。

「喰らえっ！！！！」

ドシユツ！！

ドスガレオスの首を貫く。

「フンツ！」

頭へとなぎ払う。

ザシユツ！！

首から頭が両断されて、ドスガレオスは絶命した。

「私の勝ちね……」

「ユミナちゃん！！！」

「アイ、終わったよ？」

「終わったよ？ ……じゃない！！ 危ないでしょ！
あのまま普通に戦えば、危険を冒さずに倒せたのに。
何であんな危ないことしたの？」

「だって、あまり時間もないし……」。

それに、危険を冒してでも倒さないと間に合わないよ」

「それでも……！ あんまり無茶な事はしないでよ！
私、ユミナちゃんがいなくなったら嫌だよ？」

「うん、しめん……。わかってるよ」

「そう……。でも最後の本当はすごいなって思ったよ！」

「そ、そう？」

「うん、すごいよー！」

「ありがとう。……一旦ベースキャンプに帰ろう？」

「うん」

二人並んで、ベースキャンプへと向かった。

日が傾き、夜へと差し掛かるうと時。

ようやくベースキャンプに、二人はたどり着いた。

ベースキャンプに着くとユミナは、あまり時間がないと焦っていた。

何故時間がないかというと、今朝の村での出来事である。

いつも通り酒場にクエストを受けに行くと、緊急依頼が来たという。

「また、緊急の依頼ですか？」

「うむ、砂漠にドスガレオスとダイミヨウザザミの二頭が何故か暴れまわっておる。

それを退治して欲しいそうじゃ」

「私たち2人ですか？」

「うむ、デユーク達じゃ間に合わんのじゃ。

時は一刻を争う問題じゃ！ それで、おぬしら2人に至急向かってもらいたい」

「わかりました、任せてください！」

「依頼を確認する。目標はドスガレオスと、
ダイミヨウザザミの討伐じゃ。場所は、砂漠。期間は3日じゃ！」

「「3日ッ！…!?」」

「そうじゃ……」

「いくらなんでも3日は……」

「危険すぎると思うよー！」

「仕方ないのじゃ、村が一つ壊滅しとるのじゃから……。
竜車はいつも通り、準備は出来とる！ 付いたら即討伐に当たってくれ」

「……わかりました」

「無事に帰ってきてくれ。頑張るのじゃ！……」

「はいっ!」

そういつた理由であと2日で、残りのダイミョウザザミを、倒さなければならぬのである。

そんなユミナをアイは察してか、

「あまり焦りすぎても駄目だよ! 今は休もう。ね?」と、言った。

「うん、そうだね……。明日頑張ろう!」

「そうだね! がんばろ!」

「じゃあ、休もう……。おやすみアイ」

「うん、……。おやすみユミナちゃん」

二人は早々に、明日のために眠りについた。

早朝、日の出が出るか出ないか位の時間帯。

二人は行動を開始していた。

あらかじめ見当をつけていたエリアに、向かう。

辺りは静かである。

すると急に

グラグラグラ、と地面が揺れた。

そして、前の方の地面が盛り上り、

ドゴン！！

頭が出てきた。

古びた骨のような頭。

その頭についている、真紅の角。

モノブロスの頭。

さらに飛び出し、全体が見えてきた。

それは正に、大きな赤い蟹。

「……ダイミヨウザザミ！」

「ユミナちゃん、泡ブレスとボディープレス。

それと、地中からの攻撃は危険だから……気を付けてね」

「わかった。……行ける？」

「いつでも〜！」

「いくよー!!」

そう言つてユミナは、まだ気付いていないダイミョウザザミに奇襲を仕掛けた。

「ハアアアー!!」

足と足の関節を狙つて太刀を振り下ろす。

カスン!

間接とは言つても硬く、あまり効いてないようだ。

キシヤアアアー!!

ユミナに気付कि、振り向いた。

そこにアイの徹甲榴弾が放たれた。

ドシュ……ドカン!

キシヤアアアアツ!?

いきなりの衝撃に、ダイミョウザザミは驚いて怯んだ。

怯んでいる隙にユミナは、ひたすら足を斬りつける。

アイは甲殻の薄い部分を狙つて、貫通弾を打ち込む。

ダイミョウザザミはようやく落ち着き、反撃を開始した。

大きな爪で、足を攻撃していたユミナを襲う。

ブンッ ！！

「うわっ!?!」

慌てて回避した。

そこにもう一撃。

ブンッ ！！

「くっ!?!」

勢いよく飛びのいて、何とかかわす事が出来た。

そして、ダイミヨウザザミは体勢を崩しているユミナを追撃しようとする。

そこでアイはダイミヨウザザミを撃って、注意を引く。

撃たれたダイミヨウザザミは、振り返り、アイへと標的を定めた。

口の辺りに泡が現れる。

「 !?! 泡プレス!?!」

慌ててボウガンを背負い、範囲外へと逃げた。

ブシューウ……ッ!!!

泡ブレスが地面を少し削る。

範囲外に逃げたアイは、ボウガンを構えて再び攻撃を始めた。

体勢を立て直したユミナも、攻撃を始めた。

ダイミヨウザザミは、片方ずつに反撃をして応戦している。

突然ダイミヨウザザミは屈んだ。

「ユミナちゃん！ ボディープレス、離れて!!」

ユミナは攻撃をやめて一気に間合いを取った。

ブオンツ

ドゴンツ!!!

地面が陥没する。

そして、そのまますぐに地面に潜り込んでしまった。

二人は武器を直し、神経を集中させた。

アイの方で、グラグラグラと地面が揺れた。

アイは咄嗟に飛びのいた。

ボゴン!

ダイミヨウザザミの殻が、一気に飛び出してきた。

「……………危なかつた」

安堵し、相手を見た。

ダイミヨウザザミは地面から出てきていた。

二度、ダイミヨウザザミとユミナたちの攻防が始まった。

斬ってはよける。

斬られては反撃する。

撃っては間をとり。

撃たれてはプレスする。

そんな攻防を半刻ほど続けた。

ダイミヨウザザミが地面に潜った。

しかし、何もしてこない。

静寂が包み込む。

辺りは静まり返っている。

地響きがせず、揺れもない。

一瞬、逃げたかと思った2人だが、何もなさすぎたのでそれはないと考えた。

しばらく考えていると、グラッとアイの足元が揺れた。

アイは（しまった！？）と思い、慌てて回避しようとしたが、時既に遅く。

ドゴッ！

「ッ！」

アイは空中に舞った。

「……………あ、っ、アイーッッ！！！」

ユミナの絶叫が響いた。

第十六話「砂漠の盾」(後書き)

アイがピンチです！

第十七話「怒りの力」

第十七話「怒りの力」

ドゴッ！

私の目の前で、アイが空中に舞う。

明らかにヤバイ威力である。

「……あ、っ、アイー……ッ……!!」

私は力の限り叫びながら、アイの元へと急ぐ。

走って、落ちてきたアイを受け止める。

ドッ！

かなりの勢いであった。

地面に下ろすと、必死に呼びかけた。

「アイッ……! アイッ……!」

返事は返ってこない。

いつもの柔らかい笑顔もそこにはなく、苦しそうな顔をしていた。

不意に彼女が言った言葉が、頭の中に響く。

『私、ユミナちゃんがいなくなったら嫌だよ〜?』

「　　ツ!?　　〜　　〜　　〜　　〜　　!」

必死に抱きしめて叫ぶ。

「私も嫌だよ〜!　　アイが居なくなるなんて、絶対に考えられない!」

「だから、居なくならないで!　　ずっと一緒に居てよ!」

すると声が届いたのか、私の手をそっと握った。

そして、手が離れて眠りに就く。

「　　!」

一瞬、最悪の展開が頭を過ぎったが、違ったようだ。

アイは気絶していた。

ちゃんと呼吸をしていた。

生きていた。

しかし、このままでは危険すぎる。

回復薬を怪我にかけて、ある程度治療をした。

「……「じめんね」

そう言ってアイのそばを離れた。

思考を怒りが支配する。

誰がアイを傷つけたか

ダイミヨウザザミ

どうすればアイは助かるか

奴を片付けて、早々に帰る

倒すべきは、

殺すべきは、

ダイミヨウザザミ！

頭の中が真っ白になった。

心に黒い感情が溢れ出す。

許さない、絶対に……許さない！！

鉄刀を抜き放ち、今までとは比べようもないくらいのスピードで、ダイミヨウザザミとの間合いを詰める。

一閃、二閃、三閃

弾かれようが、気にせずに斬りつける。

ガキン！

ズバン！

ガッ！！

ダイミヨウザザミは、あまりの猛攻に怯む。

しかし、何とか反撃を繰り出す。

大きな爪がユミナを襲う。

ブンッ ！！

ユミナは鉄刀を思いっきり振り上げる。

ガキンッ！！

爪と太刀が交叉し、爪の軌道をそらす。

弾かれた反動を利用して、ユミナは斬りつける。

練気を纏った鉄刀で、おもいつきり爪を迎撃する。

ガキンツ！！

ドガツ！！

バキンツ！！

キンツ！

ガンツ！

互いの武器、体がボロボロになっていく。

ダイミョウザザミの口の泡に、紫色が混じった。

弱ったのである。

そして、泡ブレスを吐いた。

ブシューーーーーッ！！

ギリギリのところまで体を捻る。

ザクッ！

横腹の鎧の部分が、水圧で裂けた。

そんな事すら気にせずに、間合いを詰める。

鉄刀で斬りかかる。

途端にすごい勢いで、上へと跳び上がった。

風圧で動けない。

そこに、

ドンッ！！

ダイミヨウザザミが落下してきた。

爪が鎧に当たり、弾き飛ばされた。

2、3メートルぐらい転がり続けた。

「……………ぐっ！ カハッ！！」

血を吐く。

内臓の一部が、衝撃で弱ったのかもしれない。

体に激痛が走り、動く事が出来ない。

（ううー……………、動いて！ あいつを倒すのに！！）

戦い続きの疲労もあってか、動けない。

（なんで！？ 動いてよ！！ 最後の力……………力を！！

もう少し、あと少して倒せるの！ あと少しだけ、あいつを倒せ

る力を！！）

力が欲しいの？

鈴のように響き渡る少女の音が、頭に響いた。

（欲しい！！ アイを守る力が！）

クスクスと笑い声が響く

いいよ、ほんの少しだけ貸してあげる。

…… やつと気付いてくれたしね！ …… がんばってね？

そついい終わると、体が一気に軽くなった。

痛みも疲労も消えて、動けるようになった。

（誰だか知らないけど…… ありがとう）

ユミナは感謝をして、ダイミヨウザザミへと向かった。

ダイミヨウザザミは、だいぶ弱っていた。

何度も何度も、鉄刀を振るった。

甲殻は碎け、肉を斬り、血が舞う。

死角から爪を振るわれている事に、ユミナは気がつけない。

「うん、もうきしすぎるよ〜」

「ボロボロだね？」

「うん……」

「でも勝てた」

「そだね〜……」

「帰ろっか？」

「うん！ 帰って〜、おもいつきり休もう〜？」

「おー！」

ボロボロの二人は、なんとかベースキャンプに戻り、
竜車に乗って村へと帰った。

とある森丘で、カイトとシズクが西に向かっていた。

カイトは不意に「……また感じた」と呟いた。

「……お兄様？」

「シズク、やっぱり西の方から感じた」

「……そう。ユミナさんも西だよな？」

「ああ、といっても……2つともまだ、とても遠いがな」

「……急ぐの？」

「いや、……ゆっくりでいいよ」

「……わかった」

残念そうにシズクは頷いた。

そして二人は西へと進み始めた。

村では大騒ぎになっていた。

ボロボロの二人が帰ってきたからである。

アイは全身打撲で全治2週間。

ユミナは体がボロボロすぎて、1ヶ月はろくに動けない。

村の皆が心配し、依頼を達成した事を褒め称えた。

デュークは慌てふためき、サラは泣き続けた。

村長たちに、『1ヶ月は休んでいてくれ！』といわれてので、

今、ユミナとアイの二人は仲良くベッドの上で、療養中である。

「痛いよ〜……………」

「うん、確かに痛すぎる……………」

「しばらくは何も出来ないね〜?」

「そうだね。治ったら、またがんばろ?」

「うん!」

「とりあえず今は、休もう……………」

「うん、おやすみ〜!」

「おやすみ」

二人は傷を早く癒すように、眠りに就いた。

真っ白な世界。

少女は嬉しそうに呟いた。

「やっと、少しだけ声が届いた」

「マスター。早く、私に気付いて」

「私は貴方、貴方は私。いくらでも助けますから」

リン

鈴の音が響き渡る。

少女は嬉しそうにずっと笑っている。

リン

第十七話「怒りの力」(後書き)

アイもユミナも無事にクエストクリアです！
次回はドスイーオスとババコンガのどちらか、
あるいはどちらともです！！
沼地ですよ〜(笑)

第十八話「桃毛獣ババコンガ」(前書き)

スランプ気味です〜 (泣)

誰か何とかして〜!?

感…想を…お、願…い…しま…

第十八話「桃毛獣ババコンガ」

第十八話「桃毛獣ババコンガ」

あれから約1ヶ月。

村の前で、ユミナとアイが話をしている。

「久々のクエストね……」

「そうだね」

怪我の治療で一ヶ月も、動く事を許されなかった。

そして、漸くのクエストである。

「倒すべきは、桃毛獣ババコンガ！」

「よりによって、それかあ……」

アイはげんなりした感じで言う。

「アイはババコンガと戦った事あるの？」

「あるよ〜。……始めて戦ったときは……最悪だった」

「アイがそこまで言うなんて……!?!」

(どんだけ嫌な敵なんだろう!?)

「フンを投げてくるから、必死に、全力でよけないといけないから」

「……そうなんだ」

女の子としては確かに最悪だった。

「はい〜！ なので、ユミナちゃんは絶対に喰らったらだめだよ」

「わ、わかった……」

「じゃあ、行こう〜!」

「うん、行こう〜!」

二人は竜車に乗って、沼地へと向かった。

数時間して、漸く沼地に着いた。

「地面が柔らかいよー!」

「沼地だからね〜」

至極当然のことを言う二人。

「これは足元に気をつけなきゃね！」

「そうだね〜」

「とりあえず、どこから行く？」

「地面に慣れる為に、てきとつに行こうよ」

「そうだね、それがいいね。行こうか？」

「うん、行こう〜！」

暫く歩き進めると、広い場所に出た。

「ここは……エリアだね」

「ユミナちゃん！ イーオスが居るよ！」

イーオス。鳥竜種で毒を持っており、ランポス達よりもしぶとい。

ドスイーオスになると、飛竜種に匹敵するといわれている。

「先に倒しとこうか」

「うん」

「2匹……私が行く、アイは下がってて」

「わかったよ。頑張つて！」

スラリと鉄刀を抜き放ち、イーオス達との間合いを詰めた。すると、イーオスはユミナに気づき、仲間を呼ぼうとした。

それをさせずに一閃。

ズバツ！

ギヤアア！

「体の動きが……鈍い」

1ヶ月も動けなかったので、体が鈍っていた。

その為、一撃でイーオスが葬れなかった。

ギヤアツ！！

イーオスの反撃。

それをかわして一閃。

ギヤアア！！

1頭を葬る事が出来た。

続いて2頭目に接近した。

「ハァー！」

ギャアァー！

交叉する。

ズバツ！！

イーオスが血飛沫を上げて絶命した。

「ユミナちゃん、大丈夫？」

「うん、……でも体が鈍りすぎてる」

「そっかあ、私もだけどね」

「2人とも、ちゃんと体を動かす必要があるね！
ババコンガと戦う前に」

「そうだね〜！」

大量のイーオスが、さっきの叫びを聞きつけてきた。

「……またイーオスがやってきた。今度は2人で戦おう！」

「うん！」

二人でイーオスに群れに突っ込んだ。

バシユ!

ギヤアアアー!!

最後のイーオスが絶命した。

「ふうー」

「ユミナちゃん! 終わったよー!」

「うん……だいぶ体が動くようになったよ」

「私も勘を取り戻してきたよ」

「じゃあ、そろそろね……」

ブモオオーーッ!!!!

ドスンッ!

その言葉と同時に、ババコンガが現れた。

「……本当に来た、よ……」

「え〜! さすがにきついよ〜!」

「……行くよ!」

「……わかったよ」

ブンッ！！

「「キヤッ!?!」」

何かが投げつけられた。

咄嗟に二人はそれをよけた。

べちゃっ!

嫌な音と悪臭が漂う、フンを投げてきたのだ。

「くっ!?!?!? 最低っ!?!」

「最悪ですく!!! 万死に値します!」

何とかよける事が出来た二人は、猛抗議した。

ブンッ!!!

もう一投。

「「ひゃっ!?!?!」」

慌ててよける二人。

ぐちゃあ!

ブンッ！！

さらに一投。

「「にゃっ!?!」」

よける二人。

べちよっ!

おちよくる様に投げ続けるババコング。

そして、悲鳴を上げながらよけ続けるユミナとアイ。

10分後。

「はぁッ! はぁ、はぁ!!!! 絶対に……殺す!?!」

「うっ、はぁはぁ!! はぁっ!……地獄を……見せてやるデス!」

ついに2人はブチ切れた。

一瞬で間合いを詰めて、嵐のように斬り続ける。

ひたすらに強力な弾を連射しまくる。

ぶじおおおおおー!?!?!?!?

堪らずに悲鳴を上げるババコンガ。

鬼刃斬りを何度も繰り返す。

徹甲榴弾、拡散弾、貫通弾を打ち込む。

それはまさに、地獄絵図。

ババコンガもついに切れた。（逆切れである）

鬼のような死闘が数時間も続いた。

ドシンッ！！

ババコンガが地に伏す。

ウゴオオオ！

絶命した。

「　　ッ！！　ハアッ！　ハア……クッ！」

「　　……ハア！　ハア！　うう~~~~！」

「　　……いつの間にか終わった」

「　　……終わったね」

「　　……なんか納得がいかない！」

「……気にしたら駄目」

「……あまりババコンガには、来ないようにしよう」

「……そうだね」

「……帰ろうか」

「……うん」

2人はトボトボと元の道を引き返した。

2人がこのクエストで手に入れたものは、

戦いの勲を取り戻す。

無駄な疲労。

極力来ないという誓い。

ババコンガの臭さ。

脱力感。

e t c

という、どちらかと言えば失ったものの方が多い気がする。

そんな、悲しいクエスト模様でした。

その後二人は、美味しいご飯、温かいお風呂、ふかふかベッドで、さっぱり悲劇を忘れ去ったとき。

めでたし、めでたし？

第十八話「桃毛獣ババコンガ」(後書き)

なんというか、グダグダ過ぎますね(汗)

こんなつもりじゃ…(泣)

次回に期待です!(笑)

出来れば感想が欲しいです…!!

EX:03「カイトの暇つぶし」

EX:03「カイトの暇つぶし」

ドンドルマ。

カイトとシズクは酒場の中にいた。

二人で食事をしていると、不意にカイトが呟く。

「……暇だな」

「……暇？」

「ああ、暇だ」

「……どうするの？」

「うーん、体でも動かしてこようかな」

「……私は？」

「見てるだけ……かな？」

「……そう。……わかった」

シズクは少し残念そうにした。

「そう残念そうにするなって……。」

さて、何しようかな？ マスターにでも聞いてみるか」

そう言つて、ギルドマスターの元に向かった。

「お〜い、マスター久しぶり」

「おお！ カイト！ 久しぶりだな」

「俺、暇。なんかない？」

「いやいやいや、カイトはハンターじゃないからな……」

呆れたようにギルドマスターは言う。

「そんな事言つなよ……。ほら、何でも倒してやるぞ？」

「確かにカイトは、何でも倒せるだろうが……一応規則だからな」

「う〜ん、ハンターになる気はないしな……」

二人して難しそうに、話し合っていると

バンッ！！

扉が勢いよく開けられた。

「まっ、マスター！ 大変です！
ラオシャンロン老山龍がもうすぐ来るそうです！！」

！！？

酒場が一瞬、静まり返った。

そして一気に爆発した。

周りの奴らは騒ぎまくっている。

どうする？

やばいっ！ 早く逃げるぞ！

ついにこのドンドルマに！？

倒したら報酬が！！

などといった、会話が飛び交っている。

ギルドマスターの顔は真っ青である。

「……ろくにハンターが居ないこのときに！？」

などと呟いている。

(ふむ、これはいい暇つぶしになりそうだ)

ギルドマスターに話しかける。

「マスター、俺が倒そうか？」

「！？ そうか……カイトが居たか！ 頼めるか？」

「条件がある」

「何だ？」

「1つ目、俺1人でやる、他のは邪魔だ。

2つ目、素材は一切分けない。

最後に、貸し1つだ」

「……わかった、なるべく壊さないようにしてくれよ？」

「善処するよ」

話を聞いていた、周りのハンター達が抗議する。

「おいおい！ ふざけんな！ こんなガキが1人で倒せるわけない
だろ！！」

「皆で行った方が撃退できるだろ！ それに素材独り占め、ふざけ
んな！」

「そつだ！ 素材を分けないなんて何様だ！」

一斉に罵声やブーイングが、聞こえてくる。

「……黙りなさい」

冷え切ったその一声に、周りは黙る。

「……お兄様を侮辱するな」

冷たく濃密な殺気が膨れ上がる。

その中、一人の何もわかってない男が声を上げる。

「おおおう！ 嬢ちゃん、威勢がいいね！」

「……」

周りの奴らは、そいつを必死に止めていた。

おい、やめろよ！

殺されるぞ！？

謝れよ！

「何々？ 皆こんなガキ共を怖がってるの？」

ギヤハハ、うけるわ〜！ 嬢ちゃん、俺が大人の厳しさを
手取り足取り教えてやるよ！」

男は下品に笑いながら、シズクに近づいていく。

「マスター、あいつ死ぬよ？ いいの？」

「いやいやいや、良くないよ！ 止めてよ！」

「ええ、面倒くさい……」

「ええー！？ ……まあ、未熟な奴が悪いか」

「止めてくる」

「……なんなのさ、嫌がらせ！？」

「ああ！ その通り！」

「……」

「シズクの手が、あんな汚い奴の血で汚れるのは許せん！」

「やっぱりそこなのね……」

「あいつ、殺してもいい？」

「駄目だよ！？」

「冗談だよ……（嘘）」

「ええー！？ 何その（嘘）って！？」

「キノセイダヨー？」

「メツチャ棒読みでカタコト！？ 本当にやめてよね！？」

「……わかったよ」

そう言っつてシズクの元へ向かった。

男の手がシズクに伸びる。

シズクは1撃で葬れるように、手を振るおつとした。

その手をカイトが掴んで、抱き寄せる。

男の手は空振る。

「シズク……駄目だよ？」

耳元で優しく囁く。

「……でも、お兄様!？」

「ありがとう、良いんだよ……俺がやる」

「……うん」

蚊帳の外だった男が、顔を真っ赤にして怒鳴り散らす!

「オイ邪魔してんじゃねえー!! 殺す! 殺してやる!!」

そう言っつて背中中の武器を手を取った。

「マスター? あいつハンター失格だよね?」

「うむ、失格だな。……酒場を壊すなよ」

「わかってるって」

「ゴチャゴチャ言ってるじゃねえーッ!」

大剣をカイトに振り下ろす。

ブンッ!!

パシッ!

それを片手で受け止める。

周りは驚愕した。

「なっ!?!」

「……弱いな」

腕を軽く振るう。

男は咄嗟に大剣でガードした。

ドンッ! バキヤア!! ドゴン!

大剣は見事に粉碎し、男は壁まで叩きつけられた。

「マスター、これでどう?」

「……壊すなって言ったのに」

「最低限に収めた!」

「そういう問題じゃない!」

「ワガママだな。さてと、じゃあ行って来るよ?」

「わかった。……皆を壊すなよ?」

「……わかってるよ」

「今の間は何!?」

「気のせいだ。行くぞシズク」

「……はい! お兄様!」

二人は皆へと向かった。

「シズクは手を出すなよ?」

「……わかってる」

「そうか。終わったら遊ぶか?」

「うん!」

「よし、がんばるか。……手加減ね？
シズクはここに居てね」

「……うん」

「行ってくる」

エリア5から離れてエリア2に向かって走った。

それはまさに、風を切るような速さである。

1分もしないうちに、エリア2に着いた。

「うーん、徒手空拳かな？ 武器を使ったらただじゃ済まないし、魔法は使ったらやばいしな！」

ズシンッ！

地面が揺れる。

「来たか」

グワアアアガアアアーッ！！！！

大音量の咆哮が響く。

「……久々に、まともに力が使える相手だな！」

嬉しそうに呟く。

ギルドマスターと約束した事は、既に記憶の片隅に追いやられた。
体の全身に紅い気を纏う。

「……行くぞ！」

間合いを詰める。

「はっ！」

拳を上に向かって、振るい穿つ！

ドゴッ！！

顔面の甲殻の一部が碎ける。

グギヤアガガアアア！！

続いて、回し蹴り。

ドゴンッ！！

勢いよく顔が左に傾く。

ドズシシーンッ！！！！

左に倒れこむ。

すぐに起き上がると、また進み始めた。

「そう来なくつちな！」

腹まで間合いを詰める。

ズシンッ！！

ラオシャンロンの1歩ごとに龍風圧による突風が巻き起こる。

ゴウッ！

カイトはそれに怯む事もなく、腹の下まで来た。

「ハアッ！！！」

おもいつきり真上に蹴り上げる。

ドンッ！ ドゴオオッ！！！！

地面は陥没し、ラオシャンロンは中に舞った。

カイトは飛び上がり、打撃を加えた。

ドガッ！！

反転して空中を駆け回る。

ラオシャンロンとすれ違った際に、打撃を加えていく。

ドガッ！ ドガッ！ ドガッ！ ドガッ！

シズクは少し離れた所で座った。

カイトは間合いを詰めて、技を放つ。

姿勢を弱冠低くしてから、全身を使い、回転して相手に拳を叩き込む。

拳に纏われている気と魔力で発火させ、外部と内部の完全破壊をする技。

「…………『壊焰』」

ゴッ！…………ドゴーン！！

殴ると、殴ったところが爆発する。

甲殻が吹き飛ぶ。

気と魔力で強化された炎を纏う手刀で連撃を放ち、相手を削り斬る技。

「…………『焰閃牙』」

連撃を放ち、相手を削る。

膨大な力を相手に標準を合わせて、勢いよく爆発させ粉々にする技。

「終わりだっ！ 『エクスプロージョン』」

ドゴーーーーー！

爆発の魔法を放たれた、ラオシャンロンは消し炭となって、絶命した。

スウー

紅蓮の双眸は漆黑へと戻った。

「ふう〜、終わった！」

「……お疲れ様」

「仕上げつと、『我に集え その名は 老山龍^{ラオシャンロン} 素材を全てここに』

『おいで』」

光がカイトに集まり、はじけた。

「終了！ 早く帰って遊ぼうか？」

「……うん！」

「暇つぶし、終わり！ 報告」

二人は仲良くドンドルマへと帰った。

ある日の夜。

ギルドマスターは叫んでいた。

「あれだけ壊すなといったのに！！ 助かったけどさ！
壊すな——！！！！？ カイト——！！」

魂の叫びであった。

EX:03「カイトの暇つぶし」(後書き)

久しぶりの更新？

明後日からがテストなので身が入らない。

相変わらず、スランプです(笑)

ちなみに、これでもカイトは、まだ全然本気を出してはいません(笑！)

第十九話「初の飛竜戦」(前書き)

更新が遅れました…不定期ですが(笑)
相変わらず、スランプです。

第十九話「初の飛竜戦」

第十九話「初の飛竜戦」

ボオオウウオオオーン!!!

吹雪の中、ひたすらに叫びが聞こえる。

激しい叫びに負けじと、吹雪は強まる。

ボオオウウオオオーン!!!

激しい叫びは、雪の中で木霊し続ける。

「大変だ!? フルフルが近くの雪山に、住み着いたらしい!」

「なんじゃと!?!?」

酒場は静まり返った。

「こんな時に、あの二人は別のクエストじゃ……」

「村長、私が行きましようか？」

メイドシリーズを着た、給士が近づいてきて言った。

「ふむ……しかし、一人ではきつくないかのう？」

「確かに、少しきついですが……」

彼女は最近、本業ばかりで狩りは久しぶりである。

「それでは……ユミナにアイと一緒にならどうですか？」

「ふむ……確かにそれなら……」

村長は納得したように頷く。

「では、エリカよ。ユミナとアイにこのことを伝え、至急に討伐してくれ！」

「かしこまりました」

エリカは酒場を去り、ユミナの家に向かった。

「ふむ……、エリカと一緒にならあの二人も大丈夫であるう」

エリカ・リヴィア。

十年以上も前に、村長が拾ってきて育てた子。

年齢・不詳。女性。

現在はハンターで、本業は酒場の給士として働いている。

大剣使いで、腕は確かなものである。

冷静に戦いを観察し、その場その時に合った、臨機応変な戦い方を
する。

そんな彼女が、今回は一緒に居るのだから大丈夫であろう。

そう村長は考えている。

(初めての飛竜戦じゃ、生きて帰って来い！)

朝。

「~~~~うーん」

ユミナはぐっすり眠っていた。

ユサユサ

「うーん? あい……もうちょっと寝かせて……」

ユサユサユサ

「むう〜〜……ふわあ〜！……」

ユサユサされて目を擦りながらも、もぞもぞと起きよじりとする。

起こした本人に目を向けると、そこには

「……………？ ……っ！！？」

「おはようございます」

メイドが居た。

「うわあーっ！！！？」

「……………少し、傷つきます」

ユミナの反応に落ち込んだようだ。

「どどどどどど、どっして……ここじゃ！？」

よく見ると、酒場の給士メイドさんのエリカだった。

「緊急事態です。近くの雪山にフルフルが現れて様子です。至急にこれを討伐する為に、私にユミナにアイの三名で、討伐に行く事になりました。すぐに準備をして下さい」

「は、……………はいっ！？」

またもやユミナは混乱した。

「フルフル!? 私達が行く!?!」

「はいそうです」

エリカは淡々と返す。

(私がフルフル……初めての飛竜。それを、討伐?)

ユミナは次第に冷静になっていく。

(これを成功させれば、また一歩近づくことが出来る……?)

遠くに居るカイトのことを考える。

「……わかりました! すぐに準備します!」

「はい、私も自分の準備をします……アイにはもう伝えてい
ますから」

そう言ってエリカは、家を出て行った。

「私もすぐに準備しなくちゃ」

初の飛竜戦、何時もより念入りに準備を始めた。

「ちゅ……寒いー！」

「さむいね〜?」

「はい、雪山ですから」

雪山。季節が夏でも、ましてや山の麓に居ても寒いのである。

「……ホットドリンクは忘れてないですよね?」

「うん〜あるよ?」

「忘れるわけないよ……寒いもん」

忘れたら、絶対に後悔する代物である。

「それにしても。驚いたよ〜? いきなり飛竜討伐だなんて〜」

「私も驚いたよ……」

「仕方ないです……緊急事態ですから」

「エリカさんとは、初めてですね〜?」

「そうですね、よろしくお願いします」

「「こちらこそだよ〜!」」

「……エリカって強いんだね?」

「……？ いきなりどうしましたか？」

「いや……だって、それ“煌剣リオレウス”だよな？」

“煌剣リオレウス”

希少なリオレウス亜種の素材をふんだんに使い、荒々しいながらも美しい蒼。

それは蒼リオレウスの蒼翼を模している。

斬り裂いた敵は爆ぜ、その剣戟はリオレウスの火球すらも真つ二つにする。

と言われている、炎の大剣。

それを扱う者は、上位以上の実力の持ち主と言う事でもある。

「これですか……？ これは……思い出の品です」

「思い出？」

「はい。村長に拾われて育ち、今までを生きてきた。それを証明する思い出の品です……」

どことなく嬉しそうに、エリカは話す。

「……そうなんですか」

「……お喋りはここまでにして、そろそろ行きましょつか？」

「そつだね〜！」

「わかりました！」

「リーダーはユミナです。私達はユミナの指示に従います」

「私……ですか？」

「はい」

「従うよう？」

「うん、わかった。……じゃあ、行こう！」

「「はい!!」」

ユミナたちはベースキャンプを後にした。

「そういえば、フルフルってどんな飛竜なんですか？」

雪山を登る途中、ユミナはふと思った事を聞いてみた。

「確かに、何も知らないね？」

アイが相槌を打つ。

「ええ、飛竜自体が始めてよ」

「そっだね？」

「フルフルですか……嫌な敵です」

予想外な反応が返ってきた。

「嫌……なの？」

「ハッキリ言って、強いです。イヤンクック等とは比べ物になりません。」

特に電撃はヤバイです。ブレスと放電、どちらも予備動作をしつかり見れば大丈夫ですが、喰らえば勝負は決まります……私達の負けで、致命傷です」

二人は息を飲んだ。

「あと、目は退化しているので閃光玉は効きません。罾は一通り効きますが、地形が悪いのでシビレ罾ぐらいしか使えませんね。」

洞窟内ならば落とし穴が使えますが」

色々と説明していく。

二人は頷きながら、それを頭に入れていく。

「そろそろですね」

そう言つて洞窟を抜けると、辺りは一面吹雪であつた。

「ええー！？ さっきまで晴れてたのに！？」

「山の天気は変わりやすいですから。それにしても、……最悪ですね」

「うん、視界が悪すぎる」

「二人とも、何か聞こえてくるよう？」

「??」

風の音で何も聞こえない。

二人は首をかしげている。

「ほら……耳を済ませて。ボオオウンって聞こえてくるよ」

「? ……聞こえないよ?」

「……ボオオウン? ……まさか!?!」

ボオオウウオオオウオオーーン!!!

吹雪の中に影が現れた。

ボオオオウオオウオオウウウオオーーン!!!

それは、叫び声を上げている。

ツ!!!?

皆は一斉に武器に手を伸ばし、臨戦態勢に入った。

白くブヨブヨとした、首のない化け物が現れた。

「…………フルフル!!」

エリカが呟くと同時に、開戦の咆哮を上げた。

ボウオオオウウオオオウウオーン!!!

第十九話「初の飛竜戦」(後書き)

やっぱり、意見が欲しいの〜) > | <。(

「あなたのそれ、いっぱい…頂戴 / / / /」

「お願い…私、もう我慢できない / / / /」

「あう…焦らさないで…? / / / /」

第二十話「白闇の稲妻」

第二十話「白闇の稲妻」

バチバチバチバチッ！！

フルフルの体から稲妻が迸る。

「……確かに、当たったら致命的だね」と、ユミナは呟く。

「エリカは常に、私とは反対側から攻めて！

アイは私達の援護を！ 行くよ！」

「はい！！」

指示を出すと、ユミナは斬りかかった。

「ハアアアー！！」

ブシュッ！

「ッ！？」

いつもとは違う手ごたえに、ユミナは戸惑った。

フルフルは首を伸ばして噛み付いてくる。

横へと跳びのいてかわした。

フルフルの背後からエリカは斬りかかった。

「ハア！」

ドシュツ！！ ボン！

斬り付けた部位が爆ぜた。

グワアアアアーツ！！

弱点属性での重い一撃が、フルフルを仰け反らせた。

アイは的確に火炎弾を撃ち込んでいく。

バンバンバンバンバン

ボンボンボンボンボン！！！！

（私が止まったら駄目！）

鉄刀を持ち直し、叩き斬る。

「ハアアアアア！！！！」

ドシャ！！

続いて横への一閃。

「ハッ！」

ズシヤッ！

いくらか攻撃していると、フルフルは体を仰け反らせて光りだした。

ザッ！！

一気に後ろへと跳び、間合いを取った。

エリカも同じようにしていた。

バチバチバチバチッ！！

体内発電である。

(……よし、大丈夫！ いつも通りいける)

体内発電をしている間は無防備なので、攻撃が届くアイはひたすら撃ち続ける。

やがて体内発電が終わると、ユミナとエリカは突っ込んだ。

ザシユッ！ ズバツ！

斬り付ける。

体内発電。

間合いを取る。

この工程を何度も繰り返した。

不意に流れが変わった。

ブンッ！！

尻尾がユミナに迫る。

咄嗟に鉄刀でガードしようとした。

がつんっ！

「クッ！？」

吹き飛ばされる。

一瞬の事で皆に隙が出来た。

続いてフルフルは、エリカに攻撃をした。

エリカは我に返り、咄嗟にガードをする。

ガッ！

「うっ！」

怯むと同時に間合いを取った。

「……………いける？」

そう聞いてきたユミナの額には、一筋の血が流れている。

先ほどのダメージは大きいようだ。

「……………勿論です」

そう言つて、エリカは大剣を構えなおした。

フルフルは首を天高くまで持ち上げていた。

口の先は仄かに光を発している。

「　　まずい！　電気プレス！」

二人は左右によけた。

ゴウツッ！！

ビリビリビリビリー！！！！

電気球が地面を三つ駆ける。

「側面から攻撃を！　アイは特に気をつけて！」

注意を促すと、明らかに空気の質が変わった気がした。

ッ！！？

フルフルから凄い殺気が押し寄せてくる。

白い息が漏れている。

体にわずかな電流が迸る。

「……怒り状態です、気をつけて下さい」

いち早く気がついたエリカがそういった。

ブオオンッ！！ 急にフルフルが視界から消えた。

「ユミナ（ちゃん）、危ない！！」

影が差す。

咄嗟に横へ飛び込んだ。

ズシンッ！！！！

フルフルが飛び込んできたのだ。

（ 速い！！ ）

すぐに起き上がると、電気ブレスを放った。

なんとか避ける。

防戦一方である。

エリカはあまりの猛攻に、手が出しにくいようだ。

アイは活路を見出そうと、ひたすら撃ち続ける。

ひたすら狙われるユミナは、避けるので手がいっぱいである。

フルフルの動きは速く、激しい。

ボウウオオオウウオオオウー……！！！！

咆哮した。

大音量と、抗えない恐怖に、耳を塞ぎ硬直する。

「つうー……」

致命的な隙が生まれてしまった。

ジジジジジジー

電気ブレスを放とうとする。

(動いて！ 早く!!！)

体は言う事を聞かない。

ザッ！

ガッ！

誰かが踏み込むのと、電気プレスを放つのは同時だった。

ドゴッ！！

エリカが大剣を私に叩きつけて、吹き飛ばした。

「ゲッ！？ ツ！！？」

エリカは笑っていた。

口がかすかに動いた。

。

バリバリバリバリバリ！！！！

「 ツ！！！？ ツ！！？」

電気プレスがエリカに直撃した。

エリカは声にならない悲鳴を上げて、倒れ伏した。

ピクリとも動く気配がない。

「そん、な……？ ……嘘？」

“ごめんなさい” エリカは確かにそう呟いた。

「ユミナちゃん！？ 止まっちゃ駄目！！」

アイは必死に叫ぶ。

「……嘘、……エリカが、死ぬなんて……」

涙が溢れる。

「私の、所、為？ 私の……代わりに……」

嫌っ！！

嫌だ嫌だ嫌だ！！！！！！

死なないで！？

「ああ……うー……」

前のダイミヨウザザミの時みたいな、感覚がユミナを支配する。

黒い感情……黒き衝動……。

殺せ。

ころせ！

コロセ！！

アイツガコロシタ！

ドシユ！

バキッ！

ドゴッ！

ひたすらに振るい続ける。

あたりは真っ赤に、ドス黒く血に染まる。

「ユミナちゃんッ！！！！」

アイがユミナを思いっきり引き倒して、雪の中に突っ込んだ。

「ッ！！？」

あまりの冷たさに飛び上がった。

「アイ！？」

「目が覚めた？」

「……私」

「まずはすることがあるでしょ！ エリカさんはまだ生きてるよ！
でも急いで治療しなくちゃいけないの！！

ユミナちゃんが暴走してる場合じゃないの！ わかった！？」

「……うん」

「ユミナちゃん……あれは何？」

「あれ……？」

「さっきの黒い奴。」

「黒い奴？」

「覚えてないの？ エリカさんが倒れてから、急にユミナちゃんの体に現れたの。」

あのときのユミナちゃん、まるで別人みたいだった。……怖かったよ？」

「……そう。前にも同じことがあった……様な気がする。多分、アイの時にも同じことがあったんだ……」

どこか悲しそうに呟く。

「……そう、……今日はもう休もう？」

「……うん」

2人はエリカの無事を祈りながら、眠りに就いた。

第二十話「白闇の稲妻」(後書き)

所々分かり難いですね？(TOT)

すみません・・・(^_<)

第二十一話「三人の連繫」

第二十一話「三人の連繫」

朝。

小鳥の鳴き声が、何処からかともなく聞こえてくる。

ひんやりと肌寒い空気が、目覚めたエリカの火照った体を冷ます。

起き上がろうとすると、体がきしんだ。

「うっ」

不意に昨日の出来事を思い出した。

（私はユミナを庇って、フルフルの電撃を浴びて、それから
気を失ってしまっていたので、何も思い出せなかった。）

（はっ！？ ユミナは！？ アイは！？）

辺りを見回した。

すーすー。

気持ちよさそうに眠っていた。

「ふうー、私達は助かったのね……」

その姿を見てエリカは安心した。

「……うーん、！？ エリカ！」

ユミナが勢いよく、飛び起きた。

「無事！？ 痛いところは！？ 大丈夫！？」

次々とエリカに問いかけてくる。

「……大丈夫です。少し痛いですが、それだけです」

そう笑いながら言った。

「……本当？ よかったあー！」

ユミナはほっとしたように、座り込んでしまった。

その頭をそっと撫でる。

ユミナはされるがままに撫でられる。

「ありがとう」

「こ、こっちこそ、助けてくれて……ありがとう」

ユミナは照れたように返す。

「さて、アイを起こして準備をしましょう」

「……もう、体は大丈夫なの？」

「はい。戦えます」

「……そっか」

「それで、フルフルの状態は？」

「アイの話によると、大きな傷を負っているらしいです」

「らしい？」

ユミナの自信がない言葉に、思わず聞き返した。

「はい、エリカが攻撃を受けたあと、私はあまり覚えてないんです。フルフルの傷は、私がやったって、アイは言ってたけど……」

「覚えてない？」

「エリカが死ぬかもしれないと思うと、頭が真っ白になって……」

「そう、わかった。残りはアイも交えて話しましょう」

「はい！ 起こしてきます」

ユミナはアイを起こしにかかった。

「　　そう、大体分かりました」

「　　そうですか」

アイを起こした後、3人で昨日の確認や今後の対策を練っていた。

「これ以上相手を、回復させるわけにはいきません。

今すぐ向かいます。エリア3ですか？」

確認するようにエリカは聞いてきた。

「そうですね、弱っているならエリア3だと思う」

「準備はOKだよー！」

「私もいつでもいけます」

二人の準備が出来たのを確認するとユミナは、

「じゃあ、出発よー！」

そういつて、ユミナたちはベースキャンプを後にした。

ザクザクザク

洞窟の氷を踏み割りながら進む。

コオオー

洞窟の隙間から風が漏れる。

透き通るような氷晶は、突き刺さる寒さを物語っている。

暫く進むと、洞窟内でも少し開けた場所に出た。

グガアアアーzzzz

狭い洞窟にフルフルのいびきが反響する。

「居た……皆打ち合わせどおりに。後は臨機応変に！」

「はい!」

さっとユミナたちは、戦闘態勢についた。

エリカは大剣を抜き、構え、力を溜める。

溜め切りである。

ヴォン!

力が最大まで溜まり、爆発する。

「たああああー！ー！ー！ー！つ！！！！！」

渾身の一撃が体を深々と切り裂く。

グギヤアアアアウオオオオー！ー！ー！ー！ツ！！！！？？

不意の激痛にフルフルは絶叫する。

身構える隙も与えずに、ユミナとアイも攻撃を仕掛ける。

ここからは激戦であった。

怒り狂い、無茶苦茶に暴れまわるフルフル。

その攻撃は範囲も広く、素早い猛攻だった。

ユミナたちは、それを必死に掻い潜り、隙さえあれば全力で攻撃を叩き込んだ。

フルフルの攻撃は、洞窟内の地面や壁を砕き、ユミナたちを疲弊させていく。

ユミナたちの攻撃は、徐々にフルフルを死へと追い詰めていく。

半刻ほど戦い続けると、不意にフルフルの動きが鈍った。

「皆！ フルフルはやっぱり弱ってた！ 一気に決めよう！ー！！」

「はい!!」

アイは鬼人弾と硬化弾をユミナとエリカに向けて撃った。

ユミナたちに近づくと、ぱつと割れて、霧状の液体を噴出させる。

ユミナはエリカへと向かって走り出した。

「エリカ!!」

「……!! わかりました!!」

ユミナの狙いに気付いたエリカは迎え撃った。

切り上げ。

ユミナはエリカの煌剣リオレウスに足を掛けた。

エリカは全力で跳ね上げる。

「はああああ……!!!!」

「いつけええ……!!!!」

ブォンツ!!!!

天高く飛び上がる。

フルフルは匂いが、急に上へと消えた事に戸惑い、上を見上げる。

鉄刀を突きของ構えで、頭から突っ込んでくる。

それに気付いたフルフルは首を上げた。

カツ、ピリピリバリバリ!

電気ブレスを放とうとしている。

(電気ブレスは空中へは放てないはず……何故?)

エリカとアイは疑問を抱く。

(まさか……!?)

(放てる!?!?)

「ユミナ!!」

「ユミナちゃん! よけて!!」

ヴォン!

雷球が放たれる。

ありえない現象が……今、目の前で起きている。

雷球はまだ高いところに居るユミナへと一直線に向かった。

(負けない!!)

エリカはそう確信した。

(でも、何故!? さっきまでは鉄刀【楔】だった筈!!)

2段階も工程を吹っ飛ばして、いきなりの鬼斬刃である。

あまりの出来事にエリカは言葉を発せずに居た。

「……………」

ユミナが何かを言った。

「……………」

「……………」

聞き取れず、エリカとアイは顔を見合わせた。

「……」

「……………」

「勝った!?!」

「ユミナ(ちゃん)!!?」

声を上げた瞬間、グラツと体が倒れこんだ。

相当の体力を消耗しているようだった。

「……勝った」

そう呟いてユミナは眠ってしまった。

「……」

「……」

「……すう〜……」

その様子を見て2人は苦笑する。

「まあ、とにかく」

「帰りましょうか?」

「……えへへ」

背負っているユミナは幸せそうに眠っている。

そんなユミナを見てエリカたちは、細かい事は後でいいか。と思ひ、村へと帰った。

第二十一話「三人の連繫」(後書き)

更新が遅れる一方です…(> | < 。)
すみませ〜ん(悲)

第二十二話「交差する始まり」

第二十二話「交差する始まり」

!!!?

得体の知れない何かが響く。

何か邪悪で、嫌な感じものである。

「お兄様？ 今のは……？」

「……わからない。だが、危険なのは分かった」

「……どっ？」

「西だな」

どいつもこいつも西が好きだな……。

流行っているのか？

「……ユミナさん、大丈夫かな？」

「ユミナなら大丈夫だろ」

「……………急ぐ？」

「……………そうだな。　少し、遊びが過ぎたな」

色々な事をしてたので、全く進めてはいない。

しかし、まだユミナとは会うことができない。

結局急いだところで何も変わらないのである。

「まあ、まだ会えないからな……………ゆっくり急ぐか」

「……………うん」

やることは現在進行形で増えていく。

「行くか」

「……………うん」

そんなことは気にしてもらえないので、2人は進んでいく。

西へ。

チリン！

真っ白な世界に、透き通るような鈴の音が響く。

「……私を頼ってよ、マスター……」

真っ白な少女は悲しそうに呟く。

「あんな黒に染まったら引き返せないよ？」

「マスターのためにもう一度、封じてあげる」

少女の手は虚空を切る。

「……マスター。また、会いたいな……」

チリン！

鈴の音が世界に霞がかかり、静かに消えていった。

「 真白が！ 余計なことを！！」

暗闇の只中で、漆黒の少女が悪態をつく。

辺りの闇には負の感情が渦巻く。

怒り

憎しみ

悲しみ

数百、数千といった、様々な絶望が闇に満ちている。

「あいつなんかには渡さない!!」

「絶対に私のものにするんだから!!」

少女の叫びは闇に溶けていった。

フルフルとの激戦に勝利したユミナ達は、
3日かけてレエーユ村に戻ってきた。

その後、1日の休養をとった後に話し合いをするというところで、
1日しっかり休んだ。

そして、今日は全員で集まって話をしている。

「それは本当ですか？ ツバサさん」

「ええ、それは確かに……鬼斬刃よ」

「ええーっ!? 本当ですか!? どうしよっ!… どうしたらいいのかな?」

「落ち着いてよユミナちゃん……」

「無理無理！！　だって鬼斬刃だよ！？　落ち着けるほうが凄いや
」

「……とりあえず落ち着いて下さいユミナ。話が進みませんから」

「は、はい……」

「ふむ、落ち着いたかの。では、話を一度整理しよう」

1つ、エリカがやられた時にユミナが暴走して変な力を使った。

2つ、フルフルの有り得ない攻撃……つまり、フルフルの進化？

3つ、ユミナがフルフルの電激を斬った。

4つ、そして、その際に鉄刀【楔】から鬼斬刃まで2工程も無視して、

なぜか変わってしまったこと。

「ふむ、奇妙なことばかりじゃの……」

「はい村長。フルフルどころか最近のモンスターは、
少しばかり変わってきてますので……そこまで変ではありません」

「そうじゃの……」

「はい、寧ろ……」

みんなの視線がユミナに集まった。

「へ？ 私？」

「いやいやいや、ユミナちゃん意外いないよ……」

「そうじゃの、何せ問題の半分以上はユミナのことだからの」

「……言われてみれば……確かにそうですね」

頷くエリカ。

みんなも今それに気づいたのか、頻りに頷いている。

「私？ ……うん、よく分からないね」

「……ユミナに、何か力が眠って居るんじゃないかのう？」

「そうですね、その線もありますね……」

「私に力？」

「確かにあのときのユミナちゃんは、

……怖かったね……うん、普通じゃなかったね」

「アイ〜！ そこまでいわなくても……」

「まあ、何らかの力があることは考えて置きましょう」

「うむ！ 問題はどうするかじゃ」

「そうね、武器が変わったから、それに慣れるために敵を倒したらどうだい？」

ツバメさんは、そう提案した。

「……そろそろ鳥竜種の繁殖期じゃ、それを倒していくのはどうじゃ？」

「因みに何時までですか？」

「1ヶ月ほどじゃ」

「そうですね……わかりました！ やります！」

「私もやるよ！ 強くなりたいから」

アイがそういって、話に乗ってきた。

「村長……私もいいですか？」

「うむ、別によいが……何故じゃ？」

「腕がとても衰えていました……あの人の教えも忘れていました。だから！ もう一度自分を鍛えなおしたいのです！」

「……私はハンターに戻ります！」

「「「！！？」」」

村長以外の人は驚いた。

「援護するよ〜！ 突っ込んで！」

バンバンバン！！！！ ズガガガガガン！！！！

「いきます……斬！」

ズバン！！

「今の何！？」

「言霊です。言葉は強い力を持っているらしいです。

それに強い思いを乗せて、使えば心強い武器になります！

あの人にそう習いました……」

「あの人？」

ザシユ！！

「……私の、憧れ、いや目標の……人です」

バキッ！

「私のことを助けてくれた恩人でもあります」

ドシユ！！

「そうなの……」

バシユ！

「その人は強いのか？」

バンバンバン！！

「はい……といっても見たわけじゃないですけど、
村長は強いといってました」

ドガッ！！

「村長と知り合いですか？」

ズガガガガガン！！！！

「はい、村長と修行の旅の途中に村長が私をその人に合わせたいと
いって、

少しの間いろいろ教えてもらいました」

ドゴンッ！！

「そうなんだ。言霊って誰でも使えるのかな？」

ザシュ！ ブシュ！

「あの人は、素質が必要だといってました。
それと、強い心の在りようとかもです」

ブシャッ！！

「そっか、じゃあ仕方ないね」

ザアアアアーン！！

再び電撃が迸る

バチバチバチバチ

鬼残刃が放電している。

クウ……ガアア……

ドスランポスは瞬く間に絶命した。

（凄く……強い！ 私がこんな武器扱えるの？）

体は刀の行使で疲労していた。

（それに、凄く持っていていかれる……。体力つけなきゃね）

いつの間にか周りのランポスは全滅していた。

アイとエリカが倒したのである。

（今は……強くならなくちゃ！）

ユミナはそう決めて、2人の元へと戻った。

第二十二話「交差する始まり」(後書き)

ここから何かが始まる!! ……といいですねえ(笑)

これからがんばっていきますよー!!…

第二十三話「キイ・レディルト」

第二十三話「キイ・レディルト」

肉食竜の棲み処へと足を踏み入れる。

ザッ

先頭を歩く少女は「ユミナ・アリアス」

真っ白なフルフルシリーズの装備を身に纏っている。

そして、その背には鬼斬刃を背負っている。

ユミナの右後ろにいる少女の名は「アイ・フローズ」

硬質なザザミの甲殻で作られた、ザザミシリーズを身に纏っている。

アイはジェイドストームという、ガノトトスとその亜種から作られている、

ライトボウガンを肩に担いでる。

そして、その隣にいる少女は「エリカ」

メイドシリーズという特殊な装備をしており、武器は煌剣リオレウスとあって、

リオレウス亜種から作られたものである。

3人は無数にいるランポスの巢に、躊躇なく踏み込んでいった。

「準備はいい？ いつもどおりで行くよ！」

「はい！」

ユミナのその言葉で、動き始めた。

ランポスたちを蹂躪していく。

十数分ぐらいすると、その巢にいたランポスたちは全滅していた。

「うーん、終わった！ 帰ろっか！」

「うん！」

「かしこまりました！」

三人はその場を後にした。

レエーユ村。

「そろそろ次の段階に進んでも良いかと……」

「本当！？ エリカ！」

「はい。もう1ヶ月経ちましたし、慣れてきたので良いと思います」

「やったね〜ユミナちゃん！」

「そうだね！」

嬉しそうにみんなで笑う。

「それで、これからどうします？」

「う〜ん、……どうしよう」

「そうだね！ 火山に行くのはどうかな？」

「火山？」

「そうだよ〜、まだ行ったことないし、良質な鉱石が取れるから！」

「ふむ、そうですね…… 鉱石や素材は必要になりますし……」

「火山で経験をつんでおくのはプラスだね！」

アイの言葉に二人は賛成する。

「でも、この近くにはないよね？」

「ドンドルマに行きましょう」

「ドンドルマか。お金とかも稼げるねー！」

「うん、そうだね！しばらくドンドルマにいようか？」

「そうですね」

「いいですー！」

「じゃあ決まりね！準備をして早速行きましょう！」

「はいー！」

ドンドルマ。

「うわー、相変わらず広いし、人が多いね！」

「どこにいきますか？」

「酒場かな？クエストを見に行こう？」

「わかりました」

「アイー！行くよー！」

「うわーっ！ちょっと待ってよー！」

露天に見入っていたアイを呼び、酒場に向かった。

カラランツ！

「クエストボードは……あっちね」

三人でクエストボードの前に立った。

「何かいいのあるかな？」

「この、燃石炭の発掘はどうでしょう？」

「うーん、それよりこのイーオスの群れの討伐は？」

「討伐系でしたら……」

……

……

……

「ユミナちゃん」

「うーん、どれが良いかな……」

「ユミナちゃんっ」

「うーん、」

「ユミナちゃん!!」

「うわっ!? いきなりどうしたのさ? アイ……」

「えっとね、アレ! あの人……」

ユミナは指差された方を見ると、1人の少年がいた。

「? あの人は何?」

「……あの人、キイ君じゃない?」

沈黙が訪れる。

「……ええええーっ!!!? 本当!?!」

「たぶん、本当」

「どうしたんですか?」

「えっとね、エリカさん。私達の友達がいたの」

「そうなんですか。話しかけないのですか?」

「そうだね、話しかけてみよう」

3人でキイのもとへと向かった。

「? なんですか?」

話しかけると不思議そうに聞き返してくる。

「キイ・レディルト？」

「？ ……そうですが」

「私よ、ユミナ・アリアス、ユミナよ！」

「えええええー！！？ ユミナ！？ じゃあ、そっちは」

「アイだよ！ アイ・フローズ。久しぶりだね！ キイ君！」

「やっぱり！ 二人とも久しぶりだね！ ……そちらの人は？」

「初めまして。エリカ・リヴィアといいます」

「私たちの友達なのよ！」

「そうなんだ、よろしく！」

「こちらこそよろしく申し上げます」

自己紹介が終わったところで話題を変える。

「ところで、キイは今何してるの？」

「今？ 今は別に何もしてないよ」

「そうなんだ。じゃあさ、久しぶりに一緒に狩りしない？」

「いいの？」

「いいよね？」

「私は別に構いません」

「私もOKだよー！」

「だってさ？」

「うん！ わかったよ、よろしくね？」

「うん！ じゃあ準備してね火山に行くから」

「わかった」

「ユミナ、まだ行くやつは決まっています」

ユミナは不敵に笑う。

「いや、今決めた。私たちが行くのは」

みんなが注目する。

「岩竜バサルモスよ！」

シリシリシリと、ベースキャンプなのに気温が高い。

砂漠よりも暑い、火山である。

数千度の溶岩に囲まれた、灼熱地帯。

自然と生物をことごとく拒絶した世界。

この苛酷な環境で、生き残ったモンスターたちはどれも強い。

そして、豊富で良質な鉱石の産出地でもある。

「暑いわね……」

「『気にしたら負けだ！』」

「アイ……こんなに暑いのに、暑苦しい教官の真似なんて……ヤメテ！」

「えへへ〜！」

「まあ、いいわ。……とりあえず、これからの動きを確認するよ！」

「『はい！』」

「まずは、鉱石を集めようと思うわ」

「ピッケルの準備はできています」

「よし！ そしてそれが終わったら、鉱石をここにおいて、周囲の散策・障害となるモンスターの排除を行うわ！」

鉱石集めのついでに、少しだけ散策するけどね」

「わかりました」

「それが終わったら、細かい作戦を立てて討伐に行くよ!」

「OKだよ!」

要約すると

1、鉱石集め

2、散策・敵の排除

3、作戦会議・討伐

である。

「よし! じゃあ、いくわよ」

「はい!」

「いつでも!」

「いつくよ!」

四人は歩き出した。

第二十三話「キイ・レディルト」(後書き)

初めてのことばかりで、

ミスが増えるかもしれないが…

気にしないでね ^^

第二十四話「灼熱の火山」(前書き)

久しぶりに続けて？更新しました^^

第二十四話「灼熱の火山」

第二十四話「灼熱の火山」

カキンッ！

ピッケルを振る。

カキンッ！

カキンッ！

ガッ！ ボロボロ

マカライト鉱石が出てきた。

蒼く光り、鉄鉱石よりも良質な金属が採れる鉱石。

生成されてマカライト鋼になる。別名：燕雀石ともいわれている。

「やった！ マカライトゲット〜！」

少女、ユミナはうれしそうにポーチへと直す。

そして、再び採掘作業に戻る。

しばらくして粗方採り終わると、次へと進むため皆に声をかけた。

「みんな終わった？」

「終わりました」

エリカ

「うん、終わった」

キイ

「終わったよ、OKだよ！」

アイ

の順に返事が返ってきた。

「エリカ、何が採れた？」

「鉄鉱石にマカライト……ドラグライトが一つだけ。」

「えええー！？ 本当？ いいな、ドラグライト」

ドラグライト鉱石

マカライト鋼よりも良質な金属が精製できる鉱石。

別名：輝竜石と呼ばれていて、希少価値が高くここら辺ではあまり採れない。

「もっと奥に行けば採れますよ？」

「そうだね！ アイとキイは何が採れた？」

「私はね〜鉄鉱石、円盤石と石ころだけ……ハア」

残念そうにアイがため息をつく。

「あはは……元気出して、次があるから」

「そうだね〜……」

「僕は、マカライト少々と、後は鉄鉱石だけです」

「はあ〜！ 流石火山だね、鉱石がこんなにたくさん」

「ユミナ。次に行くのでは？」

「おっとと、そうだったね！ じゃあ次に行くよ!!」

「」「はい」「」

「……イーオスがいるね」

「イーオスですか……油断はできませんね」

エリカがそう注意を促す。

なぜならイーオスは、ランポス系の鳥竜種で一番の耐久力を持ち、毒を吐いてくるなどランポスとは強さが違う。

さらに、イーオスをまとめる存在……ドスイーオスになると、飛竜種並みの強さを持つぐらいになる。

「そうね、このメンバーで動くのは初めてだから、イーオスたちで動きを合わせておきましょう?」

「そうですね、それがいいと思います」

「異論はないよ」

「私はOKだよ!」

「じゃあ行くわよ! エリカは蹴散らして!」

キイは私のサポート! アイは皆の援護に回って!」

「「「はい!」」」

言い終わると、ユミナは抜刀していききに駆けた。

同じくエリカも駆ける。

キイは後ろから追いかける。

そしてアイは、弾の準備を終わらせる。

「ハア！」

ズババツ！

数頭のイーオスを浅く斬る。

「斬っ！！！」

ズガンツ！！

浅く斬られた内の2頭をしとめる。

「ふっ！」

ザシユ！ズバツ！

二人の後ろに回り込もうとした、イーオスを斬りつけて威嚇する。

「喰らえッ！！！」

バン！バン！バン！バン！

通常弾を的確に打ち込んで、体制や連携を崩していく。

流石に強いだけあって、イーオスたちは劣勢ながらも喰らいつつあった。

しかし、4人の連携でその機会を与えずに、殲滅した。

「ふう〜終わった。……暑いね」

暴れまわったので、クーラードリンクを飲んでいても汗が止まらない。

その前から汗は止まっていなかったが。

「さて、採掘しようか！」

それぞれが採掘ポイントに行き、採掘を始めた。

見る見るうちに鉱石が取れていく。

石ころ

円盤石

鉄鉱石

大地の結晶

マカライト鉱石

ドラグライト鉱石

「やった〜！ ドラグライト採れた！」

ユミナは声を上げて喜ぶ。

皆が採り終ると、次のポイントへと向かった。

そこは先ほどのエリアと同じく、溶岩が流れていて温度が高い。

「今度はガブラス、それにランゴスタあつ!?」

ユミナはランゴスタを視界に入れた瞬間いやな顔をする。

「倒しておきましょう、あれに邪魔されるのは厄介です」

「わかった。アイはランゴスタを! ……塵1つ残さずをお願いね

!!!

残りはガブラスを。いくよ!」

「了解!」

「わかっていきます」

「まかせて〜!」

ガウウツ!

ガブラスが飛び込んでくる。

それをかわして翼に一撃。

ガブラスの翼が千切れて、地に伏した所をエリカが一刀両断。

絶命する。

それを皮切りに、ガブラスたちが次々と襲い掛かってくる。

ガウ！ ガアウウ！！

ザンツ！ ズバツ！ ザシュ！！

ガアアウ！ ガウウツ！

ズシャツ！！ バキツ！

次々と撃墜していく。

バンバンバンバン！！！！

グシャ！ バラバラバラ…。

ユミナ達に襲い掛かるランゴスタたちを次々と排除していく。

「これで、最後！」

ズシャツ！！

最後の1頭を仕留めると、採掘を始め、次のエリアへと向かった。

「1111は、エリア6ね……」

地図を見ながらユミナは言う。

「ここって確か、稀にしか手に入らない塊があるんだよね？」

「はいそうです。大昔に使われていた技術の武器な筈です」

「他にも、紅蓮石とか採れるといいね〜！」

「じゃあ、早く掘ろうよ！」

キイの一言で採掘を開始した。

しばらくすると……。

「うわっ、紅蓮石！？ ラッキー！」

ユミナは紅蓮石を手に入れた。

エリカがピツケルを振るった。

パラパパーッ！

どこからともなく、ファンファールが鳴り響いた。

「何で！？ てか、どこから！？」

キイは必死に突っ込む。

「エリカ？ 何か取れたの？」

「なににな〜？」

バインドボイス
咆哮

4人の体が硬直する。

「くっ！」

「岩竜……バサルモス!!」

そこには、堅く身に守られた岩竜バサルモスの姿があった。

叫びだけが火山の洞窟内にこだまする。

グガガアアアアギヤアアアオオオー……ツ!!!

第二十四話「灼熱の火山」(後書き)

なんか、余計な説明が入ってる気がします…^^；
ないほうがいいんでしょうかね？

第二十五話「岩竜バサルモス」

第二十五話「岩竜バサルモス」

グガアアア！！

トットトットトット！

バサルモスはその巨体を活かし全身で突進してくる。

四人は散り散りに分かれて、回避した。

そして、バサルモスを囲むように陣を取った。

4人の一斉攻撃。

アイは顔から首にかけて、通常弾を打ち込む。

キイは後ろから足を斬りつける。

ユミナは右翼に斬りかかり、エリカは左翼に斬りかかった。

ガン！ ガン！ ガン！

キンツ！

ガキンツ！

ガキンツ！

そのすべての攻撃がはじかれて、ダメージを負わせることができなかった。

「少し厳しいかな？」

「うわっ！ 硬い！」

「ッ！？ 硬すぎでしょ……」

「……どうしましょうか」

四人は一旦、間合いを取った。

「うーん、アイは私たちの援護をしながら効果的な部位を探して！
キイは遊撃をお願い。エリカと私は腹部、もしくは脚部を集中狙いよ！」

「わかった！」

「了解！」

「かしこまりました」

「行くよ……！」

ユミナとエリカが腹下まで行く。

「はっ!!」

ユミナは腹を突く。

ガッ! ザッ……

「斬ッ!!」

エリカは足を薙ぎ払う。

ブンッ ガキンッ!

ほんの少し、敵の体とユミナ達の武器が欠けた。

バサルモスの注意がユミナとエリカに向く。

攻撃させないようにアイが弾を撃ち込む。

バンバンバン!!!

ガン! ガッ! ドッ! ガン!

当たった部位によって、音が違う。

(甲殻の隙間を狙って……後は、腹下かな?)

突然の攻撃にバサルモスはアイの方を向いた。

そこにキイが割って入った。

「たああーッ!」

キイは首を斬りつける。

カキン! ガッ!

しかし、武器ははじかれてしまう。

隙ができたキイに、バサルモスが尻尾を振り回した。

「うわっ!? 危な!」

思いっきり後ろに倒れこんで回避した。

尻尾が真上を通り過ぎていく。

安全になったところで急いで起き上がり、間合いを取った。

「ハアアー!」

「喰らえ!」

ユミナとエリカが斬りかかる。

ガキンッ!

ドガッ!

甲殻の一部を切り裂き、バサルモスはダメージを負う。

グガアアア

バサルモスは胸を思いつきり反らす。

「ユミナ！！ ガスです、離れて下さい！」

「わかった！！」

二人はガスの範囲外まで逃げた。

ガアアアアア！！

紫色の霧状の毒ガスが噴出される。

アイがその隙を逃さずに、水冷弾を撃ち込む。

バシャシャン！ バシャシャン！ バシャシャン！

ガスの噴出が収まり、毒ガスが薄まった。

そこにキイが斬りかかる。

速さを利用して斬り結ぶ。

ガン！ ザツ！ カキン！ ドガツ！

数発叩き込むと、その場を離脱した。

続いて、ユミナとエリカの二人が続く。

ガキンツッ！ ザシュ！

ドガ！ ズバン！！

甲殻が脆くなってきていて、刃が通るようになった。

グガアアアアーーーー！！！！！！

バインドボイス
咆哮

咄嗟に耳をふさぐ。

しかし、体が硬直する。

バサルモスの口から火炎液が漏れ出す。

怒り状態である。

長い咆哮の後、バインドボイスようやく体が動くようになった。

しかし、一瞬バサルモスの方が早かった。

体当たりのモーション。

「エリカ危ない！」

エリカは咄嗟に持っていた大剣でガードした。

ドゴオッ！！

ガキンッ！！！！

「くっ！？」

あまりの衝撃に吹き飛ばされる。

ガンッ！！

壁に激突して止まる。

「ッ！？ カハッ……」

ユミナとキイは、エリカが狙われないように攻撃を仕掛けた。

バサルモスは、そんな二人に対して尻尾を叩きつけた。

ドゴンッ！

二人はそれをかわして、斬りつける。

ガキンッ！

キインッ！

見事にはじかれる。

(さっきよりも硬い！ 怒り状態だからか！)

体当たりを仕掛けてきた。

前転で回避する。

一旦間合いを取り、バサルモスに向き直った。

ガアッ!!

「!?!?」

火炎液がユミナに向かって吐き出された。

咄嗟に横へと飛び込んだ。

ドゴォー……!!

自分がさっきまでいた場所に爆炎があがる。

(~~~~~!?!? 危なかった……)

「ユミナちゃん!? 大丈夫!?!」

バサルモスに集中砲火を浴びせながら、必死に尋ねてくる。

「うん……なんとかね」

バサルモスはアイの方を向き突進する。

アイは慌てることなく、ボウガンを背負い突進をよけた。

その隙に全員は集まった。

「深追いは止めてね？ 一撃離脱で行こう。」

アイは状況に応じてがんばってね。行くよ！！」

「……はい！」「」

それぞれが隙を突いて、強力な一撃を入れて離脱する。

その戦法でバサルモスをジワジワと追い詰めていった。

雷、水、氷が絶大な一撃を与える。

ユミナは一度離れて、アイの方を見て何か指示を出そうとしたその時。

バサルモスの方に違和感を感じた。

アイに向けて熱線のモーションをとったのである。

バサルモスは鎧竜グラビモスの幼体でほぼ熱線は失敗する。

だが、その時だけ違和感を感じた。

（あれは……、まさか ！？）

”熱線が出る”と感じてしまった。

アイのほうに急いで駆けつける。

バサルモスは熱線を吐いた。

「!?!?」

「アイーーツ!!」

飛びついて押し倒した。

二人はごろごろと転がっていく。

熱線はアイのいた場所を通り、焼き尽くし溶かしていく。

「はあはあはあっ! アイ、大丈夫?」

「ユミナちゃん……ありがとう」

二人は起き上がる。

「どうして、熱線が出るなんてわかったの?」

「わからない、何か違和感を感じたから……。アイが危ないと思っ
て……」

「そっか、ありがとう」

「うん!」

バサルモスに向きなおす。

「いくよー!!」

「うん!」

それから小一時間ほど、激戦は続いた。

そして、ようやくバサルモスは弱り始めた。

足を引きずり始めたのである。

「ハア! ハアツハアツ!! ようやく、弱ってきたね……」

「……そうだね、辛いよ……」

「……流石にキツイよ」

「……さて、どうしますか?」

「こつちも、あまり力が残ってないから……。一気に決めるよ! 皆で全力の一撃を叩き込む、それでお終い!」

「わかった」

「了解」

「わかりました」

アイが構える。

「私から、いつくよー!!」

集中砲火。

貫通弾、徹甲榴弾、拡散弾、水冷弾、氷結弾。

甲殻の隙間や弱点部位へと突き刺さる。

ズシャシャシャ！ バーン！ ドガアーーン！！ バシャシャシャ
ン！ シャリリン！

キイが駆け抜ける。

「次は僕ですね、凍れ！」

透き通る氷の剣が閃く。

キン！ キン！ キン！ シャキン！

バサルモスの体が凍り付いていく。

エリカが立ち塞がる。

「私の番です、斬り裂け！！」

全開まで溜めた、溜め切りを振るう。

ズシャアアアーーーーーン！！！！

高圧水流で甲殻を斬り裂く。

「勝った……ね」

ユミナのその呟きに、皆は勝利した喜びを表した。

剥ぎ取り終ると、皆で楽しくドンドルマへと帰っていった。

第二十五話「岩竜バサルモス」(後書き)

属性があると戦闘が格好良くなりますね^^
なんか華やかです(笑)

第二十六話「仲間・チーム結成」

第二十六話「仲間・チーム結成」

ドンドルマ。

バサルモスを倒して、ユミナたちは酒場まで戻ってきていた。

そして、酒場で祝宴を開いていた。

「かんぱい！」

「「「かんぱい！！！！」」」

皆でいっせいにグラスを打ち合わせる。

もちろんアルコールの類ではない。

テーブルの上には豪華に料理が並べられていた。

「こんなことするの初めてだね！」

「そういえば、そうだねー！」

「そうなの?」

「その通りです」

「へえ〜そうなんだ。僕も初めてだけどね」

「ふふ! そうだと思ったよ!」

テンションが変なユミナがキイの言葉に返す。

「それは、酷くない!?!」

それに対してつつこみを入れるキイ。

「楽しいね〜!」

「そうですね」

観戦するアイとエリカ。

「キイ、一人で狩りや^ッってるの?」

「そうですね」

「そっか〜、じゃあ一緒に狩りをしない?

仲間になって! この4人でチームとして狩りをしよう!」

「いいんですか!?!」

「もちろんだよ! 友達じゃない! ねえ! 皆?」

「OKですよ！ 大歓迎です」

「こちらこそ、よろしく願います」

「ほら！ だから、今日から私たちの仲間だよ！」

「ありがとう！ よろしくね」

「よろしく！ さて、キイが仲間に加わったところで、
歓迎としてもう一回乾杯しよう！」

「かんぱい！」

「」「かんぱい！」「」

夜遅くまで騒ぎあっていた。

次の日。

「これからどうします？」

朝から酒場に集まって、これからの話し合いをしていた。

「うん、そうですね……別行動はどう？」

伺うおつに聞いてくる。

静寂が訪れる。

……

……

…

「「「はああああー！ー！？」」「」

全員がはじかれたように声を上げる。

「うわっ！」

「「「うわっ！」じゃないです！ 何で別行動なんですか！」

普段から冷静なエリカが珍しく声を荒げている。

「そつだよー！！ 何で！？ せっかくチーム結成なのに！」

これまた珍しく、アイが声を上げている。

「そうですよ！ 昨日のはなんだったんですか！？」

キイは……特に珍しくもないか。

「みんな……怖いよ？」

「「「怖い、じゃなあー！ーい！ー！」「」

「……ちゃんと理由があるんだよ?」

恐る恐る言ってみる。

「あるなら最初から言ってください!」

「そっだよー! どんな理由があるの!」

「まったくです!」

「え〜とね、昨日狩りに行ってわかったけど、連携は申し分ない。だけど、個人がどうしてもまだ足りない。

だから……個別に行動して個人の強化を図るの!」

「具体的には?」

「武器防具の強化、実力の向上などね。みんな一緒では、効率が悪いからね」

この話を聞くと、みんなは納得したように頷く。

(ほっ。恐かった〜)

ユミナは内心安堵していた。

「期間はどれぐらいなの?」

「う〜ん、大体2週間弱かな?」

「どこで落ち合うの？」

「レエーユ村……って、キイは知らないか」

「いえ、多分、大丈夫」

「そっか、じゃあ大丈夫だね」

「つまり、個人強化で2週間後にレエーユ村に集まるんですね？」

「うん！ そんな感じ」

エリカに頷く。

「じゃあ、2週間後にレエーユ村で！ みんながんばってね！
絶対に死なないで、生きてまた会おうね！」

「わかりました。また2週間後」

「うう〜、またね、無茶したら駄目だよユミナちゃん！！」

「了解、それじゃまたね！」

それぞれが分かれて、個別に行動を開始する。

（またね）

ユミナは早足で去っていった。

「うむ、なかなか見つからないな」

「……お兄様、……探す気ある？」

「もちろんだ！」

とある樹海でカイトとシズクが歩いていった。

「探しにくいな……てか、ここ何処だっけ？」

「……樹海」

「何でこんなところに来たんだ？」

「……お兄様がこっちにきたの！」

「そうだっけ？ まあ……いいや」

「……よくない」

ガサガサ。

「うん？ ……困まれてるな」

「……」

「……半分だ。わかったか？」

「……………うん」

ギヤアアアア！ ギヤアアアア！！

大量のランポス、ゲネポス、イーオスに囲まれている。

「……………行くか」

カイトのその声と同時に、突っ込んで来た。

ギヤアアア！ ギヤアアアアー！

『蒼天……………蒼き剣、喰らい穿つ、双振りの剣』 「蒼天剣・双空！」

カイトは双振りの、透き通るような蒼い剣を取り出す。

『霊零……………死者の魂、狩り尽くし喰らう、王者の鎌』 「冥府の大鎌
ハデス
！」

シズクはシンプルで禍々しい、紅い大鎌を取り出す。

「任せるよ……………」

「……………わかつてる」

互いに跳びだす。

カイトは近くの集団に突っ込むと、剣を振るう。

ザシュ！ ズバツ！ ザンツ！ ドシュ！

ランポスたちが細切れにされていく。

草木は紅く染まる。

ズバン！ ザシュ！ ドシュ！ ズバツ！ ドスツ！

次々と死んでいく。

「…………『天剣…………双空！』」

カツ！ ザシュンツ！

全滅した。

一方、シズクは。

ズバンツ！！ ザシュツ！！ ドスツ！！

ランポスたちの首を次々と刈っていく。

冥府の大鎌はランポスたちの魂を貪り喰らう。^{ハデス}

「…………死になさい。『喰らえ、冥府の大鎌！』」^{ハデス}

シャラン！ キーーン！！！！

全滅した。

「終わったか？」

「……終わった」

「……ふむ、真打登場って奴だな。」

「……私が行く」

「別に構わない。……手加減はしろよ。」

「……お兄様よりは上手」

「……どうか。……0・001割未満に抑えさせてもらおうぞ?」

「……いいよ。そっこのほうが簡単」

もちろん、加減に力を割く必要がなくなるからである。

「……ほらよ、行って来い」

「……いつてきます」

カイトはシズクを撫でて、見送った。

グルルルウ!!! ギャアアアアアーン!!!!

黒狼鳥イヤンガルガである。

炎プレスが三方向に吐き出される。

そのうちの 하나가、カイトの方に飛んできた。

「……………」

手を払うように軽く振った。

ボウツ

何事も無い様に消え去った。

「ふむ、高みの見物と行くか」

強大な木の根に飛び乗って、座った。

「……………お前の相手は……………私」

大鎌を振るう。

ザシユ!

グワァ!!!

イヤンガルルガの注意がシズクへと向いた。

グガツ!!!

尻尾を叩きつけてくる。

「……………ふっ、たあ!」

かわして、反撃を叩き込む。

咄嗟に大鎌でガードした。

後ろに飛ばされた。

空中で体をひねり、見事に体勢を立て直し着地する。

トン！

一瞬でイヤンガルルガの背後を取った。

大鎌を振るう。

イヤンガルルガは、それにギリギリ気付き避けようとした。

ザクツ！

しかし、気付くのに遅すぎて尻尾が千切れ飛ぶ。

グギヤアアアアアッ！！！！

体制を崩し前に倒れこむ。

「……………逃がさない」

続いて、右翼を叩き斬る。

ザシュツ！！

翼の半ばから切断された。

さらに大鎌を叩きつける。

バキッ！

甲殻が碎け散る。

グガ……ガア……ギヤア……！！

弱りきつたイヤンガルルガに止めをさす。

「……ばいばい」

大鎌で首を薙ぐ。

ズバシユツ！！

ツ！！！！

イヤンガルルガの、静かな断末魔の叫びがあがった。

大鎌に付いた血を、振るって掃った。

「……お兄様、終わった」

「……ん？ 早かったな」

「……ちよつと本気でいった」

恥ずかしそうに呟く。

「そうか、よかったな……力を抑えていて」

「……むっ」

シズクは頬を膨らませる。

「……お兄様、……酷いです」

「ははは、ごめんって」

「……それだけ敵が強かっただけです」

「そうだな……」

笑いながらシズクを優しく撫でた。

「さて、次へ行くか」

「はい」

2人は仲良く並んで、歩き始めた。

第二十六話「仲間・チーム結成」(後書き)

カイトとシズクがユミナに会うのは個人編が、
終わってからになると思います…多分、はい。

多分、ですよ？(笑)

第二十七話 ㄱ エリカ編 1 ㄱ 「幻獣キリン」

第二十七話 ㄱ エリカ編 1 ㄱ 「幻獣キリン」

ゴオオオーーーーーッ!!!!

雪山の中腹あたりで吹雪が荒れ狂う。

「…………ふう、寒いですね」

視界が悪い中歩みを進める。

氷柱の前に立つ。

「……」

ポーチの中からピッケルを取り出し、採掘を始める。

カキンッ!

ゴロッ……

鉱石が地面に落ちる。

何度か繰り返すと、採れなくなった。

落ちた鉱石の中から、必要な鉱石だけを取ってポーチに直す。

氷結晶

大地の結晶

マカライト鉱石

この中で今回特に必要なのが、大地の結晶である。

何故かというところ、この間採れた”さびた塊”を強化するとき、大量の大地の結晶が必要になるからである。

採れた鉱石を見て、満足げに次へと進む。

頂上に着いた。

この頂上の一番上に採掘ポイントがある。

壁を上り詰める。

壁と同化した”古龍クシャルダオラ”の抜け殻にピッケルを振るう。

古龍クシャルダオラ

古龍種で絶大な強さを秘めていて、飛竜種などとは桁が違う敵である。

古龍ごとに固有の能力を持っており、クシャルダオラは風を操るといわれている。

他にも様々な古龍種がいるとされているが、個体数が少なく滅多に現れないため謎が多い。

しかし、一度現れると一頭で天災級の災害を起こす。

今回エリカは、この古龍種に分類される”幻獣キリン”を討伐に来了た。

その名の通り幻のように現れて、幻のように消えていく獣である。

疾風のように速く駆け回り、雷を操って敵を滅ぼす。

フルフルのように体内で雷を生成するのではなく、自然の雷を使って攻撃してくるのである。

厄介な敵である。

「ふう、採り終わりました。えいっ！」

崖から飛び降りた。

ひゅーーードスンッ！！

「着地成功です………」

ひゅっううー！！

空気の質が変わった。

吹雪が弱まり、前の方に影が見えた。

ザッ！ ザッ！ ザッ！

こちらに向かって歩いてくる。

ふと、その影は立ち止まった。

「……………」

冷や汗が流れる。

視界が晴れていく。

そこには

幻獣キリンが佇んでいた。

キリンは神の使い”神獣”とも呼ばれている。

絶対的威圧

神々しいオーラ

古龍種に相応しい力を秘めた姿

「……………流石、麒麟」

敵う気がしなかった……………が、倒さなければならない。

麒麟の角に用があったのだ。

（あの角で……………召雷剣【麒麟王】まで作る！）

微動だにしない麒麟の様子を窺う。

隙を見せてはいけない。

隙を見せた瞬間、待っているのは

死

（流石に、まだ早すぎましたか……………？）

静寂が流れ、その場を包み込む。

……………

……………

……………

……………

：

動かない。

動けない。

緊張で体が強張る。

その体をほぐそうと、心を落ち着けようとする。

(すう、はあく。よし、大丈夫です！)

相手の出方を窺う。

不意に、

！！

キリンが動いた。

「！！」

それと同時に、真横に転がった。

自分がいた場所に雷が落ちたのである。

！！

キリンが突進してくる。

咄嗟に武器を前に出してガードした。

ガツンッ！！

「ッ！？」

吹き飛ばされる。

ズザーーーーッ！！

なんとか着地した。

それと同時に落雷が襲い掛かろうとした。

「！！！？」

大剣を上空へと投げた。

ビシャアアアーーーーン！！！！

落雷が大剣へと直撃して、弾かれる。

クルクルクル　　ザスッ！

回転しながら地面に突き刺さった。

バチバチバチ

大剣が通電している。

(しばらくは……触れない)

そんなことを思いながら、キリンへと向き直った。

「!？」

そこには何もいなかった。

(いない！？……どこへいった！)

辺りを見回すが、見つからない。

ゾクッ!!

後ろから殺気を感じた。

「ッ!!」

慌ててその場を飛び退いた。

!

キリンがその鋭利な角で突き刺そうとしたのである。

大剣のところまで行き、地面から引き抜いた。

(良かった触れる。それにしても、危なかつたです……)

キリンから目を離さないように、一息ついた。

あまりに速すぎるのである。

(あの速さは……目では対応できませんね)

目の前のキリンの姿がぶれた。

(！？来る！)

全方位に全神経を集中させ、警戒する。

(……………左！！)

持っていた煌剣リオレウスで、左へと思いつきり薙ぎ払った。

！？

キリンは止まって、一撃を回避した。

少し驚いているような雰囲気を感じる。

(……………目、以外なら対応できます！ 消耗が激しいですけど)

踏み込んで叩ききる。

その一撃も横へとかわされた。

連撃を放つ！

「斬ッ！……！」

悉くかわされてしまう。

流れるように、

力に乗せて、

徐々に速く！

連撃のスピードが上がっていく。

エリカは迷うことなく、最初から全力で挑んでいる。

手を抜けば絶対に負けるから。

物凄い速さの剣戟がキリンを攻め立てる。

徐々に追いついていく。

ザッ！

大剣が掠った。

！???

キリンは驚いたようにかわし続ける。

（
「」ですー！」）

「斬ッ！ー！」

ザシュツー!!

ついにキリンを捉えた。

!!????

浅くだが、キリンが傷を負った。

(……はあ、はあ、はあっ！ 消耗が激しすぎる!)

「割に合いません……」

肩で息をしながら、エリカは呟く。

???????

キリンは何が起こったのか解らないように、微動だにしない。

(今がチャンスですけど……辛いです)

この時間を回復にまわすことにした。

???????

???????

??????!

!!!!!!

不意にキリンが何かに気付いた。

そして吼えた。

ツ！！！

キリンの周囲に雷が次々と落ちてくる。

(……………?)

威圧感が増した。

(!?)

キリンが自分は人間に追いつかれて、傷つけられたことを悟った。

そしてそのことに、激怒した。

キリンが光り輝く。

全身に雷を纏って放電している。

ツ！！！

天高く吼える。

「 本当に……早まりましたか」

第二十七話「エリカ編1」 「幻獣キリン」 (後書き)

キリンです！

龍じゃないのに古龍種、不思議だね (笑)

メチャクチャ強いですよ！

第二十八話　エリカ編2　「絶対的な雷炎」

第二十八話　エリカ編2　「絶対的な雷炎」

（速い！　速すぎる！！）

ザッ！　　ザッ！　　ザッ！！

縦横無尽にキリンが駆け巡る。

エリカはまったく敵の位置がつかめず、
大剣を振り回し、相手を近づけないようにしている。

（くっ！！　このままじゃ、体力が持ちません）

足元が光りだす。

（落雷！？）

急いで前方へ回避した。

ズドーーーーンッ！！！！

落雷は雪を燃やしている。

「どれだけの……威力なんですか!？」

周囲が光りだす。

(ここら辺一帯に落とすつもりですか!?)

その場から慌てて離れる。

カツ!! チュドーーーーンッ!!!!!!

ゴオオオーーーー!!!!!!

雷が雪に発火して、炎柱が舞い上がる。

「でたらめです……」

あたり一面に次々と落ちていく。

(攻撃する暇がありません!!)

辺りには落雷が蹂躞する。

本体は縦横無尽キリンに駆け回っている。

「打つ手なし、ですか」

それでもと、反撃のために必死に考え続ける。

ドゴオーーーーンッ!!!!!!

チユドオーーーーーン!!

ドガアーーーーーン!!!

(何か! 何かないのですか!?)

必死に考える。

(あの人なら、あの人ならこんなときどうする!

村長はこの状況をどう打開する!)

村長とその知り合いの人に置き換えて、状況を打開する方法を考える。

(言霊……は、特でない)

「!?!?!」

(手持ちのアイテムと周りの地形を利用する……)

「これしかないですね……」

手持ちのアイテムを確認していく。

回復薬

回復薬プレート

秘薬

ホットドリンク

応急薬

携帯砥石

携帯食料

砥石

地図

ペイントボール

小ダル爆弾

大ダル爆弾（何処にあるかって？ それは、秘密さ）

石ころ

鉄鉱石

大地の結晶

マカライト鉱石

氷結晶

投げナイフ（拾った！）

ネムリ草

薬草

雪山草

爆雷針（何故か持ってきていたのだよ……！！）

（これは　　）

辺りの地形を確認していく。

エリア6である。

「頂上から大分降りてきたのですか」

壁が多く、断崖絶壁が反対側にある。

（　　なかなかいけますね）

隙を見て、急いで投げナイフとネムリ草を調合する。

「できました！　眠り投げナイフ！」

（あとは足止めして、これを当てる……！）

眠り投げナイフを五本腰に差し、ポーチから爆雷針をとりだした。

「行きます……！」

ドゴゴオオオー……ンッ……!!

「きゃあああー……っ……!!」

静寂が訪れる。

ザッ!

「ぐう、くっ! カハッ……!!」

吐血する。

急いでポーチから秘薬を出して、飲んだ。

「ゴクッ!」

体の細胞が活性化して、体を治癒していく。

「……!! ……痛い、です。二度とやりません」

あらかた傷が治ると、キリンの様子を窺う。

(あれだけ派手にやりました……大ダメージを与えられて無いと割に合いませんね)

視界が澄んでいく。

影が立っていた。

「!!!?!」

体を派手に損傷したキリンが、辛うじて立っていた。

ッ

呻く様にこちらを向いている。

「あとは……肉弾戦、だけですな」

大剣に手をかけた。

ッ!!!

互いに正面からぶつかり合う。

「斬ッ!!!」

ザシュッ!!!

ッ!!!

ドシユッ!!!

「くっ!?! 破ッ!!!」

ドロロッ!!!

ッ!!!?!

ドガッ！！

「カハッ！？ 滅ッ！！！」

ズバンッ！！

ッ！？？

バキヤッ！！

互いに血を流す。

それでも一步も引くこともなく、ぶつかり合う。

その時、キリンが眩いほど光り輝いた。

「！！！？ まずっ

カッ！！！！ バリバリバリバリ！！！！！！！！

「！！！？

巨大な雷がエリカを襲う。

為す術もなく落雷を喰らう。

地面に倒れ伏す。

エリカはピクリとも動かない。

キリンは感じた。

死んだ、と

そして、その場を去ろうとエリカに背を向けた。

第二十八話 エリカ編 2 「絶対的な雷炎」 (後書き)

.....。

第二十九話 ㄱ エリカ編 ㄴ 「絶望と希望・過去のエリカ」

第二十九話 ㄱ エリカ編 ㄴ 「絶望と希望・過去のエリカ」

……暗い……

……真つ暗……

……何処までも暗く、何処までも深い……

それは正に……深淵。

私は何処に向かっているのだろうか？

私は何をすればいいのだろうか？

……わからない。

わからない！

わからない！！

わからない！！！！

私のすべきことは……！？

何だったのだろう……？

深い闇……遠い記憶の彼方に身を委ねた。

そう、今から十四年前。

私が全てを失い絶望へと堕ちた、あの雨の夜の日のできごと。

私の住んでいた村に、一匹の魔獣が襲い掛かってきた。

漆黒で仄かに紅く染まった体

禍々しく、全てを奪い去った角

無機質に冷たく光る、黄金の瞳

全てを拒絶する、硬質な鱗と甲殻

斬り裂き、穿つ爪

鞭のように撓り、全てを掃う尻尾

悪魔が私の村にやってきた。

その悪魔はまったくの目撃情報がない、新種のモンスターだったら

しい。

今でも消息が不明で、何一つ解ってはいない。

いや、唯一解っている事が……“倒せない”である。

私の村にいたハンターたちが、総出で討伐……いや、撃退しようとした。

しかし、それに敵わず全滅した。

ドンドルマの救援は間に合わず、村は壊滅した。

村には英雄級のハンターもいた。

だが、為す術もなくやられてしまった。

私は両親に部屋の奥に隠された。

そして両親は、悪魔を倒しに行こうとした。

しばらくして私は、居ても立ってもいられなくなり、ドアの隙間から外を覗いた。

!!!?

絶句した。

そこに映ったのは、無残にも殺されて貪り喰らわれている姿だった。

！！！！！？？？

声にならない絶叫を、力の限り叫び続けた。

悪魔が不意にこちらを向いた。

ビクッ！！

恐怖に座り込んだ。

自分も食われてしまう、殺されると。

しかし悪魔は、私を見るとニタアと邪悪に笑った気がした。

そして私を無視して、両親を見せ付けるように貪り喰らった。

食べつくすと、私のほうを見て笑い、去っていった。

私には何も解らなかった。

何故！？

どうして！？

おとーさん！！

おかーさん！！

何処！？

死んだの？

死んだ……

……死……

……いや

……いやっ！

嫌っ！！！！

私は世界を拒絶した。

目の前が真っ暗に染まり、倒れた。

暫くして目を覚ますとそこは、知らない場所だった。

ドンドルマ

その後で知った。

周りの大人たちは私に何があつたかを聞く。

……！？

私は必死に答えようとしたが、声が出なかった。

恐怖と絶望で、“声”を失ってしまったのである。

周りの大人たちは察して、私を手厚く面倒を見た。

数年後、私は何もすることなく無気力に過ごしていた。

生きるのがどうでもいい。

死ぬのもどうでもいい。

することも思いつことも無かった。

いや、考えていたことはあった。

悪魔アイツが憎い！

殺したい！

父さんと母さんの敵を討ちたい！

力が欲しい！

だが、何もできない。

そのことに涙を流した。

何時しか涙も枯れた。

両親が奪われた

感情を奪われた

声を奪われた

もう、失うものは無いのでは？

最後にこの命まで失おうかな？

そう思い始めていたところに、村長とであった。

村長は、強引に私を旅に連れて振り回した。

徐々に最低限生きる行動は身に付いた。

だが、それだけである。

以前と何も変わらない……絶望したままである。

そんな時、村長がある知り合いにあわせるといった。

その人は全身が漆黒でよくわからない人だった。

その人は何かを口ずさみ、指を鳴らした。

私は暖かい光に包まれた。

声を取り戻した。

何かを取り戻すことに、何かを感じた。

この人なら、私の失ったものを取り戻せるかもしれない。

そう思った。

私は、か細い声で力が欲しいといった。

その人はやさしくこういった。

“君はもう力を手に入れているんだよ？ ただ単に使い方を知らないだけさ。”

俺が少しだけ教えてあげるよ？ 残りは自分で探してみて”

そういった。

私はその言葉に、色あせた世界が少しだけ色付いて見えた。

“言霊”というものを教えたもらった。

そして、またいつか会ってとお願いした。

彼は頷くでもなく微笑んで、“がんばれよ”と言った。

私はそれから生まれ変わったように、修行に打ち込んだ。

村長に狩りを教えてもらった。

“言霊”をいっぱい練習した。

私は強くなった。

しかし、悪魔アイツは現れなかった。

まったく情報が無く、見つけることができなくなった。

そして、何時しか村長の村の酒場で給士として働いていた。

ハンターになったユミナにであった。

彼女には驚かされてばかりだ。

そして、自分のすべきことを思い出した。

そして、約束も思い出した。

“がんばれよ”

悪魔^{アイツ}をこの手で殺す。

それまでは決して死ねない。

死ぬわけにはいけない！

だから

血塗れで、ズタボロな体を無理やり起き上がらせる。

「待ちなさい！」

去っていくこうとする麒麟に、声をかける。

キリンは驚いたように目を見開いた。

「私は……死ぬわけ……には、行かないの!」

「……約束が……ある」

ユミナとあの人が浮かぶ。

「それに、……悪魔^{アイトン}……を、この手で……殺すまで……」

強く一步を踏み出す。

「貴方如きに負けるわけにもいかないのッ!……!」

決して折れない心と強さを持つて。

「だから……ここで死んで下さい」

笑顔でそう告げた。

久しぶりに出た笑顔である。

全力で踏み込んだ。

キリンは全く反応できない。

全力で煌剣リオレウスを振り下ろした。

「斬ッ!……!……!」

キリンが反撃しようと突っ込んでくる。

ッ！！！！！！！

ズバンッ！！！！！！ ドシユッ！！！！！！

互いに交差する。

「ぐっ……！？ ガッ！ ガハッ！！」

膝をつく……が、倒れないように煌剣リオレウスを支えにしている。

！？

……

バタンッ！

キリンが倒れる。

辺りは真っ赤に染まっていく。

満ち足りたような表情カオをして、絶命した。

「……私の、勝ち……の、よう……ですね」

流石にやばくなっていたので、応急処置だけして剥ぎ取りを始めた。

「……帰り……ますか……」

満面の笑顔でゆっくりと歩いていった。

第二十九話くエリカ編3く「絶望と希望・過去のエリカ」(後書き)

漆黒のアノ人…皆さんは誰かわかりますか？

そう、あの人です^^^

くエリカ編く終了です^^^；

次回は誰にしましょうか(笑)

第三十話 ㄱ 키編 1 ㄱ 双剣使い

第三十話 ㄱ 키編 1 ㄱ 双剣使い

「はっ！！ …… たあ！」

키가 기아노스たちを斬り裂く。

数匹を同時に相手して、敵を翻弄している。

いつも通り、이오스 시리즈の装備だが、武器が違った。

“인сек트 오더”

虫で作られた“双剣”である。

両手に握った剣を自在に操り、斬り刻んでいく。

殴打

薙ぎ

突き

払い

袈裟

逆袈裟

十文字

相手に反撃の暇を与えず、攻め立てる。

暫くしてギアノスは全滅した。

辺りの草木が真っ赤に染まる。

「ふう……終わった。しかし、だいぶ使えるようになってきたなあ」
使い始めたときと比べながら呟く。

「まあ、まだ鬼人化は上手く使えないけどね……。これからの修行
しだいかな」

そついつて気持ち切り替える。

「今回の目標は、雪獅子ドドブランゴ！」

新しい防具を作るためと、双剣の鍛錬のために討伐しに来たのである。

「さて、いこうかな」

雪山を登っていく。

ゴオオオオーツ!!!

「ええー!? まさかの吹雪!？」

中腹まで登って洞窟から一步外に出てみると、見事に猛吹雪であった。

「山の天気は不安定すぎだろ! くっ! 前が見えない!」

足元に気を配りながら、静かに歩く。

「進みづらい……」

ボゴツ! ボゴツ!

「うわっ!? な、何?」

地面からいきなりブランゴが飛び出してきた。

ブランゴが襲い掛かってくる。

「やるしかないのか!」

双剣を引き抜いた。

襲い掛かってくる1頭を迎え撃つ。

擦れ違い様に、一閃。

ザシユ!

そして、振り向き様にもう一閃。

ズバツ!

ブオオオ!?

呆気なく絶命する。

もう1頭が飛び込んでくる。

体をひねり、回転切り。

ズシャシャ!!

ブオオ!

とどめに二刀を突き刺す。

雪が真つ赤に染まる。

しかしそれは、吹雪によってかき消されていった。

「これで終わりか……?」

あたりを見回す。

ゴオオオオー……ッ！！！！

「何もみえねえ……。吹雪だよ、雪だよ！」

荒々しい銀世界が繰り広げられていた。

ドス！

「ん？」

ドス！ ドス！

「………何の音だ？」

ドス！ ドス！ ドス！

「………近づいてきてる？」

先ほどまでまったく見えなかった巨体が、目の前に現れた。

「へ？」

ブオオオオオー……！！

咆哮がこだまする。

「雪獅子………ドドブランゴー!?」

一気に頭が覚醒する。

「くそっ！ 何でこんなに近づくまで気付かなかった！」
慌てて後退しようとする。

ドドブランゴの丸太のような腕が、襲い掛かる。

ドゴンッ！

「うわっ！」

雪が雪崩のように降り注ぐ。

「ぐっ……」

雪で体制を崩す。

正面からドドブランゴが体当たりをかけてきた。

もろに喰らう。

さらに、腕を振り回す。

ドゴンッ！

キイは横からの衝撃に吹っ飛ばされる。

「ぐう！？

くっ！

ガッ！」

体が防御の姿勢をとっていたので、大ダメージにはならなかった。
痛む体で、双剣を抜き放つ。

振り下ろされた左腕を、剣を交叉して受け止める。

ドガッ!!

あまりの衝撃に腕がしびれ、剣を落としそうになった。

ドドブランゴは右腕を叩きつける。

ドゴンッ!

「ガッ!? ぐっ! うっ!」

派手に転がる。

防戦一方である。

(ぐう、何とか攻撃しないと!)

ブオオオオオオオオオオ!!!

ドドブランゴは吼えた。

バンッ! バンッ! バンッ!

無数のブランゴたちが現れる。

(な、なんて数だ!!　これはやばい!)

ドドブランゴは興味をなくしたように背を向けた。

(?.....なんだ、なにをしているんだ?)

そして、後はブランゴに任せるように去っていった。

「何故!?　どうしてお前は去る!!」

その背はまるで“弱者に興味はない”とでも語っているようだった。

「ぐっ!　待ちやがれ!!」

慌てて、追いかけてしようとした。

ブランゴが道をふさぐ。

「くそっ!　邪魔だ退け!」

ブランゴを斬り捨てる。

しかし、あまりの数に減ることはなかった。

「仕方ない。お前から片付けてやる!」

ブランゴの群れへと突っ込んだ。

数十、数百といったブランゴの群れ。

たった1人でそれらを相手にしなければならぬ。

アイテムは有限。

体力も有限。

しかし、敵は無限のように現れる。

敵を殺す

殺す殺す殺す

殺す殺す殺す殺す殺す殺す

吹雪は弱まっていく。

視界は良くなっていくが、出血で目が霞む。

体力が衰え、速さが落ちる。

徐々に相手の攻撃を喰らっていく。

それでも、相手を斬る。

体中が血で染まる。

あたり一面真っ赤である。

どれだけ殺しても敵は減らない。

(……何十頭倒したかな？ もう……わからないや)

不意に視界の端に黒い影が見えた。

(何だ？ ……新手か?)

悲鳴を上げる体を無理やり動かし、ブランゴの攻撃をかわす。

そして、斬り殺していく。

(まあ、なんでもいいや。流石に勝てそうにないから……)

ユミナの言葉を思い出した。

「……死ぬな、か」

溜息がこぼれる。

「これは、死ぬわけには行かなくなったな」

体を奮い立たせて、敵に挑む。

「怒らせたら怖いからな……」

少し離れたところに居るブランゴが、氷塊を投げようとするのが見えた。

「っ！ たあ！！」

左手の剣を投げつけた。

グサツ！！

その一撃で絶命する。

剣は回収できない。

「はあ、盾なしかよ」

キイはそれを片手剣のように扱う。

暫く戦い続けた。

不意に限界が来そうになった。

「ぐっ！！」

何とか堪えようとしたその時。

襟元を掴まれた。

「！？」

「……大丈夫か？」

振り返ると、全身が漆黒の少年が現れた。

さっき視界の端に移ったのは、この少年である。

「……ここで何をしている？」

見たところ防具をつけておらず、武器すら持っていなかった。

「助けてやろうか？」

「え！？」

「お前、ドドブランゴと戦っていたのだろう？」

「そう……だけど」

「奴なら頂上に居る。ここは任せて奴と戦っていい」

「えっでも、君は」

「気にするな。早く行け」

少年は指差す。

つまり少年が指差したところが一番、ブランゴが少ないところなんだろう。

キイは葛藤の末。

「……わかった。君も死なないでね」

「……愚問だな」

キイは少年の指差した方向に突っ込んだ。

投げつけた剣を拾う。

ブランゴを斬り殺し、突破する。

そして、キイの姿は見えなくなった。

ブランゴに囲まれる漆黒の少年。

「ふむ、貴様らの相手はこの俺だ！」

少年　カイトは刀を取り出した。

一閃。

ただそれだけで、十数頭が一気に絶命した。

「……弱いな」

ブランゴたちは、その光景に怯んだ。

「……来ないのか？」

ブランゴたちは動かない。

「来ないなら、こっちから行くぞ？」

あまりの殺気に、ブランゴたちは弾かれたように襲い掛かってきた。

カイトは、漆黒の刀を振るう。

襲い掛かってきた奴から順に、斬り捨てられる。

虚空を斬る様なその黒刀は、とても美しかった。

全方位からの一斉攻撃を、一步も動かずに相手をする。

「……終わりか」

キイがあれほど苦戦していたのを、ものの数分で終わらせた。

「帰るか。またシズクに怒られる……」

その跡には、数百の死体が積み重なっている。

「片付けておくか」

死体の山を軽く一瞥して呟く。

「」

カイトが何か呟くと、そこは元通りになっていた。

ブランゴの死体は一つも見つからない。

「……帰るか」

カイトは去って行く。

第三十話「キイ編1」 「双剣使い」 (後書き)

またもやカイト登場です！

第三十一話「キイ編2」 「激突！雪辱のドドブランゴ」

第三十一話「キイ編2」 「激突！雪辱のドドブランゴ」

ぼろぼろの体を無理矢理走らせる。

「ぐっ、はあはあ、くっ！」

さっきの少年はどうなったのだろうか。

無事なのだろうか。

そんな考えばかりがよぎる。

(……今は目の前のことだけを考えないと！)

急いで倒して助けに行く、そう心に決めた。

雪道を駆け上る。

ようやく頂上にたどり着いた。

そこにはドドブランゴがいた。

「はあはあ、待たせたな！」

剣を構える。

ドドブランゴは意外そうにこちらを向いた。

“少しはやるじゃないか”と、目が語っていた。

完璧に格下に見られている。

「ふざけるなよ、今はお前に構っている暇はない。

一気に入かせてもらう!!」

全力で一歩、踏み込む。

強力な突きを放つ。

左にかわされてしまう。

それを追いかけるように体を捻り、斬り裂く。

ザシユ!

続けて、連撃を叩き込む。

斬る

殴打

薙ぎ

ドドブランゴは激怒した。

両腕を振り回す。

キイは腕を掻い潜り、剣を突き刺す。

ザク！

「!？」

ドドブランゴの筋肉に挟まれ、剣が抜けなくなった。

ドドブランゴは体を捻り、腕を叩き込む。

ドガッ！

「ぐっ！」

吹き飛ばされる。

武器は右手の剣だけである。

(もう一本を何とか抜かなければ……)

わき腹に刺さったそれは、落ちる気配を見せない。

ドドブランゴと向き合う。

キイは……駆けた！

素早さで相手を翻弄しようとする。

ドドブランゴは暴れまわり近づけないようにする。

振り回される腕を掻い潜り、擦れ違い様に斬り裂く。

ブレスを吐く。

ゴオオオー！！

左腕に掠ると、左腕が凍り動かなくなった。

反撃に移ろうとすると、腕を雪の中に突っ込んだ。

そして思いっきり振り抜いた。

「うわっ！！」

慌てて後方に避けた。

影が差す。

「！！？」

雪の塊が降ってきたのである。

「っ！ はあっ！！」

右手を全力で振る。

ズシャン！

雪の塊を一刀両断する。

「ぐっ！！」

腕に激痛が奔る。

ブオオオオー！！

「！？」

いつの間にかドドブランゴが背後に居た。

振り向き様に斬りつけたのと、ドドブランゴが腕を振るったのは同時だった。

ガキンツ！！

剣と腕がぶつかる。

負けたのはキイの方だった。

吹き飛ばされてしまう。

何とか着地すると、全力で前へと走った。

ドドブランゴも突っ込んで来る。

（見切った！！）

ヒラリと擦れ違い、脇に刺さっていた剣を掴んだ。

そして、自分の力、相手の勢い全てを利用して

引き裂いた。

グオオオオ！！！！？

ドドブランゴは倒れこむ。

（今ならいけるか！？ ……成功しろ！）

「鬼人化！！」

ゴウツ！！

力が湧いてくる。

一瞬でドドブランゴの元まで駆けた。

「喰らえっ！！」

全力で斬り裂き、斬り刻む。

「これで、………終わりだああーっ！！！！」

乱舞

無数の剣撃がドドブランゴを斬る。

ザシュ！ ザシュ！ ザシュ！ ザシュ！ ザシュ！ ザシュ！

グウオオオオオー……ッ！！！！？

断末魔の叫びを上げ、絶命した。

「か、勝ったあゝ……」

疲労でその場に座り込んだ。

暫く休むと立ち上がり、素材を剥ぎ取った。

(！？ こんなことしてる場合じゃない！！ あの人が……！！)

キイは走った。

急いで戻ってくるとそこには、何もなかった。

「え？ あれ……何も無い。僕が倒した死体は、何処？」

そこには綺麗に積もった雪しかなかった。

ブランゴの死体は一つもない。

もちろん、少年など影も形もなかった。

「…………あの人は無事なのだろうか」

キイは疑問を抱えたまま、山を降りた。

そのころ、カイトはシズクに怒られていた。

「…………お兄様!!」

「やあ！ シズク」

「…………『やあ！ シズク』じゃない。何処行ってたの!」

「えっと、ちよっと雪山まで…………」

「…………なんで？」

「うん、人助け？」

「……………」

「…………どうした？」

「…………いえ、人助け…………珍しい、と」

「そつだな、俺が人助けなんて…………変わってしまったな」

「……ふふ、そうだね。でもそれは、良いこと！」

「……そうかな？」

「……そう」

「そっか……」

「……て、誤魔化さない！」

「誤魔化してはないけど……」

「……むう。……心配した」

「うめん」

「……いいよ」

「ありがとな」

「……うん」

「じゃあ、次に行くか」

「……うん！」

2人は目指す、目的場所へ。

第三十一話「キイ編2」 「激突！雪辱のドドドランゴ」 (後書き)

キイ編は終了！

次回はアイ編だよ^^お楽しみに！

第三十二話「アイ編1」不思議な出会い

第三十二話「アイ編1」不思議な出会い

「……シズク」

「……何？」

「頼みがあるんだが……」

「……うん」

「今から言う所から、ある物をとってきて欲しい」

「……何処？」

「火山、雪山、溪谷だ」

「……雪山……さっき居た」

シズクは不満げに抗議する。

「すまん、……今思い出した」

「……もう」

「それでだな、火山で煉獄。雪山で氷鈴。溪谷で蘭瑛だ」

「……わかった」

「俺は別の用事で動くから、別行動な」

「……わかってる」

少し寂しそうに返す。

「あと、力抑えとくぞぞ？」

「……うん……いいよ」

「じゃあ、0.0001割未満だ。もういいぞ」

「……うん」

「がんばれよ！……あと、そろそろ会えるぞ」

「……本当！？」

シズクは心底嬉しそうに聞いてくる。

「ああ！だから頑張ってきて来い！」

「……うん、がんばるよ。……本気出す」

とても張り切るシズクを、カイトは微笑ましげに見やる。

「……ほどほどにな」

2人は別行動を開始した。

「何をしようかな」

アイはクエストボードを覗き込みながら考える。

「うーん、防具を新調したいな」

身に着けているザザミ装備を見る。

「何がいいのかな？」

次々とクエストを見ていく。

どれも、あまりピンとこない。

「ガノトトス……は、なんかやだな」

「うーん、……！」

1枚の依頼書に目が留まる。

「これだ！……！」

それをボードから剥がすと、カウンターにだした。

「これ、お願いします！」

「畏まりました！ 内容を確認します。場所は森丘。期限は7日。目標は」

「イヤンガルルガになります」

アイのクエストが始まった。

竜車内にて。

中にはアイ以外の人が1人居た。

その姿は全身漆黒に包まれていた。

「あれ？ 君は誰？」

「うん？ 俺か？ 俺の名はカイト」

「カイト君？ 何でここに居るの？」

「ああ、俺を連れて行ってくれ！」

「どこに？」

「お前が行くクエストに」

「へえ〜そうなんだ〜……って、えええええ!!?」

一瞬、納得しかけてしまった。

「うん？」

「無理だよ！ 私一人で受注しちゃったし、それにカイト君武器も防具もつけてないから！」

「気にするな。ギルドマスターから許可は取ってある。それに、俺はほぼ戦わないからな……」

「そっか〜それなら……って、本格的に何しに行くの!?!?」

「自分の身は自分で守る。足手纏いにはならないから、いいだろ?」

「う〜ん、それならべつにいいよ」

アイは微笑む。

「じゃあ、よろしくね！ カイト君」

「こちらこそよろしく。アイ」

「あれ？ 名前言っただっけ？」

「ううん。でも知ってるよ」

「そうなんだ」

（なんか変わった人だな）

（ふむ、天然な奴だな……）

互いが互い、それぞれの感想を持ち進んでいく。

森丘

アイたちが森丘に着く頃には、日は沈みあたりは暗かった。

「夜で戦うのは久しぶりだな」

「そうなのか？」

「うん！ 卒業試験以来なんだ」

そういつて、卒業試験のことを話し始めた。

「へえ、大変だったんだな」

「うん！ でねでね」

アイはカイトと、来るまでに沢山の話をした。

そして互いに打ち解けて、仲良くなった。

「うん？ 話してる場合じゃないのでは？」

「わっ！ そうだったね……。カイト君と話していると時間を忘れそうになるよ〜！」

照れたようにアイがはにかむ。

「って、俺のせいだよ……」

苦笑するカイト。

先へと進む二人。

エリア3にまで進んだ。

「うわ〜綺麗な月……」

大きな満月を見て感動するアイ。

「……そうだな」

木に登って、枝に座っているカイトが相槌を打つ。

「月は……いつ見ても綺麗だな。

……人の心もこれぐらい綺麗なら、もう少し好きになれるんだがな」

カイトはつい愚痴ってしまう。

「そんな人ばかりじゃないよ！ ……ちゃんと綺麗な心の人も居るよ！」

それを聞いたアイは、悲しそうに言い返す。

「それも、……そうだな」

カイトは、ユミナ、シズク、エリカ、そして目の前に居る少女アイ、のことを思い浮かべながら返す。

「って、何で登ってるの!？」

「なんでって……眺めがいいから？ アイも登る？」

「うん！ ……って、どうやって？」

カイトは飛び降りる。

そしてアイを抱える お姫様抱っこで。

「ふわ!? な、な、なに？」

そして、木の上まで飛び乗った。

「す、凄いね……」

「ほら、よく見てみる」

アイは視線を移す。

「うわぁ……凄く、綺麗」

「だろ？ 偶には視点を変えてみるべきだな」

そういつてカイトは笑う。

「そうだね！」

アイも笑いながら返す。

「ん、敵さんのお出ました」

「え！？ イヤンガルルガ？」

「いや、ランポスだ」

「そう、えいつ！」

アイは飛び降りて、ボウガンを構える。

ランポスは5頭。

小型モンスター殲滅のために持ってきた、LV1散弾をセットする。

「喰らえ！」

ズガガガン！！！！

ギャア！！？

敵を散弾が引き裂く。

ズガガガガン！！！！

撃ち尽くすとリロードする。

ガコンツ！

ズガガガガン！！！！

ズガガガガン！！！！

前方に居たランポスたちを殲滅する。

「ふう、……終わった」

そう安堵しかけた。

耳元でカイトの声がした。

「……油断大敵だな」

ギヤアア！！

いつの間にかアイの背後に回り込んだ居たランポスが、叫び声をあげる。

慌てて振り返り、通常弾に変えて、撃つ。

バンバンバン!!!

ギャアアア!!!?

ランポスは絶命する。

「
ありがとう!」

隣に居たカイトにお礼を言う。

「いやいや、俺は何もしてないよ」

(そういえば、カイト君はいつの間に隣に……?)

「ん? どうした」

「いや、なんでもないよ!」

「そっか、これからどうするんだ?」

「そうだね……何処に居るかな?」

「そうだな……エリア10なんて、どうだ?」

「うん、いいね! じゃあ、いこっか」

「
ああ」

二人は暗い森の中へと、足を踏み込んで行く。

第三十二話「アイ編1」 「不思議な出会い」 (後書き)

またもやカイト登場！

ユミナと再開する日も近い！？…のか？ (笑)

時系列的には問題ないです…はい。

えっ？何の話かって？

読んでる人はわかります

多分^^^ ;

第三十三話「アイ編2」 「真夜中の晚餐」

第三十三話「アイ編2」 「真夜中の晚餐」

暗い森の中、二人は月明かりに照らされて進む。

その姿はまるで、逢引きをしている様に仲睦まじかった。

実際は

「……サボテンの花！」

「ナルガクルガ」

「うーん、ガノトトス！」

「睡眠袋」

「えーと、ろ、ろ……うわーっ！！ ないよー！！」

“しりとり”をしていた。

カイトが“しりとり”について話すと、アイが興味を持った。

そして「実際にしてみよう」となり、現在に至る。

「俺の勝ちだな」

「また負けたよ……」

「てか、こんな事してていいのかよ……」

「うん？ ……わっ！ 全然よくないね」

「よくないのかよ！」

「うん。真面目に探そっか」

「そうしよう」

「でも！ 終わったら、またやろうね！」

「はいはい」

カイトがそう返すと、アイは嬉しそうに笑った。

そして、瞬時に敵を探すのに集中した。

……

……

…

辺りに静寂が満ちる。

アイはじっと、虚空を見つめる。

……。

不意に風が動く。

「！ ……来た？」

「 ……そのようだな」

エリアの中心に黒狼鳥が堂々と、降り立つ。

グルルルウ ……！

敵はまだこちらには気付いていないようだ。

（カイト君はどうするの？）

（俺か？ 俺は ……見物させてもらうよ）

（そう ……小型のモンスターが来ても、守ってあげられないかもしれないよ？）

（ん、構わない）

（ ……わかった！ 見ててね！ がんばってくるよー！ ）

（おっ。がんばれー！ ）

アイは話を終わると、ボウガンを構えて茂みに隠れながら向かった。

(よし、ここからなら……)

限界ギリギリまで近づき、茂みから狙つ。

(撃つたら次の茂みに!)

バンバンバン!!!

L V 2貫通弾を撃つ。

撃ち終わると、別の茂みへと駆け込んでリロードした。

グウアアア!!!?

突然の奇襲にイヤンガルルガは驚き叫ぶ。

撃たれたほうを見るが、そこには何も居ない。

グウア?

バンバンバン!!!

再度アイは撃つ。

そして、先ほどと同じことをする。

グウルルルル!!!

イヤンガルルガは警戒を増すが、アイに気付けない。

(ほう、暗闇にまぎれての連続奇襲か……なかなかやるな！)

見物していたカイトが、そんな感想を抱く。

バンバンバン!!!

グウアアアアー!?!?

三度目の奇襲で、イヤンガルルガは怯む。

その隙に茂みに隠れる。

そして、リロードしようとした。

ポウオオオオオーンッ!!!!

イヤンガルルガのバインドボイスがアイを襲い、
アイがリロードしようとした弾を地面に落とした。

ガチャン!

グルウ!!

そしてイヤンガルルガは、その音を聞き分けて場所を突き止めた。

グワアアアアアー!!!!!!

「喰らえ！」

バリバリバリ！ バチバチバチ！

ガコンツ！

バリバリバリ！ バチバチバチ！

ガコンツ！

閃光玉の効果が切れるまで、撃って撃って撃ちまくる。

閃光玉の効果が切れると、次の閃光玉を投げる。

カツ！ ピカアーーーーー！！！！

バリバリバリ！ バチバチバチ！

これを閃光玉が尽きるまで繰り返した。

最後の閃光玉の効果が切れる前に、円盤状の金属板を地面に置いた。

そして、それを思いっきり踏む！

ガン バチイ！！

金属板の周り、半径1m位に閃光が奔る。

イヤンガルルガの視力が回復して、突進してくる。

攻撃を途中でやめ、一歩下がり一気に踏み込んでくる。

(フェイント!?)

イヤンガルルガは空中で一回転して、尻尾でサマーソルトを繰り出してきた。

「くっ!?!」

アイはまだ地面に着地してなく、避けることができない。

尻尾が迫るり、アイは目を閉じた。

(ごめん)

ヴウオンツ!!!

尻尾が大気を凧ぐ。

しかし、それがアイに当たる事はなかった。

(……?)

いつまで経っても衝撃は来ない。

ふと目を開けてみると。

カイトの顔が近かった。

「うわあっ！！？ カイト君！？」

「油断大敵だな」

見ると、カイトにまたもやお姫様抱っこされていた。

「え、うん……カイト君が助けてくれたの？」

ランポスたちはどうなったの？」

「そうだ。危なかったからな、危機一髪だ！

ランポスならそこにまだ居るぞ？」

ランポスたちは急に獲物が消えたのに焦った様に、騒ぎあっている。

「……ありがとう。もう下ろして？」

「おう、ほらよ」

アイを下ろして立ち上がらせる。

「イヤンガルルガは！？」

「ほら、あそこ」

イヤンガルルガは大きく翼を広げていた。

そして、飛び去っていった。

「……逃げられた」

「逃げられたな」

「何処に行ったんだろう……?」

「そんなことよりも、まずは入り口を塞ぐあれを排除すべきじゃないか?」

そこには、ランポスたちが群がっていた。

「……1頭も倒してないの?」

「まあな、非戦闘員だからな。ハンターじゃないし」

「ハンターじゃないの!? ほんとに……何しに来たのさ?」

アイは驚愕しながらも、凄いと感じていた。

今までの時間、ランポスに傷を与えずにこちららも傷を受けずに避け続ける。

只者ではない、業だった。

「……カイト君は何者?」

「……“漆黒の業火”」

「……しっこくの……?」

「とりあえず、そう言っておくよ」

カイトは微笑んだ。

詳しくは教えてくれないことをアイは悟った。

「そっか、よくわからないけど……わかったよ」

「そっか……」

「カイト君はカイト君だもんね！」

アイはよくわからないことを言った。

「……ぷっ。くくくっ、はははははははは……」

カイトは思いっきり笑った。

「ええー！？ 何で笑うの〜！」

「くくく、お前は変な奴、くくく、だと思ってな」

尚もカイトは笑い続ける。

「ひびいよ〜！」

「くくく、すまん」

「誠意を感じない！」

「悪かったって……そんなことよりも追いかけないのか？」

「ああ！ 話しそらした！ って、そうだこんなことしてる場合じやなかった！

またカイト君のせいだよー！」

「俺のせいにするなよ……」

「もう、ほら行くよー！」

「はいはい」

「ハイは一回！」

そういつてアイはランポスの殲滅を始めた。

（ふふふ、面白い奴だな。流石ユミナの親友と言ったところだな）

カイトはそう思いながら、アイがランポスを倒すのを待った。

第三十三話「アイ編2」 「真夜中の晩餐」 (後書き)

次回決着！…だと思つよ。

今回カイトは戦いませんから…。

第三十四話「アイ編3」 「黒狼鳥の最後」

第三十四話「アイ編3」 「黒狼鳥の最後」

エリア4

そこにはイヤンガルルガとアイ、カイトが対峙していた。

正確にはイヤンガルルガとアイである。

カイトは少し高いところに登って見物している。

両者が動き出す。

イヤンガルルガは突進をする。

アイはそれに合わせて回避し、弾を撃つ。

動き続け、動きながらもリロードして撃ち続ける。

夜中に輝く月の下で、両者は激しく争い続ける。

「こんなに綺麗な満月なのに争うなんて……」

カイトは態とらしく意地悪に言う。

「好き好んで、こんなときに戦ってるわけじゃないよー!」

「そうなのか?」

意地悪く笑う。

「そうなの! うわーん、カイト君が意地悪だよー!」

そう言いながらも懸命に動き、敵と互角に渡り合う。

「ほら、ちゃんと前を見ろって」

「……カイト君が話を振ってきたのに」

恨みがましくブツブツと文句を言う。

攻撃の中でイヤンガルガガが怯む。

「!?!」

その隙を逃さずに、円筒状の物を地面に差し込む。

奥まで差し込むと、思いっきり踏む!

ガッ! シュルルルルッ!?!

地面が柔らかくなり、ネットが張り巡った。

しかし、まだ暴れまわる。

バリイバリバリイッ！！

ネットが破れ、イヤンガルルガが飛び出た。

体はポロポロでも、いまだに闘気は衰えない。

目を怒らせ、口から火炎液が漏れ出す。

怒り状態でさらに暴れまわる。

「くっ！ まだこんなに動けるの〜！？」

その猛攻を必死に避け続ける。

「どうにかして動きを鈍らせなきゃ……このままじゃ、危ない！」

そして、一つ策を思いついた。

手元に残っている水冷弾を撃つ。

バシャシャシャン！

隙を突いて、全身に撃ちつくす。

撃ち終わると、氷結弾に変えて撃つ。

キキキキンッ！

イヤンガルルガの血と水に濡れた部分が、少しずつ凍っていく。

次々と撃っていく。

キキキキンツ！

体中が凍り、動きが鈍くなった。

「よし！ うまくいった！」

弾を変えてひたすらに打ち続ける。

もう後は一方的な戦いだった。

満足に動くことのできないイヤンガルルガを、的確に撃ち攻めるアイ。

しかし、イヤンガルルガは最後まで諦めることなく抗い続ける。

グルルルルー……！！

アイはその姿を見て、悲しくなってきた。

「なんで、なんでまだ動くの！？ 動かなければ楽になれるのに！」

それでも引き金を引いて撃ち続ける。

イヤンガルルガは一步、また一步と歩く。

「そこまでして戦う理由は何なの！？」

返って来ないと知りつつも問いかけるアイ。

また一步と歩みを進めるイヤンガルルガ。

そして、ついに目の前まで来た。

アイを見つめるイヤンガルルガ。

それを見返す、アイ。

沈黙が流れる。

「……………なんで？」

グルウウー……………！

返事をした気がした。

答えをもらった気がした。

そして

バンツ！

引き金を引いた。

イヤンガルルガは仰け反り上を向いた。

最後の力を振り絞り、月へ向かって吠えた。

ワアオオオオオオーン!!!!!!!!!!

そして、力尽きた。

アイは涙を流していた。

カイトが近づく。

「……………誇りなんだ」

「……………」

「たとえ敵わないって解つても、逃げるわけにはいかない。
自分を貶めないために……………誇り高く戦ったって」

カイトは倒れているイヤンガルルガを見ながら呟く。

「……………そうだな。 気高き孤高の黒狼鳥……………イヤンガルルガ」

「……………あんなモンスターも沢山居るんだろうな」

「そうかもな」

「……………そんなモンスターたちに、中途半端な思いで挑んだらダメだよね?」

「そうだな。全てに全力で挑む それが礼儀で、せめてもの償いだ」

「……だね。相手の命を奪うなら、それ相応で臨まなければ。改めてそのことが解った」

「……そっか。それを知るか知らないかで違つと、俺は思つ」

「……だね。私もあのイャンガルガのように、強いハンターになれるかな？」

「ああ、だから今は思つ存分泣け。

そして、悩んで悩んで答えを探していけ」

「……そう、だね。……今だけは、泣かせて！」

そういつてアイは、カイトにしがみついて泣いた。

カイトはそつと抱きしめて、頭を優しく撫でた。

月明かりが二人をそつと照らす。

小さな少女はずつと泣き続けた。

「おはよう〜！ カイト君！」

「……おはよう。アイ」

朝。

昨日、泣き疲れて眠ったアイをベッドに抱き運んで、それからカイトは地面で寝たのである。

「さて、帰ろつか。クエストはクリアしたからね」

「そつだな」

そういつて竜車に乗り込む二人。

「カイト君はこれからどうするの？」

「ん、……探し物かな」

「……そつか。また、いつか会えるかな？」

「……近いうちにまた会えるだろう」

カイトは微笑みながら、そつ返す。

「……だよ。じゃあ！ 私がいつか探し物を手伝ってあげるよ」
「！」

「そつか」

「そつだよ！ 任せて！」

「一概に任せると言えないのは何でだろう？」

「むう〜酷いよカイト君！」

「嘘だって……じゃあ、その時が来たら手伝ってもらおうよ」

「うん！ 約束だよ！」

「はいはい、約束」

「よし！ ドンドルマに着くまで、しりとりをしよう！
今度は負けないよう！」

「いいだろう！ アイからだ」

「よし！ し……消臭玉！」

「マグダンゴ」

「じ……轟竜の鱗！」

「鋼龍の甲殻……」

「紅蓮……」

「……」

「……」

「……」

「……」

二人は楽しく帰っていった。

因みに、しりとりの結果は……カイトの全勝・アイの全敗である。

「…………お兄様」

「おかえり、シズク」

「…………ただいま」

アイと分かれた後、シズクと落ち合った。

「で？ どうだった？」

「…………苦労した。全部ここに」

そういつて何も無い場所から物を出した。

今にも爆ぜそうな紅い焰の石

触るもの全てを凍て付かせる氷の石

自由を感じる美しい風の石

「…………よく集めれたな」

カイトは感心した。

「……お兄様が集めてつてお願いしたから」

顔を赤く染めて、照れたように呟く。

「そうか、がんばったな！」

頭を優しく撫でてあげる。

「……にゃ……」

猫のように、気持ちよく目を細めるシズク。

「さて、これから二週間準備期間だ！
準備をしてから行くか！」

「……？ どこに？」

「それはな……」

カイトはこれから面白いことを始めるように言う。

「 ユミナのところだ」

第三十四話「アイ編3」 「黒狼鳥の最後」 (後書き)

アイ編終了です！

アイとカイトの漫才は楽しいですね^^

最後のことについて話しますが、

次のユミナ編ではカイト出てきません！

その後に出てくる予定です。

…期待した人、ごめんなさい(> | < 。)

第三十五話「ユミナ編1」 「鎌という名の將軍」 (前書き)

今回のサブタイ…内容とまったく関係なさ過ぎますね…^^;;

第三十五話「ユミナ編1」 「鎌という名の將軍」

第三十五話「ユミナ編1」 「鎌という名の將軍」

狭い洞窟の中、鎌蟹シヨウグンギザミと少女が戦っている。

シヨウグンギザミは鎌を上げ、思いつき振り下ろす。

それを少女は、左にひらりとかわす。

ブン！！ ドガッ！

強大な鎌が地面に突き刺さる。

シヨウグンギザミは身動きがとれず、必死に地面から抜こうともがく。

その隙を逃さんと、少女は太刀を振るう。

ズバツ！

キシヤアアアアー！！？

その一撃にシヨウグンギザミは怯み、動きを止めてしまう。

もう一頭のシヨウゲンギザミ探すために洞窟から去っていった。

「……何処に居るんだろ？」

1頭目を倒してから2時間が経過した。

ユミナは探し続けたが、一向に2頭目が見つからない。

今回の依頼は、シヨウゲンギザミ2頭の狩猟。

場所は沼地。

期限は7日である。

残り1頭で、時間は後4日である。

アイテムにはまだ余裕がある。

だから、焦って探す必要は無いのである。

「はぁ……地道に探すしかないか」

ユミナはもう一度最初から、居そうな場所を回り始めた。

しばらくして、ある洞窟の深部である。

(…………居た)

先ほどよりも大きいシヨウグンギザミがそこに居た。

ポーチからペイントボールを取り出して、投げつけた。

ベチャツッ!

独特の刺激臭が洞窟内に広がる。

キシヤアア…………!?!?

突然の衝撃に驚き、辺りを見回して探す。

ユミナは見つからない様に後ろへと回って、持ってきていた大ダル爆弾を仕掛けた。

何処から出したかって…………?

それは秘密。ハンター七不思議のひとつです

起爆。

ドガアーーーーーンッ!!!!!!

キシヤアアアアアーーーー!?!?

あまりの衝撃にシヨウグンギザミは倒れる。

その隙に新たに調査していた、大ダル爆弾を仕掛けて起爆した。

ドガアーーーーンッ!!!!!!

無理やり起き上がり、反撃しようとする。

シヨウグンギザミが一步手前まで来たところで。

地面を思いつきり、蹴るように踏みつけた。

ガン　バチィ!!!

キシヤアアアアツ!!!!!!??

シヨウグンギザミは、見事にシビレ罠に引っかかった。

そして、まったく身動きが取れなくなった。

ユミナは、大ダル爆弾を起爆する。

ドガアーーーーンッ!!!!!!

痺れ罠の効果が切れるまで、繰り返し仕掛けて起爆する。

ドガアーーーーンッ!!!!!!

ドガアーーーーンッ!!!!!!

ドガアーーーーンッ!!!!!!

シヨウゲンギザミの甲殻は、ヒビが入ったり、半分近くが吹き飛んだ。

鎌もボロボロで、背負っていたグラビモスの頭殻も壊れてしまっていた。

キイ……キイシャ……シャアア！！

シビレ罨の効果は切れて、何とか動き出すシヨウゲンギザミ。

いまだにユミナへと襲い掛かる。

それをかわし続けて、どこかに誘導するようにかわした。

不意に後ろへと大きく跳んで、地面を蹴った。

ガン　バチイ！！

シビレ罨を展開した。

またもや引っ掛かるシヨウゲンギザミ。

ユミナは一際大きな爆弾を仕掛けた。

大ダル爆弾Gだ。

ユミナは距離をとり、投げナイフを投擲した。

「……さよなら」

カツ　　ドガアアアアーンツ！！！！！！

キシヤアアアアーンツ！！！！！！

爆炎に飲み込まれながら、断末魔を上げるシヨウゲンギザミ。

程なくして、絶命した。

「今回はアイテムばかり使ったけど、なかなか違うものなのね……」

剥ぎ取りながら、今回の狩りの反省を行う。

「アイテムばかりだから、修行にはならなかった。

……でも、早く終わったから他のに行けるね」

剥ぎ取り終わるとナイフを仕舞い、立ち上がった。

「さてと！　次は何に行こうかな？」

ベースキャンプげと戻っていく。

「うん、ドドブランゴでも倒しに行こうかな……」

「それとも、火山で鉱石採掘にでも……」

「何しようかな。まあ、帰ってから決めようかな」

ユミナは竜車へと乗って、ドンドルマへの道を帰っていった。

第三十五話「ユミナ編1」 「鎌という名の將軍」 (後書き)

呆気無かったですね、シヨウゲンギザミ…。

何時かまたちゃんと出したいと思ったりしました。

因みに、まだユミナ編は続きますから。

まあ、あと1〜2話ぐらいですけどね！

第三十六話「ユミナ編2」 「奇襲・遭遇」 (前書き)

短いです、すみません。

またスランプ気味です。はあ…。

今回はまったく面白くないです。

第三十六話「ユミナ編2」 「奇襲・遭遇」

第三十六話「ユミナ編2」 「奇襲・遭遇」

ガラガラガラ

竜車が道をゆっくりと走る。

辺りは見渡しの良い草原である。

竜車を運転するおっさんは、前方に影が見えたのでよく眼を凝らして見た。

それは、大群であった。

ドスランポスが率いるランポスの大軍であった。

おっさんは、中に乗っているハンターに告げた。

「うわっ！？ ランポスの大群だ！ どうするんだい！？」

竜車の中から少女が顔を覗かせる。

「うわっ、多いわね……。まあいいわ！」

開いた道を進んでいく。

そして、ついにドスランポスの所へとたどり着いた。

ギヤアアツ！！

ドスランポスが跳びかかってくる。

ユミナはそれを左に避ける。

すると、背後からランポスたちが襲い掛かってきた。

それを振り向き様に斬り払う。

ザシュ！

首が飛び、絶命する。

背を向けていると、ドスランポスが襲い掛かってくる。

それに対応するために振り返ると、ランポスたちが後ろから襲い掛かってくる。

(……………まさか、隙を作ろうとしている？)

ダメージというダメージは一切受けていないが、数が多いのでどうしても苦戦してしまう。

(ここは……………一気に倒したほうがいいかな？)

ランポスを斬り捨てながら、そんなことを考える。

「ハアアアアーーーーッ!!!!」

鬼斬刃の刃を寝かせ、地面と平行にしながら振り回す。

全身を使ってグルグルと回り続ける。

近づいてきたランポスが斬り刻まれ、死んでいく。

そして、強く地面へ踏み込み、

遠心力を利用した最速の突きをドスランポスへと放つ。

ズガアアアーーーーン!!!!

雷で貫通力が増した鬼斬刃が、ドスランポスを穿つ。

バチバチバチバチバチ!!!!

放電し続ける鬼斬刃。

「…………ハッ!」

ユミナは一拍置いて、全力で斬り払う。

ドスランポスは絶命した。

ドスランポスが絶命した途端に、陣形が崩れ始めた。

指揮官を失ったからである。

「ふう。……逃がさないよ！」

残ったランポスの大群へと飛び込んだ。

「ふう……。終わりましたよ」

ランポスたちを殲滅したユミナは、竜車へと戻り告げる。

「おお！ あの大量をやっつけたのかい！」

「はい。もう危険はありません」

「へえ〜！ 流石ハンターといったところかい」

おじさんは感心した様に言う。

「それじゃあ、もういけますか？」

「応よ！ 任せてくれ！」

ユミナが竜車に乗り込むと、竜車は再び動き始めた。

暫く進んでいくと、不意に影が差した。

「ん？ なんだ？」

おじさんは上を見上げると、そこにはとんでもないものが目に映った。

「
」

その光景におじさんは絶句し、電車を停めてしまった。

いきなり電車が停まったことに驚いて、ユミナは電車から顔を出した。

「？ どうしたんですか……」

あまりのことにユミナも絶句した。

そこには

リオレウスとリオレイアの番が空高く飛んでいた。

「なっ！？ うそでしょ……」

ユミナはいつでも動けるように身構える。

幸いリオレウスとリオレイアはユミナたちに気付かず、西のほうへと飛んでいってしまった。

「……はあ。どうやら気付かれなかったようね」

心のそこから良かったと思いつける。

(今の自分じゃ、どちらか片方すら1人では倒せない……)

ユミナは少し悔しそうにしている。

(でも、いつかは倒せる……いや、倒してみせる!)

そつ心に誓う。

ユミナは固まって動かないおじさん呼び覚まし、三度出発した。

あれから半日しないうちに、ドンドルマへと戻ってこれた。

日は傾き、街は夕日で赤く染まっていた。

ドンドルマに着くとユミナは、すぐに工房へと足を運んだ。

手に入れた素材で、防具を作るためである。

「親方！ ギザミシリーズ、作れる？」

そついつて、素材が入って袋を渡す。

「もちろんだ！ ……数日掛かるぞ？」

「うん、わかった。じゃあお願いね？」

「任せておきな！」

ユミナはお金を払い、工房を後にした。

「ああ、数日は何もできないな！ 何しようかな？」

暇そつに宿へと目指す。

「防具ができれば、火山に行こうかな」

「そして、終わったらそのままレーユ村に帰ろつと」

これからの予定を手早く決め、疲れを癒すために寝た。

「……おやすみなさい」

第三十六話「ユミナ編2」 「奇襲・遭遇」 (後書き)

「ユミナ編」終了です！

え？短すぎないかって？

キニシナーイ^^；

次回からは、なんと…！

お楽しみに！

第三十七話「緊急事態と運命の再会」(前書き)

いつもより少し長いです。

第三十七話「緊急事態と運命の再会」

第三十七話「緊急事態と運命の再会」

皆と別れてから約束の二週間が経った。

ユミナは村に帰ると、すぐに酒場へと出向いた。

皆と会つたためである。

酒場の扉を開けると喧騒に包まれた。

奥へと進んでいくと誰かが駆け寄ってきた

「ユミナちゃんーん!!!」

と言つより飛びついてきた。

それを受け止めて、返事をする。

「久しぶりね！ アイ」

「うん！ 会いたかったよー！」

「ふふ、まだ二週間しか経ってないでしょ」

「え〜！ 違うよ〜二週間“も”経ったんだよ〜！」

「わかってるよ、私も会いたかったよ」

「えへへ〜！ 私少しは強くなっただよ〜？」

「そうね……防具はイヤンガルルガ？」

「うんそうだよ！ 思い出の品かな？ 苦労したんだよ〜！」

「その分強くなれたでしょ？」

「うん！ ユミナちゃんもギザミに変わってるね〜！」

「アイテムばかり使っただよ〜ね……」

「へえ〜珍しいね？」

「うん、少しは使うのに慣れておかないといけないから」

「そっか〜」

アイと話していると、いつの間にかエリカが後ろに居た。

「ただいま戻りました」

「おかえり〜！」

「お帰り、何時からいたの？」

「たった今帰ってきたところです」

「そうなんだ。……ところで何を狩ったの？」

「キリンです」

「「キリン?!?!」」

「はい」

「嘘っ!?! 凄すぎでしょ……」

「大丈夫だったの？」

「はい、手強かったです。……危うく死ぬところでした」

「「死にかけたの?!?!」」

「はい。でも……得たものは大きいです」

「……そっか、無事ならいいんだけどね」

「とんでもないね〜!」

「何の話？」

これまたいつの間にか、帰ってきたキイが話に加わる。

「エリカがキリンを狩ったって話」

「はっ！？ キリン！？」

「すごいよね〜」

「いやいやいや！ もう凄いつてレベルじゃないから！」

「そうですか？」

「そうだよ。凄すぎてビックリだよ！」

「それで？ キイは何を狩ったの……て」

キイを見ると防具が変わっていて、それを見ただけで何を狩ったのかが解った。

「ドドブランゴ？」

「うん、そうだよ。ブランゴの数が多すぎて手強かったよ」

「へえ〜！ 十数頭ぐらいいたの？」

「いや、数百か数千ぐらいいたよ……」

「はっ！！！？」

「それ全部一人で倒したの？」

「いやいやいや！ 無理だから！」

「じゃあどうしたの？」

「なんか変な人が来て代わりに倒すって言って、僕はそのままドドブランゴのところまで行ったから」

「その人、一人で数千頭を……ですか？」

「わからない。僕が行ったときにはもう何もなかったからね」

「死体も？」

「うん、何一つ無かった」

「怖いね〜！」

「その人も居なかったのですか？」

「居なかった」

暫く皆で考えていたが、何も考え付かなかった。

「まあ……いいよね」

その一言でこの話題は終了した。

「さて、今日はもう休んで明日から狩りに行くっ？」

「」「はー」「」

皆それぞれの家へと帰って休んだ。

朝。

「起きてください!!」

エリカが急に部屋へと飛び込んできた。

「わっ!?! …… な、何?」

エリカの大声に強制的に起こされるユミナ。

「急いで酒場に来てください!!」

慌てるようにエリカが言う。

「ど、どうしたの?」

何も解らず聞き返す。

「いいから、急いできてください! 緊急事態です!」

その言葉に完璧に目が覚め、真面目に切り替えた。

「わかった。すぐに行くけど……何があったの?」

着替えながら聞いてみる。

「村の近くの森丘に……」

エリカは困ったように告げる。

「リオレウスとリオレイアが！」

「村長！」

ユミナは酒場へと駆け込んだ。

その後ろにエリカが付いてくる。

酒場には村長、デューク、サラ、アイ、キイの五人が、すでに集まっていた。

「村長、本当にリオレウスとリオレイアが……？」

村長は厳しい顔で、ユミナに肯定する

「うむ、近くの森丘に住み着いたようじゃ。

このままじゃあ、何時襲われるか解らんのじゃ」

「そんな……！」

ユミナはふと帰りのことを思い出した。

(もしかして、あの時の……!?)

「……村長」

「なんじゃ?」

「私が依頼を達成してドンドルマに帰る途中にも、
リオレウスとリオレイアに遇いました。その時のものだと思います
す……」

「なんじゃと! 本当か!」

「多分……」

「ダメージなどは……?」

「負ってないと思います」

「そうか……」

黙って考え込む村長。

「それで、どうするんですか?」

「うむ、今この村には対抗できるハンターが六人じゃ。
だから二手に分かれて倒してもらおう」

「どう分かれるんですか?」

「デュークとサラの二人に、ユミナ、アイ、エリカ、キイの四人に

分ける」

「俺等はそれでいいです」

「私も賛成です」

デュークとエリカが賛成する。

「サラとデュークは大丈夫なの？」

「大丈夫よ、倒したこともあるから」

「そうだ、それより新米ハンターの自分たちの心配をしろ」

「……そうだよね。私は大丈夫！ 皆は？」

「私も大丈夫だよ！」

「僕も大丈夫！」

「私も構いません！」

「よし！ ……それで私たちはどっちを相手するの？」

「うむ」

村長は頷きながらデュークの方を見た。

「俺等がリオレイアで、お前等がリオレウスだ！」

リオレウスと聞いて昔を思い出す。

(リオレウス……あの時は逃げるしかできなかった。でも今は)
ユミナは周りを見る。

(仲間みんながいる！ それに、強くなった!!！)

「皆！ 準備をして！」

皆に声をかけたその時。

「……この中に“ユミナ”って人いる？」

いつの間にか現れた少女にそう聞かれた。

「……」

皆して一斉に飛びのいて、間合いを開けた。

「何時の間に……!!」

「何者だ！」

エリカとデュークが問いかける。

「……いるの？ いないの？」

少女は苛立たしげに聞いてくる。

慌ててユミナは名乗りだす

「私が……ユミナだよ？」

少女はじつとこちらを見てくる。

「……あなたが、ユミナさん？」

少女はピヨンと乗り出してくる。

「……そうだけど」

「……やっと会えた。会いたかった」

「へ？　なんで？　……というか、あなたは誰？」

「知り合いじゃないの？」

アイが不思議そうに聞いてくる。

「うん」

「……名乗り忘れてた。私の名前はシズク・シイナ。始めまして」

シイナと聞いて考え込むユミナ。

(シイナ……シイナ、どこかで……？)

「……お兄様」

「……なんだか面白そうな話だな」

「「「「「「！！！！」」」」」」

「またもや皆して一斉に飛びのいた。」

「警戒が足りないな」

「「「ああーっ！！？」」「「」」

「カイトさん！？」「あの時の黒い人！？」「カイト君！？」

カイトはエリカのほうを向く。

「久しぶりだな」

「お久しぶりです」

「少しは強くなったようだな……」

「カイトさんの言った事を守ってますから」

「それだけじゃ強くなれないぜ？」

「それも分かっています」

「ならいい。……復讐は終わったか？」

小さい声でたずねる。

「……いえ、まだです」

「……だろうな。焦るなよ」

「分かっています」

続いてキイの方を向く。

「無事に勝てたようだな」

「あの時はお世話になりました」

キイは深々とお辞儀した。

「気にするな。カイトだ、よろしく」

「よろしくお願いします。……ところで、あれは全部倒したんですか？」

「ん？ ……企業秘密だ」

よく分からないことを言ったが、聞いてはいけないことだと理解した。

「そうですね……」

「そういうことだ」

次にアイの方へと向く。

「よしー」

「『よしー！』じゃないよー！」

「ん？ 気にするな」

「気にするよ！ またすぐに会って、こつ言つ事だったんだね？」

「まあ、そつだ」

「そつか〜……また会えて嬉しいよ〜」

「そつか？ 俺も嬉しいよ」

「また、しりとりで勝負だ〜！」

「……またやるの？」

「約束したからね！ 私が勝つまでやるよ〜！」

「わかったよ、また後でな」

「はいー！」

そして、最後にユミナの方へと向いた。

「」

ユミナは黙り込んでいる。

「えっと……久しぶりだな」

カイトがそう声をかけると抱きついてきた。

「カイトッ!!」

それを優しく受け止めて、優しく抱きしめる。

「……ユミナ。久しぶりだな」

「久しぶり! 会いたかったんだよ? カイト!」

「ああ、俺も会いたかった」

「私がんばったんだよ? カイトに付いて行く為にハンターになつて、

がんばって強くなろうと必死で!」

「……わかってるよ。少しだけ強くなったな」

「うん!」

「……だが、まだまだ足りないな」

「……うん、わかってる。もっと強くなる!」

「ああ、がんばれよ」

カイトはそっと頭を撫でる。

「ん〜」

気持ちよさそうにユミナは目を細める。

「…………お兄様、話の続き」

「ああ！ そうだったな」

「…………お兄様？」

シズクの言葉に疑問を持つユミナ。

「ああ、あの時はちょうど居なかったな。

ユミナ、俺の義妹のシズクだ仲良くしてくれ」

「…………よろしく、ユミナさん」

「うん、よろしくね！」

「それでだ…………村長」

話を変えるカイト。

「ワシに挨拶は無いのか？」

「…………いらんだろ？」

「結局お前は何者なんだ？」

デュークが話しに加わる。

「ユミナたちとも知り合いみたいだけど……」

サラも話に加わる。

「俺か？ 俺はカイト・シイナ。まあ旅人かな？」

「カイトはね！ 私の命の恩人なの！」

「命の……？」

リオレウスから助けてもらったことを話した。

「そうだったのか。疑って済まない」

「ごめんなさい」

「ああ、気にしなくていい」

「そうじゃぞ、見た目は怪しいからの」

「村長……酷いぞ」

「挨拶せん奴よりはマシかの」

「どんだけ根に持ってるんだよ……悪かったって。久しぶりだな村長！」

「うむ、久しぶりじゃー！」

「それでだ、リオレウスとリオレイアが出たって？」

「……………うむ」

皆そのことを思い出して空気が重くなった。

「そうだった！ いそがなきゃ！」

ユミナが慌てる。

「村長、俺とシズクもユミナたちについて行っていいか？」

「うむ、確かにおぬしが居てくれたほうがいいのじゃが……………」

「ああ、俺とシズクは一切手を出さないぜ」

「……………そういうと思ったぞ」

ユミナが疑問に思っって声を出す。

「なんで？ カイトが戦ったほうが確実だと思うけど……………」

「俺が戦ったら意味無いだろ？」

「……………それもそっか」

なんか納得したユミナ。

「うむ、頼めるか？」

「ああ、こっちからお願いしたいぐらいだ」

「断っても、付いて行くのじゃろ？」

「……………ソナナコトナイゼ？」

「その間とカタコトはなんじゃ？」

「ふう、気にするなよ」

「まあ、いいが」

「じゃあ、いくぜ？」

カイトは踵を反す。

「シズク」

「はい、お兄様」

「じゃあ、俺等は外で待ってるぞ？」

カイトはシズクを連れてユミナへと聞く。

「あつ、うん！ 皆すぐに準備するよ！」

「……………はい！！」

デュークとサラも腰を上げる。

「俺たちも準備していくか？」

「そうね」

皆が去った後、村長は一人で考え事をしていた。

「……うむ、あやつが居るのじゃ。万が一なことは無いじゃろ。」

ため息をつく。

「しかし、胸騒ぎがするのう。」

村長の独り言は、酒場の喧騒に包まれて消えていった。

第三十七話「緊急事態と運命の再会」(後書き)

ついに、ついに！

カイト&シズクがユミナ達に接触しました！

なんかいい感じですよ！

次回からはリオレウスです！

割と続きますよ^^^

第三十八話「火竜リオレウス」

第三十八話「火竜リオレウス」

ユミナ達は、一日かけて森丘に到着した。

「ところで、カイトさんってどれぐらい強いんですか？」

ふと思いついたキイがカイトに尋ねる。

「カイトでいいぞ。あと敬語はいらん」

「あ、はい」

「私も見たことは無いので知りません」

「私るときも戦っては無かったね」

エリカとアイも会話に参加してくる。

「ん？ 俺はね……一般人位？」

「あんな一般人居たら怖いよ！」「……あれは、一般人なわけない」

カイトの発言をユミナとシズクが全力で否定する。

「うわっ！ 酷っ！」

二人の発言に傷つくカイト。

「……お兄様は何にも負けない」

自信満々に言うシズク。

「……そうなんですか？」

「ん？ いや……一人だけ勝てないのなら居るね」

「！？ ……本当？」

「ああ、名前は”焰 悠飛”……ユウヒ・ホムラだ」

「……勝てない？」

「ああ、……あれに勝てる奴が居るなら見てみたいよ」

「……何処に居るの？」

「うん？ ……この世界には居ないよ」

「「「「はあっ！！？」」「」「」

「えっ、何？ この世界以外にも世界があるの？」

「んんっ？ どういう意味なの？」

「てか、何故それを知っているの？」

「詳しく話を聞きたいです」

皆混乱したように聞いてくる。

その中シズクー人は納得したように頷く。

「……そっか。お兄様の師匠だったっけ？」

「ん〜。師匠なのかな？ 一代目当主なんだけどね……」

「……前にも少しだけ聞いた気がする」

「ああ！ シズクには少しだけ話したな」

「……お兄様は武術の家系。その五代目」

「そっか。一族の中では二番目に強いな。」

「一代目当主が一番で、もう何億年も生きてるな」

「……何億?!?!?」

「俺は（永遠の）18歳だぞ？」

「……そうなんだ」

なぜか皆安心したようにする。

「それで、別の世界って何？」

ユミナは話を戻すように聞いてくる。

「こことはまったく違う世界……異世界と呼んでいる。

俺は別の世界からここに来たものだ」

「なんで別の世界からこの世界に来たの？」

「何故か……それは、一代目が暇だからという理由で飛ばされた」

「「「「はあっ!?!」「」「」

「まあ、いつもの事だ気にするな」

「いつもなんだ……」

呆れたように言うユミナ。

「どんなところなの？」

「ん〜こことはまったく違うな。まずモンスターが居ない(多分)

次にこことは比べ物にならない位の技術が発展している。

ここには無いような概念が普通にある。……これ位かな？」

カイトの話を聞くと、皆は凄いなと感心しきっていた。

「……ん？ 何の話からこんな話になったんだっけ？」

いまさらのことを疑問に思うカイト。

「……お兄様がどれくらい強いかって話」

「おお！ そうだったな」

「で？ 実際どれくらい強いのか？」

「うーん、一般人位？」

「」「」「まだそれを引っ張るの！？」」「」「」

「まあ気にするな！ いつか分かるときが来るはずだ」

「……そうですか」

どこか納得がいかない皆。

「……それじゃあ、シズクさんはどれくらい強いんですか？」

話の矛先をシズクに変えるキイ。

「……私？ ……一般人位？」

「……冗談キツイなシズク」

「……お兄様にだけは言われたくない」

その会話を聞いて、シズクもある程度は強いと考えた。

「そんなことよりも、行かなくていいのか？」

ふと話を変えるカイト。

「あ！ 早く行かなきゃ！」

慌てだすユミナ。

「皆準備はいい？ 行くよ！」

「」「」「はい！」

皆で移動を開始する。

「慌しいね、ほんと」

「……観察開始」

それに続くカイト達。

ユミナ達のリオレウス討伐が始まった。

エリア3

特に敵と遭遇することも無く、ここまで来れた。

「……敵に出会わないね？」

「これもリオレウスとリオレイアの影響かな？」

「そうだと考えるのが自然だと思います」

「リオレイアの方は、デュークさん達が今闘ってるんだよね？」

「そうね、私たちは早くリオレウス探して倒そう！」

「」「はい！」「」

移動を開始してからというものの、カイト達が話しかけてくることは無い。

静かに私たちの後ろを少し離れて付いてくる。

(どうしたんだろ？ …… って、今は気にしてたら駄目だよな！)

自分の考えを自分で戒めるユミナ。

(今は目の前のことに集中する！)

気合を入れるユミナ。

うーお

(! ?)

「皆！ 構えて！」

ユミナの声にそれぞれが武器を構えて、敵へと備える。

カイトとシズクは、いつの間にかいなくなっていた。

ガオオーーン!!!

上空から雄叫びが聞こえてくる。

徐々にそれは地上へと下降して来る。

真つ赤な鱗と甲殻。

大きな翼に長い尻尾。

王者に相応しい威圧感に殺気。

それは正に、空の王者　火竜リオレウス！

飛竜種の代表的な存在とされる飛竜。

一人前のハンターとなる為の、大きな難関。

ドシン！

リオレウスが地上へと降り立った。

瞬間、リオレウスと目が合った。

こちらへと向き、バインドボイス咆哮！

「ていつ!!」

続けて、大剣を切り上げる。

ズシャ!

尻尾の下側は鱗が無いので、阻まれることは無かった。

リオレウスはエリカへと尻尾を振り回す。

ブンツ!

それをしゃがみ込んでやり過ごした。

リオレウスはそのままさらに尻尾を振り回し、ユミナへと攻撃した。

前転しながらかわして、その場を離れた。

エリカも一旦、リオレウスとの間合いを開けた。

その時にキイが目立つように、リオレウスの前を移動する。

キイの方へと向くリオレウス。

キイは一撃を加えては離れてを、繰り返す。

キイに向けて炎ブレスを吐く。

ゴオウツ!!!

炎弾をギリギリのところでもかわす。

炎ブレスで隙ができたリオレウスに、斬りかかるユミナとエリカ。

ザシユ！

ズシヤ！

ウガアツ！！！

リオレウスが後方へ、飛び去ると同時にブレスを吐いてくる。

ドガアーーン！！！！

地面が爆発し、岩が飛ぶ。

ブレスは直撃しなかったが、風圧で怯む二人。

アイが注意を引くように、リオレウスへと弾を撃つ。

バンバンバン！！！！

的確に頭部へと撃ち込んでいく。

バンバンバン！！！！

リオレウスはアイへと向く。

するとアイはボウガンを背負い、逃げられる体勢へと変えた。

リオレウスは突進してくる。

それを必死に走ってかわすと、距離をとってボウガンを構える。

バンバンバン!!!

アイが撃つと同時に、ユミナ達が斬り込む。

ザシュ!

ズシャ!

ドシュ!

ユミナが翼、エリカが尻尾、キイが足を攻撃する。

リオレウスは垂直へと飛び上がった。

アイはボウガンを背負い、ユミナ達がいるリオレウスの真下へと走り込んだ。

「皆! いい感じだよ、これからアイテムを使って攻めていこう!」

「「「はい!」「」」

「引き続きエリカは尻尾を叩き斬ってね? キイは足と……それと頭をお願い!」

「アイは変わらず皆の援護を。いいね?」

「はい!」「」任して!」「」うん!」「」

皆が元気に返事をすると同時に、その場を離れた。

バサバサバサツ ドシン！

リオレウスが降りてきたのである。

それぞれが与えられた仕事をこなす。

ユミナ達の本当の攻撃が始まった。

カイトとシズクは皆の様子を見て話をしている。

二人とも木の上に立っている。

「どうだシズク？」

「……エリカさんは動きが比較的に良い」

「そうか、キイは？」

「……動きは良いけどマニュアル通りにしか動いていない」

「なるほど、アイは？」

「……ユミナさんの連携に対してが特に良い。それと、基本的には動きは良い」

「それじゃあ、……ユミナは？」

「……ユミナさんは才能はあると思う、でもまだ活かさきれていない。……それだけ」

シズクがそれぞれの評価を言っていく。

「そっか」

「……お兄様も分かってるくせに」

「他者の意見を取り入れることは良いことだ」

「……そう」

「今のところ皆及第点かな？」

「……で？」

「問題はこれからだなんてこと」

「……何かあるの？」

「いや、リオレウスはまだ消費してないし本気でもないからな」

真面目に言うカイト。

「……そうだね」

「油断しないといいな」

「……油断は無くても」

「無くても？」

「……アクシデントはあるかもしれない」

「かもしれないな」

「……多分無いとは思っけど」

「どうしても危険なときは、俺が出る」

「……そう」

「シズクは、どうする？」

「……私は見てるよ」

シズクのその返答に少し驚くカイト。

「ん、珍しいな」

「……そんなことない」

「そうか？ まあいいよ」

「……ん」

「さて、また始まるみたいだ」

「……そだね」

「……お前等、死ぬなよ」

カイトの啖きが轟音にかき消されていく。

第三十八話「火竜リオレウス」(後書き)

実は、カイト、異世界人だったんです^^

えっ？ 急展開過ぎる？ ……すみません、調子乗りました(> <)

…でも、最初からそのつもりだったんです^^;

こんな適当な小説ですけど、これからも読んでくださると嬉しいです！

「焰 悠飛」はいつか書く小説の主人公です……多分。

第三十九話「憤怒の火竜」

第三十九話「憤怒の火竜」

「キイ！」

ユミナの合図と同時にキイが閃光玉を投げる。

カッ！ ピカアーーーーー！！！！

グワアアアーーーーツ！！？

閃光に目をやられ、仰け反るリオレウス。

そこに斬りかかるユミナとエリカ。

「ハアアーーーー！」

ズシャツ！

頭部へ鋭い一撃が繰り出される。

後ろに回りこんだエリカは、尻尾へと斬りかかる。

「斬ッ!!」

ザシユ!

「裂ッ!」

ズバツ!

激しい猛攻がリオレウスを襲う。

「喰らえっ!」

徹甲榴弾を頭部へと撃ち込むアイ。

バン! バン!

ドカン! ドカン!

ガコン!

弾をリロードする。

バン! バン!

ドカン! ドカン!

ひたすらに頭部へと撃ち込んでいく。

不意に、

ギャウウツ!!??

リオレウスが悲鳴を上げて倒れこむ。

「よしっ！ 今だよ皆〜！」

頭部への集中攻撃で、眩暈が起こり倒れこんだのである。

アイの作った大きなチャンスを逃さないように、一斉に攻撃を始める。

ユミナは翼。

エリカは尻尾。

キイは頭。

アイは麻痺弾に変えて、肉質の脆い所を狙って撃つ。

リオレウスは頭の甲殻や鱗が崩れ、部位破壊された。

そして、ユミナによって右翼の翼爪を叩き折られた。

リオレウスは眩暈が治り、起き上がる。

一旦、三人は間合いを開ける。

アイは麻痺弾を撃ちまくる。

リオレウスが視界を回復し、三人に向かってブレスを吐こうとした

瞬間。

バチイーッ！！

ギヤアオウーッ！！？

一際大きな音が鳴り、リオレウスが痺れて動けなくなった。

アイの麻痺弾が効果を現したのである。

そして一斉に攻撃を始めた。

暫く攻撃していると、ユミナがリオレウスの足元に円盤状のものを設置した。

それを思いっきり蹴って、その場を離れた。

ガッ！ シュルルルルッ！！！！

ネットが地面に展開されて、土の質が変わった。

ドスンッ！！！！

すると、リオレウスは地面へと沈むように落ちていった。

落とし穴である。

粘着性が強いネットが、リオレウスに絡み付いて身動きを封じる。

そこへ先ずキイが連撃を叩き込む。

ガアッ！

連続してブレスを吐き続ける。

それをかわし続けるユミナ達。

反撃の暇を与えられず、近づくことさえもできない。

炎弾によって、辺りはそれなりに燃えている。

キイが何とかブレスの嵐を潜り抜け、リオレウスの側面へと出た。

足へと斬り付ける。

ガキンッ！

「!?」

見事に弾かれて、大きな隙が生まれてしまった。

リオレウスはキイの方へと向いた。

「!? やばい！」

ユミナとエリカは走って、リオレウスとの距離を縮めようとする。

素早く容赦の無い尻尾が、キイを襲う。

「ッ!? ガッ！」

吹き飛ばされ10メートル位転がる。

リオレウスは尻尾を反転させて振り回す。

「!? キヤアッ!!!」

突然のことに、反応出来ずに吹き飛ばされるエリカ。

そして、リオレウスと正面から対峙してしまったユミナ。

ほぼノーモーションで突進してくる。

それを右へと全力で跳んだが、翼に引つ掛かってダメージを受けるユミナ。

「グウツ!?!」

攻撃は浅いので、すぐに体勢を立て直すユミナ。

振り向き様に斬り付ける。

ガキンッ!

しかし、怒り状態で硬質した鱗と甲殻に弾かれる。

リオレウスはユミナへ反撃しようとした時。

バンバンバン!!!

アイが気を引くように、貫通弾を撃ってきた。

リオレウスはアイのほうへと向き、ブレスを吐く。

難なく横へ転がりかわすアイ。

回避しながらも敵を正確に撃つ。

バンバンバン!!!

アイがリオレウスの、気を引いているうちに回復したキイとエリカが戻ってくる。

「二人とも大丈夫?」

「うん、なんとか」

「問題ありません」

「じゃあ行くよ!」

ユミナ達はリオレウスへと斬りかかった。

肉質の脆い所を狙って慎重に攻撃を重ねる。

しかし、敵が速過ぎて攻撃のチャンスが少なすぎる。

次第に防戦一方となり、傷が少しずつ増えてきた。

「ハア! ハア! ツ、うう!」

「手強、すぎますね……」

「閃光玉で、動きを、封じるしかないね……」

「そう、ですね」

「キイツ!!」

ユミナの声にハツとなるキイ。

「は、はい!!」

閃光玉を投げる。

カッ! ピカアーーーー!!!

何の反応も無い。

「?」

「ユミナ! 上です!!」

上を見ると飛び上がったリオレウスが、こちらを向いていた。

閃光玉は外れたようだ。

うガアアッ!!

不意にこちらへと襲い掛かってきた。

ユミナは反応することが出来なかった。

「ユミナ！」

とっさにエリカがユミナの前へとでて、大剣を盾代わりにした。

ガッ！ ガキンッ！！

リオレウスの足が襲い掛かる。

「くっ！？」

「エリカ！？」

エリカはユミナを巻き込んで、後方へと吹き飛ばされた。

手に持っていた大剣は、耐えられずに遠くへと弾かれた。

二人は数メートル転がり続けた。

リオレウスはユミナ達を追撃することも無く、アイ達の方へと向いた。

ユミナは起き上がると、エリカが無事かを確認した。

「エリカ！」

「う……っう……」

「大丈夫！？」

(許さないよ！ 私の仲間を傷つけるなんて！)

ユミナは全力で走った。

「あらま、エリカが一時リタイアだな」

「……でも、今は凄かった」

「そうだな。あの反応速度はなかなかだったな」

「……みんな、劣勢」

「そうだね、やっぱりこうなるとは思ってたけど」

「……勝つのは少し厳しい」

「ん〜でも、なんとかなるだろう？」

「……多分」

「さて、これからどうする？ユミナ」

カイトは楽しそうに眺めている。

ふと何かを感じた。

「……お兄様」

「……ああ、今何か感じたな」

「……何なの？」

「わからないな」

「……そう、ユミナさんたちは」

「大丈夫だ」

「……そう」

「何か起きたら俺たちが出る」

「……うん」

「ユミナ……がんばれよ」

第三十九話「憤怒の火竜」(後書き)

ユミナ達の今の武器は…

ユミナ： 鬼斬刃

エリカ： ティタルニア

アイ： サンドフォール

キイ： フロストエッジ改 です！

防具は上から、

ギザミシリーズ

メイドシリーズ

ガルルガシリーズ

ブランゴシリーズ だよ！

第四十話「赤竜と緑竜」(前書き)

メツチャ出来が良かったのに消えました(>|<。)

インターネットのエラー如きに消された…、

私の一番出来が良かったこの四十話が消えたんです!!!?

データを別に取り取るのも忘れてて、最初からですTOT

出来がとても悪くなりました…細部まで覚えていなかったのです。

皆さん、申し訳ないです。

今ほど過去に戻りたいと思ったことはありません!!

第四十話「赤竜と緑竜」

第四十話「赤竜と緑竜」

（許さないよ！）

私はリオレウスへと向かって走る。

背中の太刀……鬼斬刃の柄をぎゅっと握り締め、
全力疾走で走り抜ける。

リオレウスの腹の下に潜り込んで一閃。

「ハアッ！！」

ズバンッ！！

未だにリオレウスは怒り状態であるが、
その一閃は弾かれることなくリオレウスを切り裂く。

私はさっきまでとは違うことを感じた。

（今なら……斬れる！）

「ハアアアーーーー！！」

ザシュユ！　ズバン！！

さらに追撃をする。

「ユミナちゃん！！」「ユミナ！！」

「二人とも待たせたね……エリカなら大丈夫だから」

私はキイとアイの二人と合流する。

そして私は、リオレウスと真正面から対峙する。

鬼斬刃を正眼に構える。

リオレウスが突進をしてくる。

私もそれに合わせてリオレウスへと突っ込む。

激突する！

その刹那の瞬間に私は、リオレウスに足から滑り込んだ。

ズザアアーーーーッ！！

私はギリギリ、リオレウスの股を潜り抜けた。

一歩間違えたら死を招くような行為である。

背を向けて倒れているリオレウスへと斬りかかった。

「たあああーっ!!」

ドシュツ!!

リオレウスに斬り込み、さらに踏み込んで斬りかかる。

鬼刃斬り!

「たあ! たあ! てやあああーっ!!!!」

ザシュ! ザシュ! ズバンツ!!!!

そして私は斬り下がり、一旦間合いを開ける。

再度リオレウスと正面から対峙する。

(エリカ……待っててね!)

私はリオレウスへと突っ込んだ。

ザシュツ!

ユミナちゃんがリオレウスを切り裂く。

さっきまで攻撃の通じなかったリオレウスに、

ユミナちゃんの攻撃が通じていることに違和感を感じた。

ユミナちゃんは、心なしかいつもより動きが速い。

(今はまだ怒り状態……だよな?)

リオレウスの口からは火炎の吐息が漏れている。

これは相手が怒っている証拠であった。

(じゃあ何で? ……ん? あれは……)

今度はユミナちゃんの方をよく観察してみると、ユミナちゃんから白い影と黒い影が見えた。

それは極僅か……眼の錯覚とも言える位、微量な物であった。

(あれは……まさか、あの時の!?)

ふと、フルフル戦のことを思い出した。

あの時のユミナちゃんは、怖くて、恐ろしい。

そして黒く禍々しいものを纏っていた。

(あれがああの時のなら……危ない!?)

私は援護しながら、ユミナちゃんへと注意しようとした瞬間。

大きな影が差した。

私は上を向くとそこには

雌火竜リオレイアの姿が。

「なっ!?!」

「嘘っ!?!」

私とキイ君はあまりの出来事に絶句した。

ユミナちゃんは、リオレウスを相手にしてまだ気付かない。

「ユミナちゃん!」

私の声に気付き、こちらを向くユミナちゃん。

リオレイアを認識した瞬間、ユミナちゃんは激しく動揺した。

「嘘………なんで!?! デュークとサラが倒すはず、それなのになん
で?」

ここにリオレイアが!?! ……嘘、嘘!」

酷く動揺するユミナちゃんを見て、私は失敗したと思った。

(くっ………今のはまずかった!)

何とかしよつとユミナちゃんへと声をかける。

「ユミナちゃん!」

しかし、私の声は届かずに一人で眩き続ける。

「嘘、デュークとサラは負けたの？ あの二人が負けるはずない！
あの二人が死ぬなんて……そんなはずはない！！」

リオレウスが動揺するユミナへと襲い掛かった。

「ユミナちゃん！」

「危ない！！」

キイ君がユミナちゃんを突き飛ばす。

ドガツ！！！！

「ガハツ！？」

キイ君が宙高く舞い、地面へと叩きつけられる。

キイ君はピクリとも動かなくなった。

「キイ君っ！？」

「嘘……キイまで、私の所為で……私の所為で、死」

「いい加減にしてください！」

パチン！

乾いた音が響いた。

いつの間にか現れたエリカさんが、ユミナちゃんの頬を叩いたのである。

「何動揺しているんですか！！ 貴方が私達のリーダーなんですよ！ リーダーがしっかりしないでどうするんですか！？」

「……………」

「今はこの状況をどうにかしてから、キイを治療しましょう！」

「……………うん」

ユミナちゃんはエリカさんに引っ張り上げられて、力無く起き上がる。

そこへリオレウスがブレスを吐いた。

「！？」

エリカさんは咄嗟に大剣で防いだ。

ドガンッ！！

「くっ！」

続いてもう一発ブレスを吐いた。

ドガンッ！！

「うつ……く!?!」

リオレウスと変わるようにリオレイアが突進してきた。

後ろに居るユミナちゃんは全く動かないので、

エリカさんは避けることが出来ずにガードする。

ドガッ!!--!

「ガッ!?! くう……」

ジリジリと押されていく。

不意にリオレイアが半歩後ろへと足を下げた。

(あれは……サマーソルト!?!?)

「エリカさん避けて!!--!」

しかし、忠告は空しくサマーソルトが繰り出された。

大地を削るような一撃に、病み上がりのエリカさんは吹き飛ばされる。

ガッ! ドガンッ!!--!

「キヤアッ!?!」

それと同時に、ユミナちゃんから黒く禍々しいものが溢れ出した。

「許さない！」

踏み込むと同時にリオレイアを切り裂く。

「アアアアアアー……っ！！！！」

ユミナちゃんは完全に暴走を始めた。

そこへリオレウスが乱入する。

しかし、リオレウスの乱入すらも、ものともせずには暴れ続ける。

「ユミナちゃん！」

私の声は届かない。

私は急いで向かいながら、キイ君とエリカさんに回復弾を撃つ。

「キイ君！」

まずキイ君を手当てして安全なところへ運ぶと、エリカさんへと向かった。

「エリカさん！」

エリカさんもキイ君の隣へと寝かして、私はユミナちゃんのところへと向かった。

私は援護しながらも必死に呼びかけた。

「ユミナちゃん！」

しかし、この声はユミナちゃんへは届かない。
何度も繰り返し呼ぶ。

「ユミナちゃん！..！」

「.....るさい」

「え?」

「.....うるさい!」

「!?!」

私はユミナちゃんに拒絶されてしまった。

私は凄くショックを受けて動けなくなった。

涙が溢れてくる。

(嘘.....ユミ、ナ.....ちゃん.....)

私は座り込んで泣いてしまう。

(ユミ.....ナちゃ.....ん.....、.....うっ.....)

リオレイアが私のほうを向く。

リオレイアの口からは火炎の吐息が漏れ出し、
一、二歩下がりを大きくのけぞらせた。

(う……うう、ブレス?)

しかし動くことの出来ない私には、もはや関係が無かった。

(ごめん、ね……皆……。ごめ、んね……ユミナ、ちゃん)

リオレイアの巨大なブレスが、地面を焼きながら接近してくる。

ブレスは目の前まで迫っていた。

そこに私とブレスの間を割って入るように、黒い影が飛び込んできた。

「……雷帝」

カツ！　ズガアアアアーンツ！！！！

「……カイ、ト、君？」

私を救ってくれたのはカイト君だった。

私は涙が止まらなかった。

「……ああ、もう大丈夫だ」

カイト君のその一言が、私を凄く安堵させて落ち着かせる。

一言一言が私を優しく包んでいく。

私の張り詰めていた緊張が解かれていく。

「……………ここからは俺がやる」

それを聞いて安心した私は、意識が途切れた。

「……………お兄様」

「わかってる。ユミナが少しおかしい」

先ほどから少し妙な力を感じている

「……………これは何？」

「……………これは、まさか魔女か!？」

「……………誰？」

「俺の知り合いだ。……………名は“黒乃 鈴音”」

「……………魔女」

まさか百年も昔の奴を思い出すとは……………。

確かにアイツは死んではないはずだが

「……あの黒いのは魔女」

「……黒いのは？」

シズクが気になる事を言ったので、思考を中断して話しを聞く。

「……黒いのと、白いのが見えた」

「……白いの、“姫神 真白”か!？」

「……真白さん？」

「ああ、多分な……」

これはどういうことだ？

クソッ！ 分からないことが多すぎる！

「……劣勢」

「ん、そうだな」

負けているようには見えないが、このままだと負けてしまう。

！

「……これ」

「……リオレイア」

「……二人は？」

「無事だ。取り逃がしたただけだろ」

「……でも」

「ああ、これは最悪のアクシデントだ」

「……」

「……シズク、今は様子を見よう」

「……うん」

ユミナ達は、リオレイアが現れたことに気が付いた。

そして、ユミナが酷く動揺した。

禍々しいものをさつきより強く感じる。

そして、ユミナを庇ってキイがやられた。

ユミナの動揺が増した。

それをエリカが止めた。

「ナイス！ エリカ……って言いたいところだが」

「……逃げるべき」

「そうだな……」

まあ、ユミナが足を引っ張って、それどころじゃないようだが。

そして、エリカもやられた。

ユミナから黒く禍々しいものが溢れ出した。

「やばい！？ シズク！」

「はい！？ お兄様！」

「シズクは怪我人をベースキャンプへ運べー！」

「……わかっています！」

シズクは凄い速度で飛び出した。

アイは、ユミナの援護へと回っていた。

アイが必死にユミナへと呼びかける。

「ユミナちゃんー！」

「……るさい」

「えっ？」

「……………つるさい！」

「!?!」

アイは酷く傷ついたように動きを止めた。

アイは座り込んで泣き始めた。

俺はアイの方へと走る。

リオレイアがアイの方へと向く。

「!?!」 『迸る雷光、全てを切り裂け！ “雷切”』!」

俺は異空間へと仕舞ってあった刀を取り出す。

リオレイアがアイへとブレスを吐く。

俺はその間に割り込み、刀を地面へと突き刺した。

「……………雷帝」

刀が激しく放電し、轟音と閃光で辺りの音と光を奪った。

カツ！ ズガアアアアーンツ!!!!!!

炎ブレスを電撃で相殺した。

「……………カイ、ト、君？」

(……俺が殺すわけにはいかないからな)

ユミナの方を向き、声をかける。

「ユミナ！ 逃げるぞ！」

「嫌だ！」

(嘘だろ！？ 拒否られただ！)

「おい、逃げるぞ！」

「嫌だっ！！」

「ふざけるっ！！」

俺の怒声がか響き渡る。

「ひゃう！？ ……う」

ユミナがびくりと怯えたように、こちらを見てくる。

「いい加減にしろっ！！ 今がどういう状況下分かってるのか！？

お前は何ムキになっているんだ！！

そんなんで何かを護れると思うなよ！ そんなんで何かに勝てる
と思うなよ！！」

ユミナの表情が崩れる。

「……だってえ」

ユミナの目から大粒の涙が零れる。

「皆っ、私の……所為でっ……!?!」

ユミナは子供みたいに泣いて、俺へとしがみついた。

「皆は大丈夫だよ……。別に、お前の所為じゃないだろ？」

優しく諭すように言う。

「でもお……」

「みんなはお前が好きだ、お前は皆が好きだ。

……だから、皆のことを信じてやれ」

「……うん」

ユミナは俺にしがみついたまま、泣き疲れて眠ってしまった。

その表情は、憑き物が取れたかのような表情であった。

「ふう、……あとはこれだけだな」

俺はそう言って、リオレウスたちの方を向く。

リオレウスとリオレイアに囲まれた状態である。

刀を構え、殺気を放つ。

「悪いな……」

俺はそつとシズクを撫でてやった。

「……ん。任せて！」

風のようにどこかへと消えて行ってしまった。

俺はアイとユミナを抱えながら、ベースキャンプへと向かって歩き始めた。

「はあ、……どうなることかな？」

暮れだした夕陽に、俺の眩きが消えていった。

第四十話「赤竜と緑竜」（後書き）

いろんな視点を試してみました！

前書きでも言ったとおり…出来は堕ちてますが ><

変じゃないでしょうか？

まだまだリオルス編、続きます…割と…多分…。

第四十一話「仲直り」

第四十一話「仲直り」

抱えていた二人をベッドの上に寝かせると、俺は一息ついた。

日は沈んで辺りは、すっかり真つ暗になっていた。

「ふう。……デューク達はまだかな？」

テントから出ると、人が走ってきているのが見えた。

「来たか」

「お〜い！ ユミナ達は無事か！？」

「皆は大丈夫ですか！？」

サラとデュークが早継ぎに質問してきた。

「ああ、皆気は失っているが大丈夫だ。

そっちは怪我などはないか？」

「私達は全然大丈夫です！」

「それより、すまねえな……リオレイアをそっちに逃がしてしまった」

「それは俺に言うことではないが、……まあミスは誰にでもある気にするな」

シズクを見かけなかったので呼んでみた。

「シズク」

「……何、お兄様？」

俺の斜め後ろにいきなり現れて、デューク達の方が驚いていた。

「シズクちゃん何時の間に……！？」

「うおっ！？……素早いシズクは」

「……そんなことはない」

「それでシズク、リオレイアたちはどうなっている？」

「……2頭とも、巢に帰って寝た」

「そうか、報告ありがとな」

そういつて頭を撫でた。

「……ん」

それを見ていたデューク達は言う。

「二人とも仲良いな」

「うん？ 妹だからな」

「そっか。まあユミナが俺たちにとっては、
妹みたいなものだから似たようなものだな」

「そうだよな！ ユミナはいつまで経っても可愛いからね！」

「……ユミナさん？」

「ん、ユミナの昔の頃のことを教えてくれないか？
シズクも気になっているようだしな」

俺のその提案に、デューク達はとても乗り気である。

「応！ 任せろ、昔からの付き合いだからな」

「いっぱい楽しい話が出るよ！」

「そうだな、じゃあ……あの話からだな……」

そうしてデュークが話すのを聞き入る、俺とシズクであった。

賑やかな声が複数聞こえてくる。

「！」

「？」

「」

「」

聞き覚えがあり、とても懐かしい声。

その声に誘われて目を覚ました。

目を開けるとそこは、見慣れたテントの中であった。

「……テント？　なんで」

思考に入ると、いろいろな事が蘇って来た。

デューク達が倒すはずのリオレイアが、いきなり目の前に現れた。

キイが私を庇ってやられた。

エリカも私を護ろうとやられた。

アイにとっても酷いことを言ってしまった。

カイトに叱られ、助けられた。

「嘘、皆は……?」

辺りを見回すと皆がぐっすりと眠っていた。

私の隣には気持ちよさそうに眠るアイの姿が。

「……アイ、私……ごめんね」

そっと撫でながら呟く。

「……いいよ。ユミナちゃん」

私は耳を疑った。

「アイ!? 起きてたの……何時から!？」

「ユミナちゃんが、頭を撫でてくれた時……かな?」

少し照れながらそう言っつ。

「アイ……本当にごめんね? 私酷いことを言った……」

「うん……私凄く悲しかった。ユミナちゃんに嫌われたと思った」

「そんなことないよ! 私はアイのこと大好き!! だって大切な親友だもん……」

「よかった……。私もユミナちゃんのこと大好きだよ」

「うん、ありがとう……。本当にごめんね？」

「もういいってば、気にしないで。それより他の皆に言わなきゃ！」

「そうだね、うん！」

二人で起き上がり、テントから出た。

そこには、シズク、カイト、デューク、サラの四人が楽しそうに話していた。

カイトがこっちに気付く。

「お！二人とも目を覚ましたか」

皆も気付いてこちらを向く。

「デューク、サラっ！二人とも無事だったのね！？」

「ああ！すまないな……。リオレイアのこと」

「ごめんね、ユミナ」

「ううん！二人が無事でよかったよ！！」

私が安堵している所に、カイトから声が掛かった

「ユミナ、仲直りしたか？」

私はアイと顔をあわせて笑った。

「もちろん！」

それを見て皆は笑った。

「そっか、それならいい」

「……二人とも、怪我は？」

「ないよ」

「うん、ないよ」

「……そう」

シズクはそれだけ聞くと、カイトのところへと戻った。

「それより、皆何の話をしてたの？」

私の質問にデュークが答える。

「ああ、ユミナの小さい時のことを二人に話していたんだ」

私は一瞬で顔が真っ赤になった。

「うそっ!?!」

「ええー!!! 私も聞きたいです、仲間に入れてください！」

「ちょっと、アイ!?!」

「いいぜ！ 最初からまた話してやる」

「デューク！ ……その、へ、変なこととか……言っていないよね？」

カイトを見ながら顔を真っ赤にして言う。

「ははは、知ってることを全部話した」

デュークはあっさりした感じに言う。

「な、なな、どんな事を？」

「ユミナが子供の時に遊んだ思い出話から、ユミナの日常などの細かい所までです」

サラも嬉しそうに言う。

「なかなか面白い話だったぞ」

「……興味深かった」

カイト達も笑いながら言う。

「ええー聞きたいよー！」

「……もう好きにして」

私は諦めながら呟いた。

「私も聞きたいです」

「僕も聞いてみたいですな」

エリカとキイがテントから出てきた。

「キイ!? エリカ!? ……起きて大丈夫なの?」

「はい、問題ないです」

「少し痛むけど、まあこんなもんかな?」

「二人とも私の所為でごめんね……」

「謝らなくてもいいですよ……。私達は貴方が大切だから護っただけですよ」

「そうだよ、仲間だからね……。もっと頼りなよ」

「二人とも…… ありがとう!」

「ええ!」

「はい!」

私達の様子を見てたデューク達が、声をかける。

「よし! 皆でユミナの昔のことについて話そうぜ!」

「はい」

「ああ」

「……うん」

「ええ」

「うん」

「はい！」

「……結局私の話なの！？ やめてーっ！っ！っ！」

私の絶叫が森丘に響き渡る。

皆が楽しく、夜が更けていく。

次の日の朝。

「皆！ ……準備はいい？」

「私は大丈夫だよ！」

「私も構いません」

「僕もオツケーだよ」

カイト達の方を向く。

「うん？ 俺は別に大丈夫だ……戦うわけじゃないしな」

「……私も大丈夫」

そして、デューク達の方を向く。

「俺も大丈夫だぜ！」

「私も大丈夫ですよ」

「二人とも、リオレイア任せたよ！」

「任せろ！」「任せて！」

「今度は逃がさないようにするから安心しな！」

「うん、がんばってね！」

私は二人を応援する。

「シズク、何処だ？」

「……リオレウスは4、リオレイアは10」

「だそうだ。がんばれよ」

「ありがとう！」

「感謝するぜ！」

私とデュークは二人にお礼を言う。

「じゃあ皆！ 今度こそ倒すよー！ー！」

「」「」「はい！」「」「」

「がんばれよ」

「……がんばって」

「行こう！」

私達はベースキャンプを出てエリア4へと向かった。

第四十二話「決戦火竜」

第四十二話「決戦火竜」

「居た？」

茂みに隠れながらユミナは、周りの皆に小さく尋ねた。

「うん。こっちに背を向けてるよ」

ユミナの問いに答えたのはアイである。

「そっか。エリカ、どうする？」

「私は貴方に従います。……が、まずは尻尾を切り落とすほうがいいかと」

エリカの提案に頷くユミナ。

「そうだよね……よし！ エリカと私で尻尾を攻撃。

キイはなるべく注意を引いて、アイはキイの援護をわかった？」

「うん」

それに繋げて、斬り上げ、斬り下ろし、突き、斬り下がり。
入れ替わるようにエリカが突っ込んできた。

「斬ッ！」

振り下ろされた一撃は翼膜を切り裂く。

そのままなぎ払い、足へと集中攻撃する。

キイが頭に連撃を叩き込み続ける。

アイも先ほどのように、腹と足を的確に撃つ。

暫く攻撃し続けるとリオレウスの視力が回復し、後ろへと飛んでブレスを放った。

ドガンッ！！

炎弾があたった場所が爆ぜる。

しかし、そこにはすでに誰も居なかった。

いつの間にかリオレウスの着地点へと移動していたユミナが、地面を思いつきり蹴って後ろへと下がった。

ガン　バチイ！！

シビレ罫が展開された。

グガアッ！！？

見事に掛かり身動きが取れなくなった。

「本気で行くよ！！」

ユミナの鬼斬刃から電撃が奔る。

「ハッ！！！！」

ズザアアアアアーンツ！！！！

雷撃がリオレウスを切り裂く。

「行くよ！ たああーっ！！！！」

キイがフロストエッジ改を構えて振り抜く。

シャキン！ シャキン！ シャキン！

キイが斬り付けた部位が凍りつく。

「……逃がしませんよ？」

エリカがティタルニアを振るう。

黒い電撃がリオレウスを襲う

龍属性である。

バチツバチツ！！

リオレウスがブレスを吐いてくる。

「ふっ！」

それをヒラリとかわしながら、さらに間合いを詰める。

目の前まで来たところで、リオレウスが半歩下がり体を仰け反らせる。

それを見た瞬間、アイが叫んだ。

「ユミナちゃん！ それはブレスだよ！！ 避けて!?!」

ユミナは走るのを止めずに、目の前まで来たところで思いっきり太刀を、

地面へと突き刺して飛び上がった。

太刀の柄の部分へとのぼり叫ぶ。

「エリカ!?!」

「!?!」

呼ばれたエリカは何かを察し、大剣を思いっきりリオレウスの真上へと投げた。

リオレウスからブレスが放たれる。

ゴオオオオオオーッ!!!!!!

ユミナは勝敗を聞いた。

「はい、私達の勝利です」

「そっか……よかった」

エリカが優しく微笑みながら言うのに、安心するユミナ。

「それにしても最後のはどうかと思うよ」

「まあ、いいじゃない勝ったんだから」

「ユミナちゃんは適當すぎるよ……」

アイが叫ぶ。

「あんな危ないことしないでって、前にも言ったのに……もうバカ
)……」

「ごめんってアイ、次はもう……多分……しないと思っから？」

「絶対しますね……」

「うん、絶対にするね……」

呆れたようにエリカとキイが言った。

「……約束だよ？」

「うん、約束ね」

皆で笑い合う。

「さて、剥ぎ取るのか？」

私は起き上がりながら皆にそう告げる。

「はい、そうですね」

「みんなは～素材を何に使う？」

アイの質問にキイが答える。

「僕は武器にしようと思います」

「へえ～そっか、私も武器に使うよ～！」

「私も武器に使うよ……」

ユミナの言葉に驚いたように返すアイ。

「へっ？ そうなの？ 防具じゃないの？」

「防具はこの間新調したばかりじゃない……」

「それもそうだったね～」

納得するアイ。

「エリカは何に使うの？」

「…………私ですか？ 私は使うことがないのでユミナ達にあげますよ？ 素材…………」

「えっ！？ いいの？」

「ええ、これで防具も作れるんじゃないんですか？」

「うん…………本当にいいの？」

「いいですよ」

「…………ありがとね」

互いに微笑む。

「よし！ じゃあ、剥ぎ取って帰ろう！」

「…………はい…………」

ユミナ達は剥ぎ取りを始めた。

それが終わる頃に、カイトとシズクが姿を現した。

「終わったか？」

「…………終わった？」

何に対しての質問かは良くわからなかったが、一応やることを終えていたユミナは返した。

「うん！ 全部終わったよ」

「そっか、皆お疲れ様」

カイトは皆を労っていく。

「カイト、デューク達の方は終わったかわかる？」

「ん、無事に倒し終わってたぞ」

「そっか、やっぱり二人とも早いな」

「お前達も早いほうだと思っぞ」

「そっかな？」

「そっだ」

ユミナを撫でるカイト。

「終わったなら、帰るか」

「うん！」

「帰ろっ！」

「はい！」

「ええ！」

皆が元気に返事をする中、シズクが呟く。

「お兄様」

「……わかつてる」

「「「「??」「」「」」

二人以外は何の事だか全くわかっていないようだ。

「……敵、来た」

「そのようだな」

シズクに同意するカイト、皆はその一言にとても驚いた。

「うそっ!?!」

「今からはきついよー!!」

「アイテムもあまりないしね……」

「何が来たのですか?」

その中でもエリカは落ち着き払っており、冷静に対処しようとしている。

「……ドスランポス」

「ドスランポスですか……何とかなるでしょうか？」

エリカはユミナに向けて問う。

「うん、ドスランポスぐらいなら多分大丈夫？」

後を続けるようにシズクが言う。

「……5頭」

「……はあっ！！？」

「……ランポス、約100頭。こっちに向かっている」

シズクの爆弾発言に、

「いやいやいや、無理だから！」

キイは突っ込み。

「5頭って何でそんなに……」

考え込むユミナ。

「大変だね」

以外に落ち着いているアイ。

「……逃げたらいいのでは？」

当たり前のことを言うエリカ。

黙っていたカイトが口を開く。

「……まあいいや。俺とシズクが倒すから」

「……私も？」

「ああ、いつもどおりでいいだろ？」

「……いい」

コクリと頷くシズク。

「カイトがやるの？」

「ああ、俺がやるよ。……ユミナ達はエリア5から先に、ベースキャンプへと帰っててくれ」

少し考えた後に、

「……わかった。皆！ 裏から帰ろう！」

了承した。

「いいの〜？」

「大丈夫なの？」

「ご迷惑かけます……」

三人はカイトとシズクを見ながらユミナに聞く。

「うん、カイトとシズクなら大丈夫よ！」

「早く行け」

「わかってるよ……。気をつけてね？」

「誰に言ってるんだか……」

「……心配ない」

カイトとシズクはユミナに心配させないように返す。

「じゃあ、またね！」

ユミナ達は走っていった。

それと同時にランポスの大群が見えてきた。

「シズク」

「……？」

「行くか」

「……うん」

2人のランポスとの戦闘が始まった。

第四十二話「決戦火竜」(後書き)

リオレウスは倒し終わりましたけど……ドスランポスが！？
次回はカイトとシズクだけです！

EX:04 「椎名兄妹VS青の脅威」(前書き)

カイトやシズクが戦うとモンハンじゃないですね…^^;
そついうのが嫌いな方、本当にすみません！

EX:04 「椎名兄妹VS青の脅威」

EX:04 「椎名兄妹VS青の脅威」

目の前にランポスの大群が押し迫る。

沢山居るな……。と数えるのを止めて、シズクに声をかける。

「シズク、武具召喚で詠唱破棄だ」

隣に立っていたシズクはコクンと頷いた。

「……………うん」

「よしやるか」

俺達はランポスへと一歩踏み出し、手を出した。

「ディアボロス 『連華魔弾の双銃』」

「ブロンズトレイピア 『血塗られし紅い細剣』」

俺の両手には、紅と漆黒を基調とした二丁拳銃が握られていた。

シズクの右手には、刀身の紅いレイピアが握られていた。

「冥府の大鎌じゃないのか？」
ハデス

「……今日は違う。そういうお兄様も」

「ああ、加減が効きやすくていいだろ？」

「……うん、お兄様は加減が下手」

心にグサリと突き刺さる。

「……ソナナコト、ナインジャナイカナ？」

必死に声を絞り上げ返すと、さらに追撃が俺を襲う。

「……下手」

言い訳のように呟く。

「……態と何だよ」

「……うん、知ってる」

「……なんだろ？ 虚しい？」

「……行かないの？」

「行くよ、行きますよ。……ボロボロにしてやるぜ」

完璧な奴当たりであるが、俺は全く気にしない。

双銃をランポス達に向けて引き金を引いた。

高速で打ち出される弾を連射していく。

前の方に居た集団に弾幕を張るように撃つ。

ダダダダダダダダダッ！！！！！！

弾は俺の魔力で作っているので、魔力がある限り無限に打ち続けることができる。

(まあ、俺の魔力が尽きることなんてないがな)

怯んだ集団へと撃ちながら突っ込む。

銃で殴る。

足で蹴る。

弾を撃つ。

の三つを軸にした、体術で敵の数を減らしていく。

一方のシズクは、レイピアをランポスたちに構えて、神速の突きを連発していた。

その突きによって、真空刃が多数発生しランポス達を葬っていく。

「……白雨」

跳び上がり、刺突の真空刃を雨のように降らせる。

「……黒霧」

自身が高速でランポス達の間をすり抜け、擦れ違い様に斬っていく。

「……灰霜」

神速の下段突きで足を潰していく。

「……まだ、沢山いる」

レイピアに付いた血を振り払いながら呟くシズク。

(流石に早いな……俺もヤルか)

敵を倒しながらシズクを見ていた俺は、そう思いながら双銃を構える。

「乱れ嵐！」

あたり一面に乱射する。

それは正に嵐のような勢いで敵を削っていく。

「まだまだ！ ゴースクリムゾン！！」

弾に炎の魔力を込めながら引き金を引く。

弾が着弾すると同時に爆ぜた。

炎がランポス達を焼き尽くす。

「次！ フラットアイシクル！！」

今度は氷の魔力を弾へと込める。

それを敵の足元へと撃つと、地面から氷槍が出て敵を貫き凍らす。

凍ったランポスは少し衝撃を与えただけで、脆く碎け散ってしまった。

「はっ！！ ボルトレイン！！」

雷の魔力を込めながら、敵の頭上高くへと跳び上がる。

銃口を下に向けて放つ。

雷撃が落ち、ランポス達を蹴散らす。

着地と同時に近くにいたランポス達を蹴り殺す。

俺の視界が何かを捉えた。

「ん、真打登場か……」

ドスランポスが頭位がこっちに接近していた。

「…………お兄様」

いつの間にか戦いを切り上げたシズクが後ろにいた。

「そうだな…………俺3シズク2だ。いいな？」

「…………うん」

それだけ聞くとシズクは、先ほどの場所へと戻った。

ドスランポス2頭がシズクの方へと行き、残りが俺のところへと来る。

「一気に片付けるか…………」

双銃をクロスさせ、精神を集中させる。

「…………詠唱破棄で…………『ダイバインクロス』！！」

魔方陣を展開し、上位魔法をドスランポスへと放つ。

ドスランポスは無数の魔方陣に囲まれた。

魔方陣から光線が放たれる。

光線に焼き払われて、ドスランポス達は消滅した。

シズクの方も丁度倒したみたいである。

「シズク！ 後はランポス達を適当に倒してくれ」

「……………うん」

そういつて俺はランポス達の掃討に掛かるうとした時、
視界の隅に何かが移った。

(なんだ？ あれは……………?)

それは、ドスランポスを一回り位大きくした姿だが決定的に違うところがある。

それは空を飛んでいる……………つまり翼があるのである。

ドスランポスに翼を生やしたようなモンスターであった。

(古龍種か？ 嘴があるから鳥竜種か？)

……………見たことないな、何にしても新種のモンスターか)

その謎のモンスターは踵を反し飛び去った。

「まあ、危険がないなら放って置いてもいいか」

俺はモンスターのことを考えながら、ランポス達を掃討し始めた。

(ギルドに報告しておくべきか？ ……面倒だからいいか)

そう結論付けた。

掃討し終わると、シズクと合流した。

「……終わった」

「応！ お疲れ様」

「……お兄様も、お疲れ様」

俺達は互いに労った。

「帰るか！」

「……うん。ユミナさん達が待ってる」

「そうだな……早く帰ろう！」

俺はシズクの頭を撫でながら、ユミナ達が待ってるであろうベースキャンプへと、ゆっくりと歩きながら向かった。

EX:04 「椎名兄妹VS青の脅威」(後書き)

魔法や武器について知りたい><

って方がいたら、言ってください^^

それらについて書きたいと思います。

他にもご意見・ご感想は大歓迎です^^

ドンドン送ってね？

では、まだ次の話でお会いしましょう…。

第四十三話「次なる道標」

第四十三話「次なる道標」

ベースキャンプに帰りついた私達は、カイトの帰りを待っていた。入り口から足音が聞こえた。

「カイト？」

そう問いかけると相手は苦笑交じりに返事をした。

「違うぞ。デュークだ……残念だったなカイトじゃなくて」

続いて、もう一人も返事をした。

「カイトさんがどうかしたの？」

「デューク！ サラ！ お帰り、無事に倒せたんだね？」

「もちろんだ！ ……そういうお前らも無事に倒せたようだな」

「でもカイトさんはどうしたの？ 見かけないけど……」

そう聞いてくるサラに事情を話した。

「そうなのか」

「そう」

それを聞いて、状況を把握した二人。

「大丈夫だよ！ カイト君なら」

「あの人は簡単には死にそうにないね……」

「カイトさんなら負けはないです」

そう口々に話す、アイ、キイ、エリカの三人。

「確かにな……カイト達なら大丈夫だろ？ 只者じゃないからな……」

……

「ええ、只者ではないね……何者なのかしら？」

それに頷く、デュークとサラの二人。

「そうだね。カイト達なら大丈夫だよね！」

皆の話を聞いて無理やり自分を納得させた。

それから30分位待っていると、カイト達が帰ってきた。

「ただいま」

「……ただいま」

それを皆で迎える。

「二人ともおかえり」

「おかえり〜」

「おかえりなさい」

「お疲れ様」

「おつかれ〜」

「お疲れ様でした」

皆が揃ったところで私は言う。

「じゃあ、帰ろっか！」

「」「」「うん」「」

「応！」

「はい」

「ああ」

「……うん」

話は竜車の中でもできるからね。

カイトやデューク達の話しを聞きながら、私達はレーユ村へと帰っていった。

村に帰り着くと、お祭り騒ぎのように村の皆が騒いだ。

リオレウスとリオレイア討伐の祝勝会を開いてだ。

村の皆が私達を褒め、労った。

ある程度まで騒ぎが落ち着いてくると、私は一つのテーブルに腰掛けた。

そこにアイが来た。

「あれ？ どうしたのユミナちゃん」

「アイ。ちょっと疲れたから座ってるの」

「そうなんだ〜」

そういつて私の隣へと腰掛けた。

アイが私に話しかけてくる。

「私達……少し強くなったね」

「……そうだね。最初の頃よりは強くなったね」

「リオレウスを倒したんだもんね」

「でも、まだまだ上はあるからね」

「うん！ がんばらなくちゃだね」

私も昔を思い出しながらアイの話に返事をしていた。

リオレウスに襲われた。

一人の少年に助けられた。

少年の強さに惹かれた。

そしてハンターになることを決めた。

もう一度会うために「会いに行く」と約束した。

(結局、カイトから会いに来た……んだけどね。

でも、これはこれでとっても嬉しい)

そう考えると自然と顔が笑ってしまふ。

アイと話をしているとキイとエリカがこっちに来て、椅子へと腰掛けて会話に混ざった。

「みなさんお疲れだね……」

キイも少し疲れたような顔をして話しかけてくる。

「そうですね……手荒い歓迎を受けた気分です」

エリカがそれに同意する。

暫く他愛の無いことを話し続けていた。

そして、これから何するかについての話になった。

「これからどうしますか？」

そう聞いてきたエリカに答えたのは、いきなり現れたカイトだった。

「そうだな……街にいつて依頼受けて、上位クラスになったらどうだ？」

「上位クラスですか？」

エリカが聞き返す。

「そうだ。上位になればさらに難しい依頼を受けることができる。難しいが、レアな素材が手に入るから強くなるにはピッタリだ」

そう聞いて皆が考え込む。

「エリカさんは上位なんですか？」

ふと疑問に思ったのか、キイがそう尋ねた。

「私は上位クラスです」

「そっか〜エリカさんは上位なんだね〜」

「エリカ、上位なんだ……分かってはいたけど」

「てことは、僕達だけなのか……」

それぞれが感想を言う。

「で？ どうするの？」

カイトが皆に意見を求める。

「カイト達はこれからどうするの？」

「質問を質問で返さない……上位になるまではユミナ達と一緒に行動するつもりだ」

「上位になってからは？」

「ん〜？ その時はまたその時考える」

「そうなんだ」

皆に向かって聞く。

「私は上位クラスになるために街に行くのはいいと思うけど……皆

はどじっ?」

「私はOKですよ」

「僕も構わない」

「私も大丈夫」

皆の言葉を聞いた私は、カイトへと向き直る。

「……っでことで、私達は街に行くことに決めました!」

「そうか」

「うん」

「じゃあ早速明日の朝向かうか?」

「」「」「はい!」「」「」

ずっと黙っていたシズクが口を開く。

「……お兄様」

「なんだシズク?」

「……お腹空いた」

「……は?」

カイトは一瞬、全く関係のないことを言われて固まった。

「……だから、お腹空いた」

「……なんで今それを言うんだ？」

「……お腹が空いたから」

「……はあ」

カイトが溜息をつく。

「仕方ないなシズクは……」

「……むう」

「私が持ってきてあげようか？ シズク」

「……ユミナさん……本当？」

「うん！ 任せて！」

「……ありがとう」

「悪いな、ユミナ」

「気にしないで……私がしたいからいいよ。皆も何か食べる？」

「食べる？。私も運ぶの手伝うよ」

「食べます。私も手伝います」

そういつてアイとエリカが立ち上がる。

「僕も何か欲しいです」

「俺も頼む」

「……美味しければ、何でもいい」

三人で運んできた料理を皆で食べながら、話を続けていった。

次の日の朝。

皆が村の前に集まった。

目の前には竜車がある。

「皆準備できた？」

「できたよ」

「できた」

「できました」

「俺はいつでもいいぜ」

「……OK」

「じゃあ行くっか？」

「」「はい！」「」

「上位クラスになるために、ドンドルマへ出発！」

こうして竜車に乗って街へと向かった。

ドンドルマの酒場。

カウンターに座る男と傍に立つ女が話していた。

「……マスター」

「なんだ？ ……レイ？」

男はハンターズギルドのギルドマスターであり、
女の方はギルドナイトである。

「報告したいことが多々あります」

「そうか、言ってくれ」

「例のあの件ですが……新種のモンスターが度々目撃されるようで

す

「ほう、それでどんなのなんだ？」

「いえ、詳しい事は何も判っていませんが、

……ドスランポスの大量目撃等と関係している可能性があります」

「少し前に話題になった……」ドスランポスのさらに上の統率個体
”のことか？」

「はい」

「しかしあれは、結局何も見つからないで流れてしまったね」

「はい。……ですが最近は何と確認されています。

モンスターの動きが活発になっていると考えれます」

「だが何も判ってないので対処のしようもないか……」

「はい」

「で？ 他に報告したいことは？」

「今年の卒業試験のことを覚えていますか？」

「ああ、もちろん覚えているよ。統率個体の疑いで賑やかだったからね」

「それです。その時の卒業生でドスランポスの集団と戦った生徒覚えていますか？」

「……………“ユミナ・アリアス”“アイ・フロース”
“キイ・レディルト”の三人のことかな？」

「はい。彼女達にもう一度話しを聞けば何か判るかも知れません」

「だが、居場所とか　「三人ともレーユ村です」……………そうかい」

「しかも、あの三人は“エリカ・リヴィア”を入れた四名でチームを組んでいます」

「へえ、あの“エリカ・リヴィア”が一緒なのか……………凄いね」

「……………あの四人の所にカイト様とシズク様がいます」

「それは本当か!？」

「はい、確かな情報です」

「何故!?　いやカイトが考えることは謎だらけだから解らないか……………」

「この6名は今ドンドルマへと向かっております」

「……………何で?」

「多分……………上位に上げるためじゃないでしょうか?」

「……………そうか。　そうだ!？」

「なんでしょっ?」

「上位への昇格試験に新種の調査と、ディアブロスの討伐を依頼し
「よう」

「なるほど……それは確かにいい案だと思います」

「カイト殿は何でも付いて行く筈だしね」

「早速手配しておきます」

「レイもギルドナイトとして影ながら同行してくれ」

「畏まりました」

レイと呼ばれた女ギルドナイトは、自分の仕事をするために立ち去った。

残されたギルドマスターは、溜息をつく。

「はあ〜。いろいろと厄介だな……面倒事は止めてくれよ、カイト」

ギルドマスターも立ち上がり自分にできることを探した。

第四十四話「悪魔の眼とユミナの優しさ」(前書き)

更新とても遅れました><

すみません！でも、いつもより長めです。

第四十四話「悪魔の眼とユミナの優しさ」

第四十四話「悪魔の眼とユミナの優しさ」

ユミナこと私達は今、ドンドルマへ竜車に乗って移動している。

私とアイとキイの三人が、上位へとなるためである。

その竜車に乗っている私達だが、アイとカイトが何かを言い合っている。

「え〜と、……リオレイア！」

「アプトノス」

「す……す……水剣ガノトトス！」

「水刃剣ガノトトス」

「また“す”！？ ……ストラテジー！」

「お！ 中々やるじゃないか……ジークリンデ」

「ふふ、前の私とは違うのだよ……で、で、……」

「前にも言ったが、“て”でもいいぞ？」

「うん、……鉄刀！」

「ウカムルバス」

「また“す”?!?!? ……す、す……」

たしかカイトが“しりとり”と言っていた言葉遊びである。

私はそのルールを覚えるため、実際にやってるカイト達を観察していた。

他の皆はというと、キイは自分の片手剣……“フロストエッジ改”を手入れしている。

エリカは静かに本を呼んでいる。

シズクは静かにカイト達を見つめ続けている。

(前から思っていたけど……あの瞳綺麗だな)

右目が蒼、左眼が朱鷺といった変わった色であったが、私はとても綺麗に見えた。

あまりジロジロと見るのも失礼になると思っ、カイト達のほうに視線を戻した。

「す……うわ〜ん!! 無いよーっ!!」

「まだまだだな」

「カイト君が強すぎるんだよ！」

「そんなことは無い……それにまだあつたぞ？」

「たとえば？」

「スパルタカスブレイド」

「……いやいや、そんなの出てこないよ」

「じゃあ、水竜の鱗」

「ああー！？ それがあつたー！？」

「だろ？」

「むう……私の負けを認めるよ」

「いや、認めなくても負けだからな……？」

「もう一回勝負だ！ カイト君からで“な”からね！」

「別にいいぞ」

なんかまた始まりそうだな。

（それにしても、2人とも仲いいな）。

2人とも楽しそうに笑ってるし……なんか羨ましいな)

少し寂しくなってきた。

(そろそろ入れってもらおうと、……そうだ、シズクも誘ってみよ)

「2人とも私も入れて？」

「OKだ」

「ふふ、ユミナちゃんには負けないよ」

おーけー？

入ってもいいってことだろうか？

「シズクも一緒にやろう？」

「……私？」

「うん！」

「……わかった」

こうして4人で輪を作った。

「俺から右回りな……ナルガクルガ」

カイト、アイ、私、シズクの順で回るらしい。

「ふふ、さっきまでの私とは違うよ！ 岩竜の鱗！」

「こ？ ……えっと、黒刀【零ノ型】」

「……ダイミヨウザザミ」

「眠剣ザントマ」

「この二人言うの速いよ！？ ……ま、……マタタビ！」

「び……うん、飛竜刀【紅葉】」

「……ジークリンデ」

「ディアブロス」

「水剣ガノトトス！」

流石に“す”に慣れていたので、言うのが速かった。

「す……じゃあ、水光原珠？」

「……お兄様、この場合は？」

「ん？ “し”か“ゆ”のどちらかで始めて」

「ん……修羅【羽衣】」

「やるな……“しゆ”で行きやがった。……モス」

「また“す”！？ ……水刃剣ガノトトス！」

「す……………睡眠袋？」

「ユミナちゃん凄いね！？」

「えっと、偶々だよ……………」

「……………ロイヤルカブト」

「シズクもやるな……………ドドブランゴ」

「こ……………こ、こ？ ……こんがり肉！」

「く……………く……………クラブカッター」

「……………タクティクス」

「水竜の鱗」

「こ……………こ……………こやし玉！」

「ま？ ……マカライト鉱石」

「……………ギルドナイトセイバー」

「ババコング」

「が……………か……………火薬岩！」

アイが自信を持って何も考えずにいった言葉。

それに皆が反応した。

「アイ……アウトー!!」

「アイの負けだね……」

「……負け」

アイは驚いたような表情になる。

「え!?! なんぞ?」

「もう一回さっきの言ってみる」

「……火薬岩……あ!?!」

「わかったか?」

「私の負けだね……」

アイは残念そうに言う。

すぐに立ち直ったかのように顔を上げて言う。

「もう一回勝負だよ!」

「はいはい、わかったよ」

このやり取りがドンドルマへ着くまで続いた。

「よづやく着いたねー!」

私は竜車から出て体を伸ばす。

「うう……結局全部負けたよ」

アイが私に続いて出てくる。

皆が竜車から出たところでカイトが話を切り出した。

「さて、早速ギルドにいつてみようか」

「うん、マスターに聞けば分かるの?」

「まあ、詳しいことはわかるぞ」

「そっか」

「まあ実際依頼を始めるのは明日からだかな」

キイが疑問を口にする。

「なんでですか?」

「今日はもう遅いからな……それに疲れてるだろ?」

そういわれて自分達が意外に疲れてることが分かった。

それに納得したキイは頷いた。

「じゃあ、行くぞ?」

「」「」「はい!」「」「」

「……うん」

カイトに連れられてギルドへと向かった。

数分してギルドに着くと、ドアを潜って中に入った。

中は活気で溢れていた。

酒の飲んで騒ぎ合っている人達がたくさんいる。

とりあえずカウンターへ向かおうとした私達だったが、ある声がそれを邪魔した。

「うわっ!? アイツ悪魔イビルアイの眼だぜ!?!」

ある男がシズクを指差しながらそう叫んだ。

それを聞いて騒ぎ合っていた人たちが静かになっていく。

一部の人がひそひそと話し始めた

悪魔の眼が何でこんなところに!?

不気味だわ……早く消えてくれないかしら

一緒にいるあいつ等も悪魔か?

それを聞いた私達は愕然とした。

カイトとシズクは黙っている。

そこに一人の男と女が出てくる。

「ここはハンターが来るところだ! 悪魔が来る場所じゃねえぜ!」

「そうよ! 気持ちが悪い……あなたなんて死んでしまっ方が世のためよ!」

シズクに向かって罵詈雑言を投げってくる。

それに私はイラついて声を上げる。

「ふざけないで! シズクは悪魔なんかじゃないよ!

あと行って良いことと悪いことがあるよ! あなた達はそれすらも分からないの!？」

それを聞いてアイも私に加勢する。

「そうだよー! シズクちゃんはとていい子なんだよ?」

キイトとエリカも加わる。

「そんなのあんまりだよ！　ちょっと違うから差別なんてあんた達最低だよ！！」

「最低下劣の屑ですね……あなた達の方こそ一回死んで来たらいいのでは？」

男女と私達の言い争いが続く。

カイトとシズクは黙ったままだ。

周りの一部の人達はカイトとシズクを見て固まっている。

そのほかの人たちは静観したり、囁し立てる声も聞こえる。

「こんなに綺麗な瞳なんだよ！　シズクの何処が悪魔なの！？　全然怖くないし……とても綺麗だよ……！！」

「！！！？」

私の言葉にシズクがビクリと震える。

カイトとシズクは私たちに聞き取れないぐらいの声で何か話しているようだ。

「はあ……お前等もその悪魔に洗脳されているだけだ！」

「そつだね！　もうこの人たちも悪魔だよ！！」

「居なくなっても問題ないぜ！」

「だね！ 後悔しなよ……その悪魔と居たことを！」

そういつて武器を取り出してこちらに向ける。

カイトが呟く。

「……お前等は武器を抜くなよ」

私達はそれに従った、次の瞬間。

カイトが私達の前に出た。

カイトを見た瞬間周りが騒然とした。

あいつ、この前のラオシャンロンの時の！？

ああ、ハンターの武器ごと破壊した奴だ。

あの2人死んだな……。

カイトは意外と有名らしい。

「おお？ 何だよお前……お前から死ぬか？」

「キヤハハ！ まずはこいつから殺そうよ！」

カイトは冷たく相手を見つめる。

「…………お前等…………そんなに死にたいのか？」

カイトから殺気が放たれる。

そこに割り込むように声が掛かった。

「やめんか！」「そこまでだ！」「そこまでです」

そこには、男2人、女1人がいた。

ギルドマスターだ！

おい！ その隣の男は“ 剣聖のジークハルト ” じゃないか！？

ああ、しかもその隣の女はギルドナイト………… “ 閃光のレイ ” だ。

まじかよ！？ 伝説級の二つ名持ちが二人もここに！？

「…………何故止める？」

「始めましてカイト様」

“ 閃光のレイ ” と呼ばれた女の人が頭を下げる。

「お前は…………いつも後をつけてくるギルドナイトか」

「流石です…………お気づきでしたか」

「ああ、気付いていたのは俺とシズクだけだがな」

「うわっ！？ “閃光”が頭を下げたぞ！」

「本当に何者だアイツ！」

「止めるのは当たり前さ……カイトは手加減しないだろ？」

「失礼な奴だな、ジークハルト……貴様……偉くなつたもんだな？」

「カイトには負けますよ」

「久しぶりに会って言うことがそれか……飛竜の巢にぶち込むぞ？」

「冗談でも止めてください……カイトが言つと洒落になりませんか」
「ら」

「……本気だな」

「……遠慮しときます」

“ 剣聖 ” までもがが！？ ヤバイゼアイツ！！

何者なんだ！？ 誰か知らないか！

「カイト……」

「久しぶりだなマスター」

「あれほど壊すなつて言ったのに、直すの大変だったんだよ！！」

「……まだ怒っていたのか」

「当たり前だ……ただ働きしてもらおうからな！」

「仕方ないな……この2人消した後ね」

カイトが話を打ち切り二人に迫ろうとする。

「だから止めて!？」

「断る……こいつ等は言っではいけないことを言った」

「カイトは人間が耐えられるレベルじゃないからね!？」

「うるさいな……俺を敵に回すか？」

その一言で、辺りが凍りついた。

「それはできん……」

「じゃあ、こいつ等を渡せ……殺しはしない」

「しかし!」

「全面戦争か？」

「くっ……!？」

マスターは渋々と言った感じにどいた。

そこに私が声をかけるより早く、シズクが声をかけた。

「お兄様！」

「……なんだシズク？」

「……殺しちや、駄目」

「……ふふ、解ってるよ。優しいなお前は」

カイトが二人に近づく。

そして、一、二言呟いた。

「。。。」

すると二人は何かにも包まれて倒れた。

「カイト殿！？ 何をしたんだ？」

「少し夢を見せているだけだ……勿論“悪夢”だがな。

別に命に別状は無いぞ？」

「そうですねか……それならいいです」

マスターが周りの人たちに運ぶように言う。

私は安堵していた。

（よかった……シズクも無事だし、カイトが人を襲うところは見
なくなかったから）

カウンターのところまで移動して話を始めた。

「マスター……俺が言いたいこと解る？」

「上位試験のことだよな？」

「流石だな」

「勿論用意してある……が、カイトには別のことを頼みたいんだが……」

「……ジークハルトがここに居ることも関係してるな？」

カイトの言葉に頷くジークハルトさん。

「流石はカイト……見事な慧眼だね」

「まあいい、ユミナ達にはシズクをつける……いいな？」

私達全員への問いかけだ。

「勿論だ」

「うん」

「……私もいい」

マスター、私、シズクの順に答えた。

「じゃあ成立だ。上位試験の内容から話せ」

「では、私から話します」

そこに出てきたのは……レイ？ さんだった。

「試験内容はディアブロス討伐と、新種モンスターの調査です」

「……新種モンスター？」

カイトが聞き返す。

「はい、一時期噂になった“ドスランポスよりも上の統率個体”
について調査してもらいます」

私とアイとキイの三人は卒業試験のときを思い出した。

「あれは、噂じゃなかったんですか？」とキイが聞く。

「はい、目撃情報が相次いでいて……本格的に調査をすることになりました」

「そっか、あの時の私達だからこそその依頼だね」

「はい、その通りです」

アイの言葉に肯定するレイさん。

何かを考え込んでいるカイト。

「……もしかして、ドスランポスを一回り大きくして翼生やした感じのアレか？」

カイトが恐る恐るそう聞いた。

「それだな！」「それです！」「それだ！」

マスター、レイさん、ジークハルトさんの三人が叫ぶ。

「ああ……それ俺見たわ」

「何処ですか!？」

カイトに詰め寄るレイさん。

「えっとだな……」

当時の状況を話し出した。

驚いたことに、私達のリオレウス戦の後のドスランポスが現れた時のことであった。

大量のランポスと、5頭のドスランポスに隠れるようにそれが居たらしい。

そして飛んで逃げ去って行ったらしい。

「これは……確定ですね」

レイさんが話しを聞いて頷く。

「とうとうとで、ユミナさん達にはディアブロス討伐と、
新種モンスターの調査……遭遇したら討伐、できたら捕獲で願
いします」

「……はい!」「」

「これをクリアしたら、晴れてあなた達は上位ハンターです」

上位ハンター……これでまた一步カイトに近づくことができる。

「続いて、カイト様をお願いしたい件ですが……」

「それは俺から話しますよ」

ジークハルトさんが割り込む。

「どっちでもいいからとつとと話せ」

「では、カイトには俺と一緒にあるものを狩りに行って欲しい」

「そんなのお前一人でも大丈夫だろ？」

「うーん、それが少しキツイんだよ……」

「お前がか? ……全く何と戦わせるつもりだ、お前等は?」

「それはね……グラビモスの亜種だよ」

「は? それぐらいお前1人で十分じゃないか」

「1頭ならね。数が尋常じゃないんだよ……それとG級だからね？」

「強さはG級……尋常じゃない数……俺、帰っていい？」

「駄目だよ、それにこれはもう決定事項だから」

「ちょ！？これ強制かよ！」

「お礼はちゃんとするよ？」

「マジかよ……因みに数は最低どれだけ確認されている？」

「……………」

「オイ！」

「……………最低、20頭だな……………」

20頭！？しかもそれが最低ライン！？

カイト大丈夫かな……………？

「……………」

「……………」

「オイ、コラチヨトマテヤ！」

「何だ……………」

「ハンターありつたけ出して討伐に行けよ!!」

「G級ハンターは少なくてね……」

「嘘つくな!? てか、2人!? 2人だけで討伐に行くの!?!」

「……まあ、そうなるね」

「オイオイ! 二つ名持ちを総動員しろよ! てか倒す必要あるの!?!」

「二つ名持ちは俺と“閃光”しか今いない。倒す必要はあるぞ?」

「閃光……ギルドナイトか! じゃあこれで3人だな」

「いや、それはできない」

「何故!? 何で!? WHY!?!」

わあい……? 偶にカイトは聴きなれない言葉を使うな。

「上位試験の試験官役だからだ」

「……マジかよ」

カイトはガツクリと肩を落とす。

「……予測する最高の数は?」

「3桁……は超えてない筈だ」

「そりゃあね！ 超えていたら生態系がブチ壊れるよ！？」
「というか、既にブチ壊れているよ！！！」

「まあ、多分超えてない筈だ……」

「自信を持って言っただけ!?」

カイトは大変だね……というか、本当に大丈夫かな？

「……ハア、仕方ないな。OK、分かったよ……了解しました」

「ありがとう」

カイトは了解して様だ。

今まで黙っていたマスターが声を出す。

「じゃあ、明日からにしよう。今日は休んで……宿はこちらで用意しておくから」

その一言で解散となった。

……夜。

私はユミナさんの部屋へと向かっていた。

昼間のお礼を言うために。

他の皆にはもう伝えた、最後はユミナさんだけ。

コンコン。

私はドアを控えめにノックする。

『はい？ 開いてますよー』

ガチャリ。

ドアを空けて部屋の中へと入る。

「あれ？ シズク、どうしたの？」

「……昼間のお礼」

そう告げると、ああ！ と思い出したかのように頷いた。

「……ありがとう」

「別に気にしないでいいよ！ 私達は当然のことをしただけだから」

「……でも」

「私達は仲間……友達だよ？」

その言葉で私の心は温かくなった。

「……怖くない？ 気持ち悪くない？」

いつか、始めてあったお兄様に聞いたこと。

ユミナさんはニコリと笑うと、

「こんなに綺麗な瞳なんだよ？ ……自信を持たないと勿体無いね

！」

そう言った。

「……綺麗？」

「うん、とても綺麗……もっと見てもいいかな？」

「……うん」

私は照れながらもジッと見つめてくるユミナさんを見つめ返した。

「うん！ やっぱり綺麗だね」

「……ありがとう」

(ユミナさん……やっぱり、お兄様に似てる)

私はユミナさんに抱きついた。

ギルドの中でお兄様との会話を思い出した。

どうだ？ ユミナは？

……うん、お兄様と同じ事言ってる。

面白いだろ？

……うん、大好き。

そうかそれは良かった。

「……ユミナさん」

「何？」

「……お兄様共々、よろしくお願いします」

「……！」

ユミナさんが驚いたような顔をした。

「……？ どうしたの」

「私、シズクの笑顔始めてみたかも」

笑顔？ 私は今笑ってるの？

確認しようは無いがユミナさんが言ってるのなら、私は今笑ってるのだろう。

「「じちら」そ、よろしくね」

「……うん」

その後、お兄様の話をたくさんして部屋へと帰っていった。

……私のせめてものお礼。

第四十四話「悪魔の眼とユミナの優しさ」(後書き)

次回はディアブロス討伐です！

遂に新種のモンスターもその全貌を現します！

お楽しみに^^

今回は長めで、やや“シリアス”で割と“コメディ”？
を入れてみました！

感想などがあつたら言ってください！

キャラ紹介などは必要でしょうか？
必要だと思つ方は教えてください！

第四十五話「上位試験」(前書き)

更新…遅れました><

次こそは…つて、不定期更新なんですけどねーっ！

文才の無さを改めて感じた今回の更新でした…。

第四十五話「上位試験」

第四十五話「上位試験」

朝早くから酒場に集まる集団がいた。

その集団は円を作って話し合っていた。

積極的に話に参加しているのが、

ユミナ

エリカ

閃光のレイ

ギルドマスター

の四人である。

他五名は適当に談笑している。

剣聖ジークハルトはカイトと話していて、シズクとキイとアイは三人で話をしている。

この中で剣聖ジークハルトとカイトだけは、背筋が凍るような話を繰り返している。

「ははは、ジークハルト。」

リオレウスの群とフルフルの群、どっちがいい？」

「いえいえ、どちらも遠慮しときますよ……。まだ死にたくはないので……。」

表情は笑っているが、二人の目は全く笑っていない。

「遠慮するな……俺なら簡単に群にぶち込んでやれるぞ？」

「ははは、貴方だからこそ遠慮しているのですよ！カイトは本気でやるから絶対にお断りします」

「大丈夫だ、骨は拾ってやる」

「そういう問題ではないのですが……。」

ジークハルトはガクリと肩を落とす。

ところ変わって、シズク達はしりとりをしている。

「……鬼人薬グレート」

「と、か……ドドブランゴで」

「うーん、こんがり肉！」

「……クックアンカー」

「……速くないか？ 言うの……。か……。怪力の種」

「ね〜ね〜……うっ、ないよ〜私の負けー!？」

「……アイさん、弱い」

「……確かに、強くないね」

「うっ〜！ まだ、エリカさんとは戦ってないもん！」

「……勝てると思うの？」「勝てるの？」

二人同時に言われてアイは、

「……うわ〜ん、勝てる気がしないよ〜！」

嘆いた。

さらにところ変わって、ユミナ達は依頼の話をしていた。

「……騒がしいですね」

「まあまあ、気にしないでエリカ」

「うむ、若い者は元気な方がいい！」

「いやいや！ マスターも全然若いですから！」

ユミナがそう返す。

「そうか？ いや〜照れるね〜」

「マスター、黙っててください。話が進みません」

レイの厳しいツツコミに、マスターは抗議する。

「ええー！？ それは少し酷すぎない！？」

「事実です」

「キツパリ言われた！？」

ギルドマスターは落ち込んで、隅っこで丸まった。

「さて、煩いのが居ない内に話を進めましょうか」

隅っこでまたもや抗議していたが、レイは完全に無視した。

話が始まるうとすると、自然と皆話を止めた。

「上位試験の内容を確認します」

「はい」

レイの問いかけに返すユミナ。

「上位試験の内容は、ディアブロス討伐。」

それと、新種モンスターの調査です」

「はい」

「上位試験を受けるのは、ユミナ・アリアス。

アイ・フローズ。キイ・レデルトの三名ですね？

そして、エリカ・リヴィアとシズク・シイナが付き添うのですね？」

「はい」

それを聞いたエリカとシズクも反応する。

「はい、私も戦います」

「……私は戦わないけど、ついて行く」

「分かりました。ディアブロスの期限は5日。

新種モンスターの調査は一週間です。頑張ってください」

「……はい！」「」「」

「では、竜車を準備していますのですぐに向かってください。

私も道中は一緒に行きます」

それだけ言うと、カイトとジークハルトとギルドマスターを除くほかの皆が立ち上がった。

「……お兄様、行ってくる」

「ああ、気をつける。ちゃんと見ておくんだぞ。」

「……うん」

カイトはシズクの頭を撫でる。

それを気持ちよさそうに受けて離れた。

「カイト、いつてくるよ!」

「カイト君、いつてきます!」

「カイトも気をつけて!」

「カイトさん、いつてきます!」

「ああ、頑張つて来い!」

カイトは皆に手を振る。

「マスター、剣聖、いつてきます……」。

あと、とつとと仕事してください!」

レイはギルドマスターとジークハルトに向かって言う。

「わかってる!」

「がんばりますよ」

そしてカイトの方を向く。

「カイト様……任せましたよ？」

「そつちこそ、あいつ等を任せたぜ」

「はい」

「ああ」

それだけ言つと、ユミナ達は皆酒場を出て行つた。

皆が出て行つて暫くしてから、
ジークハルトが声を出した。

「……行きましたか」

カイトがそれに答える。

「ああ……行つたな」

「カイト……行かなくていいのですか？」

「お前等が仕事押し付けやがったんじゃないか……。
それとその薄気味悪い敬語やめろ」

「……まあ、そうだが」

「別に…シズクがいるから大丈夫だ。
もしも、なんてことは絶対にありえない」

カイトは自信を持って告げる。

「それに、ユミナ達は強くなるぞ？」

「……ふふ、そうか。カイトがそこまで言う人たちなら大丈夫だろう」

「ああ、将来二つ名持ちになるかもしれないぜ？」

「それは楽しみだ」

ジークハルトとカイトは互いに笑う。

「今二つ名持ちは……12人だったかな？」

二つ名持ちとは、とても強い実力者に与えられる呼び名である。

一般的な二つ名と伝説級の二つ名に分類されていて、
今2人が話していたのは伝説級の二つ名である。

「いや、ついこの間一人増えて13人になったところだ」

「へえ……なかなか強いんだろ？」

「ああ、それにまだとても若い」

「お前も若いだろうが……」

「いや、その子は若すぎるんだ……まだ14歳だからな」

「マジかよ……将来有望だな」

「ああ、弱冠12歳でハンターになり、1ヶ月ほどで上位試験合格。それから1年半でG級ハンターになって、ついこの間二つ名を授けられた」

「天才……ってやつかな？ 二つ名は？」

「……幻影」

「そりゃ、また斬新な二つ名だ」

「そうだな……ってそろそろ話の本題に入っていいか？」

「どっぞ」

「では、黒鎧竜グラビモス最低20頭討伐って話だったが……」

「そうだな」

「本命は少し違う」

「違うのか？」

カイトはキョトンした表情で聞き返す。

「ああ、皆さんの前だったから、ああ言ったが……」。

実は奇妙なのがいるからその調査も兼ねている」

「奇妙……？」

「ああ。見た事も無いモンスターが、

グラビモスの群に雑ざっていたとか聞いた」

「新種か」

「多分な」

「これはまた、面倒事の気配がするな……」

「そう言っつなよ……頼りになるのが今はカイトしかいないんだから」

「まあ、本当にヤバイと思うなら、強制的に二つ名持ちを呼ぶわな」

「だな……。だが、総動員してもカイトには遠く及ばないがな……」

「分からないぜ？」

「冗談は止める。俺はカイトの強さを知っている」

「剣聖、閃光、魔弾、墮帝、氷燐、双月、龍姫、

夜桜、紅蓮、壊毒、堅王、死神、と、……幻影？ だっただけ？
この全員が俺に挑んでも勝てない？」

「……勝てないだろうな。本気なら10分と持たないだろう」

ジークハルトはハッキリと告げる。

「そつか、話を戻すが……とにかく倒せばいいんだな？」

「その通りだ」

「俺たち2人か？」

「誰か連れて行きたいのか？」

「いや、そつだな……二つ名持ちをもう1人ぐらい連れて行くか」

「……本気？ 確かに皆、カイトを気に入ってはいるが……」

「まあな。幻影以外なら知り合いだ」

「……誰を連れて行くのですか？」

「墮帝、紅蓮、壊毒、死神の四人は却下だ……」

「だね」

「そうなるよ、……ろくな奴いないな。」

「二つ名持ちは危険な奴ばかりだな」

「一番危険なカイトにだけには、言われたくないろつね」

「……やっぱり俺たちだけでいいや」

「そつか、3日後に出発しよう」

「了解」

「それまで休んでいてくれ。俺は準備があるから」

「わかった。また3日後な」

そういつて2人は分かれた。

砂漠。

あれからユミナ達は、1日掛けて砂漠へと到着した。

「ここからは私は陰から見えていますから……」

レイがそういった。

「はい、よろしく願います」

ユミナは頭を下げて言う。

「頑張つて下さいね。」

私は閃光のレイ……レイ・オルビスです。」

「ユミナ・アリアスです」

二人は自己紹介しながら握手を交わした。

それからレイは他の皆とも握手を交わした。

「では、健闘を祈ります」

そういつて、風のように消えた。

「……速い」

シズクがそう呟いた。

「閃光の名は伊達じゃないですね」

エリカもシズクに続いて言う。

「……じゃあ、私も後ろから見てる」

「うん、わかった」

「……がんばって」

「任せて!」

自信満々に言い放つ。

「じゃあ皆、まず岩盤地帯から探索しよう。
見つからなかったら砂漠地帯に行こう!」

「」「はい」「」

「よし! 行こう!」

こうしてユミナ達の上位試験が始まりを告げた。

第四十五話「上位試験」(後書き)

二つ名持ち?…出ませんよ?まだね。

出るとしたら当然先ですね!

今、出したら…キャラが分からなくなってしまうよ>><<
今でも、割と多めなのに…。

ようやく次からが戦闘シーンです!

今回戦闘シーンは頑張ろうと思っています!!

第四十六話「双角竜ディアブロス」

第四十六話「双角竜ディアブロス」

岩石地帯で激戦が繰り広げられていた。

ギヤアギヤア！

ランポス種の亜種ゲネポスが、群を成してハンターたちを襲っている。

その数は、十数頭に及ぶ。

襲われているハンターたちは、ユミナたちであった。

長期戦も考えて、まずは岩石地帯から探索を始めた。

しかし、運悪くゲネポスの群と遭遇してしまった。

仕方なく戦うことにしたのである。

「ハッ！ ……次！」

ユミナは鬼斬刃でゲネポスを斬り捨てる。

それと同時に群へと突っ込んだ。

目の前のゲネポスを斬ると、ユミナは囲まれた。

一斉にゲネポスが襲い掛かる。

ギヤアア！

ユミナは強引に目の前のゲネポスを斬り飛ばすと、前へと転がった。

ズガガガガン！！

そこにアイの放った散弾がゲネポスたちを襲い怯む。

「アイ、ありがとう！」

「気をつけてね〜！」

ユミナはお礼をアイに言うと、またもやゲネポスへと向かって走った。

隣にはエリカが並んで走っていた。

「飛ばしすぎないで下さいね？」

「うん」

ゲネポスが数頭跳びかかって来た。

それをユミナとエリカは左右にそれぞれかわして、擦れ違い様に切り払った。

次々と襲い掛かってくるゲネポスたちをかわしていく。

「ハアツ!!」

「斬ッ!!」

ズバツ!

ザシユ!

「ていつ!!」

「破ッ!!」

バシユ!

ドガツ!

ゲネポスはユミナとエリカによって、残り数頭までとなった。

ユミナは前後で挟まれていて、エリカは囲まれていた。

アイはエリカのほうを援護している。

ユミナと前のゲネポスは同時に動いた。

「ハッ！」

鬼斬刃をゲネポスの頭へと振り下ろす。

ギヤツ！？

ゲネポスは急にバックステップをして後ろへと下がった為、ユミナの攻撃は空振りに終わった。

「なっ！？」

鬼斬刃を一気に引き戻したところで、ゲネポスが跳び掛かってきた。

「クッ！」

ユミナは後ろへと跳んで離れた。

ギヤア！

後ろからのゲネポスの声に驚くユミナ。

（しまった！？ 後ろにもいたこと忘れてた……）

ゲネポスはユミナに噛み付こうとした。

すぐさま後ろを向き斬り捨てようとするユミナ。

（クッ！？ 間に合わない！）

そこへユミナとゲネポスの間を割り込むようにキイが入ってきた。

キイは左手に持っていたフロストエッジ改で、ゲネポスの首を切り裂く。

そのまま反転して、近づいていたもう一頭のゲネポスを斬る。

「たあ！」

ザシユ！ズバツ！

ゲネポスはそのまま吹き飛び絶命した。

「油断したね、ユミナ？」

「うっ！？ ……ありがとう、キイ」

二人はそれだけ会話を交わして、エリカたちのところへと向かった。

すでにエリカたちはゲネポスを倒した後だった。

「みんな、お疲れ様」

「うん、お疲れだね」

「まだ終わってませんよ？ 寧ろこれからです」

「だね、油断は駄目だよユミナ？」

「わかってるよ……」

ユミナたちは武器の血を払うと、背負いなおした。

「ディアブロスね、私は戦ったこと無いけど……誰かある？」

「私は無いよ」

「僕も無いですね……」

「私は何度かあります」

アイとキイは戦ったことは無いが、エリ力はあるといった。

「そっか、何かアドバイスのある？」

「そうですね、尻尾は脅威ですので早めに斬った方がいいですね。それと、もぐった時は音爆弾が有効です。怒った時は効きませんが」

「そっか、そのために持ってきたのね。閃光玉とかは？」

「効きます。あとシビレ罫も聞きますが、落とし穴は効果が無いです。」

それと、バインドボイス角が壁に刺さりますのでその隙に攻撃ができます。後は……咆哮には気をつけてくださいね」

「わかった。みんなはいい？」

「うん（はい）」

「じゃあ、ディアブロスを探そう！」

ユミナが言い切る前にディアブロスが突進してきた。

間一髪でそれを避けるユミナ。

皆それぞれの位置について、ディアブロスと対峙した。

ディアブロスはエリカに向かって突進する。

エリカはそれを左へと避ける。

滑っていくディアブロスをアイが、弾を撃つ。

バンバンバン！！

キンッ！

弾はディアブロスの背甲に弾かれる。

「硬いね〜」

続けて、足や腹下へと撃ち込む。

今度は弾かれることは無かった。

ディアブロスはアイの方を向く。

そこにユミナが飛び込んできて、ディブロスへと鬼斬刃を振るった。

「たあぁー！！」

ガキンッ！

甲殻によって弾かれるが、弾かれた反動を利用してクルリと回転。

そして、そのまま横に一閃。

キインッ！

それも弾かれてしまう。

ディアブ羅斯はユミナへと体当たりする。

ザッ！ ドオウンッ！！！！

かなりの衝撃が襲い、ディアブ羅斯の足場が少し削れる。

しかしユミナはそれをかわしていた。

「危ないな……」

一旦ユミナは、ディアブ羅斯と間合いを開く。

それを追いかけるように突進をしてくる。

「ユミナ！ 目を！」

キイが叫ぶと同時に、ディアブ羅斯とユミナの間閃光玉が投げられた。

カッ！ ピカアーーーー！！！！

ギャガアアアーーーーッ！！！！？

ディアブ羅斯は閃光に怯み、視界が封じられる。

ユミナは少し目を閉じるのが遅れ、目の前が霞む。

「ユミナは休んでて！」

キイが追い越し様にそう言っつて、ディアブ羅斯へと突っ込んでいった。

エリカもディアブ羅斯へと攻撃を仕掛ける。

（早く回復して！）

ユミナはやられた目の回復に努める。

ディアブ羅斯も目をやられて、暴れまわっている。

それを掻い潜りエリカとキイは攻撃を仕掛ける。

「ハッ！ ていやあーっ！！！！」

キイはフロストエッジ改で足へと叩き込む。

「斬ッ！！」

エリカは頭の角部分をティタルニアで斬りつける。

雷撃が迸る。

間合いを詰めていたユミナが、ディアブロスを斬ったのである。
続いてもう一撃振るう。

ズザアアアアッ！！！！

ディアブロスは怯むものの、ユミナへと反撃する。

ザッ！ ドオウンッ！！！！

それをギリギリのところまで避けて、鬼斬刃を振るう。

ズザアアアアッ！！！！

ギリギリの紙一重な攻防を繰り返す。

一瞬ディアブロスに隙ができた。

それをユミナは見逃さずに、

（アイ！ エリカ！ 今のうちに体勢を立て直して！）

（わかったよ〜！ 気をつけてね！！）

（了解）

2人にアイコンタクトを送った。

それを受けてエリカはディアブロスから離れたところまで下がった。

アイはキイを連れて安全なところで治療を開始した。

キイの傷はたいしたことはない打撲だった。

すぐに回復したキイは、起き上がった。

「もう大丈夫……」

「無理しないでね？」

ユミナとディアブロスは激戦を繰り広げている。

流石に少しずつダメージと疲労が増えてくるユミナ。

ザッ！ ズザザザッ！！

ディアブロスは地中へと潜って行った。

辺りは静寂へと包まれる。

ユミナたちは神経を研ぎ澄まし、ディアブロスの奇襲に備えている。

グラグラグラ

「！」

揺れが収まった。

「……逃げたか」

「何処行つたのかな？」

「うーん、砂漠地帯じゃないかな？」

「その可能性が高いですね」

「じゃあ行こっか」

「……はい!」「」

ユミナたちはクーラードリンクを飲み干すと、砂漠地帯へと足を踏み入れていった。

705

「戦闘は……なかなか良い。機転が利く……強くなりますねこの人たち」

レイはずっと影からユミナたちの戦いを観察していた。

「初めて戦うモンスターでもちゃんと対処はできてますし、アレだけの動きなら上位でも通用するでしょう……」

双眼鏡を下ろしてポーチへと戻す。

「移動するようですね。私も急いで移動しなければ」

動き出そうとしたところで声が掛かった。

「……ユミナさんたちはどう?」

シズクであった。

「これはシズク様。バレていましたか」

「……うん」

「シズク様は見てたんじゃないんですか?」

「……見てたけど、前にお兄様が人の意見を聞いた方がより良いと言ってたから」

「そうですか……」

流石だとレイは驚いていた。

双眼鏡も無くこの距離を難なく見渡せるシズクに、驚きが隠せない。

カイトも合わせてこの兄妹は規格外すぎるなとも考えていた。

「動きは良いと思います、これなら上位でも問題は無いです」

「……そっか」

「シズク様は手を出してはいけませんよ?」

「……わかってる。お兄様にも、命の危険が無い限り手を出すなど言われた」

「そうですか」

「……行かなくていいの？」

「そうでした！ 急いでいかなくては！！」

そういつてレイはクーラードリンクを飲んで、砂漠地帯へとユミナ達を追いかけていった。

シズクは何もせずには砂漠地帯を難なく歩いていく。

流石に規格外すぎるなど改めて思ったレイだった。

第四十七話「ユミナの危機・キイの切り札」(前書き)

更新遅れったねっ!!
不定期だけどねっ><

第四十七話「ユミナの危機・キイの切り札」

第四十七話「ユミナの危機・キイの切り札」

グラグラグラ　ズザアアアアーンッ！！！！

ディアブロスが地面から勢いよく飛び出してくる。

ユミナたちは飛び退きそれをかわす。

反撃しようとしたところで、すぐにまた地面へと潜ってしまった。

グギャガアアアアーンッ！！

勢いよく飛び出し、ユミナたちへと襲い掛かる。

攻撃をかわしたユミナは、皆へと合図を送った。

すると、ユミナたちは四方に散らばり、ディアブロスを囲むように陣取った。

ディアブロスは四方を見回し、誰を襲えばいいのかを迷ってしまった。

その一瞬の隙を突いてエリカが接近する。

「斬っ！！」

ティタルニアを抜き、踏み込むと同時に思いっきり振り下ろす。

ガキンツ！！

ディアブロスの甲殻に弾かれ火花が散った。

グガアア！！

お返しとばかりに尻尾を叩きつけてくる。

エリカは、それを避けずにティタルニアで受け止める。

ゴッ！！

「くっ！？」

エリカは何とか踏みとどまった。

尻尾を止められて、ディアブロスはエリカの意図に気付いた。

慌ててその場から離れようとしたが

「遅いッ！！」

一瞬早かったユミナが、鬼斬刃を振り下ろし尻尾を切り裂く。

ユミナの足元から勢いよく飛び出してきた。

グギャアアアアツ!!!

ユミナは咄嗟に鬼斬刃を振るうが、空高く吹き飛ばされてしまう。

「ガッ!? ……カハッ」

ユミナは放物線を描きながら落下していく。

「ユミナちゃん!?!?」

落下してきたユミナを受け止めたのはアイだった。

ユミナを受け止めた反動で二人して倒れこむ。

「ユミナちゃん! ユミナちゃん!?!?」

アイは必死に呼びかける。

エリカとキイは二人に注意がいかないように、ディアブロスと戦い続けている。

「あ、い……?」

「ユミナちゃん!? 喋らないで! 今すぐ応急処置するからっ!」

「わた……し……油断、しちゃ……った」

アイはディアブロスから目を離さずに、ユミナを背負いなおして離れる。

すぐにエリカとキイが応戦する。

「みんな、ユミナちゃんが危ないの!!」

だから! ……今回は諦めて戻ろう!!」

アイは力の限り叫ぶ。

ディアブロスの猛攻にエリカとキイは、逃げるどころか返事をする暇すらない。

それなのにキイは、

「アイさん」

ディアブロスの相手をしながら話す。

「僕たちに」

攻撃を掻い潜り

「構わずに」

気を引くために反撃し

「逃げてください!!」

そう告げる。

それを聞いて、アイは否定する。

「駄目だよ！ みんなを置いて行ったら意味が無いよ！！
ユミナちゃんも全然 「大丈夫です！！」」

アイの否定を遮ってエリカが叫ぶ。

「私たちは」

正面からぶつかり

「こんな所で」

敵に臆することもなく

「負けません！！」

戦い続ける！

二人を見て、アイは泣きそうになる。

（私は、とても無力だよ……）

アイはユミナを背負いなおして進みだす。

「二人とも！！絶対に死んだら駄目だからね！！
生きて帰ってきてね！！」

アイは走り出す。

アイが居なくなつた所で、二人は改めてディアブロスと戦い始める。

「逃がしませんよ……」

「絶対に倒すから……」

ディアブロスは怒り状態ではなくなっている。

先手、とばかりにキイは閃光玉を投げつけた。

カツ！ ピカアーーーーー！！！！

グガギヤアツ！！？

視界を封じられ仰け反るディアブロス。

エリカが懐へ飛び込み、ティタルニアを振るつ。

キイは調合を始める。

作っているのは、

大タル爆弾

大タル爆弾G

小タル爆弾

閃光玉

それと同時に小タル爆弾を全て投げつける。

ドガドガドガドガンッ！！！！！！

シビレ罫にかかったディアブ羅斯は、その全てを喰らう。

エリカはまたもや懐に入り込み、ティタルニアを振り続ける。

キイも足を切り裂きながら応戦する。

シビレ罫の効果が切れると同時に、閃光玉を投げつけて視力を奪う。

グガギヤアッ！！？

「攻撃の暇なんて与えないよ！！」

繰り返し攻撃し続けるエリカとキイ。

幾度となくそれを繰り返していると、遂にアイテムが底をついてしまった。

ディアブ羅斯は怒り状態だが、既にボロボロである。

「肉弾戦か……………」

「最初と何も変わりはないです……………」

「そうですね……………」

ディアブ羅斯はキイへと強く踏み込み、頭を思いつきり振って叩き

付けた。

それを避けきれずに咄嗟に盾でガードする。

ガッ！ バキヤアアツ！！！！

「なっ！？」

盾が粉々に砕け散ってしまった。

キイはそのまま後ろへと吹き飛ばされる。

エリカがディブロスへと突っ込み、気を引いて時間を稼ぐ。

（盾が……いや、こっちの方が都合がいい！

“アレ”を……勝つにはこれしかない！！）

キイは剥ぎ取り用のナイフを、開いた左手で抜き放つ。

（イメージしろ……これは双剣。相手を切り裂き、穿つ剣！）

「ハアアアアーツ！！ 鬼人化！！」

キイは紅い鬨気に包まれて、ディブロスへと突っ込む。

「たあああっ……！！」

弾かれること無くキイの斬撃が食い込む。

そのまま荒れ狂うように斬撃を繰り返す……乱舞である。

ディアブ羅斯は気圧されるように、数歩後退した。

「キィ……貴方双剣を……」

エリカは驚いたように眩く。

もともと双剣用の剣じゃないので、刃こぼれが激しい。

特に剥ぎ取りようのナイフはボロボロである。

一度エリカとキィはディアブ羅斯から離れる。

「はぁ……はぁ、はぁ……」

「大丈夫ですか？」

「はぁ、大丈夫……夫……」

ディアブ羅斯は突進をしてくる。

それを左右に交わして、エリカがティタルニアを構える。

「……ですね。見せてあげます、私の極意の一つを！」

背負うようにティタルニアを構えて、力を溜めていく。

限界を超えるような力を引き出し蓄積していく。

「成功すれば……良し。失敗すれば……死」

ディアブロスがエリカ目掛けて突進してくる。

迫ってくるディアブロスに対して力を爆発させる。

「…………… 剛ッ！！！」

ティタルニアを全力で振り下ろす。

バキッ！！ ドゴオッ！！

その一撃はディアブロスの片角を押し折った。

しかし、もう一方の角がエリカの胴へと直撃した。

ディアブロスは倒れ伏し、エリカは吹き飛ばされ壁に激突した。

「くっ！？ …… 相打ちですか。 …… 後は、頼…………… みまし…………… たよ」

そのまま意識を失った。

ディアブロスは起き上がり吼える。

キイを見て“アトハオマエダケダ”と目が語っている。

「…………… 鬼人化」

キイは双剣を構える。

ディアブロスが突進する。

ユミナちゃんってば人の心配ばかり。優しすぎだよ……)

「大丈夫！ 大丈夫だから！」

ユミナの流れる血は止まる気配が無い。

それに少しずつだが冷たくなっていった。

(急がなきゃっ！ ユミナちゃんは絶対に死なせない!!)

だが同時にベースキャンプへと連れて帰っても、

すぐには街に戻れない……つまり、治療が出来ないのである。

もう、助からない。

(そんなことない!! 絶対に助ける!!)

どうやって？ 無力な私に何ができるの？

(違う!! ユミナちゃんは私が助ける!!)

また、大切なものを一つ失う。

(もう絶対に、二度と失わない!!)

残った二人も失う。

(二人は負けない、だから絶対に死なない!)

私に何が出来るの？

(私は……私は　！！)

「あい……ごめ、ん……ね」

突然アイの耳にユミナの弱々しい声が届いた。

「え……なんで謝るの？　私の方が何もできなかったのに……」

「わた、し……あい……に……めいわく……かけてばかり、だね」

「そんなこと無いよっ！！　私の方が　」

「だけど……これ、から……も……たよっ……ちやうから……」

「え……？」

「よろ、し……く……ね？」

ユミナの言葉で涙を流すアイ。

泣きながら砂漠を走り続ける。

「うん……、うん……！！」

あと少しでベースキャンプだというところで、
ゲネポスとガレオスの群に囲まれた。

「……そんな！？」

ゲネポスがアイたちに襲い掛かる。

(…… こんな、所で……後もう少しなのに……!?)

一陣の風が吹いた。

ギヤアアアツ!!?

ガアアアツ!!?

「 ……させない」

シズクが大鎌を持って、アイたちの前に現れた。

現れると同時に、近くにいた数頭を葬った。

「 ……相手をしている暇は無い 立ち去れ」

かなりの殺気を込めてそう言い放つ。

それに恐れたゲネポスたちは逃げていった。

「 ……急いでベースキャンプへ」

「 うん! ありがとうシズクちゃん!」

「 ……うん」

ベースキャンプへ着くと、すぐにユミナをベッドへ寝かせた。

「どうしよう!? 竜車が来るのに時間が掛かる。
それに街までも時間がかかりすぎる!」

「……」

「やれる限りの治療はしたけど……いつまで持つかわからないよ
!」

「……お兄様に止められてたけど……仕方が無い」

「何か方法があるの!」

「……私が治療する。お兄様に殺されかねないけど、

……ユミナさんには死んで欲しくない」

「できるの!」

「……うん」

「大丈夫だよ! カイト君はユミナちゃんの事ならきつと許してく
れるよ!」

「私も説得するし、一緒に怒られてあげるよ!」

「……わかった。この事は絶対に内緒」

「他の人にはって事?」

「……そう。エリカさん、キイさんにも秘密」

「わかった、約束する！ だからユミナちゃんを助けて！」

「……………うん」

そういつて、シズクは目を閉じた。

全神経を使ってユミナの怪我に集中する。

「……………癒しは奇跡、全てを治せ『ヒール』」

傷口に手をかざす。

すると淡い光に包まれて、傷が少しづつ回復していく。

数分するとそこは何事も無かったように、
傷が塞がっていて血の後も消えていた。

「すごい……………」

「……………これで、もう安心」

「よかった〜！！」

アイは安心して、その場で横になった。

「……………すう」

「……………あとは寝てれば……………って、寝ちゃった」

シズクは呆れたように呟く。

「……お疲れ様」

アイとユミナは仲良く眠り続けて、シズクはそれをずっと眺めていた。

第四十七話「ユミナの危機・キイの切り札」(後書き)

さあ！キイ&エリカVSディアブロスの結末は、どうなったのか！？

そして、ユミナの怪我の行方は如何に！？

全ては次回で明らかになりますっ！！

第四十八話「閃光の実力」(前書き)

短い…しかも遅い…。

第四十八話「閃光の実力」

第四十八話「閃光の実力」

!!!

ディアブロスとキイが衝突する。

ガキンツ　　ザシュ……ズバツ、ドシンツ!!!

互いに交差し、倒れたのは……ディアブロスの方であった。

キイの一撃が残った片角を砕き、次の一撃で額を切り裂いたのである。

全力の一撃は、キイ自身の左腕も砕くことになった。

グ……ガア……ガツ……

ディアブロスは呻き声を上げ、絶命した。

ピシッ！……ピキッ！……

パァリイーンツ!!!

キイが持っていたフロストエッジ改と剥ぎ取り用ナイフが、粉々に砕け散ってしまった。

「……ああ、あ、また最初から作る羽目になった」

残念そうに呟いて、そのまま仰向けに倒れた。

「疲れたあゝ！！ ナイフ無いから剥ぎ取りもできないや……」

そういつて暫くゴロゴロと寝転がっていると、

「あ！？ エリカさん！！ それと、ユミナ達も！！」

慌てて起き上がりエリカの元へと向かった。

エリカは壁に背を預けて、気絶していた。

「エリカさん、大丈夫ですか？」

肩を揺すり起こす。

「キイ……どうなりましたか？」

「勝ちましたよ……武器損壊で左腕骨折ですけど……ね？」

キイは苦笑しながら言う。

「……そうですか、お疲れ様です」

「エリカさんは？ 怪我とか……」

「肋骨を二本ぐらい折られました」

「動けますか？」

「当分は……無理です」

「じゃあ、背負うので手を……」

キイは折れてない右腕でエリカを引き起こし、そのまましゃがんでエリカを背負った。

「すみません……」

「いえ、あっ！ ユミナの武器を回収しないと！」

不意に思い出したキイは、鬼斬刃が刺さっている所まで走っていった。

「エリカさん、これ抜いて持ってください」

「わかりました」

エリカは言われたとおり鬼斬刃を抜いて、両手で持つ。

キイはエリカを背負い、ベースキャンプへと向かう。

「あゝ……こんな時に限って、敵か」

しかし、向かおうとすると何処からかとも無く現れた、ゲネポスとガレオスの群に遭遇した。

ギヤアツ！！

ガアアツ！！

すぐに囲まれてしまう。

キイは防具を纏った人を一人、大剣、太刀を背負っていて、左腕の痛みでうまく動けない。

「武器すらないというのに……」

襲い掛かってくるゲネポスたちを紙一重でかわしては、急いで間合いを取って次の攻撃に備える。

これを繰り返していく。

時には、蹴りや遠心力で振り回した太刀で威嚇したりもした。

「ぜえ……はああ……ぜええ……」

激戦の後で体力も無く、呼吸が乱れていく。

「キイ、私を置いて行きなさい」

「……お断り……だ！」

「ですが、このままでは……」

「わか……つて、る」

話をしている、一瞬キイたちに隙が生まれた。

ガレオスが砂ブレスを吐こうとする。

(ぐっ、まずい……!?)

キイは防ぐことも避ける術も持ってはいない。

(ここまでか!?)

覚悟をしたその刹那、

ザクッ!

二本の剣がガレオスの喉を上から貫いていた。

そして次の瞬間には、それは左右に切り裂かれて絶命した。

「……ギルドナイトとして、あなた方を守ります」

そこには、閃光のレイが立っていた。

レイは剣を振って血を落とすと、その姿が掻き消えた。

ツッ!!!!

一瞬でゲネポスたちの背後を取った。

双剣を高速で振るい、ゲネポスたちの首を落とす。

それと同時に姿がまた掻き消える。

ザシユ！ グシャツ！ ザシユ、ズシャ、ズバズバ！！！！

あちこちで斬撃の音が聞こえてくる。

血飛沫が舞いゲネポスとガレオスが無差別に切り裂かれる。

キイとエリカはその目で、レイの姿を捉えることができない。
数分もしないうちに全滅した。

レイは死体の中心で静かに佇んでいた。

「これが、閃光……！」

「規格外すぎますね……」

レイは双剣の血を落とすと、キイたちの方へと歩いてきた。

「大丈夫です？」

「はい、レイさんのおかげで……」

「ですか。では、急いでベースキャンプへと戻りましょう」

レイは二人を先導するように先頭を歩いた。

キイはエリカを背負い直し、それに続いた。

ベースキャンプ。

ユミナはベッドで寝ていて、シズクとアイは地面に座っていた。

「うう……ユミナちゃん、目を覚まさないな〜！」

「……当たり前。体力は回復させてない」

「うん？……どういこと？」

「……私が治したのは怪我だけ。致命傷を受けてたから暫くは寝て
いるはず」

「そうなんだ……つまり、二日三日起きないってこと？」

「……多分」

「そっか……」

アイはベッドで眠っているユミナを見ながら、

ため息をついた。

「……それよりも」

「？」

「……お兄様」

「どづしたの？」

「……怒られる。いえ、殺される」

「そんな、大げさだよー！」

表情がほんの少し蒼白なシズクに、
アイは笑いながら返した。

「……アイさんは知らない。お兄様の怖さを」

「うーん、人を助けたのに怒られるの？」

「……これは使ってはいけない。存在を普通の人に知られるのもいけない」

「人の命よりも大切ななんてことは無いよ！……」

「……そう。でも、貴方達は何も知らない」

「そうかもだけど！」

「……誰か来た」

尚も抗議しようとするアイにシズクは、

人が来たことを教える。

「キイ君！！ エリカさん！！」

その姿を見た瞬間アイは飛び出した。

「二人とも無事なの！？ 怪我は！？」

「あはは、ただいま……僕は武器と左腕」

「私は肋骨三本ぐらいです……」

そういわれて、アイは二人をよく見た。

キイは全くの手ぶらで、エリカはキイに片手で背負われていた。

「ユミナさんの鬼斬刃も回収してきましたよ」

そういつてエリカの持っていた鬼斬刃をアイは受け取った。

「皆さん、竜車が到着しました」

いきなり現れたレイがそう言った。

「帰ろっか！」

「ユミナさんは無事ですか？」

心配そうに聞いてくる。

「うん、今は寝てる」

「そっか……」

「そうですね……」

それを聞いてどこか安心した二人。

「……帰る」

「早く帰りましょうか」

シズクは立ち上がり、レイも皆を促す。

竜車に乗ると、エリカとキイの応急手当をして、砂漠から出発して街へと向かった。

一日で街へと着いた。

街に着くとまずはユミナを寝かせたり、キイとエリカの治療のため医療所へと足を運んだ。

その後にギルドへ報告に行って、そのまま今日は解散となった。

ユミナは医療所で寝ていて、他の三人は宿へ戻って休んだ。

シズクはユミナに付き添い、レイは仕事でギルドへとそのまま残った。

こうして、ユミナたちの長い上位試験の半分が終わった。

第四十八話「閃光の実力」（後書き）

キイたちの勝利です！

ユミナは目覚めてないけど無事です！

閃光の実力が少しはわかったのでしょうか？

彼女：レイは二つ名通り、速さが尋常じゃないんです！

伝説級の二つ名持ちはそれぞれが、それぞれの特性を持っていて、
とてつもなく強いです！！

次回はカイトと剣聖ジークハルトの話です^^

次は剣聖です…次話をお楽しみに！

EX:05「剣聖ジークハルト」(前書き)

また、短いです。

最近長いのが続いたからかな？
短くなってしまうす><

EX:05「剣聖ジークハルト」

EX:05「剣聖ジークハルト」

「ジークハルト……本当に20頭もいるのか？」

火山についてから確認のためにもう一度だけ俺は聞いた。

「さあ？」

「さあ？ ……って、おいつ！？」

「流石にそこまでは居ないと思うが……」

「だよな、普通にありえないよな」

「カイトが居るから、居るのかもしれない！」

「お前が連れてきたんだよ！」

ふざけたことを言う奴に俺は思いっきりつつこんだ。

「いや、物騒な人だね」

「……溶岩にブチ込んでやろうか？」

俺は少しドスをきかせて聞いてみた。

「……ははは、冗談だよ。本気にはするな」

「……俺はいつでも本気だがな」

「それはそれで嫌だ……」

この飄々とした態度、こいつが伝説級の二つ名持ちだと言つことが、本当に残念な感じだ。

因みに、こいつ…ジークハルトの二つ名は、“剣聖”だ。

“剣聖”……それは、剣を極めたものに送られる二つ名。

大剣、太刀、片手剣、双剣をどれも一流以上に使いこなすことができる。

この伝説級の二つ名を持つものは、“ジークハルト・ミラ・ディバイン”

ジークハルトは“幻影”が現れるまでの最年少記録保持者で、18歳で二つ名を手に入れた。

ジークハルトは大剣を持った時が特に強く、大剣を持って負けたことは無いといわれているほどである。

「カイトは相変わらずだな」

「お前もあまり変わらな……くもないか」

俺は昔、少しだけジークハルトと過ごしたことがある。

その頃から言えば、だいぶ変わったとも言える。

「……カイトは、まだ人が嫌いなのか？」

「……嫌いだ。そういう俺も人だったが、大嫌いだ」

ジークハルトがいきなり真面目に聞くから、俺もそれを真面目に返してやった。

「……そうか」

「……だが、まあ……少しはマシな奴も居るよなあ……と、最近は少しだけ思うこともある」

「カイト……！」

これは俺の本心である。

人は確かに嫌いだ、悪くない奴も居る。

ユミナとか、そういった面白い奴等なら普通に接することができるようになった。

「これが成長という奴だなっ」

「お前……やっぱり溶岩に沈めてやるうか!!」

「本当のことを言っただけなのに!？」

「っていうか、カイトは人ってレベルじゃないよなっ!？」

「……ふふふ、さあて暑い溶岩が待ってるぞ」

「ほら、そういうところが……って、うわっ!？」

「ちっ! 避けたか」

俺は地面をすくって投げつけたが避けられた。

「避けるよ!? だってそれ溶岩じゃないか!!」

「普通の人は溶岩を投げんっ、てか触ることもできんよ!!」

心外な……奴は俺を化け物かなんかと勘違いしてるな。

よし! お仕置きが必要だな!

「まだまだまだあっ!!!!」

「うわっ!? ちよっ!! やめっ……!!」

俺はジークハルトに溶岩を水のようにすくって投げまくってたが、不意に周りの温度が上がったので手を止めた。

「……ん、近いかな?」

「はぁ……はぁ……敵か?」

「割と近くに居る」

「そうか……」

そういつて、ジークハルトは、背中の流刃剣ガノトトスに手を伸ばした。

因みに装備は、全身S・ソルZ装備である。

「お前と一緒に何か狩るのは久しぶりだな」

「今28だから……10年ぶり位？」

「それぐらいだな」

「あのときは……ハンター生活で一番きつかった」

「そうなのか？」

「……カイトの所為なんだけどね」

そう言われて俺は考え込む。

うーん、嫌々ながらもこいつを少しだけ鍛えてやった記憶しかないな。

「……？」

「思い出せないの……？」

「うん、お前を嫌々鍛えたのしか思い出せない」

「それだ！」

「え？ マジ？」

「アレは本当にきつかった。飛竜の巢に何度もぶち込まれ、何とか倒して出てきても次の試練を用意される。

そして、休む間も無くボロボロにされていった。

あの時は本当に俺は死ぬかと思った……」

なんか一人で過去へとトリップして行った様だ。

「おい、いい加減戻って来い。敵が近くに居るって言うてるだろ」

「はっ！」

「戻ったか」

「ああ、ところでカイトの武器は？」

「ああ、戦闘になったら出すよ」

「そうか……」

俺はいつでも出せるからな。

てか、武器無くても戦えるしな……。

「久しぶりにカイトが戦えるところが見れるな。
この間のラオシャンロンの時は見損ねたから……」

「俺も久しぶりにお前が戦う所を見るな……強くなったか？」

「……前よりは」

「どれぐらい前の話だよ……」

辺りの温度が急に上がった。

「来る!」

流れる溶岩の川から複数のグラビモスが現れた。

「いきなり4頭かよ……」

「カイトは3頭お願いします」

「おい!? 半々だろ普通は!」

「カイトは普通じゃないからっ……ハアッ!! ……いいんだよ!」

一番近くに居たグラビモスに斬りかかりながら、ジークハルトはそう言った。

「はあ、仕方ないな……」

“レイレグロウ風雷瞬間”

仄かな緑と黄色が螺旋状に交じり合ってきたような槍が、俺の両手にしっかりと握られていた。

「一瞬だ……しかと目に焼き付けておけ……」

俺はそれを構える。

「 貴様の死ぬ刻を」

やや下に構えていたのを相手に向けて跳ね上げる。

一瞬で黒グラビモスの甲殻を貫き、心臓を一突きした。

辺り一帯の空気が静止して感じる。

静寂が支配するほどの速さ……正に神速。

グラビモスは断末魔を上げることなく、倒れて絶命した。

「……まずは1頭。次、行こうか」

(ははは、相変わらずカイトは強すぎますね)

ジークハルトはグラビモスを相手しながらカイトの様子を見ていた。

(あの一撃……人じゃなくても見ることはできないでしょうね)

「ハア！ たああ……！」

斜めに振り下ろした一撃を、片手で反してさらに追撃する。

ジークハルトは大剣でも片手で振ることができるほど、
剣の扱いについては超一流である。

しかも、大剣を使っているとは思えないほど速い動きをする。

一撃、二撃と、攻撃をグラビモスの腹に集中して当てる。

振り回される尻尾は軽くないなして、隙があれば尻尾にもダメージを蓄積させる。

体当たりや火炎ガスなどは、バックステップでかわして、終わると同時に突っ込んで攻撃をする。

G級のグラビモス亜種をこつも簡単に相手できるのは、
“ 剣聖 ” だからである。

並みのG級ハンターでは、一人というのがキツイ。

しかし、伝説級の二つ名持ちならば、強すぎるので可能である。

「喰らえっ!!」

切り上げの一撃が、グラビモスの甲殻を叩き割る。

グガギヤアアッ!!??

片膝をつくグラビモス。

すかさずに攻撃を叩き込むジークハルト。

腹、翼、顔、足、尻尾と色んな所を斬りつける。

数分後には、グラビモスはポロポロになっていた。

「とどめっ!!」

大剣を突き出すように振るう。

ザシュウツ!!!

グラビモスの胸に突き刺さった。

グガアアアアッ!!!

血を噴出しながらグラビモスは倒れ、絶命した。

「はあ、1頭目」

「遅かったな……」

「カイトは速過ぎるんです」

「そうか？」

ジークハルトはカイトの後ろを見た。

そこには黒グラビモスが3頭倒れていた。

「まあいいや。次に行こう」

「わかったよ……」

二人は火山のさらに奥へと進んでいった。

EX:05「剣聖ジークハルト」(後書き)

書けば書くほど、文章が拙くなってきてる気がします><
でも、頑張って書きたいと思います!

剣聖ジークハルトとの話です。

カイトは相変わらず強すぎますね!

ジークハルトはハンターっぽいですよっ!強いですけど…。

EX:06「黒鎧霧」

EX:06「黒鎧霧」

火山の奥地。

ジークハルトとカイトが、さらに奥に進みながら話をしていた。

「あつれえ〜？ 変だね……」

「どうしたんだ？」

「今、2人で10頭ぐらいだけど……他のが見当たらねえな」

「……確かに」

カイトは回りを見回しながら言う。

「出てこなくなっただな」

「ふむ、カイトはどう思うっ？」

……。

二人の間に沈黙が流れる。

溶岩の熱気と妙な静けさだけを残す。

「……もつと奥にいるか。 第三の勢力に殺られたか……」

「第三……勢力」

「前者なら、火山奥地……決戦場と呼ばれるところだな。後者なら、ヤバイな。強すぎるだろうな」

「できれば、前者であって欲しいけど……カイトがいるしな」

「オイ、コラチヨトマテヤ！ 人を疫病神みたいに言うなっ」

「……違ったのか？ ……あっ！ 自覚が無いんだな」

「よし！ 沈めてやる！！」

二人はふざけながらも、火山のさらに奥へと進んで行く。

二十分ぐらい歩き続けていると、普通では立ち入れない場所に出た。

「ここを進むと、決戦場か」

「そうですね」

細い道を通り下へと下っていく。

開けた場所に出ると一気に温度が上がった。

「暑いな」

「……とてもそうには見えませんが？」

「気のせいだろ」

ジークハルトはクーラードリンクを飲み干すと、空になったビンをポーチへと直した。

二人は辺りを見回しながら中央の方へと来たが、

「何も居ないな」

「ああ」

辺りには人っ子一人見当たらない。

「うーん、何が出てくるかな？ キリン……アカムトルム……
ラージャン……グラビモス……テオテスカトル……ミラバルカン
……」

「おい、超極秘指定モンスターの名前を、
そう簡単に出すんじゃないよ」

「アカムトルムとミラバルカンの事か？」

「そうだ」

ジークハルトは困ったようにそう言った。

「……来るぞ?」

カイトがそう言ったと同時に、急激に温度が上がった。

グガグウアアアアーンツ!!!!!!

溶岩から黒グラビモスがら頭も飛び出してきた。

「レイルグロウ
“風雷瞬間”」

カイトは槍を召喚して構える。

ジークハルトは大剣を抜き、構える。

互いに背中合わせへとなる。

「じゃあ……」

「ああ!」

「「はじまりだっ!!」」

同時に敵へと飛び出した。

カイトは槍を投擲する構えを取り、思いっきり弾いた。

「超電磁砲レールガン!!」

ツ!!!!

神速で飛来した槍は、一筋の光線となりグラビモスを貫く。

凄く高熱で、甲殻も肉も内臓すらも融解して絶命する。

カイトは槍を換ひ戻し、もう一頭のグラビモスに向かって走る。

一瞬でグラビモスの懐に潜り込むと同時に、
槍の力を解放する。

「ライジング・エア
閃閃風神!!」

カツ！ズザザザザアンツ!!!!!!

無数の風の刃と雷の刃が、襲い掛かった。

グギヤアガアアアー!!?!

ズタズタに引き裂かれて、そのまま絶命した。

グラビモスの巨体を蹴飛ばし、上から退ける。

3頭目がこちらを向いていたのをカイトは見つけた。

それに槍を片手で回し続けながら近づいていく。

グラビモスは胸を反らして酸素を大量に吸う。

熱線の初動作である。

それを見たカイトは、回転を止め両手で槍を構える。

「タイビュランス暴風大槍！！」

熱線が吐き出されると同時に、一步踏み出し槍を突き出す。

熱線と槍から出た暴風が激突する。

「はあああああー！！！！　おらあっ！！！！」

カイトが力づくで押し返した。

暴風はグラビモスを吹き飛ばす。

「　逃がさねえよっ」

一瞬で吹き飛んだグラビモスの頭のところまで跳ぶ。

槍を振り下ろして頭に叩きつける。

ズシャアアンツ！！！！

頭が弾けて絶命した。

ズドーンツツ！！

グラビモスの死体が地面へと叩きつけられた。

「ふう、後はジークハルトに任せるか」

軽やかに着地したカイトは、自分の仕事は終わったと言わんばかりに、

武器を直して伸びをした。

ジークハルトは、腹の下を潜りながら足を斬り付けて行った。

ガッ！ ザッ！ ガキンッ！

二頭を同時に相手しているので、確実に堅実にと攻撃を片方に重ねていく。

「……飛翔！」

切り上げとは違う型で、大剣で素早く斬りつけた。

黒グラビモスの甲殻に裂傷が奔る。

「……天駆！」

大剣には無い突く動作で、斬りつける。

グラビモスは必死に反撃する。

体当たり、尻尾を叩きつける、火炎ガス。

ジークハルトはそれのどれもをかわしていく。

「はあ！　でやあ！！」

ガキンツ！　ガキンツ！

スキル“心眼”で弾かれる事なく斬り続ける。

ガキン！　ザシユ！

ガキン！　ガキン！

ズシャ！　ガキン！

ガキン！　ガキン！

スパンツ！！

尻尾が切り落とされる。

ズシャ！　ガキン！

ズシャ！　ザシユ！

ガツ！　バゴオンツ！！

胸と腹の甲殻が砕け散る。

「！？」

不意にジークハルトは、その場から飛び退いた。

ガッ！ キュイイイーンッ！！！！

もう片方のグラビモスが熱線を吐いたのである。

そこからは地獄絵図だった。

2頭のグラビモスからの熱線の連射。

喰らえば終わりなので、防戦一方となってしまうた。

「くっ！？」

ステップやローリング、時にはダイブまでしてかわし続けた。

ガッ！ キュイイイーンッ！！！！

ガッ！ キュイイイーンッ！！！！

ガッ！ キュイイイーンッ！！！！

熱線の嵐が交差する。

「そこだああ！！！！」

ほんの一瞬の隙を突いて、ジークハルトは大剣を投擲した。

ゴォ！ ズシャンッ！！

弱っていたグラビモスの胸に深く突き刺さった。

ジークハルトは走って大剣の柄を握ると、
思いっきりグラビモスを蹴って大剣を引き抜いた。

大量の血が流れて、グラビモスは絶命した。

「残りはお前だけだ……覚悟しな！」

大剣を構えて突っ込んだ。

1時間後。

あれから、最後のグラビモスを倒すとさらに2頭現れて、
カイト達はそれすらも討伐した。

「疲れたなー」

「……絶対に疲れてないだろ！」

「俺、4頭も倒したから」

「カイトの場合、数は関係ない！」

「わー差別だー」

「そんな棒読みで言われてもな……」

今は二人とも決戦場で座って休んでいる。

「そういえば、前者っぽかったな」

「……そのようだな」

「良かったな。新種が出てこなくて」

カイトは皮肉を込めてそう言った。

「ですが、まだ分からねえよ？

帰り着くまでが狩りだからな……」

「……どこぞの遠足じゃないんだから」

カイトは小声でそう返した。

「何か言ったか？」

「いや、別に……それより、これでクリアか？」

「……ああ、もう大分減らしたから大丈夫だと思っぜ」

「じゃあ、すぐに帰ろう……」

そういつて、立ち上がるカイト。

ジークハルトもそれに続いて立ち上がった。

「……」

「……」

「……あーッ！！」

「……どうやら、まだ帰らしてはくれないみたいだな」

「すぐに殺してやる……」

「お手柔らかにな……」

二人は振り返るとそこには、巨大で真っ黒な球体の霧の塊があった。

「……何だコレ？」

「……敵、なのか？」

「さあな……」

二人はジリジリと間合いを開いていく。

すると、途端に霧が消え去ってしまった。

「？」

「！？」

近づいてみるが、特に何も起こらない。

「消えたか……」

「どうする。探すか？」

「いや、今は必要ないだろ」

「そうか……」

2人は踵を返し、後ろ髪を惹かれるような思いをしながらその場を後にした。

EX:06 「黒鎧霧」 (後書き)

最近、内容が何か悪くなってる様な…
良くなってる様な…：つまり、わかりません！

意見や感想が欲しいです！

この際、文句でも何でも良いので^^；

カイト達の所はこれで終わりか…いや、もう一話ぐらい続けても…。
どうしましょう^^ 迷いますっ

EX:07「旧火山の激戦」

EX:07「旧火山の激戦」

旧火山：今そこは激戦地帯であった。

「ハアアーツ！！ 飛翔！！」

「しつこい！！ 遅い遅い遅いつ」

剣聖ジークハルト。

カイト・シイナ。

この二人が出てくる敵を次々と葬っていく。

あたり一面にモンスターが居た。

イーオス

ガミザミ

ガブラス

ドスイーオス

バサルモス

シヨウゲンギザミ

グラビモス

これらの無数の敵がジークハルトとカイトを襲っていた。

「流石に多いな……どうする？」

「一体どうなっているんだ！ 倒すしかないだろっ」

ジークハルトは大剣……“流刃剣ガノトス”を構え、
カイトは仄かな緑と黄色が螺旋状に交じり合ってきたような細い槍、
……“風雷瞬間^{レイルクロウ}”を構えて敵の輪に突っ込んだ。

ギヤアギヤア！

キシヤアアーッ！

無数のイーオスとガミザミが迎え撃つ。

ジークハルトは敵をかわしながら斬り捨てていき、奥へと進んでいく。

カイトは神速の突きを絶え間なく繰り返して、敵の数を減らしていく。

「たあ！ ハアア！！ ていつ！ たあやあ！！」

ザシユ！ ズシヤ！ ザン！ ザツズシヤ！！

「フツ！ はっ ……！！！！」

ザザザザザザザザザシユツ！！！！

倒しても倒しても、敵は無数に湧いて出てくる。

それはまるで終わりなき戦争のようである。

大型モンスターも前線へと出てきた。

「ハアツ！！ ヤバイ、遂に大型モンスターまで出てきた」

「……そうだな。戦力差があり過ぎないか？」

二人は会話しながらも動きを止めることなく、敵を次々と葬っていく。

「カイト、がいるから、負けることは無いと思うけどな……」

ザシユツ！ ズバスバ！！

「俺だって人だ……疲れることもあれば負けることだってあるんだぞ！」

ザッ！ ザシユザシユザシユ！！ ズバツ！

「まさか！ カイトが疲れたら負けるじゃねえかつ」

ズバン！ ザツ！ スパーンツ！！

「ああ、あと1人欲しいな……できたら2人」

ジャキーン！ ジャキーン！

小型モンスターの死体が積み重なっていく。

死体の山を踏み越えて、新たな小型モンスターと大型モンスターが接近してきた。

「限が無いな……」

「さて、どうしようか……」

2人は背を合わせて周りを警戒する。

「さっきの黒い霧が関係してるんだらうか？」

「どうだらうな……」

ジリジリと敵は間合いを詰めてくる。

「ジークハルト」

カイトは静かに声を出した。

「俺が道を開くから、敵の大将を探して来い！」

「大将……？ あの黒い霧のことか？」

「わからん。何であろうと、必ず新種はいるだろうな」

「そうか、こちらは全部任せてもいいか？」

「あまり良くないな……面倒だ」

「わかった」

カイトはその返事を聞くと、片手で槍を回し始めた。

回転させている槍を両手で掴み構えなおすと、

間近まで迫っていた敵へ一歩踏み込んで、思いつきり槍を突き出した。

タービュランス
「暴風大槍！！」

暴風が巻き起こり、目の前に居た小型モンスターたちを蹴散らす。

「今だ！」

「はいっ」

カイトの合図と同時にジークハルトは駆け抜けた。

ジークハルトを追おうとする奴は、片っ端から串刺しにしていた。

ジークハルトが居なくなるところで一息ついてこう言った。

「ふう…… ようやく足手まといが居なくなった」

一瞬にしてその場の空気の質が変わった。

カイトの触れたら斬れる鋭い殺気に、全てが凍り付いたように動けなくなってしまう。

「誰も居ないから、少しは本気を出せるなっ!!」

ゴウツ!!

そう言った瞬間、疾風のように敵へと突っ込んだ。

ゴキッ! ズシャ、グシャバキ!! ドゴツ! ザシュツ!

「はっ! 弱いな、脆いなっ……!!」

一瞬にして、無数のモンスターが葬り去られていた。

カイトの両手と槍が血に染まっていた。

体の全身に紅い気を纏っていて、動くたびに紅い軌跡となって見える。

そして

カイトの漆黒の双眸が、紅く、紅蓮に染まる。

持っていた槍を元の空間へと収納して構えを取る。

「 『飛焰流一の攻・焰』 」

ドガンツッ！！

カイトは地を蹴って、相手との間合いを詰めた。

「 『壊焰』 ！！ 」

ゴツッ！ …… ドゴーン！！

紅い気が拳へと集中し、相手を殴ると同時に爆ぜた。

喰らった奴は燃えながら絶命した。

「 …… 『龍炎舞』 ！！ 」

空中を舞いながら蹴りを放つ。

ドガガガガッ！！！！

炎を纏った連続回転蹴りは、周りに居た敵を全て巻き込み、殺す。

さながら小さな炎の竜巻といったところである。

「 …… 『焰閃牙』 ！！ 」

ガガガガガッザシユザシユ！！！！

目の前に居たバサルモスへと連撃を放ち、相手を削り殺す。

ドガアアアーンッ！！！！

「破アアアアーンッ！！！！」

空いた片方の手で炎弾を作り出し、相手へ向けて放った。

カツ！　ズガアガアアアーンッ！！！！

グラビモスは炎弾に命中して灰となって散った。

カイトは手当たり次第に敵を殺していく。

ゴキッ！　バキヤア！　ドガ、ドシュズシャ！！

ザシュ！　スパンッ！　ドゴッ、ザッ！グシャア！！

モンスターたちは抵抗する術も無く、殺されていった。

「爆ぜろ！　『エクスプロージョン』！！」

ドゴドゴドゴドゴオーーーーーンッ！！！！！！

無数の爆発が起こり、敵を焼き尽くす。

炎が辺りを覆いつくす。

炎と敵の中心にカイトは立っていた。

「さて、そろそろかな……」

カイトはそう眩き、空を仰いだ。

「見つからない……」

ジークハルトはカイトに言われた通り、敵の大将を探し続けている。時折出てくる敵を倒しながら、ジークハルトは進み続けた。

「後は……、一番奥のエリア8しかないか」

エリア8へと入ると斜面が急になってきた。

火山の火口まで着くと、何かが視界に移った。

「何だ……?」

目を凝らしてみると、火山ガスの中に黒い霧状の何かが混じっているたのである。

「あれは、さっきのやつか!？」

大剣……流刃剣ガノトスを抜いて構えた。

黒い霧が集まっていき、目の前へと姿を現した。

一瞬にして凝縮すると、弾ける様に散らばった。

ギヤアギヤア！！

すると、イーオスとガブラスが霧の中から現れた。

「な！？ 一体何処から！？」

ジークハルトは驚愕したが、すぐに冷静になり敵を倒す。

しかし、黒い霧は次々と敵を増やしていく。

「これが、大量発生の原因か……厄介な」

黒い霧へと攻撃を試みるが、霧に攻撃があたることも無くダメージを与えられなかった。

「……カイトじゃないと倒せそうも無いですね」

出てくる敵だけを倒すことにしたジークハルトはため息をついた。

「これは、新種のモンスターなのだろうか？ そもそも生き物なんだろうか？」

零れた自問を返す様に上から声が聞こえた。

「そいつは“今は”生き物じゃねえ！」

そこには戦っているはずのカイトが居た。

「カイト！ 何でここに！？」

「そろそろかなと思って、切り上げて来た」

「……そうですか。で、あれは何なんだ？」

ジークハルトは振り返ると同時に、接近していたイーオスを斬り捨ててそう聞いた。

「あれはこの世界のバグ……まあいわゆる歪みって奴だ。何か致命的なミスで偶然生まれたものだと思う」

「消す方法は？」

「俺が何とかしてみる。だから、先に帰っててくれていいぞ」

カイトはそう言って、霧へと近づいていく。

出てくる敵は全て殺しながらである。

「先に帰って、シズクたちの様子を見ててくれないか？」

「……カイトがものを頼むなんて珍しいな。別にいいぜ」

「じゃ、頼んだわ」

それだけ聞くと、ジークハルトは踵を反してその場から去っていった。

「……こいつはちょっと、本気でやらないとなっ」

カイトは笑いながら、そう言った。

EX:07 「旧火山の激戦」(後書き)

カイト達の話はここで終わりです！

え？…中途半端じゃないか？

いえ、これで良いんですっ

次回はユミナたちの話へと戻ります。

第四十九話「剣聖の帰還」(前書き)

キリを良くしようとしたら短くなりました。

第四十九話「剣聖の帰還」

第四十九話「剣聖の帰還」

ディアブロスを倒してギルドへと帰還して、3日が経とうとしていた。

ユミナは未だ目覚めず、宿泊所で眠り続けている。

ユミナのベッドの周りには、アイとシズクが座っていた。

「ユミナちゃん……まだ目覚めないね」

「……仕方ない。致命傷を喰らったから」

ユミナはディアブロス戦の際、ディアブロスに致命傷となる一撃を喰らってしまった。

それをシズクが治療したが、目覚めることなく三日間眠り続けているのであった。

「傷は全部治したんだよね？」

「……うん」

傷は癒えたが、体力と精神力は未だに回復してはいない。

だから、未だ目覚めること無く眠り続けている。

2人の間で沈黙が流れる。

コンコン！

それを打ち壊すようにノックがされた。

「はいく？ どちら様ですか？」

「私です。キイもいますよ」

草して部屋に入ってきたのは、エリカとキイであった。

「まだユミナは目を覚ましませんか？」

「うん……」

「そうなんだ……。まあすぐに起きても次のクエストには行けないけどね」

苦笑気味にキイはそう言った。

エリカは肋骨3本の骨折。

キイは左腕骨折、武器損壊。

この二人は当分クエストを受けることができなくなっていました。

「二人の調子はどうか？」

「運動はできませんが、日常生活に問題はありません」

「僕は利き腕は右腕なので、痛い以外は問題ないよ」

二人の怪我が完治するのは、早くても1ヶ月はかかるであろう。

ハンターは鍛えているためか、通常よりも自然治癒力が格段と上がっているため、

大怪我でも少し早く直りやすい。

3人はこれからのことについて話し始めた。

話に加わっていないシズクは、ユミナの様子をジッと観察している。

暫くすると、

コンコン！

またもやノックがされ、人が入ってきた。

「皆さん大丈夫ですか？」

その人物は、閃光のレイであった

「レイさん!?」「」

「……閃光」

「皆さんにお知らせがあります」

それを聞いた瞬間、全員が静かにそれを聞いた。

「……剣聖が帰還しました」

「ということほ。カイト君も帰ってきたんだね！」

シズクはその言葉にびくりと体を強張らせた。

「いえ、剣聖は一人で帰還しました。カイト様はいません」

「「「「!?!?!?!?!」」」」

その場にいる全員が驚いた。

「……!?!?!?!?!」

シズクは部屋から飛び出していった。

「シズクちゃん!?!?!?!?!」

「レイさん、どういうことですか……?!?!?!?!?!」

「カイトが帰ってきてない理由は何ですか?」

視線はレイへと集まる。

「わかりません。……だから、それを今から剣聖に聞きに行こうと思っていたところです」

「シズクちゃんは……」

「恐らく剣聖のところでしょう」

「じゃあ、急いで向かいましょうか」

エリカのその言葉に、皆が部屋から出て行った。

ユミナの部屋には静寂が満ちていた。

ポツリ。

「……カイト……」

ユミナの小さな声が残った。

酒場に剣聖はいた。

「……お兄様はどこっ!？」

シズクは今にも掴みかかりそうなほどの勢いで、叫んでいた。

シズクから殺気が零れ出ていた。

「シズクちゃん！？ ちょっと待って！」

そこに追いついたアイたちが、シズクを止める。

「……………」

「剣聖、カイト様はどうしたんですか？」

レイの問いをジークハルトは簡単に返す。

「カイトなら、多分まだ旧火山だと思うけど……………」

「何故一緒ではないんですか？」

「最後にヤバイのが出てきて、カイトが俺に先に帰って、この子達の面倒を見ててくれと言われたからね」

ジークハルトはそういいながら、アイたちの方を指差す。

「……………ヤバイの？」

シズクの問いにジークハルトは返す。

「黒い霧みたいな奴だったけど……………」

「……………？」

シズクは首を傾げる。

よく分かっていないようだ。

他の皆もよく分かっているわけではないが。

「まあ、すぐに帰ってくると思うよ。カイトだしね」

「……うん」

シズクは最初のような険悪な空気は纏っておらず、いつものように頷いた。

「そういえば……ユミナさん？ だったっけ。あの娘は何処に行ったの？」

ジークハルトのその一言に、空気が凍り付いた。

「……あれ？ 不味いこと言った俺？」

ため息をつきながら、呆れた様子のレイが皆の代わりに答えた。

「ユミナさんはディアブロス戦の際やられて、まだ眠っています」

「そうなんだ……」

ジークハルトは皆を見回す。

「他にも怪我をしていて、回復するまでまだ時間がかかります。だから、クエストを受けることができないんです」

「なるほど。一番軽症なのはアイさんだけか……」

その一言でアイの表情が曇った。

「……そうだ。二つ名持ちに手伝ってもらおう！」

「……何をでしょうか？」

突然声を上げたジークハルトに聞き返すレイ。

「いやね、カイトにこの子達のことを頼まれたわけだけど。怪我してるから鍛錬はキツイじゃないか」

「当たり前ですね」

「だから、伝説級オレたちの二つ名持ちで少しアドバイスしてあげようかなと」

「……誰がですか？」

「エリカさんは、剣聖の俺が。キイ君は……片手剣？」

「はい。でも、双剣も使います」

「じゃあ、閃光が教えてあげてね」

「わかりました」

「それで、残ったアイさんだけど……。 “魔弾” を呼ぼう」

「……正気ですか？ “魔弾” が応じるとでも思っているのですか？」

「ん、カイトの名前を出せば応じてくれると思っよ」

なんてこと無いという風にジークハルトは言う。

アイは固まっていた。

“魔弾”銃器系のスペシャリストで自分の目標で憧れの人。

そんな人が自分に教えてくれるなんて夢じゃないかを疑った。

「……私はユミナさんを診とく」

「お願いねシズクちゃん」

「さて、ここで問題が一つ浮上する」

「何ですか今更……？」

レイは呆れたように聞き返す。

「“魔弾”の居場所はわかってるけど、どうやって連絡をつけようか？」

「……………」

皆は啞然とした。

「まさか、考えてなかったのですか……？」

「考えたが、考えたがな……」

「決めれなかったと……？」

「まあな」

沈黙が流れる。

「……私が呼んで来ようか？」

シズクはそう聞いた。

「頼んでいいか？」

「……うん。でも、ユミナ診てて」

「うん、それは私が診ておくよ」

「じゃあ、他の皆はさっそく始めようか」

「はい……」

「わかりました」

アイとシズクを除く皆は、大闘技場へと向かった。

「……行ってくる」

「うん、さっそくさっそくさっそく」

シズクもすぐにどこかへ行き、アイはユミナの部屋へと戻っていった。

第五十話「白と黒の契約」(前書き)

サブタイトルの“契約”は“コントラクト”と読んでくれたら、
とても幸いです^^

勿論、普通に“けいやく”と読んでくれても構いませんっ

第五十話「白と黒の契約」

第五十話「白と黒の契約」

真っ暗……何も見えない……。

「ここは、どこ？」

私は目を覚ますと真っ暗な場所に居た。

辺りには何も無く、暗闇が続いていただけである。

「みんなは……？」

私はとりあえず前へ進むことにした。

暫く進むと真っ暗ではなくなった。

「白……いや、黒……？」

何も無い世界はモノクロで彩られていた。

「始めましてユミナ」

不意に後ろから声をかけられた。

マスター？ 私のこと？

「えっと、貴女は……？」

「【黒乃 鈴音】よ」

クロノ……スズネ……？

そう答えた少女はカイトのような漆黒を纏っていた。

「ここはどこなの？」

「ユミナの心の中」

心？ つまり、夢みたいなものかな……。

「うん、そう考えてもいいわ」

私の心を読んだ！？

「だって、ユミナの心だし……此処はね」

「鈴音……！ 抜け駆けは許しません……！」

そう叫びながら走ってくる少女には少し見覚えがあった。

夢の中で二、三回あったことがある白い少女。

「煩い！ ユミナは私のなんだから、あんたには関係ないでしょ！」

「違います！ マスターは私のマスターです！！」

2人は私を置いて喧嘩を始めてしまった。

……私はどっちのものでもないよ。

「それで、貴女は……？」

「す、すみません！？ 申し遅れました。私は【姫神 真白】とい
います！」

ヒメガミ……マシロ……？

「私達2人はマスターの味方ですよ」

ヒメガミさんは私を安心させるようにそう言った。

「真白と呼んでね」

「私は鈴音」

「うん、わかったよ！ マシロ、スズネ！」

私が名前を呼ぶと、二人は嬉しそうな笑顔になった。

うん、癒される笑顔だね！

「ありがとうございます」

「……ありがとう」

また心が読まれたよ!?

「私たちはユミナの中にいるのです」

「そう、だから今心が読めるのは私達だからって事も在るけど、ユミナの世界に居るからってこともあるのよ」

本当にここは私の心の中なんだ……。

「でも、何で2人は私の中に居るの?」

うむ、謎だ……。

「偶然……いや、運命ですかね?」

「珍しく気が合つわね真白。その通りだよ」

「別に私はあなた何かとは気は合いたくありませんけどね」

「それは、こちらの台詞よ!」

「なんですか!」

「なんなのよ!」

またもや喧嘩が始まってしまった。

少し仲が悪いね、この2人は。

まあ、でも喧嘩するほど仲が良いと……

「「違いますっ！！」」

息ピッタリだよ……本当は仲が良いんじゃないかな？

「まあまあ。とにかく運命なんだね？」

よくは分からないけど。

「……少し詳しく説明してあげる」

スズネはそう言って、マシロと説明を始めた。

二人の説明によると

二人は私がピンチの時に力を貸してくれていたらしい。

白い力はマシロので、黒い力はスズネのであるらしい。

そして、二人が何故居るか。

運命の内容についても詳しく教えてもらった。

「これ、全部本当の話なんだよね……」

話の内容は想像を超えて危険なものだった。

「……はい。残念ながら」

「いつか来るものが、今来たって訳」

「……鈴音。もう少し言葉を選んで」

「……わかってるわよ」

私は声を出せずに居た。

日常が壊れるかもしれない。

日常が変わるわけでもない。

私何か変わるかもしれない。

別に私何か変わるわけでもない。

大切な人たちが居なくなるかもしれない。

大切な人たちがいなくなるわけでもない。

そもそも必ずしも何かが起こるわけでもない。

「……確率は？ それと、起きた場合どうすればいいの？」

「もう既に兆しは見えてるよ。それでもあと、半々って所ね」

「起きた場合は……闘います」

「そう、だから私だけを頼りにしてなさい」

「鈴音じゃなくて私の方が頼りになります!」

「なんですつて!」

「なんですかつ!」

また喧嘩が始まる。

ちよつと私は苦笑気味である。

「ユミナは私のよっ!」

「いいえ、マスターは私のです!」

「2人共を頼りにしてるから……」

私は2人を宥めた。

「まあ、当分は私たち会えないんですけどね……」

マシロが悲しそうにそう言った。

「……そう、だったわね」

スズネも悲しそうに顔を俯かせる。

「え!?! 何で?」

「今日、ユミナに会うために力を使い果たしてしまったから」

「私たちは眠ってしまつたよ」

そうなんだ……。

「ピンチの時はなるべく助けるわ」

「私も助けます」

「ありがとう」

「まあ、海斗がいるので安心です」

「ああ、アイツね」

私は心底驚いた。

「ええええーっ!!?!? 二人ともカイトを知ってるの!?!?」

「まあ、昔からの友人ですね」

「ふんっ、あんな馬鹿他に知らないわ」

二人ともほんのり頬が赤い。

何か怪しいな。

「誤解よ()です()!!!!」

二人はやっぱり仲良しさんだね！

「コホン！ え〜と、では始めませんか？」

「そうね、時間もあまりないし」

「うん」

『私の名は姫神真白・白き光の加護をもって・貴女を護り続ける・その身名を告げ・私と契約を果たせ』

『私の名は黒乃鈴音・黒き闇の力を振るい・貴女の為闘い続ける・その身名を告げ・私と契約を果たせ』

「私の名前は　ユミナ・アリアス！　2人と契約を結びます！」

白い光と黒い光に包まれた。

その光は私の中へと入っていき、右手の手のひらが光った。

そこには白と黒の紋章が刻まれていたが、すぐに透けるように見えなくなった。

「契約完了です！　必要な時以外は紋章は見えませんか」

「終わりね。どこか痛むところある？」

「ないよ」

「よかった」

皆で笑った。

そして、また喧嘩が始まって私が止める事になった。

暫くして時間がたつと、お別れがやってきたらしい。

「また、少しの間お別れです」

「はあ、私はようやく始めて会えたのに」

「ほら、鈴音！ 愚痴らないの」

「いいもん！ 今度は絶対私のものにして見せるから覚悟しときなさい……！」

「駄目ですーッ！！ マスターは私がものにするんですから……！」

「何、やるのー！？」

「やりますかー！？」

「……まったく、2人とも」

私は呆れたようにそれを止める。

「また会いましょう。マスター」

マシロはとびっきりの笑顔で別れを告げた。

「またね、カイトにもよろしく言っというてね。
別に言わなくてもいいけど……。ばいばい、マスター」

スズネは照れたような笑顔で別れを告げた。

「うん、バイバイ二人とも!! またね!!」

また、会えるから……。

目の前は真っ暗になり、私の意識はそこで途絶えた。

第五十話「白と黒の契約」（後書き）

次回、ユミナが眠りから覚めます！

そして、“魔弾”も登場！

遂に、真白と鈴音が登場です！

二人はちよくちよく出てくるかもしれません。

第五十一話「ユミナの目覚め」

第五十一話「ユミナの目覚め」

私はハッキリと目を覚ました。

「ここは……」

「ユミナちゃん起きたの!？」

辺りを見回すと扉のところにアイが居た。

「アイ……ここは?」

「ドンドルマの宿泊施設だよ」

「そっか、私」

私は今までの出来事を全て思い出した。

上位試験の途中にディアブロスにやられた。

それをアイが背負って運んでくれた。

夢でマシロとスズネに出会い、運命の話について聞いた。

「よかったあ〜……目を覚まさなかったら、どうしようかと思った……」

「心配掛けてごめん。みんなは？」

アイは私が気絶した後の話をしてもらった。

アイは比較的軽症。

エリカは肋骨二本骨折。

キイは左腕骨折と武器損壊。

「それでね、今、アドバイス貰っているの〜」

「アドバイス？」

「うん。キイ君は“閃光”のレイさんから。

エリカさんはね、“剣聖”のジークハルトさんから。

私はね〜なんと！あの“魔弾”のダイナさんから教えてもらえるんだよ！

えへへ……」

「魔弾……」

“魔弾”の伝説級の二つ名を持つ、銃器のスペシャリスト。

名を“ディア・ハーツ”

彼女が撃ち出す弾は、全てを貫き、全てを容赦なく殲滅する。

それ故に“魔弾”という二つ名を授かった者。

「私は……?」

「……」

アイはとても気まずそうに目をそらす。

「え? ち、ちょっと……」

「ユミナちゃんは……ね? えっと、その……」

私には何も無いようだ。

恨めしそうに目を潤ませて、上目遣いでアイを見据える。

「あ、ううゝその、ね?」

何が、ね? 何だろうか。

アイは必死に目をキョロキョロさせて考えているようだ。

「あううゝ……そんな目で見ないでえゝ」

遂に耐えかねたのか、申し訳なさそうにそう言った。

「……まあ、別にいいけどね」

「う、……うん」

「ジークハルトさんが帰ってきてるってことは、カイトも帰ってきてるよね？」

今、カイトは何処に居るの？」

「えっ!?!?」

アイはとても動揺していた。

「どうしたの……?」

「あ、いや！ なんでもないよ?」

「……」

怪しい……怪しすぎるよアイ。

ジイーとアイを見つめ続ける。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「…… ううゝそんな眼、卑怯だよ！」

「で？ カイトは何処？」

「……カイト君はね、“まだ”帰ってきてないの」

「！！？ どういうことなの！？」

私はアイに詰め寄る。

「ちょっと……落ち着いて、ね？」

そう言われて私は、落ち着くために深呼吸を繰り返した。

「うん、落ち着いたよ！」

「そう、でね……」

アイから説明を受けた。

「カイトは、旧火山に残ってるんだね？」

「うん、多分まだいるのかな？」

「そっか」

色々聞きたい事があったのに残念だな……。……。

「そういえば、私の“鬼斬刃”は？」

ディアブロスと戦った時に弾かれて落としてしまったのである。

「あそこだよ」

アイの指差した方向を見ると、確かに“鬼斬刃”が隅に置いてあった。

私は立ち上がってそれを手に取った。

「どうするの？」

「ちょっと体を動かしてくるよ」

「無理しないでね？」

「わかってる！」

「私は皆に伝えてくるね」

「うん」

私は部屋から出ると、訓練所へと向かった。

シズクは樹海の中を歩き回り、ようやく目当ての人物をみつけた。

「……みつけた。久しぶり」

「ん？ ……ああー！！！？ シズクだ！！！」

「……うん」

「こんな所に何しに来たの？ って、カイトは何処？」

「……お兄様は別件。今日は用があつて来た」

「ん、何かな？」

シズクは事の顛末を話した。

「そつか。別にいいよ。カイトにも会えるんだよね？」

「……うん」

「それで？ そのアイって娘は強いのか？」

「……強くなる」

「ふうん、それだけ聞ければ十分だよ！」

「……ありがとう」

「いえいえ」

「……ディア」

「何かな？」

「……敵」

「そだね」

ディアと呼ばれた女性は、返事をしながら背負っていたライトボウガン

……“神ヶ島G”を敵の方へと構えた。

クワアアーーーーッ！！！！

眠鳥ヒプノックが二人の前へ立ちはだかった。

「シズク、手は出しちゃ駄目だよ」

「……うん」

返事を聞くと同時に引き金を引いた。

パンッ！

放たれた弾丸が吸い込まれるように、ヒプノックの顔面へ命中した。

一撃で左目を貫いて失明させた。

クワアアアアッ！？？

「まだまだ、」

続いて引き金を引く。

パンツ！

残って痛もつ片方の目へと炸裂した。

クワ ツ！！？

両目を失ったヒブノックはフラフラとします。

「次は〜」

パンツ！

左足へと放たれる。

その一発はヒブノックの足の腱を断ち切った。

ズドーン！！

バランスを失い倒れこんだ。

「イエーイ！！」

パンツ！ パンツ！ パンツ！

右足、左翼、右翼と弾は次々と貫いていく。

「うん、さよならかな〜？」

そういつて引き金を引いた。

パンツ！

ヒプノックの胴体を貫いた。

すると糸が切れた人形のように動かなくなってしまった。

「うん、討伐完了！」

その一発はヒプノックの心臓を見事捉えてたため絶命した。

ディアは僅か七発でヒプノックを仕留めたのである。

「……酷いことする」

「ん？何が？」

「……貴女なら一発で仕留められた」

「そだね。でも、それじゃあ面白くないでしょ？」

「……“魔弾”は酷いことするってお兄様に言っとく」

「うわっ！？ それだけは止めて！ お願い！！」

「……ん、仕方ない」

彼女……ディア・ハーツが、伝説級の二つ名持ち“魔弾”であった。

第五十一話「ユミナの目覚め」(後書き)

ついつい、伝説級の二つ名持ちを出しちゃったっ!!!

……すみません、出したかったんです!

前は当分出さないって言いましたけど、出てしまいました><;

他のもいつか出てくるかもしれないせん^^;;

今度はまだ先?(…自信はないですが)の筈なんですっ!

第五十二話「それぞれへのアドバイス」

第五十二話「それぞれへのアドバイス」

「改めて確認するが、エリカさんは大剣使いだよな？」

ジークハルトはエリカにそう聞いた。

「はい。そうです」

「そうか、じゃあ俺が今からアドバイスをするよ」

そういつてジークハルトは、背中の流刃剣ガノトトスを構える。

「俺は剣なら何でも使えるんだけど」

「なんでも、ですか？」

「ああ、大剣、太刀、片手剣、双剣……この辺りでは聞かないかもしれないが、

スラッシュアックスという武器も使えるぞ」

「流石です……」

エリカは尊敬のまなざしでジークハルトを見つめる。

「まあな。じゃあ、教えるからよく聞いててくれ」

「はい」

「そうだな……。まずは大剣を片手で振れる位まで使い続ける。両方ともな」

そっついながらジークハルトは、片手で流刃剣ガノトトスを振り回す。

「女の身じゃあちよつとキツイかもしれないが、

片手で振れる様になつたら色々と便利になるからな」

「……たとえば？」

「うーん、咄嗟の判断の時に速く動けるだろ？」

あと筋力が上がって、両手で構えた時の威力や精度が上がる」

「なるほど……」

「ま、俺の動きを見ててくれ。怪我で動けないだろ？」

「はい、よろしく願います」

ジークハルトはいつもの稽古や、仮想の敵を想像した動きの訓練など、

体を動かし続けてエリカにアドバイスしていった。

「キイさんは片手剣なのに双剣を使うのですか？」

「はい、もともと双剣を使いたかったのですが……未熟なもので、色々が強くなるまでは片手剣と併用しようかと」

「ふむ、そうなんですか」

「今回のディアブロスも双剣の練習をしていないと勝てたかわかりませんし、

だからといって最初から双剣でも勝てたかはわかりません」

「正直なんですね……それはとてもいいことです。
あなたは長生きするタイプですね」

レイはそういってキイに微笑みかけた。

「あはは、ありがとうございます」

「いえいえ」

「まあでも、結果は武器損壊に左腕骨折ですからね」
キイは自嘲気味に言った。

「これからですね」

「はい」

「では、僭越ながらこの閃光がアドバイスを差し上げたいと思います」

「よろしく願います」

「私は女性なので男性より力が劣ります。でもそれを補うものが在ります！ 分かりますか？」

「……なんですか？」

「閃光という二つ名通り、“速さ”です」

「速さ……」

「斬撃に自らの速さを乗せれば、威力は上がり鋭さも増します。そして、その速さをもってすれば敵の攻撃をかわすこともできます」

「そうなんですか！ なるほど……速さですか」

「片手剣でもこれは通用しますよ」

「身軽だからこそなんですね」

「その通りです。でも、速さだけでは足りません」

「え？ あと、何が必要なんですか」

「それは“眼”です。速くても相手の動きが見えず、

逆に自分の速さで周りが見えていないと逆効果ですから」

「つまり、動体視力も鍛えなければいけないんですね？」

「はい。では、さっそく鍛錬してみましようか」

「はい！ ……て、えええーっ！!?」

「大丈夫です。ひたすら動き続けて私の攻撃を避け続けるだけでいいです！

体力と持久力に動体視力、筋力、速さの全てを同時に鍛えます」

「僕、怪我してますけど……」

「大丈夫です！ ギリギリ眼が追いつける速さでやりますし、攻撃手段は手刀ですから」

「……はい」

キイは諦めて鍛錬に集中することにした。

「……ディア。この人がアイ」

「ほほ、この子が私が鍛える子だね！」

「あわわわ、で、ディア・ハーツさんでしょうか!?!」

「にははは、その通りだよ！ 崇めたまえ」

「は、はは」

アイはその場で万歳して頭をたれた。

「うわっ！？ 本当にされちゃったよ！ どうしようシズクっ」

「……最初からさせなければいい」

「アイちゃん？ 頭上げていいよ、ちょっとしたジョークなのさっ」

「は、はい！」

アイは緊張気味に返事をする。

「憧れの“魔弾”ディア・ハーツさんに教えてもらえるなんて、私とても感激です！ よろしくお願いします」

「あはは、何かとても尊敬されてるね……」

「……アイさん、ユミナさんは？」

「訓練場じゃないかな？ 体を動かすって言ってたよ」

「……じゃあ、行って来る。ディア、後は任した」

「にははは、相変わらず自由な子だね！」

ディアはシズクを見送ってから、アイに向き直る。

「じゃあ、私が今から君にボウガンのイロハを教えるからね！
ビシビシと厳しく行くから覚悟してねっ」

「はい！」

「君はライトボウガンかな？」

「そうです」

「そっか、ライトボウガンに限らずボウガン使いに必要なことを教えるよ」

そっいつて、ディアは神ヶ島Gを構える。

「必要なのは、眼と精神力と仲間と楽しさだよっ！」

「??？」

「まず、眼は……視力・動体視力・観察眼の3つね」

「うんうん」

「次に精神力だけど、どの局面や状況でも必要だし、
精密射撃の腕とかも関係してくるよっ」

「はい！」

「次は仲間！ ボウガンは1人じゃ成り立たない！
私ぐらいになると大丈夫だけどね」

「ほへ〜」

「仲間との連携やサポート、持ちつ持たれつの関係なんだよ！」

「はい」

「そして！ 最後は“楽しさ”だよっ！」

「?? あの〜なんで楽しさなんですか？」

「私はね、撃つのがとても楽しくて好きなんだよっ！
だからね、どんな狩りも楽しめるから私は強いんだよっ」

「！！ なるほど、そうだったんですねっ」

「ふふふ、分かるんだ！ 君もなかなかだね」

「ありがとうございますー！」

「君とは仲良く楽しくやれそうだよ〜」

「き、恐縮ですー!！」

「照れてる〜？ 可愛いじゃないか、この〜！ うっうっうっ〜」

「えへへ……」

「さて、射撃練習をしようか。アドバイスもあげやすいしね」

「はい！」

「ハッ！ ハッ！」

ユミナは訓練場で素振りをしていた。

「……ユミナさん」

「ん？ シズク……どうしたの」

「……もう、動いていいの？」

「うん、全然大丈夫だよ！」

「……そっか。良かった」

「心配してくれてありがとう」

「……うん」

「カイトは……まだ帰ってきてないよね」

「……うん」

カイトの話になった途端に、シズクが沈んだような表情をした。

「大丈夫だよ、カイトだもん！ 無事に帰って来るよ」

「……うん、お兄様は帰ってくる。でも、」

「どうしたの？」

「……帰ってきたら私お兄様に怒られる」

「え？　なんで」

「……約束を一つだけ破ってしまったから」

「なんて約束？」

「……それは言えない。けど、どうしても必要だったから」

「それならカイトも許してくれるんじゃないかな？」

「……お兄様はとても厳しい人だから」

「……そうかな？」

（カイト、シズクにはとても甘い気がするけど……）

そんなことをユミナは思った。

「……だから、お兄様が帰ってきたら危ないかもしれない」

「……いやいやいや！　約束を破っただけでそれって……ないない」

「……ユミナさん。お兄様を甘く見てはいけない」

「あーく……えっと、私も一緒に謝るよ。何をしたかは分からないけど」

「……ほんと？」

「うん、約束するよ」

「……ありがとう」

「うん」

「……一緒に生き残ろう」

「何故!？」

2人は他愛もない話で笑いあっていた。

第五十二話「それぞれへのアドバイス」（後書き）

そろそろ…カイトが帰ってくるかもしれないね！
一波乱ありそんな予感ですねっ

第五十三話「カイトの帰還」

第五十三話「カイトの帰還」

「ふう……逃げられちゃったな」

カイトはそう呟いた。

呟きながらも歩を進めて前へと進む。

「疲れた……全く持って疲れた」

全然そうは感じさせないが、そう繰り返す。

カイトが歩いてきた道には、大量の死体が無残に転がっていた。

カイトの両手は真っ赤に染まっている。

「ん、だいぶ汚れたな……綺麗にするか」

そう言い、指をパチンと鳴らした。

淡い光がカイトを包み込み、それが晴れた時には全て綺麗になっていた。

「これでよし」と

その場を振り返ると、自分が殺したモンスターたちが転がっている。

「命を粗末にするなんて……馬鹿だなあ」

しかし、それだけで、また前を向いて歩き始めた。

カイトが向かっている先はドンドルマ。

「シズクが約束を破るなんてね……初めてだ。もしかして反抗期なのか!？」

……まあ、とにかく帰ったら“おしおき”だね」

ビクッ!

隣に居たシズクがいきなり肩を震わした。

「どうしたのシズク?」

シズクは顔を蒼白にしながら返した。

「……いえ、急に寒気が」

「風邪かな……? 急いで帰って休もつか」

「……はい」

私達二人は、鍛錬を止めて（してたのは私だけけど）、宿泊所へと戻ることにした。

「……ユミナさん」

「ん？ どうしたの」

「……みんなのところ行く？」

「え、なんで？」

「……二つ名持ちに会えるよ」

「あゝそっか、次はいつ会えるか分からないもんね」

「……ユミナさんだけ、アドバイスを貰ってない」

シズクの言葉が心にグサリと刺さった。

「ううゝ私だけ……」

「……ああっ、えっと！ 剣聖に教えてもらえばいい」

シズクは慌てて取り繕うようにそういった。

「そっか、ジークハルトさんは全ての剣をつかえるもんね！
だったら、太刀の使い方でアドバイスもらせるね！！」

シズクの言ったことは名案だった。

てか、今頃気付く私って……結構気にしてたのかな？

「よし！ すぐに行こっか」

「……うん」

私たちは行き先を変えて、皆がいるところへと行くことにした。

「エリカ〜！ ジークハルトさん〜！」

ユミナたちは、まずエリカたちのところへ向かった。

「もう大丈夫なのですか？」

「思ってたより元気だな」

「心配かけたね……。もう全然大丈夫だよ！

……て、ジークハルトさん口調変わってません？」

ユミナは不思議に思い、そう聞いてみた。

「ああ、これは素だな。丁寧な方も素だけどな……」

「変わった人ですね……」

「それを本人を前にして言うのは失礼じゃないか……？」

呆れたようにジークハルトはそう言った。

「……変」

「それはお前たち兄妹にだけは言われたくないがな！」

「……そうお兄様に伝えておく」

シズクがそういうと同時に、

「真に申し訳ございませんでしたっ！！」と、
ジークハルトは腰を直角に折って全力で謝った。

「……大丈夫」

「言わないでくれるん」

「……骨は拾ってあげる」

ガバツ！

次は土下座を繰り返して、必死に謝っていた。

「剣聖の影もないね……」

「そうですね」

それを見てユミナとエリカは少し引いていた。

「……許す」

「ありがとうございますっ!!」

「ジークハルトさん少し大袈裟だと思いますよ?」

「ふっ……。ユミナさん! 貴女はカイトの怖さを知らない。アイツは平気で人を飛竜の巣へ放り込んだり、鍛錬と称して一方的にボコボコにしてきたり、この間なんて溶岩を投げつけられたりしたんだ! そう、前の時だって」

その後もジークハルトは一人で震えながら、ブツブツと恨み言を連ね上げていった。

「……うん、それはジークハルトさんだけなんじゃないかな?」

ユミナの確信を得たような一言に、ジークハルトは叫んだ。

「ぐわあああーっ!! やっぱり俺だけなのかーっ」

ジークハルトは頭を抱えて唸り出した。

「ジークハルトさん、何か壊れてきたね……」

「今のはユミナの所為では……?」

「えっ!? 私……?」

「はい」

「……ユミナさんは悪くない。全部、剣聖の所為」

「何故そこで俺なんだよーっ!!」

賑やかな声に惹かれて人が集まってくる。

「あれ、皆賑やかだね〜どうしたの？」

「ユミナさん、もう大丈夫なんですね」

「剣聖、自分で言い出したことなのに、仕事を放棄して遊んでいるとは……」

「にははは、賑やかなのは大好きだねっ」

集まってきたのは、アイ、キイ、レイ、ディアの四人であった。

皆が集まってきたところで、さまざまなお話が始まった。

上位試験の続きはどうなるのか。

新種たちについてもっと警戒が必要か。

どのようなアドバイスだったか。

皆で話が盛り上がっているところに、甲高い音が聞こえてきた。

カンカンカンカンカン!!

警鐘の音であった。

「えっ、何？ どうしたの!？」

突然のことにユミナたちは混乱した。

「これは、……敵が来たのですね」

「急いでギルドに行ったほうがいいな」

「にははは、戦闘開始かな！」

流石にドンドルマの暮らしで慣れていた、二つ名組みは慌てることもなく、

冷静に判断を下していた。

ユミナたちはギルドへと目指した。

「マスター何があったのですか？」

ギルドに着くと同時に、レイがマスターに質問した。

「うむ、リオレウスが数頭迷い込んできたのだ」

「珍しいですね」

「そうだな、久しぶりだな。この辺りにモンスターはいないからな」

マスターとレイが話を進めていく。

その間、残った7人はそれぞれ話をしていた。

「それにしても、敵も運が悪いよね〜」

「え、どうしてですか？」

ディアの言葉を不思議に思ったユミナはそう聞き返した。

「だって、ハンターたちの街に迷い込んだだけでも悪いのに……。
そのうえ、私たちまでいるのよっ!」

そういつて、ジークハルトとレイを指差しながら言った。

「あ、確かに伝説級の二つ名が3人も揃っていますね……」

「そそ。それにシズクもいるし〜カイトもいつか帰ってくるしねっ
!!!」

「……どんなモンスターが来ても負けそうにないですね」

「その通りだよっ! 話がわかるね君は〜」

ユミナとディアは互いに笑った。

そこに話が済んだのか、レイがユミナたちに話しかけた。

「私たちは今から討伐に向かいますよ! 最低限の準備だけしてく

それに何組かのハンター達が応戦していた。

おお！ 剣聖がきたぞー！

閃光に魔弾も一緒だ！？

もう大丈夫だぜ、俺たちの勝利だ！

ジークハルトたちが広場に現れると同時に、味方の士気が高まった。

「……1人1頭だ！！」

「了解です」

「にははは、任せといてー！」

そういつて、ジークハルトたちはそれぞれの獲物へ向かっていった。

剣聖たちといた後ろの集団は何だ？

あのラオシャンロンを一人で倒した男の連れじゃないか！？

なんだと！？ 凄い戦力じゃないか！！

ユミナたちまで勘違いされ始めた。

「なんか、凄い勘違いが広まっていつてる」

「そうだね、大変だね……」

その時

ザクツ！ ズシャアアアアーン！！！！

「なっ！？」

リオレウスが一刀両断された

その光景にジークハルトを始め、全員が驚いた。

血が雨のように降り注ぐ。

その雨の向こうには漆黒に包まれた少年がいた。

凍りつくような殺意に包まれている。

その場にいた全員が少年に見覚えがあった。

「カイト……」

ユミナは漆黒の少年の名を呟く。

ユラリとカイトは一步を踏み出してきた。

「……」

ビクリとシズクは肩を震わせた。

カイトにいつもの温かさは無く、冷たい殺意が辺りを包み込む。

カイトはシズクを見つめた。

その眼に光は無かった。

シズクは怖くて逃げ出したくなった。

「…………お兄様……」

「約束を破ってしまったね…………」

その圧倒的な圧力に全員が戦慄した。

「シズク…………」

そこには、紅い気を纏う漆黒の最強がいた。カイト

「……覚悟はいいなっ！！！！」

第五十三話「カイトの帰還」(後書き)

カイトが帰還しました！

なんだか面白いことに…続きは近いうちに更新です！

第五十四話「史上最凶の兄妹喧嘩 - 前編 -」（前書き）

注意、今回は特にモンハンらしくありません！（…かもです）

そう言ったのが嫌いな方は、お手数ですが戻るを

押した方がいいかもですっ！><

それでは、いつもどおり楽しんでください^^

第五十四話「史上最凶の兄妹喧嘩 - 前編 -」

第五十四話「史上最凶の兄妹喧嘩 - 前編 -」

「 覚悟はいいなっ！！！！」

瞬間、カイトは力の限り叫んだ。

その叫びはまるで、“バインドボイス咆哮”のようであった。

ユミナたちは恐怖と本能で体が硬直した。

(今までの、どの敵と対峙した時よりも…… 怖い！)

ユミナはそんなことを考えていた。

カイトが動き出そうとした時、ジークハルトが声を張り上げた。

「全ハンターに通達！ 第一級緊急事態だ！ 全員武装して戦闘準備だ！」

それは、キイとエリカに向けて言われた。

「ギルドマスターに伝えてきます！」

「なるべく急いでくれ！ できたら戦力として参加してくれ！」

「はい！！」

キイとエリカは酒場へと走っていった。

それを軽く見送ってからユミナ達のほうを向いた。

「ユミナさん、アイさんも武器防具を持って戦闘に参加してくれ！」

「は、はいっ！！」

「レイ！ デイア！ シズク！ 俺とお前等で時間稼ぎだ」

「はい」

「仕方ないな」

「……」

ジークハルト、レイ、デイアは武器をカイトに構えた。

シズクは黙り込んだままだ。

「……準備は済んだか？」

「……いや、全然準備不足だね！」

「……そうか、行くぞっ!!!」

咄嗟にジークハルトは大剣を盾にした。

ガキンッ!!!

「ぐはあっ!?!?」

カイトは素手でジークハルトを大剣ごと殴り飛ばした。

「ハッ!!!」

背後に接近してきたレイが双剣を振るう。

ブンッ!!!

レイの一撃はカイトを捕らえることは無かった。

「……こっちだ」

カイトはレイの背後に立っていた。

レイは振り向くと同時になぎ払う。

しかし、カイトは簡単にこれ避ける。

「私を忘れてもらったら困るな」

避けたところにディアが貫通弾を連射する。

「忘れてなどいないさ」

凄まじい身のこなしでそれを全て捌いていく。

「がら空きだぞっ!」

いつの間にか回復したジークハルトが、大剣を振り下ろした。

「……空けてやってるんだよ」

ヒラリと一撃をかわして、反撃に裏拳を繰り出す。

それをバックステップでかわして距離をとる。

ジークハルトたちは、カイトを中心に三角形に囲んだ。

ユミナとアイの二人は激しい攻防に手が出せずにいた。

「……どうした。もう終わりか?」

「作戦を考えてんだよ」

「無駄だと思うが」

「それは、どうかな!」

言い終わると同時にジークハルトが斬りかかった。

レイも飛び込んでいき、ディアは援護と戦闘にそなえた。

大剣ながらも素早い連撃を繰り返していく。

カイトは難無くそれを避け続ける。

その避けた合間や瞬間を狙って、レイが斬りかかり、ディアが狙撃した。

「ハッ！」

カイトが反撃に一步踏み込んで、気合一閃。

ドガンッ！！！

それを辛うじてガードしたが、吹き飛ばされるジークハルト。

レイが入れ替わるように斬り込んだ。

「たあ！ たあ！ たあ！ たあああ！！」

瞬撃がカイトに迫る。

それを上回る速さで、回し蹴りを繰り返した。

ドゴッ！

「ッ！？」

レイは吹き飛び転がった。

ディアとカイトが向き合う。

雷撃の刺突がカイトに直撃した。

その場にいる全員が喰らったと思った。

しかし、煙が晴れたそこには

無傷で鬼斬刃の切っ先を、片手で止めているカイトがいた。

「　　そ、そんな……!!」

咄嗟に太刀を引こうとしたユミナだが、ビクとも動かなかった。

「それが今のユミナの全力……」

カイトは片手を上げた。

「……まだまだだね」

そして、思いつきり手刀を叩き込もうとしたその時。

ガキンツ!!!!

大鎌がカイトの肩にぶつかっていた。

「ようやく出て来たね。シズク」

「……お兄様。今のは許せない!」

シズクは憤慨したように大鎌を押し付ける。

刃はカイトに当たっているが、怪我をした様子は全く無い。

「それで、どうする?」

「……お兄様を 倒します!」

キイとエリカの二人は急いで酒場へと駆け込んだ。

そこでギルドマスターを見つけ出すと、急いで事情を説明した。

「くっ、なんてことだ。みんな聞いてくれ!」

ギルドマスターは酒場にいる全員に叫んだ。

「第一級緊急事態だ! 直ちに全員武装して戦闘準備を行え!」

なんだ!? 何が起こったんだ?

第一級緊急事態だと!? 古龍種でも襲来してきたのか!!

「今回は相手が悪すぎる! 武装したら逃げても構わない!!」

目標は漆黒の服をした少年の無力化。または、撃退だ!」

少年だと!?

人に武器を向けてはいけないという暗黙の了解はどうなるんだ

!!

まさか、ラオシャンロンを一人で何とかした男か！？

なんだって！？

「今だけは奴には武器を向けてもいい！！

見た目が少年だからって甘く見るなよ！

奴は古龍なんかとは比べ物にならないくらい強い」

一瞬で酒場の中が騒がしくなった。

逃げる準備をするもの。

戦うための準備をするもの。

情報を少しでも集めようとするもの。

さまざまな状態が入り混じり、混沌と化した酒場。

キイとエリカも武装して、ユミナたちの元に戻ろうとした。

次々とハンター達も戦うために酒場を後にする。

ギルドナイトも動き出した。

こうして、全てのハンターを巻き込んだ兄妹喧嘩が始まった。

「……お兄様を　倒します！」

それと同時に互いに離れた。

急に太刀が離されたユミナは、バランスを崩して倒れこんだ。

「……行きます！」

「行くぜ！」

互いに走り出し、正面から激突した。

シズクは自由自在に大鎌を振り回し、体の全てを持ってしてカイトにぶつかっていった。

カイトは繰り出された攻撃を受け流し、反撃を繰り出していく。

一進一退の攻防が繰り広げられている。

そこでシズクが激しい攻勢に移った。

「……光よ」

空中に幾つかの魔方陣が浮かび、光の光線が放たれた。

それを紙一重でかわしていくカイト。

「……闇よ」

魔方陣から闇の奔流が放たれる。

「破ッ！！」

気合と気迫でそれらを正面から打ち消した。

大鎌を振り回し、魔法を放つてもカイトに傷を負わせることができない。

「……風、雷、氷、水、土」

手当たり次第に魔法を放ち、隙を作ろうとする。

避け続けるカイトに、ほんの一瞬だけ小さな隙を見出したシズクは、一瞬で背後を取り大鎌を振り下ろした。

それをかわして距離をとるカイト。

「……掛かった」

カイトは着地と同時に炎柱に飲み込まれた。

「……終わらない！ 焼き尽くせ！！」

カイトを囲むように、無数の魔方陣を展開し、火の魔法を放った。

爆炎があたりを飲み込み、燃え続ける。

「倒したの？」

その様子を見ていたユミナたちは、皆同じ感想と疑問を抱いていた。

「……………」

シズクは黙り込んだままである。

火炎の中に影が見えた。

「!?!」

「……………罫は中々良かったな。だが」

カイトは全くの無傷で歩いてでてきた。

「俺に火は効かないって、教えなかったか？」

「……………」

「詰めが甘い　俺たちのことも忘れるなよ？」

背後からジークハルトが大剣を振り下ろし、
ユミナとレイが左右から斬りかかった。

カイトは即座に反応し、ユミナを太刀ごと投げ飛ばし、
レイの双剣を叩き落した。

「キャッ!?!」

「クッ!」

ジークハルトは全く気にせず、大剣を振り下ろしたが、

カイトの神速の回し蹴りで碎かれてしまった。

「なっ!?!」

「吹き飛ばせ!」

気合一閃。

回し蹴りで起こった風圧で、ユミナたちは吹き飛ばされてしまう。

追撃されないようにディアとアイが銃弾の嵐を降らす。

神速の動きでその銃弾を弾いていく。

硬直状態が続いたその時。

「援軍だっ!?!」

ギルドマスターの大きな声が響いた。

「ユミナ助けに来たよ!」

「大丈夫でしょうか!」

キイとエリカがユミナたちに駆け寄った。

ギルドマスターの後ろには、沢山のハンターとギルドナイトの軍団がいた。

「交戦中の者たちを安全なところに!」

その間に奴の動きを止める!!」

おおおおおおー……っ!!!!!!

ハンターたちは叫びながらカイトへと向かっていった。

救助部隊に回収されたジークハルトたちが来た。

「マスター……」

「お前たちは切り札だ！ 少し酒場で休んでおけ!!」

「はい！」

ジークハルトたちは酒場へと向かった。

「知ってはいたけど、強すぎるな……」

ジークハルトが座り込みながらそういった。

「ええ、あそこまで強いとどうしたらいいか」

レイがそう返す。

「にやはは、さすがカイトだねっ！」

「いやいやいや、褒めている場合じゃないでしょう!?!」

「そうですね。私たちは直接は見ていませんが……とても強いんですね?」

いきなりカイトを褒めだしたディアに突っ込むキイ。

そして、冷静に分析するエリカ。

「どんな、攻撃も効かないもんね?」

「うん、でもギリギリ着いて行ける所はあるよね?」

闘った感想を話すアイとユミナ。

そこに今まで黙っていたシズクが話し出す。

「……お兄様は一割も力を使っていません。

だから、少しでも本気になる前に何とかしないと……絶対に負けません」

「……っ?!?!?」「」「」

ユミナ、アイ、キイ、エリカの四人は驚いたようにシズクを見つめた。

「……あれで、まだ一割も出してないの?」

「……うん。まだ何も武器を使ってないから」

4人は表情は驚愕の色で染まっていた。

「まあ、俺たちは知ってたけどな……」

ジークハルトはユミナたちにそういった。

「早く言っして下さいよー!!」

ユミナたちは抗議の声を上げた。

「……私は、ユミナさんたちとなら何とかなる気がする」

「え?」

「……これは私の所為で、私の我侷なんだけど」

シズクは微笑みながら皆に告げた。

「……私と一緒に闘って?」

ユミナたち全員は顔を見合わせた。

そして、頷いた。

「はっ! 任せときな」

「全力を尽くしますよ」

「シズクの頼みだからね」

「僕も手伝いますよ」

「私も微力を尽くします」

「任せといて〜頑張るよ〜」

「そんなの、当たり前じゃない。がんばろう！ シズク」

皆の言葉を聞いてシズクは、

「……うん！」

コクリと頷いた。

「……お兄様。反撃開始です」

第五十四話「史上最凶の兄妹喧嘩 - 前編 -」（後書き）

史上最凶の兄妹喧嘩が始まりました!?

人対人 通常のモンスターハンターでは、在り得ない事です
が…、

これはこれでということ…すみません><

こういったのが本当に嫌いな方はすみません><

これは前編、後編の二本立てか、

間に中編をいれた二本立てで乗せたいと思っています!

こんな、モンハンぶち壊しがちな作品ですけど、

これからもよろしくしてくれたら嬉しいです^^

第五十五話「史上最凶の兄妹喧嘩 - 中編 -」

第五十五話「史上最凶の兄妹喧嘩 - 中編 -」

「うおおおー喰らえー！！！」

ハンターが愚直に大剣を振り下ろした。

ドガッ！！

その一撃がカイトに届く前に、カイトに殴り飛ばされた。

「お前等！ 決して引くな！！ 攻め続ける」

カイトに飛ばされたハンターを見て、怖気着いた一部のハンター達に、

檄を飛ばす熟練のようなハンター。

そのハンターにカイトは詰め寄り、力任せに蹴り飛ばす。

ドゴッ！！

「ガハッ！？」

後ろにいたハンター達を数人巻き込んで転がっていく。

「「「うおおおおお！」「」」

周りのハンター達が堰を切ったようになだれ込んできた。

カイトを先に進ませないと、道を阻み攻撃していく。

カイトはそれを軽く受け流し、一つ一つ丁寧に反撃していく。

「はあああ！！」

双剣を交差して斬りかかる。

カイトは後ろにかわすと同時に、間合いを一気に詰めて腹を殴りつける。

「おりゃあああ！！」

ハンマーの重たい一撃を頭へ落とす。

パシッ！

それを片手で受け止めて、そのまま流れるように肘を叩き込んだ。

「「たああああーっ」「」

片手剣と太刀が挟み込むように襲い掛かってきた。

カイトは身を屈めてそれをやり過すと、

起き上がると同時に片手剣のハンターを殴り飛ばし、振って太刀のハンターに蹴りを叩き込んだ。

バンバンバンバン！！！！

横一列に並んだボウガンや弓を使うハンター達が、カイトに沢山の弾と矢を放った。

カイトはステップすると、そのまま空中高くに飛び上がった。

空中で体を捻り、回転しながらハンター達の前に着地した。

ハンター達の首筋に手刀を当てて、気絶させていく。

カイトはすぐにハンター達に包囲された。

「……死にたがり共め」

カイトはそう呟きながら右手で拳を握る。

ハンター達に緊張が奔った。

「はっ！！」

カイトは握った拳で足元を殴りつける。

ドガンッ！！！！

足場が砕け、岩片がハンター達へ飛んでいく。

ドガガガガガ!!

ハンター達に直撃しダメージを与える。

小さなクレータができ、数メートルに亘り足場が乱れる。

一番近くにいたハンター達は衝撃波で吹き飛んで気絶した。

「……掛かって来いよ」

挑発するように構えを取る。

無事だったハンター達がいち早く襲い掛かった。

「後悔させてやるからよおっ!!」

カイトは殺気を放ちながら迎え撃った。

「……で、どうしよう?」

シズクは首を傾けながら困っていた。

「なんか良い作戦は無いか」

ジークハルトも腕を組んで考え込んでいる。

「シズク、カイトに弱点とかは……」

「……………無い」

「だよね……………」

ユミナは予想していたように肩を竦めた。

「とりあえず、俺は武器を取ってこなきゃな」

ジークハルトは折れた大剣の柄を持ちながらそう言った。

「……………火は止めた方が良い」

「そのようだな」

「……………どうする?」

シズクは改めて皆に問いかけた。

「僕とエリカさんは闘った事が無いですし、怪我もしていませんので
なんとも……………」

「怪我は……………この際気にしないで続けてください」

キイトエリカはそう言い。

「私は十分に作戦を立てた方が良いかと……………」

「にゃはは、カイトに通じるかな?」

レイとディアはこう言い。

「カイト君強すぎだね〜バリスタとかは使えないのかな？」

「そっか、兵器を使えば少しはマシだよね」

アイとユミナはこう言った。

「まあ、つまり……あらゆる作戦を考えて、使えるアイテムは全て使う。」

その上で実力と数で勝負すればいいんだろ？」

「……それが一番」

ジークハルトは皆の考えをまとめ、シズクはそれに同意した。

「じゃあ、クエスト開始だな！」

「……………はい!!」「……………」

シズク達は入念に打ち合わせし、カイト戦の準備をそれぞれ始めた。

「……………もう終わりか？」

カイトの周りには沢山のハンター達が倒れ伏していた。

ある者は武器を壊され。

ある者は血を流して。

ある者は防具ごとやられ気絶している。

だが、怪我はしていても誰一人として死んでいるものはいなかった。

「まだだ！ まだハンターは沢山いる！ ギルドナイト！」

カイトに答えるようにギルドマスターが声を上げた。

そこに20人ぐらいのギルドナイトが現れた。

「ギルドナイトか……いいぜ、来いよ！」

ギルドナイトはそれぞれの武器を構えて、カイトへと向かって走った。

遠くからは援軍のようにハンター達が来ているのが見えた。

「3分で片付けてやるよ！」

カイトは拳を握り駆け出した。

バンバンバン……！！

カイトへ威嚇するように弾を撃つ。

タッ！

一歩踏み込むとカイトは消えた。

「「「なっ!?!」」」

「「ここだ!」」

ギルドナイトの一人の後ろに回りこんでいた。

振り返る前に回し蹴りで吹き飛ばすと、またその場から消えた。

ドガツ! バキィ! ドスツ! ドゴォ!

カイトは神速の速さで動き続けて、4人を一気に倒した。

「あと15人」

「させるかぁーっ!?!」

ギルドナイトの一人が突きを放つ。

カイトは剣を掴み、ギルドナイトを自分の方に引き寄せた。

「くっ!?!」

そのまま拳を腹へ叩き込み気絶させる。

「さて、次行こうか……」

「皆さん下がってください!?!」

唐突にアイの声が辺りに響いた。

ギルドナイト達はそれに従いカイトから離れていく。

バキュン！！ バキュン！！

「!？」

激しい音と共に巨大な矢が飛んできた。

カイトは片手を上げてそれを正面から受け止めた。

ドゴオンッ！！

「これは、バリスタか……」

バリスタの弾は衝突と共に粉々に砕け散った。

バキュン！！ バキュン！！

アイとディアがバリスタをカイトへ撃ち続ける。

それをかわし続ける。

「今です!!！」

ユミナの号令が響いた。

カッ！ ドオオオオン!!!

複数の爆音が辺りから聞こえた。

「……………こいつはまた、」

ドゴオオオオー……ンッ……！！！！！！

大砲がカイトの周辺にばら撒かれて、爆炎がカイトを包み込む。

「撃つて……！」

バンバンバンバンバン……！！！！

バキュン……！！ バキュン……！！ バキュン……！！

一斉放火がカイトを包み込む爆炎へ殺到した。

ドガガガガガンッ……！！

煙が辺りを包み込み、カイトは見えなくなってしまった。

「どうだ……………？」

ジークハルトや他のハンター達は期待を込めて、煙が晴れるのを待った。

「……………！ ……ダメ」

シズクが呟くと同時に、煙が晴れた。

「 ……みんな本気だな」

爆炎の中から平然と傷一つ無く、カイトが出てきた。

「うおおおおお!!!」

ジークハルトが大剣を腰の辺りに流して、飛び込んできた。

「はあああ!!!」

横一線に切り裂く。

「破ッ!」

カイトは迎え撃つように拳を振るつ。

ガキンッ!!!

大剣と拳がぶつかり合い、大剣が弾かれる。

「クッ!? まだまだあー!!!」

「覇ッ!!!」

ジークハルトは連撃を放つ。

カイトもそれに合わせて、拳を振るつ。

ガキンッ! ガキンッ!!! ガキンッ!!!

ジークハルトは弾かれて圧されていく。

「クソッ!!」

「斬ッ!!」

ジークハルトの一撃に神速の拳を叩き込んだ。

大剣が切り裂かれたように碎け散った。

「あれは、エリカの……!?!」

ユミナ達はカイトの使う言霊に驚いた。

「……はい、言霊はカイトさんに教えてもらったものです」

ジークハルトは武器を失い、後方へと跳ぶ様に下がった。

そこにレイが飛び込んできた。

「剣聖、選手交代です」

「すまない!!」

レイが入れ替わるようにカイトに斬りかかった。

「ハッ!!」

カカカカカッ!!

神速の突きを繰り返す。

「疾ッ!!」

同じく神速の突きで打ち合う。

「剛ッ!!」

拳を前へ突き出し、衝撃波でレイを吹き飛ばす。

吹き飛ばされたレイは空中で体勢を立て直し着地した。

レイは左手に持っていた剣を逆手に持ち直した。

「行きます」

カイトへ踏み込むと同時に、右手の剣を突き出し、左手の剣で凧いだ。

カイトはレイの攻撃を無効化しようと受身の構えを取る。

「絶ッ!!」

「掛かりました! 逆神凧・双」

八方から二つの刀身の斬撃が襲いかかる。

「爆ッ!!」

カイトが足元を殴ると爆発し、斬撃を相殺した。

「流石です……」

あまりの規格外ぶりにレイは感嘆した。

「一瞬の隙は、一瞬で死だ」

いつの間にかカイトはレイの上空にいた。

「撃ッ!!」

足を思いっきり振り下ろした。

レイは咄嗟に双剣を交差してガードしようとした。

「防げなど、しない!」

ガッ! ドガンッ!!!

レイは耐え切れずに吹き飛ばされた。

双剣は全て砕け散ってしまった。

「うっ……く……」

全身打撲で頭から血を流していた。

カイトはレイに背を向けた。

「次は私のようなね」

ディアがカイトと対峙した。

「……ディアか」

「そつだよ！ 私じゃ不満？」

「……」

カイトは間合いを詰める。

「破ッ！」

「当たらないよっ！」

バックステップで下がりながら引き金を引いた。

バンバンバン！

「効かねえよ」

カイトは弾を弾いてさらに間合いを詰める。

「えいさっ！」

ポウガンで殴りつけてきた。

それを正面から止めようとしたら、「ほいさっ！」と引き金を引いた。

「破ッ！！」

放たれた弾丸を砕く。

「それぞれそれえ〜！」

高速でリロードし続け、弾を連射し続ける。

弾はカイトへ向かって飛び、外れた弾は、弾や周りにぶつかり軌道を変えてカイトを襲う。

それをカイトはひたすらにかわし続ける。

「にははは〜、流石はカイトだね。

私のトリガーハツピーが掠りもしないとは……」

ユミナ達がレイを安全なところへ運んだのを確認すると、ディアは一步下がって構えた。

「わたし1人じゃあ、ちよつとキツイよ」

そこにユミナ達が駆けつけた。

それぞれ武器を構える。

ディアが正面に立ち、ユミナ、アイ、キイ、エリカと囲まれている。

「……………」

「行きますー！」

ユミナが声を上げると同時に一斉に攻撃を始めた。

ユミナは太刀で突きを放つ。

それを片手で全て受け止めると、もう一つの手で反撃を繰り出す。

その反撃が当たる前に周りがフォローを出す。

アイとディアは弾を撃ち、エリカとキイは左右から斬りかかった。

カイトは攻撃を止め、バク宙で避けた。

それを読んでいたのか、いつの間にか現れたジークハルトが大剣を振るう。

片手で受け止めて着地する。

それと同時に裏拳を放とうとした。

「やせませんよ」

傷だらけのレイが、双剣で逆袈裟に斬る。

放とうとした裏拳を止め、受け止める。

両手が塞がったカイトにシズクが手を突きつける。

「……………光縛！」

光の輪がカイトを縛る。

「…………絶、無、滅、陣」

指を抜い、印を切っていく。

「…………封印術・式縛光絶陣」

さまざまな光がカイトを包み込み縛っていく。

カイトは光の球体に呑み込まれた。

「…………みんな、離れてて」

シズクの言葉に皆が離れた場所で立つ。

「…………『其の希望は光・其の絶望は闇・併せ持つ全てを切り裂く黒白の剣』」

シズクは静かに力強く詠唱を続ける。

「…………『エリュシオン魔聖剣』」

シズクの手には光り輝く黒白の剣が握られていた。

両手でその剣を持ちあげ、カイトに向けて構える。

「…………一撃必殺、エンシエントノヴァー！！！！」

シズクの一振りですべての黒白の奔流がカイトを呑み込んだ。

ザシユザシユザシユザシユザシユ！！！！

奔流により切り裂かれていく音が聞こえる。

光が消え去るとそこには、血塗れで倒れているカイトがいた。

「……………」

「……………」

「……………」

ザッ！

ポロポロのカイトが立ち上がった。

「そんなっ！？」

「あれでまだ立ち上がれるの！？」

ユミナとアイは驚愕した。

回りの皆も大なり小なり驚いている。

「……………流石、お兄様」

シズクは震えていた。

「 …… はは、やる……………な、シズク。ここ……………ま……………で、
追い込……………まれたのは……………本当に、久しぶりだな」

カイトはうつすらと笑っていた。

それに比例してシズクは青褪めて震えていく。

カイトの殺気と闘気がどんどん増していき、
少し動いたたびに紅い軌跡となって見える。

それと同時にカイトの漆黒の相貌が、紅く、紅蓮に染まる。

「……ここからは……ほんの少し、手加減……無しだ」

一歩一歩と歩みを進め、止まった。

顔を上げ、叫んだ。

「絶対に死ぬなよ!!!」

第五十五話「史上最凶の兄妹喧嘩 - 中編 -」（後書き）

…後編に続きます！

基本、シズクもカイトに鍛えられてメチャクチャ強いですが！
武器も一応共有できますし（使いこなせるかどうかは別ですが…）

第五十六話「史上最凶の兄妹喧嘩 - 後編 -」（前書き）

シズクVSカイト

ハンター達全員を巻き込んだ兄妹喧嘩、堂々の決着！！

果たして勝つのはどちらか…それでは本編スタートですよ！！^^

第五十六話「史上最凶の兄妹喧嘩 - 後編 -」

第五十六話「史上最凶の兄妹喧嘩 - 後編 -」

漆黒を纏う少年はその、相貌を紅蓮に染めていた。

体は紅い気に包まれていて、動くたびに紅い軌跡となって見える。

少年　カイトは、シズクを見据える。

シズクは怯えるように肩を震わす。

「…………お兄様……」

怯えながら兄を呼ぶ。

しかし、カイトは薄く笑ったままで特に何の反応も示さない。

先ほどとは打って変わったかのように、ガラリと変わった空気に皆戸惑っていた。

圧迫感と緊張感、痛いほどの殺気が場の空気を凍らせている。

「シズク、これは…………？」

ユミナが困惑したようにシズクに問いかけた。

「……お兄様が、少し……本気を出す」

「それって!？」

「……とても危険。逃げないと、死ぬ……かも」

そこでずっと黙っていたカイトが口を開いた。

「逃がさねえよ!」

指をパチンと鳴らした。

すると、カイトを中心に半径約1kmの地点で、五箇所火柱が上がった。

そして、紅いドーム上の結界に閉じ込められてしまった。

「さあ、どうするシズク？」

「……みんな、手を出さないで」

シズクは覚悟したようにユミナ達に告げた。

「な!？ そんな! 私達も戦うよっ!」

ユミナは在り得ないといった感じに否定した。

「……だめ。今のお兄様は強すぎる」

「でもっ！…！」

「……ユミナさん達に危険なことさせる訳には行かない」

ハッキリとシズクは伝えた。

しかし、ユミナはハッキリと伝えたシズクに対して、
それすらも否定した。

「『私と一緒に戦って？』そう言ったのはシズクだよっ！…！！
私達はシズクだけに全てを背負わせない！皆で一緒に戦えるよっ
！…！」

「……」

シズクは呆気に取られていた。

周りの皆もユミナに続くようにシズクに言った。

「シズクちゃん、私も戦えるよ〜！」

アイ。

「僕も精一杯頑張ります」

キイ。

「少しは頼ってください」

エリカ。

「仕方ない。手伝ってやるよ！」

ジークハルト。

「それでも、お役に立てますよ？」

レイ。

「にははは、お姉さんに任せなさいっ」

ディア。

皆がシズクに戦う意思を見せる。

「ほらね？ みんな、シズクの為に戦ってるんだから。

一緒に頑張ろうよ！」

「…………… ありがとう！」

シズクは涙を眼に溜めながらも、精一杯の笑顔で皆に感謝した。

「…………… 本当に、ありがとう」

零れてしまった涙をぬぐい、キッとカイトを見る。

シズクの表情に迷いは無い。

「…………お兄様、“みんな”でお兄様を倒します！」

エリユシオン
魔聖剣を両手で握り、カイトに突きつける。

柄を握り締めたまま呟いた。

「 第一開放ッ！！ 」

眩いほどの光があたりを包み込んだ。

シズクを中心に黄金の光が渦巻く。

光はシズクと魔聖剣エリユシオンに纏わり付いていく。

「 第一開放……………か 」

カイトは驚いたように呟いた。

「 こっちもヤルか 」

両手を空中に突き出して詠唱を始めた。

『 蒼天…………蒼き剣、喰らい穿つ、双振りの剣“蒼天剣・双空” 』

カイトの手には双振りの、透き通るような蒼い剣が握られていた。

具合を確かめるように軽く振る。

ブンッブンッ！！

そして、構えた。

「……行きます」

「ああ、行くぜ」

シズクは一瞬でカイトの懐に踏み込んで、斬り上げた。

それを右手の剣で弾き、左手の剣を振り下ろした。

紙一重でかわして真一文字に薙ぐ。

一歩後ろに下がってそれをかわす。

シズクはさらに踏み込んで、

袈裟斬り。

逆袈裟斬り。

刺突。

一瞬で三撃もの斬撃を繰り出した。

カイトはそれを受け流していく。

双剣を交差し、踏み込んで斬りかかった。

ガキンッ!!

ザシュツ！！

カイトの背中を切り裂いた。

鮮血が舞う。

しかし、カイトは全く気にしてない風に、身を翻して反撃した。

カイトの刃は届くことは無かった。

ザシュツ！！

「油断しすぎだよ、カイト！」

「隙を作るなんて珍しいな！」

「さっきの蹴りの仕返しです！」

ユミナとジークハルトにレイの三人が、カイトに剣を突き刺していた。

「ッ、カハツ！！」

カイトは血を吐き出した。

漆黒の服は、傷口から溢れ出す血で染まっっていく。

右手の剣で三人に向けて薙ぎ払った。

慌てて剣をカイトから抜き、それを避けた。

バンバンバンバン！！！！

アイとディアが追撃させないように撃つ。

それを正確に斬り捨てていく。

「にやはは、残念賞〜！」

切り捨てた瞬間。

ズガガガガガンツ！！！！

弾は何度も爆発した。

「実は拡散弾なのです〜」

爆発を全身に浴びてカイトは、よろめいてしまった。

普段なら特に問題は無いが、傷を受けた今、多少であるがダメージになってしまう。

「……………、……………『天剣……………双空』！」

蒼き斬撃を飛ばす。

「させない！ エンシエントノヴァ！！！！」

シズクが黒白の奔流を放ち、斬撃を相殺した。

「隙在りです」

「がら空きだよ」

大技でできた隙を突いて、エリカとキイが斬りかかった。

ザシュツッ！！　ズシャー！！

カイトはエリカに左腕を肘の部分から切断されて、キイには脇腹を切り裂かれた。

左腕は宙を舞い、剣と一緒に落下して行った。

「……今のお兄様は、全然怖くない」

魔聖剣エリクションを突きつけながら、シズクはそう言った。

「……お兄様を倒します！！　　一撃必殺」

シズクは思いつきり振りかぶる。

「……」

小さくカイトは呟いた。

「エンシエントノヴァー！！！」

黒白の奔流がカイトを呑み込もうとしたが、見えない何かに弾かれて消滅した。

「なっ!？」

シズクは驚愕した。

カイトは右腕一本でエンシエントノヴァを消滅させたのである。

カイトの紅蓮の相貌が輝きを強めた。

「 帰り来たれ、蒼天剣・双空」

落ちていた剣がカイトの目の前に現れた。

『蒼天……剣交じり喰らい穿つ……全てを蒼空の彼方へ帰せ“天剣・蒼空”』

カイトの持っていた剣と、目の前の剣が蒼い光を発し、重なった。

重なり合った剣は一つの剣へと交じり合い、蒼い輝きを発し続ける。

「……一撃だ。耐えてみる……蒼空の一撃を!!」

カイトは剣を突き出すように構える。

剣は輝きを増していき、力が収束していくのが目に見えてわかった。

「……『天剣……蒼空』!!」

カイトは剣を左に下げて、斜めに一閃。

蒼き光の奔流がユミナ達を呑み込んだ。

ズガガガガガガガガガッ！！！！！！

かなりの衝撃波があたりを襲い、足場や建物が破壊されていく。

奔流が消えた後に立っていられたのは、

ユミナ、シズク、エリカ、ジークハルトの四人だけだった。

「……！？ な、何なの、ア……レは！？」

崩れ落ちそうになる膝に、何とか耐えながらユミナは聞いた。

「ハア、ハア、……天剣は、このエリユシオ魔聖剣に、匹敵する……力を、秘めています」

息を切らしながら、剣を杖のように突き刺して体を支えているシズク。

「お前等、兄妹は反則過ぎるだろ……」

ボロボロになった体で悪態をつくジークハルト。

「負ける訳には、行きません。“アイツ”を倒すまでは、誰にも……」

エリカは、独り言のように呟き続けている。

四人はボロボロになりながらも、戦う意思を持ち続けている。

「さて、ここは俺から行った方がいいな？」

ジークハルトが大剣を担ぎながらそう言った。

「……うん」

「まあ、お前じゃないと勝てないからな。少し休んどけ」

「……わかってる」

シズクは座り込んで体力の回復に努める。

ジークハルトはそれだけ言うと、カイトの方に近寄っていき大剣を構えた。

「待たせたな！」

「いいさ、別にな」

「それじゃあ、いくぜっ!!」

ジークハルトは大剣をカイトの頭に向けて振り下ろした。

カイトは軽くそれを弾いて受け流すと、刺突を繰り出した。

ガキンッ!

無理やり引き戻した大剣でそれを防いだが、威力を殺しきれずに後ろへ下がった。

カイトは続けて連撃を放つ。

キン！ カン！ ガツ！ ガキンツ！

ジークハルトは全ての攻撃を大剣で防いでいく。

キン！ ガツ！ ガキンツ！ ガツ！

キンツ！ カキンツ！

カイトから高速で繰り出される斬撃を必死に防ぐ。

少しずつジークハルトは押されていき傷を負っていく。

カイトは思いつきり剣を振り上げる。

そこには大きな隙があった。

（誘いか。乗るべきか？ どうする！？）

ジークハルトは逡巡の末、その隙を突くことにした。

「はああああ！！！」

真一文字に一閃。

「蒼月！」

カイトも蒼く輝く刃を振り下ろす。

ガツキンツ！！

それぞれの剣が交差する。

バギンツ！！

ジークハルトの持っていた大剣が、根元から折れた。

ザシユツ！！ バタン！

そして、ジークハルトの右肩から鮮血が舞って、倒れこんだ。

カイトの刃から蒼き斬撃が放たれて、切り裂かれたのである。

「次」

カイトは淡々と呟き、次の相手を待つ。

「私が行きます」

エリカがカイトの前に立ちはだかった。

エリカは構えると同時に、相手の間合いに入り、斬りかかった。

「斬ツ！！」

振り下ろされた一撃を、カイトは剣を振り上げ弾く。

エリカは弾かれた一撃を力任せに押し戻した。

ガキンツ！！

カイトの剣がその一撃を受け止めた。

キンッ！ キン！ キン！ カキンッ！

二人は互いに剣を打ち合い続ける。

「斬り裂け！！！」

エリカは渾身の一撃をカイトに叩き込む。

ズシャッ！！

カイトはそれを避けることもせず、体に傷を負いながらも反撃した。

ドゴオッ！！

柄でエリカの腹を思いつきり殴り飛ばした。

吹き飛ばされたエリカは、そこで気を失ってしまった。

「次」

「私の番みたいだね」

ユミナは、下段に太刀を構えながらそう言った。

カイトは近づいてくる。

カイトがユミナの間合いに入った瞬間、太刀を凄く速さで突き上げ

た。

ズガガガガンツ！！

雷撃を迸る。

カイトはそれを剣で受け止めていた。

「まだまだ！！」

ユミナは全力で太刀を振るう。

ズガガガガンツ！！

ズガガガガンツ！！

カイトがその刃を受け止めるたびに雷撃が迸る。

ユミナの眼に紅い光が灯り、太刀は紅い気で包まれ軌跡となる。

ユミナは練気を使っていた。

動きがさらに速くなり、思い一撃がカイトを襲う。

「そこだあああああつ！！！！！！」

刺突一閃。

ユミナの渾身の最速最強の一撃を、刺突にこめてカイトに繰り出した。

ッ！！！！！！

雷鳴が轟き、刺突がレーザーのように繰り出される。

戦闘を見守っていたシズクにはそう見えた。

ユミナの刺突はカイトの横腹を貫通した。

「ッ！？ ガハアッ！」

カイトは血を吐き出し、膝をついた。

ユミナは太刀をカイトから抜き、構える。

「蒼月！」

カイトは剣を振り上げ一閃。

蒼き斬撃がユミナを襲う。

油断していたユミナは吹き飛ばされた。

「蒼天撃・雨」

蒼い衝撃波が雨のようにユミナに降り注いだ。

「キャアー！！」

ユミナの意識はそこで途切れた。

「……シズク」

「……お兄様」

血塗れのカイトとシズクは互いに向き合う。

「一撃だ。一撃で終わりにしよう」

「……はい！」

カイトは剣を腰の辺りに構えて、シズクを見据える。

シズクは魔聖剣^{エリュシオン}を上段で構え力を溜める。

カイトは蒼く輝き、シズクは黄金に光り輝いた。

『天剣 蒼空！！！！』

『エンシェントノヴァ！！！！』

蒼き奔流と黒白の奔流が激突する。

辺りは光に呑まれた。

最後に立っていたのは

カイトであった。

「俺の勝ちだな」

カイトは笑った。

「…………お兄様は強いです」

倒れているシズクは拗ねたように呟いた。

カイトは倒れているシズクの元まで行き、抱き上げた。

「…………お兄さ　お兄ちゃん!!」

抱きかかえられたシズクは、甘えたようにカイトに体を預けた。

「何、シズク？」

カイトは優しく微笑みながらシズクを抱きしめる。

「約束破って、ごめんなさい!」

「いいよ。俺も少しやりすぎたな、ごめん」

「うん、いいの!」

二人は互いに笑顔になった。

「さて、後片付けをしないとな」

カイトは辺りを見渡しながらそう言った。

シズクを下ろそうとすると、ギュッとシズクはカイトの服を掴んだ。

「お兄ちゃん」

「どうした？」

「もう少しだけ、このまま……」

そういつて、しがみ付くシズク。

それを優しく抱きしめるカイト。

「シズクがここまで甘えてくるのは久しぶりだな」

「だって、恥ずかしいもん」

「そうか？」

「そうなの！ それに、お兄ちゃんはいつまでも私と一緒にいるもん！」

「……だな。いつまでも一緒だ」

「うん！」

カイトは頭を撫でてからシズクを離した。

シズクも素直にカイトから離れる。

『全ての事象を否定する！ 浄化の焔……葬焔』

白い炎がカイトを包み込み、傷を消していく。

まるで初めから存在していなかったかのように傷は消えた。

切断された左腕も元に戻っていた。

ボロボロに壊れた街も修復されていき、倒れている人の怪我也全て消え去った。

武器防具の類も全て元通りとなった。

「これで、俺もシズクと同じだな」

「うん、そうだね！」

二人は笑いあう。

「皆が起きるまでの間、一緒に話をしながら待つてようか」

「うん！」

「じゃあ、あそこの屋根の上で話すとするか」

カイトはそういって、シズクを抱きかかえ屋根の上へと跳んだ。

シズクを離してカイトはその場に胡坐で座り込むと、膝の上にシズクが座った。

「私はここなの！」

「まあ、別にいいよ。じゃあ、話でもしようか」

「うん！ お兄ちゃん、大好き！！」

優しい日差しが二人を包み込み、まるで二人の兄妹を温かく見守っているようだった。

第五十六話「史上最凶の兄妹喧嘩 - 後編 -」（後書き）

一件落着！…って、何処まで人騒がせな兄妹なんでしょうか^^；
勝手に兄妹喧嘩みたいなのを始めて、勝手に終わらせるなんて…。
サブタイ通り、史上最“凶”の兄妹ですね><

シズクはカイトが大好きなので甘えまくります。

まあ、血のつながりが無い義理の兄妹なんですけどね！

…いや、そっちの方が危ないのかな><；

今回は、後日談みたいな感じですかね？

それが、終わったらついに！ドスランポスの統率個体という、

オリジナルモンスターの登場です！

みなさん！是非楽しみみてくださいください^^

今後、ユミナ達はどうなっていくのか！？

カイトとシズクはどうするのか！？

伝説級の二つ名持ちは？ユミナの中の謎の少女達は？

どうかこれからモンスターハンター　　～漆黒の業火～　　を、

よろしく願います！！

第五十七話「眠りゆく楽園」(前書き)

短いです。すみません。><

第五十七話「眠りゆく楽園」

第五十七話「眠りゆく楽園」

「ん、……くう……」は？」

ユミナは眼を覚ますと、道の真ん中で倒れていた。

「そっか、私達カイトと……」

今までのことを思い出していると、不意に仲間のこと気がなり辺りを見回した。

「あっ！ アイー！」

少し離れた所でうつ伏せに倒れていたアイの元へ駆け寄った。

「起きて！ ……大丈夫？」

「うん？ ユミナちゃん……どうしたの？」

アイは起き上がると、寝ぼけたように眼を擦った。

「……！？ ああああ！！ 私たち負けたの？」

「……多分、負けたと思う」

ユミナは眼を覚ましてから、肝心のシズクとカイトを見かけていない。

だから、アレからどうなったのかは誰も知らない。

「シズクちゃんは？」 他の皆は倒れてるけど……」

アイがユミナにそう聞いた所で、上の方から笑い声が聞こえてきた。

「この声、シズクかな？」

「上から聞こえるけど、屋根の上？」

周りの屋根の上を探していると信じられないものを見た。

胡坐をかいて座っているカイトの膝の上に、シズクが座っていた。

先ほどまで戦っていたとは全く思えないほど、
2人とも笑顔で仲良く話をしていた。

「……全く。人騒がせな兄妹だね」

「そうだね」

アイは苦笑しながらユミナに同意した。

ユミナも同じような表情をしている。

「2人はそつとして置こう。まずは他の皆を起こすとしましょうか！」

「うん！ そだね」

「私はエリカとキイにジークハルトさんを起こしてくるから、

アイはディアさんとレイさんをよろしくね？」

「了解」

ユミナ達は別れて、皆を介抱しに向かった。

「みんな起きたことだし、あの二人を呼ぼうか」

ユミナは皆を起こし終わると、問題の二人の方へ向かっていった。

カイトとシズクは未だに仲良く談笑していた。

それを見たユミナは、少しイラッときた。

（そもそも、二人が原因なのにいつの間にも仲直りしてるの！？
何か喧嘩した前より仲が良さそうだし……全く）

「カイトー！ シズクーー！！ いい加減降りてきてよ！」

そこでようやくユミナ達に気がついた、カイトとシズクであった。

「ん、起きてたのか？」

「……痛いところ無い？」

シズクを抱きかかえてカイトは飛び降りてきた。

「皆は無事だよ。戦う前より良い位だからね……怪我も何故か無い
し」

「そいつは良かったな」

「……うん、良かった」

「あのねえ……はあく！ まあいいや」

ユミナは呆れたように2人を見たが、諦めて溜息をついた。

「皆のとこに行くとするか」

「……うん」

二人はのんびりと歩き始める。

「少しは急ごうよ……」

ユミナは呆れながらも2人の背を押して急かす。

「はいはい、善処するよ」

「……ん、がんばる！」

暢気な2人に溜息が止まらないユミナであった。

ギルドへ向かうところには、ギルドマスターとレイ、ディア、アイとキイとエリカが座っていた。

「あれ？ ジークハルトの奴は何処に行った？」

「うん、何か色々と疲れたので寝たようだ」

カイトにマスターがそう答えた。

「カイトく改めてお久々だよっ！！」

「ああ、久しぶりだなディア！ 確か……樹海に居たんだけ？」

「そだよ。シズクが迎えに来たのさ」

「そうか」

「会いたかったよ」

「それは良かったな」

ディアの話を適当に流していくカイト。

「で？ 何で集まったんだ？」

「実は僕達の怪我が治ったので、明日に上位試験の続きをしようとなったんです」

キイが丁寧に答えていく。

「なるほど。それで？」

「カイトはどうするんだ？」

「俺か……？」

「今回も着いて行くのかと聞いているんだ」

マスターの問いに、逡巡考えて答えを出した。

「俺とシズクは、ここでお別れだ」

カイトがそう答えると、みんなは不思議そうに聞いた。

「なんで!？」

「まあ、俺達にもすることがあるって事さ」

「……そう。私達頑張るから！」

「ああ、頑張れ。立派なハンターになるんだろ？」

「うん！」

「さて、話の続きをしようか」

マスターのその一言で、場の空気が引き締まった。

「新種のモンスターの調査が上位試験の内容だ。

期限は前に行ったとおり1週間。場所は目撃情報の一番多い森丘だ」

「……はい……」

「レイはギルドナイトとして、同行するように」

「はい！」

「はいはい、私も一緒に行っても良い？」

ディアがマスターに問いかけた。

「別に良いが、邪魔はしては駄目だからな？ 手も出すなよ？」

「了解！ わかってるよ！」

「じゃあ、明日、門の前に竜車を用意しておく」

マスターのその一言でその場は解散となった。

ユミナ達はそれぞれの宿へ戻って行き、疲れを取るよつにぐっすりと眠った。

カイトとシズクだけが、宿へ行かずに残った。

次の日。

街の皆は昨日の騒動をまるっきり忘れたかのように、何事も無くすごしていた。

実際何も憶えてはいないらしい。

そんな中、ユミナ達は朝早くから門の前にいた。

「じゃあ、行ってきます!」

カイトはユミナ達を見送っていた。

「頑張れ……決して死ぬなよ」

「……みんな頑張って」

竜車に乗り込むユミナ達にそう言った。

「うん! カイト達も気をつけてね」

「またね」

「お世話になりました」

「それでは、失礼します」

続いて、レイとディアの二人も竜車へと乗り込んだ。

「行ってまいります」

「またね〜カイト、シズク！ばいばい〜！」

竜車は進みだし、暫くすると遠くへと行ってしまった。

2人だけぽつんと残ったカイトとシズクは、これからのことについて話した。

「…………お兄様、どうする？」

「…………シズク。こっちだ」

カイトは近くの森へ指差し、シズクを連れて行った。

森の奥。

小さな泉が在るところへ出ると、中央の泉の中心に立つ大樹へ登った。

カイトは小さく呟くと、大樹を覆うように薄い結界が張られた。

「…………お兄様？」

シズクはカイトのこの行動に疑問を抱いた。

「……シズク。眠い……」

「え？」

「少し、はしゃぎ過ぎたな……。俺は……。しばらく……。眠る」

「……はい！」

全てを察したシズクは、その場に座り込み正座した。

「お兄ちゃん、どうぞです！」

シズクは頬を赤く染めながら、膝枕を促した。

カイトは限界なのか、横になってシズクに体を預けた。

「シズク……おやすみ……」

「お疲れ様、お兄ちゃん。どうか少しでも永く休んでね」

「……すう」

カイトは無邪気な顔をしながらすぐに寝息を立て始めた。

シズクは膝枕しながらカイトの顔を眺める。

カイトの顔を見ながら微笑むシズク。

柔らかな木漏れ日が二人を照らし、夢の楽園を築き上げていた。

第五十七話「眠りゆく楽園」(後書き)

最近、こんな終わりばかりな気がします^^；

さて、次回はオリジナルモンスターの登場です！
ここから、ユミナ達の波乱な日常がまた始まっていく。

第五十八話「未知との遭遇」(前書き)

遅れましたね><

一応、不定期にしていますけど…、

なるべく一週間を目安に頑張っているんですけどね>>> ;

第五十八話「未知との遭遇」

第五十八話「未知との遭遇」

ガタガタガタ。

竜車が草原を走っていく。

竜車の中には、6人のハンターがいた。

レウス装備を纏っているユミナ、武器である鬼斬刃は壁に立てかけている。

その隣には、ガルルガ装備のアイ。

武器のスパルタカスファイアを整備している。

アイの向かい側に座る、同じくレウス装備のキイ。

武器はコロナで、腰に提げている。

キイの隣にはメイド装備のエリカ。

武器のティータルニアを鬼斬刃と一緒に壁に立てかけている。

この四人とは少しはなれたところで座っているレイとディア。

レイはギルドナイトの制服を身に纏っている。

ディアは私服のようなラフな格好だった。

「今までの目撃情報によると、新種は森丘にいる可能性が高いです」

レイは全員に情報の詳細を教える。

「カイト様の情報によると、新種は空を飛ぶようです。

他にも、大量のランポスとドスランポスを、

同時に相手をしなければならぬようです。

さらに、交戦回数が極端に少ないので強さは未知数。

どんな姿をしているのかもハッキリとは分かっていません」

レイの斬り捨てるような、バツサリとした発言にユミナ達は喉を鳴らした。

「ギルド上層部は、この新種の名前を “ランディノス” としました」

「……“ランディノス”」

ユミナ達はその名を呟いた。

「さっき言った通り、交戦回数が少ないのでなるべくデータを回収してください。」

できるのならば“捕獲”が一番望ましいです」

「……」

ユミナ達は沈黙で返した。

何もかもが未知の新種のモンスター。

そんな敵を相手にちゃんと戦えるのだろうか？

捕獲なんて余裕はあるのだろうか？

そんな思考がユミナ達の頭を過ぎった。

「……はい。がんばります」

ユミナはそれだけ返すと、鬼斬刃やアイテムの点検を始めた。

点検しながら、これからの作戦や対策などを話し合った。

それから、暫くすると、

ガタガタガタ　ギイイ！

竜車が止まった。

「着いたようです。拠点へ行きましょう」

レイを先頭に次々と降りていき、拠点へと向かっていった。

数分もすると、拠点へ着いた。

「じゃあ、私とアイはテントを組み立てておくから、エリカは薪を拾ってきて。キイは飲み水の確保をお願い」

「……はい!!」「……」

ユミナの号令に皆、テキパキと自分の仕事を始めた。

10分ぐらいで準備は完了した。

「では、最終確認です」

「はい」

レイの言葉に代表としてユミナが答えた。

「依頼内容は、新種“ランディノス”の調査。討伐・捕獲は問いません。期限は一週間とします」

「はい」

「では健闘を祈ります」

「にははは〜みんながんばってね〜!!」

レイとディアの二人は何処かにいった。

「皆で手分けをして探すから、見つけたらサインをお願いね。一人だから無理だけはしないでね……」

ユミナの言葉に全員は頷いた。

「じゃあ、みんな！ がんばろう」

「うん！」 「ええ！」 「はい！」

それぞれが武器を持って、拠点を後にしていく。

こうして、ユミナ達の最終上位試験が始まった。

エリカ

私は北の方を散策することになりました。

あたりは木々に囲まれて、とても視界が悪いです。

こんなところを大群で襲われたら最悪ですね……。

ん、……あそこにいるのは ランポスが4頭ですね。

念のために倒しておきますか、敵を誘き寄せせる事もできるかもしれ
ませんし。

ティタルニアを構えて私は走り出した。

ギヤア？

敵に気づかれたようです。

ですが、もう遅いです！

「はああああー！！」

縦に振り下ろす。

グシャツ！！

ギャツ！？

一番近くにいた1頭が絶命しました。

「ていつ！！」

続けて横になぎ払う。

ズバツ！！

このなぎ払いで2頭絶命しました。

「ラストツ！！」

もう一度縦に振り下ろした。

ズシャツ！！

私の一撃はキツチリとランポスの息の根を止めた。

ふう………殲滅成功です。

ガササツ!!

私の後ろの茂みからいきなり音が発せられた。

!!!?

咄嗟に後ろを振り返ってみると、

ギアアギアア!!

ランポスの追加のようです。

「ランディノスが出て来るまで、あなた方を殺し続けます」

私はそういつて、さらに出て来たランポスの群に飛び込んだ。

ズバツ! バシュツ! ザス!

ドシュツ! グシャ! ドガツ!

バキィ! ドス! ……

ズシャツ! ……

ドサ! ……

………

……

…

数十分掛けて私は、ランポスの群を殲滅した。

「まだ、出て来ませんか」

切れ味を消耗したので、砥石を使ってティタルニアの刃を研ぐ。

シャキン！ シャキン！

「よし。さて、どうしましょうか……」

研ぎ終わったティタルニアを背負い直しながら、これからのことを考える。

不意に、

パアアン！！！！

遠くで大きな音が上がった。

その方向を見てみると光がはじけていた。

「あれはサイン！！ 見つかったのですね」

私は急いでその方向へと進んでいった。

キイ

僕は西の方を探すことになりました。

一面平らな草原で、近くに大きな川が流れている。

辺りを見回してみても何もいないなあ……。

このあたりは隠れるところも無いしね。

川の辺りへ行ってみようか。

水辺にはアプトノスが数頭、水を飲んだりしていた。

うーん、別に今は生肉は荷物になるしね……。

ランポスの影も見えないのに、何が見つかるんだろ？

見つかる分けないよねーですよねー。

ランディノスは空を飛ぶんだっけ？

空は雲ひとつ無く晴れ渡っていた。

あれ？ 僕はハズレでも引いた？

「……まあ、もうちょっと先へ進んでみようかな」

僕は再び川沿いを進み始めたが、相変わらず何もなかった。

……あれ？ どうしたんだろ？ 目から雨が……。

それから数十分探し続けたが何一つ見つからなかった。

そして、くたびれて空を眺めていると。

パアアン！！！！

大きな音と共に光がはじけているのが見えた。

「！？ ……サイン！ 急がないと」

僕は急いで起き上がり、サインの方へ走って向かった。

ユミナ

私は東の方を探し続けている。

岩場が目立ち、とても足場が悪い。

ギアアギアア！

しかも、急にランポスが群を成して現れた。

シャリン！

私は鬼斬刃を抜き放ち構える。

ギヤア！

先頭の一頭が飛び掛ってきた。

「ハッ！」

横薙ぎに一閃。

スパンツ！！

ランポスを真つ二つに切り裂いた。

仲間がやられたランポス達だが、怯まずに襲い掛かってきた。

「セイツ！」

一番近いランポスへ刺突。

ザシュツ！！

「たああ！」

刺突から流れるように斬り込む。

ズバツ！

「イヤアアアア！！！！」

ズザザアアアアア！！！！！

雷撃がランポス達を襲い掛かった。

感電して消し炭と化したランポス達。

チャキン！

鞘へ鬼斬刃を仕舞い、警戒を解かずに戻りを見回した。

「ふう、もう大丈夫ね」

私は再び足場の悪い岩場を進み始めた。

数十分進むと、何度かランポスが出てきたが、
全てを倒して進んだ。

ん、ランディノスは見当たらないな……。

この辺りにはいないのかな？

私はあたりを必死に探していると不意に、

パアア！

大きな音と光がはじけているのが見えた。

「！ サイン……。これは南の方、アイね!？」

私はとても急いで南へと向かっていった。

アイ

私は南の方を探してるんだよ。

なんというか、森丘って感じの場所だよ！

え？ そんなんじゃ分からない？

でも、森丘は森丘なんだよ！

まあ、とにかくさっきから探しているんだけど、

見当たらないねランディノスが。

奥のほうで怪しい気がするよ、行って見ようかな？

私はどんどん奥へと進んでいく。

神殿の残骸みたいな場所に出た。

ふえー！？ 森丘にこんな場所があったんだ、知らなかった。

私達は地図から外れた場所を中心に探しているんだけどね。

ん？ ……殺気……。

「そこおー!!」

私は高速でボウガンを構えて、殺気がした場所を撃った。

キンツッ!!

「弾かれた……?」

明らかに甲高い音が聞こえてきた。

ザン!

「何……?」

ザン! ザン! ザン!

音はどんどん近づいてくる。

「足音、かな?」

大きな黒い影が見えた気がした。

影は光を浴びてその全貌を現した。

グルガアアアアアッ!!!!!!

ドスランポスよりも数倍大きな体。

その鱗と皮は、青く鈍く光っている。

強大で艶やかな長い尻尾。

背中には大きな翼が生えている。

しなやかながらも刺々しい全身。

大きく鋭い手と足の爪。

鋭い嘴と流れるような白い鶏冠が三つ、角のように生えている。

「これが、“ランディノス”!!」

グルガアアアアアッ!!!!!!

ランディノスは再度咆哮して、まるでドスランポスが仲間を呼ぶかのように咆えた。

「!?!」

私は慌ててサインを発した。

サインは空高く上がっていき、光がはじけた。

「さて、皆が来るまで何とかしないとね」

銃口を集まってくる敵に向けながら、私は作戦を練っていった。

第五十八話「未知との遭遇」(後書き)

モンハン発売しましたね!!

私は予約して朝早く並んで買いました^^

やっぱり、楽しいですよ〜><

今回は新たな試み、でも難しかったです。

うまく書けているでしょうか?…自信がまったく無いです。

基本駄文なので…すみません(> | < 。)

オリジナルモンスター

ランディノスの登場です!

私の伝えたい描写は果たして伝わってるのでしょうか?

文才が無いので……すみません、言い訳ですよ。

ランディノスとユミナ達の激戦が繰り広げられていく予定です!

次回もお楽しみにっ!

第五十九話「疾風怒濤」(前書き)

お久しぶりです。

忙しすぎて投稿が遅れましたね ><

それに、オリジナルモンスターは、

自分で全部考えなきゃいけないんで難しかったです。

今回のあとがきに、キャラの外見紹介が乗ってます。

今度ちゃんとキャラ紹介をしたいと思います！

第五十九話「疾風怒濤」

第五十九話「疾風怒濤」

グガアグガアア！

ランディノスが、響き渡るような声で咆哮した。

すると、ランポスが無数に集まってくる。

グルガアアアアア！！！

今度は、強く轟くように咆哮した。

ドスランポスが二頭、茂みから出てくる。

「もうこんなに呼んだの〜！？」

アイは、ランディノスにペイントボールを投げつける。

ベチャ！

ペイントの実に独特な臭気があたりに漂う。

グルガアアアアアア！！！

ランディノスの号令と同時に、ランポスたちが凄い速さで突っ込んできた。

「ちよ、速い」

ランポスにぶつからない様に攻撃をかわしていく。

アイはすでにランポス達の群に囲まれていた。

（みんな違うところにいるから、少なくとも20分は私が時間を稼がなきゃ）

次々と来る攻撃をかわしながら、アイは時間を稼ぐ方法を探っていた。

通常弾から散弾へと、弾を入れ替える。

ギアアギアア！

突っ込んでくるランポス目掛けて引き金を引いた。

バン！

ズガガガガガガガン！！！！

前方位に広がった散弾は、ランポス達の体を引き裂いていく。

クルツと反転すると、またもや引き金を引いた。

バン！

ズガガガガガガン！！！！

ギヤアギヤア！！

ランポス達は怯むように下がっていった。

その間にリロードを済ませておく。

アイは、ランポスの群に突っ込んだ。

ズガガガガガガン！！！！

群に突っ込む寸前に散弾を放ち、ランポス達を引き裂き、吹き飛ばした。

ギヤア！

「！？」

背後の死角からランポスが飛び掛ってきた。

アイは体を捻り、回転してそれをかわすとランポスの後頭部をボウガンで殴った。

ドガッ！

ギヤッ！？

怯んだ瞬間にバックステップで距離をとり、引き金を引いた。

ズガガガガガガン!!!

「ふう〜今のは危ないね〜」

安堵しつつも引き金を引くことはやめない。

そこにドスランポス2頭が、乱入してきた。

(これは少しきついね〜)

ギヤアアギヤアア!!

アイは周りのランポスに注意を払いながら、ドスランポスを警戒する。

これが仇となった。

グルガアアアアア!!!

ランディノスが翼を広げて飛び上がったのだ。

「な!?!」

そのまま上昇していく。

「逃がさ」

ギヤアアギヤアア！！

ドスランポスがアイの前に立ちはだかった。

「邪魔です〜！」

引き金を引くが、怯むことなく接近してくる。

これ以上は危険だと感じ、一旦バックステップで距離をとった。

その時にはすでに、ランディノスは飛び去ってしまっていた。

「うう……、とんだ失態です〜」

ペイントの周期を追ってみると、西の方に移動したのがわかった。

しかし、ランポスたちに囲まれてその場から動くことができないアイ。

「貴方達が……貴方達がいけないんですから〜！！」

散弾を撃ちまくり、ランポスを蹴散らしていく。

散弾から通常弾へ弾を換えた。

ドスランポスへ照準を合わせて引き金を引いていく。

バンバンバンバン！！！！

飛び込んで来るランポス達は、サイドステップでかわしていく。

ギヤアアギヤアア!!

ドスランポス達は、アイの猛攻に怯んでいる。

「貴方達だけでも倒してやる〜!!」

弾丸の嵐がランポス達を襲った。

「なかなか遠いです……」

エリカは、サインの上がった方角へ走っていた。

タッタッタッタッ!!

足場が悪いのを気にも留めずに走り続ける。

「あれは……」

前の方に、凄い速さで疾走するレウス装備の少女がいた。

「ユミナ!」

エリカに呼び止められ、ユミナは速度を少し落として振り向いた。

「ん? あっ、エリカ!」

「アイが見つけたのですか？」

「うん、急いで向かわないと」

二人は走る。

そこにもう一人、レウス装備の少年が走ってきた。

「ユミナさん、エリカさん！」

「ほらキイ、急いでいくよ！」

ユミナはキイを急かし、走っていく。

「「「!?」」」

不意にペイントの周期が動き始めた。

3人は止まる。

「これは……西の方ね」

「どうしますか？」

「エリカとキイはランディノスを追いかけて！
私はアイと合流するから」

「了解！」

ユミナとエリカ達はそれぞれ分かれて、走り出した。

バンバンバン！！

ギヤアアアア！！！！

アイは未だ、ドスランポスと激戦を繰り広げていた。

1頭は討伐できたが、もう1頭がしぶとく生き残っていた。

ギヤアギヤア！！

ランポス達も大分数は減ったが、それでも十数頭は居る。

ギヤアア！！

ドスランポスが飛び掛ってくる。

アイは後ろへ下がろうと地面を蹴った。

「!？」

が、足元の木の根に引っ掛かりこけてしまった。

ドスランポスが近づいて噛み付こうとしてくる。

「！！」

アイは咄嗟に目を閉じた。

タツタツタツタツ！

そこに割り込むように足音と大きな声が聞こえた。

「たあああああ！！！！」

ズザアアアアアアン！！！！

激しい音が響いた。

アイは目を開いてみると、ユミナが抜刀して目の前に居た。

「ユ、ユミナちゃん！？」

「アイは大丈夫？ 怪我は無い？」

「う、うん大丈夫だよ」

アイは辺りを見回してみると、首を切断されたドスランポスの死体が見えた。

恐らく、ユミナが今、倒したものだろっ。

「立てる？」

ユミナは手を差し出しアイを引っ張り起こした。

「急ぐよ！ 掴まってね」

ユミナはアイと手をつないだまま、走り出した。

かなりの速度を出しており、アイは引っ張られながら付いて行くのがやっとである。

木々を掻い潜り、木の根や岩を跳び越し、全速力で進んでいく。

ユミナはペイントの臭気を追ひ、最短距離を探して走っていく。

ガサガサガサガサ！！

タッタッタッタッ！！

バチャバチャバチャ！！

タッタタン！ タッタタン！

しばらく走って、大きな茂みを突っ切って抜けた。

ガササ！！

グルガアアアアア！！

そこには、ランディノスと戦っているエリカとキイがいた。

「待たせたね皆！」

「すみません〜！」

ユミナとアイはそれぞれの武器を構えて、ランディノスと対峙する。

ユミナが間合いを詰めて、鞘から抜いて斜めに一閃。

そして、そのまま真一文字に一閃。

グギャアアアア!!?

怯んだところに、アイが弾を放った。

バンバンバン!!

見事に命中して、ランディノスは少し仰け反る。

その隙を逃さずにユミナは斬りかかった。

ガキンッ!!

ランディノスは尻尾で太刀を弾いた。

「な!?!」

弾かれて無防備になった胴に、尻尾を叩き込んだ。

ドゴォ!

「カハッ!?!」

吹き飛ばされて転がっていくユミナ。

エリカとキイが左右から斬りかかったが、後ろへ飛んで避けられ
しまった。

ランディノスは低空で舞うように飛んでいる。

グルガアアアアアア！

その咆哮で、ランポスが現れた。

ガアッ！！

ランディノスの合図で、ランポス達がかなりの速さで体当たりして
きた。

キイはかわした所で斬り、エリカとユミナは正面から叩き斬った。

アイは遠くから射撃をしている。

グガアアアアア！

ユミナへランディノスが飛び込んできた。

体を捻ってそれを避けると、太刀で一閃。

ガキンッ！

またもや尻尾に弾かれてしまった。

ランディノスは尻尾を自在に操り、ユミナを襲う。

ビュンビュンビュン！！！

高速で唸る尻尾がユミナに叩き付けられた。

ドガドゴバキドス！！！！

「！？」

為す術もなく叩き付けられ、吹き飛ばされた。

「ユミナ！」

一瞬でユミナがやられたことに、全員が驚いた。

グルガアアアアア！！

ランディノスは凄いい速さで、倒れているユミナに接近した。

「させません！」

間に割って入るようにエリカが飛び込んだ。

ガアッ！！

ランディノスは鋭い爪を叩き付ける様に振るった。

「くっ！？」

咄嗟に大剣で防ぐ。

ガキンツ！

「エリカさん！ 後ろ！？」

キイが注意したが、すでに遅く、背中に尻尾が叩き付けられる。

「ッ！！ 斬ッ！！！」

ダメージを負いながらも反撃を試みるエリカ。

胴体に吸い込まれるように、大剣が迫った。

ガキンツ！

しかし、無常にもそれは弾かれてしまった。

左の爪でエリカを切り裂こうと、腕を振り上げた。

「させるかあああ！！！」

キイが盾で代わりにその一撃を防いだ。

防がれて、さらに、追撃しようとしたところで、

アイの射撃によってそれは阻まれた。

グガア！？

ランディノスは驚き、数歩後退した。

そして、天高く咆哮した。

グルガアアアアアアアア！！！！

ランポスが集まってくる。

「ユミナ！ 大丈夫ですか！？」

「う……………あ……………くっ！！！」

ユミナはエリカの力を借りて、軋む体を無理やり起こす。

ギアアギアア！

ランポスがユミナ達に容赦なく襲い掛かった。

「……………」

ザシュツ！！

ユミナは太刀を握り、斜めに斬り上げてランポスを惨殺した。

「！？ ユミナ……………？」

ユミナはゆっくりと立ち上がり、流すように太刀を持つ。

「ユミナちゃ ……っ！？」

心配したアイがユミナの顔を覗き込んで絶句した。

ユミナの瞳には、空色の瞳に光は無かった。

在るのは黒く濁った闇だけだった。

「
」

ユミナはランディノスへ向かって走り出した。

グルガアアアアアアアア！！！！

ランディノスは迎え撃つように尻尾を振るう。

ブンッ！！

尻尾の一撃は虚空を風いだ。

ユミナが背後に回ってかわしたのである。

「
」

斜めに二撃振るい、そのまま刺突を繰り返す。

ガキンッ！ キンッ！！

尻尾と背中当たり弾かれた。

ランディノスは振り向くと同時に、首を伸ばし噛み付こうとしてきた。
た。

ユミナは素早く戻した太刀で嘴を切り裂く。

ガキンッ！！

互いに弾き、火花が散る。

ランディノスは尻尾を素早く突き出した。

ユミナは太刀を使い、器用に受け流していく。

ガキン！ キン！ キン！ ガキン！ キン！

ガキン！ キン！ ガキンッ！！！！

ランディノスの攻撃がスピードを増していく。

ザッ！

徐々にユミナは捌ききれずに、ダメージを負っていく。

ユミナの太刀……鬼斬刃の刀身は、無理な使い方ですでにボロボロになっている。

ランディノスは尻尾だけじゃなく、爪や牙を使って攻撃を増している。

疾風怒濤の攻撃は止まることを知らず、ユミナを襲い続ける。

バチバチバチバチバチ！！

鬼斬刃の刀身が電撃を放出し始めた。

「
」

一閃。

ズザアアアアアアンツ!!! バチバチバチ!!!

電撃を帯びた一撃がランディノスへ直撃した。

しかし、ランディノスは無傷でそこに立っていた。

グルガガアアア!!

ドオンツ!!!

強力な尻尾の一撃で、ユミナは吹き飛ばされた。

「ユミナちゃん!!」

バンバンバン!!!

アイはランディノスへ向かって撃つ。

しかし、その弾はランディノスの尻尾に弾かれてしまった。

ランディノスはユミナの方へと進み始めた。

「させないよ!!」

「させません!!」

エリカとキイが左右から斬りかかった。

2人の斬撃は虚空を斬った。

ランディノスの初速が途轍もなく速かったからである。

ランディノスはすでにユミナの元に立っていた。

「ユミナちゃん!!!」

アイは力の限り叫び、思いを乗せて引き金を引いた。

徹甲榴弾がランディノスの頭へ直撃した。

ドガン!

グガアアアア!!!??

油断していたのか、弾かれる事も無く直撃し、爆発した。

爆発に怯んだランディノスは振り向いて、ユミナから離れていった。

グルガアアアアアア!!!

風のような速度で、アイたちへと向かっていく。

エリカが目の前に立ち、大剣で薙ぎ払った。

ズシャ!!!

この一撃も弾かれる事無く、ランディノスの胸を切り裂いた。
鮮血が舞う。

キイが続くように剣を振るった。

ガキンッ！

しかし、血に染まっている胸を切ることはできず、弾かれてしまった。

「なんで……？」

キイは疑問を抱きながらも手を休めることは無かった。

エリカとアイも続き、攻撃を食らわせていく。

だが、全ての攻撃を弾かれてしまった。

グルガアアアアアアアア！！

ランディノスは咆哮をし、空へ飛び上がった。

そして、そのまま飛び去って行った。

3人はほっとした様に息をついた。

「攻撃が効かない……肉質が異様に硬すぎる？」

「しかし、私は一撃与えられました」

「私の徹甲榴弾も一度だけ喰らったよ〜?」

「なんか、仕掛けがありそうだね」

「そうですね」

「まずは、そんなことよりユミナちゃんだよ!」

3人はユミナの元へ向かい、応急処置を施し、アイルーにベースキヤンプへ運ばした。

「さて、私達は追ってから少しでも情報を得ましょう」

「はい!」

3人はペイントの臭気を追い、ランディノスを追いかけていった。

第五十九話「疾風怒濤」(後書き)

ここで、本当に今更なんだけど…キャラの外見紹介！いえーい
……すみません今更で。
こんどちゃんと、キャラ紹介します！
これは絶対宣言です！！

まずは、主人公？ユミナ・アリアスからです^^

髪は空色です(空色…？まあ水色みたいな…明るい感じのねえ…)
瞳も同じく空色

見た目は整っています(美少女)
髪型はポニーテールです！長さはロング！(防具着てるときは違う
時もあります)

スタイルは…普通？それなりに良いよ！胸は少し小さいですけど…。
(美乳？)

次は大親友、アイ・フローズです！

髪は亜麻色！(亜麻色って茶色ぽいのかな…？)
瞳も同じく色ですよ！

見た目は可愛い系のマスコットキャラ的な？
髪型は特に何もしてません。長さがショート〜セミロング位かな！
スタイルは良い！背は小さいけど胸は大きいよ(少しねっ)

さてさて、次は我等がエリカ・リヴィア様！

髪は金色だね（キラリ）

瞳もこれまた同じね。

見た目はキリツとした美人系？

髪型は特に何もしてなく、ロングですよ〜！

スタイルは… good！（まあ、皆さんの想像にお任せします^^）

次はこの人！キイ・レディルト君だね！

髪は紺色で…す！

瞳は亜麻色（少し暗めのですけどねっ）

見た目は少年…かな？

髪型は整ったショートですね！（意味が全く伝わらない気がします
が）

スタイル…じゃなくて、背は平均より少し低め。

次は皆さんお待ちの方！カイト・シイナ（椎名 海斗）

髪は勿論、漆黒ですね。

瞳も同じ色です。

見た目は無口な美少年と言った感じですね！

髪型は少し長くて、少しぼさぼさの髪ですね。

スタイル…じゃない！身長は平均より少し上だけでも、

線が細くてちよつと小さな感じ。

妹 of the 妹の、シズク・シイナ（椎名 雫）

髪は艶やかな黒だよっ！

瞳は右が蒼、左が朱鷺のオツドアイ！

見た目は無口な可愛いすぎる妹

髪型はツインテールだね、長いの。

スタイルは…ちよつと残念かな？（主に胸が）

なんと！あの方だ！剣聖、ジークハルト・ミラ・デイバイン！！

髪は銀色です。

瞳も同じ銀だよ

見た目は“イケメン”だねっ！

髪型はレウスレイヤー？…だっけ？そんな感じ。

身長は高いね、まさに“イケメン”だね！

次は…閃光、レイ・オルビス！

髪は蒼ですね…。

瞳も同じく蒼！

見た目はできる女！（the 美人！）

髪型はショートですね。

スタイルはそれなりに良し！

最後は、魔弾、ディア・ハーツ！！

髪は白と紅！（パスカルさんみたいな…あれ、わからない？）
瞳は紅ですね！

見た目は（パスカルさんみたいな感じ）美少女…。

髪型は（パスカルさんみたいな感じ）ショート。

スタイルは（パスカルさんみたいな感じ）それなり！

以上で、プチキャラクター紹介（外見編）を終了です！

第六十話「変幻自在」(前書き)

あけましておめでとございませう！

今年もよろしくお願ひします！

年明け最初の投稿です！

第六十話「変幻自在」

第六十話「変幻自在」

グルガアアアアアア！！！

「ようやく、追いつきました……」

エリカはランディノスへ向かって、ペイントボールを投げつけた。

べちゃ！！

ペイントのみの独特な臭気があたりに漂った。

「お前の秘密を暴いてやる！」

「今度は負けないから〜！」

キイとアイがそれぞれの武器を構える。

「行きます！ 斬ッ！！」

エリカはランディノスの頭へと大剣を振り下ろした。

ガアアツ！

バックステップで距離をとるランディノス。

先回りしていたキイが剣を振るった。

ザシユ！

浅く尻尾を切った。

「切れた！」

続けて剣を振るうが、弾かれてしまった。

「やっぱり何か秘密があるね……」

エリカとキイが斬りかかる。

ガキンツ！ キンツ！

弾かれてしまい、傷をつけることができない。

「斬ツ！」

「はあああ!!！」

ガキンツ！ キンツ！

2人は斬り続けるが、全て弾かれてしまう。

ランディノスの反撃。

両手の爪を交互に振るってくる。

ブンツブンツ！！

鋭い一撃が虚空を薙ぎ、その予想できる威力に鳥肌が立つ2人。

ガアッ！

尻尾を叩きつける。

ガンツ！

キイはなんとか盾でその一撃を防いだが、あまりの威力に少し後退した。

グガアアア！！

一進一退の強硬な攻防が続いた。

「……………」

気配を殺し、茂みに隠れていたアイがランディノスの頭に、照準を合わせて静かに引き金を引いた。

バンツ！

ランディノスの頭に直撃した。

グルガツ！！？

あまりの威力にランディノスは仰け反った。

「今です！」

「今だ！」

2人はチャンスを狙い、剣を振るったが、

ガキンツ！

弾かれてしまった。

「何で……」

グガガガガ……！

ランディノスは辺りを警戒して、唸りを上げている。

「……」

アイは通常弾から貫通弾に換えて、リロードした。

背中……翼の辺りに照準を合わせて、また静かに引き金を引いた。

ザザザザン！！

貫通弾は翼を少し傷つけた。

グギャア！？

ランディノスは驚き、辺りを見回す。

「……そっかあ。そういうことが……」

アイはポーチの中から閃光玉を取り出した。

「目を閉じて！」

2人は驚き、慌てて目を閉じた。

カツ！ ピカアーーーーー！！！！

グルガアアアアアア！！！！？

ランディノスは激しい閃光に目をやられて悶え苦しむ。

「みんな！ 私のわかったことを教えるよ！

ランディノスは多分、攻撃を認識した部位を硬化することができると思うんだ。

だから、攻撃が認識されない死角からの攻撃か、私の弾しか効かない！

危険を感じたら全身を硬化するから、気をつけてね」

「なるほど……確かに、それなら」

「わかったよ！」

2人はランディノスを挟むように、陣取った。

アイは先ほどとは違う茂みに隠れ、弾のリロードをする。

アイが選んだ弾は、麻痺弾である。

「斬ッ!!」

エリカはランディノスの視力が回復しないうちに斬りかかった。

ガキンッ!!

首を狙った一撃は、簡単に弾かれてしまった。

「……やはり、今は硬いようですね」

距離をとり、冷静に分析し呟いた。

グルガアアアア!!

ランディノスの視力が回復し咆哮した。

「来ます!!」

「はい!!」

キイは正面から飛び込み、エリカは後ろへ回り込むように移動した。

「たあああ! はっ! てや!!」

ランディノスの視界を塞ぐように、盾を突き出し殴る。

ドガッ！

グギャッ！！

ランディノスは衝撃で仰け反る。

そこに、刺突を繰り返して斬り上げた。

ザッ！　ズシヤア！！

キイの攻撃は弾かれることも無く、胸を浅く切り裂いた。

グガアア！！

お返しとばかりにランディノスは、キイに噛み付こうとした。

「斬ッ！！」

ザシユッ！！

背後のエリカからの一撃で阻まれてしまった。

ランディノスの注意が後ろへ向いたところで、キイが体を捻り鋭く
雑いだ。

ズシヤッ！！

グギャアア！！

ランディノスは痛みに咆哮を上げた。

「……………」

気配を殺して、寝そべるように茂みに隠れているアイ。

「……………」

静かに照準を合わせて引き金を引く。

バンッ！ バンッ！ バンッ！

三発の麻痺弾は、ランディノスの翼、頭、尻尾に吸い込まれるように着弾した。

バチチ！ バチチ！ バチチ！

ランディノスはいきなりの衝撃に首を傾げ、辺りを見回す。

その間に、キイとエリカがそれぞれ斬りかかる。

その一撃も弾かれる事無く、ランディノスを切り裂いていく。

バチチ！ バチチ！ バチチ！

アイの麻痺弾も次々と着弾していく。

アイは何回か撃つと、気配を殺したまま少しずつ移動して、

射撃ポイントを少しずつ変えていく。

グルガアアアア！

「斬ッ！！」

「でやああああ！！」

「……………」

同じ戦法を長く続けていると不意に、

バチィ！！

ギヤアアアアア！？

麻痺弾が効果を現し、ランディノスは痺れて動けなくなった。

「！！……………ハアアアア 断ッ！！」

最大まで溜めた溜め斬りに、言霊を乗せて全力で振るう。

グズシャアッ！！

ランディノスを深く切り裂いた。

「ハッ！ ハッ！ ハッ！ ハッ！ ハッ！」

キイはスピードに力を加えた連激を叩き込む。

鱗を砕き皮を切り裂く。

「……………！」

みんなが離れたところで、アイは拡散弾を撃つ。

ガッ！ バラバラバラ ドガガガガガン！！！！

強力な爆撃がランディノスを呑み込んだ。

「……………」

拡散弾で巻き起こった煙が晴れていく。

煙が晴れたその先には、ボロボロで重症のランディノスがいた。

麻痺による痺れは既に解けているようだった。

グ……………グルガアアアアアアアア！！！！

ランディノスは怒りの咆哮を上げた。

その咆哮は大気を揺らし、それを聞いたエリカ達は体が硬直してしまった。

グルガアアアアアアアア！！！！

ランディノスの体が、淡く青く光りだした。

「何ですか……………？」

迂闊に手出しが出来ないエリカ達は、警戒しながらそれを見ていた。すると、ランディノスの体の傷が見る見るうちに再生されていった。

「なっ!?!」

「そんな、反則ですよ……」

「……」

傷は消えて完全に回復してしまったランディノス。

そして、ランディノスが攻勢に出た。

尻尾を振るう。

ブンッ!!

咄嗟に後ろへ跳んだ、エリカとキイ。

しかし、

ドゴッ!

伸びた尻尾に打ち付けられ吹き飛ばされた。

「……伸びたね」

アイは二人の心配をしながらも、冷静に分析していた。

グルガアア！！

追撃するように、ランディノスは右爪を振るった。

「ハアツ！！」

キイは盾を突き出しそれを防ぐ。

グガアアア！！

左爪を振り上げる。

ジャキンツ！

腕が巨大化し、大きく鋭い爪がキイを襲う。

「なっ！？」

「させません！」

キイの前に出たエリカが、大剣を盾にして受け止めた。

ランディノスの右腕は、体に不釣り合いなほど大きくなっていて、その一撃は強大すぎた。

ドゴオンツ！！！！

大剣ごとエリカとキイを数メートル先まで吹き飛ばした。

「……………体を巨大化できるの？ いや、でも……………」

アイは援護しながらも、必死に分析を続けている。

シャアアツ！！

ランディノスは動くことなく、その場で右爪を振るった。

ランディノスの右腕が、在り得ない位伸びてエリカたちを襲った。

ズシャツ！！

ランディノスの攻撃は、エリカの横腹を切り裂いた。

「くっ！」

起き上がったキイが伸び手を切り裂こうと、剣を振り下ろした。

スカッ！

ランディノスは伸びた手を元の長さに戻して、剣をかわした。

「……………伸縮自在……………巨大化……………」

アイは頭をフル回転させて、ランディノスの分析を続けている。

グガッグギイガガアガガガガガ！！？

ランディノスは突然、変な奇声を上げだした。

バキッ！　ゴオ！　ドガ！　グチャ！

体中が膨らんだりへこんだりと、グチャグチャに変化しだした。

グガアアアアア！！！！

一際大きな方向を上げると、ランディノスの体は全く違うものになっていた。

まるで飛竜種ワイバーンのような骨格になっていた。

翼が腕と同化し、巨大化している。

ランディノスは今、リオレウスに近い骨格をしている。

「「なっ!?!」」

エリカとキイはあまりの事に絶句した。

「……………骨格の変化。……………つまり、ランディノスは体を自由に変えることができる?」

自分の意思で、細胞レベルの操作ができるのかな……………。
まさに、これは“変幻自在”っていうのかな?」

アイは徐々にランディノスの真実……………正解へと答えを導いていく。

ランディノスは、体の急激な変化で疲れて動けないで居た。

「体を変えられる……………つまり、器官や生態も別の生物に変えられる。さっきのが鳥竜種を真似たのなら、いまは飛竜種かな?

火を吐けたり出来るなら……………とても危険になるね」

アイはペイント弾を1発だけ、装填^{リロード}する。

それをランディノスに撃ち込む。

ペイントの臭気が広がる。

「みんな〜！ 一旦引いて、体勢を立て直そうよ！」

「はい！」

「うん、わかった」

アイは追って来ないように、閃光玉で視力を奪ってからベースキャンプへと向かった。

【……………起きて……………ユミナ……………起きて……………】

なんだろう？ 誰かの声がする……………。

【目を覚ましてよお……………】

【全く仕方が無いわね……………ユミナは……………】

2人……………かな？ 女の子の声が聞こえてくる。

眠い……………あまりの眠さに、体は動かないどころか、目も開けられない

い。

【どうしましょう？ 鈴音……何か無い？】

【そうね……ならごうしましょう】

パンツパンツ！！

痛あつ！？

「いきなり何するの！？」

あまりの痛みに飛び起きた私。

「あれ、起きれた……」

【フンツ！ うまくいったわね】

【マスターに何をしてるんですか！！？】

マシロがスズネに怒鳴った。

【何って、起こしたただけけど？ そもそも、

あんたが何か方法が無いか聞いてきたからしたただけでしょ！？】

【他にもっと方法があったはずですよ！！】

【じゃあ、あんたがその、他の方法で起こせばよかったじゃない！
！】

【それは……！　そうですね……】

【自分でやら無いくせに文句ばっか言わないで】

【うう……そもそも貴女が、あそこで貴女だけが力を与えなければ、ここまでならなかったんですよ！？】

【うっ！？　何よ！　ここまで来て責任転嫁？

それに、アレはユミナが勝手に私の力を奪っただけよ！！】

【違います！　私は事実を述べているだけです。

それに、ソレは貴方がちゃんとしてないから勝手に奪われるんです！】

2人は私を退けて喧嘩をし始めた。

「まあ、二人とも落ち着いてね？」

【ま、マスター！？　すみません……お見苦しいところを】

【ユミナが言うなら……別に良いわよ】

とりあえず二人は落ち着いてくれたようだ。

「というか、二人とも眠ってたんじゃないの？」

【マスターの危機に一時的に目が覚めたんです】

【そうよ、というか力を奪われて勝手に叩き起こされたんだけどね。全く、もっとしっかりしてよね！】

【マスターになんて言い草ですか!?!】

【別に私の勝手でしょ! ユミナは私のなんだし】

【違います! マスターは私のです!】

「いやいや、私はどっちのでもないよ」

また喧嘩が始まりそうだったので間に入って止めた。

【コホンツ! え〜と、とにかくマスターの危機に私たちは目を覚ましただけなので、

これが終わったらまた眠りに着くことになります】

【そういうことね。ユミナの怪我はあらかじめ治しておいたから】

「え、ありがとう!」

【べ、別に……死なれても困るしね……。ユミナの為だけにやったわけでもないし!】

「え、そうなの?」

【そうなの!】

【って、治したのは私です!】

え!? どっちなの?

【どっちでもいいでしょ？】

【よくないですー！】

あれ？ そういえば……前の来た時と少し違うような。

【よく気付いたわね……今は一時的だから前回のようには出来ないのよ】

【だから、マスターには早く目を覚まして欲しいのです】

ああ、心が読まれてるんだったね……。

「そっだ！ 私は早くアイ達を……！」

【お帰りはあちらになりまーす！】

【またの来るのを待ってるんだからねっ！】

「ずいぶんあっさりだね！？」

私は立ち上がると、二人が指差した方へ進みだした。

「ありがとう！ またね、マシロ！ スズネ！」

【はい、マスター】

【頑張りなさいユミナ】

私の意識は途切れ浮上していった。

アイ達3人は、ベースキャンプへ帰り着いていた。

「ユミナちゃんは大丈夫かな？」

「多分、大丈夫じゃないかな？」

「ええ、運良くアイルーが来て運んでくれましたからね」

3人はテントの中に入ってユミナを確認した。

ユミナはベッドの上ですやすやと眠っていた。

「大丈夫そうだね」

「うん」

「そうですね」

3人はこれからのことについて離そうとした時。

不意にガバツとユミナが飛び起きた。

「!? ……ユミナちゃん？」

「ん、アイ……みんな！ 無事だったの」

「ユミナちゃんのほうが無事じゃないよ！」

「あはは、それもそうだったね」

「もう大丈夫なの？」

「うん、もう平気だよ！」

「そう、……じゃあ、私が見つかったことをみんなに教えるよ！
レイさんとディアさん、出てきて！」

呼ばれた2人は何処からとも無く出てきた。

「分かったことを教えてください」

「にははは、よんだ〜？」

そうして、アイはランディノスの戦闘で手に入れた情報をみんなに話した。

ランディノスは攻撃を認識した部位を硬化することができる。
だから、攻撃が認識されない攻撃しか効かない。
それと危険を感じたら全身を硬化する。

特殊な細胞を持っていて、超速再生が出来る。

その他にも、体の一部分だけ変化させたり、
全体の骨格や内臓器官を変えたり出来る。まさに、変幻自在。

「この二つが現段階で分かっていることです」

「厄介な能力ね……」

「今は鳥竜種じゃなくて、飛竜種の姿をしています」

調査報告を聞いていたレイは考え込むように黙っている。

そして、不意に口を開いた。

「それは、大変危険なことになったかもしれません」

「にははは、確かに……やばすぎるね」

レイの発言にディアは理解できているようだ。

他の4人は全く分からない。

「ランディノスは、既に能力だけで言うなら古龍並みです。

もし、骨格変化で古龍種の骨格になったら……」

古龍以上の力を手に入れる。

「大変不味いね……これはギルドが扱ったほうが良いんじゃないかな？」

「そうですね、伝説級の二つ名持ち複数で当たらなければいけないかもしれません」

話が大変物騒な方へと流れていく。

「そんな！ これは、私達の試験です。だから私達がランディノス

を倒します!」

ユミナはそう主張した。

「うーん、確かに私達が最後までちゃんとやりたいです!」

「何処まで出来るか分かりませんが……やりたいです!」

「お願いします。私達にやらせてください!」

3人も続いて言った。

「しかし……」

「いいんじゃない? とりあえずやらせてみたら?」

駄目だったら私達で相手して、この子達に援軍を呼んできてもらえば」

レイは逡巡の末。

「……そうですね。あなたたちに任せます」

ユミナ達に任せた。

「じゃあ、今日はもう休んで明日からまた頑張ろう!」

「」「はい!」「」

レイとディアはその場から離れる。

「私達はランディノスの監視を続けます」

「サービスでペイントが切れないようにしといてあげるよ」

「ありがとうございます！」

2人と別れて、それぞれが明日の準備を始めた。

こうして、ランディノス戦1回目が幕を閉じた。

第六十話「変幻自在」(後書き)

ランディノス：能力がチートじみてますねえ^^；
この能力は後々重要になってくるかもしれない…かもしれない…多
分。

四月の最後から書き始めたこの小説ですが、
年を明けても未だ書けていることに驚きです^^；
まあ、これも読んでくださる皆様のおかげです！
あと、3、4ヶ月で書き始めて一年になります！
今年もこれからも、モンスターハンター 漆黒の業火 を
どうかよろしくお願いします！

楽しんで読んでくださいね！

…あと、できれば誰か感想のほうも…ください！> < ;) !

第六十一話「飛鳥轟迅」(前書き)

お久しぶりです。

また、大分更新が遅れました><

近々、期末テストがあるので、また遅れてしまいます。

本当に申し訳ありませんm()m

今回はいつもと少し違う書き方をしています…。

読み難いでしょうか…？

前とどちらが読みやすいでしょうか、感想をお願いしますね！

第六十一話「飛鳥轟迅」

第六十一話「飛鳥轟迅」

暗闇を移動する影が4つ。

月が天辺まで昇ったばかりの時刻で、辺りは暗い。

明かりに頼らず、自分の目と手足で暗い夜道を進んでいくユミナ達。ペイントの臭気を辿ってランディノスを探しているのだ。

ユミナ達は今、森丘の地図から外れたところにいる。

辺りは草木に囲まれていて、まるで森丘のエリア8や9みたいな地形に近い。

草木を掻き分けて、土と草の足場を、ユミナ達は常に警戒しながら進んでいく。

地図に載っていないエリアは何が起きてても不思議ではない。

たとえば、情報外のモンスターが現れたり、別のハンターに遭遇したりなど、

不測の事態が起こりやすいのである。

しばらく進んで行くと、ドーム状に開けた場所に出た。

岩や土で出来た崖に囲まれていて、天井がぽっかりと大きな空洞と
なっている。

空洞からは月の光が辺りを照らしていて、幻想的な雰囲気を持った
場所になっている。

ユミナ達は辺りを見回したが、先に進める場所もなければ、
ランディノスの姿も見当たらない。

どうやら行き止まりの様らしい。

ペイントの臭気を確認してみても、この場所で合っていた。

全員武器に手を伸ばし辺りを警戒する。

警戒していると不意に頭上から影が差し、

グガアアアアア！！！！

咆哮が轟いた。

月の光に照らされ現れたのは、火竜リオレウスの姿を模した、
ランディノスであった。

鱗と甲殻が青く輝いており、まるでリオレウス亜種のようなようだった。

「本当に、リオレウスに変わってる……」

目の前の光景に驚きを隠せずに呟くユミナ。

グガアアアアア！！！！

止まっていた時間を再び動かしたのは、ランディノスの咆哮であった。

それを合図に4人はそれぞれ武器を構えて、ランディノスとの戦闘が始まった。

先陣を切って間合いに飛び込んだのはユミナだった。

ランディノスの左翼へ鬼斬刃を振るう。

ザシュツ！！

「……はじかれない？」

ユミナの一撃は浅く傷つけるだけだったが、鬼斬刃が弾かれることはなかった。

続いてエリカとキイが間合いへと入る。

エリカはユミナとは反対側の右翼を狙い、ティタルニアを振り下ろす。

翼爪を斬りつけて、黒き雷がはじける。

黒い雷　　龍属性である。

龍属性は属性の中で一番謎が多い属性で、

同じ龍属性を持ったモンスターに絶大な効果を発揮する。

エリカは翼爪を傷つけることは出来なかったが、手応えは感じていた。

2人に続く形で、キイもコロナをランディノスの足へ振るう。

ボンッ！

キイが斬りつけた部位が爆ぜた。

キイは続けてコロナを振るっていく。

ボンッ！　ボンッ！

火属性により、キイが斬りつけた部位は爆ぜていく。

グガアアア！

自分に纏わり着くものを払うように、ランディノスは回転するように尻尾を振り回した。

ボンッ！

一撃加えて離れたエリカとユミナは、既にその場に居なかった。

足元に居たキイは、ランディノスの股下を前転してやり過ぎた。

そのままもう一度前転し、ランディノスの尻尾の範囲から逃れた。

ランディノスは尻尾を振り回し続けて、ユミナ達は近づけない。

バンツ！ バンツ！

銃声が響いた。

絶好の射撃ポイントを見つけたアイは、ユミナ達が戦っている隙に移動していた。

そして、その場で寝そべり、ボウガンをランディノスへと向けて構えて撃ったのである。

弾がランディノスに命中して、ランディノスは回転をやめた。

ランディノスはアイへ向きなおし、突進してきた。

グガアアアア！！

アイは体を起こし、少し後ろへと身を引いた。

ガンツ！！

ランディノスの突進はアイに届くことなく、壁へ激突した。

グアアアア！？

壁に頭から激突した衝撃で倒れこむランディノス。

すかさず全員で一斉に攻撃する。

4人の連携で、ランディノスは少しずつ傷を負っていく。

グガアアア！！

のそりと起き上がるランディノス。

ガアッ！！

不意打ちでユミナにブレスを吐く。

ユミナは慌てることなく横へ飛び避ける。

ランディノスはクルッと振り向くと、アイ目掛けてブレスを吐く。

「!?!」

アイは射撃をやめて、寝そべったまま横へ回転してブレスが当たらない距離まで逃げる。

ドガンッ！！

先ほどまでアイが居た場所がブレスで爆ぜる。

アイは爆風を必死にこらえて、その場に留まる。

ランディノスは辺り全てに威嚇するように、低くうなり声を上げる。

ザッ！

一步を踏み出すユミナ。

「よく分からないけど、今は攻撃が効くなら」

鬼斬刃の切っ先をランディノスへ向けて構える。

バチバチィ！

雷属性の力で、刀身に雷が帯電し始める。

エリカのティタルニアには黒き雷を、
キイのコロナには紅き炎を、それぞれが武器にそれぞれの属性を纏
う。

「全力で行くよ！！」

ユミナの一言を合図に、4人は一斉攻撃を繰り出した。

グガアアアア！？

ユミナ達の全力攻撃に怯むランディノス。

鱗を切り裂き、甲殻を砕く。

翼膜を切り裂き、爪を叩き折る。

圧倒的な攻撃にランディノスはボロボロになっていく。

ギャアアアア！

ランディノスは、逃げるように空高く飛び上がる。

天井付近を飛び回り、ユミナを目に付け、空中奇襲を行う。

グガガガ　ゴアアアアアー！！

ランディノスは空中から飛び込んでくると、

ティガレックスに姿を変え、右翼を突き出してユミナへと突っ込んだ。

ドゴオーーーン！！

ランディノスが地面へ突っ込み、砂埃を巻き上げた。

衝撃で岩片が辺りへと飛ぶ。

「ユミナちゃん！？」

慌てて崖から飛び降りて、ユミナを助けに行こうとしたアイをエリカが制した。

砂埃が風で流されていき、視界がクリアになった。

そこにはランディノスの一撃を、鬼斬刃で正面から受け止めたユミナが居た。

バチチ

電気がユミナから発せられている。

体に鬼斬刃の電気を帯電させて、一時的に身体の力を活性化させていたのだ。

地面は碎け、陥没していた。

ユミナの足が少し地面にめり込んでいる。

身動きが取れないユミナに容赦なく、ランディノスは左翼で一撃を入れる。

ブンツ！ ガキンツ！

キイが、ユミナとランディノスの間に入り込み、盾で防いだ。

衝撃に耐え切れず、ユミナごと吹き飛んでいった。

「痛あ……キイ大丈夫？」

吹き飛ばされて壁に激突したユミナは、すぐに起き上がりキイに手を貸す。

「はい、なんとか」

ユミナの手をとったキイは、体を起こしてランディノスへ向きなおす。

ゴアアアアアア！！

巨大な咆哮が轟く。

ランディノスの骨格は、リオレウスからティガレックスへと変わっていた。

体が変わるにあたって、それまで負わせていた傷も全部消えていた。

「……傷が癒えてるけど、ダメージとしては蓄積されているのかな？」

傷を負わせるたびに全て回復されて、ダメージとしても残らなければ、いくら攻撃しても死なない不死身な存在になる。

ユミナは、ダメージとしては残ってることを信じることにした。

「再生出来ない位のダメージを負わせて、倒す！」

ユミナはランディノスへと飛び込んだ。

ゴアアア！！

ランディノスは迎え撃つように右翼を突き出した。

ユミナはその一撃を掻い潜り、懐に潜り込み一閃。

ゴアアア！？

ランディノスはユミナを追うように振り向く。

しかし、そこにユミナは居なかった。

ジャキンッ！

ランディノスの背中が切り裂かれる。

後ろへ回り込んだユミナが切り裂いたのである。

キイがランディノスへ接近する。

ランディノスの正面で、気を引くように移動する。

ランディノスはキイを追い方向転換する。

注意が逸れた所に、ユミナとエリカが一撃を加える。

アイは弾を温存するために、補助弾に切り替えて皆の援護をする。

ゴアアア！！

ランディノスは体を捻り回転する。

ブウンッ！！

空気が揺れる。

ユミナ達は距離を離していたので、喰らうことはなかった。

「キイ君、これ！」

アイは円盤状の物をキイに向かって投げた。

シビレ罨である。

ブンツ　　ガンツ！

受け取るうとしたキイを、遮るようにランディノスの尻尾が払った。

シビレ罨は高く舞い上がった。

ユミナが鬼斬刃で叩き落とし、切っ先を地面に落とす。

ガキンツ！　　バチイ！！

シビレ罨が無理やり展開された。

ゴアアアアア！？

ランディノスは痺れて身動きが取れなくなった。

「一気に片を付ける！！！」

ユミナ達は一斉に斬りかかる。

「ハアアアアアア！！！」

ズザアアアアアンツ！！

雷撃がランディノスの胸を切り裂く。

「斬ッ！ 斬ッ！ 斬ッ！」

ズバッ！ ザシュ！ ドス！

エリカは頭をひたすら切り刻んでいく。

「たあああああ！！！」

ズババババババ！！

高速でコロナを振るい、ダメージを蓄積させていく。

ボンッ！

痺れ罨が弾けて、ランディノスの体に自由が戻った

ゴアアアア！！

ランディノスは逃げるように後ろへ跳んだ。

着地と同時に姿が変わっていき、ナルガクルガへと変わった。

グルルルウ　　ガウッ！

ユミナへと、跳びかかる。

ユミナは後ろへと跳んで攻撃を避けたが、完全に避け切れなかったのか、
鎧の胸の部分に斬られた様な傷があった。

ガウッ！

ランディノスは尻尾を鞭のように撓らせ振り回す。

エリカとキイを狙ったその攻撃は当たる事はなく避けられた。

ランディノスの素早く鋭い攻撃の嵐に、

ユミナ達は手を出せず、ひたすら避け続ける。

アイは補助弾から、貫通弾へ換えてランディノスを狙う。

ランディノスの猛攻についていけず、少しずつ傷を負っていく。

ガウッ！！

ランディノスは尻尾を跳ね上げ、空中で回転して叩きつけた。

ドゴオッ！！

ユミナは左へ跳びかわしたが、衝撃で転がった。

地面に尻尾がめり込み身動きが取れないランディノス。

ようやく動きが止まったランディノスへ、反撃するキイとエリカ。

「絶ッ！！」

「ハアアアアア！！！！」

2人の斬撃はランディノスを深く切り裂き、辺りに沢山の血が舞う。

グルルルウ！！

その場で一回転して、エリカとキイを吹き飛ばす。

そのままエリカへと狙いを定めて、跳びかかった。

「くっ！？」

空中で体勢を立て直し、ティタルニアを盾にして防ぐ。

無理な場所と体勢で、そのまま地面へ叩き落される。

そこへユミナが駆けつけて一閃

ガキンッ！

右翼の刃の部分を斬りつけ、火花が散る。

「まだまだ！！」

ガキンッ！ キンッ！

一転集中で斬りつけ続ける。

バキンッ！

ぎゃおっ！？

刃が折れて、ランディノスは体制を崩して倒れこむ。

ランディノスから開放されたエリカは、すぐさまそこから抜け出して反撃を始めた。

ユミナ、キイ、アイの三人も一斉に攻撃をする。

「ハアアアアア!!」

ユミナの渾身の一閃。

ランディノスの胸を切り裂き、血飛沫が舞う。

ガ……ガウ……

「はぁ、はぁ、倒したの……?」

ランディノスは崩れるように倒れた。

ランディノスの体から淡い光が散っていき、最初の姿へと戻った。

最後の力を振り絞るかのようにゆっくり起き上がり、高速で飛び去った。

ペイントの臭気を追うと、北の方へ飛んでいるのが分かった。

「北ね……みんな決着を着けに行こう」

ユミナは皆へそう言い、進み始める。

「うん、そだね」

始めにアイが言葉を返し、進み始める。

「決着を着けましょう」

エリカが続く。

「頑張ります！」

キイが最後を付いていく。

ランディノスとの最後の戦いが始まる。

第六十一話「飛鳥轟迅」(後書き)

今回は台詞少なめでいってみました。

変でしょうか？

感想お願いします！

第六十二話「無限乱闘」

第六十二話「無限乱闘」

私達は、逃げたランディノスを追っていた。

数時間探し続けていたら、夜も明け朝日が差していた。

そして、ようやく見つけた！

ギヤアア！ ギヤアアア！

「もう逃がさない、みんな頑張りよう！」

アイ達にそう言い、ランディノス目掛けて走り出した。

すると、ランディノスは天高く吼えた。

ギヤアアアーーーーー!!!!

ギヤアア！ ギヤアアーーーーー!!!!

私たちは警戒して、ランディノスから2メートルほど離れたところで止まった。

辺りに注意を集中すると、足音が聞こえてきた。

ダツダツダツ！

ガササガササ！

「な、何かな〜！？」

アイが不安そうに呟く。

そして、それは唐突に現れた。

ギヤアギヤア！

ギヤアアアアアア！！！！

ギヤツ！ ギヤアアア！！

ギヤツ！ ギヤツ！

私達は大量のランポスに囲まれていたのである。

数は裕に百頭を超えている。

「なんて数でしょうか……」

「これは流石にやばくないかな？」

エリカとキイが敵の数に圧倒される。

私も流石にこの数は勝てるか分からないけど、
囲まれていて逃げる場所も全くない。

結局は戦わなければならない……。

それなら

「みんな、いける？」

「もちろんだよ」

「……いけます」

「いくしかないよね？」

戦って勝つまでだ！

私達はそれぞれ武器を構えて、それぞれ敵へと飛び込んだ。

ランポスが4頭、私が近付いて来るのに気付いて襲い掛かってくる。

「ハア！」

私は鬼斬刃で一番近い一頭を切り伏せ、横へ薙いで残りを斬った。

倒したところで、すぐにまた新しいのが襲い掛かってきた。

「フンッ！」

気合一閃。

飛び掛つてきたランポスの胸を切断して殺す。

一閃を返し一歩踏み込む。

後に続いて来ていたランポス達を斬り殺す。

無数にいるランポス達は、倒しても数が減っている気がしない。

それでも、私は倒し続ける。

袈裟切り

逆袈裟切り

刺突

払い

薙ぎ

振るい

斬り上げ

斬る切るキルきる

どれ程、鬼斬刃を振り続けたらろう……。

数時間、いやたった数十分の出来事だったかもしれない。

私は……私達はランポスを倒しきった。

辺りはランポスの死体が山のように転がっていた。

私達は、その上を歩きランディノスの前へ立った。

グルガアアアアア！！！！

ランディノスは信じられないかのように叫ぶ。

私は鬼斬刃の切っ先をランディノスへ向ける。

「後は……ランディノス貴方だけ！」

私は全力でランディノスを貫く。

ズシャアッ！！

鬼斬刃は容易くランディノスを貫通し、辺りに血が舞う。

グルガアアアアアアアアアア！！！！

ランディノスは突然変な奇声を上げた。

「？ ……？？」

私は訳が分からなくなり、鬼斬刃を抜き距離を取ろうとする。

しかし、鬼斬刃はビクともせず、ランディノスに突き刺さったまま

だ。

グガガガ……グルウ……ガハツ……ギギイ！！！！

ランディノスの体がグチャグチャに蠢きだす。

ガ……ガ……ガガ……！！！！

次第に巨大化していき、鬼斬刃を通じて私ごと取り込もうとする。

「くっ！？ ……や！ ……ハアアアアアア！！！」

バチバチバチバチ！！

私は全力で鬼斬刃を解放すると、青白い雷光が迸る。

ズザアアアアアアンツ！！！！

雷撃が閃光と化して、ランディノスを襲う。

ランディノスから解放された私は、すかさず距離をとった。

ツ！！

ランディノスは、4つの肉塊になっていた。

「倒したの……？」

私の緊張が途切れようとした。

ゾッ!!

「っ!?」

大量の殺意が私に向いた。

「ゆ、ユミナちゃん……」

「うん、何か変……」

不安そうに辺りを見回すアイに答える。

突然、肉塊が動き出した。

四つの肉塊は、それぞれが自由自在に動き、ランポスの死体を貪り喰らう。

「な!?!」

見る見るうちに死体は喰らわれ、肉塊は巨大化していく。

そして

肉塊は、ランディノスになった。

「ランディノスが4頭ですか」

「……大変さが増しましたね」

エリカとキイが溜息をつく。

「1人……1頭だね。みんな行くよ！」

「っっはい！！」

ランディノスの方もそれを酌んだのか、3頭が少し離れた所まで飛び去った。

私は正面に居るランディノスを見据える。

鬼斬刃の切っ先を向けるように構え、間合いを詰めるため走りだす。

「ハアアアアア！！」

ギャアアアア！！

正面からぶつかり合う。

一合、二合と打ち合う。

私の攻撃はランディノスに弾かれ、ランディノスの攻撃は受け流していく。

私が隙をついた一撃も、ランディノスの硬化で弾かれる。

ランディノスは弾かれた隙をついて私を狙ってくる。

(正面から戦り合ってたら限がないね……)

私はそう思い、隙を突いて距離をとりポーチを探る。

閃光玉を掴み、ランディノスへ投げつける。

カッピカアアーーーーー!!!

ギャオ!?

不意打ちに眼をやられるランディノス。

(……………眼? ……もしかしたら)

私は視力を失ったランディノスへ、全力で突きを放った。

左眼に……………。

ザシュツ!!

ギヤアアア!!!?

硬化で弾かれることなく貫いた。

「ランディノス貴方も流石に硬化できない部位がある……………」

私は鬼斬刃をランディノスから抜き、もう一度突き刺す。

「……………その両眼は、流石に硬化できないね」

グギヤアアア!!!?

完全に視力を失ったランディノスはもがき苦しむ。

突き刺したまま切り裂く。

「それに、体内は硬化なかが遅れる……」

私は全力で鬼斬刃を振るい続ける。

ランディノスに無数の傷がつく。

「一度傷を付ければ、私の攻撃弾かれない！」

最速の連撃をランディノスに放つ。

ギヤアアアツ！！！！

ランディノスは仰け反る。

私はその隙を突き、全力の一撃をお見舞いする。

「ッ！！？」

ズザアアアアアアアンツ！！！！！！

雷撃がランディノスを切り裂き、焼き焦がす。

グガ……ガッ……ッ！！

大量の血を流しながら倒れ伏す。

グガアア

ランディノスは弱弱しく一鳴きすると、
アイ達と戦って弱っていたランディノスが集まり重なった。
光を放ちランディノスは一つの存在に戻った。

グガアア！！

「一撃で倒さないと何度でも復活しちゃう……どうすれば」

【簡単よ、一撃で殺せば良いのよ……】

「！？ スズネ……？」

頭の中にいきなりスズネの音が響く。

【私が力を貸してあげる……】

頭の中でスズネは告げた。

【黒雷】

「 黒雷 」

私はそう呟きながら鬼斬刃で横に一閃。

バチンッ！！

鬼斬刃から黒い雷が放たれて、ランディノスを切り裂いた。

ランディノスは血を流しながら倒れ伏した。

「……ユミナちゃん」

遠くからこちらに向かっていたアイが、驚いたように私を見ながら
呟いた。

正確には私の手に握られている、鬼斬刃の刀身を見てだ。

「私の、鬼斬刃が……折、れた……？」

私はとてもショックを受けた。

何故折れたか……思い当たる点は幾つかあるが、
それよりも今まで一緒だった相棒を失ってしまった。

その事実が私から力を奪う。

私は力を失い、膝から崩れそうになる。

カランッ！

握っていた鬼斬刃が地面へと落ちた。

「ユミナッ！！」

エリカが突然、大声を上げて私を呼んだ。

グ……ガッ……アアア

まだ決着はついてなかった。

倒したはずのランディノスが起き上がり、私に襲い掛かろうとしてきたのである。

私はショックでそれに気付くのが少し遅れた。

アイ達は少しはなれたところに居たので、私を助けようとするが、間に合いそうにない。

私は襲い掛かってくるランディノスを見ながら思う……。

私の勝ちだ

両手をポーチに突っ込み、目当ての物を掴み取る。

右手首を上弾き、シビレ罫をポーチから出す。

ガン　バチイー！！

シビレ罫を踏んで展開して、後ろへと跳び下がった。

ギヤアア！？

私はシビレ罫に掛かったランディノスへ、両手を交差するように振る。

ベチャベチャ！

ギヤ……ガ……ア

私の投げた捕獲用麻醉玉でランディノスは眠りについた。

「……………捕獲完了」

私はそう呟きながら、鬼斬刃のもとへ向かった。

刀身が半ばから砕け折れた、鬼斬刃。

私の相棒……………。

私は柄を握り持ち上げる。

「ありがとう……………貴方に私はいつも助けられたんだ。

でも、私は肝心なところで救えない……………」

刀として致命的なダメージを負い、折れた。

二度と元には戻らない……………。

「私……………わた、しい……………ごめ、ん、なさい……………!!」

涙が零れる。

一度零れだすと止まらず、溢れ出す様に流れた。

「ごめん、なさい……………今まで、……………ありがとう!!」

私は折れた刀身と破片を拾い集め、鞘へと戻した。

「ありがとう、私の相棒　さようなら」

カチンッ！

全て鞘へと納めると、私の体から力が抜けた。

意識が遠のいて行く

バタンッ

私は倒れ、そこで意識は途切れた。

黒白の世界。

二人の少女が話をしていた。

『全く、鈴音はマスターに無茶させすぎなんです！』

『仕方ないじゃない、アレが最善なのよ』

『もう少しやり様があった筈です！　……大切な相棒まで失ったんですよ？』

『……だけど、今のままじゃ　“アレ”に負けるわ。

だから、少しづつでも私たちの力に慣れていかないと……』

『それは……』

『それに、“アレ”の後にはきっと……』

『……』

『……』

『マスターは運命を……』

『必ず変えるでしょうね、アイツもそれが分かってそれを望んでる』

『あの人は、いつまで経っても大馬鹿です……』

『馬鹿は死んでも直らないわ！ アイツは死なないから尚更ね』

『ふふふ、あの人は最強ですもの……』

『フンッ！』

『ふふ、じゃあ次は私の番ですね！』

『いや、私の番よ！』

『貴女は今したじゃないですか！』

『ユミナは私のだから別に何度やっても良いでしょっ！……』

『いいえ！ マスターは私のです！……』

『違っわ！ 私のよ！……』

騒がしい口喧嘩が、静かな世界を響いていった。

「捕獲ですね……おめでとございます」

「にやははよくやったねえ」

アイ達は、気絶したユミナと捕獲したランディノスをベースキャン
プへと連れ帰った。

「ユミナちゃん、起きないね……」

アイはユミナを心配して、ずっと傍で眺めている。

すやすやと眠るユミナ。

「大切な物を失ったんです。ずっと一緒に居た相棒を」

眠るユミナは鬼斬刃を離さず、抱えて眠っている。

「今は、寝させておこうよ」

キイは静かにそう言った。

レイが調査の報告を言うように告げた。

「えっと、ですね……」

アイがそれに答える。

変幻竜ランディノス（鳥竜種）

ドスランポスを一回り大きくして、翼を生やした見た目をしている。鈍く光る青色をした鱗と皮をしていて、一部、鱗が甲殻となっている部位がある。

頭に白いとさかを三つも持ち、角のような形をしている。

能力は古龍並みである。

メタモルフォーゼ
変幻自在

超速再生

分裂

硬化

伸縮

援軍召集（同形態のモンスターを呼ぶ）

「　　つて、ところかな？」

「　　……そうですか。後は捕獲した個体で調査します」

報告を受けて満足しているレイ。

「　　……では、先に……上位試験合格おめでとうございます」

レイからアイ達にそう告げられた。

「　　……」

「　　……」

「　　……」

「　　やったあ~~~~!!」

「　　やりましたね」

「　　やったね!!」

アイとキイは喜び飛び跳ね、エリカは微笑を浮かべそれを眺める。

「　　よかったねえ皆……これからがんばってねえ」

ディアも祝福し言葉をかける。

「　　ユミナちゃん!!」

眠っているユミナにアイは話しかける。

「私たちやったよ！ ついに上位ハンターになったんだよ！
だから、早く眼を覚まして一緒に狩りに行こう！」

アイはそう笑いかけると、ユミナもほんの少し笑った。

アイ達はそんな気がしたのであった。

こうしてユミナ達の長い上位試験が幕を閉じたのであった。

第六十二話「無限乱闘」(後書き)

ランディノス編終了です！

色々伏線が見え隠れしていますが…、

まあそんなことは気にしない(キラッ)

これでユミナ達も上位ハンターです。

つと言つても、特に何も変わらないんだけどねえ(笑)

あつ！言っちゃった！今の無し！ノーカンでお願いします！

次回からは、まだ戦ってないモンスターたちとの戦いだよ！

この先いつか、オリジナルモンスター出るから…！

絶対に見逃しちゃだめだよ！？(＞|＜。)

EX：？「キャラ紹介？」（前書き）

以前言っていたキャラ紹介です！

私の文章力は壊滅的に悪いので、

大変解り難い紹介になっているかもしれません（>|<。）

まあ、そこはかたなく察してください。お願いしますm（| |）m

それではさっそくキャラ紹介スタート！

EX：？「キャラ紹介？」

EX：？「キャラ紹介？」

？？？「みなさん、こんにちわ。いや……こんばんわ？ おはよ
うございます？」

朱「作者の“朱里奈”です！ いつもこんな駄文を読んであ
りがとうね」

朱「さっそくだけど今回は予定を変更して、この小説の登場人物を
紹介していくよ」

朱「え？ ……こんな事しないで本編書け？ ……」

朱「べ、別にサボってる訳じゃないですよっ！？」

ただ、なかなか思いつかないし……たくさんのゲームや本が私
を誘惑して……」

朱「……はい、すみません。私はテスト期間中なのに、この間発売したゲームに夢中になっていました」

朱「で、でも！ 皆さんもこんな経験ありますよね！？」

朱「え？ 言い訳は良いからとつとと紹介しろ……ですか。すみません」

朱「最初はやっぱり主人公？ ユミナ・アリアス」

ユミナ「こ、こんにちわ〜」

朱「そんな挨拶じゃ駄目だよ！ もっと派手に、インパクトある奴を……」

ユミナ「無茶言わないで下さい！ 私こんな事初めてでどうしたら良いのか……」

朱「柄にも無く緊張してるね〜」

ユミナ「私だって緊張します！！ って、言ってること失礼ですよ！！」

朱「では、プロフィールどうぞ」

ユミナ「ちょ、無視しな」

ユミナ・アリアス（女性）

年齢：16歳

武器系統：太刀

身長：167cm

体重：「言わないでー！ーッ！！」

性格：正義感溢れる？ 優しい？ 性格「なんで疑問系なのよ！？」

好きなもの

「仲間」 「太刀」 「カイト」

嫌いなもの

「不誠実な人」 「虫」

十二歳の頃に勝手に村を抜け出して、竜車に乗り密林へ遊びに行き

救われて
リオレウスに襲われる。その時に通りすぎたカイトに命を

決意した。
カイトの強さに憧れ、カイトを目標にハンターになることを

自分の精神世界に、鈴音と真白がいて力を借りることがある。

空色の髪と瞳をしていて、防具を付けてない時は長い髪を纏めて、

ポニーテールにしている。

スタイルはいいが、胸が少し残念な娘……。 (笑)

ユミナ「私の胸小さくないもん！　せめて美乳って言って！」

朱「……微乳（笑）」

ユミナ「……うう……」

朱「って、虫が苦手なの？　ランゴスタとかヤバくない？」

ユミナ「うん、基本は相手にしないか……遭遇した瞬間にやる」

朱「やるって……物騒な」

ユミナ「そんな事より次の人行かなくて良いの？」

朱「わ！？ 忘れてたよ……次は、アイ・フローズ！」

アイ「みんな、こんにちわ」

ユミナ「アイは慣れてるけど……なんで？」

アイ「ん？ 別に慣れてなんか無いよ、とっても緊張してるよ」

ユミナ「……そうは見えないよ」

朱「天然のなせる技ね。それではプロフィールどうぞ！」

アイ・フローズ（女性）

年齢：16歳

武器系統：ライトボウガン

身長：160cm

体重：「ニコオ」

性格：やや？ 天然気味のおっとり系少女

好きなもの

「ユミナちゃん！」 「甘いもの」

嫌いなもの

「辛いもの」

天然で家族でも行動が読み難く、ある日突然「わたしはハンターになる」

と言って、家を飛び出した良家のお嬢様。

ユミナの大親友で、自分には無い物を持っているユミナに懐いている。

魔弾のディア・ハーツを尊敬しており、彼女みたいになるた

めに毎日

修練を欠かさずに腕を磨いていつている。

髪と瞳の色はブロンズで、可愛い系のマスコットキャラみた
いな容姿をしている。

髪の長さがショート〜セミロング位。背は小さいがユミナよ
り胸が大きい。

ユミナ「……私の胸が小さいって言いたいのかしら？」

朱「うん？ ……別に」

ユミナ「うぐぐぐ……」

アイ「ユミナちゃん落ち着きなよ」

ユミナ「うん、ありがとうアイ」

朱「さて、2人はいつから友達なの？」

ユミナ&アイ「出会った瞬間から!!」

朱「わお……それはすごいね。まあその話はいつかね」

アイ「次、紹介する人は誰なの？」

朱「次はキイ・レディルトだよ」

キイ「皆さんこんにちわ！ キイ・レディルトです」

朱「いや、私たちも読者の皆さんも知ってるからね？」

キイ「いやいや、最新話から読み始めた人は分からないじゃないですか!」

朱「いやいやいや、確かにキャラ紹介から読みたいて人はいるかもしれないけどね、

普通はそんな奇特なことする人はいないから」

キイ「いやいやいやいや、分からないじゃないですか、世の中」

ユミナ&アイ「メタな発言禁止!!」

キイ「うっ……ごめんなさい」

朱「さて次行ってみよう!」

ユミナ「え? プロフィールは?」

朱「……次のエリカと一緒に、ね?」

エリカ「呼びましたか?」

朱「うわっ!? ……驚くから止めてね」

エリカ「申し訳ありません」

ユミナ「あれ、丁寧な言葉に戻ったね……?」

エリカ「はい、もともと給士をしていたので、敬語がつい癖に……」

朱「つまり、ユミナ達「仲間」といる時は敬語を忘れるくらい、打ち解けた……というわけね？」

ユミナ「ほんと！？ エリカ！」

エリカ「ええ、まあ……」

朱「さて、アイとキイが空気になり始めたところで、プロフィールどうぞ」

キイ・レディルト（男性）

年齢：16歳

武器系統：片手剣・双剣

身長：166cm

体重：48kg

性格：真面目なツッコミ気質な少年「ツッコミ気質って何！？初めて聞いたよー！」

好きなもの

「双剣」 「運動」 「採取・調合」

嫌いなもの

「特になし」

片手剣を使いながらも双剣を使えるように修行する変わった少年。

何処にでも居そうな普通な感じだが、唯一の特徴は「鋭いツツコミ」

ツツコミ以外特に目立った点も無いが、弱点らしい弱点も無いので、

何気にバランス型である。

紺色の髪にブロンズの瞳をしていて、ショートヘア！。

身長が低めなことを気にしている。

エリカ・リヴィア（女性）

年齢：20歳

武器系統：大剣

身長：170cm

体重：「セクハラですね」

性格：冷静沈着

好きなもの

「言霊」 「紅茶」 「甘いもの」

嫌いなもの

「^{アイツ}仇敵」 「弱い自分」

ハンターをしながら給士もしていた女性。

子供の頃、謎のモンスターに村を襲われ全滅し両親を失う。

以来、心を閉ざし言葉を失うが、レエーユ村の村長の紹介で

カイトと出会う。そして、言葉を取り戻し言霊を手に入れた。

両親を殺した謎のモンスターをこの手で殺すため探し続けている。

髪も瞳も金色でロングヘアである。

スタイルが良く、着やせするタイプ。

キイ「……あれ？ 僕ひたすら罵倒されてない？」

朱「気のせいだよ」

アイ「エリカさんも甘いもの好きなの？」

エリカ「はい、紅茶にも合うので大好きです」

アイ「そっかあ、じゃあ今度一緒にお茶しよ」

エリカ「はい、喜んで」

ユミナ「アイも私も一緒に連れて行って」

アイ「いいよ、三人で行こう」

キイ「……あれ、皆に無視されてなんか泣けてくる」

朱「キイ」

キイ「はい、」

朱「強く生きる！」キラッ）（b

キイ「……………」

朱「さあ、次は皆さんお待ちかねの……………椎名兄弟です！」

カイト「ふっ、なんだか面白いことしてるな朱里奈」

シズク「……………久しぶり」

朱「久しぶり〜。私は面白くないと生きていけないからね」

カイト「それもそうか……………」

シズク「……………私達のプロフィール」

朱「ちよ、雫！？ 仕事盗らないでよっ」

カイト・シイナ【椎名 海斗】（男性）

年齢：永遠の18歳???

武器系統：全て

身長：172cm

体重：48kg

性格：天上天下唯我独尊「俺……別にここまで酷く無くね？」

好きなもの

「シズク」 「戦い」

嫌いなもの

「人間」 「面倒事」 「退屈」

常に漆黒の衣服を纏っている謎に満ちた少年。

自分は異世界から来たと言っている。

絶対的な強さを誇るが、未だ全力を見せたことは無い。

幼いシズクを引き取り義兄として育てた……弱冠シスコン気味。

漆黒の髪と瞳をしていて、髪が少しぼさぼさの見た目は無口な美少年。

線が細く、一見女性のように見えるときもある。

シズク・シイナ【椎名 雫】（女性）

年齢：永遠の15歳???

武器系統：全て（特に鎌と剣）

身長：154cm

体重：「……殺す」

性格：口数が少ないおとなしい無口っ娘

好きなもの

「お兄様」 「お兄ちゃん」 「兄関係全般」 「甘いもの」

嫌いなもの

「お兄様を侮辱する者」 「お兄様と一緒にいられない時間」

カイトを真似て漆黒の衣服を纏っている無口な少女。

生まれつきオッドアイで村人に迫害されていた所をカイトに拾われた。

カイトに育てられ、鍛えられたので実力は折り紙付き。

義兄であるカイトを溺愛している超絶ブラコン（特に二人つきりの時）

漆黒の髪で長いツインテールにしている。瞳は右が蒼、左が朱鷺のオッドアイ。

小さく未成熟な体である（少女というより幼女）「……………殺す」

1050

シズク「……………朱里奈。殺す」

朱「くっ、なんて殺気……………」

シズク「……………覚悟して」

朱「ッ……………やられる前にやる……………」

カイト「俺の性格おかしくね？」

キイ「仕方ないですよ……この作者だし」

カイト「まあそれもそうだな」

ユミナ「って！？ シズクはカイト一色ね!？」

アイ「ほんとだね〜好きなものも嫌いなものもカイト君関係だね」

エリカ「“お兄様”と“お兄ちゃん”って何か違いがあるのでしょうか？」

シズク「……フツ！ ハア……無い……たあ!!」

ユミナ「無いんだ……って、誰も止めないの？」

カイト「別によくね？ おもしろいし……」

朱「えいつ………なんの、まだまだあーっ！っ!!」

シズク「……『其の希望は光・其の絶望は闇・併せ持つ全てを切り裂く黒白の剣』」

朱「……『全てを抜き、零の始まり、切り開け』」

シズク「『エリユシオン魔聖剣』」

朱「『カルト・レイン悠久の零濤』」

シズク「……一撃必殺、エンシエントノヴァ……！」

朱「切り裂け、プラズマブレイカー……！」

ドガアアアア……ンツ……！！！！！！

カイト「さて、次行ってみようか！」

エリカ「いえ、今回はこの辺りで終わりみたいです」

カイト「え、そうか？」

キイ「作者がアレだしね……」

アイ「キャラ紹介は次回に持越しだって」

カイト「そうか、じゃあまた次回な！」

シズク「……ハア……ハア」

朱「……ハア……うう」

ユミナ「はあ……二人ともいい加減やめたら？」

EX：？「キャラ紹介？」（後書き）

次回、紹介されていないキャラや設定などを書きます！
次回で紹介を終わりにしたいですが…

もしかしたらもう一話するかもしれませんが…

思い返してみれば…キャラが一人歩きしたり、

誤字や脱字が多かったり、現在進行形で駄文を書いていますね（T
T）

まあ、そんなこんなでも、どうか読んでくださいねっ
これからもよろしく願います〜！

EX：？「キャラ紹介？」

EX：？「キャラ紹介？」

朱「はいはい。キャラ紹介の続きですよ」

カイト「とつとと進めるよ！」

シズク「……駄目朱里奈」

朱「駄目朱里奈って言うな！」

カイト「だってな？ ただのキャラ紹介にどんだけ期間空けてるんだよー！」

シズク「……やっぱり駄目朱里奈」

朱「……ごめんなさい」全力で 土下座 m()m

カイト「それでは最初の方いってみよう！」

シズク「……最初は、ジークハルト・ミラ・ディバイン」

朱「仕事盗らないで!？」

ジーク「お久しぶりです、皆さん。……そして、始めましての皆様、
始めましてジークハルト・ミラ・ディバインと申します」

朱「おおく久しぶりの丁寧口調だね」

カイト「……気色が悪いな」

シズク「……気持ち悪い」

ジーク「この扱いはあんまりじゃないか!？」

朱「お、元に戻った」

カイト「根性が無いな」

シズク「……駄目駄目」

ジーク「畜生、だから来たくなかったんだ……」

朱「あはは、じゃあさっそくプロフィール紹介GO！」

ジークハルト・ミラ・ディバイン（男性）

年齢：28歳

武器系統：全ての剣（主に大剣）

身長：182cm

体重：74kg

性格：冷静（カイトとシズク以外の時）でリーダーシップをもった奴
好きなもの

「剣」「鍛錬」「強い敵」

嫌いなもの

「不真面目な奴」「カイト&シズク（苦手）」

伝説の二つ名持ちの一人で二つ名を「剣聖」

ありとあらゆる剣を使いこなしたものに送られる二つ名である。

昔、カイトに鍛錬をつけてもらったことがある数少ない人物。

カイトの過去について少しだけ知っている、これまた数少ない人物。

あと、二通りの口調を使い分ける。

髪と瞳の色が共に銀色で、髪型がモンハンで言う“レウスレイヤー？”

イケメンの中のイケメン的な感じ……（笑）

ジーク「最後の（笑）ってなんだ！ それと性格の最後……奴って、
ドンだけ扱い酷いんだ俺！？」

朱「キニシナーイ」

カイト「キニシナーイ」

シズク「キニシナーイ」

読者「キニシナーイ」

ジーク「なんでだー！ー！？ 皆それで流そうとしてるだろっ！？
特にシズク！ …… 普段とは違ってキツパリと喋ってるじ
やねえか！！

あと、読者って何だコラ！」

全員「キニシナーイ」

ジーク「畜生！ 二度と来ないからな！！」

朱「ふっ、作者には逆らえないのさ……」

カイト「うわあゝ痛々しい発言だね」

シズク「……流石、駄目朱里奈」

朱「君達はどっちの味方っ」

カイト「さて、ジークハルトがどっかにいった所で……」

シズク「……次、いつてみよう」

朱「無視！？ ……苛め格好悪いよ」

カイト「朱里奈がいじけた所で次の奴は……」

シズク「……レイ・オルビス」

レイ「お呼びでしょうか？」

カイト「ああ、次はお前の紹介なんだ」

レイ「なるほど……承知しました」

シズク「……プロフィール紹介」

レイ・オルビス（女性）

年齢：27歳

武器系統：双剣

身長：170cm

体重：「……失礼じゃないですか？」

性格：生真面目・冷静沈着

好きなもの

「走ること」「ギルドナイト」

嫌いなもの

「違反者」「頭の悪い輩」

伝説の二つ名持ちの一人、二つ名を「閃光」

閃光のようなスピードと閃く双剣の剣戟が由来。

力が男性より劣るから、という理由で速さだけを徹底的に鍛え上げた。

ギルドナイトに所属していて、ギルドのために色々動き回る。

髪と瞳の色は、蒼のショートでたまにメガネをかけているところが目撃されている。

スタイルは良しの、出来る女みたいな感じ……。

カイト「なかなかまとまなプロフィール紹介だな」

シズク「……今まで見返せば、よく分かる」

レイ「ありがとうございます」

朱「眼が悪いの？」

カイト「いつの間にお前は復活してんだよ」

レイ「いえ、眼は良いです」

朱「じゃあ、何でメガネ？」

レイ「伊達メガネです……部下の一人がかけてみて欲しいと」

朱「へえ〜一回それで本編にも登場してみてね！」

レイ「わかりました」

レイ「それでは、仕事が溜まっていますので早々に帰らせてもらいます」

カイト「またな」

シズク「……ばいばい」

朱「さて、次の方いつてみよう」

朱「次の方は、ディア・ハーツ」

ディア「はいは〜い、呼んだ〜？」

カイト「お前のキャラ紹介だよ」

ディア「にゃんと！」

シズク「……プロフィール紹介」

朱「私の仕事が〜」（>|<。）

ディア・ハーツ（女性）

年齢：27歳

武器系統：ポウガン（敵毎にライト・ミドル・ヘヴィを使い分ける）

身長：167

体重：「にゃはは、……撃つよ？」

性格：自由奔放・楽しい事大好き・騒動の嵐（お騒がせ魔人）

好きなもの

「猫」「シズク」「カイト」「射撃」

嫌いなもの

「退屈」「束縛」

伝説の二つ名持ちの一人、二つ名を「魔弾」

神がかり的な射撃術や銃精度が由来。

シズクに呼ばれるまで自由に世界中を旅し続けていた。

髪の色が白と紅で、瞳の色が紅である。

某ゲームのパ カルさんとそっくりな姿をしているよ！

ディア「パ カルって誰？」

朱「ん、禁則事項です」

カイト「パクリか……」

シズク「……パクリ」

朱「そんなこと無いですからねっ！……」

ディア「訴えられない様に気を付けなよ」

朱「だからっ……」m（――）m

カイト「土下座しながらなんて、説得力皆無だぞ」

シズク「……駄目朱里奈」

ディア「それじゃあ、残りを一気に紹介するよ」

ギルドマスター

ドンドルマの現ギルドマスター。若い竜人族。苦勞人。カイトと

旧知

村長

レエーユ村の村長。元G級ハンター。竜人族。エリカの育て親。

カイトと旧知

ツバメさん

レエーユ村で鍛冶屋をやっている若い？ 女性

教官

ユミナの通っていた学園や訓練所の教官。とても強い元G級ハンター

デューク

ユミナと兄妹のような仲のハンター。現在は上位以上、G級未満の実力

サラ

ユミナと姉妹のような仲のハンター。デュークの相棒。実力は同じ

朱「以上がキャラ紹介でした」

カイト「やっと終わったか」

シズク「……駄目朱里奈」

ディア「にゃはは、2話もかけてやる必要ないねえ」

朱「……シクシク……皆酷い」(; ;)。。。。

ディア「じゃあ、お先」

カイト「あっ、先に帰りやがった!?!」

シズク「……」

朱「……じゃあ、改めまして!」

カイト&シズク「ばいばい」

朱「ちつがああーうっ!?!?」

カイト「冗談だ」

シズク「……冗談」

EX：？「キャラ紹介？」（後書き）

次回からは、上位での狩りのお話ですよ！
基本的にまだ倒してないモンスターなどを、倒していきます！

ご意見・ご感想、いつでもお待ちしております！
キャラ紹介でよく分からなかったところや、
このモンスターと戦って欲しいなど…。
誤字・脱字…不明瞭や間違っているところなど、
お気軽にお申し付けくださいね！

ではでは、次話でお会いしましょう。

第六十三話「上位ハンター」（前書き）

最近更新があまり出来てないですね…。

すみません m (((m

ちょっとスランプかもしれない…。

まあ、頑張って行きたいと思います！

第六十三話「上位ハンター」

第六十三話「上位ハンター」

「さて、上位ハンターになっただけ……何する？」

酒場のとある席に集まっていたユミナが皆に問いかけた。

テーブルの上には豪勢な料理が並んでいて、ユミナ達は囲むようにそれを食べていた。

ユミナの言っている意図に気付いたアイは、納得したように食べるのを止め話に参加する。

「そっかあゝ初めての上位クエストだもんね〜！
ちゃんと選ばなきゃいけないね〜」

アイの言ったことに頷くユミナ。

そこでエリカが提案する。

「では、まだ倒したことないモンスターはどうでしょうっか？」

「倒していないモンスター？」

エリカは手にしていた食器を置き説明する。

「上位はこれまでと違って強いです」

「うんうん」

「ですから、最初からあまり難しいのはお勧めできません」

「なるほどね〜」

ユミナとアイは納得するように頷く。

「ですが、上位で初めてなので素材採集では味気無いですから……」

「「から？」」

「ゲリヨス討伐に行きませんか？」

……。

沈黙が訪れる。

「エリカ……えと、もう一回」

「ゲリヨスです」

ユミナは聞き間違えでは無いかともう一度聞く。

「えと、ごめんけどもう一回」

「ゲリヨス」

「あ、……えと」

「ダメ、……ですか？」

エリカは窺うように上目遣いでユミナを見つめる。

普段では考えられないような仕草にユミナ達はドキリとする。

「あ、うん！ 良いんじゃないかなゲリヨス！！ ね、みんな！！」

慌ててユミナは皆に言う。

アイとキイは必死にあわせる。

「うん、まだ戦ったこと無かったね、っ！？」

「そだねっ！？ 最初だし難しくない奴がね……」

「上位がどれくらい違うか分かるしね、っ！？」

「うんうん、採取とかもねっ……」

見事な慌てっぷりである。

「じゃあ、私達の最初の上位クエストは」

仕切りのおすようにユミナが告げた。

「ゲリヨス討伐よ！」

「はいっ！」

「がんばろ〜」

「ですね……」

「じゃあ、さっそく準備を始めよう！」

ユミナの一言で解散となり、それぞれ準備を始めたのであった。

次の日。

ユミナ達はさっそくゲリヨス討伐のために朝から街を出た。

行く先は沼地。

竜車で半日進んだぐらいで、到着した。

昼なのに少し薄暗く、地面はぬかるんでいる。

上位クエストは、其の危険性から拠点から始まることが少ない。

ユミナ達は途中で竜車から降ろされた。

「前来た所と少し違うね……」

「そだね〜一緒に来たのはババコンガの時だけ？」

「うっ、思い出したくない記憶が……」

ユミナは顔を顰める。

アイもユミナの肩に手を置いて、落ち込んだ雰囲気の流れる。

それをキイとエリカは不思議そうに眺めていた。

「どうしたのでしょうか？」

「嫌な思い出があるんじゃないかな？」

ユミナは気を取り直すように大きな声を出す。

「さてと！ ……ここからは二手に分かれて行動しようか」

「どづいう風に分けるの？」

「うん、私とエリカ……アイとキイに分けよう」

「了解！」

「じゃあ、クエスト開始よ！」

side：アイ&キイ

「アイ、何処に行く？　というか、何からしようか？」

キイは並んで歩くアイに問いかけた。

アイはうくと頭を少しうつむかせて考える。

思いついたのか、バツと顔を上げた。

「うん、鉱石とかどうかな？」

「鉱石？」

「うん、上位だからね、採掘、採取、モンスター討伐の順番で回っていいんだよ」

キイは少し考えてから、

「うん、いいよ」

とアイの意見を了承した。

「じゃあ、さっそく行ってみよう」

「おー！」

アイたち二人は他の物を見向きもせず、ただひたすら洞窟を目指

した。

10分ほどで目当ての洞窟に到着した二人は、さっそく荷物を下ろし採掘を始める。

カキンッ

ピッケルを振るう音が洞窟内に反響した。

数分ほど掘り続けた二人。

今は互いに収穫を報告しあっている。

「私こんなに、カブレライト鉱石とれたよ〜」

「うわぁ、凄いね。僕はライトクリスタルとかドラグライトばかりだったよ」

二人はわいわい騒ぎながら荷物を纏めると、次の洞窟へと向かった。

それから二時間ほどで、沼地全域の採掘ポイントを回った。

「じゃあ、今からは採取だね〜」

「うん、良いのが取れると良いな」

二人は手始めにと一番近い場所をくまなく探し回る。

「うわぁ〜マンドラゴラだよ〜」

「あ、これはドスヘラクレス」

「こつちには、厳選キノコがあるよ」

「王族カナブんだ……すごい」

二人はそれから4時間ほど、沼地を散策し続けた。

日が落ちてきて、薄暗かった沼地はさらに暗くなった。

「もうこんな時間だ」

「あ、どうする？ 一回拠点ヘイスクャンプに戻って、

ユミナ達と合流する？」

「うん、そだね……一回戻ろう」

二人は来た道に戻りながら拠点へと向かった。

side：ユミナ&エリカ

「エリカ、私達は何から始める？」

ユミナは待つていたエリカに問いかけた。

「そうですね。モンスターを倒しますか？」

「上位素材だもんね……ついでに鉱石も採りに行くつよ」

「はい」

二人は並んで歩き、先へ進んでいく。

数分歩いたところで、敵の影が見えた。

「ユミナ」

「うん、わかってる」

エリカはユミナに注意を呼びかけ、煌剣リオレウスを構える。

ユミナは刀を抜く……。

鬼斬刃を失ったユミナは、新しい武器を作ること余儀なくされた。

その時、武器に二通りの選択肢が与えられた。

少し前に倒したりオレウスで作る、飛竜刀。

鬼斬刃を失ったランディノスで作る全く新しい武器。

ユミナは……後者を選んだ。

ユミナの手にとられている刀。

刀身が青く蒼く輝いている。

ランディノスをその刀身に閉じ込めたかのような蒼。

型は鉄刀をモデルとしている。

黒い鍔と柄……蒼い刀身。

銘を『変幻刀・蒼』

ギャオギャオ！

イーオスの群がユミナ達に気付いて、接近してくる。

ギャアアッ！

イーオスが1頭ユミナに襲い掛かる。

「ハッ！」

一閃

イーオスは切り裂かれて、絶命した。

「……上位なのに、一撃で倒す威力。最高ね！」

「素晴らしい武器ですね」

ユミナが持つ変幻刀・蒼の持つ力は全くの未知数。

ユミナ自身初めて使い、力を把握してないし扱いきれて居ない。

それでもこの威力である。

「エリカ、行こう!」

「はい」

二人は群に飛び込み、戦闘が始まった。

「ラスト!」

ザシュツ!!

ユミナは最後の一刀を切り伏せ、戦闘が終了した。

素材を剥ぎ取り一息つく二人。

「はあく流石に上位だね……苦戦する」

「そうですね。私も久しぶりできつかったです」

「やっぱりこの刀……凄いよ!」

私まだ全然使いこなせてないけど、この刀は異質の強さを持っている」

「使いこなすために、倒しますか?」

「うん、この刀を強化するのに何がいるか分からないし、採掘と平行して狩ろう！」

「行きますか」

「うん！」

二人は再び進み始める。

それから4時間ほどかけて、狩りと採掘をした。

「日が落ちてきたし、そろそろ帰る？」

「それが良いかもしれませんが。」

夜は霧が発生したり暗かったりして、視界が悪いですから

「じゃ、もどってアイ達と合流しよう！」

「はい」

第六十三話「上位ハンター」（後書き）

ユミナの武器が変わりました！

ランディノスの太刀です。

私の表現力がしょぼくてどんな太刀か分かり難かったと思います。

ぶっちゃけ、刀身だけ蒼い鉄刀と考えて良いです。

まあ、性能は違いすぎますけどね…。

第六十四話「毒怪鳥ゲリヨス」(前書き)

久しぶりの更新となります。

内容は相変わらず駄文ですが…頑張って生きたいと思えます!!

第六十四話「毒怪鳥ゲリヨス」

第六十四話「毒怪鳥ゲリヨス」

あれからユミナ達は無事、拠点で合流して互いに成果を話した。

それからどうするかを話した結果。

すぐにゲリヨスを倒しに行くことになり、
拠点に置いていた荷物を準備して出発した。

「皆、これから別れて探すけど……この通り暗闇や霧で視界が悪い。
だから細心の注意を払って行動して！
見つけたら合図とペイントを忘れないで」

「……はい！」「」

なかなか指揮が板についてきたユミナ。

以前とは違い、的確な指示……3人は心から安心して従う事ができた。

ユミナ達はゲリヨスを探し始めた。

ユミナSide

ふう……あれから一時間くらい経ったかな？

私は皆と別れてゲリヨスを探し続けたが、
現れたのは小型モンスターばかりだった。

しかし、それら全てを相手していたら体力と砥石の無駄なので、
全てスルーさせてもらった。

まあ、試し切りとか色々はもう終わってるしね。

でも……視界が悪すぎるね。

皆大丈夫かな……？

時間が経つに連れて、闇が深まり、霧が濃くなっていった。

無闇に動かないで、ゲリヨスを待っていたほうがいいかな……？

私は足を止め、空を見上げる。

霧と雲で空はよく見えなかった。

私は完全にそこで静止して、静かに目を閉じた。

耳を澄ますと色々な音が聞こえてくる。

こっちの方が色々分かるかも……。

暫く私はこのままの状態で待ち続けた。

……。

不意に。

バサッ

羽ばたく音が聞こえてきた。

……来た。

ドンドン大きくなる音、遂にドシンツと着地する音も聞こえた。

私は静かに目を開け、鞘から変幻刀・蒼を抜き放つ。

暗い闇の中、私の蒼き刀身がキラリと光る。

ズンツ……ズンツ……！！

ゲリヨスはこちらへ向かって歩いてくるのが、足音で伝わってきた。

暗く霧が濃い為、ゲリヨスの全貌はハッキリとしない。

しかし、金色に輝く瞳と、閃光を発する頭部だけはつつすらと見え
た。

ギヤアアアアアア！！！！

ゲリヨスはこちらに気付き、奇声を上げながら飛び跳ね威嚇する。

来る……！！

戦闘開始だ！！

私はゲリヨスの腹下へ移動して、縦に一閃。

ズッ！！

天然のゴム質が斬撃を緩和した。

ゴムの性質上、斬撃は打撃よりは効果が期待できるはずだが。

流石に上位、そこら辺の雑魚と大型では格が違った。

私は振り切った刀を戻し、流れるように足に一閃。

ガキンッ！！

弾かれて、手が痺れてしまう。

なんとか堪えて、刀を手放さなかった。

「……そういえば、ゲリヨスの足は以上に硬いって言ってたっけ？」

それなら、頭部、腹部、尻尾のどれかを狙えば一番いい…。

頭部……は高さ的に届かない。

閃光を封じるために破壊してきたけど、あれはアイに任せよう。

じゃあ、私は腹部か尻尾！！

思い立ったと同時に腹下を斬る。

ズシャツ！！

先ほどより力を込めたので、ちゃんと斬ることが出来た。

ギャツ！！

ゲリヨスは不意に、垂直に飛び上がった。

風圧で私は動けなくなってしまった。

ゲリヨスはそのまま降りてくる。

！？ …… 踏まれる！

私は必死に、横へ飛び転がった。

ズシンツ！！

ゲリヨスは私がさっきまでいた場所に下りてきた。

あ、危なかったぁーっ！？

あんなのに踏まれたら危ないよ!!

私は攻撃と回避を繰り返していく。

……それにしても、皆遅いな。

何してるんだろ……？

戦いながら考えていると、隙が生まれたのがゲリヨスの尻尾にぶつかった。

ドガツ　ゴロゴロ!!

い、痛たた……油断しちゃった。

幸いたいしたダメージにならなかった。

それと、ぶっ飛ばされたおかげで大事なことを思い出した。

「私、合図もペイントもしてないじゃん!？」

それは誰も気付いて来てくれる訳が無い……。

すぐに合図を送る。

ヒュ〜……パンツ!!!

まあ、照明弾みたいなものだけど……視界が悪いけど気付いてくれるかな？

私はポーチからペイントボールを取り出し、ゲリヨスに投げつける。

ベチャ

ペイントの実特有の、独特なおいが漂った。

これで、おいで気付いてくれるだろう……。

さあ、改めて戦闘再開だよ!!

ゲリヨスは飛び掛ってきて、啄ばみ攻撃を仕掛けてきた。

先に動き始めてた私は余裕を持って動くことができ、反撃へと転じた。

「はあっ!!」

ズシャンツ!!

尻尾を切り裂いた。

ギヤアアアアア!!?

尻尾に一撃を入れると、声を荒げて仰け反るゲリヨス。

……尻尾の方が、ダメージ量が大きいね。

私はもう一撃入れようとすると、

ゲリヨスは尻尾を振り叩き付けようとして来る。

私は攻撃を中断して、バックステップで距離をとった。

しかし、ゲリヨスの尻尾が伸びて私の体を捉えた。

ドゴオツ!!

「ツ!? カハツ……………!!」

……………忘れ、てたよ。

ゲリヨス、の……………尻尾は、間合いが……………長い事を……………。

完全に避けたと思って油断していた私は、重たい一撃を受けた。

ゲリヨスはこちらへ向き直し、私の姿を捉える。

変幻刀を支えにして、私は何とか立ち上がる。

ゲリヨスは一歩ずつ歩いて近づいてくる。

私はポーチから、液体が入ったビンを取り出し、開けて飲み干した。

鈍痛が少しずつ引いていく。

私が飲んだのは回復薬である。

痛みが引いていった私は、ゲリヨスの正面から離れて側面へ回り込む。

「たあああ!!」

私の一撃は、翼を浅く切り裂いた。

ゲリヨスは怯むことなく、向きなおして啄ばみ攻撃。

私は前転して、ゲリヨスの足元を抜ける。

立ち上がり様に尻尾を斬る。

ズシャツ！！

ギヤアアアアア！！？

怯むゲリヨス。

私はそこから反転して、振り向くと同時に横へ一閃。

そして、深追いはせずに斬り下がりで後退した。

「ユミナちゃん！！」

そこにようやく仲間たちが駆けつけてくれた……。

ふう……皆、遅いよ！

アイはある程度近づくとそこで止まり、ボウガンを構えた。

キイとエリカの2人は、そのまま私の方へと近づいてきた。

「遅くなりました」

「大丈夫だった？」

「うん、じゃあこれから頑張ろう！！」

「っっはい！！！！」

私、エリカ、キイはゲリヨスを囲むような陣形を取り、アイは遠くから射撃を行う。

機動力がありガードが出来るキイが正面。

エリカと私で左右に分かれた。

ギャツギャツ！！

ゲリヨスはキイに飛び掛る。

キイは身軽に動き回り攻撃をかわしていく。

私とエリカはゲリヨスを追いかけて、後ろから斬りかかる。

鬱陶しそうに尻尾を振り回して、攻撃してきた。

今度は、さっきみたいには行かないよ！！

尻尾攻撃を潜り抜け、切り上げる。

ズシャツ！！

ギヤアアアア！！？

怯み動きが止まるゲリヨス。

ゲリヨスの頭部で弾丸がはじけた。

アイの準備が終わったみたいだ。

アイは頭部に照準を合わせ、次々と引き金を引いていく。

クエ……クエエ……

ゲリヨスは小振りに頭を降り始めた。

……何をやる気？

そこでエリカが慌てたように叫んだ。

「閃光が来ます！？」

クエエエエエエ！！！！

エリカの注意とゲリヨスの閃光は同時だった。

まともに受けた私は、視界を白く塗りつぶされてしまった。

……み、見えない。

眼を擦り、何とか視力を回復しようと努める。

「ユミナ、危ない!!」

エリカの声が聞こえた。

私は咄嗟に後ろへ下がった。

ドガッ!!

痛っ!?

私のこめかみを何かが横殴りに捉えて、思いっきり吹き飛ばされた。

頭がクラクラ、する……思考が、定まらない。

何にやられたの？

「ユミナちゃん、大丈夫!？」

アイの声が近くから聞こえる……。

エリカとアイは閃光を受けなかったんだ。

「……目が見えない。頭が、クラクラするよ」

「尻尾がユミナちゃんの頭にぶつかったの」

尻尾か……そういえばキイは大丈夫なのかな？

「キイは……?」

「閃光を食らって、視力を奪われてるよ」

「大丈夫なの？」

「エリカさんが助けてるから平気だよ」

「そっか、じゃあ大丈夫……夫じゃない！」

今の状態は危険だ、私とキイが閃光を食らって足手まといになる。

その状態じゃ逃げることもままならない。

私自身、さっきのダメージも抜けて無いから。

視力は……ちょっと戻ってきたかも。

「アイ、エリカ達のフォローをお願い」

「でも、ユミナちゃん……」

「私はなら大丈夫。がんばって！」

「……うん、わかったよ」

アイは私から離れていったのが、足音で分かった。

私は全力で回復に努めた。

5分ほどすると、痛みは引いて動けるようになった。

視力も半分くらいは回復した。

起き上がり、辺りの状況を確認した。

エリカがキイを庇いながら防戦一方になっていて、アイはエリカの隙を補うように援護していた。

私は全力で走って、ゲリヨスに近づき一閃。

私の振るった一撃は尻尾に直撃し、ゲリヨスは仰け反った。

「ユミナ！」

「ユミナちゃん！ ……もう良いの？」

「勿論！」

ゲリヨスの注意はエリカから外れて、私に向いた。

「エリカさん、僕も大分視力が戻ったので大丈夫」

「無理はしないで下さいね？」

「はい！」

視力が戻ったキイも復帰した。

それから小一時間戦い続けた。

「はあああ!!」

ザシュツ!!

ギヤアアア……ア……!!

私のはなつた一撃でゲリヨスは悲鳴をあげ、倒れた。

ズシンツ!!

ゲリヨスは全く動かない。

「はあ……はあ……倒したの？」

「動かないしねえ……倒せたのかな？」

「確認してみないと分かりません」

「やっぱり、上位は強いね……」

上から私、アイ、エリカ、キイである。

私達は警戒はしたまま、ゲリヨスへ近づいた。

触っても動かないし、あれほどの殺気などが全て消えていた。

「これは、倒せたのかな……」

なんか呆気無い終わりだった。

ゲリヨスには死んだフリという特性を持っていて、油断したハンターを全身で暴れて攻撃するという。

本当に死んだかどうかは、見た目じゃ判断し辛く油断しやすい。

そして、私達は油断していた……。

ッ！！！！！！

一瞬にして膨れ上がる濃密な殺気。

私達は一瞬動けなかった。

一番近く、背を向けていたキイにその一撃が襲い掛かる。

一番最初に反応し、動くことができたのはアイだった。

「危ないっ！！！！？」

キイに跳び付き、押し倒す。

その背中にゲリヨスの一撃が当たり、キイごと吹き飛ばされる。

「アイ！ キイ！」

私は声を上げた。

「エリカは二人を治療して下がって護りなさい!!!」

「は、はい!!」

私の怒号のような命令に驚いたが、すぐに冷静になり二人の元へ向かった。

ゲリヨスは暴れながら起き上がり、私を睨みつける。

怒り状態である。

一対一の状況下……相手は上位で怒り状態の飛竜。

……。

「……仕方が無い。まだ取って置きたかったけど」

ユミナは自分にとっての最大の切り札を切る。

「カートリッジ・装填^{リロード}!!!」

変幻刀・蒼は、ガチャン! と刀身の背の根元がずれて、開かれた。

私がこの武器を選んだ理由は、……実はもう一つある。

ポーチから小さな紅い弾丸を取り出す。

私は弾丸をそこに込める。

ガチャン!!!

閉じられる刀身の背。

……この武器は何もかもが新しい。

いわば試作品の状態であり、まだ試行錯誤が繰り返される。

そして、狩猟を有利に進めるための新しい技術が詰め込まれた。

まだ、誰一人として知らない技術……。

カートリッジシステム

私はその披見体となる事にした。

……強くなるために!!

私は払うように変幻刀を振るった。

ゴアアッ!!!

刀身を焰が包み込んだ。

そう、このカートリッジシステムとは、
弾丸に特殊な素材を使って作られた新しい属性弾を使う。

それを本体に装填^{ロード}することで、
瞬間的に爆発的な威力と属性攻撃を得ることができる代物である。

ガンランスの砲撃を応用した感じである。

しかし、まだ試作品。

弾丸の質によつて、威力や効果時間が疎らになるし、武器本体にどんな影響が出るかわからない。

狩りに行く度にメンテナンスがいるし、何時壊れるかも分からない諸刃の剣。

だけど、私はそれを選んだ。

強くなりたいから、カイトに追いつきたいから！

私はゲリヨスに縦に一撃を振るう。

「炎ッ！！」

ドガアアアアン！！！！

刀身がゲリヨスに触れると、爆発のように焰が走った。

ギャアアアアアア！？

跳ね上がった威力と爆発にのけぞるゲリヨス。

続けて横に一閃。

ズシヤッ……ボガアアアアン！！！！

切り口から焰が上がる。

圧倒的な力で、状況を一転させた。

シューーッ！！ ガチャン……コロンコロン！

溜まった熱を排出し、使いきった弾丸を吐き出す。

使い切れれば、自動的に弾丸を排出する。

弾丸は貴重な素材を使ってるため、全て使い捨てである。

弾丸の残りは、……あと4発。

出来る限り温存しておきたいが、……そんな余裕は無い！！

この1発で決める！！

私は弾丸を装填する。

ゴオオオオオオ！！！！

爆炎が刀身を包んだ。

「うおおおおお！！！！」

私は打突モーションで間合いを詰めていく。

「轟炎、」

私の一撃はゲリヨスを焼きながら、腹部の奥深くにまで突き刺さる。

「爆碎ッ！！！」

力の限りで太刀を振り払った。

ズガアアアアアアン！！！！！！

ゲリヨスの腹部が爆発し、燃えていく。

クエ……エ……ガアア……ア……

ゲリヨスは爆炎に焼かれながら、今度こそ息絶えた。

「ふう……」

シューーッ！！ ガチャン……コロンコロン！

私は変幻刀を鞘へ戻し、エリカ達のところへと向かった。

エリカは応急処置を既に終えて、戦いを見ていたのか…呆けていた。

「ユミナ……今のは？」

「ん、工房の新技术……つてとこかな？」

「新技术、ですか……？」

「私が披見体をやってるんだ……」。

完成すれば、いずれ全ての近接武器に取り付けられるかもね？」

近接武器限定なのは……現段階じゃ構想すら思いつかないから。だ
そうだ。

そもそもこの技術の実験が可能になったのも、
変幻竜ランディノスの素材が在ったからだ。

それにしても、全力の一発で弾丸一発つて。

……とても燃費が悪いよ！

まだまだ改良の余地が沢山あるって報告しなきゃ。

「2人は無事……？」

「はい、キイの方はアイが護ったので無傷です。

アイは背中を打撲程度で済んでいます」

二人とも気を失って眠っていた。

キイの方は、吹き飛ばされた時に頭でもぶつけたんだろう。

私はアイの方を背負い、歩き出す。

「ゲリヨス剥ぎ取って、帰ろっか！」

「はい」

私たちの初めての上位クエストは、こんな感じに終わりを告げた。

私はドンドルマの町へ帰ると、皆と別れて工房へ向かった。

「親方、いますか？」

「おお、ユミナか！ どうした？」

「『変幻刀・蒼』のメンテナンスと報告です」

「おお、待ってる。刀はこっちで預かるから……報告は後でしてくれ」

親方は刀を受けとり、立てかけるとこちらへ戻ってきた。

「あっちの個室で話しを聞こうじゃねえか！」

「はい」

私達は個室へ入り、変幻刀の報告をしていった。

30分ほど話していただろう。

「……ふむ、確かに色々調整が必要だな」

「沢山素材がいりますかね？」

「ああ、まあここは幾らでもハンターがいるからな！
依頼でも出しておく」

「そうですか。あの、弾丸……できました？」

「ほらよ、3発ずつだけ作れた。後は素材が足りねエ」

私はお金と引き換えに、弾丸を受け取った。

無属性の灰燼の弾丸…デスペアレンス。

火属性の紅蓮の弾丸…エクスプロージョン。

水属性の蒼海の弾丸…オーシャン。

雷属性の翡翠の弾丸…ヴォルテック。

氷属性の白銀の弾丸…アイシクル。

龍属性の漆黒の弾丸…ドラグニル。

「これだけあれば、十分です！」

ポーチに直しながら私は言った。

「まあ貴重だからって惜しまず使えよ！ その方が調整がしやすい」

「はい、分かってます」

私は話しが終わったので席を立った。

「武器は早朝に取りに来い。それまでには終わらせてやるから……！」

「はい！　ありがとうございます！」

私は小走りで宿へと帰っていった。

第六十四話「毒怪鳥ゲリヨス」(後書き)

新要素で新技術、カートリッジシステム。
属性を詰め込んだ弾丸で、瞬間的に爆発的な威力と属性を得ることが出来る。

……、これがあれば狩り…楽になりそうだねえ。
欲しいねえ…。

敵によつて武器を一々変える必要がないしね…。

…まあ皆さん気付いてる人もいるかもしれませんが…。

リリカルなのはA'sのカートリッジシステムを参考にして、
自分なりにアレンジした結果、こうなりました？

……まったくアレンジできて無い気がしますが(^-^;)。
アレってカッコイイですよね!!

…リリカルファンの方々…申し訳在りません<|_|>

さて、もうそろそろこの小説を掲載して、一年経ちますね!

一年前の四月三十日に始まったこの小説…三十日には一周年を記念
して、

番外編?…別名(全く本編関係ない話)を載せます!

ぜひ、見てみてくださいいね?

第六十五話「女王蜂？奇面王？」（前書き）

久しぶりの連続投稿です。

だが、しかし…短いですすみません<（| |）>

第六十五話「女王蜂？奇面王？」

第六十五話「女王蜂？奇面王？」

「わあ〜珍しい依頼があるよ、ユミナちゃん！」

クエストボードを眺めていたアイがユミナを呼ぶ。

「ん、どれどれ？」

「この二つなんだけど〜」

ユミナはアイが指差した二つを覗き込む。

かたや【女王蜂掃討！】

かたや【奇面族の王討伐！】

確かに珍しかった……が！

ユミナは片方、女王蜂クイーンランゴスタの方を見て震えだした。

ガタガタガタ　　！

突然震えだしたユミナを見て驚くエリカとキイは、
何があったのかと近づいてきた。

「あ……………ああ……………ああっ……………!?!?」

「どうしたんですかユミナ?」

「わ、わ私い……………む、むむむむ虫、苦手っ!?!?!」

そういつてクエストボードから思いつきり離れていった。

キイはとりあえず、ユミナの手を掴んで逃げないようにしておく。

「は、離して! 虫が……………虫がああ!?!?」

「ひとまず落ち着きなよユミナ」

「む、虫は……………うう……………ブツブツ」

青褪めた顔でブツブツと呪詛のように呟いていくユミナ。

「どうしたんですかアイ?」

「いやね? 珍しい依頼があるよって教えたの」

「どれですか?」

「じゅ〜」

クエストボードには【女王蜂掃討!】と【奇面族の王討伐!】の

二つが貼ってあった。

「……確かに珍しいですね」

「でしょ？ 珍しいからどっちか受けたいんだけど……。
ユミナちゃん、虫が大の苦手なんだよね」

「確かにあの様子では……」

「ランゴスタとかカントロスとか、怖がって戦わないか。
視界に入れる暇も無く一瞬で殺すかなんだよね」……」

アイは呆れたように笑っていた。

「……2手に分かりますか？」

「2手？」

「ええ、珍しい依頼ですからクイーンランゴスタの方を、私とアイ。
キングチャチャブーの方を、キイとユミナでやりませんか？」

「うーん、大丈夫かな？」

「……多分、大丈夫でしょう」

エリカとアイは、怖がってしゃがみこむユミナの所へ向かった。

「ユミナ、キイ。私とアイでこちらのクエストに行きます」

【女王蜂掃討！】の方の紙を見せる。

「ひいつ!？」

……… 凄い怖がり様である。

アイがユミナの頭を撫でて慰める。

「貴方達はこちらのクエストに行つて来て下さい」

【奇面族の王討伐!】の方の紙をキイに渡した。

「奇面族の王……? キングチャチャブーですか……?」

キイは難しそうな顔をする。

「奇面族は本来がとても強いですから、その王ともなると飛竜種に引けをとらない強さを持つと聞いてます。」

僕とユミナだけで勝てるでしょうか?」

「危なくなれば、逃げてください」

「……… わかりました」

こうしてユミナ達は2チームに分かれて、狩猟に行くことになった。

【女王蜂掃討!】

場所：密林

期限：三日

条件：上位、G級ハンターのみ

報酬：7000Z

詳細

密林に大量のランゴスタが発生している。

きっとこれは女王蜂がいるんだ！

ランゴスタを倒していけば危険を感じて女王も出てくるはず。
がんばってコイツ等を掃討してくれ！

【奇面族の王討伐！】

場所：森丘

期限：三日

条件：上位、G級ハンターのみ

報酬：7000Z

詳細

奇面族が大量に暴れまわって困ってる。

さらにはそいつ等の王様まで出てきたもんだ。
村人は怪我するし、畑は荒らされて困ってる。
どうか王を討伐して村を助けてくれ！

エリカ&アイSide

エリカとアイはユミナ達と分かれたあとに、
早速狩りの準備を始める。

今回は甲虫種を狩る依頼だが、油断は出来ない。

女王蜂クイーンランゴスタは、あまり発見されていないため情報が
少ないからだ。

持っていく道具を選ぶ必要がある。

「回復薬は絶対いりますね……」。

他には……一応、閃光玉を持っていきましよう」

「毒けむり玉とかもどうかな？」

「ランゴスタを倒すのに使えますね……」

「じゃ、もって行くこつ」

「虫ですから、火属性とかが効きますね」

「状態異常にも弱いんじゃないのかな……？」

「クイーンランゴスタの腐食液だけには気を付けて下さい」

「うん、わかったよ」

ある程度準備を終えると、竜車によって目的地を目指した。

ユミナ&キイSide

「ユミナって、虫苦手なのまだ直ってなかったんだね」

「いやいやいや、あんなの絶対に好きになれない!!
イコール、直る訳が無いんだよ!!」

「アハハ……」

「……で、私達が狩りに行くのは？」

ユミナは空気を換えるように真面目に聞いた。

キイもそれに真面目に答えた。

「奇面族の王様、キングチャチャブーだよ。

コイツを誘き出す為に何頭も奇面族と戦わなきゃいけない」

「奇面族かぁ……強いんだよね？」

「うん、知能もとても高いからやり難い相手だね」

「準備は万全にしないと……回復アイテムはいつもより多めにね？」

「分かってる」

いつもはそこまで持っていけない、薬草などをポーチに詰めていく。

閃光玉を作りこれもポーチへいん！

「何か気を付ける事ある？」

「チャチャブーの方は、爆発する罠とか……睡眠ガスとか……」

「キングチャチャブーは？」

「すばしっこくて威力が高い。あと、炎を飛ばして来るから気を付けて」

「了解！ じゃ、竜車に乗って行こっか？」

「うん」

ユミナ達は竜車に乗り、目的地へと出発した。

第六十五話「女王蜂？奇面王？」（後書き）

ユミナは虫に拒絶反応を起こすほど嫌いです！
私も虫は好きじゃないですけど…ね！！

第六十六話「密林・飛甲虫大戦争」(前書き)

連投ですっ!!!

奇跡の三話目!

内容は、短いですけど…。

第六十六話「密林・飛甲虫大戦争」

第六十六話「密林・飛甲虫大戦争」

ブウウウーーンッ！！！！

耳障りな音がそこかしこから聞こえてくる。

エリカとアイの2人はこの依頼に来たことを後悔し始める。

辺りを埋め尽くすほどのランゴスタが飛んでいた。

げっそりとした顔になる2人。

「あはは〜これはユミナちゃんじゃなくても嫌だよ……はあ」

「……帰りたくなりました」

「ユミナちゃん。これ見たら絶対気絶するね〜」

「……仕方がありません。兵を倒さないと女王は出てきませんからね」

それぞれが現実逃避のように呟く。

「まあ、がんばろうか〜！」

「行きますよ！」

アイはその場でボウガンを展開して構える。

エリカは抜刀しランゴスタの群に突っ込んだ。

かなりの数が飛んでいるので、適当に振り回して倒すことが出来るほどだ。

エリカは数匹纏めてなぎ払っていく。

アイは散弾を選び、装填リロードした。

群へ向けて放つ。

ズガガガガガガン！！！！

無数のランゴスタが散っていく。

引き金を引いて散弾でランゴスタを蹴散らしていくアイ。

大剣を振り回しながら、毒けむり玉も使い数を減らしていくエリカ。

「アイ！　ここで倒し続けても埒が明きません。

先に進みながら倒して女王を探しましょう！」

「うん、分かったよ〜」

それぞれ武器を使って、道を開けて進む。

密林の何処に行ってもランゴスタがいた。

まるでおちよくる様に動き回り、攻撃を仕掛けてくる。

苛々とストレスが溜まっていく二人。

「うう……ちよこまかと」

「……鬱陶しいですね」

二人は囲まれて、互いに背中を合わせる形になった。

アイは何か無いかと、辺りを見渡した。

「あ、エリカさん！ あそこの洞窟に行こう〜!!」

あそこなら少しはランゴスタも減ってると思うよ〜」

「そうですね。では、ここを通して貰いましょう!!」

アイは散弾を乱射して、道を開いた。

二人は同時に走り出し、ランゴスタの包囲網を抜けようとする。

数匹のランゴスタが、それを阻止しようと襲い掛かってきた。

「斬ッ!!」

ザシュツ！　ズシヤツ！

エリカが大剣を器用に使い、斬り捨てる。

アイも近づいてくるランゴスタに、容赦なく散弾をぶつ放す。

二人はようやく洞窟の中へとたどり着くと、

物陰に隠れてランゴスタをやり過ごそうとした。

ブウウウーーンツ！！！！

ランゴスタは二人に気付かず、洞窟の奥の方へと飛んでいった。

「ふう………」

ようやく一息つくことが出来て、安心した二人。

「割と倒しましたよね？」

「はい、そろそろ出てきても良いと思うのですが………」

「うん！　じゃあ、探しに行こうか？」

「ランゴスタに見つかりと面倒なので、慎重に動きましょう」

「了解」

二人は洞窟の奥へと進みだす。

薄暗いが、隙間から光が差し思っていたほど視界は悪くない。

見付からない様に慎重に進んでいく。

ブウウウーーン!!

「「!!」」

ランゴスタの羽音が聞こえて、慌てて隠れる。

(1匹見たら)

(30はいると思え……)

アイはボウガンを静かに展開する。

今回はサイレンサーを着けて来てるので、
通常弾程度なら気付かれずに倒せるはずだ。

慎重に照準を頭に合わせて……引き金を引く!

パスンツ!!

見事ランゴスタの頭を打ち抜き絶命させる。

「 ナイスです 」

「 いえいえ 」

しかし、想定外のことが起こった。

ブウウウーーンッ！！！！

大量にランゴスタが出てきたのだ。

2人は慌てて逃げる。

「まさか、仲間が殺されたか分かるのですか!？」

「そんなあ、倒さずに進むなんて無理だよ」

2人は全力で走る。

洞窟で薄暗くて足場が悪いのなんて気にしない。

それどころじゃないからだ。

洞窟内の開けて明るいところに出た。

「はあはあ……はあ、撒きました?」

「はあ……はあ、追っては、無いですねえ……」

ふう……と一息ついて座り込む。

ふと、アイは顔を上げるとそこには。

ブウウウウーーンッ！！！！

巨大なランゴスタがいた。

「……あ!？」

「ん…? どうしまし」

エリカがアイの様子がおかしいことに気づき、顔を上げてアイが見ている先を見た。

「な!？」

二人は慌てて立ち上がり武器を構える。

幸い、まだ敵はこちらに気付いていなかった。

(大きい……通常のランゴスタの十倍以上はあります……)

(ど、どうする!?)

(戦うしかありません。私が戦いますので、援護をお願いしますね)

(うん、わかったよ。回りのランゴスタも私に任せて)

(頼みます……では)

「「行きますか!」「」

クイーンランゴスタとの戦闘が開始された。

エリカがまず間合いを詰めて、一閃。

ズシャン!

ギィィギィィィ!!??

奇声を上げる。

どうやらこちらに気付いたようだ。

ゆっくりと方向転換し、8の字を描くように飛び始めた。

周りにいたランゴスタがエリカを襲う。

ズガガガガガガン!!!

アイの放った散弾でランゴスタは一掃された。

クイーンランゴスタは、のっそりとエリカに突進した。

あまりに大きすぎて、避けれず大剣で防いだ。

「ぐう……重いです!!」

のっそりとした動きだったが、かなりの威力を秘めていた。

クイーンランゴスタは体を句の字に曲げて、腹を後ろへ伸ばして振り出す。

そして、腹突き出して液体を放出した。

「! ……腐食液ですか!？」

エリカは咄嗟にその場から飛び、難を逃れた。

ジュワアアア……！！

先ほどまでエリカがいた場所が、腐食液によって溶かされていく。

「これは、喰らう訳にはいきませんね」

ランゴスタが集まってきた。

（腐食液には、ランゴスタを呼ぶ効果もあるんですか……）

パンパンパンパン！！

ランゴスタが次々と撃ち抜かれていった。

エリカはクイーンランゴスタだけに集中することにした。

「斬ッ！！」

ズシャッ！！

「破ッ！！」

ドゴオッ！！

クイーンランゴスタを滅多切りにしていく。

ずっとエリカが攻撃し続けているわけではない。

クイーンランゴスタも反撃はするのだが、
エリカを捉える事も止める事も出来ない。

腐食液が出された時に、ランゴスタが寄って来るが、
全てアイが撃ち落している。

アイの方にも余裕ができてきたのか、クイーンランゴスタにも攻撃
する。

バチイッ！！

クイーンランゴスタの動きが止まり、地面へ落とされた。

「エリカさん、今です！」

アイが麻痺弾でシビレさせたのである。

「はあああああ！！ 斬ッ！！！」

最大限まで溜めた、溜め切りでクイーンランゴスタを一刀両断した。

周りのランゴスタは頭を失って、混乱し始めたようだ。

ランゴスタはアイが的確に撃ち落していく。

「ラストです〜！」

パンッ！

最後のランゴスタの頭を吹き飛ばし、討伐完了！

「終わりましたね。さあ剥ぎ取りましょうか」

「そうですね〜！ 早く帰りましょう〜」

「やはり、飛竜種よりは弱かったですね」

「うん、閃光玉も使うこと無かったですね〜」

二人は剥ぎ取りを終えると、拠点へ戻り竜車を待った。

こうして、二人の女王討伐は呆気無く終わったのであった。

第六十六話「密林・飛甲虫大戦争」（後書き）

クイーンランゴスタ呆気無いですね…。

あまり書くことも無かった…というか私に文才が足りないだけです
ね^^

次話は、ユミナ&キイのキングチャチャブー討伐です。
これも多分短いですね。

第六十七話「強敵、奇面族の王」（前書き）

第六十四話「毒怪鳥ゲリヨス」を改編しました。
カートリッジシステムの弾丸の所に、

“無属性の灰燼の弾丸：デスペアレンス。”
を追加しました。

効果は威力だけを爆発的に上げる、威力重視の弾丸です。

第六十七話「強敵、奇面族の王」

第六十七話「強敵、奇面族の王」

ユミナは空を見上げた。

空には大きく綺麗に輝く満月と、満天の星空で彩られていた。

「……なんで夜なの？」

「キングチャチャブーは夜の方が遭遇率が高いらしい」

「そうなんだ……」

納得するように頷くユミナ。

「それで肝心のキングチャチャブーは、

森丘のエリア5を縄張りにしていて動かないらしい」

「なら、それを追い払えば良いのね？」

「うん。道中、チャチャブーが沢山いると思うから気をつけて」

二人はエリア5を目指して進んでいく。

チャチャー

不意に変な声が聞こえてきた。

「……………キイ？」

「僕じゃないよっ！？ 多分、奇面族じゃないかな？」

「奇面族……………って、あの変なの？」

ユミナは指を差しながら言う。

キイはその先を目で追っていくとそこには。

変な踊りを繰り広げている小型生物がいた。

小型生物はチャチャーと鳴き、奇妙なお面みたいなのを身につけていた。

「……………あれ、なんじゃないかな？」

「そう、……………あれなのね」

ユミナは心底呆れた風と言った。

すると、奇面族はこちらに気がついたのか。

トコトコと歩いてきた。

「……ユミナ油断しないでね。見た目アレでも、強いから」

「うん」

ユミナ達の目の前までくると、奇面族は止まり踊りだした。

敵意は無いように見える。

お面も奇妙だが、踊りも奇妙だった……。

「何がしたいの、これ……?」

「敵意が無いみたいだけど……」

チャチャャー!!

不意に目の前の奇面族が大声を上げた。

ガサガサ!!

周りの茂みから複数の奇面族が飛び出してきた。

「……囿? まんまと騙されたみたい」

「完全に囲まれてるね」

ユミナとキイは自然と背中合わせになり、それぞれの武器を構えた。

チャツチャャー!!

先ほどの奇面族の号令で、一斉に襲い掛かってきた。

ユミナは一番近くにいたのに斬りかかる。

「ハッ!!」

バキンッ!!

ユミナの一撃はお面に直撃して砕けた。

奇面族は素顔が見られる前に退却して言った。

「キイ、お面を狙って!!」

「了解!!」

次々とお面を打ち砕いていくユミナとキイ。

奇面族はあっと言う間に全滅した。

「さて、王様の元へ向かおう!!」

「うん」

二人は並んで、エリア5へ向かっていく。

途中、奇面族も含めた小型モンスターに何度か襲われたが、全てを全滅させている。

エリア5

ユミナ達は慎重に進んでいく。

壁に隠れて、中の様子を窺う。

「ねえ、どれが王様？」

「さあ……一番目立つ奴がじゃない？」

「アレかな……」

洞窟の中心、月明かりに照らされている所に奇面族の集団がいた。

奇面族は円を描くように集まっています、

その中心には一際変なお面をつけた奇面族がいた。

「あれって……高級肉焼きセットじゃない!？」

「あ、ほんとだ! 倒したら手に入るかな？」

一匹の奇面族が、こちらを向いた。

チャチャー!

今の大声で気付かれましたよ。たようだ。

数十匹は居るだろう奇面族が全員こちらに気付いた。

もちろん王様も気付いただろう。

「キイ……これはちょっとやばいんじゃないかな？」

「そうだね……」

「私が周りの奇面族を相手にするから、キイは王様をお願いね？」

「了解」

「じゃ、道を開けるよ……！」

ユミナは言い終わると同時に、群に突っ込む。

「はあ……！」

ドカバキドゴォ……！！

太刀を振り回し、お面を砕いて道を作っていく。

「キイ！」

完全に道が開いたところで、キイは王様に飛び込んでいった。

チャチャ、チャー……！！

キングチャチャブーは迎え撃つように声を上げた。

キイは勢いよく剣を抜き放つ。

「はぁ！！」

チャー！！

ガキンツ！！

キイの剣とキングチャチャブーの剣？ がぶつかった。

キイは高速で連撃を放っていく。

キンキンキン！！！！

その全てを防がれる。

「え、嘘お……！？」

（コイツ、滅茶苦茶強い！？）

今度はこっちの番とばかりにキングチャチャブーが剣を振り回す。

「くっ！！」

剣と盾を使い防いでいく。

（一撃一撃が、なんて威力なんだ！！）

キングチャチャブーの一撃を受け流し、左へと避けるキイ。

ズザアアーーーーッ！！

チャーーーーー！！

カランコロンカラン ドガドガドガドガン！！！！！！

頭を揺さぶり炎をあたりに撒き散らす。

小規模な爆発が連続して起こる。

（なんて爆発だ……喰らったらやばい）

チャチャー！！

キングチャチャブーは、先ほどとは比べ物にならない速さで突進してきた。

（は、速っ！？）

ガキンツ！！

咄嗟に盾で防ぐキイ。

衝撃を殺しきれずに後退りさせられた。

（それになんて威力……でも、負けられない！！）

キイは正面からキングチャチャブーと打ち合う。

（力は敵が上、しかし速さはこちらが上だ！）

キイは一旦距離をとった。

しかし、それがいけなかった。

ドガァーンッ！！

キイが下がると同時に足元が爆発したのである。

「ぐはっ!?!」

爆風で吹き飛ばされるキイ。

チャチャァー！！

キングチャチャブーは嬉しそうに踊る。

(畏が仕掛けられてるなんて………何時の間に!?!?)

何とか体勢を立て直すキイ。

キングチャチャブーは追い討ちをかけるように突進してきた。

「くっ………避けれない!?!」

キイが諦めかけたところに。

「カートリッジ・装填^{リロード}デスペアレンス」

ドゴオッ!?!!

ズガガガアアアアアン!?!!

全てのチャチャブーを倒してきたのか、

ユミナがキングチャチャブーの背後に現れた。

ユミナはキングチャチャブーを思いっきりぶっ飛ばし、岩壁に叩き付けた。

シューーッ！！ ガチャン……コロンコロン！

「……ん、威力重視なだけはある」

ユミナは満足げだ。

「……ゆ、ユミナ？ 今のは何!？」

キイは困惑していた。

キングチャチャブーを一撃で無力化してしまった。

キングチャチャブーはお面だけを残して既に、ここから逃げたようだ。

「工房の新技术だね……カートリッジシステム」

「カートリッジシステム？」

「詳しいことは、帰ってから皆と一緒に話すよ」

「うん、わかったよ」

キイはユミナに手を差し出され、それを掴み起き上がる。

「さあ、帰るじつ。」

「うん」

こうしてユミナ達のキングチャチャブーとの戦いは終わった。

因みに、ユミナは帰ってから仲間内だけにカートリッジシステムの話をした。

大変興味を持たれて、なかなか寝させて貰えなかったのであった。

第六十七話「強敵、奇面族の王」（後書き）

キングチャチャブー…強いですよね〜！

あの攻撃力とか反則ですよね…。

因みに、ユミナのカートリッジシステムは、

仲間以外の人にはあまり知られてはいけないのです。

試作品ですしね…。

第六十八話「砂漠の急流」

第六十八話「砂漠の急流」

ユミナ達は今、砂漠に来ていた。

今回、ユミナ達が受けた依頼は水竜ガノトトスの狩猟。

熱く日が照る岩盤地帯を歩くユミナ達は、
水竜ガノトトスが棲み付いている川を目指していた。

「あ、暑い〜」

「暑いね〜」

「二人とも、少しだらしないですよ」

「まあまあエリカさん、砂漠ですから仕方ないですよ」

暑さにやられてだれるユミナとアイ。

それを注意するエリカにエリカを宥めるキイ。

四人は暑さで、ガノトトスと遭遇する前に既に疲れていた。

砂漠地帯よりは少しだけマシな岩盤地帯。

しかし、熱された岩盤と照り返す日差し……と、これだけでも十分に暑かった。

まあ火山地帯などと比べると涼しいぐらいなのだが。

「水辺はまだあ……？」

「うーん、きつとあと少しだよ」

「それさっきも聞いた気がするよ……」

エリカはポーチに仕舞ってあった地図を見た。

「いえ、アイの言うとおり後少しで到着します」

「ほんと！？ じゃあ急いで向かおう！！」

ユミナはそう聞いて、アイを連れて走り出した。

それを見てエリカとキイは苦笑した。

「全く……急いでも仕方がないですよ」

「あはは、ほんとですね」

二人も後ろを追いかけていった。

アレから5分ほどで、ガノトトスが棲み付いている川に到着した。

ユミナとアイは走ったからだろうか、汗びっしょりでぐったりとしていた。

「み、水う……！」

「す、直ぐそこだよユミナちゃん……！」

「やれやれ……です。走ったりするからですよ？」

エリカは自分の水筒に入っている水を二人に飲ませる。

二人も水筒は持っているのだが、

すっかりと頭から抜け落ちていた二人。

「ぶはっ……助かった……！」

「ん……生きてます……！」

「二人とも少し大げさ……でもないか」

キイは呆れたように笑った。

ユミナは大きな川を見つめて呟く。

「これ、ガノトトスが棲み付いてて危険なんだよね」

「そうですね。だから、依頼で私達が来たんです」

「ガノトトス倒したら危険じゃなくなるよね？」

ユミナは当たり前前のことを聞いてきて、3人は困惑する。

暑さでやられてしまったのかと、心配する3人。

3人を代表してエリカが答える。

「当たり前じゃないですか……」

「じゃあ、危険じゃなくなったら水遊びが出来るんだね!？」

「「「「へ……!？」」」」

キラキラと輝く目で見つめられて、思わず目を逸らす3人。

(ユミナちゃん暑さでやられちゃったのかな?)

(そうかもしれないね。ちょっといつもと違って変です)

(狩猟に影響しなければ良いんだけど……)

3人はこそこそと話をする。

ユミナはよく分かっておらず、頭を傾げる。

「いや〜暑いからね。水遊びしたいよね!」

「う、うん。そだね〜終わったら存分にしなよ〜」

「アイ達も一緒にするんだよ？」

「「「えっ!?!」「」」

驚愕の事実にも固まる三人。

(どうしよう! どうすればエリカさん?)

(落ち着いて下さい。多分、終わる頃には忘れるはずですよ)

(僕、男だよ!? 忘れてなかったらどうすれば良いの!?)

「じゃあ、とつとと終わらせよっか!?!」

ユミナはやる気満々に立ち上がり、背中の太刀を抜いた。

「キイ、釣りカエルよろしくね?」

「は、はい!」

キイは慌ててポーチから折りたたみ式の釣竿と、餌の釣りカエルを取り出して準備を始める。

ガノトトスを地上へ挙げる方法は二通りある。

一つは今みたいに吊り上げる。

もう一つは、音爆弾、徹甲榴弾、狩猟笛の高周波などで、怒らせてから出て来るのを待つのである。

キイは準備が出来たのか、釣り糸を川へと垂らす。

釣れるまでの間、する事がない三人はそれぞれの準備をしておく。

手持ちのカートリッジを確認していくユミナ。

目を閉じ精神を集中させていくエリカ。

弾丸の確認と最初に使う弾丸の装填ウローテをするアイ。

静かに時間が経っていく。

びくんっ

竿が少し反応すると、その後一気に飲み込まれていった。

「うおわ!?!」

必死に引きずり込まれないように抵抗するキイ。

「皆、来たよ! ちょっと手伝ってくれない!?!」

「了解!」

3人は竿の空いてる部分を持って引っ張った。

かなりの力で一瞬でも気を緩めたら全員引き込まれてしまう。

「皆、せーのっで一斉に引き上げよう!」

「「「はい！」「」」

「せーのっ！ー！」

タイミングを合わせて全力で引き上げる。

一瞬、ふわりと釣竿が軽くなってガノトトスを釣り上げる事が出来た。

急に陸地に引きずり出されて、のた打ち回るガノトトス。

「狩猟開始！」

「「「了解！！」「」」

陣形が展開されていく。

今回はユミナが正面に立ち囲となる。

エリカとキイが左右に分かれて、ガノトトスの斜め後ろに立つ。

アイは離れたところから射撃。

ガノトトスはようやく体勢を立て直し、むくりと起き上がった。

正面に立つユミナを見据えると、上体を逸らした。

水ブレスの予備動作である。

ユミナは水ブレスに備えて、少し腰を落としていつでも動けるよう

にした。

ガアッ！！

ガノトトスの体内によって圧縮された高圧水流が、
高速でユミナへと迫る。

「ふっ！！」

ユミナは左へ動いてそれを冷静に対処した。

しかし、その頬には一筋の冷汗が流れていた。

ユミナはちらりと先ほどまで居た位置を確認する。

そこは鋭利な刃物でゴッそりと抉り取られたようになっていた。

(なんて威力なの……喰らったら真っ二つね)

ガノトトスの水プレスは性質上、
衝撃ではなく高速で飛来する高圧水流による斬撃である。

喰らえば即死……よくても致命傷だ。

どちらにしても死ぬ。

第二波がユミナに迫っていた。

今度は右方向へとかわす。

エリカとキイがガノトトスの足元まで行き、攻撃し始める。

「斬っ！！！」

「たあああ！！！」

2人の一撃は爆ぜた。

エリカは一撃、一撃と重くしつかりと重ねていく。

キイは超高速で剣を振るい、ダメージを増やしていく。

火属性による一撃はガノトトスの足の鱗が爆ぜ、
肉体へと斬撃が届いていく。

血飛沫が上がるが、ガノトトスは気にした様子もなくユミナを狙う。

ガアッ！！

二、三と飛来していく水ブレス。

ユミナの居る地面が削られていき、足場が悪くなっていく。

離れていたアイはユミナへの注意を逸らすように、
ガノトトスの頭部を狙って射撃を始める。

バンバンバン！！

アイが放った通常弾は鱗に弾かれてしまったが、
何枚か鱗を砕き注意を引くことに成功した。

アイはボウガンを背負い直し、ガノトトスの動きをよく観察する。

ガノトトスはアイへ向きなおすと、前方へと飛び跳ねて腹滑りで進んでいく。

アイは全力で走ってガノトトスの巨体から逃れる。

そのまま走り続けて距離をとった。

エリカとキイはガノトトスの腹下へと潜り込んだ。

ユミナはガノトトスの頭に斬撃を叩き込んで注意を自分に向けた。

続いて切り下がり距離をとる。

エリカとキイの二人も、足へと攻撃を再開する。

ガノトトスへと少しずつダメージを蓄積させていく。

ユミナは頭を狙い、アイは鱗が少ない腹などを狙う。

ガノトトスは首を伸ばしてユミナへと噛み付こうとした。

ガキンッ!!

ガノトトスの強靱な顎は獲物を捕らえきれず、歯を鳴らしただけだった。

バックステップでかわしたユミナは、

一気に間合いを詰めて太刀を振るう。

ズバツ！！

弾かれることなく、鱗ごと切り裂いた。

血が噴出し、ユミナの変幻刀の蒼き刀身が血に濡れる。

その一撃に怯んだガノトトス。

その隙を見逃すユミナではない。

ユミナは練気を全身に纏い、鬼刃切りをガノトトスの顔面に叩き込んだ。

その連撃は鱗を穿ち、砕き、切り裂いた。

ユミナはバックステップで距離をとった。

（久しぶりに練気を使ったけど……使えた！）

ユミナは考えた。

（練気とカートリッジシステムを併用すれば、
絶大な威力になるんじゃないか……？）

ガノトトスは体勢を立て直し、ユミナに向かって水ブレスを吐く。

それを左へと転がってかわすユミナ。

（そうと決まれば、試してみよう！！）

ガノトトスの隙を窺う。

エリカ達の攻撃により、ちょうど隙が生まれた。

（ナイスタイミングね皆！！）

「カートリッジ・装填ローテヴォルテック！」

ガチャンッ！！

ユミナは翡翠色の弾丸を込める。

刀身から迸る電撃。

ユミナはガノトトスとの間合いを詰めて、全身にまた練気を纏う。

「はああああ！！ 紫電一閃！！」

真一文字に振られ、翡翠の軌跡を描く変幻刀。

ズザアアアアアアンッ！！！！！！

壮絶な音が鳴り響き、雷光が辺りを白く塗りつぶした。

雷撃がガノトトスを焼いて、斬撃はガノトトスを切り刻んだ。

ガアアアアア！？

絶叫を上げて仰け反るガノトトス。

ユミナの思惑通り、絶大な威力を放ったそれは、ガノトトスの頭部をボロボロにした。

シューーッ！！ ガチャン……コロココロン！

熱を外へと出し、力を使い切った弾丸が排出された。

（凄い威力……想像以上だね）

ユミナは変幻刀を構え直して、ガノトトスの出方を窺った。

ガアッ！！

ガノトトスは水辺へ向かって走り出した。

水辺に近づくと飛び込んだ。

（しまった！ 逃げられちゃった）

ガノトトスは一度潜ると、

飛び上がるように出て来て水ブレスを横へ放った。

ユミナ達はそれを必死に避けて、

誰も負傷することなくやり過ごした。

ガノトトスはそのまま潜っていき、どこかへと消えた。

「逃げられちゃったね……」

ユミナは三人に近づきながら言った。

「そだね」

「多分、地底湖の方へと逃げたと思います」

「あそこは寒いよね……ホットドリンク持って来てないよ」

皆は苦笑した。

「今が暑いくらいだからきつと丁度良いよ」

「温度差で体調を崩さないようね」

ユミナ達4人は、ゆっくりと地底湖へと向かっていった。

第六十八話「砂漠の急流」(後書き)

久しぶりの鬼刃斬りです……型はアレンジされてますけど。
練気というものを思い出したので使ってみました！
次回、決着です！

第六十九話「水竜ガノトス」(前書き)

今まで出が一番短いかもしれませんが。

分かりませんが…。

前回の一話で終わらせて置けばよかったかもしれませんがね。
サブタイトルも微妙です。

少し前に春休みが終わって学校が始まりました(> <)
だから、更新速度がまた落ちるかもしれませんが。
すみません。

第六十九話「水竜ガノトトス」

第六十九話「水竜ガノトトス」

グアアアアアアアアアア！！！！

地底湖を泳いでいたガノトトスは、

自らの獲物目掛けて水中から飛び出した。

獲物目掛けて飛来して行くガノトトス。

獲物 ユミナ は構えていた太刀を鞘に収めて、
その場から全力で離れた。

ズシンッ！！

ガノトトスの巨体が地面に飛び込んで、轟音を立てた。

ズルズルと体を這わせて前へ滑っていくガノトトス。

体勢を立て直すと、ガノトトスは既に囲まれていた。

ユミナ、キイ、アイ、エリカの4人四方から。

正面に立つユミナは、ガノトトスへと最初に斬りかかる。

続いて、エリカ、キイと斬りかかってアイも援護を始める。

ガノトトスは煩わしそうに、体を回して尻尾を振り回す。

ユミナ達は近づきながらも体制を低くしてそれをかわした。

自分達のそれぞれの間合いまで近づくと、武器を抜き放つ。

ユミナは頭を狙い、太刀を脳天に振り下ろした。

ポロポロだったガノトトスの頭部を弾かれること無く切り裂いた。

ガアアア!?

血飛沫が舞い、切り裂かれて怯むガノトトス。

そこに懐に潜り込んでいたキイとエリカが、

それぞれガノトトスの足へと武器を振るった。

幾度と無く繰り返されたその攻撃は、

傷ついた鱗を砕き、切り裂いて難なく通った。

足に限界が来ていたのか、ガノトトスは体制を崩し倒れ込んだ。

ズシンッ!!

砂埃を巻き上げ倒れる。

「キイ！」

ユミナはチャンスだと思い、キイへと合図を送る。

了解、と呟いたキイはポーチから円盤状の物を取り出して、倒れているガノトトスの足元へ設置する。

設置するとそれを踏み抜き起動させる。

ガン　バチイ！！

展開されたシビレ罠はガノトトスを捕らえ、神経系の毒で身動きを封じた。

無防備となったガノトトスを四人は全力で攻撃を始める。

アイは火炎弾をリロードして照準を合わせ引き金を引く。

キイは高速で剣を翻し、連撃でガノトトスを切り裂いていく。

エリカは溜め切りのモーションで力を溜めていく。

ユミナは紅い弾丸を変幻刀へ装填し、焰の一撃を繰り出していく。

激しい猛攻にボロボロになっていくガノトトス。

グアアアア！！

ようやく罠から逃れたガノトトスは、

体勢を立て直して水辺へ向かって走り出した。

「逃がさない！」

先回りしていたユミナが立ちはだかる。

「カートリッジ・装填^{リロード} エクスプロージョン！！」

紅い弾丸を込めて、全身に練気を纏った。

「はあああああ！！！！ 火龍一閃！！」

ユミナは全力で太刀を真一文字に振るい、ガノトトスの足を斬りつける。

ドゴオオオオオオン！！！！

爆炎がガノトトスの足を切り裂き燃やす。

グアアアアアア！！

ガノトトスはバランスを崩しかけたのを、何とか持ちこたえて走っていった。

水際まで行くと一旦止まり、水中へと飛び込んだ。

「アイ！」

「わかってるよ〜」

名前を呼ばれたアイは既に準備完了だった。

ボウガンを構えて、ガノトトス目掛けて弾を放っている。

一発の徹甲榴弾がガノトトスの脳天を捉え爆ぜた。

ビクンと身震いした後、水中が血で紅く染まった。

「え？」

声を上げて驚くユミナ。

他の皆も呆然としてその光景を見ていた。

ガノトトスは腹を上にして力無く浮き上がってきたのである。

ピクリとも動く気配が無い。

「ま、まさか……」

他の三人も同じ結論へたどり着いたようである。

「死んじゃった？」

アイの放った徹甲榴弾が最後の止めとなって、

ガノトトスは水中で死んでしまったのだ。

「これじゃあ、剥ぎ取れないよ!？」

「どどどどど、どうしようユミナちゃん!？」

「……ハア。困りました」

「僕たちの苦勞って一体……」

「」「」「……」「」「」

沈黙が訪れて重く暗い雰囲気か辺りに漂う。

その空気を破り、最初に声を出したのはユミナであった。

「……帰ろうか？」

「」「うん」「」

四人は肩を落としながらとぼとぼと来た道を帰っていく。

地底湖の洞窟を出ると光が痛いほど差してきた。

アイはふと思い出したように呟いた。

「……ユミナちゃん」

「……何？」

「水浴びは良いの？」

「……もういい」

「そっか」

四人はドンドルマへと帰還していった。

次の日、ドンドルマ工房にて。

「親方」

「おお！ ユミナじゃねえか」

ユミナは工房の親方に会いに来ていた。

用件は変幻刀・蒼のことについてだ。

「これ装填数増えませんか？ 一発だけじゃ厳しいですし。それに一々入れていると面倒だから装填したまま、必要な時だけに使うなんて出来ませんか？」

そう尋ねられて考え込む親方。

「……ふむ、よし！ 任せておけば数日中には必ず完成させておく
「できるんですか!？」

「応！ ちょっと形が変わるけど気にすんな」

「ありがとうございます!」

ユミナはお礼を言うと、背中の変幻刀を親方に手渡す。

そして宿屋……仲間がいる所へ説明しに帰っていった。

第六十九話「水竜ガノトス」(後書き)

話の内容が微妙な今回でしたね…。

もっと努力が必要ですね！

カートリッジシステムが少しパワーアップするみたいです。
次回をお楽しみに！

モンスターハンター ～漆黒の劫火～ 一周年記念短編（前書き）

この小説を書き始めてもう一年ですね^^

時の流れは速いものです。

微妙に成長した作者ですが、

駄文なのはあまり変わってないです（>|<。）

これからも完結に向けて頑張るので、

できれば完結までお付き合いいただけると幸いです。

今回は、一周年記念ということで……特別に短編と一問一答を書きました！

一話完結の短編ですが、興味がある方は是非読んで下さいね？

全く興味が無いって言う方は……次の本編まで待つてね？

では、さっそく行ってみましょう!!

モンスターハンター 漆黒の劫火 一周年記念短編

モンスターハンター 漆黒の劫火 一周年記念短編

「第一回ハンターズ雪合戦!!!」

ある日、大闘技場にハンターたちが集められていた。

そう……カイトの手によって（無理やり＝半強制的に）

集められた面々は、いずれもお互いに知っている顔ぶれだった。

ユミナ・アリアス

アイ・フローズ

エリカ・リヴィア

キイ・レディルト

剣聖 ジークハルト・ミラ・ディバイン

閃光 レイ・オルビス

魔弾 デイア・ハーツ

シズク・シイナ

カイト本人を含めた九人が集まっていた。

カイトは全員集まったことを確認して口を開いた。

「雪合戦をしよう」

「雪……」

「……合戦？」

ユミナとエリカが首を傾げながら復唱した。

シズクを除く全員も聞き覚えが無かったようだ。

「チーム名は、リトルb……グハアツ!？」

「……お兄様、そのネタはNG」

何かを言おうとしていたカイトは、

シズクの飛び膝蹴りにより強制的に黙らされた。

顔面に飛び膝蹴りを食らったカイトは、
そのまま後ろへと倒れこんでいった。

「雪合戦ってなんですか？」

皆を代表してキイがシズクに問いかけた。

「……チームに分かれて雪玉を投げ合う。

雪玉に当たると失格で、先に全滅した方の負け」

皆はシズクの説明を聞き納得したように頷く。

「だが、雪なんてここにはないぞ？」

「心配は無用だ！」

いつの間にか復活していたカイトがジークハルトの疑問に答える。

「雪が無いのなら、創れば良いのさ」

そう言って指をパチンと鳴らした。

すると、ユミナ達へ大きな影が差した。

上を見上げると一面真っ白な塊が無数に落下してきていた。

ユミナは咄嗟に武器を抜いて、

ポーチから紅い弾丸カートリッジを取り出した。

「カートリッジ・装填ロード エクスプロージョン！」

炎を纏った一撃を繰り出した。

「火竜一閃!!」

ジュウツ!!

ズドドドドド!!

一番手前の雪の塊は蒸発させたが、

無数に落下してくる雪塊全てを蒸発することは出来ず、カイトとシズクを除く全員が雪に呑み込まれた。

大闘技場は余すところ無く大量の雪が積もり、一面が白銀の世界へと一転した。

晴れていた空は厚い雲に覆われて、白い結晶を降り積もらせていく。

「……お兄様」

「なんだ？」

「……やりすぎ？」

「大丈夫だろ」

ドゴォーン!!

「ほらな？」

したり顔でシズクに告げる。

雪の中から火柱が上がったのである。

シューーッ！！ ガチャン……コロンコロン！

ユミナの武器から弾丸と熱が排出される。

雪の中に出来た空洞からユミナ達が出てきた。

「カイト、やり過ぎだよ！？」

「とつても冷たかったね」

「死ぬかと思った……」

「初めて雪に潰されました」

「カイト……覚えとけよ」

「これがカートリッジシステムですか……」

「ああ、ちゃっかりシズクだけ助かってるよ」

カイトへと非難を上げる皆。

「さて、それじゃあチーム分けを発表する」

「聞いちゃいねえ……」

ジークハルトは深く溜息をついた。

「まあ、チーム分けするとパワーバランスが崩れるから。お前等全員バトルロワイヤルな？」

「あれ？ カイトとシズクは？」

カイトとシズクが組み込まれてないことに気付いたディア。

「俺たちはAチームだ。後、Bチームもある」

「Bチーム？」

皆は辺りを見回して、首を傾げる。

「コイツ等の事だ！」

カイトはまたもや指を鳴らした。

そこに現れたのは……ギアノスが無数に現れた。

モンスターの出現にみんな驚いたが、襲ってこないのを見ると武器を直した。

「さて、ルールの確認をするぞ」

ルール

雪玉が一発当たるとアウト

アイテム使用可

武器（人意外なら）使用可

Aチーム、Bチームにやられてもアウト

制限時間は50分

「よし、じゃあ……ミッションスタートだ！」

全員の足元に魔法陣が現れて、その場から全員消えた。

「……お兄様？」

「転送の魔法だ……ランダムに配置される。公平だろ？」

「……うん」

「あと、少し狭いから幻術と結界の併用もしなきゃな」

「……観戦？」

「そだな、暫くは観戦しとこ……面白くなったら乱入だ！」

「……うん！」

ジークハルトSide

「くそっ……吹雪いてきてやがる」

俺はカイトに知らない所に飛ばされてから、

かれこれ十分近くは歩き回っていた。

本当にここは大闘技場なのか？

なんかすげえ広くなってる気がするし、地形が変わりすぎてないか？

俺は帰れるかどうか心配になってきた。

「はぁ……寒い。いくら耐えられるからって、

流石にホットドリンク無しはキツイ」

他の奴等はこの寒さ、大丈夫なのか？

……人の心配よりまずは自分だな。

それに今は敵みただしな。

深く積もっている雪に足をとられながらも、吹雪の中を懸命に進む。

暫く歩くと人影が見えた。

「誰だ！」

声を上げるとこちらに気付き、振り返った。

……しまった！……気付かれる前に雪玉を当てればよかった。

目を凝らして相手の出方を窺う。

吹雪いて良く見えなかったが、相手はエリカだった。

「お前か……」

エリカSide

「お前か……」

不味いことになりました……。

よりもよってジークハルトさんに遭遇するなんて。

相手はかの剣聖と謳われた伝説の二つ名持ち。

自分より遥かに実力が上だ……。

どうでしょうか……？

ジークハルトさんは出方を窺ってるのか、
ジツと身構えたまま動く気配が無い。

……背を向けたら、待っているの敗北の二文字。

何とかここを切り抜けたいところです。

アイテム使用可と言ってましたが……碌に準備する暇も無かったから、

まともに使えるようなアイテムが浮かんでこない。

今もっているアイテムは、薬草、砥石、けむり玉、モドリ玉、こやし玉。

何でこんなに玉系アイテムが多いのか、ですか？

非常時に備えて必ず一個は持つようにしてるんです。

……これを使えば、最悪逃げられる可能性が少し上がりますが……。

剣聖相手には通じないかもです。

……交渉に賭けてみましょう。

「ジークハルトさん」

私呼びかけると驚いたように返してきた。

「……なんだ？」

「私と」

ギヤアギヤア！！

交渉を始めたところにギアノス集団が乗り込んできました。

……モンスターにやられてもアウトでしたね。

「ちっ……エリカ。ここは一旦手を組まないか？」

「そうですね。私も丁度そう言いたかったところです。

それから、この後も私達2人になるまで手を組みませんか？」

「ふむ、……厄介な奴等が多いからな。まあいいだろう！

……俺の背中には任せませ！」

「はい！」

私達は武器を抜いて、囲んでいるギアノス達に斬りかかった。

ユミナSide

「寒いねえ〜ユミナちゃん」

「ん、そだね〜」

私はアイとの距離が近いところへ飛ばされた。

遭遇した私達はお互いに手を組むことを決めて、二人で吹雪の中を彷徨っていた。

「そういえば、アイは何かアイテム持つてる？」

「私？ 私はねえ、入れっ放しだった閃光玉と徹甲榴弾と拡散弾がある」

「そっか。私は……弾丸とペイントボールカートリッジしかないや」

「うーん、閃光玉って人に向けて良いのかな？」

「……今回は良いんじゃないのかな？」

閃光玉は……失明しないかな？

多分、大丈夫だよな？ 視界がこんなに悪いし……。

それにしても寒い……防具無いから余計に寒い。

今は普通の私服だけ……武器はみんな持ってきてるけどね。

ホットドリンクが欲しいよ！

私達は少しでも暖まる為に、話しながら進み続けた。

暫く進むと。

「わっ！？」

「アイっ！？」

アイの足元が崩れて、穴の中へと落ちていった。

私は心配して、穴の入り口へと近づく。

穴は意外に深くて3メートルくらいはあった。

「はっ！？ 殺気！」

私は殺気を感じてバツと後ろへと跳んだ。

私がいた場所に無数の雪玉が飛んできた。

「私の雪玉を避けるなんて、流石だねえ」

「ディアさん！」

アイを穴に落とし、私を襲ってきたのはディアさんだった。

「ボウガンで撃つんじゃないから当て難いねえ」

そうは言ったが、雪玉は私を的確に狙っていた。

「魔弾の二つ名は伊達じゃないですね……」

「そりゃねえ、これで食べてる訳だし。君もそうだよね」

「ですね。……私はまだまだ弱いですが」

「武器の性能はトップレベルじゃないかな？」

「G級レベルと言っても遜色ないね」

「……ありがとうございます」

褒められたけど……私は武器だけじゃ意味無いんです！

私は雪玉に備えて身構える。

ディアさんも私の隙をつこうと様子を窺ってくる。

硬直状態が続き、吹雪の音だけが辺りに響いた。

最初に動いたのは私だった。

「カートリッジ・装填リロード エクスプロージョン！」

ポーチから紅い弾丸カートリッジを取り出して装填する。

それと同時にディアさんが雪玉を三つ投げた。

ガチャン！

装填口が閉じられ装填したのを確認すると、私は瞬時に右隣へと跳んだ。

私は太刀の刀身を水平にして構える。

そこに雪玉の第二波が飛んできた。

「瞬炎必閃！」

私は炎を刀身の背に集め、爆発させて太刀を振るった。

飛躍的に剣速を上げ、全ての雪玉を打ち落とした。

ディアさんは驚いたように声を上げた。

「ほえ〜。そんなことも出来るんだ………?」

「……出来る様になったのは最近ですけどね」

私は練習に練習を重ねて、属性の形状変化……はまだちょっと難しいけど、

太刀に纏わせている分は動かすことが出来るようになった。

いつか、属性を放出して飛ばすことが目標の一つだ。

「私が魔弾と呼ばれるようになった所以を教えてあげようか?」

ディアさんは不意にそんなことを言ってきた。

魔弾と呼ばれる………所以。

とつても気になる。

「それはね………変幻自在に弾を操り、決して逃れることが出来ない
“魔法の弾丸”と言われていてそこから来てるんだよね」

「魔法の弾丸………」

「ありとあらゆる方法を使ってでも弾を当てる。…それが私の魔法」

そういつて、ポーチの中に手を入れる。

ディアさんが取り出したのは、閃光玉だった。

閃光玉！？

私が気付いた時には、すでに放られていた。

カツ！ ピカアーーーーー！！！！

私の視界は真っ白に塗りつぶされた。

アイSide

いたた……油断しちゃった。

私は3メートルくらいの深さの落とし穴に落ちてしまった。

今何とか頑張って登ろうと試みているところ。

壁の取っ掛かりを使って登っていく。

私は登っていると外が眩く光った。

「うつ……眩しい〜」

これは、閃光玉かな？

って!？ ユミナちゃんは持ってないはずだから敵の!

ユミナちゃんが危ない!!

私は急いで登って外へとでた。

そこにいたのは視力を奪われたユミナちゃんと、

敵であるディアさんだった。

ディアさんがユミナちゃんへ雪玉を投げようとする。

私は急いでボウガンを展開し、二人の間に散弾を放った。

ズガガガガガン!!

雪玉は散弾に削られてユミナちゃんへ届くことは無かった。

「おりよ？ 出て来てたんだ〜」

「はい、師匠!」

「にゃはは……師匠は止めてよ、なんかくすぐりたいからさ〜」

「師匠は師匠です! でもユミナちゃんはやらせません!」

「うむ! 勝負! ……っていいところだけど、

私は逃げさせてもらおうよ〜。じゃね!」

ディアさんは玉を足元へと投げた。

プシューーーーーー!!

大量の白い煙が視界を遮った。

暫くして煙が晴れると、ディアさんは既にいなかった。

「ん〜、危機は去ったみたいだね〜」

私はユミナちゃんのもとへと向かう。

キイSide

キンッ！ キンッ！ ガキンッ!!

双剣と双剣同士がぶつかり合う。

目の前にいるのはレイさんだ。

僕は白い雪の中を彷徨っていると、レイさんに遭遇して戦闘になった。

ヒュンヒュン!!

残像すら残さない速度の斬撃が僕を襲う。

僕は咄嗟に後ろへと下がったため当たる事は無かった。

「……武器による人への攻撃は禁止じゃなかったんですか？」

「安心してください。峰打ちです」

全く安心できないよ……峰打ちでも痛いんですからね？

というか峰打ちならいいのかよ！？

実力が段違いで違いすぎる……勝てるわけが無い。

だから、逃げようにも相手は閃光の二つ名を持つ最速のハンター。

逃げ切れるわけも無い。

あれ、僕これ詰んでんじゃね？

「戦闘中に考え事なんて、余裕ですね」

「いやいやいや、全然余裕なんて無いですからっ！」

喋りながらも目まぐるしく剣が動いていく。

数度と撃ち続けているが、相手には余裕が垣間見える。

せめて何とか相打ちには持ち込みたいけど……。

何か方法が無いかと戦いながらも頭をフル回転させる。

「……本当に余裕ですね？ では、もう一段階上げて行きましょう」

「え……なっ!？」

急にレイさんの速度が跳ね上がった。

咄嗟に僕はしゃがんだ。

僕の頭の上をレイさんの剣が薙いでいった。

これ、峰打ちでも危なくね？

僕は振り返りながら剣を体ごと跳ね上げて下から叩きつける。

しかし、レイさんの体が掻き消えて僕の剣は空を斬った。

「そこだ!」

続けて右へ薙ぎ払うと、ガキンと剣同士がぶつかった。

「……良い反応です」

「ありがとうございます」

そういつて互いに距離をとった。

しかし、そこが僕の誤算だった。

閃光相手に距離をとったのは不味かった。

一瞬にして間合いを詰められて気付いたら吹き飛ばされていた。

僕は雪の中を転がっていき、氷塊にぶつかると止まった。

レイさんはそのまま近づいてくると、雪玉を作って軽く僕に当てた。

「私の勝ちですね」

「……そのようですね」

するとどこからかカイトの声が響いてきた。

【キイ・レディルト脱落。撃破者はレイ・オルビス】

どうやら僕の脱落を知らせるためみたいだ。

「脱落した場合はカイトさんが知らせるみたいですね」

「どうやらそうみたいです」

あれ、僕負けただけ……この極寒地帯に終了まで放置ですか？

レイSide

私はキイ君を倒した後、休む間もなく先へ雪の中を進んでいた。

ある程度進むと私は立ち止まった。

「……居るんでしょう？ 出て来て下さい」

「にゃはは〜。バレてたか」

私は振り返るとそこにはディアがいた。

私は直ぐに剣へと手を伸ばす。

すると、ディアは慌てたように私を止めた。

「ちょ、ちょっと待ってってば！ 私は別に戦いに来たわけじゃないよ〜」

「…何のようですか」

戦いに来たって訳じゃないのなら、交渉でしょうか？

「キイ君を倒したんだって？」

「そうですね。私が倒しました」

「ふうん、カイトの言ったことは本当だったんだ。

それじゃあさ、私と手を組まない？ ちょっと手強いのが沢山でさ〜」

「……」

私は少し考えた後に頷いた。

「他の人たちを倒すまでは味方になりましょう」

「うん、よろしくね」

私はディアと協定を結んだ。

吹雪がまた一段と強くなってきた。

この中を探すのはしんどいですね。

カイトSide

ふむ、予想通り手を組む奴等が出たな。

それにしても……キイの奴が脱落か。

意外に早かったな。

「シズク、俺たちもそろそろ行くか？」

「……うん、そだね」

後ろの方で雪ダルマやかまくらを作って遊んでいたシズク。

何か満足そうにしていた。

滅茶苦茶楽しんでるな……。

俺は苦笑しながらシズクの頭をぽんぽんと撫でた。

「楽しいか？」

「……うん」

「そいつはよかった。それじゃ、行くぞ」

「……うん」

シズクを連れて俺は進んでいく。

さて、どいつから会いに行こうかな？

ジークハルトSide

俺はエリカと手を組んでから、モンスターの群をひたすらに倒していた。

これがまた倒しても減らないんだわ……。

絶対にカイトの仕業だな。

エリカに背中中は任せているが、この数は流石にしんどいかな？

「エリカ、閃光玉が何か持っていないか？」

エリカは目の前のギアノスを斬り捨ててから、俺の問い答えた。

「残念ながら持ってません」

「そうか……。けむり玉なら有るんだが、走るか？」

俺も自分のギアノスを相手にしながら話す。

「そうですね。私は走っても大丈夫ですよ」

「じゃ、やるぞー！」

俺はけむり玉を足元に投げる。

大量の白い煙が辺りを包み込む。

エリカと一緒に走って、モンスターの群から遠ざかっていく。

群が見えなくなるまで遠のくと走るのをやめた。

「ふう……ようやく休め」

殺気を感じて体を横にずらした。

雪玉が隣を飛来して行った。

「　　ないようだな」

「誰ですか？」

エリカが辺りを警戒しながら聞いた。

「にははは、仕留めそこなったね」

「実力行使です」

声が聞こえた方には、殺る気満々の二つ名持ちが二人いた。

よりによってこの二人のコンビかよ……。

実力的にも厳しいだろ！

レイが剣を抜いた。

「オイオイ、武器は禁止じゃねえのかよ？」

「峰打ちです」

「いや、駄目だろ!？」

俺のツツコミを無視して、レイは俺たちの間合いへと入り込んできた。

「打ッ!！」

それを遮るようにエリカが大剣の腹を横に振るった。

ガキンツ！！

レイは双剣を交差してそれを受け止める。

「……良い一撃です」

「撃ツ！！」

大剣を振り上げて叩きつける。

その一撃は簡単に避けられてしまい、エリカの大剣が空を斬った。

「閃光の方は任したぞ！ 俺は魔弾の方を戦る！！」

「了解です」

エリカはそのままレイと戦い、俺はディアの方へと間合いを詰めた。

「にやははくそうくると思ったよ？」

ディアは余裕綽々に俺にそう告げてきた。

ふん、予想しようが関係ねえ！

接近すれば俺の方が有利！

「……私なんの準備もしてないと思う？」

ディアはそう不敵に笑い、交代しながらポーチを探る。

遅えよ！！

俺は大剣を力一杯振るう。

ズボツ！！

当たる直前に俺の足元が抜けて、俺は穴へと落下していった。

「ちよっ…… うおおおおい！？」

かなり深かったのか、落下の衝撃が半端じゃないほど強かった。

ちっ、やってくれるぜ！

だがこんな落とし穴程度じゃ俺は止められないぜ。

俺は直ぐに落とし穴から出ることが出来た。

辺りを見回してみるがディアの姿が無い。

「にはははっこっちだよっ！」

ディアはいつの間にか氷塊の上に立っていた。

「ここまでこれるかな？」

俺は氷塊に近づいていく。

「はっ、こんなの登るまでもねえええ!!」

「え？ ちよっ……待つて……」

俺は懇親の一撃を氷塊に向けて放つ。

ズガンッ!!

氷塊は砕けて、ディアが落下してくる。

それにあわせて追撃する。

「貰ったあああああ!!」

「なっ……!!? ……なぐんてね」

驚いたのもつかの間、いつも以上に不敵な笑みを浮かべたディア。

ディアは何時の間にか持っていたのか、雪玉を沢山投げしてきた。

「うわっ!?!」

俺は慌てて後ろへと跳んだが、

着地の際に氷に足をとられて倒れてしまった。

そこでディアはポーチから投げナイフを無数に取り出して、

俺に向けて全て投げつけてきた。

カカカカカカッ!!

投げナイフは全て俺の服に刺さり、動きを封じられてしまう。

「チエックメイト」

ディアは一際大きな雪玉を顔面目掛けて投げつけてきた。

ドゴオツッ!!

ぐはっ……こ、こいつ!

「てめえ!!! 中に石を入れてやがったな!？」

「おりよ? ……何のことかな」

口笛を吹きながらそっぽを向くディア。

畜生、しらばっくれるつもりだな。

【ジークハルト・ミラ・ディバイン脱落。撃破者はディア・ハーツ】

そこにカイトの声が聞こえてきた。

畜生、負けちまった。

カイトの声はそこで終わらず、続けて驚くことを告げた。

【エリカ・リヴィア脱落。レイ・オルビス脱落。両者相打ち】

「あちゃ〜。レイ負けちゃったんだ。やるねエリカ」

あの閃光と相打ち？

どんな方法を使ったんだアイツ……。

雪を被っている二人は互いに話していた。

「最後の一撃。とても良き作戦でした」

「いえ、それでも相打ちでしたから……」

「私を相手に相打ちなんですから、もっと喜んで欲しいです」

「そうですね……ありがとうございました」

何か知らないが、残ったのはユミナとアイとディアだけか……。

普通に考えれば、ディアが有利なんだが。

カートリッジシステムって奴が、唯一ディアに対抗する術だな。

「なっ！？ ちょ……なんでこんなところにいるのっ！！」

ディアが驚いたように叫んだ。

俺はそちらを向くとそこには、シズクがいた。

シズクはディアに反撃する暇も与えずに、

雪玉を当てて脱落させた。

【ディア・ハーツ脱落。撃破者はシズク・シイナ】

ユミナSide

いつの間にか、私とアイ以外の人が脱落してしまっていた。

残りは私とアイだけみたいだけど……。

「エリカちゃん凄いよね〜。あのレイさんと引き分けなんだもん」

「そだね。エリカは本当に強いね〜」

残りが私達だけなら、私達は戦わなければならない。

「じゃ、戦おうか？」

「うん、全力で戦うよ！」

私は太刀を鞘から抜いて構える。

アイも私から距離をとりボウガンを展開する。

静寂が場を支配した。

暫く続いた静寂を打ち破ったのは、予想外の雪玉の嵐であった。

「っ！？ カートリッジ・装填リロード オーシャン！」

蒼い弾丸カートリッジを込めて足元へ突き刺して、
上へ目掛けて振りぬいた。

溢れる水が冷気で凍りついて、私を護る楯になった。

アイはなす術もなく雪玉に当たってしまった。

【アイ・フローズ脱落。撃破者はシズク・シイナ】

……これ、全部シズクがやったんだ。

規格外の雪玉の数に驚く私。

不意に、冷たいものが首筋に当たった。

「……………私の勝ち」

振り返ると嬉しそうなシズクがいた。

【ユミナ・アリアス脱落。撃破者はシズク・シイナ。
全員全滅したため雪合戦は終了とする】

あ、あれ？

私負けちゃった……。

シズクSide

あれからお兄様が全員を元の場所へと呼び戻した。

他の皆は疲労と温度差でダウンしている。

それにしても雪遊び……とっても楽しかった。

いつか、また、したいな。

お兄様も楽しそうに笑っているし……。

私はとても嬉しい。

「うん、皆お疲れだな！ 楽しかったしまだ第二弾でも……」

「……………もういいよ！」「……………」

「あれ？ お気に召さなかったか？」

お兄様も同じ気持ちみたいだ。

みんなはしたくないみたいだけど……。

こうして皆と遊べたら良いな……。

「シズク、楽しかったか？ またしような？」

お兄様は私にそう聞いてきた。

だから私は笑顔でこう返すの。

「……うん！」

Fin ～終わり～

「椎名兄妹と鈴花 漣の【何でも斬って、答えるよ。一問一答】
ナー！」

漣「おはよう、こんにちは、こんばんわ！ 作者の鈴花漣と」

カイト「お手伝いのカイト・シイナ」

シズク「その妹のシズク・シイナ」

漣「この三人による【何でも斬って、答えるよ。一問一答コーナー！】」

カイト・シズク「イエーイ！！」

漣「さっそく私のもとに届いたお便りを紹介するよ！」

カイト「何々？ …… P N：アルバトリオンさんからのお便りだ。

この小説は何時完結するんですか？」

漣「ありゃ？ いきなり終わりの話し？」

…… まあいいや。えっと今のところ未定ですが、
今年中には完結するかもしれないね？」

シズク「……できるの？」

漣「さあ？ 予定は未定ってね」

カイト・シズク「（駄目だこりゃ……）」

漣「次は…… P N : K E Nさんからのお便りだね」

シズク「……えっと、この小説はモンハンらしくないですけど良いんですか？」

漣「別に良いのだ！ ……さ、次行ってみよう！」

カイト・シズク「（え？ それだけ！？）」

漣「次は…… P N : 青い物体さんからのお便り！」

カイト「ふむ、え……ランディノスって何？」

漣「新種・ドスランポスの統率個体・能力は古龍並の

この小説のオリジナルモンスターって思っていてくれたまえ！」

カイト「適当だな……オイ」

シズク「……仕方がない。駄目漣だから」

漣「そこ！ 聞こえてるからね。次はPN：白い悪魔さんから」

シズク「…………エリカの仇って何？」

漣「うむ、新種のオリジナルモンスターかな？

詳しくはWebで！ ってなんでやねん！！」

カイト・シズク「（自分でいって自分で突っ込んだよ！？）」

漣「次々次！ PN：なのなのさんからのお便り…。

え〜と、カイトって何者なのかな？」

カイト「俺か？ 俺は地球という星で生まれた普段は穏やかな心を持つが、

それが怒りにより目覚めたとき、スーパーな感じのアレになる…………」

シズク「…………お兄様はお兄様」

カイト「…………だそうだぞ？」

漣「PN：固定砲撃台さんからのお便り」

カイト・シズク「（無視！？）」

漣「伝説級の二つ名持ちって何か言い難いです。
何か他に呼びかたないんですか？」

カイト「ふむ、これはもう普通に二つ名持ちで良いんじゃないか？」

漣「それは、つまらない!!」

カイト「そんな理由で否定かよ!？」

漣「ふふ、略して“伝名”ってところね!

まあ読者の皆様に言い案があったら教えてね?」

シズク「…………結局人任せ」

漣「PN：白い悪魔の嫁の金髪さんからのお便り」

カイト「随分と具体的なPNだな……」

漣「【プーーーーー】』『プーーーーー』『《プーーーーー》」

カイト・シズク「(何があった!?)」

漣「……というのは冗談で、カートリッジシステムについて教えてください」

漣「カートリッジシステムとは……」

カートリッジ
弾丸に特殊な素材を使って作られた新しい属性弾を使い、
リロード
それを本体に装填することで、

瞬間的に爆発的な威力と属性攻撃を得ることができる代物。

ガンランスの砲撃やスラッシュアックスの属性ビンを
応用して作られたもので近接武器限定である。

それは遠距離武器は現段階じゃ構想すら思い浮かばず、
そもそもこの技術の実験が可能になったのも、
変幻竜ランディノスの素材が存在したからである。

弾丸の質によって、威力や効果時間が疎らになり、
思索段階のためまだ武器本体にどんな影響が出るかは未知数。

狩りに行く度にメンテナンスが必要で、

何時壊れるかも分からない諸刃の剣。

弾丸を使い切ると溜まった熱を排出し、使いきった弾丸を吐き出す。

使い切れば、自動的に弾丸を排出する仕組みになっている。

弾丸は貴重な素材を使ってるため、今のところ全て使い捨てである。

現段階では装填数は一発が限界。

しかも、使うときに装填しなければならぬという欠点もある。

弾丸の種類は……

無属性の灰燼の弾丸…デスペアレンス。

火属性の紅蓮の弾丸…エクスプロージョン。

水属性の蒼海の弾丸…オーシャン。

雷属性の翡翠の弾丸…ヴォルテック。

氷属性の白銀の弾丸…アイシクル。

龍属性の漆黒の弾丸…ドラグニル。の六つだけである」

カイト・シズク「（長文ごめん！！）」

漣「PN：カイト大好きさんからのお便り」

シズク「むう……！！！」

漣「ふっふっふ……シズク？（ニヤニヤ）」

シズク「……なんでもない（プイッ）」

カイト「お前等仕事しろよ……」

漣「はいはい。えと、カイトの使う【飛焰流】って何ですか？」

カイト「ん、俺のあれのことか……」

漣「【飛焰流】とはカイトの師匠である一代目当主の

焰 悠飛によつて作られた武術。

血筋とかに関係なく真に強きものだけが会得できる。

焰が主体な技が多い。

現在、七代目までいるがカイトは五代目にあたる。

カイトは飛焰流のほんの一部しかまだ見せてないから、

実力は未だ不明だよ」

カイト「次は、PN：ロリロリハンターズさんからだ」

シズク「……焰 悠飛って一体誰ですか？」

漣「おっ！ 丁度言いタイミングだね。

焰 悠飛はカイトの師匠で飛焰流一代目当主で開祖。

カイトのものと世界？ の住人で暇だからって、

カイトを送ってきたお茶目なところもある」

カイト「傍迷惑極まりないな！」

漣「本当は作者が書いたかった小説の主人公だったんだけど……。

その小説は見送りになって、今回サブとして名前だけ登場したんだよ！

その小説はいつか書きたいなと思っているね！！」

カイト「PN：筋肉革命さんからのお使い」

シズク「恋愛ってタグが付いてたけど……ヒロインって本当にユミナ？

てか、ユミナと誰の恋愛なの？」

漣「ふむ、ユミナに痛恨の一撃がHitだね

因みに、最初はカイトとの恋愛の予定だったけど……」

カイト・シズク「けど？」

漣「シズクのあまりの可愛さにちょっと見送りって言っか……。
ぶっちゃけ、恋愛のタグに意味は無いって言っか……」

カイト・シズク「つまり？」

漣「恋愛的観点で見ると、シズク×カイトだね」

カイト「……だそうだぞ？」

シズク「……／／／／（テレテレ）」

漣「さて、時間が終わりへと近づいてきましたね」

カイト「次が最後のお頼りになるのか……」

シズク「……少なかったね」

漣「実際少ないし、さて最後の人行ってみよー！ー！」

漣「PN：エリカの仇さんからのお便りです」

漣「この小説を完結させた後は何を書くんですか？

続編ですか？ それとも……まったく別の新作ですか？」

カイト「完結後か……」

シズク「……終わりなんて考えたくないね」

漣「……ん、完結後は続編なんてのも考えていますが、

全く別の新作のアイデアとしてあったものを書いてみるのも良いですね。

まあ、結局のところ未来のことはまだ分からない……ですね」

カイト・シズク「（うまく纏めたつもりだよこの人！？）」

漣「さて、お別れの時間がやってまいりました！」

カイト「俺たちはひとまず先に帰るから」

シズク「……後は一人で頑張って」

漣「ん、了解」

漣「さて、今回は一周年記念短編を最後まで見ていただいた皆様。

本当にありがとうございます。

この一年間頑張ってやってきましたが、

ここまでやってこれたのも皆様のおかげです。

これからも頑張って行きたいと思います。

なので、宜しければ最後までお付き合いください。

それでは今回はこれで終わりです！

ではまた次回お会いしましょう!!」

モンスターハンター ～漆黒の劫火～ 一周年記念短編（後書き）

次は1000話……ていうか、1000部？

まで行ったら記念短編をまた一話掲載したいと思います。

これからもよろしくお願いしますね？

今回は、あの眠鳥との激戦を繰り広げたいと思います。

お楽しみに！！

それではまた次回

第七十話「眠れる鳥と迅速の竜」(前書き)

久しぶりの更新です。

お待たせしてすみません。

前回、ヒプノックと言ってましたが、少し変更しました。

ヒプノック&ナルガクルガでお送り致します。

第七十話「眠れる鳥と迅速の竜」

第七十話「眠れる鳥と迅速の竜」

「2体同時討伐ですか……？」

「うん、君たちがやってくれないか？」

いま私は、ギルドマスターに依頼を頼まれていた。

なにやら、樹海で大型モンスターが2頭現れたため、上位クラスのハンターに討伐して欲しいと。

それで、知り合いの私達に依頼が回ってきたのである。

しかし、2体同時討伐。

しかも、モンスター同士の相性がすこぶる悪いのである。

「眠鳥ヒブノックと迅竜ナルガクルガですか」

「うん、難しいようなら他の人に頼むけど……」

行けるかな？

……うん、行かなきゃ強くなれないね！

「……その依頼、私達が引き受けます」

「ありがとう。依頼内容を確認するね？」

討伐対象は、眠鳥ヒブノックと迅竜ナルガクルガの2頭。

場所は、樹海。期間は……5日。行き帰りを含めたら二週間ほどかな？」

5日か……ちゃんと作戦を立ててからいかないとね。

「じゃあ、頑張ってね」

「はい！」

さてと、皆に報告しないとね。

私は、少し離れて座っていた皆のところへと戻った。

そして、依頼内容を話し、作戦会議へと移っていた。

「5日という短い期間で、強敵2頭の討伐だけど……。
どうでしょうか？ みんな具体的な作戦はある？」

まずは、アイの方を向いて聞く。

「うん、私達はどっちとも戦った事がないよね。」

「あっ！でも、ランディノス戦の時に、ナルガクルガみたいなのは戦ったね。」

「うん、イメージは大体あんな感じでいいのかな？」

「じゃあ、問題は戦ったことも見たこともないヒプノックの方かな。」

「エリカは、どちらかと戦ったことは？」

「ナルガクルガとは、交戦したことはあります。倒してはいませんが。」

「ヒプノックの方は全くないですね。」

「そっか、エリカは本物のナルガクルガとは戦った事があるんだ。」

「ナルガクルガは、とにかく速かったです。攻撃も鋭いものばかりで苦戦しました。」

「ランディノス戦の時のイメージのままじゃ、少し危ないかもしれない。」

「ヒプノックはどうなんだろう？」

「学園で少しだけ学んだような気がするんだけど……。」

「キイ、ヒプノックの生態というか……とにかく何か覚えてない？」

「うーん、……眠鳥との由来通り、体内に睡眠袋という内臓器官を持っている。」

そこで生成された睡眠ガスを、口から吐き出すこと眠らせて獲物を仕留める。

……僕が覚えているのはコレぐらいかな」

ああ！ 思い出した。

確かにそんな感じのことが資料に載っていた……気がするよ？

片や相手を眠らせて、片や凄く速さで攻めてくる。

2頭を同じ場所で同時に相手したら確実に負けるね。

……この作戦しかないかな？

「作戦は決まったよ」

私がそう告げると、みんなは静かに耳を傾けてきてくれた。

「同時に相手をする事だけは絶対に避けたい相手。

だから、誰かが一人囿になって、ヒプノックを引きつけて置こう。その間に残りの人が、急いでナルガクルガを討伐。

討伐したら、囿と急いで合流。そのままヒプノックを討伐しよう」

みんなが驚いたように目を見開いた。

「ユミナちゃん、その囿は誰がやるの？」

アイが私のほうを心配そうに見ている。

あーら、もしかしてみんなお見通しかな？

「この場にいる全員は、ヒプノックとの交戦経験がない。だから誰が行っても変わらないけど、ナルガクルガの方はそうじゃない。」

エリカは交戦経験があるから、ナルガクルガのほうへ行くのは決定。大丈夫？」

「はい、任せてください」

エリカは、微笑みながら頷いた。

「残りで囷に向いているのは、武器の関係上キイかアイの2人なんだけど」

アイの武器はライトボウガンで、今回キイの武器は双剣である。

2人とも囷に向いてるけど……。

「今回は私が囷になって、ヒプノックを引きつけるよ」

みんなはやっぱりといった顔で私を見てきた。

「ナルガクルガは速いからね。キイのスピードとアイの援護が必要でしょ？」

だから、私がヒプノックをひきつける。大丈夫、無理はしないから」

「本当に？ 約束だよ！」

アイが心配そうにそう言ってきた。

「ユミナはすぐに無茶ばかりしますからね」

「そうだね、油断は絶対に駄目だよ？」

エリカがそう告げて、キイがそれに合わせる。

「わかってるって。じゃあ、みんなそれぞれ準備をしてまたここに集合ね」

私が解散を促すと、みんな席を立ってそれぞれ準備をしに行った。

私も今回は、念入りに準備しとかなきゃ。

困るにあたって、回復薬を多めに、他には狂走薬があれば便利かな？

さてはて、今回も無事に帰ってこれるかな。

準備を終えた私達は、さっそく竜車に乗って樹海を目指した。

竜車の中では、みんな戦いに備えて軽く睡眠や食事をとったりしていた。

数日以上掛けて、ようやく樹海にたどり着いたころには、時間帯は既に深夜を過ぎていた。

真っ暗な樹海は不気味な雰囲気醸し出していた。

時折何か光って見えるのは、大雷光蟲などの光によるものだろう。

あと、光と言えるものは、木々の間から偶に差す月や星の光程度である。

空がもう少し開けたところに出れば明るくなるかもしれない。

それまでは、視界的にこちらが不利か……気をつけなきゃね。

「それじゃあ、みんな。今から作戦通りに動くから、頑張ってるね」

「はい、ユミナも無理だけはしないで下さいね？」

「わかってるって！　じゃ、行ってくる」

私は、ヒブノックを探すためにみんなと離れた。

ヒブノックが居るだろう場所は、エリア1、2、4、5、6、7だね。

ナルガクルガも大体同じかな、まあエリア1には来ないけど。

出来ればエリア1ですっと引きつけて置きたいな。

今私が居るところは……エリア1を少し外れた場所だ。

まずは、一番居そうなエリア4を目指そう。

私は少し急ぎ足で、鬱蒼と生い茂る草木の中を進んでいく。

十数分ほど進むとエリア4へと辿りついた。

そこは、大きな湖みたいな場所があり、空が開けていて明るかった。

「いた……」

丁度そこで水を飲む、ヒプノックの姿を目に捉えた。

私は静かに近づき、ポーチからペイントボールを取り出し投げつけた。

ベチャと音を立てて破裂すると、ペイントのみ特有の独特なにおいが広がった。

クエ？

ヒプノックはようやく近くに敵が居るということに気が付いたのか、辺りを見回して首を傾げていた。

今がチャンス！

このまま大きな一撃を叩き込んで、私という存在を意識に刻み込む！

「カートリッジ・装填^{リロード} エクスプロージョン！」

武器に装填していた紅い弾丸^{カートリッジ}を起動させる。

ガチャンと音を立てて起動し、刀身は真紅の炎で包まれた。

「爆撃一閃!!」

刀身を包んでいる炎を爆発させるように巨大化させ、油断しているヒプノックへと叩きつけた。

ドゴオオオオン!!!

ヒプノックの背中に叩き込んだ一撃は、その橙色の毛や七色の羽を焼き焦がした。

クエエエエエエ!!??

突然の奇襲に驚き怯むヒプノック。

シューーッ!!　　ガチャン……コロココロン!

使用された弾丸が煙と共に排出され、地面へと転がっていく。

私は、一撃だけ加えると後ろへさっと下がって、武器をしまった。

そして、相手の出方を窺う。

(これで私という存在を刻み付けることが出来た。

後は、相手の出方を窺い攻撃を見切り、注意を私へ全てひきつけるだけ)

私は、どんな攻撃でも対処できるように体勢を整えて、ヒプノックを食い入るように見つめ続ける。

ヒプノックは私のほうを向くと、跳んだ。

私は飛び掛ってきたヒプノックの左側へと逃げた。

ポゴンツとヒプノックの足で地面が少し陥没した。

(凄い威力……喰らったらひとたまりもない)

ヒプノックの発達した足から出る一撃は、地面を陥没させていく。

私はそれを淡々とかわし続ける。

足場が悪くなっていく中、私はその攻撃を見切ることに成功した。

(この攻撃はもう大丈夫なはず、不意打ちさえじゃなければ)

ヒプノックは、距離を詰めて嘴で啄ばみ攻撃を仕掛けてきた。

大型の鳥竜種でありがちな動きは、今更改めてみるほど変化はなかった。

私はそれを、ヒプノックの股下を潜り抜けるようにしてかわした。

ヒプノックが追撃するように体を半回転させて、尻尾を叩きつけるように振った。

しゃがんでそれをやり過ごした私。

そのまま転がるようにヒプノックとの距離を離れた。

(後は、睡眠プレスぐらいかな……少し多めに距離をとっておこう)

私は、大きく距離をとってヒプノックの攻撃を待った。

ヒプノックは、体を震わせると上体を大きく逸らした。

そして、そのまま頭を振り、白い霧状のプレスを吐いた。

プレスは放物線を描きながら私のほうへと飛んでくる。

私はプレスを余裕を持ってかわした。

「コレがプレス。少し大きいね……避ける時は余裕を持ったほうがいいかな」

ヒプノックはそのまま体を揺すりプレスを吐いてきた。

それをかわすと、ヒプノックは飛んでこちらへと突っ込んできた。

ぶつかる事はなかったが、巻き起こった風圧が私の体勢を崩した。

慌てて体勢を立て直すと、再度ヒプノックと向き合った。

(目立った技はないね。警戒するのはプレスとキックだけ。

後は他の鳥竜種と変わりはない)

そう結論付けた私は、武器へと手を伸ばす。

決して鞘から抜くことはなく、相手の出方に合わせて体勢を整えた。

「今からは、こちらからも攻撃するから」

私はそう言って、ヒプノックが動くのを待った。

エリカSide

ユミナと分かれた私達は、現在ナルガクルガと交戦中です。

戦っている場所はエリア5で、ペイントをつけるとそのまま戦闘が始まりました。

暗闇にまぎれるようなナルガクルガの体毛は、とても見難くて戦い難いです。

私達は少し、ナルガクルガの速さを甘く見ていました。

キシャアアアア!!!

ブオンとナルガクルガは、私に飛び込みながらその手についている刃を振るう。

私は、咄嗟に大剣で受け止めたが、相手の方が力が上で、思いつきり吹き飛ばされた。

追撃してこようとするナルガクルガに左からキイが突っ込んだ。

双剣を振るい、ナルガクルガの刃翼を斬りつけていく。

だが、あまりの鋭さと硬さで傷つけることは敵わなかった。

アイも遠くからナルガクルガを射撃している。

ガンナーは相手との距離を見極め、位置を選ぶことが重要だ。

特にこのナルガクルガは、とても素早く、鋭い一撃を持っていることから、

ガンナーは慎重にならざるを得なかった。

（この戦い……長期戦になるかもしれません。）

ユミナ、どうか私達が行くまで持つてくださいね！）

一刻も早く倒して、ユミナを助けに行かなければ行けないが、ナルガクルガはそう簡単にいく甘い敵ではなかった。

私は大剣を背に戻すと、ナルガクルガへ向かって走り出した。

（ヒット&アウェイで相手の速さに合わせて戦うのがベストですね）

私は繰り出される鋭い攻撃をかわしながら、隙を見つけては抜刀して、

一撃を加えるとその場から離脱した。

キイも私の攻撃方法に合わせて、同じ事をしている。

アイは私達の間を縫うように射撃を繰り返して、ダメージを蓄積させていく。

「斬ッ！」

私の一撃は、ナルガクルガの毛皮を少し切り裂き、雷撃で焼いた。

私が苦勞して手に入れたこの大剣。

召雷剣【麒麟王】は、電撃を発する大剣で、古龍種に位置する幻獣キリンの素材で作られている業物である。

ナルガクルガは弱点である雷属性に、ほんの少し怯んだが、気にせずにドンドン攻撃をしてきた。

自慢の速度と鋭い刃翼で、一気に距離を詰めて切り裂こうとしてきたり。

しなやかなで強靱な尻尾で薙ぎ払ってきたり。

ガードが出来ないキイは、避けるのに必死で、ガードが出来る私は、防いでもすぐに切れ味が落ちてしまう。

有効ダメージを与えているのは、実際アイだけである。

このままいけばアイに標的が変わってしまうのも時間の問題である。

私とキイは、何とか攻撃の合間に隙を見つけて、一撃離脱で攻撃を繰り返していった。

……休む暇も与えて貰えない。

徐々に防具などに傷が目立つようになって来た。

生身の部分は少し切れて、血が流れているところもある。

（長期戦になるとは思っていますが、このまま行けばこちらが不利になるばかり。

何か一気に勢いをこちらへと動かす一撃を与えなければ）

私は必死に頭の中で思考を広げていく。

敵の速さで邪魔されることが多いが、なんとかか1つ思いついた。

私はキイとアイに、戦いながらもアイコンタクトで作戦を伝える。

（私が閃光玉を投げます。キイは畏を、アイは麻痺弾を）

（わかりました）

（はい）

私はナルガクルガから離れて、敵がこちらを向いた時に閃光玉を投げた。

破裂した閃光玉は強烈な光を放ち、敵の視力を奪った。

ナルガクルガは、目が見えてないが暴れ回っている。

（やはり、視力を潰しても安全とは言い難いですね）

私は暴れるナルガクルガに近づくことが出来ず、

様子を離れたところで窺っていた。

唯一そんな事をものもしないアイが、麻痺弾をナルガクルガの体へと打ち込んでいく。

離れたところでシビレ罨を張っていたキイが、終わったのか私達に合図を送ってきた。

私達は攻撃を一旦やめ、罨へと向かいナルガクルガが掛かるのを待った。

ナルガクルガは視力が回復したのか、頭を振りこちらへと向いた。

そのまま走ってこちらへ向かうと。

ギヤアツ!?

と悲鳴を上げて身動きが取れなくなった。

シビレ罨の神経毒がナルガクルガの動きを封じたのである。

私は立ちはこの好機を逃さず、一斉攻撃を始める。

キイは鬼人化による乱舞を刃翼へと叩き込んでいた。

弾かれることのない一撃は、刃翼を削るように砕いていった。

私は言霊を探しながら、溜め切りのモーシヨンへと入った。

「雷ッ!!!」

バチイと青白い光が爆せて、ナルガクルガの毛皮を深く切り裂き血に染めた。

アイは麻痺弾を撃ち続けていた。

シビレ罨が壊れると同時に、アイの麻痺弾が着弾し、効果を発揮した。

ギャツ!?

動きが再度封じられたナルガクルガに、私達は総攻撃を掛けた。

キイは反対側の刃翼を叩き折り。

私は尻尾の鱗を砕き、毛皮を切り裂いた。

アイは貫通弾をナルガクルガの胴体へと撃つ。

麻痺が解けると、ナルガクルガは後ろへと跳び退いた。

傷ついたナルガクルガから、異様な殺気が放たれる。

目が赤く紅く、怪しく光り、大きく咆哮を上げた。

ビリビリと伝わってくる圧迫感と殺気が、私達に異変を伝えた。

(怒り常態ですか……厄介です)

ガウツ!!

ナルガクルガは尻尾を振り回し、アイへと何かを飛ばした。

私は咄嗟にアイの前へ立ち、大剣でそれを弾き飛ばした。

「これは、鱗ですか？」

地面へと突き刺さった鱗を見て、私は呟いた。

「エリカさん、前！」

ナルガクルガから目を離したのは失敗だった。

ナルガクルガは一瞬で私達との間合いを詰めて、砕けた刃翼を振ってきた。

「くっ！」

ガキンツと大剣を盾代わりにして防いだが、力押しでアイと一緒に吹き飛ばされた。

吹き飛ばされた私達と、ナルガクルガの間にキイが立ちはだかる。

しかし、一瞬にしてそれを飛び越えたナルガクルガ。

私達の後ろを取ると、再度刃翼を叩きつけて来た。

アイを庇い、自らを盾にする。

ドゴォー！

自分の体から鈍い音が聞こえて、大木まで吹き飛ばされ叩きつけられた。

ナルガクルガは、尻尾でアイを薙ぎ払った。

そのまま流れるように私に向けて、鱗を飛ばしてきた。

「くっ……!!」

何とか体を動かし、大剣を盾にする。

鱗は私の周囲に突き刺さり抉った。

(喰らえば、この服すらも貫くのでしょうかね)

私は自分の防具を見ながらそんな事を考えた。

ナルガクルガは、今度はキイへと間合いを詰めた。

対応しようとしたキイだが、ナルガクルガのほうが強かった。

ナルガクルガは空中で反転して、鱗が棘みたいになっている尻尾を思い切り叩きつけた。

ドゴオオオン!!

かなりの衝撃なのか、轟音と共に地面が抉れ、土埃が舞った。

「キイツ!!」

私は慌てて叫んで呼びかけた。

土埃が晴れるとそこには、ボロボロになって気絶しているキイがいた。

直撃は免れたみたいで、死んではないが今のままだと大変危険な状態であった。

私は痛む体に鞭を打ち、無理やり起き上がると大剣を背に抱え、キイへと向かって走った。

ナルガクルガが私に気付いてこちらへ向いたが、閃光玉で視力を奪い黙らせた。

気絶しているキイを抱えると、その場から離れてアイの方へと走った。

「アイ、一旦逃げましょう。いけますか？」

「う、うん。大丈夫だよ」

私達はペイントを付け直すと、ナルガクルガに背を向けてこのエリアを去っていった。

第七十話「眠れる鳥と迅速の竜」(後書き)

最近、更新速度が目に見えて落ちてきてるのが分かりますね。

何とかしたいとは思ってますけど。

腕が……手が……頭が……動いてくれませんね。

まあ、次回の更新も遅いと思います。

テストが近いので。

……まあ、勉強なんてしなくても別に問題はないんですけどね

では、また次話でお会いしましょう。

さよなら～さよなら～

第七十一話「深き森の暗殺者」(前書き)

試験終わりました。V

頑張って更新していきたいと思いますー!!...
できるかぎり.....なるべく.....多分?)
(;

第七十一話「深き森の暗殺者」

第七十一話「深き森の暗殺者」

ユミナSide

クエエエエエ！

ヒプノックは私を発達した足で踏み潰そうとする。

それを擦れ違うようにかわすと、ヒプノックは方向を変えて追いかけてくる。

また同じように擦れ違うようにかわすと、ヒプノックは動きを止め隙が生まれた。

私はそれを逃さず、太刀を抜き放った。

私の一撃は、ヒプノックの翼を浅く切り裂いた。

クエ！？

ヒプノックは声を上げて怯んだ。

私は深追いをせず、直ぐにヒプノックから距離をとる。

私の役目は、囷……だから危険を冒す必要はない。

……約束もあるしね。

私は太刀を鞘へ収めると、ヒプノックの出方を窺う。

ヒプノックがこちらへと振り向こうとする。

パンツッ!!

突然、空から大きな破裂音が聞こえて眩く光り輝いた。

「……………何？」

あれは、連絡用の合図……もう倒し終わったのかな？

いや、幾らなんでもそれは早すぎる。

皆に何かあつたんだらうか？

「方角は、ベースキャンフ拠点ね……………」

私はポーチからペイントボールを取り出すと、ヒプノックへとぶつ
けた。

当たると同時に、私は踵を返して走り出した。

「ごめんね。用が出来たから貴方の相手はまたあとで！」

私はヒブノックにそれだけ告げると、このエリアを跡にして拠点へと向かう。

途中、小型モンスターが行く手を阻もうとしたが、無視して素通りした。

十分ほど走ると、拠点へ戻ることが出来た。

そこには、ボロボロになったアイ達の姿が。

「どうしたの！ 何があったの！？」

私は、ボロボロで座り込んでいたアイとエリカに事情を聞こうとした。

テントの中の簡易ベッドでは、気を失って倒れているキイがいる。

「ユミナ、ちゃん……」

アイは私に気付くと、力無く顔を上げて呟いた。

エリカがフラフラになりながらも立ち上がろうとする。

「座ってても良いから！」

「……申し訳在りません」

「一体、何があったの？」

エリカ達は一つ一つ事情を説明していつてくれた。

「それで、一旦撤退してユミナを呼んだ訳です」

「そっか」

戦力を分けたのが駄目だったのかな……？

でも、そうしないと2頭同時に相手することになった時の方が、遥かに危険度は高い気がするし。

それとも私達には、まだ、早かったのかな……。

なんにしても、リーダーである私の読み違いだね。

「みんな、この依頼は　大丈夫です！」

私が依頼を諦めて帰ることを告げようとすると、エリカが声を上げて阻んだ。

「私は、まだ、戦えます！」

「でも……」

「私も戦えるよ〜！」

アイも私にまだ戦えることをアピールする。

私は考える。

リーダーとしての最善を。

「 やっぱり、それでもこの人数じゃ」

「 僕もいますよ。……全く、あまり僕を見くびらないで下さい」

ボロボロな体を起こしながらキイがそう言った。

全く、みんな仕方がないね……。

「 それじゃあ、やりますか！」

「 「はい！」 「」

「 作戦は……」

私が新しく考えようとすると、エリカがそれを制した。

「 私に……私達にもう一度チャンスを下さい。次は絶対に倒します」

3人が私をジッと見つめてくる。

……。

私が黙っていると見つめ返していると静寂が流れた。

……はあ、まったく仕方がないな。

一度失敗した作戦に固執するのは、

愚策なんだけど……まあ、大丈夫かな。

「うん、わかった。それじゃあ私が囿をしてるから、早く倒してね」

「はい」

「がんばるよ」

「次は負けない」

私はみんなと別れて、ヒプノックを探しに向かった。

エリカSide

ユミナにもう一度だけチャンスを買うことが出来た。

私達はユミナと分かれて、ナルガクルガを探し続けた。

そして、暗闇の中紅く光る軌跡を見つけた。

ナルガクルガ。

今度こそ負けない。

アイ達と共に完全勝利を目指す。

さあ、戦いはここからですよ！ ナルガクルガ！

私は先陣を切って、先制攻撃を仕掛けた。

振り下ろされた一撃は、油断していたナルガクルガの胴体を傷つけた。

アイはその場でライトボウガンを構えて待機し、キイは私とは反対側に回り込んで斬りかかる。

私もキイに続くように攻撃を続けた。

突然の奇襲にナルガクルガは、少し混乱しながらもその場を抜け出そうと跳んだ。

無理やりその場から退いた所為で、私達の攻撃が弾かれる結果となった。

ナルガクルガは先ほどと変わらぬ速度を保っていた。

暗闇での素早い動きは、二つの紅い軌跡を描いていく。

（まだ、怒り状態ですね……）

私とキイは、構わずそれを追いかける。

後ろからアイが援護とばかりに、電撃弾を撃っていく。

「キイ！」

「分かっています！」

バチバチイッ！！

私の合図と共に、私達の武器は雷を帯びる。

最初から全力で、即効で叩き潰す！

私に手に持つ、召雷剣【麒麟王】は青白い雷撃を発していく。

キイの武器は、正式採用機械鋸と呼ばれる、

希少鉱石と電撃を帯びた貴重な素材から作られたチェーンソー型の
双剣。

キュイーーーーーンッ！！ と電撃を発しながら超回転していく
刀身。

私達は全力でナルガクルガへと攻撃を叩き込む。

雷を帯びた一撃は切れ味を上げ、敵を切り裂き、肉を焦がす。

ナルガクルガは攻撃を気にも留めずに、持ち前の素早さで振り切る
うとする。

私とキイは攻撃しながらそれに必死についていく。

速さはキイの方が速い。

だけど、経験の差で私はそれについていく。

しかし、それにものともしないほどの素早さで、ナルガクルガは縦横無尽に跳びまわる。

アイは動きを先読みして、正確に1発1発と狙っていく。

そして、遂にナルガクルガは攻勢に出た。

キシヤアアアア!!!

刃翼を私に向かって振り抜く。

「硬っ!!!」

私は正面から大剣をぶつけて対抗する。

ガキンッ!!!

流石に力負けして、後ろへと大きく吹き飛ばされた。

私が追撃されまいと、アイとキイが攻撃して気を逸らそうとする。

シヤアアア!!!

ナルガクルガはアイとキイを一瞬にして振り切ると、

私の背後へと跳び回って来た。

私は咄嗟に反転し、大剣を盾がわりにして攻撃を防いだ。

ナルガクルガは、一閃、二閃と攻撃を積み重ねていく。

その猛攻でジリジリと後ろへと追い詰められていく。

(このままじゃ、剣が持たない……)

私が焦っていると、キイが凄く低い大勢で駆け抜けていった。

私を抜いたキイは、ナルガクルガの下からは跳ね上がるように斬りかかった。

素早い斬撃が幾重にも重ねられていく。

ナルガクルガは、刃翼を使い、器用にキイへと斬りかかっていく。

キイは、腹を狙った一撃を回転しながら双剣で受け流す。

続いて来た、頭を狙った一閃をしゃがんでかわし、

足元をすくうように払われた尻尾は、空中に飛び上がってかわした。

ナルガクルガは空中で身動きが取れなくなったキイへと、容赦ない一撃を叩きつけようとする。

キイは双剣を交差してそれを受けると、バランスを崩し吹き飛ばされていった。

入れ替わるように私が、ナルガクルガの腕を切り裂いた。

ズバッ！ つと腕を深く切り裂いて、辺りに血が舞った。

ギヤアツ!?

唐突な衝撃に驚き怯むナルガクルガ。

私はその隙を逃さずに、更にナルガクルガの懐へと踏み込んで一閃。

私はアイの援護射撃を加えて、激しい猛攻を繰り出す。

バチィ！ と青白い雷が爆ぜ、真っ赤な血飛沫が舞う。

混乱し暴れ狂うナルガクルガ。

「鬼人化ッ！！」

空高く跳躍し、ナルガクルガへ向けて落下してきたキイが、双剣を頭上で交差してそう叫んだ。

紅い闘気を全身に纏い、超高速回転と雷で切れ味が上がった双剣で斬る。

ザシユザシユザシユザシユツ！！！！

高速で振りぬかれた乱舞は、ナルガクルガの頭を深く切り裂いた。

怯み仰け反るナルガクルガに対して、

キイは地面へと足をつけるとそのまま懐へと飛び込んだ。

腹下へと潜り込み乱舞でナルガクルガを斬り付けまくる。

私は、ナルガクルガの正面へと立ち、溜め切りのモーションをとる。

それに気付いた2人は、ナルガクルガが動けないよう攻撃して足止

めする。

私は限界まで力を溜め、全力でそれを解き放った。

「断ッ！！」

私が叫び、全力の斬撃をナルガクルガに向けて叩き付ける。

キイは私が一撃を入れる前にその場から離れた。

私から放たれた一撃は、ナルガクルガの頭に直撃し、そのまま叩き伏せた。

ズザアアアアンッ！！！！

頭を力づくで地面へと叩き付けられたナルガクルガに、眩い雷光が襲い掛かった。

斬撃はナルガクルガの左目を切り裂き奪い、雷光は毛皮と肉を焼き焦がした。

ナルガクルガはそのまま力無く、全身で倒れ伏した。

（倒しましたか……！？）

ハアハアと全員息を荒くさせて、ナルガクルガの様子を窺う。

キイは疲労で鬼人化が強制的に解けて、とても辛そうにしていた。

瞬間。

ギンツ　と1つの紅い軌跡が生まれ、掻き消えた。

私は目の前にいたはずのナルガクルガを見失ってしまった。

慌てて探すと、ナルガクルガはアイの方へと向かっていた。

私は必死に走って追いつこうとする。

アイは電撃弾でナルガクルガを狙うが、

ナルガクルガは撃ち抜かれようが気にも留めず距離を詰めようとする。

止まらないナルガクルガに焦りを見せ始めるアイ。

(間に、合わないっ!?)

私は懸命に走るが、ナルガクルガとの距離は一向に縮まらない。

キシヤアアアアア!!!

最後の気力を振り絞って暴れるナルガクルガは、
アイとの距離を詰めて刃翼で切り裂こうとする。

「させるかああああ!!!」

キイの咆哮のような叫びが聞こえたと思ったら、
ナルガクルガの動きが止まっていた。

何故ナルガクルガが止まったか分からなかったが、

今がチャンスだと思い、急いでナルガクルガの前へと立った。

そこで私は大変驚いた。

ナルガクルガは、剣で胸から背に掛けて貫かれ絶命していた。

それも、私より後ろにいたはずのキイが、自らの双剣で。

(……なんて。なんて速度ですかっ！？ まるで閃光 ツ！？)

私は自分自身に対して嫌悪した。

自分の失態で仲間を危険に晒し自分で助けられなかった拳句に、もう一人の仲間が見せた力を羨み嫉妬したことに。

(私は、私は …… なんてこんなにも力が無く、弱い存在なんでしょう)

今の私なんかじゃ到底アイツには敵わない。

私は、アイツを殺す為だけにハンターになって、強くなるうとした。

それが、今ではこの始末である。

(強くなければならぬのに！ 何よりも、誰よりも！ アイツを殺す為だけに！！)

「エリカさん？」

「!?!?」

深い思考の渦に飲まれかけていた私は、ハツとなり顔を上げた。

そこにはキイとアイが心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

「大丈夫かな？」

「……はい、すみません。私は大丈夫です」

「そっかあ。じゃあ！ 急いで剥ぎ取ってユミナちゃんを助けに行こう！」

「そうですね」

私は全ての考えを振り払い、今すべき事だけに集中した。

しかし、心の奥底からは渴望の声が上がっていることに、私は気付くことはなかった。

力……私に、力を

第七十一話「深き森の暗殺者」(後書き)

おりよ？ 何やら意味深な終わり方。

……ま、どうでもいつか？

今回は、ヒプノックですね！

ふふふ……さて、どんなハプニングを盛り込もうか。
もとい、どんな展開にしようか…… 真実を知るのは次回の貴方！

次回もまた見てね

第七十二話「眠り誘う眠鳥」

第七十二話「眠り誘う眠鳥」

ユミナSide

もうすっかり夜が明けて、朝日が差していた。

私はずっと囷として戦い続けていたが、積極的に攻撃してないとはいえ流石に疲れてきた。

逃げて丁度良いくらい気を引くのって、意外と疲れるんだよコレが。

唯一休憩できたのが、エリカ達に呼ばれた少しの間だけ。

辛いけど私がやるといった以上、ちゃんとしないとね。

クエエ！

ヒプノックが大きく鳴くと同時に飛び掛ってくる。

ズシン！

ズシン！

発達した足で草木を潰しながら、地面を軽く陥没させていく。

私はそれを擦れ違うように、1つ1つ丁寧に避けていく。

基本的に私からはあまり攻撃をしない。

ある程度かわしてからか、私から気が逸れそうになった時に鋭い一撃で気を引く。

私は夜が明けるまで、この作業をひたすら繰り返し続けていた。

（みんなは、まだ時間が掛かるかな？ この体力がいつまでも続くと限らないし……）

私は避けながら考えていく。

（体力がある今のうちに、私だけで倒す……いけるかな？）

ヒプノックとの距離を大きく開けて向きなおす。

背中の太刀へと手を伸ばす。

柄の部分を持ち、いつでも抜刀できるように構えた。

ヒプノックは大きく開いた距離を縮めるように大きく跳んだ。

1歩、2歩と私との距離が縮まっていく。

3歩　と私の間にヒプノックが入った瞬間。

「カートリッジ・装填^{リロード}　デスペアレンス！」

^{カートリッジ}弾丸の力を使い、強力な抜刀攻撃をヒプノックに叩き込んだ。

クエエエエ！？

突然の攻撃にヒプノックは仰け反った。

私はそのまま太刀を振るい斬撃を重ねていく。

袈裟切り。

逆袈裟切り。

刺突。

薙ぎ払い。

連撃を全て当てできると、私は2歩、3歩と跳ぶ様に大きく後退して距離をとった。

太刀をその場で右下へ振る。

シューーッ！！　ガチャン……コロンコロン！

使い切った灰色の弾丸が熱とともに排出された。

「カートリッジ・装填^{リロード}　エクスプロージョン！」

ゴオオツ！ と一瞬にして太刀が炎を纏った。

私の太刀 『変幻刀・蒼』のカートリッジシステムは、ついこの間強化された。

内容は、3発までの弾丸カートリッジの装填可能と常時装填による自動装填の可能である。

つまり、前と違い3発までを一回の装填で出来て、

ギミックを使った自動装填であらかじめ装填していたうちの1発を使い、

いつでも使用可能状態となるようになった。

……一度に3発同時使用は出来ないけど。

（変幻刀に入っている弾丸カートリッジは、あとヴォルテック1発ね。
使い切ったら隙を見て装填しなきゃ）

クエエ！

ヒプノックは仕切りなおすように、大きく跳んで距離を縮めてくる。

私は集中する。

目の前の炎を凝視しながら深く集中する。

炎が自由自在に動くように想像し、集中する。

私が集中している間に、ヒプノックはドンドン間合いを詰めてくる。目の前まで来たところで私は、一旦集中をとりてヒプノックの攻撃をかわす。

すぐさま向きを変えて私を追撃しようとしてくるヒプノック。

擦れ違うように避けて攻撃をやり過すと、急いでヒプノックとの距離をとった。

そして、再び私は集中し始める。

(イメージは攻撃範囲を伸ばす感じ。あの時も出来たんだ。今出来ないはずが無い！)

チリチリ。

刀身の炎がゆらゆらと揺れる。

そして、炎をが刀身より少し伸びた。

(で、出来た！ よし、このまま勢いで……)

私は、近づいてくるヒプノックを目掛けて、太刀を思いっきり振った。

私とヒプノックの間の距離は、目測2メートル弱。

太刀全体の大きさは、1メートル70程度。

しかし。

ザシュツッ!!

炎の刃がヒプノックの胴体を、深く切り裂き焼き焦がした。

「まだまだあ!!」

そのまま間合いを詰めながら太刀を振るう。

今度は鎌のように炎の刃を作り、ヒプノックの左翼を完全に断ち切った。

大量の血がヒプノックの左翼から吹き出る。

翼を断ち切られたヒプノックは、バランスを崩した折れ込んでしまった。

私は畳み掛けるように斬りかかる。

刀身の背に炎を集めて、それを爆発させた勢いで速く鋭く振るう。

ヒプノックの背中を深く斬り、鱗や羽を燃やした。

連撃を止めると、素早く距離をとって太刀を下ろした。

シューーッ!! ガチャン……コロココロン!

紅い弾丸が熱とともに排出され、地面へと転がっていった。

ヒプノックがようやく起き上がるが、翼が無くバランスを保てないのか、与えたダメージが大きいのか、フラフラとふらついていた。

（今が好機。^{チャンス}このまま一気に畳み込むか、右翼を奪えば勝てる！）

私は最大の好機を逃さないため、最後の弾丸^{カートリッジ}を発動させる。

「カートリッジ・装填^{リロード} ヴォルテック！」

バチバチバチイ！！

電撃が刀身で爆ぜる。

青白く光る雷光を刀身全体に纏わせると、私はすぐにヒプノックとの間合いを詰めた。

ヒプノックの間合いに入り横に一閃。

ヒプノックは後ろへと飛び下がり、偶然私の一閃をかわした。

小規模の風圧が私の動きを封じようとするが、

私は力づくで太刀でヒプノックの翼目掛けて刺突。

雷の刃が一直線に伸びて、ヒプノックの翼を貫く。

クエエ！？

ヒプノックは動きを止めた。

「ハッ！！」

私はそのまま間合いを一気に詰めて、太刀を思いっきり振り下ろす。
ズバツ！！

雷の刃が翼を半分切り裂いて、血飛沫が舞う。

ヒプノックの目の前に立った私は、そのまま太刀を上段に構え斜めに振り下ろす。

「雷光一閃！！」

雷を纏った私の一撃は、ヒプノックを斬り伏せた。

眩い雷光がヒプノックを切り裂き、大量の血が噴出した。

私は弾丸カートリッジを使い切ったのを感じて距離をとった。

シューーッ！！ ガチャン……コロンコロン！

私は太刀についた血を払い、前にいるヒプノックを見る。

ヒプノックは両翼ともボロボロで既に飛ぶことはできず、
今まで与えてきた攻撃と今の一撃で胴体は血に染まっている。

一目見て分かる。ヒプノックは既に戦闘不能 瀕死 だ。

戦えないどころか満足に動くことのできないヒプノックに、
私は止めをさそうと近づいていく。

「ユミナちゃん！ ごめん、遅くなったよ」

「今加勢します！」

「遅くなった、ごめん」

後ろから声が聞こえた思って首だけ振り向くと、
アイ達が走ってこちらに向かってきていたのが見えた。

私は太刀を鞘へと仕舞い、体ごとアイ達の方へと向ける。

「みんな、無事に倒せたんだね」

「うん……っつて、あれ!？」

アイは目の前の状況を見て大変驚いていた。

後から来たエリカとキイも絶句していた。

「……どうしたの？」

「これは、ユミナが、やったんですか？」

エリカが戸惑いながら私に聞いてきた。

「うん、私の体力的に持ちそうに無かったから。
体力があるうち出来る限り倒してしまおうと」

エリカは、何故か分からないけど、

一瞬だけどこか辛そうな悔しそうな表情をしていた。

ほんの一瞬だったから、私の気のせいかもしれないけど。

「ユミナちゃん！」

「べ、別に無茶はしてないからね？ 体力が危なそうだったから、短期決戦に持ち込んだだけで」

「……それを、無茶って言うんじゃないのか？」

アイは私を睨み、キイは呆れたように言ってそう言った。

あれれ？ 別に無茶はしてないんだけど……。

「倒さなくても、危なかったら逃げれば良いんだよ。」

ユミナちゃんはそういうところバカだよね……」

「で、でも！ 私囹役だったし！」

「それ以前に無茶しないって約束だったはずだけど？」

アイとキイは痛いところばかり付いてくる。

……私に何か恨みがあるんだろうか？

「ユミナ、あれはまだ生きていますか？」

「あ、うん。止めをさそうとした所にみんなが来たからね」

「そうですか。では、まだ安全とは言いがたいので倒してしまいましょう」

「わかったよ」

背中の太刀を引き抜くと、ヒプノックの前まで行き振り上げる。

ク……エエ……

既に瀕死のヒプノックは動くことができず、力なく鳴き声を上げる。

「ばいばい」

私は思いつきり太刀を振り下ろすと、ヒプノックは首を切断されて絶命した。

太刀についた血を払うと、刃を砥石で研ぎ、切れ味を回復させてから鞘へ仕舞った。

「それじゃあ終わったし、剥ぎ取って帰りますか！」

「……はい！」「……」

意外に苦戦すると思っていた狩りだが、案外早めに終わることが出来た。

その安堵感と、自分が強くなっていることを実感して、私は、エリカの表情に影が差していることに気付くことは出来なかった。

思いつめたようなエリカの様子に気付けなかった。

これが、私の過ちだった。

エリカSide

私達はナルガクルガを倒し終わり、囿をしているユミナの元へと急いでいる。

ナルガクルガを倒すのに梃子摺った所為で、ユミナが危険に晒されているかもしれないと考えると、私達の行動は自然と早くなった。

ペイントの臭気だけを頼りにしてユミナを探す。

私達がユミナの元へとたどり着いた時。

私達は信じられないものを目の当たりにした。

それは　瀕死で倒れ伏すヒプノックに止めをさそうとしているユミナの姿であった。

ユミナはヒプノックの血で全身が赤く染まり、汚れていた。

その姿には、強さと恐怖を同時に感じてしまった。

私は、心の奥底に押さえ込んでいた劣等感に再び苛まれる。

ユミナは1人でもあんなに強い。

私が恐怖を感じるほど成長している。

ユミナは私よりも強い。

それに比べて私は、一体何をしていたんだろう。

(うるさい、うるさいうるさいうるさい!!!)

私は必死に脳裏に過ぎる考えを祓っていく。

(私は、どうしてこんなに弱いのだろう。どうしてこんなに脆いんだろう)

私ではどうしようもない、負の感情が芽生えていくのが分かる。

(強く、強く、もっと強くなりたい。強さ以外何もいらぬ)

どうしたら私は何者にも負けない強さが得られるんだろう)

軋み出した歯車は止まることなく動き続けていく。

(アイツを殺す強さのためなら、悪魔にだって命を差し出してもいい。

何を犠牲にしてもあいつだけは絶対にこの手で殺したい!)

暗い闇へと落ちていく。

深く、決して光が届くことの無い混沌の闇へと。

（何を、犠牲にしても！！）

第七十二話「眠り誘う眠鳥」(後書き)

あれ？ 最近、ちよくちよく弱冠シリアスが入ってくるね。

全体的に暗く感じる？

まあ、それはどうでもいいとしておきましょう！

ユミナが、カートリッジシステムの所為で、

弱冠チートになっている気が……><

もはや、モンハンらしさからどんどん遠退いて行ってますよね。

(しかも、超特急で……(^ . ^ ;))

でも、私はこれでやる！

むしろ、コレが私のモンスターハンター 漆黒の業火だ！！

ということ、また次回(次話)でお会いしましょう！

第七十三話「雪山に轟く咆哮」

第七十三話「雪山に轟く咆哮」

ユミナSide

今、私達は雪山へと来ていた。

目的は、轟竜ティガレックスの討伐依頼。

樹海で依頼を終えた私達は、帰りつくと同時にすぐに次の依頼へと出発したのである。

理由は2つある。

1つ目は、エリカからのお願いであった。

エリカ曰く「早く強くなりたいので、このクエストに行きたいです」
だそうだよ。

お願いされた私は、体力的には問題なかったから、
みんなすぐに行けるかどうかを聞いてみると、「行ける」と返って
きた。

それで、依頼が終わってすぐに次の依頼を受けた。

竜車に揺られてる時間が長くて、体力と怪我はすでに回復していたから、

後は狩りに使う道具の補充だけで良かったのからである。

それにしても、エリカがこんなお願いをするなんてちょっと意外だな。

エリカはこの所 といっても樹海での依頼が終わった辺りから
ちよっとおかしい。

何処がおかしいかと言つと、どこか焦つてるといつか辛そうな表情をする。

そして、たまに表情に影が差すのである。

エリカとの付き合いはそれほど長くないから、私の気のせいかもしれないけど……。

無理しないかちよっ心配だなあ……人のことあまり言えないけど。
あれから、アイにたつぷりと怒られたもんなあ……キイには呆れられたけど。

あ、2つ目の理由は、工房が新しい弾丸を複数開発したからである。

私はその弾丸を試して、工房へ色々と報告しなければいけない。

新しく開発された弾丸は全部で8つ。^{カートリッジ}

なるべく全部の効果を試してみたいが、今の私じゃ扱いきれないものもあるので難しいところだ。

それにしても、ティガレックスか……。

私、アイ、キイの3人は戦った事がない。

だから、今回はエリカを主体にして戦うことになる

私はどんな風に戦おうかと、頭の中で作戦を立ててイメージトレーニングをする。

最近、討伐指定モンスター以外が乱入してくると言った事例も確認されていて、私達もそれを何度か経験していた。

(今回は何も起こらなければいいけど……。

一応、いざつていう時の切り札はあるんだけどね……)

私は気が重くなり、そつと溜息をついた。

それを隣で準備していたアイに聞かれて、「どうしたの?」って問われた。

「いや最近ね、討伐指定モンスター以外が乱入してくる事件があるじゃない?」

「うん、あれは怖いね」

「私達も何回か経験してるから、今回は何も起きなければいいなあ」と

「だね。でも、たぶん大丈夫なんじゃないかな？ いろいろと」

「一体、何が大丈夫なんだろうか？」

そんな事を話していると、みんな準備が終わって立ち上がる。

私もそれを確認すると立ち上がり、みんなへと聞いた。

「準備は終わった？」

「うん、大丈夫！」

「終わったよ」

「……はい」

エリカの返事が少し後れたのが気になった。

「エリカ、どうしたの？」

「いえ、別に何でもありませんよ？」

「そう……？」

「何もないなら良いんだけどね。」

でも、私はみんなのリーダーだから悩みがあるなら言って欲しいんだけど。

まあ、今はこの話を置いておこう。

「それじゃ、行くぞ！」

「「「はい」「」」

私達は拠点（ベースキャンプ）を出て、エリア1、2と進んでいった。

エリア3へと通じる洞窟に入る前に、全員ホットドリンクを飲む。

それから十数分掛けて、洞窟を進んで行って、

開けた場所 エリア6 へと出た。

麓では降っていなかった雪が風と共に吹き荒れていた。

（山の天気は変わりやすいって言うけど、これは酷いね……）

これ以上酷くなる前に、ティガレックスを見つけよう。

「エリア7とエリア8。みんな、どっちから探す？」

私は地図を見ながらみんなに聞いた。

「私は、エリア8の方かな？」

「僕は、エリア7がいいと思う」

うーん、見事に2つに分かれたね。

「エリカは？」

「そうですね……。まずはエリア8を探るのが良いかと」

「そっか。じゃあ、まずはエリア8の方に行ってからその後エリ
ア7ね」

私を先頭にして雪の中を進んでいく。

積もった雪と降る雪。それに、強い風で動きにくい。

(これじゃ、戦闘になった時が不利ね……。どうしようかな)

私はこの状況でも使えそうな作戦を模索していく。

幾つか浮かんできたところで、エリア8へとたどり着いた。

そこには。

轟竜ティガレックスの姿が……。無かった。

(っ、居なかったんかい！)

「はっ！」

「どづしたのユミナちゃん？」

「い、いや……何やらこの世の理不尽をツツコマされた気が……」

「「「?」「」」」

いきなり意味分からないこと言いだした私に、みんなが怪訝そうな顔をする。

いやいやいや、私も意味が分からないよ！

と、とにかく！

「次は、エリア7だね」

私達はエリア7へと山を下っていった。

数分掛けて下ると、案の定そこにはティガレックスがいた。

ティガレックスは、まだこちらには気付いてないようだ。

(これはチャンスね……)

私はみんなへ配置について準備するように指示を促す。

みんなが準備を終えて、それぞれの武器を抜いたところで戦闘を始めた。

カツ！ ピカアーーーーー！！！！

まだ気付いてないティガレックスの目の前目掛けて、閃光玉を投げつけた。

眩い閃光がティガレックスの視力を奪う。

「みんな。狩猟開始！」

私の合図と共に一斉に攻撃を始める。

双剣であるキイは、ティガレックスの後ろ足を乱舞で斬りつける。

アイはペイント弾を撃ち込んだ後、様子見のためか通常弾に換えて撃ち始める。

唯一、ティガレックスと戦闘の経験があるエリカは、ティガレックスの目の前に堂々と立って頭に斬りかかった。

私は、攻撃には参加せずポーチから次の閃光玉を取り出して待つ。

これが私の考えた作戦である。

まず、私が閃光玉（仲間のと調合用）で視力を奪い足止め。

そのうちに他の仲間が攻撃する。

閃光玉がなくなったら、予め仕掛けてある罠へと向かいティガレックスを嵌める。

そして、全員による全力攻撃で出来る限りダメージを与える。

雪で視界と足場が悪くこちらが圧倒的に不利である。

だから、早い段階で出来る限りダメージを与えて、早く討伐しようとは私は考えた。

私は3つ目の閃光玉でティガレックスの視力を奪いながら考える。

(罨が終わったなら、一旦、別エリアに退避した方が良いかな?)

カッ！ ピカアーーーーー!!!

淡々と閃光玉で視力を奪っていく。

「エリカ！ 一旦止めて閃光玉を頂戴！」

「わかりました！」

道具はギルドによって持てる個数を制限されているので、一々こつこつやって貰わなければならないのが面倒である。

私はエリカから閃光玉を受け取ると、ティガレックスの動きをよく観察する。

閃光で視力を奪われていても、ティガレックスは暴れまわる。

気をつけなければ一気に追い詰められてしまうのである。

カッ！ ピカアーーーーー!!!

また1つと、閃光玉を消費していく。

十数分間、同じ動作を繰り返して遂に最後の1つとなった閃光玉。

「これで、ラスト!!」

カツ！ ピカアーーーーー!!!!!!

視力を奪いティガレックスが仰け反ると同時に、私も斬りかかった。

私は翼の部位を狙って太刀を振るう。

ティガレックスの体は所々、鱗や甲殻が攻撃により砕かれていた。

（大分攻撃したけど……ちゃんと喰らってるのかな）

十数分間、こちらが攻撃し続けたはずなのに元気な様子を見て心配になる私。

そろそろ閃光の効力が切れるから、早くあそこに行かなきゃ！

「みんな、そろそろ!!」

「うん」

「わかった」

「はい」

1番離れていたアイを順にある位置を目指して走る。

グガアアアアアア!!

ティガレックスは視力を回復させて私達を追いかけてくる。

一番後ろにいた私は必死に走って、ある位置を駆け抜けた。

追いかけてきたティガレックスは急に浮遊感を感じて、地面へとめり込むように沈んでいった。

「カートリッジ・装填^{リロード} ヴォルテック！」

私はカートリッジを発動させて、太刀に雷撃を纏わせる。

全員それぞれの全力の一撃を、身動きが取れないティガレックスに叩き込んでいく。

「鬼人化！ 乱舞！！！」

「徹甲榴弾、おまけに拡散弾！」

「ハアアアアア！！ 剛ッ！！！」

「紫電一閃！！！」

私は最後に一撃を叩き込むと、アイに視線を送った。

（アレをお願いね）

（うん、わかってるよ〜）

アイは弾を換えてティガレックスを撃つ。

私はポーチからシビレ罠を取り出して、いつでもセットできるように構える。

そして、ティガレックスが罠から抜け出し飛び上がったところで仕掛ける。

そのまま降りてきたティガレックスは見事にコレを踏み、ゲネポスの神経毒によって身動きを封じられた。

「これでラスト〜と！」

アイが撃った弾が、薄青つばい煙を出してティガレックスに着弾した。

ガア!? ……グ……アア……ア

アイが撃った球は睡眠弾。

つまり、ティガレックスは眠らされたのである。

「じゃあみんな。早く仕掛けて逃げるよ！」

私の合図と共に、ティガレックスの周りに大きな爆弾が置かれていく。

大タル爆弾Gである。

全て置いて、みんなが遠く離れたのを確認すると、私は小タル爆弾を置いた。

みんな距離を離して、一斉に走り出す。

ズドガアアアアアアアン!!!!!!!!!!

有り得ないほどの爆音と爆風が辺りを吹き飛ばした。

エリアぎりぎりのところまで逃げると、ティガレックスの様子を窺う。

煙が晴れたそこには、体に紅い筋が走るティガレックスの姿が。

ゴルアアアアア!

耳を劈く咆哮と共にこちらへ向かって走り出してきた。

(は、速い！ 急いでエリア外に逃げないと)

怒り状態のティガレックスの予想以上の早さに驚き、

慌ててエリア外へと逃げるように促して逃げていく。

ゴオアアアアア!

後ろの方で叫び続けるティガレックスを後にして、エリア外へと逃げ切った。

(わ) (ティガレックスの怒り状態は、予想以上に厄介ね。あれは危険だわ)

私は息を整わせながら、対策を考えていく。

(戦ったことのあるエリカの意見が必要ね……)

「ユミナちゃん、アイテム結構無くなったけど、これからどうするの？」

「うん、丁度これから話そうと思っていたの。」

エリカ。何か注意するべきところはある？」

「そうですね……。どの武器でもヒット&アウェイで挑むべきです。攻撃を引つ掛けられただけでもかなり喰らいますから、安全を第一に図るべきですね」

「そう。……今で結構ダメージを与えたと思うけど、どう？」

「はい。あれはかなり喰らっているとします。一度寝床に帰るかもしませんね」

「ペイントは付けてあるから、どこかに行っても後は追えるね」

(さて、どうしようかな……)

私は安全に倒すための作戦を必死に考える。

閃光玉や罾はなくなったが、幸い回復薬はまだ沢山余っている。

(うーん、やっぱり隙を見て大きな一撃を与えて、後は逃げるしかないかな？

それに、まだ新しい弾丸^{カートリッジ}一つも使っていないしね……)

今回の目的のひとつである、弾丸カートリッジを使ってないことを思い出した。

私は、みんなに自分の考えを告げる。

みんなはそれを聞いて、「わかった」と頷いた。

「みんな、欲張っちゃ駄目だからね？ 安全第一で戦う事！」

「ええ〜ユミナちゃんがそれを言うの〜？」

「確かに、1番ユミナが守りそうに無いね」

「はい、それは私達の台詞ですね」

みんなの集中砲火に私の心はボロボロやられた。

私は苦笑すると、気を引き締め直しティガレックスの元へと向かった。

第七十三話「雪山に轟く咆哮」(後書き)

カートリッジシステムで使う弾丸を増やしました！
シンゴ様から頂いた意見を基にして考えました。
シンゴ様、ありがとうございました！

他にも、今まで感想や意見をくれた皆さん。
本当にありがとうございました。

私はいつもアレを励みにして頑張っていますし、
これからも頑張っていきたいと思えます。

弾丸については、次回の更新で明らかになります。
お楽しみに

追記

遷「あ、……またさらに弾丸新しく2つ追加しました。てへっ」

第七十四話「絶対王者」(前書き)

カートリッジ
弾丸ですが、6つから8つになりました。
つまり、新しく2つ増えました。

第七十四話「絶対王者」

第七十四話「絶対王者」

今回新しく追加された弾丸は^{カートリッジ}8つ。

まず最初の三つは、属性が弾丸に出来るならコレも出来るだろうと、工房が苦心を重ねて生み出された状態異常を引き起こす弾丸。

猛毒で敵の体力を削り奪う弾丸。

毒属性の紫雫の弾丸…デッドリイポイズン

神経毒で敵の動きを封じる弾丸。

麻痺属性の紺碧の弾丸…パラライト

特殊調合によって生み出された眠りへと誘う弾丸。

睡眠属性の水色の弾丸…サンドリイララバイ

そして次は、カートリッジ弾丸に可能性を見出し、未来を見据えての特殊弾丸。
主に補助などを行うために生み出された新しいもの。

薬などの成分を実体へと抽出に成功し、傷を癒す弾丸。

回復の碧緑の弾丸…リザレクション

あらゆる毒などに対応するための万能薬を使った弾丸。

治療の緑光の弾丸…リキュア

人の闘争心を仰ぎ、攻撃を強化するための弾丸。

強化の緋色の弾丸…フォルテシモ

鋼を超えるような高度を実現した守り抜く弾丸。

守護の黄金の弾丸…アイギス

最後の1つは、今の私にとっての最大の切り札となる弾丸。

それは

私はエリア8からエリア7へと戻ってきていた。

だがそこには、ティガレックスの姿は無く、
ペイントの臭気を確認してみても完全に移動していたことが分かった。

「ん、エリア6……いや、エリア8……って事は完全に入れ違いね」
また戻るために少し山を登らないといけないなんて、体力がもったいないね。

「また入れ違いに奈つても困るし、急いでいこっか？」

「はい」

みんなに確認をとると、私は小走りでエリア8へと向かった。

走りながら腰にあるポーチの中を探り、指先で弾丸をカートリッジ迷って確認する。

（最初は何から使おうかな？ やっぱり状態異常で攻めるのがいいかな。

…）
（少なくとも悪くも特殊弾丸の方は使いどころが限られているからね…）

私はそうと決めると、指で弾丸を3つ挟んでポーチから取り出した。

（先に装填してリロードおいた方がいいよね）

取り出された弾丸は、カートリッジアメジストのような綺麗な紫色の弾丸だった。

毒属性の紫雫の弾丸…デッドリイポイズン

私はエリア8の前で立ち止まると、武器を展開して弾丸をカートリッジ込めていく。

「ユミナちゃん。それはどんな効果なの？」

カートリッジ弾丸をこめる私を不思議そうに見ていたアイはそう聞いてきた。

「ん、これはね毒属性だよ。相手の体力を奪う奴だね」

「毒なんだ〜へえ〜」

アイはニコニコと笑いながらそう返してくる。

え？ 今ニコニコと笑う要素あったかな……？

私は時々アイが何を考えてるのか分かりません……。

「さて、私は準備できたけどみんなはどう？」

「私は構いません」

「僕もいつでも大丈夫」

「私も大丈夫だよ」

みんなの準備が整ったところでエリア8へと踏み込んでいく。

ティガレックスはエリアの中央でしきりに頭を動かして、何かを探しているようだ。

多分、私達を探しているのだろう……さっきまであの場所にいたしね。

「じゃあ、作戦と言うか戦う手順の最終確認ね。」

カートリッジ
弾丸が試したい私と、戦った事があるエリカを中心に攻撃を仕掛けるから、

キイはなるべく気を引いて……アイは私達の援護をお願いね」

「……はい！」「」

さて、いきますか！

私は一步、また一步と、ティガレックスへ向かって走り距離を詰めていく。

ティガレックスが私の間合いに入ったところで気付き、振り向きとうとする。

私はそれよりも早く懐へと潜り込んで、

太刀を引き抜くと同時にカートリッジシステムを発動させる。

「カートリッジ・装填^{リロード} デッドリイポイズン！」

ガチャンツ！！

私の太刀は、装填音を響かせてその効果を発動させた。

ポコポコポコッ！

刀身から紫色の毒がにじみ出て、毒が雫となり地面へと落ちる。

ジュウツ！！

と、一瞬大きな音を上げると足元の雪と地面がえぐれるように溶けていた。

私はゾツとした。

（な、なんて強力な毒なの！？ コレは相手の体力を奪うどころか消滅させそうな勢いだよ！！）

……使い方を気をつけないとコレは危険すぎるよ〜！

私はそんな事を考えていると、ハッと気付いた。

今ここは相手の懐の中、敵はもう私の存在に気付いている。

つまり……。

「ユミナ、危ない！！」

ティガレックスは私を噛み砕くように強靱なアギトで噛み付いてきた。

つまり、絶好の的と言っわけだよっ！？

私は必死に身をよじってその一撃をかわしたが、勢い余ってその場で尻餅を着いてしまった。

ティガレックスはそんな隙だらけの私を逃すわけも無く、今度は大きな右翼で私を捻り潰そうとしてきた。

ガキンッ！！

「全く……貴女はいつも油断しすぎです！」

ティガレックスの一撃は、私との間に割り込んできたエリカによって防がれた。

エリカの叱責に慌てて立ち上がる私。

「う、ごめんエリカ……」

「話は後です！ やれますか？」

「勿論だよ！！」

私は気を取り直してティガレックスの懐にもぐりこむ。

そして、跳ね上がる様に下から上へと斬り払った。

刀身から毒が染み出して、ティガレックスを侵食していく。

即効性の強力な毒のためか、ティガレックスが毒に侵食された場所は変色していく。

続けざまに私は、二連撃を放ちティガレックスの胸に×印に交差した傷をつける。

「行くよ！ 溶解一閃！！」

私は全力で横薙ぎに斬りつける。

刀身から溢れ出した猛毒がティガレックスの鱗や甲殻を溶かしている。

それと同時に毒でティガレックスの動きが少し鈍るのを感じた。

（これは、工房も凄いものを開発したわね……）

私は威力を実感しながら、深追いしないように一旦その場から離れ

る。

少し後ろへと下がるとアイが責める様な視線で見してきた。

「……はあ、ユミナちゃん油断しすぎだよ」

叱りつけるような厳しい声色にビクリとしながらも反論する。

「だって、この弾丸が想像以上に強力だったから……」

「まあ、確かに凄い威力だったけどね」

私はアイから視線を外し、戦っているエリカとティガレックスを見る。

流石に戦った事があるだけはあるって、エリカは色々と間の取り方が巧い。

私も最初は動きを観察するだけだったが、あそこまで動くことは難しい。

やっぱり、エリカ本人の強さも関係しているのだろう。

（……っと、見入ってないで私も戦わないとね！）

シューーッ！！

溜まった熱を排出する。

「カートリッジ・装填リロード デッドリイポイズン！」

そして、中にあるまた新しい弾丸カートリッジを発動する。

キイが素早く動き注意を引いていく中、エリカが攻撃を一撃ずつ積み重ねていつている。

私はタイミングを計り、ティガレックスの動きが止まる一瞬を待った。

キイとエリカが同時に斬りかかり、ティガレックスの注意が分割され一瞬だけ動きが止まる。

私はそれを確認すると瞬時に間合いを詰め、懐へともぐりこんだ。

そして

「紫毒、」

私はティガレックスの腹へ深く太刀を貫かせる。

一瞬で限界まで力を溜めて、解放する！

「爆撃ッ！！！」

刀身から大量の毒があふれ出て、爆発するようにティガレックスを襲った。

大量の毒が一瞬にして傷口から全身へと回り、ティガレックスを蝕んだ。

毒で動きが更に鈍るティガレックス。

思考も視界も霞んでいるのか、暴れるがその一撃は私達を捉えることが出来ない。

これを好機チャンスと思い、みんなが攻撃を重ねていく。

私も武器の中の最後の弾丸カートリッジを発動させ、全力で攻撃を叩き込む。

ゴオアアアアアア！！！！

ティガレックスは渾身の力で叫び、大気をビリビリと振るわせた。

私達は本能により一瞬身をすくませる。

ティガレックスにはその一瞬で事足りたようだ。

ティガレックスは私達に目掛けて、右翼を突き出して雪の塊を飛ばしてきた。

雪塊は、私、エリカ、キイの3方向へと飛んでくる。

エリカは自身の剣を盾に。

キイは自身の素早さで避けきり。

私は毒の雫で雪塊を完全に溶かしきる。

その一瞬の攻防の際に、ティガレックスはキイ目掛けて突進してく。

私はそれに反応して攻撃を仕掛けようとしたが

シューーッ！！ ガチャン……コロンコロン！

3発の弾丸と熱を排出していて、攻撃に移ることが出来なかった。

私はエリカにアイコンタクトを送る。

（エリカ、私はまだ動けないから任せた！）

（分かっています！）

アイコンタクトを送ると同時に動き出したエリカ。

ティガレックスは怒り状態で動きが速い……毒で鈍っているのにも拘らず。

キイは必死に突進を避けようと走る。

間一髪のところできいは何とか避けることが出来た。

そんなキイを追い越すようにエリカは走り、ティガレックスへと追いつく。

追いつくと同時に斬りかかるエリカ。

エリカの大剣がティガレックスに触れると火花が散った。

エリカは怯むことなく、ティガレックスと近距離で戦う。

私はその間に新しい紺碧の弾丸を1発装填する。

「カートリッジ・装填^{リロード} パラライト！」

刀身を薄い煙が包み込む。

刀身がティガレックスへと触れて裂傷が走ると同時に弾けた。

バチイ！！

神経毒がティガレックスを襲ったのである。

怯むように下がったティガレックスに、私はそんな絶好の隙を逃さず追撃する。

バチイバチイバチイ！！

ギャオツ！？

ティガレックスが悲鳴を上げると、神経毒で身動きが取れなくなってしまう。

私はポーチから緋色の弾丸を取り出して装填する。

「カートリッジ・装填^{リロード} フォルテシモ！」

刀身が練気のような紅い気で包まれる。

そして、それをエリカに向けて舞うように振るい捧げた。

すると、エリカの全身が紅い気で包まれていった。

「これは……!?!」

いきなりの事態に驚くエリカ。

そんなエリカに私は告げた。

「エリカ! 思いつ切りヤツて!!」

エリカは私に言われたことを理解したのか、

ティガレックスへと近づき溜め切りのモーションを取る。

私の力で強化されたエリカは、言霊を載せて全力で全てを叩きつけた。

「剛ッ!!」

ズバツ!!

強力な斬撃がいと簡単にティガレックスの甲殻を切り裂き肉を断つ。

ギヤアアオオオオオオ!!?!?

ティガレックスは強力な一撃に怯む。

そして、そのまま私達に背を向けて逃げ出そうとしていた。

「逃がさないよ！ カートリッ
」

私は逃がさないように新しい弾丸カートリッジを込めて追撃しようとする
と、一瞬にして辺りの空気が一変した。

（な、なにっ！？ く、空気が重い……！！）

かなりの重圧が私達を襲い掛かり、指一つ動かすことができなくな
ってしまった。

ティガレックスはそのまま進んで逃げようとしている。

吹雪で視界が悪い中、ティガレックスの先に黒い影が見えた。

ティガレックスはその黒い影に気が付くと、そのまま襲い掛かった。

しかし、私達は信じられないものを目にした。

ティガレックスが一撃で粉碎されたのである。

何の変哲もないただの一撃で、ティガレックスは全身が砕けてぐち
やぐちやになっっていた。

ズシンズシン！

影の主が私達へと近づいてくる。

近づいてくるたびに酷い重圧と殺気にさらされる私達。

(くっ……こんなに力の差を感じる敵が現れるなんて！ このままじゃ！)

私達は全員 死ぬ！

重圧と殺気で動けないでいると、遂に影の主がその姿を顕にした。

それは、絶対的王者。

今の私達には死神のようにも見えた。

私達の前に現れたのは

金獅子ラージャン

第七十四話「絶対王者」(後書き)

ふむ、ラージャンは少しやりすぎたかな？

ま、反省も後悔もしてませんけどねっ！

さて次回からはラージャン戦ですね！

いやまあ、ユミナ達は勝てるんでしょうかね？

それと、まだ使われていない弾丸カートリッジも使いたいと思います！

次回をお楽しみにっ

第七十五話「暴走と絶望と切り札」

第七十五話「暴走と絶望と切り札」

エリカSide

圧倒的強さを持った黒いソレが現れた時、私の中で何かが切れる音がした。

コイツダケハユルセナイ。

ワタシガコノテデゼツタイニコロス。

ヤット……ヨウヤクミツケタ！

私の中から黒い何かが這い出てきて私の全てを奪っていった。

記憶の中のアイツは晒っていた。

アイツは全てを滅ぼし奪っていった。

ゆるせない！

ユルセナイ！

許せない！

赦せない！

この憎悪を全てに力に換えて復讐する。

コロスコロスコロスコロス！！！！！！

私は大剣を構えてソレに向かって走り出した。

「うおおおおお！！！」

私はソレに飛びつくように斬りかかる。

冷静さを失っていた私は気付かなかった。

ソレが、復讐の対象ではなかったことに。

私の意識は暗闇の中でブツリと途切れた。

ユミナSide

重圧と殺気で動けない中、私の頭だけはフル回転していた。

コイツは本気でヤバイ。

いきなり目の前に現れたモンスターに格の違いを感じて気圧される。逃げるしかない。

でも、こんな化け物から無事に逃げ切ることが出来るのだろうか。

ティガレックス戦でみんなアイテムも体力も消耗している状態だ。

しかも、そのティガレックスを一撃で粉碎した相手。

そして、今、目の前にいる化け物は恐らく金獅子ラージャンだろう。

みんなの武器属性の相性も今は悪い。

上位、G級のハンターでも容易に殺してしまう化け物。

勝てないし、逃げることも出来ない。

絶体絶命。

誰か一人が囷になれば残りの3人は助かるが、囷役は 確実に死ぬ。

誰にも死んで欲しくないし、傷ついて欲しくない。

だから 私がやる！！

ラージャンと対峙してから数秒と立たない間に様々なことを考えて、

覚悟が決まった。

「みんな、逃　　「うおおおおお!!」「ッ!?　エリカツ!!」

私がみんなに作戦を伝えようとした瞬間。

エリカが弾かれたように飛び出して斬りかかった。

ラージャンはエリカを一瞥すると、ただ腕を振るった。

振るわれた腕はエリカを凄いい勢いで吹き飛ばして、氷壁へと叩きつけた。

私は慌てて二人に指示を飛ばした。

「キイ、アイ!　エリカを回収後速やかに撤退。私が少しの間囿をするから!

　これはリーダー命令よ!　急いで!」

私は普段絶対使わないリーダー権限を使っても二人を促す。

「は、はい!」

2人は急いでエリカの元へと向かう。

私はラージャンと改めて対峙する。

ラージャンはエリカの攻撃により既に戦闘モードである。

せめて3人が逃げるくらいの時間は稼がなきゃ……!!

先手必勝！ 最初から全力前回でやる！！

（スズネ起きて！ 私に力を貸して！）

私はさすがのような思いで、私の中で眠っているであろうスズネを必死に起こそうとする。

何度か呼びかけるとようやく目を覚ましてくれた。

【ん、……なんかヤバイみたいね】

（うん、だから最初から全力で！ ランディノスの時の技いくよ！）

【了解！ 全力でいくよ！】

スズネを起こすことは一種の賭けだったが旨く成功した。

「カートリッジ・装填^{リロード} ヴォルテック！」

翡翠の弾丸を入れ、最大出力で電撃を刀身に纏わせる。

練気とスズネの力を電撃とあわせていく。

漆黒と紅の電撃が刀身で爆ぜる。

【黒雷絶閃】

ズガガアアアアア

ンッ！……！！！！

黒い衝撃波がラージャンを襲う

しかし。

「な　　ッ!？」

ラージャンは無傷で私の攻撃を、片手で受け止めていた。

(私の……それも、スズネに力を借りた全力の一撃でも無傷だなんてっ!)

ラージャンは無機質な金色の瞳をこちらに向けると、受け止めたのと反対側の拳を私目掛けて振るった。

(あ、ヤバっ　　)

【させませんよ!!--】

ガキンッ!!

ラージャンの拳は透明な壁によって阻まれ、私に届くことは無かった。

「マシロ!？」

【アンタまで起きて来るとはね……】

【当たり前です!　マスターは私のマスターですから!】

私は一旦その場から離れた。

辺りを見渡すと、まだ離れたところにアイ達がいた。

このままじゃ……とにかく時間を稼がないと！

【マスター。私達は多分後5分ほどしか戦えません】

【だから、その5分で倒すか逃げるかしなさい】

5分か……それだけあればみんな逃げれるよね。

【私が全ての攻撃を防ぎます】

【私が攻撃を手伝うわ】

「うん、ありがとう！ よろしくね」

シューーッ！！ ガチャン……コロコロン！

弾丸と熱を排出する。

そして、新たな弾丸を込めていく。

白銀の弾丸

紺碧の弾丸

水色の弾丸

その全てを込め終わると太刀を構える。

「カートリッジ・装填^{リロード} アイシクル！」

凍えるような冷気を刀身に纏い、氷の礫が具現化されていく。

【敵の攻撃は気にせず突っ込んでください】

マシロの言う通りにして私は、一切の防御も回避も捨てることにした。

ただ一点、攻撃だけに集中する。

私はラージャンの間合いに踏み込む。

ブンツ　ガキンツ！

大振りの一撃が不可視の壁に弾かれる。

私はただ一直線にラージャンの懐へと目指して走る。

ガンガンガンガン！！

ラージャンは拳を高速で振るってくるが、全て弾かれていた。

そうして懐へともぐりこんだ私は、全力で斬撃を繰り出す。

「氷燐一閃！！」

ジャキンツ！！

ラージャンの胸部を一閃し、真一文字に凍りつかせた。

しかし、ラージャンは一切気にした様子もなく反撃してきた。

ガンガンガンガン！！

ユミナもラージャンの攻撃には一切見向きもせず攻撃を重ねていく。

「氷牢、」

全身をつかって回転しながら低い姿勢をとる。

「絶界ッ！！！！」

回転しながら跳ね上がり、連続で全身を斬りつけていく。

ジャキンジャキンジャキン！！！！

全身を氷が覆っていき、全体の8割が氷に覆われてしまったラージャン。

氷で動きが止まった。

私はその隙を逃さず、次の弾丸カートリッジを装填する。

「カートリッジ・装填リロード パラライト！！」

紺碧の霧に包まれる刀身。

私は氷の隙間を塗ってラージャンを斬りつけていく。

厚い毛皮と筋肉に阻まれて刃が通らないが、神経毒だけでも届くように斬り続ける。

「痺縛一閃!!」

渾身の一撃をライジャンの眉間へと叩き込んだ。

刃は数ミリ食い込み、それと同時に大量の神経毒を注ぎ込んだ。

「ハアアアアアア!!」

カートリッジ
弾丸を完全に使い切るまで力を使う。

グツガガア!?

ようやく届いた毒がライジャンの動きを奪った。

(今のうちに)

「カートリッジ・装填^{リロード} サンドリイララバイ!」

淡い水色の霧のようなガスが刀身から流れる。

それを刀身に纏わせて、ライジャンへと斬りかかる。

先ほど攻撃した場所をなぞるように全力で斬りつけていく。

「昏睡一閃!!」

唯一攻撃が通った眉間をまたもや狙い、全力で一閃。

グ…………ガア…………

麻痺とは違う睡眠の神経毒がラージャンを眠らせていく。

グ…………ウ…………

そして、遂にラージャンは眠りへと落ちていった。

「はあはあ…………はあ、なんとか、5分前に終わった」

私はラージャンに背を向けると、アイ達が逃げ切れたことを確認する。

【なんとかなつたみたいね】

【マスター今のうちに逃げましょう】

「うん、そうだね」

私は太刀をしまつてその場から去ろうとした。

【ユミナ!? 後ろっ!】

【マスター!?!】

慌てたスズネとマシロの声で後ろを振り向くと。

黄金の電撃がすぐそこまで迫っていた。

カッ チュドオオオオドゴオオオオオン!!!!!!!!!!

アイSide

私とキイ君はユミナちゃんに言われた通りに、気絶したエリカさんを連れて逃げています。

私は逃げながら、一人囷として残ったユミナちゃんを心配していた。

アレが金獅子ライザンなら、今の私達では絶対に勝つことは出来ない。

万全の状態で私達4人で挑んでも、多分大してダメージを与えることなく殺されてしまう。

疲労している今なら尚更だ。

それに、エリカさんの様子も少しおかしかったしね。

ユミナちゃんはいつもいつも一人で無茶ばかりしてる……。

私達にできることは何もないのかな？

「ユミナちゃん、大丈夫だよね？」

「……ユミナなら、もしかしたら」

「……」

「……」

私達の間には沈黙が下りる。

確かにユミナちゃんが、今私達の中で一番生き残れる可能性がある。

それでも、その可能性は私達の中ではと言っただけで、確率は一桁にも満たない。

「やっぱり、私達も加勢するべきなんじゃないかな……？」

「だけど、今戻れば足手まといになるし、全員無事に生き残れることは無い」

「そうだけど！ それでも」

「ん……うう」

私とキイ君が言い合いになりそうになったところでエリカさんが目を覚ました。

「エリカさん！ 大丈夫！？」

「大丈夫ですか！」

「私は……あ……」

エリカさんは痛む体を無視して起き上がった。

「ゆ、ユミナは何処ですか？」

エリカさんの問いかけに私達は俯いてしまふ。

「ユミナちゃんは、私達を助けるために一人残りました……」

「なんてことですか……くっ、私の所為ですね」

エリカさんは悔しそうに齒噛みした。

そして、拳を地面へと叩きつけて憤りを見せる。

「エリカさん、貴女に一体何があったんですか？」

キイ君はエリカさんへところ質問した。

「私は
」

エリカさんは自分の過去について話し始めた。

私は昔、とある村に両親と一緒に暮らしていました。

そこは何処の村とも変わらず平和で言い村だったんです。

14年前のあの事件が起こるまでは。14年前のあの日、

私達の村に一頭のモンスターが襲撃してきたのです。

しかもそのモンスターは見たことも無い全くの新種で、
村のハンターたちは手も足も出ずに次々と殺されていきました。

ハンターの中には英雄級の凄く強いハンターもいましたが、
ソイツには全く歯が立ちませんでした。ソイツは、その悪魔は、

漆黒で灰かに紅く染まった体

禍々しく、全てを奪い去った角

無機質に冷たく光る、黄金の瞳

全てを拒絶する、硬質な鱗と甲殻

斬り裂き、穿つ爪

鞭のように撓り、全てを掃う尻尾

今でも消息が不明で、何一つ解ってはいません。

いや、唯一解っている事が……“倒せない”だけです。

そして、私は両親に部屋の奥に隠されました。

そして両親は、悪魔を倒しに行こうとしました。

けれど、英雄級のハンターでも勝てないのです。

両親に勝ち目なんてありませんでした。

しばらくして私は、居ても立ってもいられなくなり、ドアの隙間から外を覗きました。

そこから見て私は絶句しました。

そこには無残にも殺されて貪り喰らわれている両親の姿がありました。

私は声にならない絶叫を、力の限り叫び続けました。

すると悪魔が不意にこちらを向きました。

私は恐怖で座り込んだしまい、自分も食われてしまう、殺されると思いました。

しかし悪魔は、私を見るとニタアと邪悪に晒い、私を無視して、両親を見せ付けるように貪り喰らいました。

そして、食べつくすと私のほうを見て晒い去っていきました。

絶望した私は心から世界を拒絶し、そのまま気を失ってしまいました。

次に目を覚ました時は、声を失ってドンドルマで寝ていました。

無気力になった私を、レエーユ村の村長が引き取って一緒に旅をしました。

そこで出会ったのがカイトさんです。

カイトさんは私の声を取り戻して、言霊の力を下さいました。

それから私は、悪魔に復讐を誓い、村長と一緒に狩りを続けました。

強くなつて何時かアイツを倒すために……けれども、

それからもアイツは現れることは無かったです。

「私は復讐の相手をラージャンと見間違えて、

勝手に暴走していたみたいですね。本当にごめんなさい」

エリカさんは心の底から悔やんでいて頭を下げてきた。

「エリカさん……」

「……」

私達は何を言っているかわからず、ただ拳を強く握るしかなかった。

「……私はもう大丈夫です。早くユミナを助けに行きましょう！」

「で、でも……ユミナちゃんは……」

「もう、目の前で大切な人を失うなんて嫌なんです！

もう誰にもこの気持ちを味わって欲しくないです……だから！」

.....。

.....うん、そうだよな。

私もユミナちゃんを絶対に失いたくない。

私の大切な大切な大親友だもん！

ユミナちゃんはいつも私達を助けてくれる。

だから、今度は私達がユミナちゃんを助ける番！

「うん、私はユミナちゃんを助けに行くよ！」

「私も全力を尽くします」

「僕も出来るだけ頑張ってみるよ」

私たち3人は決心して、来た道を引き返そうとした。

カツ　　チユドオオオオドゴオオオオオオン！！！！！！！！

巨大な金色の光柱が立ち昇り、かなりの轟音と衝撃波がここまで届いた。

「な、なんですか!?!」

「あっちは、ユミナの方じゃないか!」

「ユミナちゃん!?!」

私達は慌てて、ユミナちゃんの元へと向かって走り出した。

ユミナSide

そこら中に砂埃と雪が舞い上がっていた。

パラパラ……

あたり一面爆撃されたみたいに吹っ飛んで、地面や壁が抉れている。

「こほこほっ……なん、て、威力なの。直撃は……何とか、免れたけど、

マシロの……張った防御、壁を、衝撃だけで、押し……通す……なんて」

私の体は既にボロボロの限界だった。

全身血塗れで、肋骨数本と左腕が完全に折れていて、右足の骨にはヒビが。

「こほこほっ！ くう……逃げる、のは、不可能ね……」

折れた骨が内臓に刺さっているのか、私は吐血する。

全身が痛くて、動くこともままならない。

【マスターすみません。完全に私の落ち度です】

「そんなことない。マシロは、私を護って、くれ、たじゃない」

【ユミナごめん。油断してた。それに……私達、もう】

「わかって、る。後は……私に、任せておき、なさい！」

もうとっくに5分を過ぎている。

マシロとスズネはもう戦えないだろう。

つまり、マシロ達がない今、私は本当に絶体絶命って奴ね。

【ごめんなさい……】

【死なないで……】

私の中でマシロ達が眠りにつくのが分かった。

万事休すね……。

ラージャンは黄金に輝きながらをこちら向けながら、じっと見据えている。

金獅子……怒り状態か。

……。

打つ手が無いわけではない。

私にはまだ一つだけ切り札が残されている。

ただどこの切り札は諸刃の剣。

私は今の状態でコレを使えば下手したら死ぬかもしれない。

……………。

まあ、どちらにしろ死ぬのなら生き残る確立がある方を選ぶよね普通。

私は最後の切り札を切る前に、最低限足掻く。

「かー、とりつ……………じ・装填リロード リザ、レクション！」

ポーチから碧緑の弾丸を取り出して、装填する。

「癒せ」

私は何とか立ち上がり、その場に太刀を突き刺した。

刀身から緑色の光があふれ出て、円を描くように足元に広がった。

私の傷が少し癒されていく。

「装填リロード」

残っていた弾丸カートリッジを全部使い、少しでも動けるように回復させていく。

ラージャンは動くことなく、こちらをじっと見据えている。

私は残っていた薬も全て使いある程度体を回復させて、何とか立ち上がり動けるまでに回復した。

「これで、最低限、準備は済ました」

激痛を我慢しながら携帯食料を少量かじり、砥石で切れ味を戻す。

スウ ハア

深く深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

ポーチから一つの弾丸カートリッジを取り出して装填する。

解放の透明の弾丸…リミテッド

人や武器に掛かっている全てのリミッターを一時的に解除して、文字通り全力を出せるようになる禁忌の弾丸。

勿論、リミッターを外すとデメリットがある。

人も武器も下手をしたら壊れてしまう可能性がある。

物凄く大きなデメリットだが、その分最強と言っても過言ではない力を得る。

壊れている今の体で使えば、その後起こることは十分に想像出来るであろう。

それでも、私には譲れない思いがある！

「カートリッジ・装填^{リロード} リミテッド!!」

ガチャンッ!!

白い気が武器と全身から立ち昇る。

(力が……無限に湧いてくる。これなら)

戦える！

私は一瞬で数メートル離れていたラージャンの懐へ潜り込んだ。

ラージャンは私を完全に見失っていた。

「
」

私は下から上へと斜めに一閃した。

ズバッ!!

赤い鮮血が舞う。

一瞬で十数連撃という斬撃をラージャンへと叩き込む。

厚い毛皮と筋肉に阻まれること無く、私の斬撃は全てを切り裂いていく。

ガアッ！！

ラージャンはそれでも怯むことなく、私に反撃を繰り返してきた。

「
」

パシッ

私はそれを正面から片手で受け止めた。

互いの力が拮抗する。

「エクスポージョン」

ガチャンッ！！

太刀が自動的に弾丸カートリッジを装填した。

この弾丸カートリッジのいいところは、
コレを使っている最中に他の弾丸カートリッジを使えることである。

「火龍一閃」

私は力いっぱい太刀を振るう。

刀身からありえないほど大きな炎が、龍の形を形成してラージャンへと襲い掛かった。

ドゴオオオオオオン！！

ラージャンは吹き飛ばされていく。

「オーシャン」

ガチャンッ！！

紅い弾丸が弾き出され、蒼い弾丸が装填される。

「時雨一閃」

大量の水が、高速を超えるスピードでラージャンへと殺到した。

ズドドドドドゴオオオオン！！！！

雪埃を舞い上げてラージャンは見えなくなってしまった。

私はそれでも攻撃を一切止めることは無い。

「アイシクル」

ガチャンッ！！

白銀の弾丸が装填され、私の周りに氷柱が浮かぶ。

「氷燐一閃」

時雨一閃と同じような規模の氷柱がラージャンへと殺到する。

ズドドドドドドゴオオオオン！！！！

雪埃は更に大きく高く舞い上がり、ラージヤンは影すらも確認できなくなった。

「
」

私は黙ってそれを見つめ続ける。

カツ!!

雪埃の中が力強く煌いた。

「!?!? アイギス!!」

ガチャンツ!!

私は咄嗟に守護の黄金の弾丸……アイギスを発動させ展開した

チュドオオオオドゴオオオオオン!!!!!!

ラージヤンは口から光線を吐き続け、金色の光が辺り一面を塗りつぶしていく。

「デスペアレンス」

ガチャンツ!!

「
」

ドゴオオオオオオンツ!!!!!!

ラージャンの真上に現れた私は、全力で地面へと叩きつけた。

しかし、叩きつけられながらもラージャンは私を掴み、思いつ切り投げ捨てた。

雪の上を凄い速さで転がっていく私。

氷壁へとぶつかりようやく止まった。

「リミテッド」

私は体に限界を感じながらもリミテッドを延長する。

「
」

ガアアアア!!

私とラージャンは全力で走り互いに間合いを詰めて、私の太刀とラージャンの拳が交差する。

かなりの速度と力でぶつかり合い衝撃波が生じる。

今の私は人間の本当の全力を使える。

筋力も頑丈さも再生力も化け物並へとなっていて、素手でもそこら辺のモンスターと軽く渡り合えるぐらいには強くなっているはず。

その分体への負担も尋常じゃないが……。

幾度となくラージャンと正面からぶつかり合う。

流石に相手も規格外の化け物……そう簡単には負けてくれない。

(やっぱり、私が不利……でも逃げるわけにはいかない)

今の状態なら逃げることも可能かもしれない。

けれど、私は逃げないと、強くなると誓ってしまったから……戦う！

「エクスプロージョン」

ガチャンツ！！

幾つもの小爆撃が起こり、あたりを吹き飛ばしていく。

「オーシャン」

ガチャンツ！！

大量の水を操り、ラージャンの動きを封じていく。

「ヴォルテック」

ガチャンツ！！

水を通して全体へ高圧電力を流し、雷を叩き込む。

「アイシクル」

ガチャンッ！！

氷柱で貫き、凍て付かせて動きを奪う。

「ドラグニル」

ガチャンッ！！

黒い雷がラージャンを襲い吹き飛ばす。

「デッドリイポイズン」

ガチャンッ！！

猛毒でラージャンの毛皮を溶かし、ジワジワと耐力を奪う。

「パラライト」

ガチャンッ！！

神経毒でラージャンを痺れさせる。

「サンドリイララバイ」

ガチャンッ！！

水色の霧が包み込み、深き眠りへと誘う。

「デスペアレンス」

ガチャンッ！！

眠っているところに全力の一撃を叩き込む。

「はあはあはあ」

十数分、私達は全力で戦いあい、流石に私の体は限界を超えていた。だが、ラージヤンは未だ余裕を持って私の前に立ちはだかっていた。

（もう、コレが最後ね……コレで倒せないなら、私の負け）

「リミテッド」

最後の透明の弾丸を使用する。

「ヴォルテック」

続けて翡翠の弾丸を使用した。

私は全力の力を溜めていく。

ラージヤンは何かを察したのか、口を大きく開きそこに球体が発生した。

かなり高密度でエネルギーの高い雷のようだ。

喰らったらただじゃすまないだろうね……。

私は全身に雷を纏わせて、神経の伝達速度を上げ、更に大きな力を

ためていく。

バチバチバチバチバチィ！！！！

バチバチバチバチバチィ！！！！

お互いに雷が迸る。

私はそこへ練気を混ぜて更に力を上げていく。

私は全身が雷に変わったような錯覚を覚え、遂に準備が整った。

そこでラージャンの方も準備が整ったようだった。

そして、私達はどちらかともなく 動いた！

「雷神一閃ッ！！」

ガアオッ！！！！

かなりの速度でラージャンへと飛び込み、最速最強全力全開の一閃を叩き込む。

対するラージャンは、高密度高エネルギーで超圧縮された雷球を放つ。

三人称 S i d e

爆発の後、煙が晴れていく。

煙が晴れたそこには……。

大量の血を流すライジヤンの姿があった。

ライジヤンが延ばす右腕の先には、血塗れでボロボロなユミナの姿だった。

「……私、負け……ちゃった」

ツーとユミナの頬を伝う一筋の涙。

「み……んな、ごめ……ん……ね」

ユミナは意識を手放した。

第七十五話「暴走と絶望と切り札」(後書き)

遂にユミナチート化か!?

リミテッドの効果がやばいね!

デメリットも凄いけど……。

ユミナ負けちゃったよ?

え、これってどうなるの……? というか、ユミナ死に掛けたね。

物語の主人公が、ここで終わったら駄目だよ!!

……これから、どうしよう!?

てな感じで、次回をお楽しみに

第七十六話「夜舞う桜と龍宿す姫」

第七十六話「夜舞う桜と龍宿す姫」

アイ達は吹雪の中、山頂を目指して走っていた。

先頭を走るアイの表情は珍しく歪んでいた。

（さつきよりも凄い音と衝撃があったけど。ユミナちゃん……大丈夫だよ？）

全員表情が晴れず苦しそうにしている。

そして、ようやく山頂へとたどり着いたアイ達が目にしたのは

ラージャンに掴まれている、全身ボロボロで血塗れのユミナの姿だった。

「い、いやあああああああ……！！！」

ユミナの姿が目に入った瞬間、アイは力の限り絶叫して目の前の光景を否定した。

しゃがみ込んで眼に大粒の涙を溜めながら、必死に頭を振って否定

する。

キイもエリカも目の前の光景が信じられずに固まってしまっ

ユミナは力無くラージャンに掴まれていて、生きているかどうかも定かではなかった。

「いやっ!! なんで、違う、嘘だっ!! こんなの……嘘って言うてよ! ユミナちゃん!!」

「そんな……まさか、ユミナが……死んだのか?」

「……ッ!? ユミナを……ユミナを離せええええ!!!!」

エリカが背中の大剣を抜き放ちながら、ラージャンに接近して斬りかかる。

ガキンッ!!

ラージャンの体に届くと思われた斬撃は、寸前でその腕で受け止められてしまった。

ラージャンは力で大剣を押し返す。

そして、エリカに生まれた隙を逃さずに、拳を横薙ぎに叩き込んだ。

ドゴオッ!!

拳で吹き飛ばされたエリカは、氷壁へと思いつ切り叩き付けられた。

エリカは、それでも諦めずにラージャンへと再び切りかかっていく。

「絶対に、……絶対に許さないんだからあッ!!」

憤怒に彩られたアイが、ボウガンを展開して銃口をラージャンへ向ける。

ラージャンの頭に照準を合わせて引き金を引く。

バンバンバンバン!!

撃てるだけ全て撃つと、すぐに新しい弾を装填して撃つ。

がむしゃらに放つそれは、ラージャンに当たるが差してダメージにはならなかった。

ぶつかる弾が鬱陶しく思ったのか、ラージャンは片手で雪を掬うと思いつ切りアイに向けて投げつけた。

疎らな大きさの雪塊がアイへと沢山迫った。

「鬼人化」

雪塊とアイの間に入り、剣を振るう。

鬼人化で強化された力で雪塊を砕き落としていく。

「僕……俺も流石にブチ切れた。てめえは絶対にに赦せねえ」

キイは、ポーチから狂走薬グレートを取り出して飲み干した。

「全力で消す！」

鬼人化状態のまま、ラージャンの間合いへと潜り込む。

エリカもそれにあわせるように、後ろへと回り込んで斬りかかった。

「乱舞！！！」

「斬ッ！！！」

キイとエリカによる同時攻撃は、呆気無く防がれてしまう。

キイはラージャンに力で無理やりねじ伏せられて、

エリカは剛毛に阻まれて刃が届かなかった。

ラージャンはクルリと反転して、

その勢いのままバックブローをエリカに当てて吹き飛ばす。

2人の攻撃の後に弾丸の嵐が襲うが、剛毛に阻まれたいたしたダメー

ジではないのか、

ラージャンは全く気にせずアイの方を見る。

ガアッ！！

ラージャンは大きく口を開けると、黄金の光弾を吐いてアイを襲った。

スドゴオオオオン！！

光弾はアイに直撃すると、かなりの威力だったのかアイを数メートルほど吹き飛ばした。

僅か数分としない内に、アイ達は壊滅状態へと陥ってしまった。

ラージヤンは未だに右腕でユミナを掴んでいる状態のままだ。

「ま、まだ……終わって、ないんだからっ!!」

「絶対に負けねえ……」

「ユミナを……離して、貰います」

3人はボロボロになりながらも起き上がり、再びラージヤンへと攻撃を仕掛ける。

その度、ラージヤンに殴られ、吹き飛ばされ、叩き付けられてボロボロの雑巾のようにされる。

それでも、諦めることなくラージヤンへと向かっていく。

諦めず、必死に繰り出される攻撃は。

助けたいと思う思いが。

ついに、ラージヤンへと届いた。

「喰らええええええええ!!」

エリカとキイは、ユミナを掴んでいる右腕を切り裂き、

アイはラージャンの眉間を撃ち抜いた。

右腕に浅く裂傷が走り、眉間から血が迸る。

ラージャンの高速が一瞬弱まり、その腕からユミナが零れ落ちる。

エリカとキイはそれに向かい必死に駆け寄り抱きとめようとする。

ガアアアアアアアアアア！！！！

ドンッ！！

しかし、突然の衝撃波に2人とユミナは吹き飛ばされてしまった。

その衝撃波を発生させた主は、怒り状態のラージャンであった。

ユミナは雪の上を転がっていき、

2人は思いつきり叩き付けられ身動きが取れなくなってしまう。

ガアアッ！！

ラージャンはアイに向かって、光線を吐いた。

黄金の雷撃は、アイを襲い吹き飛ばして壁へと叩きつけた。

雷撃による激痛と、壁にぶつかった衝撃で一瞬息が止まってしまふ。

アイは霞む視界で必死にラージャンを睨んだ。

ラージャンはアイに興味を失ったように踵を反すと、

転がっていったユミナの下へと歩き出した。

(いや、やめて！　それだけは……逃げて、ユミナちゃん！！)

ラージャンはユミナも傍で立ち止まると、右腕を天高く振り上げた。

そして、それを振り下ろそうとした瞬間。

ラージャンの動きが止まった。

それどころか、その場の空気が凍りついたような錯覚が辺りを包んだ。

ラージャンの後ろの方に2つの影が静かにラージャンへと近づいていく。

その影は、人　紛れも無くハンターであった。

片方は、巨大で美しい紅い大剣を背負った、雌火竜で作られている防具を身に纏った女性。

もう片方は、見慣れない艶やかな鎧と言うよりは服、を纏い、大太刀を背負った女性。

この空気は2人の女性から発せられていた。

2人は並んで歩いていて、そのままラージャンと擦れ違った。

瞬間。

カチンッ

太刀の女性から鏗鳴りの音だけが鳴った。

太刀を一切抜いた様子は無いが、柄に手が伸ばされていた。

そして。

ゴトリ

ラージャンの振り上げていた右腕が落ちて、遅れて血が大量に噴出した。

ラージャンも全く事態についていけず放心している。

大剣の女性は、本当におかしそうにくつくつと晒っていて、腕を切った女性は、表情一つ動かさずに目を瞑ったままだった。

ラージャンはようやく自分に起こった事を呑み込んだ。

グギヤアアアア!?

叫び声を上げながら斬られた腕をもう一方の腕で掴んで暴れる。

「 嫌い」

大剣の女性が不愉快そうに表情を歪め、ラージャンの横腹に鋭い蹴りを穿つ。

そう、ただ蹴っただけである。

ドグウッ！！

鈍い音と共にラージャンの巨体は、吹き飛ばされて壁へとめり込んだ。

「ふむ、こやつが使っているのが、カートリッジシステムとやらじやの？」

「そうね、傍目から見たら私達に匹敵するわ」

「クツクツク……素晴らしい力には代償がのう」

「この子なら、私達に追いつく日も遠くは無いわね」

「全力で手合わせを試みたいもんじゃの」

「やめときなさいエレン。死ぬわよ、この子」

「ふむ、「冗談じゃ桜華」

2人は先ほどの出来事にまるで興味が無いように、普通に話していた。

そこに危機感なんて物は一切無かった。

ガアッ！！

いつの間にか壁から抜け出したラージャンが、光弾を吐いた。

カチンッ

また鏝鳴りの音だけが鳴り響いて、光弾が微塵に切り裂かれていた。

「邪魔ね、死ぬ？」

桜華と呼ばれた女性は殺気をぶつけながら淡々と呟く。

そこに割り込むように、エレンと呼ばれた女性が話しかける。

「ワシが殺つてもいいかの？」

大剣の柄に手を掛けながら、戦闘準備万端で聞く。

「……はあ。まあいいわ。あまり派手にやり過ぎないようにね」

「わかつとる」

2人の会話が終わる前にライジアンは、左腕で殴りかかった。

桜華は全く見向きもせず目を瞑ったままである。

エレンが一步前へと出て、大剣で拳を叩き落として大剣を仕舞う。

バランスを崩したライジアンに、エレンは打撃を加えていく。

蹴り、殴り、叩きつける。

女性は、とても楽しそうに攻撃をしライジアンを追い詰めていく。

怒り状態のラージャンをただの身体能力だけでボコボコにする。

「ハハハハハハッ！！ どうしたのじゃ？ そんなもんかのう？」

ラージャンが殴りかかってくるのにあわせて、懐に潜り込んで拳を叩き込む。

目にも留まらぬ速さで拳を叩き込み、圧倒的な威力で相手を宙に浮かせていた。

エレンはラージャンの全身を殴打する。

「弱いのが……」

落胆したように呟くと、胸を蹴り吹き飛ばす。

吹き飛ばされたラージャンは、空中で体勢を立て直すと地面へと着地した。

そして。

グルガアアアアオオオオオオオオ！！！！！！

天高く咆哮して、更に毛が逆立ち電撃が迸る。

「ふむ、まさかG級クラスのラージャンじゃったとはのう。

……激昂状態、おもしろいのう！」

落胆していたエレンは、少し驚いたような表情をすると一転して嬉しそうに晒った。

離れていた桜華は、ラージャンとは別の方へ驚いていた。

「……G級クラスのラージャンを上位になりたて　しかも単独ソロで、
一時でも互角以上に戦うとは……予想以上に素晴らしいものです
ね、

カートリッジシステムというものは。いや、それとも彼女が、と
言い換えるべきか」

感心したように呟く。

「クッククク……ワシの剣の餌食となるがよい」

エレンは背中の剣に手を掛け構えようとする。

それを見て、桜華は額に手を当て深く溜息をついた。

「……全く、派手にやりすぎるなって言ったのに」

「焼きつくさ」

「ソレは、やりすぎよエレン？」

桜華は一瞬でエレンの前に立ちはだかり、殺気を込めて睨み付ける。

エレンは動きを止めて肩をすくめる。

「ふむ、わかったのじゃ。そう怒るでない桜華。ちょっとしたお茶
目って奴じゃ」

「……お茶目で、辺り一帯を焼き滅ばされたくはないわ」

「しょうがないのう……解放は使わないからワシに戦わせてくれ」

「……いえ、あまり時間も無いから、私が殺るわ」

2人は黙って静かに睨みあう。

張り詰めた空気が辺りを凍りつかせていく。

沈黙が続きやがて、エレンは諦めた。

「わかったのじゃ……我慢するから、早う殺ってしまえ」

エレンが未練がましくラージャンを睨みながらそう言う。

「ええ……」

桜華は踵を反すとラージャンと対峙した。

対峙した瞬間、ラージャンが高速で拳を繰り出した。

ガキンツ！！

ラージャンの拳は寸前で何かに弾かれてしまい、桜華に届くことはなかった。

ガアアアア！！

大きく口を開き、巨大な光線を吐き出すラージャン。

「ふんっ」

カチンッ

鐃鳴りの音と共に光線は真っ二つに切り裂かれてしまう。

グルガオオオオオ!!!

ラージャンの左腕に雷光が集う。

そして、ラージャンは離れた場所から高速で拳を前へと突き出した。

雷撃の奔流が、桜華へと向かって迸る。

「ふむ、見たことの無い攻撃じゃの」

見ていたエレンは淡々とそう呟いた。

「じゃが、桜華には通じんのう……」

雷撃の奔流は見事に切り裂かれ、ラージャンは懐へ侵入を許してしまっただけだった。

「全てを切り裂く」

ラージャンは慌てたように桜華へと拳を振るう。

しかし。

「夜桜」

ラージャンは拳ごと真つ二つに切り裂かれて、絶命した。

神速の抜刀による一撃は、刀身を誰の目にも見せることなく、鐔鳴りの音と斬撃の音だけを響かせて切り裂いた。

「……終わったわ」

「ふむ、ご苦労じゃの」

「さて、この子達を運んで治療しないとね」

「急ごうかの……あまり時間がないのだろうか？」

「一番重症な子は私が運ぶわ。後は任せるわ」

「ワシが3人も運ぶのかのお……」

桜華はユミナに近づくと、その背中できさしく背負った。

エレンは、いつの間にか気を失っていた3人を順に持ち上げて担ぐ。

「じゃ、急ぎましょうか……」

桜華はそれだけ呟くと、進みだし、エレンもそれに続いていく。

第七十六話「夜舞う桜と籠宿す姫」(後書き)

……あらら？ この方たちは一体……？

さあ、一体誰なんでしょうか？

まあ気が付いている方もいらっしやるかもしれませんね。

だが、しかし！

この方たちについては次回紹介です！

それでは、次回をお楽しみに

第七十七話「不穏な気配」

第七十七話「不穏な気配」

????Side

クックック……。

あと少しで全ての準備が整う。

これらの全ての実験が成功した暁には、あの国の全てを排除して我等が君臨する。

これで、我等は絶対に負けぬ……。

もう力だけのあの脳筋どもの時代は終わり。

これからは、我等の科学の力が世界を支配する。

ハンターなどと言った野蛮人の時代はコレで終わりなんだよっ!!!

さて、私とエレンはライザンを軽く捻った後、重傷の四人を抱えてドンドルマまで戻ってきた。

まあ、私はカートリッジの娘1人しか背負ってなくて、後はエレンに全員運ばせたんですけど。

馬車の中である程度治療は済ませましたけど、カートリッジっ娘は重傷過ぎてどうしようもないですね。

専門に任じた方が良いと思い、静かに急ぎながらギルドへと足を運ぶ。

カララーン

軽快なベルの音を響かせながら私達は入る。

中にいた何人かの人々が私とエレンに気付いて、ヒソヒソと喋りだす。

お、オイ！ あれ、夜桜じゃねえか！？

ああ、しかも隣のは龍姫だ！

なんで、あんな伝説の2人がここに？

それよりも、あの2人に抱えられている重傷のは……

！？ 剣聖やあの黒いのの知り合いじゃねえか！

本当にあの後ろの娘は何者なんだ！？

……へえ、剣聖達とも知り合いなんですか。正直驚きました。

黒いのつてのは誰か分かりませんが、

やはりこのカートリッジっ娘は凄いいみたいですね。

私はそんな事を考えながらもまっすぐとギルド内を歩いていく。

カウンターまで行くと、ギルドマスターと閃光が私達に気付いた。

「！？ 夜桜……その子達はどうしたの？」

重傷の4人を見て警戒しながら言う閃光。

「ここに来る途中の雪山で拾ったわ。詳しい話はこの子達の治療の後」

「ふむ、そうだな。急いで治療しよう！ 閃光、すぐに手配を」

「かしこまりました」

閃光はマスターに言われ、一瞬にしてその場から消えた。

……相変わらず速いわね。

私の居合い抜きとどっちが速いかしら……？

「マスター……そういえば、ワシらを呼んだのは何故じゃ？」

今まで黙っていたエレンがマスターにそう切り出した。

「うむ、詳しい話は全部後でも良いか？」

「ワシは全然構わんよ」

「私も別にどうでもいいわ」

そこに閃光が突然現れた。

「準備ができました。すぐに治療に掛かりたいので、急いで運んでください」

「わかったわ」

「人使いが荒いのお……」

私達は4人を抱えて、準備された部屋まで運んでいった。

「ふう、ようやく一息つけるわね」

やることを全て終えた私は溜息を吐きながら椅子に座る。

力を抜いてくださーと背もたれに背を預けながら話を聞く。

「うむ、エリカ、キイ、アイの3人はあの怪我ならすぐに目覚める

だろうな。

だが、ユミナは見た目以上に酷い」

ギルドマスターは苦しそうな顔でそう告げる。

私的には、マスターがあの人……というか、

カートリッジ娘以外の名前を知っていたことの方が驚いたわ。

カートリッジ娘は、大切な新システムの披見体で上としては注目するのは分かるが、

まさかその仲間の名前まで覚えているとは誰も思わないわ。

「はい、外傷よりも体の中の怪我の方が数倍酷いです。

恐らく、カートリッジシステムの新しい弾丸……リミテッドの副作用だと思われます」

「ほう……あのG級相当のライザンと単独で一時的に互角で戦えた、

あの時の弾丸がそうだというわけじゃの……」

エレンは心底楽しそうにそう呟いた。

というか、エレン……貴方気付いていたのね。

「G級相当のライザンだと!? この子達は確か、
ティガレックスの討伐に向かったはずだ」

「どういふことですか龍姫?」

エレンはそう聞かれて面倒くさそうな顔をした。

「桜華」

「分かってるわエレン。……実は最近問題となっている大型モンスターの乱入が、

運悪くこの子達に起こりました。相手はラージャン。

最初は私達もただのラージャンと思っていましたが、追い詰める
と激昂状態になり、

G級のラージャンということが分かりました」

私の説明に啞然としていくマスターと閃光の二人。

この子達も運が無かったわねとしか言いようがないわ。

「それで、そのカートリッジっ娘の怪我はどれだけ酷いのかしら？」

私の質問に答えたのは閃光だった。

「左腕、右肩、肋骨複数本、両足の骨折。所々骨が砕けているところもあります。」

そして、全身の筋肉がやられ内蔵も数箇所損傷。頭部にも甚大じやないダメージが」

「……ほぼ致命傷じゃない。よく生きてるわね、あの娘」

「うむ、大した生命力じゃのお……」

私とエレンは呆れたように呟いた。

「はい、生きてるのが不思議なくらいの損傷です。最低でも半年は

動けないでしょう」

「ああ、運が良かったとしか言いようが無いな」

まあ、G級ラージャンが乱入してくる時点で運がいいとは言えないと思うわ。」

「それで、私達を呼んだ理由はなんですか？」

「それはだな」

コンコン

急にドアからノックの音が聞こえてきた。

「ああ、丁度いいところに来たな。入っていいぞ」

「失礼します」

「にやはは、入るよ」

「「入るよー！」」

そう言って入ってきたのは、驚きの人物だった。

「うむ、良く来てくれたな。“剣聖”“魔弾”それに“双月”よ」

「はい。当然です」

「暇だったからねえ」

「うんうん！ マスターが呼ぶのなら」「私達は喜んでくるよー」

私とエレナ、それに閃光と同じ伝説の二つ名持ちだった。

剣聖ジークハルト・ミラ・ディバイン

魔弾ディア・ハーツ

双月ミナ・クルト

双月カナ・クルト

こうして、伝説の二つ名たちが6人も集うことになるなんて、

一体いつ以来かしら……？

因みに、双月は2人で1人だから1人と数えられる。

「ふむ、久しい顔ぶれじゃの……しかし。

こんなにワシ等を集めるとは一体何事なんじゃ？」

エレンはマスターを睨みながらそう言った。

「 大国デルヴィナートを知っているか？」

「 ? 確か隣の国がそんな名前だったような……」

「それで、そのデルヴィナートがどうかしたんですか？」

剣聖が首をかしげながらそう呟き、閃光が話を繋げる。

「うむ、最近あの国から不穏な噂が流れてきていてな。

なにやら、近々ハンターズギルドに宣戦布告して戦争をするとか」

私達全員が息を呑んだ。

「ふむ、そやつらは馬鹿なのか？ 小型モンスターに苦戦する一般兵如きが、

ハンターに勝てるわけも無かるつ。だから、ハンターに依頼するというのに」

「龍姫の言うとおりだね。望んで負け戦をするとか、馬鹿としか言いようが無い」

「何でなんだろうねー？」「どうしてなんだろうね？」

「まあ、話しは最後まで聞け……。それでなその国はハンターが、いない代わりに“科学”という何やら奇妙な技術が発達しているな。

何やら最近怪しい動きばかりを繰り返しているんだ」

「怪しい動き？」

私はその言葉が気になり訪ねてみる。

「ああ、最近その国からモンスターの捕獲以来が殺到していてな。

……特に新種のランディノスを捕獲するよう頼む依頼が多い」

「ランディノスと言えば、結構前に話題になった奴じゃの

ふむ、ワシもソイツと一度戦ってみたものじゃ」

「エレン」

私がエレンに釘を刺すと、

「わかっておるわ」と拗ねた様に呟いた。

「奴等、ハンターが嫌いな割りにしつかりと俺等を利用して

正直何が起こつても不思議じゃない。

だから、念のために君等に集まってもらったんだ」

「他の連中はどうしたのじゃ？ 死神や紅蓮達はともかく、

堅王や幻影ぐらいは来るじゃろう？」

「ああ……堅王と幻影は偶々遠くに行っていて来れないんだ。

他は素直にここに来てくれる様な奴等じゃないからね」

「戦いと聞いたらすぐに来そうな人たちだと思うんですけどね……」

私がそう言つと他のみんなは苦笑した。

「つまり、隣国のデルヴィナートが不穏な動きをしているので、

戦争になった時のために私達を呼んだと言つわけですね？」

「その通りだ」

私が話を纏めてそう言つと、マスターは静かに頷いた。

「話はこれで全部ですか？」

「それより、重傷ってどういうことなんだ？」

「アイちゃん達も重傷らしいけど」

「言葉どおりの意味です。依頼途中にモンスターが乱入して大怪我」

「そこにワシ等が颯爽と現れ助けたというわけじゃ」

「まあ、見に行った方が早いわ……閃光、案内しなさい」

「はい」

私とエレンは閃光についていく。

その後ろを剣聖と閃光がついてきて、よく分かってない双月が面白そうについてくる。

まったく、騒がしい連中ね……。

第七十七話「不穏な気配」(後書き)

久しぶりの更新です。

最近、一話からずっと改稿ばかりして「……………」や「」の統一。それに誤字脱字の訂正などしていて更新できませんでした。あつ、ちよつとだけ文を変えたりもしました。

いま、ようやく半分まで改稿したところですが、まだ後半分もあると思うとちよつと辛いですね。

誤字脱字を見つけた場合は知らせてくれると嬉しいです(^-^)

こんなことしてないで、早く更新しろボケ

……と思う人もいます。

だけど、「ああ、この駄目作者だもんなあ」

と広い心で許してくれると嬉しいです。

それでは、また次話でお会いしましょう！

あでゆ

第七十八話「Areas（アリアス）」

第七十八話「アリアスAreas」

桜華Side

私は二つ名持ち達を連れて、3人が眠っている部屋まで訪れた。

カートリッジっ娘は重傷すぎて、設備が整った病室に隔離されている状態だ。

私は一応扉をノックしてから返事を待たずに部屋へ踏み込む。

「いやいや、ノックしたなら返事ぐらい待てよ……」

剣聖が何やら呆れたように呟いているが、私はソレを完全に無視する。

そもそも、ついさっき気絶している状態を持って帰ってきたのだから、

目覚めているはずがないだろう。

部屋に入ると、3つのベッドに3人の眠っている姿が目映った。

私はすぐ近くの椅子に腰掛けて目を瞑る。

他の人たちも勝手に動き出した。

私は背中に背負っている太刀　　霊桜刀　　を腕の中に抱えるようにして収める。

「それにしても、この子達に本当に何があったんだ？」

剣聖が私とエレンに問いかけるように聞いてきた。

エレンは面倒そうにこちらを見てきた。

「……………」

私にそれを沈黙で返すと、エレンは溜息をつき仕方なさそうに説明を始めた。

「実はじゃ。ワシと桜華はギルドマスターに呼ばれたので、このドンドルマに向かっておったのじゃ。

その途中にラージャンと戦っている少女がいたんじゃが……。

そやつが今噂のカートリッジシステムの使い手つてのが分かって観戦してたのじゃ。

そしたら、負けてしまったの、後から来た仲間もみんなやられてしまったので、

ワシらが仕方なく助けてやったのじゃ」

「ラージャン……………だと……………？　この子達ではまだラージャンに挑むなど無謀すぎる」

剣聖がありえないって表情で呟く。

エレンはこれでもかかってくらい面倒そうな顔をする。

相変わらずエレンは戦い以外はからつきし駄目ね……。

「仕方がなかったのよ。本来はティガレックスを倒して終わりだったはずが、

ラージャン。それも、G級相当のが乱入してきたのだから……」

私は仕方がなくエレンに助け舟を出してあげる。

「ふむ、その通りじゃ」

剣聖と魔弾は納得したような顔をして頷いていたが、双月の2人は全く分からないって顔をしていた。

剣聖と魔弾の2人は面識があるからでしょうね……。

「それで？ ユミナさんは何処にいるんだ？」

「一番奥の病室で隔離状態よ」

私がそう言った瞬間、みんなの表情が一転した。

流石の双月でもこれの意味は分かったみたいだ。

「一番奥って……」「とつてもヤバイんじゃない……」

顔を真っ青にして呟く双月の2人。

「待て、ユミナさんはそんなに重傷なのか？」

私は視線を閃光に向けて、詳しく説明してあげなさいと目で合図した。

「左腕、右肩、肋骨複数本、両足の骨折。所々骨が砕けているところもあります。」

そして、全身の筋肉がやられ内蔵も数箇所損傷。頭部にも甚大じゃないダメージが。

軽く見積もってもこれだけの損傷があります。

レーザーによる攻撃のダメージもあります、

リミテッドという弾丸カートリッジの副作用が怪我を更に酷くしています」

「最低でも半年ぐらいは動けないんじゃない？」

「ふはあくそれはあの子も災難だねえ……」

エレンと私、閃光の3人を除く全員は顔を蒼くしている。

あらかた話が片付いたのを見ると、

私は本来の目的を遂行するために霊桜刀を片手に立ち上がった。

「ん？ 桜華よ一体何処に行くのじゃ？」

「最初に言ったでしょ？ 私は彼女の様子を見に行くって」

私は扉の前まで行き、首だけ振り向いて言う。

「誰一人後をつけて来ないでよね。……ついて来たら容赦なく斬るわ」

「おおー怖い怖い。分かってるおるのじゃ」

おどけたようにエレンは返してきた。

「それじゃ……」

キィ パタン

扉を閉めて部屋を後にする。

誰も後をつけてこないことを確認して、目的の病室を目指して進む。

私が考えることは、あのカートリッジっ娘である。

(あの娘……似てる。いや、似すぎている……か)

脳裏に浮かぶ、アイツの顔と比較しながら溜息をつく。

無茶ばかりして心配させるアイツ。

大怪我しても全く懲りることなく微笑むアイツ。

自分のことは全て二の次で他人ばかりにお節介なアイツ。

エレンと同じ私の大親友で、私の憧れで護りたかった存在。

私は病室の前に立ち、私は静かにノックをして帰ってこない返事を待つ。

シーンと静まり返る廊下。

私はドアを開けて部屋の中に静かに入っていく。

私の視界には、真っ白な病室とただ1つのベッド、

それにまるで死んでいるかのように眠る、包帯だらけの少女が映る。

「ユミナ……アリアス」

スツと眠る少女の顔を見て私は、

（やはり、似ている……。顔も名字も、そして）

顔を顰める。

（ アイツみたいに他人のために自分を犠牲にして無茶ばかりする姿が）

私は一歩、ベッドに近づき顔をそっとなぞり込む。

似すぎるその顔を眺めながら私は記憶を辿っていく。

初めまして！ 私、 ・アリアスっていうの。よろしくね

始めてあつた時、彼女は無邪アイツ気に笑っていた。
私はそれを鬱陶しく思い邪険に扱った。

あれ？ 桜華ちゃんじゃないどしたの？

邪険に扱う私を気にもせず話しかけ続けてきた。
素直じゃない私は、嬉しさを現せず悪態ばかりついた。

私は別に無理なんてしないし、無茶だなんて思っていないよ

いつも無茶ばかりする。アイツは私を心配させすぎる。
しかもそれに全く気付かない……本当に困った奴だ！

聞いて聞いて！ 私ね、好きな人が出来たんだ！

私はそれを聞いて、ほんの少しだけその人に嫉妬をして、感謝した。
どうか無茶ばかりするアイツを護ってやってください。

えへへえ、あの人との間に子供が出来たんだ……

本当に嬉しそうな顔をして、私も自分のことのように嬉しかった。

……あの人は、死んじゃった。わたしい……どう、すれば！

落ち込んで泣き崩れるアイツを慰めながら、

私はアイツを一人残して死んでしまった夫に怒りを覚えた。

私はこの子の未来のために戦うんだ。あの人が残した私の唯一の宝物！

そういつてまた無茶をしたアイツを私は止められなかった。

あは、は。ごめん、ね？ 桜華ちゃん……私、あの子に何にもしてやれなかった。

目の前で死に掛けているアイツに私は何もしてやれることが出来なかった。

今まで、ありが、とうね？ い、つも……心配ばかり掛けてごめんね？

私もアイツもいつも気付くのが遅すぎる。遅すぎた。

私、の最後……のお願いは、あの子を、私の娘を頼んだよ？

泣き崩れ縋り付く私に、あいつは困ったよう微笑み掛ける。

それと、わたし……しを、笑顔で……見送っ……て？

私はアイツの最後のお願いを聞いて、泣きながら一生懸命笑った。

あり、がとう。こんな、我侭な私、なんかと友達でいてくれて。

そんなの、私の方が言いたいよ！　こんな素直じゃない私なんかを
ずっと気にして。

ずっとずっと私と一緒にいてくれた……それすらも言葉にできない
ほど感謝したいのに。

本当に……あり、がとう……ね……

私はアイツの最後のお願いを1つだけ聞いてやれていない。

アイツの娘……名前も容姿も全く知らない。

何処にいるのか、今生きているのかも知らない。

私が見つけたのは、アイツの娘がいた村がモンスターに襲われ全滅したという事実。

すぐにそのモンスターを殺したが、後に残ったのは遅すぎる後悔だけ。

（もっと、もっと早く）

私はアイツの最後のお願いを叶えてやれなくて、ずっとずっと後悔している。

（ もっと早く、アイツのお願いを！ ちゃんと聞いてあげれば！！）

私は気が付けば涙を流していた。

乱暴に服の袖で涙を拭くと、霊桜刀を抜き放ち刀身を見せる。

綺麗な桜の模様を刀身に宿す、硬く、鋭く、怪しく、暗く光る、冷たい、白い刃。

刃から遠のくほど鉄特有の黒味を帯び、桜色の花びらの模様が描かれている。

銘を【霊桜刀】

東の辺境にある島国の一の名匠の最高傑作。

それを構えながらわたしは一人呟く。

「貴女が、本当に、もし、万が一……アイツの娘ならば、娘だとして……!!」

シャキン!!

霊桜刀を真一文字に振るい、空を斬る。

「私は、アイツの為に貴女を……」

カチン

霊桜刀を鞘に戻し、身を翻して扉へと向かう。

「なんてね。そんなはずがないものね……アイツの娘が生きるなんて。」

きつと私の願望で独りよがりよ……」

ドアノブに手を掛けて、扉を開いて外に出ようとする。

「……」

私は首だけ振り向かせて、少女を見る。

あどけない少女の眠る表情は歳相応に見える。

「……生きていたら、貴女と同じくらいの年頃かしら？」

私達はいつも遅すぎる。どれだけ強くなるうとも、絶対的な力を得ようとも。

遅すぎて、遅すぎる後悔が……いつも私達を責める……」

私は今きつと苦虫を噛み潰したような表情をしているだろう。

「……どれくらい時間がたてば、遅すぎる後悔をしなくて済むんだろっね」

部屋から出て、扉をそっと閉める。

私は力が抜けたようにドアに背中を預けて、その場で座り込んでしまふ。

今すぐに泣きそうなのを堪えて、上を向く。

私は世界で一番大切だった、大好きな親友の名前を呟く。

「
」

その呟きは虚空に消え、私は膝を抱えて俯いた。

アイSide

私が目を覚ますとそこは知らない部屋で、ベッドの上だった。

辺りを見回すと知っている顔がちらほらと。

私は全くわけが分からなかった。

「お、アイちゃん起きたんじゃない〜?」

ディアさんがそう言ってこちらへと近づいてくる。

それに続いて、ジークハルトさん、レイさんと知らない女性二人が近づいてきた。

1人は退屈そうに椅子に座ったままだったが。

「何があつたか覚えてる〜?」

(??) 何かあつたんだろうか……?)

私は必死に自分が目覚める前のことを思い出していく。

……確か……。

ティガレックスを討伐に行った。

あと少しつてところで、ラージャンに襲われた。

エリカさんが気絶して、ユミナちゃんが1人残って。

助けにいったら、ユミナちゃんがやられて私達もやられた。

そして、ラージャンはユミナちゃんに止めを……。

「ユミナちゃん!? ユミナちゃんは何処なの!? 無事なの

！？ 生きてるの！？

「アイさん、落ち着いてください……。ユミナさんは瀕死の重傷ですが生きてます」

「本当……？ ……というか、ここは何処ですか？ 他のみんなは？」

「ここはドンドルマの医療施設です。他の皆さんは隣のベッドで眠っていますよ」

私は首を動かし、レイさんが指した方向を見ると、そこには眠っているキイ君とエリカさんがいた。

みんな、無事だったんだ……。。

とりあえず一安心した私は、何があったのかを聞いた。

レイさんが一通り説明するのを聞いていると、キイ君とエリカさんも目を覚ました。

一緒になって説明された。

助けてくれたのは伝説の二つ名持ちの夜桜さんと龍姫さんらしい。

私は、龍姫さんにお礼を言うと、

「ふむ、別に構わんのじゃ。気にするな」といわれた。

（というか……なんでこんなに伝説的な人が勢ぞろいなんだろう！

?)

それを疑問に思い聞いてみた。

「ああ……なあ？ この子達に話してもいいのか？」

「……どうでしょう？ マスターに聞いて見なければ私には分かりません」

「にははは、でも一応極秘事項でしょ？ そんなものポンポン話すのもどうかなく」

「私達は……」「別にどっちでもいいよー！」

「ふむ……小難しいことは桜華担当じゃから、なんとも言えんのがチャリ」

「別にいいんじゃない？」

いきなり部屋に入ってきた綺麗な女性がそう言った。

「おお！ 桜華。帰ってきたのじゃな」

「ええ、たった今ね」

（キイ君、エリカさん、あの人誰かな？）

（今までの話とこのメンバー的に、夜桜って人じゃないかな？）

(私もそう考えるのが妥当かと思えます)

(なんか、この空間が凄すぎて何もいえないね)

(そうだね(ですね)(

私達は苦笑した。

「それで、どうだったのじゃ？」

「……目を覚ます気配は一向にないわ」

「ふむ、それもじゃが……あの例の件じゃ。確認はできたかのう？」

「寝ている相手に確認なんて出来るわけないでしょう？」

「それもそうじゃったの」

龍姫さんはわざとらしく笑う。

何やら話しているみたいだけど、半分以上も理解は出来ない。

それよりも今の私の心の中の大多数を占めるのはユミナちゃんだ。

役に立てなかった。

護れなかった。

(ユミナちゃんはどんどん強くなっていく。それも無茶ばかりして……。

私はそれについて行く事が出来ない……私は、弱すぎる……)

私は親友としてそれでいいのかと自問した。

やっぱり、答えは既に出ているよ。

「あ、あの！」

私が急に大きな声を出して、何事かと全員こちらを向く。

「私を……私を鍛えてください！！！」

私の突然のお願いに、全員　キイ君もエリカさんも　驚く。

「急にどうしたんだ？」

みんなを代表してジークハルトさんが尋ねてくる。

「私、強くなりたいんです！」

「いや、だから……なんで急にそれを？」

「私は、私は……今度こそユミナちゃんを護れるように、強くなりたいんです！！」

「お願いします！　私を鍛えてくれませんか!？」

「いや、それは　「貴女は、」……?」

ジークハルトさんが何か言おうとしたのを、夜桜さんが言葉で遮った。

「はい？」

「貴女にはそれだけの覚悟があるかしら……？」

あのカートリッジっ娘を護る覚悟はあるのかしら？」

カートリッジっ娘！？」

一瞬誰かと思ったが、話の流れ的にユミナちゃんだということが分かった。

「はい！」

「本当に？ あの子は、あのカートリッジシステムって奴で、

一時的にでも私達に匹敵する実力を持っているのよ？

しかも、無理無謀……無茶ばかりするような子に、

生半可な覚悟だけじゃ絶対に追いつけないわ。貴女にはそんな地獄を味わってでも、

あの子を追い求めて守ろうつと言う覚悟はある？」

私は頭の中で考えた。

しかし、答えは既にもう出来ている。

「はい」

私と夜桜さんは睨みあう。

どれだけ威圧され、死という恐怖が纏わり付こうとも私は目を逸らさなかった。

完全に空気が凍りつき、周りの皆は迂闊に動けなくなった。

エリカさんとキイ君は恐怖の中必死に耐えている。

ジークハルトさんにレイさん、それにディアさんはいつでも動けるように構える。

双月さん達はオロオロと慌てて辺りを見回している。

この空気の中、龍姫さんが1人だけ楽しそうにくつくつと笑っている。

シャキン

私の前に綺麗な刀身が現れる。

「……………なっ!?!」「……………」

夜桜さんがいつの間にか抜いた太刀の切っ先を私に向けていたのである。

周りは驚愕する。

「……………あの手のタイプは、いくら周りが心配しても心配をよそに無茶するわ」

「はい、私もよく知っています」

「……………自分を省みずに、他人の為ばかりに行動する」

「そうですね、私も何度注意したことが」

「……とても自分勝手に、救いようがない馬鹿よ？」

「……そうですね。私もそう思います。けど」

私は笑顔で告げる。

「それでもユミナちゃんは、私の大切な親友ともたちですから」

「……そう」

カチン

夜桜さんは無表情なままいつの間にか太刀を納刀していた。

そのままクルリと背を向ける。

「エレン……この子達の修行に付き合ってやりなさい。」

殺さなければ何をやってもいいし、手加減なんか一切いらないわ」

「ふむ、桜華がそういうのならば了解じゃ。ワシに任しておくのじや」

「周りで暇している貴方たちも、手伝ってあげなさい」

そういつて夜桜さんは部屋から出て行った。

夜桜さんが出て行った後、龍姫さんが私達を見て告げる。

「時間がないのじゃ。さっそく始めるとしようかの……。
3人そろって訓練場に行くがよい」

「3人……？」

「それって……」

「私達もですか？」

「なんじゃ、嫌なのか？ せつかくワシが付き合ってやるんじゃ早
うせい。」

それと、あのカートリッジっ娘は最低半年は動けん。

じゃからそれまでにお主らを徹底的に鍛えてやろう。桜華の頼み
じゃからの」

そついつて龍姫さんも部屋から出て行った。

私は慌ててベッドから飛び出ると、準備をするために部屋から出て
行った。

後ろからキイ君とエリカさんも慌てて付いてくる。

（待つててねユミナちゃん？ 私達はこの半年で、ユミナちゃんを
護れるように、

一緒に胸を張っていられるように……絶対に強くなるから！）

私達の過酷な修行の日々が始まった。

桜華 Side

「 それでもユミナちゃんは、私の大切な親友ともだちですから」

あの少女の決意を聞いた時。

桜花は私の大切に大好きな、一番の親友ともだちだよ

私は大好きな親友の告げた言葉を思い出した。

人気がない長い廊下を一人で静かに歩き続ける。

「 ……ねえ、私はこれでよかったのかしら？」

何よりも大事な親友の名をそつと呟く。

当たり前だが、返ってくる言葉は一言もない。

私は苦笑する。

願うこと………思うことはただ一つ。

「 せめて
「

せめて、あの子達は遅すぎる後悔をしませんように……

第七十八話「Areas（アリアス）」（後書き）

ようやく、改稿が全て終わりましたので、次話を投稿しました！
けど、多分まだ誤字脱字や修正し切れていないところがあると思うのでもし見つけたら教えてくれると嬉しいです。

なにやら、シリアスな空気が続いている気がしますけど、
まあ気にしない（＾・＾）

次話は少し時間が飛ぶかもしれませんが、
それでは、また次話でお会いしましょう。

第七十九話「動き出す闇」(前書き)

皆さんお久しぶりです。

更新が遅れてしまい申し訳ございません。

実は、(後書きに続く)

第七十九話「動き出す闇」

第七十九話「動き出す闇」

??? Side

とある一室。

部屋の中は暗闇に染まり、謎の物体からあふれる光だけがその存在を肯定する。

暗い部屋の中は散らかっており、沢山の書類や謎の物体、半透明な液体が詰まったナニカが入っている巨大なガラス筒。

その光に照らされている痩せこけた白衣の男。

「ついにこの時が来た……」

男は心底可笑しそうに嗤い、小さく言葉を紡いでいく。

「ようやくあいつらを全員始末することができる。」

偉そうに傲り高ぶっていた一愚か者共（ハンター達）を！！」

唾うその男の表情は、狂気と憎悪に満ち溢れていた。

男は愛おしそうにガラス筒の表面をそつと撫でる。

「キミがこの戦いの秘密兵器だよ……。」

遠慮はいらぬよ。戦いが始まったらすべてを食らい尽くせばいい」

呪詛のように言葉をつぶやき、話しかける。

男はサツと踵を返すと、出口へ向かい歩き出す。

「この世は理不尽で溢れている。人が人を淘汰する。

今では人だけでは飽き足らず、自然やモンスターまで自分勝手に殺す。

己が欲望のためだけに……まあ、これは私が言えた義理ではないのだがな。

……君はどう思う？」

男は虚空に問いかける。

すると、誰もいないはずの室内に黒き影が現れる。

「……私は、別に。マスターの指示に従い敵を排除するだけ」

黒いローブで全身を覆っている影は、男にただ淡々と言葉を返す。

高く透き通った声は少女のもののように聞こえる。

「ふっ、相変わらずつれないね。もう少し愛想という奴を身に着けたまえ、

……それではまるで人形みたいだぞ？」

「申し訳ありません」

黒ローブは頭を下げる。

「硬い、な……もう少し喜べ。お前に新しい妹ができるのだから」

「……はい」

「……まあいい。あれの世話はお前にすべて任せる。

この一週間で全てを仕込め」

「かしこまりました」

男は廊下に出ると、あまりの明るさに顔を顰めた。

軽く舌打ちをして長い廊下を歩いていき、その後ろに静かに黒ローブがついていく。

「一週間後……ついに、始まる」

笑う唾う唾う。男は唾う。

「さあ！ 戦争の始まり……開戦だー！」

三人称Side

黒白の空間。

そこでは、熾烈な殺し合いが繰り広げられていた。

ドガアアアアアン!!!

何も無い空間が爆ぜていき、風、水、炎、雷といった自然現象同士がぶつかり合う。

そのたびに大爆発が起こり、衝撃があたりを凧いでいく。

黒と黒の影が互いにぶつかり合い交差する。

「くっ!? 一体これは何だっというの!」

片方の黒い影……鈴音が叫ぶように声を出す。

「……………」

もう片方は何も言わず、ニイツと狂ったような笑みを向ける。

そのまま右手を鈴音に向けると、黒い力収束していき奔流となって襲った。

鈴音は咄嗟にそれを躲すと、追撃されないように魔力弾で牽制する。

しかし、黒い影は一瞬で鈴音の間合いに入り込み一閃。

ドゴォー！！

鋭い蹴りは鈴音の腹部に直撃し、鈴音は体がくの字に曲がり悶絶する。

「ハッ！」

黒い影は、そのまま嘲笑うように漆黒の魔力弾を大量に叩き込む。

ドゴォオオオン！！

衝撃により鈴音はかなり遠くにまで吹き飛ばされてしまう。

「ハッ！ 狂え狂え狂えクルクルクルクルエエエエエエ！！！」

黒い影は、両手を真上にかざして大量の魔力を収束していく。

大量に集められた黒い魔力は、高密度に圧縮され細長い槍のような形になる。

それに捻じりを加えて強力な一撃を生み出す。

「ハッ！！ シネエ！！！」

黒い魔力槍を吹き飛んで行った鈴音目掛けて投げつける。

キイイイイイイイインツ！！

亜音速で目標へ向かって飛来するそれを、鈴音には止める術がなかった。

ズシャアツ！！！！

鈴音の胸に黒い魔力槍が突き立った。

衝撃で体ごと吹き飛ばされた鈴音は飛来し、壁にぶつかるとまで止まることはなかった。

「ガッ！？　　ごぶっ……………」

鮮血が辺り一面に舞い、口から大量の血を吐く。

黒い影は静かに鈴音へと近づいていく。

「……………」

「……………ネエ？　シンダ？」

黒い影は鈴音に問いかけるが、鈴音はピクリとも動かない。

ガッ！

黒い影は鈴音の顔を蹴って反応を調べる。

「くっ……………あ……………っ……………」

鈴音は少し顔をあげて黒い影を睨みつける。

「アレ？ ナンダ〜マダイキテタンダ」

「あ、んたは……一体……だれ、だ！」

「アレ？ ワカラナイノ？ ワタシガダレダカ……」

黒い影は狂気を張り付けたような顔で晒う。

(いや、影、自体が……負の感情……狂気、そのもの、
と言ったほうが……正しい、わね)

黒い靄がかかり見えにくかった表情がはっきりと見えた。

「あん、た、は……ま……さか!？」

「アハハハハ、ヤットワカッタノオ？」

「ユ、ミナ？」

「ソウダヨ！ セイカクニハ、アイツノココロダケドネ!!」

(ココロ……ですって?)

鈴音は訳が分からないという表情をする。

ユミナに似た黒い影は何が可笑しいのか、狂ったように嗤う。

狂うように笑う影に鈴音はただただ恐怖した。

「死ぬわ」

「ッ!? ……はい、まずは貴女の治療から」

白い光が鈴音を包み込む傷を癒していく。

真白は鈴音に近づき、胸に刺さっている魔力槍に手を伸ばす。

「我慢してくださいねっ!! ……はあ!!」

ズシヤッ

「くう、がつ……あああ!?!」

槍が抜かれ大量の血が溢れ出る。

真白はすかさず治療に専念し、白い光を傷口に当てる。

傷口は見る見るうちに消えていき、残ったのは破れた服と血だけになった。

「……行けますか?」

「……誰に向かって言っているのよ」

2人は立ち上がると、未だに嗤い続けている黒ユミナを睨みつける。

「ハハハハ ……フウ。オワツタ?」

「ええ、待つて頂けるとは思いませんでした」

「ハンデダヨ、ハンデ！　コノママジャイツポウテキスギテ、オモシロクナイデシヨ？」

「アンタ、ゲームかなんかと勘違いしてるんじゃない？」

「カンチガイシテナイヨ？　ワタシニトツテハシヨセンハオアソビ。アナタタチハ、イマココデワタシニコロサレルンダカラ……」

「何者かは知りませんが、貴女がマスターに仇名すというのなら。……　殺します！」

「デキルカナ？　アナタタチゴトキニワタシヲコロスナンテ。マツ、ベツニイヤ。……　ハハッ！　シンジャエ！」

「はっ！　上等よ！」

黒白と狂気の殺し合いが爆音とともに始まった。

「ここに戻ってくるのもずいぶん久しぶりだね」

間延びした声の少女……アイ・フローズは、自身の仲間2人に話しかける。

「そうだね、この半年間まともに帰って来れなかったしね」

「とても厳しい修行でしたから……　武器も防具もそれなりにボロボ

口です」

キイ・レディルトとエリカ・リヴィアは思い出すかのように話を返す。

この半年間、彼女たちは剣聖、閃光、魔弾、龍姫、夜桜の5人に、徹底的までに鍛えられていた。

狩りの技術はもちろん、精神面も鍛えられており、生半可なことじゃ動揺しなくなっていた。

「思い返してみればこの半年間……何度死にかけたやら」

「2桁ならまだしも、3桁は洒落になりませんですから」

「うう……辛かったね」

ある日は、徹底的までのボコボコにされて。

ある日は、飛竜種の群れに投げ込まれて。

ある日は、素早いモンスター達と耐久マラソンをして。

ある日は、人がこなせるとは思えないほどのトレーニングを消化させられ。

またある日は、狩りに制限や無茶振りをされたりもした。

「私達、よく死ななかったね……」

「そうだね」「はい」

3人は震えながら、しみじみと涙を流す。

周りの人たちは「なんだコイツら?」と、変なものを見るような眼で眺めていた。

「……さ、ユミナちゃんに会いにいこっか!」

「「はい!」「」

気を取り直してアイは、2人にそう告げて目的の場所へ向かって進みだす。

「ユミナちゃんは、まだ一度も目を覚ましてないんだったよね……」

「そう……です、ね。それほどまでにあの時の戦闘のダメージと、副作用が大きすぎるんだろうね」

「はい。私達は何もできなかった……それがとても悔しいです」

「う、ん。でも、だから私達は強くなった!」

ユミナちゃんを守るために、一緒についていくために!」

「うん、僕らはこの半年間でカートリッジを使わないユミナは追い越した」

「そうですね。後はユミナに抜かされないように、

カートリッジを使うユミナと並ぶように頑張るだけですな」

「大丈夫……みんなで一緒にがんばろう！」

アイの言葉に頷く2人。

3人は歩き続けて、ようやくユミナが眠っている場所までたどり着いた。

「ユミナちゃん……」

アイは祈るように小さく呟いて、扉を開けて中へと入る。

部屋の中はベッド以外に大したものはなく、質素な感じで、布により窓から入る光が防がれ、明かりのない部屋は薄暗かった。

ベッドの上で安らかに眠るユミナの姿が全員目のに入った。

かすかに聞こえる規則正しい呼吸の音が、ユミナが死んではいないという事実を証明している。

3人はそっとユミナへと近づいていく。

アイはしゃがんで、眠るユミナの右手を両手で包み込み、額に持っていつて静かに祈る。

（ユミナちゃんが一刻も早く目を覚ましますように）

必死な表情をしたアイは思わず手に力を込めてしまう。

それでもユミナは何の反応も示さない。

アイはそれが悲しくて苦しくて、下唇を噛んで堪える。
泣き出してしまわないように……。

後ろでそつと見守っていたキイが会いに話しかける。

「アイ、そろそろ……」

そういうと、アイは無言で手を放して立ち上がる。

「ギルドマスターが私達に伝えたいことがあるそうです」

「そう、だったね……うんわかった。行く？」

アイ達は静かにこの部屋を後にし、ギルドマスターの所へと向かった。

とある一室。

その部屋は長く広い机が置かれていて、沢山の椅子が並んでいる。

そこには滅多に御目にかかれない顔触れが揃っていた。

一番奥の席にギルドマスターがいて、そこから

剣聖、閃光

魔弾、龍姫

双月、夜桜

が机を間に挟んで向かい合つように座っていた。

「それで？ マスター。修行を中止させてまでワシらを呼んだ理由は、

一体何なのじゃ？」

重い空気が流れる中で一番最初に口を開いたのは龍姫だった。

「ああ、それは済まなかった。実はな」

大国デルヴィナートが宣戦布告を仕掛けてきた

「何だと……？」

「ついに動き出したのですか」

「にやはは、面白くなってきたね」

「はわわ……」「戦争なの……！？」

「ほう……」

「……」

それぞれがその言葉に反応し声を上げる。

「それで、マスター。一体どうするつもりですか？」
全員を代表して剣聖がギルドマスターに問いかけた。

「奴らは、1週間後に攻めてくるつもりだ。
だからそれまでにハンターを集めて戦争の準備をしなければなら
ない」

「奴らに勝算なんてあるのかのお？」

「……あるから仕掛けて来たんだろうな。
奴らは俺たちの知らない“科学”という未知の技術を持っている。
これが多分奴らにとっての戦争のカギとなるものなんだろう」

「……私達は一体何をすればいいのかしら？」

今までずっと黙っていた夜桜がそう問いかけた。

「ああ。奴らが仕掛けてきたら迎え撃ってほしい。
攻めてくる連中を制圧したら次は、奴らの城を制圧。
それでこの戦争は片が付くはずだ」

「隣国とはいえ、あちらに行くのに結構時間がかかるわよ？」

「わかっている。だから予めあちらに行く人員を割いておけばいい
だろう」

ギルドマスターはそれきり黙って何かを考え始める。

数分後。

何か思いついたのか、顔を上げて話し始める。

「……前線に立って戦うのは剣聖、魔弾、双月に頼む」

「何じゃと？ ワシは前線で戦えんのか！？」

戦えないと知って憤慨する龍姫。

「落ち着きなさいエレン。マスターはまだ全て言っていないでしょ？
最後まで聞いてなさい」

「むう……桜華がそういうのじゃったら、」

夜桜がそう言って言い聞かせると、渋々と引き下がる龍姫。

「閃光は俺の指示に従って動いてもらう。」

そして、夜桜と龍姫の2人はデルヴィナートに行って貰い、
敵をすべて制圧してもらいたい。

生死は別に問わないが、なるべく生かして貰って欲しい」

「おお！ それならワシらに任せるのじゃー！」

「はあ……まあ、別にいいわ」

先ほどとは打って変わった龍姫の態度にため息をつく夜桜。

「む？ それなら当分はあやつらの修行が出来ないという訳じゃの」

「ああ、それなら問題ない。そろそろ来るはずだが……」

コンコン

「アイ・フローズです」

「入りたまえ」

「失礼します」

ノックとともに現れたのは、アイ、キイ、エリカの3人だった。

アイ達は集まっていた面々を見て驚いたようだ。

「何のようでしょうか？」

「実はな」

ギルドマスターは先ほど剣聖達にもした話をもう一度した。

戦争が始まる。

君たちの修業はこれで終わり。

君たちにも戦ってもらおう。

要約するとこのような話がされていた。

それを聞いたアイ達は、互いを見やって頷く。

「はい。私達にもできることなら全力を尽くしたいです！」

そんな返事がアイから出された。

「では、みんな。1週間後に戦争だ。

それまでの間各自でそれぞれ準備をしなさい。

それでは、今日はこれで終わりだ」

ギルドマスターのその合図とともに解散した。

第七十九話「動き出す闇」（後書き）

パソコンがついに壊れてしまいました。

バックアップを取っておらず、データは全部飛んでしまいました。それで新しいパソコンを買って、

いろいろとしてたら時間がかかりすぎました。

不慮の事故とはいえ更新が遅れてしまい、

本当にすみませんでした。

この小説のネタや設定……今後の展開などまで、すべて飛んでしまい、もう涙目です（泣）

出版社に投稿しようとして頑張っていた作品もバックアップ無しで、消え去ってしまい、首を吊ろうかと考えてしまいました（^-^-）

まあ、全部自分の過失ですけどねっ

割と更新速度がさらに落ちる可能性があります、まあ頑張っていきたいと思えますので……どうか、温かい目で見守ってくださいね？

寛大な御心で、

「ああ、またか、このダメ作者は……全く仕方ないな〜」
みたいな感じで！

さて、それではまた次回お会いしましょう！

第八十話「開戦」(前書き)

更新が遅くなつてすみません。

第八十話「開戦」

第八十話「開戦」

ハンターの街、ドンドルマ。

早朝にかかわらず街の中は賑わい活気に満ち溢れていた。

戦争が近いことで少し空気がピリピリしているが、いつもと変わらない朝であった。

朝靄の中、警備のハンターが欠伸を噛み殺しながら、ぼーっと外を見ているその時に異変は起こった。

グガアアアアアアアア！！！！

リオレウスの咆哮が木霊したのである。

しかも、一頭ではなく十数頭という数がドンドルマに目掛けて飛んできていた。

「！？ リオレウスだーーーー！！ リオレウスが来たぞーーーー！！」

見張っていた警備のハンター達は、咄嗟の事態に警鐘を鳴らし、街に危険を知らせる。

十数頭という数のリオレウスを相手に数人のハンターが、何とか足止めをする。

「くっ……何頭か街の方に行ったぞ!!」

「クソッ!! よりにもよってこんな時期に!!」

「俺達だけじゃ、いつまで持つかわからねえ! 応援はまだか!?!」

グアアアアアアアア!!

ハンターたちにリオレウスが殺到する。

そこに漸く警鐘を聞きつけた応援のハンター達が現れた。

それにリオレウスが殺到し、応戦するハンター。

「なんだ? いつもより知能が……高い!?!」

「そもそもリオレウスってこんなに群れを成すモンスターだったか!?!」

「何かがおかしい……」

ザッザッザッザッ!

大きな足音が辺りに響く。

ザッザッザッザッ！

それはどンドン戦いの中心へと近づいていく。

ザッザッザッザッ！

足音は音を止め動きが止まったことを知らせた。

そこには全身を鎧に包んでいる兵隊が大量に並んでいた。

そう　　大国デルヴィナートのエンブレムを付けた鎧を着て。

『なっ！？』

リオレウスと戦っていたハンターたちは突然の事態に絶句した。

「さあ！　モンスターよ、デルヴィナートの兵たちよ！

今こそ悪しき根源のハンターたちを根絶やしにする時だ！！」

『うおおおおおおお！！！』

グガアアアアアアア！！！

「さあ、開戦だ！！」

戦争の火蓋が……今、切って落とされた。

ギルド本部にて。

「なんだと!? デルヴィナートの連中がモンスターと兵を引き連れて、

戦争を吹っかけてきただと!? バカな、開戦は三日後のはずじや……」

「マスター、完全に嵌められましたね」

「……ああ。奴ら、まさか開戦前に奇襲を仕掛けてくるなんてな。それに不可解な点がもう一つある」

「モンスターを引き連れてきたことですか?」

「そつだ。それも、空の王者リオレウスをだ!

奴ら目……一体どういう手を使いやがった!? こうなったら、敵はリオレウスだけとは限らない。ほかの敵にも警戒するように伝えてくれ」

「畏まりました」

「それと、奴らがどんな手段を使ったのかも調べてくれ」

「はい」

ギルドマスターがそれだけ言うと、閃光レイ・オルビスは部屋から退室した。

入れ替わるようにドアが開かれ、6人のハンターが入ってきた。

入ってきたのは、剣聖、魔弾、双月、夜桜、龍姫と、

伝説の二つ名揃いであった。

入ると同時にギルドマスターに話しかける剣聖

「マスター！！」

「わかっている。奴らが攻めて来たんだろ……？」

「ああ、俺たちはどうすればいい？」

ギルドマスターはそう聞かれて考えるしぐさを取る。

数分後顔を上げてこう告げた。

「夜桜と龍姫の2人は済まないが今すぐに出発してくれ。

他の三人はまだ出なくていい。

心して掛かれ……この戦争、絶対に負けるわけにはいかない」

『はい』

ギルドマスターを一人残して全員部屋から退出していった。

ハンター達と王国兵達の戦闘はやや王国兵側が有利となっていた。

一人一人が一騎当千の力を持つといわれているハンターだが、対人戦は経験が少なくそれにモンスターまで敵となっており、数の暴力で押されていた。

ある程度実力を持っているハンターは大型モンスターの相手を一人

でしている為、
そんなに押されてはいないというだけの状況。

この均衡が壊れたとき王国兵側がさらに有利になるであろう。

現在、最前線にいるハンターの数はおよそ100程度。

それに比べて、相手の戦力は兵士が少なく見積もっても万以上。

大型モンスターはリオレウス、リオレイアが十数頭いる。

ハンターの強さを考慮しても圧倒的な戦力差である。

この戦いは短期か長期いずれかで決着が着くだろう。

桜華 Side

私とエレンはマスターの命令を受け、

すぐにデルヴィナートへと旅立つ準備を終わらせた。

竜車に乗り込み、デルヴィナートへ目指す。

私達に与えられた任務は、奇襲と情報収集、それと制圧である。

実質、私たちが戦争の勝利へのカギと言っても過言ではない。

だからこそ念には念を入れて慎重に動く必要がある。

今、私はそれをエレンに叩き込んでいるところだ。

「本当に分かってる？ エレン」

「ああ……うむ。つまり敵地に取り込んで、

敵を圧倒的火力で潰して回ればいいのじゃろ？」

「……はあ。わかっていないじゃない、……ソレ。

今回の目的は、奇襲と情報収集、それと制圧。これは分かっているっ。」

「うむ。何度も聞かされたからのお……」

「奇襲と制圧の時は、貴女の言うとおり圧倒的火力でつぶせばいいけど、

情報収集の時は違うのよ？」

「ん……なぜじゃ？ 兵士を倒してそれから情報を得ればよいじゃないか」

「それも一つの手だけど……末端の兵をいくら倒しても、有益な情報は得られない。だから隠密に潜入して探る必要があるのよ」

「なるほどのお……さすが桜華！ やっぱり小難しい事はお主に任せて正解じゃ」

「エレンも戦闘以外に何かできることを増やしなさい」

「ワシは戦闘だけが取り柄じゃからのぉ……無理！」

「……はぁ。とりあえず、失敗は許されないから私に従って動いてね」

「うむ。戦闘は以外は全部任せたのじゃ」

「……はぁ」

私は深いため息をつきながら、竜車を動かしてデルヴィナートへと目指す。

エレンは何時になったらもう少し成長するのかしら……？

再び深いため息をつき、楽しそうにしているエレンを見て苦笑する。

まぁ……今はいいか。

キイ・レディルト

彼は今、アイとエリカの二人と別れて単独でリオレウスと対峙していた。

彼以外の彼女たちもどこかでリオレウスと単独で戦っているだろう。

（前は4人でも苦戦したけど……今は違う！）

相手の強さは下位か上位程度である。

グガアアアアアアア！！！

リオレウスの咆哮を皮切りに両者が動いた。

キイは高速でリオレウスの足元へ接近すると、背中から双剣を抜き放ち、

リオレウスの足へと連撃を叩き込む。

リオレウスは体ごと尻尾を振り回し、接近したキイを追い払おうとするが、

キイは姿勢を低くして高速で動いて攻撃を躲していく。

一つ動いたびに反撃の一撃を忘れずに足へ叩き込む。

足への集中攻撃に、ダメージが蓄積したのか、
リオレウスはバランスを崩して倒れこんだ。

キイはそれを見逃さずにすぐさま頭の方へと回る。

「鬼人化！！」

紅い闘気を全身に纏い、体のリミッターを外していく。

「喰らえ！ 乱舞！！」

全力の力で繰り出される高速連撃。

叩き

砕き

斬り

潰し

裂き

貫く

リオレウスは堪らずにもがいたが、顔をグチャグチャに斬られ瞬間に絶命した。

「ふう」

絶命したのを確認すると、剣を幾重にも振るい、血と闘気を祓う。

それも終わると背中に双剣を仕舞い、リオレウスを剥ぎ取り始める。

(うん……僕は前よりもずっと強くなれてる。

あんなに苦戦したりオレウスを一人で……こんなにも早く倒せた)

キイトリオレウスが戦った時間は、僅か20分弱である。

(でも、過信や慢心はダメだ……死につながる。

ちゃんと教えられたとおりにやるんだ)

剥ぎ取りが終わると、キイは立ち上がって次のモンスターを探しに

行く。

「もっと、……もっと強くなるんだ」

キイの決意の言葉は戦いの喧騒へと消えていった。

第八十一話「遍在竜ディノス」

第八十一話「遍在竜ディノス」

「ふむ……マインドの調子は良好のようだな。

ほう、この数値は興味深い！」

暗い部屋の中。科学者然とした男が報告の資料を見ながらつぶやいている。

カタカタと機械らしきものを指で弾く。

光を放つ箱は、報告の資料をまとめたものが映っていた。

「今は、こちら側が押しているみたいだが……さて、いつまで持つかな？」

男は席を立つと、誰もいない空間に向かって話しかける。

「アビス。私の研究成果の一つであるあれを放つ。
準備をしてくれ」

「　　畏まりました」

突然現れた、アビスと呼ばれた人影は女性の声をしていた。

「……因みに、メデイスの様子はどうか？」

「恐ろしいほどの狂気をまき散らし制御できていませんが、……能力は私を大きく上回ります」

「フッフ、それは楽しみだ。引き続きメデイスの世話を頼んだぞ？」

「はい」

アビスは返事をする、一瞬にして部屋の中から消えた。

残された男は、自身の研究成果を見ながらくつくつと笑っていた。

ドゴオオオオオン！！！！

人と建物を巻き込んで大きな爆発が起こる。

「うおおおおお！！！！」

「怯むな！ハンターの底力を見せつけてやれ！」

「手が空いている奴は、けが人を奥へ下がらせる！！」

ガキン！ ドゴオ！ ゴオオオオオ！！！！

鉄と鉄がぶつかる音。

肉体が碎ける音。

燃え盛る火炎と爆発の音。

様々な音が戦場で鳴り響く。

やはり、一騎当千の力を持つハンター。

鍛えているとは言え、国の兵隊では少々分が悪かった。

あれだけ押されていたハンター達だったが、大型モンスターの数を減らし、

着々と兵士を倒していった。今は互いの力が均衡していた。

国の兵隊は、ハンターを取り囲んで多対一の形で戦い、大型モンスターを駆使して建物の破壊を務める。

力が均衡していた戦場。そこに一石を投じられ大きな波紋が広がる。

デルヴィナート側からである。

キシヤアアアアアアアアアア！！

「な、なんだ！？ 新手か？」

「何だアレ！ 見たことも聞いたこともねえ！！」

「まさか新種のモンスターか！？ なるべく情報を集めて上に報告

だ！」

ハンター達の前に現れたのは、　　白い悪魔だった。

ランポスを一回り位大きくした白いモンスター。

全身が丸く、鱗のないアルビノの白い肌。

二足歩行で、発達した脚とあまり発達していない腕。

細長くしなやかな尻尾。

頭をランポスとは違い、嘴や鶏冠がなく、大きな楕円形の形。

目と鼻はなく、鋭い牙をもった口だけが存在していた。

それは、生物と言ってもいいのかという位、異形の姿をした化け物であった。

「いけ！ 『遍在竜デイノス』よ！！」

「悪しきハンターたちを食らい尽くせ！」

キシヤアアアアアア！！！！

デイノスと呼ばれたモンスターがハンター達に殺到した。

その数、およそ百。

見たこともないモンスターに戸惑いを見せるハンター達だったが、意を決してデイノスを迎え撃つ。

キシヤアアアア！！

「オラア！！！」

グシヤツ！！

一人のハンターが放った一撃がいとたやすくディノスを葬る。

「なんだ、コイツら相当弱いぞ！！ 所詮数だけだ！ 恐れることはねえ」

葬ったハンターがそう言うと、ハンターたちは次々と襲いかかっていった。

一方的にやられていくディノス。

しかし、あるときそれは覆った。

ディノスに変化が起こったのである。

殺したはずのディノスは傷を修復し立ち上がる。

あるものは、その背中に大きな翼を生やし。

あるものは、その両腕を長く太く強靱なものにする。

あるものは、頭が肥大化し辺りを食い散らかす。

あるものは、尻尾の長さが2、3メートルを超えて薙ぎ払う。

あるものは、異常なまでに肉体が固くなり全てを防ぐ。

ハンターたちは突然の変化に反撃を食らう。

今まで一方的に倒していたはずが、

いつの間にか追いつめられるくらい強くなっていたのだ。

「なん……だと……？」

「殺しても死なないなんて、一体どうすればいいんだ!？」

「すぐに報告して、援軍と上から指示を上げ!! 今すぐにだ!」

戦場は混乱に満ち溢れ、戦況がまたもやデルヴィナート側に傾いたのであった。

「報告です!」

ハンターの一人が慌ててギルドマスターがいる部屋へと飛び込んできた。

「どうした?」

「敵勢力に新たなモンスターを確認。新種です!」

「なんだと!?!」

その場にいた、マスターと二つ名持ちが驚きの声を上げる。

「新種は、『遍在竜ディノス』と呼ばれていました。そいつは殺しても死なず、体を変化して襲い掛かってきます。その際に強さも増しているみたいで……ご指示を！」

「……閃光」

「……」

先ほどまでいなかったレイが、マスターの一言で颯爽と現れた。

「ディノスの調査を頼む。必要とあらば、亡骸にして工房で調べてもらっても構わん」

「畏まりました」

レイは現れた時同様、一瞬にしてその場から消える。

「剣聖、魔弾、双月。……お前たちにも戦場に出てもらっ」

『はい』

「二つ名持ちに指示を仰ぎ、何としてでも討伐するよう伝えてくれ」

「は、はい…」

入ってきたハンターは緊張した面持ちで頷いた。

剣聖達はすぐに部屋を後にする。

「……まさか、モンスターを操るだけじゃなく、生み出すとはな」

「デルヴィナートよ……それだけはしては駄目だろ。」

最悪、人とモンスターの関係を崩すことになる」

マスターは暗い雰囲気でも重く呟いた。

戦場に二つ名持ちが現れた。

ただそれだけで士気があり得ないくらい上昇した。

剣聖、ジークハルト・ミラ・ディバインが、

一人で「先ずは、俺が様子を見る」と言っただけでディノスに斬りかかった。

キシァアアアア！！

「ふっ」

ジークハルトが振るった一撃は、いとも容易く切り裂いたが、ディノスは怯むことなく反撃を繰り返す。

伸びる腕を躲すジークハルト。

ディノスを蹴り、その勢いで体から大剣を抜く。

それと同時に、一步踏み込み首を刎ねる。

刎ねた断面から大量の血が噴き出るが、ディノスはそれでも止まら

ない。

首の組織を再生しながら、千切れかけの右腕で殴り掛かった。

「ちっ……なんて奴だ！」

ジークハルトは舌打ちすると、その場で身を捻って攻撃を躲し、回し蹴りと同時に剣戟を叩き込む。

そこで、ようやくテイノスの動きが止まった。

「……死んだか？」

ジークハルトが動きを止めて様子を窺う。

すると。

キシヤアアアア……！！

尻尾の先が頭になり、鋭い歯で噛みつきこうと迫った。

「うわおっ……と……！」

それを後ろに下がってやり過ぎす。

「なんて化け物だ。全員、コイツを倒しても絶対に気を抜くな！
凄い生命力だ……倒す方法は恐らく、再生が追い付かない速度で
攻撃する。」

もしくは、一撃で再生できなくするダメージ与えるかだ！」

ジークハルトと戦ったディノスは、すでに元の形から大分離した姿をしていた。

残っているのは下半身だけで、長い尻尾が首になってその先に頭が出来ていた。

キシャアアアアアア！！！！

「進化、ですか？」

「ああ。たぶんコイツらは恐ろしいスピードでその環境、外敵に、適応するために進化し続けている……今もね」

キシャアアアアアア！！！！

ガチャン！ ガキンツ！

レイの問いに、工房の親方と研究員が、檻に捕らえられて暴れているディノスを見ながらそう告げた。

「このディノスというモンスターは、

ランディノスというモンスターにとても近いです。

恐らく、ランディノスの細胞が使われて作られたのが、このディノスという訳ですね」

「つまり？」

レイが続きを促すように聞き、それに親方が返した。

「ランディノスの使う能力や性質なんて言ったものが似てるんだ」

「ランディノスのように、体の骨格などを変えることができると考えてくれて結構です。」

まあ、このディノスの方がその力は強いですけどね。極端にみるなら……ですけど」

「？ それはどういうことなんですか？」

「恐らく、このディノスというモンスターはあらゆる可能性の中の一つだけを、

極端に成長……進化し続けて究極の形になります。」

しかし、それは今言ったとおり極端な進化なんです。」

空を飛ぶことに適応するために、翼を特化させるが他の事に適応できなくなります。」

超速再生と超進化と言った共通点を除けば、各個体は一つしか能力を持ってません。」

つまり、究極でありながらも不完全体という訳です」

「なるほど……わかりました。ありがとうございます」

「あと、超速再生と超進化の二つがあるから倒すのは苦労するよ？ 再生細胞を枯渇させるか、一瞬で消滅級の大ダメージを与えるか、これだけだろうね……。倒しても、それに適応する個体が出てきたら厄介だ」

「はい。ギルドマスターにそう伝えます」

そういつてレイはマスターへのもとへ急いだ。

戦況は、剣聖、魔弾、双月による活躍のおかげで、
一時的にディノスを倒してハンター側が圧倒したが、
ディノスによる圧倒的な超速再生と超進化により再び拮抗。

ハンター達も流石に戦いの最中で、
進化して適応するモンスターに苦戦を強いられていた。

戦況は最初と変わらず、ハンター側がやや押され気味の所で拮抗。

両者互いに被害を出しながら、戦争はまだ続く。

第八十二話「光と闇、聖と邪」(前書き)

更新が遅くなり……、「ごめんなさい!」> (「——」)<

ドゴオ！ ドガアアアン！！

「ハハハハハハ！ イツマデニゲレルカナ！？」

狂ったように晒しながら、辺り一面に黒い炎をまき散らしていく。

それを二人は必死によけながら反撃の機会をうかがっていた。

規則性もなく高速でまき散らされる炎は、二人の服を焦がす。

「くっ……なんて炎なの」

「このままでは、不利ですね！ どうしますっ？」

「…！ じつするも…！ じつするも…！」

鈴音は狂ったように晒う、黒ユミナを睨みつける。

「こつするまでよー!!」

そういつと鈴音は自身の右腕を黒ユミナに向けて振るい、魔力弾を生成するとともに放った。

「アンタが前衛、私が後衛。アンタが攻撃を仕掛けて私がその援護する。」

隙を見て最大火力で大魔術を叩き込むから、そのままとどめを刺して」

「……わかりました」

「いくわよ。最初で最後の共闘よー!!」

鈴音が話を切ると同時に、鈴音の魔力弾が黒ユミナによってすべて破壊された。

「ハナシハ、マトマツタ？ ヨウヤクタタカウキニナツタンダネ。

……ニゲテバカリデ、ワタシツマラナカッタヨ」

「あっそう。でも大丈夫よ。アンタは今から私達にやられるからね」

「ハハッ、オモシロイジヨウダンダネ。……イイヨ、ヤツテミテヨ
！！」

黒ユミナはそれだけ言うと、鈴音を瀕死にまで追いつめた黒い槍を手元に出し、
それを持ってそのままとびかかった。

「真白！」

「っ！ 分かっています！」

真白は鈴音の前へと飛び出て、白い大剣でその一撃を受け止める。

「ハッ！」

黒ユミナはそれを鼻で笑い、槍を思いつきり横に薙いだ。

「くう………！？」

ガキン、と辛うじて大剣で防ぐことが出来たが、あまりの衝撃に体が浮いて体制を崩した。

その隙を縫うように、連撃が叩き込まれる。

しかし、鈴音はそれを許さなかった。

「それでも、喰らいなさい！」

多数の魔方阵を展開して、魔力弾を黒ユミナ目掛けて放つ。

「アタラナイ」

黒ユミナは追撃を止めて、ひらりひらりと躲していく。

躲された魔力弾はその向きを変えて、またもや黒ユミナを狙う。

「ツイビダン、ダネ……。デモ、ソレガドウシタノ？」

槍を構えなおして、魔力弾目掛けて高速で繰り出す。

みごとに魔力弾は破壊されて、霧散していった。

「コンドハ……コッチノバンー！」

煉獄『アマテラス』

黒い炎が無数に現れ、球状に纏まっていく。

そして、生まれたのは漆黒の太陽だった。

「モエチャエ……」

巨大な太陽を模した黒い炎が、鈴音と真白目掛けて飛来する。

「真白！」

見事に碎け散ってしまい、真白たちを守る術が消えてしまった。

「なっ!？」

「真白! 十分よ、下がちなさい!！」

鈴音がそう叫ぶと、真白は迫りくる黒炎から遠ざかるように飛んだ。

「『ウォータールチエイン水流鎖縛刃』!！」

巨大な蒼の魔方陣が鈴音の前に描かれ、そこから無数の水でできた鎖が現れた。

鎖の先には巨大な三日月型の刃があり、高圧水流によって全てを断ち切る。

鎖は黒炎に殺到する。

超高熱によりいくつもの鎖が蒸発していったが、数の暴力でそれを押し切った。

そして、黒ユミナへと殺到する。

「フーン、……ソレデ？」

鎖についた刃が到達する直前に、前に出された右手にそっと刃が掴まれる。

そして、砕かれた。

「くっ……っねなら、びっしーっ。」

鈴音が魔法陣を弄ると、鎖は意志を持ったように、黒ユミナに刃を向けて取り囲んだ。

「……………」

黒ユミナはそれを黙ってみていた。

「死になさい！」

鈴音の合図と同時に、刃は黒ユミナに飛ぶ。

「…………… 幻影『ツクヨミ』」

黒ユミナがそれだけ呟くと同時に、無数の刃が黒ユミナを切り裂いた。

「やった!？」 「ダレヲ？」 なっ!？」

ずたずたに引き裂いて殺したはずの黒ユミナが、
いつの間にか鈴音の背後に立っていた。

「 ゼツボウヲアタエタアゲルヨ」

「!？」

慌ててその場から離れる鈴音。

しかし、黒ユミナは鈴音の背後に現れた。

「ニゲテモムダ。……アナタハモウニゲラレナイ」

そう言いつと、鈴音を囲むように黒ユミナが増えた。

1、2、3……4人の黒ユミナが鈴音を囲む。

「なっ……どいつが本物！」

辺り全体に魔法弾をばら撒き攻撃するが、すべて避けられてしまう。

「アッタラナイ！」

「アハハ、ヘタクソダネ」

「コンドハネ……」

「ワタシノバンー！」

「……さい。鈴……起き……！」

「鈴音、目を覚まさない!!！」

バチンッ！

「っ!?!?」

突然の衝撃と大きな声に鈴音は目を開けた。

(私は、眠らされていたの……？ 一体、いつの間に)

「ぼさつとしないで下さい！ 敵はまだいるんですよー！？」

「……済まないわね」

「！……珍しいですね。お礼を言うなんて」

「アンタ、私を一体なんだと思っているのよ！！」

「……アンタのおかげで命拾いしたから。礼くらい言っわ」

「しかし、今のはなんなんでしょうか……？」

「恐らく、幻術の類ね……それも凄く強力な」

「厄介ですね」

二人は苦い表情をする。

鈴音は真白の力を借りて立ち上がった。

二人はそれぞれの武器を構えて、黒ユミナの動きを警戒する。

「アハ、ナンダ……コワレテナカッタ」

黒ユミナは心底可笑しそうに晒う。

「デモネ、モウ。アキタンダ」

その一言で一気に張りつめた空気に変わる。

重く、鋭く、冷たい空気。

「ダカラ……コレガ最後」

膨大な力と悪が黒ユミナをまわりを渦巻き、集結する。

「壊セ、狂エ、墮チ口、死ネ、消エテシマエエ……！」

魔槍『グングニル』

黒ユミナが掲げた右腕の先に、漆黒と真紅の混じり合った大槍が創られた。

辺りに魔力と死をまき散らし、槍の周りで黒雷が爆ぜる。

「アレは、不味い。不味過ぎる！ ……喰らえば確実に、死ぬわ」

「……逃げましょう」

突然の真白の言葉に、鈴音は驚いたように真白を見た。

「なっ……でも」

「それ以外に方法はありません。……アレを放っておくのは問題ですが、

私たちが死んでは元も子もありません！ 全力で逃げますよ！！」

「くう……わ、わかったわ！」

「ウーン、殺シタ？ ……イヤ、寸前デ逃ゲラレチャッタ。
マア、余波ダケデ致命傷レベルノ怪我ハ与エタハズダカラ、
ドノミチ二人ハ死又シカナイヨネ。残念……私ガ、コノ手デ殺シ
タカッタノニ」

黒ユミナは肩を落としながら、つまらなそうに呟いた。

「……私^{ユミナ}。ソノ体、貰イウケルヨ。
漸ク来タ好機^{チャンス}。絶対ニ無駄ニハシナイ！」

第八十二話「光と闇、聖と邪」（後書き）

なんかモンハンから離れすぎですよね……。

しかも、今話はモンハン成分ゼロな気が……これでいいのか、私!?

まあ、あくまでこれは二次創作？ です……多分。

今更ですが、こんなの嫌だという方は、

見ない方が……って遅いですよね（汗）

これからも離れたり近づいたりを繰り返しますが、

まああまり気にしないで読んでくださると幸いですね。

最近、チート？ 分も多めに導入されていますし……。

こんな作者なんで、意見や感想を下されると嬉しいです。

特に、批判や、もう少しこうすればいいんじゃないか？ と言った、

意見を大募集していますよ……若干スランプ気味なんで……

それでは、また次話でお会いしましょう！

第八十三話「ユミナと黒ユミナ」

第八十三話「ユミナと黒ユミナ」

ユミナが目を覚ましたそこは……何もなかった。

ユミナの眼前にはただただ漆黒の空間が広がっていて、周りを暗闇に囲まれて何も見えず、ユミナは動くことを躊躇った。

一寸先は闇。

まさにその状態に彼女はいた。

「ここは……一体どこなの？」

必死に首を動かし辺りを見回が、黒く暗い闇に阻まれて何も見えはしなかった。

「私は、なんでここに？ みんなはどこ？」

ユミナは目覚める前までの記憶をたどろうとしたが、一瞬間に痛みが走って思考を邪魔する。

痛みに耐え、必死に思い出そうとするが何も思い出せなかった。

「嘘……一体どういうことなの……？」

慌てそうになる心を抑え、冷静になろうとする。

「……とりあえず、今の私には情報が足りない。

「ここがどこなのかを調べるために動かなきゃ」

暗闇の中一歩足を踏み出す。

慎重に、探るように静かに出された足は、しっかりと足場を捉えた。

ピチャ！

小さな音とともに飛沫が飛ぶ。

「水……？」

ユミナはその場にしゃがみ込んで、足元の水らしきものを触る。

その水はぬるぬるとしながらもどこか生暖かいもので、ある一定の方向から流れているのを感じた。

「温かい……っ！？ ……鉄、の臭、い？」

ユミナは今まで気づかなかった鉄の臭いが辺りに充満していた。

不審に思いながらも立ち上がり、歩き始める。

ピチャ！ ピチャ！

一歩進むたびに、軽快な水の跳ねる音が暗闇に木霊する。

水が流れてくる方を目指し進み続ける。

「それにしても……ここ、結構広いなあ……」

ユミナは数分と歩み続けてきたが、

一向に流れのもとにたどり着くことができていなかった。

全くの暗闇に自信の足元どころか、近づけた手すら見えない状況。

ユミナは少しずつ不安を感じていった。

私は何でここにいるんだろう？

出口なんて存在しないのかな？

このままずっと独りなのかな？

独りは嫌だよ……みんなと一緒にいたいよ……。

みんなあ、どこにいるの？

嫌……いや、イヤ！ 独りにしないでよお！！

一度不安と恐怖を感じ始めた心は、すぐに闇に吞まれていった。

ユミナは震えながらも、強く求め、縋るような思いで歩み続ける。

暗闇で見えないのと、震えて足元が覚束ないのもあり、

ユミナは何かに躓いてこけてしまった。

バシャンッ!!

「んぐう!? ツ ペっ!! うええ……なにこれ? 血の味がする」

ユミナは自ら顔を上げると吐き出した。

全身が何かに塗れてぬるぬるしており、臭いの濃度が濃くなった。

「これ……まさか、血? なんで、一体誰の!?!」

「ヤットココマデキタンダ……オソカッタネ」

「誰!?!」

突然声をかけられて驚きながらも内心、

「漸く人に会えた」と安心していった。

「……アア、ソツカ。クラクテナニモミエナインダネ?
イマアカルクシテアゲルヨ」

そう声の主が言うと、辺りは一気に光を取り戻した。

光と取り戻したそこには

大量の血と、乱雑に捨て置かれた屍があった。

「なっ!?!」

突然の光景に絶句するユミナ。

紅い空、紅い月、紅い大地。

全てが紅一色で染まっていた。

クスクス

先ほどの声の主が晒う。

放心仕掛けていたユミナは、慌てて声の主を探す。

辺りを見回すが、血と屍しかなかった。

クスクス

再び晒い声が響く。

「つどこなの!？」

ユミナは必死に走って声の主を探す。

しかし、声と探すのに集中しすぎていて足元が疎かになっていた。

ガッ! バチャンッ!!

ナニかに躓いて、血の中にごけてしまう。

「ぺっぺっ! さっきも転んで血だらけに……」

ユミナは自分が躓いたものを確認しようと首だけ振り向かせて固まった。

ソレは、ユミナがよく知っている見知った人であった。

「う、うつつ嘘……な、なんで」

ユミナが躓いたその屍は、

「　　なんで、エリカがこんな所で死んでるの!？」

エリカ・リヴィアの屍であった。

慌てて駆け寄って抱き上げる。

血で汚れるなんて関係なく、その場に座り込みエリカを抱く。

「嘘。なんで。嘘でしょ……起きて！　起きてよお!!　目を覚まして!!」

しかし、エリカは力なくされるがままで人形のように動かない。

その体は酷く冷たく、かなり前に死んだことを物語っていた。

「ッ!?!　だ、誰か!　誰かいないの!?!」

ユミナは助けを求めようと首を動かしてあたりを見ると、
最悪な光景が目映った。

「…………アイ…………キイ…………シズク…………カイト…………マシロ…………スズネ…………！？」

ユミナの大切な人たちの屍があった。

クスクス

晒い声がすぐ近くから聞こえてきた。

ユミナは咄嗟に声が聞こえてきた方を向いた。

そこには　　私^{ユミナ}がいた。

「え？ 私…………？」

髪は漆黒で、開かれた瞳は紅く縦に細長くなった瞳孔は黄金に輝き、瞳の周りが黒に染まっていた。

服装は黒のゴスロリ服で大量の返り血を浴びた風である。

しかし、確かに彼女はユミナであった。

「ソウダヨ、ワタシハアナタ。アナタハワタシ」

「なんで……………何でみんながここで死んでいるの!？」

「…………ワカラナイノ？」

彼女　　黒ユミナは、心底可笑しそうに晒う。

ユミナはそれを不気味そうに睨みつける。

しかし、度重なる衝撃と恐怖、不安に悲哀で心を疲弊させきっていったユミナは、

黒ユミナの不気味な晒いに耐えられずに後ろへと下がっていく。

黒ユミナは少しずつ下がっていくユミナに合わせて距離を詰める。

互いに睨み合い、ジリジリと動いていく。

「……」

「……」

「……」

「……」

無言で逃げるユミナ、無言で追い詰める黒ユミナ。

フツと一瞬にしてユミナの視界から黒ユミナが消える。

そして、トンとユミナの肩に手が置かれる。

「ッ!？」

「ハハ、ツゝカマゝエタ!」

バシャンッ!!

憎い、お前が憎い憎いニクイイイイイイイイ！……！

殺してやる、死ね、シネエ。

「嘘……」

次々と悍ましい声で屍たちは、ユミナを責めていく。

ユミナちゃんなんて死ねばいいのに……。

「！？ あ、ア……イ……？」

最低です。

まさか、……殺されるなんて、ね。

……信じていたのに……。

ユミナ、お前には失望した。

貴女はマスター失格です。

アンタなんかただの殺人鬼ね。

「……」

大嫌い！！！！！！

「」

パリン

ユミナの中で支えていた大切なものが、最後の言葉とともに砕け散った。

糸の切れた人形のように力なく俯き、顔からは表情が消え、空色に住んでいた瞳は黒く暗く淀み切っていた。

「アハハ、コワレチャッタ」

黒ユミナは力なく俯いている頭に手を添えて嗤う。

「ハハハハハハハハハハ！！ コレデカラダハワタシノモノ！
ゴメンネ〜ワタシ。アリガタクツカワセテモラウヨ！！」

????? Side

ワタシは目覚めた。

「うん、これが本物の……世界、空気、体。
全てが初めて体験することだね」

私は眩きながら辺りを見回す。

そこは、どこかの病室なのか……ベッドと簡単な小物以外何もなかった。

自分は怪我をしていたんだなと、思い至った。

ま、だからこそ私が出て来れる切っ掛けになっただけだね。

自分にかけていた毛布をのけると、ベッドから降りて立ち上がる。

ベッドの近くに私が使っていたと思われる太刀を見つけて近づいた。

それを持ち上げ鞘から抜く。

「……うん、いい武器だね。武器はこれを使えばいいか。使い方は知ってるしね……服装は……」

太刀を鞘に戻しつつ、再度辺りを見回すが

「ないね。まあ、いつも通りでいいか」

そう思い直し、指をぱちんと鳴らすと、いつも通り、黒いゴスロリ服に変わった。

そして、そばにあったアイテムポーチの中身を確認して、腰のあたりに括り付けた。

何個か無い弾丸カートリッジがあったけど……、まあ、必要になれば創ればいいよね？

太刀を背中に背負うと、私はドアへ向けて歩き出した。

「なんか、外が騒がしい。体慣らすために暴れれるかな？」

この世界は中で見てたから大体は分かるかな……。

私も貴女みたいに早くモンスターって奴と戦ってみたいね。

私は逸る心を抑えながら、ドアを開けて廊下へと出る。

でも、全然抑えきれなくて……。

「さて、……ワタシトアソボウヨー!!」

つつい、壁をぶち壊して外に出ちゃった……てへっ。

反省も後悔もしてないけどね!

壁をぶち壊して出た先には、赤い翼をもった敵つい竜がいた。

確か……飛竜種で火竜リオレウス? ってやつだったけ?

まさか、最初からこんな大物と殺し合^{あそべる}えるなんて、

……出てきた甲斐があるってもんだね!

リオレウスは私の姿を確認すると、ブレスを飛ばしてきた。

「うわっと、熱っ!?!」

突然の不意打ちを何とか躲したが、熱気が伝わってきて暑かった。

……これが、熱さ　面白い!!

もっと、もっと色々な事を知りたい！ 学びたい！

教えてよ……全部、
リオレウス 貴方の命を賭けて！！

ワタシトアソビマシヨ？

グガアアアアガアアア！！

咆哮しながら私に向かって突進してくるリオレウス。

私はそれを避けず、正面から太刀を抜刀して受ける。

凄い衝撃が太刀と私の右腕に奔るが、私は気にもとめずに、
力づくで太刀を右に振るう。

鱗に弾かれて斬ることはできなかったが、
その衝撃で態勢を崩して右の方へと突っ込んでいった。

「うーん、意外と難しい……貴女は結構凄かったのね」

私がそう呟いているところに、リオレウスは再度突進してきた。

「でも、私に出来ない筈がない。次は」

迎え撃つように太刀を横に振るう。

「 斬れる」

私の太刀は吸い込まれるようにリオレウスの頭部を切り裂いた。

鮮血が舞い、辺りを紅く染める。

私も少しだけ返り血を浴びて、紅い斑点のようになった。

グギャアアアアアアア！！？

リオレウスは悲鳴を上げながら仰け反った。

私は隙だらけなその姿に太刀を思いつき突き立てる。

リオレウスの喉に深く突き刺さる太刀。

そして、私はそれを横に払った。

先ほどとは比べ物にならない位の返り血が私を染め、
リオレウスは断末魔の叫びをあげて息絶えた。

「アハ、楽シイ。……モット私ト遊ンデ！」

私は息絶えたリオレウスの死体を踏み越えて新しい玩具エモノを探す。

ギャアツ！！

突然、背後から何かの鳴き声が聞こえた。

私は急いで振り向くとそこには、白いモンスターがいた。

……アレは、知らない。記憶にない。

ということとは、新種か何か？ …… フフ、面白い！！

「精々、私ヲ楽シマセテヨネ！」

私は一瞬で接近すると、細い首目掛けて太刀を振るった。

ガキンツ！！

しかし、やすやす切り裂くと思っていた一撃は、見事に弾かれてしまった。

先ほどのリオレウスとは比べ物にならない位硬かったのである。

硬い……… うん、鎧竜？ の甲殻と同じ位硬い？

まあ、私は見たことも触れたこともないから比べようがないけど…。

ギヤア！！

弾かれたままで隙だらけな私に、白いモンスターはその爪を振るった。

カキンツ！！

私は太刀を使いその一撃を受け流すと、地面を蹴って間合いを取った。

アレだけ硬いと一苦労かもね……… フフ、そうだ。アレを使ってみよう。

私は腰の位置にあるポーチへと、手を伸ばして中を探る。

「うーん、これだ！」

適当に掴んだものを引き出した。

私の手の中に納まっていたのは紅い弾丸。

「行くよ！ カートリッジ・装填^{リロード} エクスプロージョン！！」

開かれた装填口に弾丸を込める。

それが装填されると、太刀の周りに紅蓮が迸った。

「燃えちゃえ！」

最大火力で白いモンスターに斬りかかる。

ゴオオオオオオツ！！！！

炎はモンスターは一瞬にして消し炭に換えてしまった。

「うはー、スツゴイ威力！」

肩を太刀の背でポンポン叩きながら、私はその火力に見惚れていた。

そこに鋭い声が掛かった。

「貴様！ ハンターだな？ 覚悟しろ！」

そう言つて鎧を着た兵士らしき奴が私に斬りかかつてきた。

兵士の剣を斬り落とし、足を引つ掛けて転ばせる。

ガッ！

そして、兵士の頭の近くに太刀を突き刺して上から見下ろす。

「ヒイツ！？」と怯えた声を上げる兵士。

「フフ、ちよつと私の質問に答えてくれない？」

私はなるべく優しい笑顔を浮かべながら聞くと、兵士は全力で首を上下に動かした。

聞き分けがいいようで何よりだよ。

「まず、貴方は何処の誰？」

「じ、自分は、デルヴィナート国の兵士、です」

デルヴィナート……一応記憶にはあるね。こここのすぐ隣の国だったかな？

「そう。じゃあ、今ここで何があるの？」

「戦争、です」

「戦争！？ どことどこが！？」

「ドンドルマとデルヴィナートが、です」

「そう、フフフ……」

戦争ということは、敵を殺したい放題できるという訳だね！

「最後に、ここからデルヴィナートはどっち？」

「あ、あちらの方です」

兵士の差した方角を確認して、その場から急いで走り出した。

戦争……デルヴィナート……なんて面白い時期に出てこれたんだろ！

さあ！ 私を楽しませてよ……！

1484

アイSide

大型モンスターを倒しているとき、私は見た。

ユミナちゃんが走っているのを。

遠目でよくわからなかったけど、アレは確かにユミナちゃんだった。

最初は目が覚めたんだなと思った。

でも、少し……いや大分おかしかった。

空のような綺麗な色をした髪は漆黒に染まり、見えにくかったが、瞳も紅に染まっていた。

血に染まったゴスロリっていう服を着て、背中にはいつもの変幻刀を背負っている。

それでも、確かに彼女はユミナちゃんだった。

ユミナちゃんは急いでる風に町の外へ向かって全力疾走していた。

私は慌てて追いかけた。

突然の私の行動に驚いているエリカさんとキイ君。

「アイ？ いきなりどうしたの!？」

「ユミナちゃんが、ユミナちゃんが街の外に向かって走っていったの!」

「ユミナがですか？ 目が覚めたのですか……」

「いや、それどころじゃないね……まだ病み上がりのはずなのに」

「私、行くね！ ユミナちゃんを追いかける！」

「私も行きます！」

「僕も！」

三人でユミナちゃんを追う。

なんだかよくわからないけど、目が覚めてよかったよ……ユミナちゃん！！

桜華 Side

私達はようやくデルヴィナートに着いた。

今、竜車を隠しながら街への侵入する機会を窺っている。

「ねえ、桜花あー！ まだあゝ？ 早く暴りたいんじゃないかあゝ」

「煩いわね……もう少し静にしてなさい」

「ぶうー！。暇じゃ……暇なのじゃ……」

「はあ……」

全く、エレンときたら。

まあでも、何時までもここで見ていただけでは駄目ね。

もう大丈夫かしら……。

「エレン」

「ん？ なんじゃ？」

「行くわよ」

「待ってたのじゃー！」

出撃の胸を伝えるとエレンは嬉しそうにはしゃいだ。

見た目も子供、中身も子供……はあ。

心の中でため息をついていると、何かを感じた。

ゆっくりと後ろを振り返ってみるが、何もなく何も感じない。

「」

「ん？ どうしたのじゃ、桜華？」

「いや、ちょっと違和感というか、胸騒ぎを感じたのよ」

「ほう………！」

私がそう言うと、エレンは面白そうに笑った。

「……何もなければ、それでいいんだけど」

「ワシは何があってもいいぞ？ 楽しければのお………」

「まあ、いいわ。気にしないで先を急ぎましょっ」

「つぶつぶ、ついに暴れられるのー！」

「やるべきことを忘れないで欲しいわ……あと、やりすぎないようね」

「ふむ、どうせ一緒に行動するのじゃから、そこらへんは任せたのじゃー！」

「……はあ」

ため息をつきながら、私たちはデルヴィナートへと足を踏み入れた。

……気のせいであって、欲しいけど。

第八十四話「激突！ 深淵VS龍姫」

第八十四話「激突！ 深淵VS龍姫」

アビスSide

……ついに私が出撃する羽目になったか。

マスターが言うには、このデルヴィナートに二名のハンターが侵入したようだ。

そして、私に与えられた使命は 侵入者の殲滅。

……相手はあの“夜桜”と“龍姫”。

負けるつもりはさらさらないが、私一人で勝つにはキツいだろう。

だが、マスターに与えられた使命だ。……絶対に失敗は許されない。

それよりも私が心配なのは、 妹の事だ。

妹は強い。生まれたばかりで純粹であり賢くもないが、
悍ましいほどの狂気をその身に抱えている。

この私を遙かに上回る力を持っているが制御が出来ない。
だから、もし狂気に吞まれ力が暴走したとき、
全てを破壊し尽くしてしまおう。

それだけ危うい存在なんだ……メデイスは。

私がついていてやらねば。

「負ける訳にはいかない。マスターの為にも……メデイスの為にも
……！」

城の長い廊下の中、二人のハンターと兵士たちが戦っていた。

「散れ」

一瞬の間にして閃いた斬閃が、桜華の前にいた兵士たちを切り裂く。

切り裂かれた兵士は、力なく地面へと傾いていった。

完全に沈黙すると桜華は、ふっと息を吐く。

桜華の後ろの方で戦っていたエレンも、
相手を無力化すると桜華のもとへと近づいた。

「……アレだけ人に手加減がどうかこうとか言ってくせに、

桜華の方がワシの百倍は酷いじゃないか」

「？ 一体何の事かしら？」

「もついいのじゃ……」

恍ける桜華に、げんなりとした表情をするエレン。

しかし、二人は一瞬にして真面目な表情に戻った。

「それにしてもじゃ。……ちと、おかしくないかのお？」

「……そうね」

「やはりか。やはり、此処の守りがあまりにも薄い」

「エレンにしては上出来ね」

「ワシにしてはとか酷いのじゃ！」

「此処が落とされると一気に負けが決まる。
なのにもかかわらず、守りが兵士だけ」

「しかも、弱いしのお……モンスターもいないみたいじゃ」

「全戦力を使ってドンドルマを落しにかかっているのか、
……それとも、薄くても構わないほどの存在がここに居るのか」

「ワシとしては後者が望ましいの」

「私は前者がいいわ」

『いたぞ！ 侵入者だ！』

二人が呑気に話している間に、騒ぎを聞きつけた兵士が再びやってきた。

それを見て慌てるもなく、二人は構えた。

しかし、そこに割り込んでくる存在が現れた。

それは一瞬で二人の間に現れると、両手で持つ剣で二人の首を狙った。

エレンは迫りくる刃を砕き、右の拳を相手に向けて放つ。

桜華はバックステップで躲すと、背中の太刀で一閃。

だが、二人の反撃は空を切っただけだった。

「…………へえ」

「ふむ、少しはやるようじゃな」

二人は感心したように割り込んできた敵を見る。

割り込んできた敵は、女性であった。

長い艶やかな紫の髪。

妖しく金色に輝く瞳。

黒いドレスのようなものを身に纏う、
長身でスタイルのいい体。

何よりも目を引くのが、纏うオーラであった。

それは、人が纏っているとは思えないほどのもの。

一言で言い表すならそれは

化け物

「こ、これはアビス様!？」

「……ここは私がやります。貴方たちは他の持ち場に着き、
援軍などに警戒していなさい」

「畏まりました!」

兵士たちは一斉にこの場から去って行った。

「どつやら、後者のようね……はあ」

桜華は面倒臭そうにため息を吐いた。

エレンは現れた強敵になりゆるかもしれない存在を見てにやりと笑った。

「桜華」

「何かしら？」

「アレは、ワシ一人でやる」

「……いいわよ」

「すまんのぉ」

「いつもの事じゃない」

桜華は呆れたようにそう言った。

エレンはそれを聞くと一歩前に歩み出て、アビスと呼ばれた女性を見据える。

「二人でかかってこないの？」

「ふむ、ワシ一人で問題ない。桜華の出る幕は一つもない」

「そう。じゃあついてきなさい。ここで戦えば城に被害が出る。

……外で戦いましょう」

エレンはチラリと桜華をみると、桜華は頷いた。

そして、二人はアビスに付いて歩き出した。

数分歩くと、城の中庭に出た。

中央に噴水があり、辺りは石を敷き詰められた通路と、

自然がかなりの範囲に渡って広がっていた。

「随分、広いのお……」

「ここなら、周りに気を使うことはないでしょう」

「そうじゃの。ワシも久々に全力で戦えるやもしれんの」

二人は互いに一步前へ歩み出て、それぞれの武器を構えた。

桜華は少し離れたところで、壁に背を預けて二人を見ている。

エレンが構えるのは、両刃で巨大な紅い大剣。

シンプルな作りで飾り気も少ないが、とても美しく輝いていた。

「お主……武器を変えなくてもよいのか？」

「お気遣いは無用」

アビスがそう言うと、両手に持っていた剣は消えた。

「奇妙な術を使うようじゃの」

「体質です」

「ほう……体質とな？」

「これ以上は秘密です」

そうだったアビスの両手には、先ほどと同じ剣が握られていた。

「私は、深淵……アビスと申します」

「ワシは、龍姫……エレン・クライシオスじゃ」

「いざ」

「尋常に」

『勝負!!』

二人は互いに相手の間合いへと飛び込んだ。

桜華 Side

あのアビスとかいう奴……かなりできるわね。

私は二人の攻防を見ながらそう思った。

まず、アビスはバックステップで距離を取るとともに、両手に持っていた剣をエレンへと投げつける。

それを大剣で一蹴して距離を詰めようとするエレン。

再び剣を生み出してエレンの一撃を、片方で受け流して片方で攻撃

する。

エレンは強引に弾いて攻撃を躲す。

これが大体、一呼吸の間に行われた攻防である。

そこら辺の兵士じゃ何が何だかわからないだろう。

それだけ規格外な戦いが二人によって繰り広げられていた。

エレンに勝るも劣らない身体能力なんて……何かあるわね。

それに、まだいろいろと何か隠しているみたいだし。

出来れば生かして捕らえたい所だけど……エレンは手加減が下手だから。

……私は何をしようかしら？

エレンSide

互いに剣で切り結び、相手の命を刈り取るつもりで一撃を放つ。

かれこれ十数分は斬り合ってるが、相手にも疲れている様子が全くない。

こんなに楽しい戦いは本当に久しぶりじゃ!!

何時までも続けたいのじゃが、そんなことをしとつたら桜華が怒るからのぉ。

こないだもラージャンを持ってかれたのじゃ……せめてこの戦いはワシが終わらせたい。

「フフフ……楽しいのぉ」

「……そうか」

アビスはいきなり動きを止めた。

「Fly Wing」

アビスが何やら知らない言葉をつぶやくと、その背中に翼が生えた。

大きな白い翼。

その翼を動かして宙へと浮く。

「ほぉ……それも体質とやらか」

「その通り」

「空を飛ぶとは、面白い!」

「ここからは……少し本気!」

そういうと、バサリと翼を羽ばたかせてワシに向かって急降下してきた。

ワシは大剣で一撃を防ぐと、そのまま力づくで相手ごと弾く。

いきなり速くなったのお……それに力も上がっていった。

アビスは「少し」と言いおった。

つまりは、じゃ……奴はまだまだ強くなれるということ。

面白い。ワシ相手にその余裕、そしてまだ上がるといった強さ。

相手にとって全くの不足はない！

「……Form Riorus」

ふむ、今度は一体何をしてくれるのじゃ？

アビスは空中で静止したまま、また何かつぶやきその姿が変わっていった。

紫の髪は真紅へと変わり、漆黒のドレスも紅く、

体の部位ごとに何かの鎧みもないものが付加されている。

翼も紅く、金色の瞳は鋭い印象を強めた。

それは見覚えがあった。

それは 火竜・リオレウス

アビスはまるでリオレウスのようなオーラをまき散らしていた。

「Fire」

ワシ目掛けて炎弾が放たれる。

「ハッ！ 甘い！」

ワシは大剣でそれを一刀両断した。

両断された炎弾は後ろの方へ飛んでいき、大爆発を起こした。

「この程度の炎じゃ、ワシを傷つけることは無理じゃ」

「Flame」

先ほどとは比べもにならない位の密度の炎が、アビスによつて放たれた。

無駄じゃ……。

ワシはそれすらも大剣で切り裂いた。

この剣を持つワシには、炎は一切通用せぬ。

「この程度なら、とんだ期待はずれじゃ……早く次の手を見せてみ」

「……Form Ragiaakurus」

アビスは翼を収めると、地上へと降りてきた。

そして、また変化が始まった。

髪が蒼く、ドレスも蒼く、また少し変わった鎧が付加されていた。

「Lightning」

眩い閃光が爆ぜる。

ワシはそれよりも早く動いて雷撃を避けた。

アビスは驚いたような表情でワシを睨みつけた。

「お主のその体質とやらは、モンスターを真似る事が出来るのか？
最初のアレはリオレウス。今のはラギアクルスじゃの」

「それは少し違う……私は、“化け物”だから。
これは一部にしか過ぎない」

「ふむ、それでは……早く奥の手とやらを見せてみるがいい！
そんな下らん技の小出しならワシは殺れん」

「……」

アビスは押し黙ると、構えを解いた。

戦意を喪失した訳じゃなかるう……奥の手やらを見せるのか？

静かに目を閉じ、大きく息を吸った。

カツと目を見開くと同時に叫んだ。

「Form Abyss!!」

眩い光に包まれて姿が消えるアビス。

しばらく光り続けていたが、徐々にその光は晴れていった。

光りが晴れたそこには、最初の姿に限りなく近いアビスがいた。

変わった点はドレスではなくなっていたのと、
少し変わった鎧を付加していたことだけだった。

ドレスから一転。ショートパンツと袖がない服にグローブ。

胸、肩、腰を守るために鎧が付加されている。

それを見てワシはがっかりした。

「……なんじゃ、今までと何にも変わっておらんじやないか。
正直、お主には失望させられたよ。……やる気が失せた」

「そう。それは　大きな間違いね!!」

アビスは一瞬にしてワシの懐へと潜り込んでいた。

あまりの速さに、今のは少し見失いそうになっていた。

アビスはそのままワシへ拳を振るう。

ワシはそれを受け止めると、思いっきり吹き飛ばされた。

な、なんじゃ……今のは？　ワシが吹き飛ばされた？

ククク、面白い。

まさかこんな事があるなんてのお……油断してたとは言え、ワシが一時的にでも力負けするなんてな。

「前言撤回じゃ……」

「……」

「お主には驚かされた！　面白い！　実に面白い！！
……しかし、何時までも遊んでいると桜華に怒られるのじゃ。
だから、ワシを吹き飛ばしたお主に敬意を表して」

ワシは大剣を構えて不敵に笑う。

「一瞬だけ全力を見せよう！　精々耐えてくれるのじゃ……」

桜華のほつをチラリとみると、少し疲れたような表情をしておった。

うむ……またワシが迷惑をかけたるようじゃの。

だが、

「桜華！　使ってもいいか!?!」

「……好きにきなさい」

「ありがとうじゃー!!」

ワシにも退けない理由があるのじゃ!

スマンの、桜華。

「焼き尽くせ、レーヴァテイン!!」

紅蓮の炎がレーヴァテインから舞い上がり、ワシの周りで渦巻いている。

これはワシの剣、レーヴァテインの真の力である。

普段はただの業物の大剣なのじゃが、解放をすることで絶大な力を得る。

この剣は焰を司り、全てを焼き払う魔の大剣。

威力と範囲が酷過ぎて、制御も手加減も効かない。

故に、桜華の許しが無い限りは使うことが出来ない。

制御も手加減もできないが、ワシはこの剣の使い手で使いこなすことが出来ている。

矛盾しているが、そういうものなのだから仕方がないのじゃ。

「焼き尽くされるがよい」

じゃから、今だけはアビスと全力で殺し合つとしようぞ！？

第八十五話「友達と裏切り」(前書き)

更新遅れてすみません><

あと、相変わらずモンハンという原作が見えない作品。
それでもよろしいといった方は、読んで下さいね

気分を害する人々は、すぐに「戻る」をクリッククリック

それでは、本編をお楽しみくださいね

第八十五話「友達と裏切り」

第八十五話「友達と裏切り」

??? Side

ここは外界から完全に隔離された部屋。

わたしは生まれてから、訓練以外はずっとここで過ごしていた。

ここは暗くて、狭くて、退屈な場所……。

両手両足に枷がついていて、

鎖の先に大きな重りがわたしの動きを邪魔する。

わたしは何時もここで一人で遊んでいなくちゃいけない。

部屋の扉の前に見張りの兵士さんがいて、

抜け出すとお姉様とマスターに怒られちゃう。

兵士さんは、わたしを怖がって一緒に遊んでくれないし……。

本当に……退屈……。

お姉様来ないかなあ……？

ちよつと兵士さんに聞いてみよつと。

「ねえ？」

わたしは扉の前にいるだろう兵士さんに声をかける。

「はっ、何でありましょうか？」

「今日は、お姉様来ないの？」

「……アビス様は今現在、侵入者二名と戦闘中です。

相手はかなりの強敵で、こちらに来るのは難しいと思われます」

兵士さんは一瞬言うのを戸惑った後、すらすらとわたしの質問に答えてくれた。

「そつ……お姉様は遊んでるんだあ。

ねえ？」

「はっ」

「わたしを　ここから出して」

「は？　そ、それは……」

わたしの言った事に慌てている兵士さんの反応が面白い。

だけど、

「うるさい」

今はそんな反応すらも煩わしい。

「え……その、」

「もついいよ……」

「そう、ですか」

わたしが諦めたことに安心しているらしい。

はあ、仕方ないなあ。

「勝手に出るからねっ！ー！」

グチャツ！？

「ガツ　　！？」

わたしは手刀で扉ごと兵士の体を貫いた。

紅くて美味しそうな血が私の手を流れていく。

わたしの手刀は、兵士の胸　　心臓　　辺りを貫いたようで、
兵士さんは呆気なく絶命してしまった。

「……今までお勤めご苦労様。あなたとお話するのも、
結構暇が潰せて楽しかったよ？」

人間って、本当に……脆いね。

軽く手を突き出しただけですぐに死んじゃう。

「お姉様と遊んでいる人間は、簡単に壊れないかな？」

わたしは嗤いながら、久しぶりの部屋の外を歩いていく。

廊下は明かりも窓も少なく薄暗い。

「うん、久しく部屋から出して貰ってないから、
どっちが出口か分かんないや」

手当たり次第に壊して回れば出れるかな？

でも、壊し過ぎるとお姉様とマスターに怒られるし……。

困ったなあ。

……困ったよお。

うん、やっぱり壊そう！

「壊れちゃえ！」

天井に向かって、思いっきり飛び上がり蹴りを放つ。

ズガンッ！！

かなりの衝撃が天井を襲い、次々と壁を抜いていく。

天井……かなりの高さまで穴が開き、空が見えるようになった。

「あれ？」

だけど、反動で重りが天井に突き刺さり、宙ぶらりんになっちゃった。

うーん、これ邪魔だなあ……ジャラジャラうるさいし。

……ま、いつか。

わたしは力づくで、それを引き抜き着地する。

「結構高さがあるね。思いつきり跳ぶよ！」

その場でしゃがみ込んで跳びあがる。

すごい勢いで視界に映るものが上から下に流れていき、すぐに大空の下へと跳びだした。

いや、跳び過ぎた。

「おおお、およ？ 跳び過ぎた？ ああー！ ねえ！？」

わたしはそのまま近くの森林の方まで重力で、真っ逆さまに落ちていった。

「うう……やっぱり重りは邪魔だよ」

ズドオオオン！！！！

木々を押し折り、地面を抉りながらもようやくわたしの動きが止まった。

寝転がっていたわたしに影が差した。

うん？ 誰……？

わたしの目の前には、黒い髪の女の人がいた。

お姉様に負けず劣らない綺麗な人だなあ……。

って、違う違う！

「大丈夫？」

女の方は急に心配そうに声をかけながら、手を差し伸べてくれた。

いきなりでびっくりしたわたしは、慌てながらも手をつかんで起き上った。

「う、うん。……あ、ありがとう」

「急に空からものすごい勢いで落ちてくるから、驚いたよ」

「あははは、はは……」

お姉様とマスター、あと死んだ見張り以外に初めて触れる人間。

わたしはいつもの調子が出せなくて戸惑っている。

……わたしでも、緊張してるのかな？

でも、嫌な感じはしない……かな。

この人は、何て言ったらいいのかな？

どこかわたしに似ているような気がする。

初めて会ったのにどこか懐かしく、親近感が湧いてくる。

一体、誰なんだろう？

「君は名前は？」

「え？」

「だから、君の名前だってば」

「わ、わたしの名前。えっと……メデイス」

「メデイスって言うのね。まあ、よろしくね」

「うん……。あなたの名前は？」

「……」

わたしが名前を聞くと女の方は少し困ったような、

何かを考えるような表情をして黙ってしまった。

……わたし何か悪いこと聞いたかな？

「実は、今の私って名前ないんだよね。だからその質問には答えられないや」

「えっ、そうなの!？」

名前がないなんて……変わった人だなあ。

それなら。

「じゃあ！ わたしが名前を付けてあげるよ!！」

「え……メデイスが？」

「うん！ 待っててね、今あなたにピッタリな名前を考えるから！」

「はは、じゃあ期待して待っているよ」

わたしは女の人を必死に観察して、名前の手掛かりとなるようなものを探す。

黒い髪に紅い瞳、なんか変わった服装。

具体的には、黒いひらひらした服とスカート、靴下や靴も黒……って、全身真っ黒だなあ。

背中に大きな太刀を背負ってる。

うん、……クロ？ いやいやいや！ 流石にこれは駄目だよ！？

もっと女性らしい名前がいいよね。

特徴……漆黒……瞳……紅……クリムゾン……クリム？

クリム……うん！ 女性らしくて響きも可愛いから良くないかな？

「決まったよ！ あなたの名前は今日からクリム！ ……どうかな？」

「クリム……クリムか。 うん、いい名前だね。

私の名前は今日からクリム。ありがとうメディス」

「うん！ お礼はいらないよ。 わたし達は友達だからね！」

「友達？」

「うん。 駄目かな？」

……わたしの初めての友達。

クリムの答えが気になって、聞きたい様な聞きたくない様な。

そんな矛盾を抱え、緊張でのどがカラカラに乾いてきた。

クリムは わたしの友達に なってくれる？

「……うん。私で良ければ友達になるよ」

っ!?

わたしにも、友達が出来た!

「うん!」

わたしは嬉しくなって、クリームが差しだしてきた手を両手で握り、ブンブンと上下に動かした。

「でも……」

「?」

クリームは真面目そうな表情でつぶやいた。

「友達って一体何をすればいいの?」

「知らない!」

「へっ?」

「私も知らないよ? クリームが初めての友達だもん!」

「はは、あははははははは」

「ほえ? っ、どうしたの? 急に笑い出して」

「い、いや……あはは、ははは……メディスは、おもしろ……あははは……!」

むう……なんだかよくわかんないや!

ようやく笑いを止めたころには、クリームはお腹を抱えて涙目になっていた。

「ぶう〜!」

「ごめんごめん! 拗ねないの」

「……うん」

「私も友達出来るの初めてだから、テンションが上がっちゃってね」

「……そうなの?」

「うん、……ユミナの方は違っけどね」

「ゆみな?」

「そう、ゆみな。もう一人の私」

「????? ……よく分かんないけど、わたしのお姉様と一緒に?」

「うん、まあ……そんな感じかな?」

「へえ……クリームはわたしと似てるね!」

「そっだね」

「あっ！一緒にお姉様に会いに行こう？
今、侵入者と遊んでるんだって」

「侵入者……ね？」

「早く行こー！」

わたしはクリムの手を引きながら、

上機嫌でお姉様のもとへと走って向かった。

桜華 Side

「喰らえっ！！！」

「そんなもの、効かんのじゃー！！」

かれこれ、数時間は打ち合っているが、
未だにエレンとアビスの勝負は決着が着かない。

解放状態のエレンと互角以上に打ち合うなんて、
どこの化け物よ……一体。

二人とも浅いけど傷も増えてきて、疲労の色も見えてきている。

……まあ、あり得ないとは思っけど。

仮にエレンが負けたとしても、まだ私が残っている。

怪我と疲労状態のアビスで私に勝つことは不可能だ。

彼女がこの城の最後の砦とみて間違いないだろう。

「まったく……早く終わらせなさいよエレン」

友人が暇で暇で死にそうなんだから……。

こんな面倒なこと、とっとと終わらせて帰りたいわ。

私は適当に戦いを眺めていると、いきなり城の方から大きな音が聞こえた。

「……………何？」

そして、何かが出てきたと思ったら森林の方へと落ちていった。

新敵の敵……？

いや、それにしても変だ。

エレンも急に聞こえた大きな音に驚いて、戦いの手を止めて見ていた。

「なんじゃ？」

「まさか。メデイス!？」

アビスはいきなり声を荒げると、森林の方へと駆け出そうとした。

それをエレンが前に出て制する。

「まだ戦いは終わっておらんぞ。なんだかよく分からんのが、

どうしても通りたいのならワシを倒してからにせい!」

「くっ……こんな時に!？」

がむしゃらに攻撃を仕掛けるアビス。

エレンはひらりと躲けていき、隙が生まれた瞬間に鋭い一撃を叩き込んだ。

……はずだった。

「キーーーーーック!!!」

突然飛び出してきた影が、大声で叫びながらエレンを蹴り飛ばしたのである。

ドゴオ　ズドオオオオン!!

かなりの速度で吹き飛ばされたエレンは、城壁を突き破っていった。

あのエレンを、いとも簡単に蹴り飛ばす。

これはアビスの比じゃない位やばいわね……。

私は自然と柄に手を伸ばし、臨戦態勢を整えていた。

「メデイス!？」

「お姉様! わたしも遊びに来たよ」

「ッ!?! ……見張りはどうしたの?」

「ん? 壊れちゃったよ」

「……そうか。あと、その手に握っているのは誰だ」

「あっ!」

メデイスと呼ばれた少女は慌てたように、握っていた手を放した。

握られていたのは見覚えのある少女。

「ッ!?! ……ユミナ・アリアス」

髪と瞳の色は違うが、確かに少女はユミナであった。

「メデイス?」

「い、ごめんね。つい……」

「つい、で空中を凄い速度で飛びたくなかったよ!」

「うう〜、ごめんなさい」

「はぁ……別に怪我也ないし、怒ってないよ」

「ほんとう?」

「うん。本当」

「えへへ……」

何故、彼女がここにいる?

半年前にかかなりの重症を負って、未だに意識が回復していないはず……。

目が覚めたの……?

でも、それだけじゃあの変化までは説明がつかない。

なにか副作用的なものがあつたのだろうか?

私が警戒しながらも頭をフル回転させていると、ようやく復活したエレンが私の隣に立つ。

「……一体、何なのじゃ? いきなりとは言え、

あそこまで蹴り飛ばされるとは思わなかったのじゃ」

「さあ? アビスの妹なんじゃない?」

「それと、あそこにいるのはカートリッジ娘ではないのか？」

「……そうね。でも、私も訳が分からないわ」

相手も話が終わったのか、こちらを見据える。

「……形勢逆転だな」

「あら、その女性はハンターだから私たちの味方でしょ」

「なんだと？」

「あれ？ クリムは、はんたーだったの？」

「ああ〜、まあ一応。職業上はハンターに分類されるかもね」

クリム……彼女はユミナじゃないの？

「貴女の名前はユミナ・アリアスじゃないの？」

「ゆみな？ それって確かクリムのお姉さんの名前？」

「いや、だから……正確にはもう一人の私だってば」

「よく分らないよお」

「うーん、簡単に言うなら二重人格って思ってくれたらいいよ」

二重人格……。

じゃあ、彼女は本当にユミナ？

でも、あの髪と瞳の色は一体。

「へえ、クリームって二重人格だったの？」

「ん、もうそれでいいよ」

「クリームはわたしの味方だよね？」

「うん、勿論。……友達だからね」

なっ！？

戦争中の、それも敵国家の味方に付くということは

「……貴女。それは裏切りよ？ ハンターの資格を剥奪されて、ギルドナイトにも追われることになるわよ」

つまり、そういうことである。

でも、彼女は、

「……ユミナは構うだろうね。でも、私は全然かまわないよ。そんなものよりも初めてできた友達の方が大切」

そう言い放った。

「……桜華よ」

「……わかつているわ。ユミナ・アリアス！」

貴女は、裏切つて敵国に着いた罪で、ハンターとしての資格を剥奪する」

「人違いだよ。私の名はクリム……って無駄か。」

あーあ、面倒なことになったなあ」

「貴女を抹殺する」

「おお、怖い怖い！」

「……エレンはあの姉妹を任せるわ。……大丈夫？」

「うむ。桜華が頼ってくれるのじゃ。その信頼には答えて見せようぞ」

「無理はしないで。速攻で片づけるわ」

私はユミナと、エレンは姉妹と対峙する。

対峙しただけでわかる。

このユミナは前にライザンにやられたユミナとは違い過ぎると。

以前は感じなかった狂気めいたものをひしひしと感じる。

それと同じくらい、あのメディスとかいった妹からも感じる。

二対一ではエレンは厳しいかもしれない。

なるべく早くこちらを終わらせなければ……負けるかもしれない。

「夜桜……十六夜 桜花。　　すぐに終わらせてあげるわ」

「そう。……精々楽しませて頂戴！！」

開始早々に私の神速の居合抜きがユミナを襲った。

第八十五話「友達と裏切り」(後書き)

……最近、新キャラが多々出てきているので
ややこしいんじゃない？ って人の為の

プチ・キャラ紹介

十六夜 桜華

女性 / 28歳 / ハンター /

二つ名：『夜桜』

武器：太刀【霊桜刀】

装備：モンスターの素材を繊維にして、

創った丈夫な和服(ユクモ装備に近い感じ)

容姿：黒髪黒眼 / 長髪 / 170cm

エレン・クライシオス

女性 / 27歳 / ハンター /

二つ名：『龍姫』

武器：大剣『レーヴァテイン』

装備：レイアX装備・改(桜華のようにレイア素材を、

繊維にして鎧に近づけたドレス)

容姿：金髪碧眼 / 短髪 / 155cm

ミナ・クルト / カナ・クルト

女性 / 25歳 / ハンター / 双子 /

二つ名：『双月』

武器：片手剣『紅日剣・陽』 / 片手剣『蒼月剣・陰』

装備：紅いウルクスス装備 / 蒼いウルクスス装備

容姿：茶髪蒼眼 / セミロング / ロリ

アビス

女性 / ? 歳 / 姉 /

武器：体質によって生み出される剣

装備：ドレスと鎧

容姿：紫髪金眼 / 長髪 / 173cm

メデイス

女性 / ? 歳 / 妹 / 狂気 /

武器：????

装備：ぼろい服だった布きれ 重りと鎖が着いた枷

リボン・紅

容姿：金髪紅眼 / 短髪 / ロリ (自重 145cm程度)

クリム

女性 / ? 歳 / 元ハンター / 狂気 /

武器：太刀『変幻刀・蒼』 魔槍『カートリッジグングニル』

装備：ゴスロリ服・黒 各種弾丸

容姿：黒髪紅眼 / ユミナ参照

マスター? (白衣の男)

男性 / ? 歳 / マッドなサイエンティスト /

武器：????

装備：白衣

容姿：ジェイルスカリエト……ゴホゴホッ！

何でもありません。（を少し痩せさせた感じ。

因みに、髪と瞳は薄緑でおk）

まあ、簡単なキャラ紹介ですが……。
こんなものですね。

『オイイ！？ イメージと違うんだよゴラァ！』
という方は、…… 諦めて

もしくは、苦情を殺到させてみるのもまた一興。

読者の皆様に本作のキャラについてのイメージを
聞いてみたいような気がします……若干、怖いですね。

ご意見・ご感想がありましたら、一言お願いします！

THE 土下座

< () > ごめんなさい

いや、なんか……もう、色々だね……はい。

第八十六話「砕かれし蒼、紅の敗北」

第八十六話「砕かれし蒼、紅の敗北」

桜華によって繰り出された神速の居合抜きを、
クリムはその一撃を弾いて防いだ。

「……………!？」

「おお、凄く速かったね。……………でもそれだけ」

弾かれて態勢を崩した桜華の横腹を斬った。

赤々とした鮮血が舞い、桜華は痛みに顔をしかめて、
その場に片膝をつく。

「休んでる暇なんてないよ!」

しゃがみこむ桜華の頭目掛けて太刀を振り下ろす。

「くっ……………」

それを横に転がりながら躲すと、急いで立ち上がり態勢を直した。

溢れ出る血は止まらず、空いている片手で傷口を抑える。

対するクリムは、肩を太刀の背でポンポンと叩きながら桜華を見据える。

その表情には余裕と楽しさが垣間見えた。

「夜桜……確か、記憶では伝説ともいえるハンターの一人だったよね。」

「ユミナも一太刀使いとして憧れていたよ」

「……だから？」

「私は、そんなに貴女が強いとは思えないんだよね。」

それに貴女からは 迷いを感じる。

……敵を前に何をそんなに迷っているの？」

「……貴女には、関係ないわ」

「そうかな？ ……まあ、私は戦えれば何でもいいんだけどね。」

でも、私相手に迷っていたら 死ぬよ？」

それだけ言うと、クリムは一気に間合いを詰めて刺突を繰り返した。

喉元へと迫る刃を、桜華は紙一重に右に躲すと居合抜きで斬りかかる。

踏み込み過ぎて、無防備になったクリムの体へと刀身が吸い込まれる。

かと、思われた。

ガキンツッ!!

金属同士がぶつかる甲高い音が、辺りに響き渡った。

「……」

「残念だったね」

クリムは躲された太刀を無理矢理、
自分のもとへと引き戻して居合抜きの一撃を防いだのであった。

「次は私の番！ カートリッジ・装填^{リロード} デスペアレンス!!」

バックステップで大きく距離を取ると、灰色の弾丸を装填した。

「吹き飛ばえっ!!!」

桜華の間合いへと飛び込み、大きく横に一閃。

桜華は踏込の速さに一瞬戸惑い、反応が遅れてしまった。

躲すことが出来ないと判断して、抜刀して防ぐ。

しかし、クリムはその防御ごと力づくで殴り飛ばしたのであった。

城壁に叩きつけられ、壁がへこみ大きく罅が奔る。

クリムはそれでも止まらず、桜華を追いかけて追撃する。

一閃、二閃、三閃。

凄まじいほどの破壊力を連続で叩き込んでいき、
ついには壁をぶち破り土埃で見えなくなってしまった。

「…………ふう。さて、生きているかな？」

クリムは再び、肩に刀身を乗せる形で土埃が晴れるのを待った。

しかし、数分経っても桜華は出てくることはなかった。

「あれ？ もしかしてやり過ぎちゃった？

………… もう少し遊んでたかったのになあ」

あまりの呆気ない終わりに落胆するクリム。

その時。

一条の斬閃が周り全てを切り裂いた。

城の壁は切り裂かれて、崩壊していく。

その陰から出てくる桜華。

土埃と少々の血で汚れていたが、致命傷は負っていなかった。

「勝手に殺さないでくれる？」

「そこなくっちゃ！」

再び二人は対峙する。

だが、その空気は前の時とは桁違いに殺気が充満していた。

「……………これからは、本気で殺しに掛かるわ」

「へえ〜面白い」

「覚悟しなさい」

「見セテミテヨ！ ソノ本気ツテ奴ヲサア！！」

桜華が斬りかかり、クリームがそれを受ける。

桜華は太刀を納刀して、一瞬後ろへと下がると。

「忌剣【斬月】」

上から下にかけて、大きく居合抜きを繰り出す桜華。

神速で繰り出された抜刀が空気と摩擦し、真空刃を生み出す。

「ッ！？」

慌てて受けるのをやめて避けることに専念するクリーム。

「忌剣【夜駆】」

特殊な歩法により凄い速さでクリームに迫り、

すれ違うとともに二連居合抜きで攻撃する。

一撃目は防げたが、二撃目は防ぐことが出来ずに、背中を浅く斬られてしまい、鮮血が舞う。

「 忌剣【天翔】」

クリムに向かって軽く跳び、抜刀。

クリムの上空から八つの斬閃が現れて、クリムを襲った。

「ぐう……!?!」

全てを防ぐことはかなわず、また傷を負っていく。

「 忌剣【蝕】」

一歩足を後ろに下げると同時に相手へと踏み込み、

刺突を四回繰り返す。

太刀でそれを防ごうとが一撃一撃がとても重く、うまく受け流すことが出来なくて傷が増えていく。

「 忌剣【十六夜】」

カチンカチンカチン!!!

超高速による居合抜きを繰り返して、クリムを少しずつ切り刻んでいく。

手が出せずにされるがままのクリームは、空中へと投げ出された。辺り一帯は血で紅く染まっていた。

「ぐう……う……っ!？」

「……私のこの剣術は、破壊と殺しの為だけのもの。モンスターだろうが人間だろうが、私の前に立った時点で結果は同じ。」

全てを壊されて、ただ、……死……あるのみよ」

「……」

クリームはボロボロの体を引き摺って立ち上がる。

その眼はまだ、狂気を宿し闘志を燃やし続けていた。

「カー、トリッジ……装填^{リロード}……」

「無駄よ。貴女はこの技で壊され、死ぬわ」

「エクス、プローションツ!」

業火を纏いながら、大上段から思いっきり振り下ろすクリーム。

「 忌剣【夜桜】」

横一閃にこれまで以上の速度で、空気を切り裂きながらクリームに迫る。

空気摩擦により散る火花が、まるで桜の花びらのように舞う。

振り下ろすクリムの太刀と、横一閃の桜華の太刀が互いにぶつかり、
刀身が砕け折れた。

クリムの太刀……変幻刀・蒼は根元を砕かれて刀身が粉々に散らばり、
刃先が宙を舞って地面へと突き刺さる。

そして、無慈悲にも桜華の太刀がクリムの腹を深く切り裂いた。

ズシャアッ!!!

大量の血をまき散らしながら、クリムは地面へと倒れ伏した。

「
」

「……さようなら」

刀身の血を払い鞘に納めると桜華は、
未だに戦っているエレンの元へと歩き出した。

メデイスSide

この人間、なかなか壊れないし強いから楽しい！

こんなに楽しい殺し合いは、一体いつ以来かな？

……ジワジワといたぶってから殺してあげる！

わたしに向かって振るわれた炎の剣を、素手で受け止めると、相手は驚いたような表情をして動きを止めた。

わたしはそのまま剣ごと人間を放り投げる。

バランスを整えながら着地したところへ先回りして、頭目掛けて蹴りを放つ。

蹴りは避けられたが、風圧で相手の髪がぱらぱらと舞った。

そして、わたしの足に引きずられて鉄球が飛来する。

「くっ！？」

人間は鉄球を弾くと、後ろに大きく跳んだ。

「およ？」

わたしは鉄球を弾かれてその場で数回転してしまった。

お姉様が人間の背後から斬りつける。

ザシュッ！

「ぐう……」のー」

剣を振り回してお姉様を下がらせる。

わたしとお姉様に挟まれている状態で、人間は膝をついた。

「アハハハハ！ わたしと遊んでこんなにもつなんて凄いよ！」

「……やはり二対一じゃ、ちと分が悪いかのぉ」

「 エレン、大丈夫かしら？」

「「！？」」

「……桜華、か」

いきなり現れたのは、クリムと戦っていたはずの人間だった。

嘘っ……クリムは

「あやつはどうしたのじゃ？」

「 死んだわ」

死

「嘘だツ！？ クリムが死んだなんて……」

「本当よ。あそこに転がっているわ」

そういつて人間が差した場所には、

大量の血に染まり倒れ伏したクリムの姿があった。

「ッ……クリム!!」

「メデイス!？」

わたしは急いでクリムの元へと駆け寄り、体を抱き起す。

「クリム! ねえ、嘘でしょ! 死んでないよね!？」

わたし達は友達でしょ? わたしを残して死なないでよ!」

「ごほっ……けほ」

クリムは血を吐きだして咽る。

「お姉様! 生きてる、まだ生きてるよ!

クリムを助けて!!」

「私には、無理です。しかし、……マスターならば、或いは

マスターならクリムを助けられるの!？」

じゃあ、急いでいかないと!

「……まだ、生きていたのね。頑丈ね……でも次はないわ」

「……邪魔をしないで!!」

わたしはクリムを背中に背負いながら、

道を塞ぐ人間に向かって叫ぶ。

「私達の仕事は、此処の制圧と裏切り者の抹殺。
だからそれは無理ね」

「……………いいよ。すぐに 殺シテアゲルカラ!？」

待っててね、クリム。

今コイツラを殺して、すぐに治してあげるからね!

エレンSide

致命傷を負いながらも生きているあの娘を見て、
辛そうな表情をしている桜華。

……………無理をしてないかのお?

……………何が、お主をそこまでさせるのじゃ。桜華よ。

「……………エレン」

「なんじゃ?」

「……………第二解放を許可するわ」

「……しかし、それでは」

「お願い」

……。

泣きそうな表情で懇願してくる桜華に、
ワシはただただ頷くことしかできなかった。

……わかった。すぐに終わらせる。

すまんのぉ、お主らよ。

許してくれとは言わん……じゃが、せめてもの情けじゃ。
一瞬にして楽にしてやるう。

ワシのレーヴァテインを地面へと突き立てて全神経を集中させる。

「贖え、断罪の劫火 全てを、灰燼と歸せ」

言霊を紡いでいく。

レーヴァテインが眩いほどの輝きを発し、焰がワシを包み込んだ。

ゴオオオオオオオオオオ！！！！

焰が散り、変化したワシが現れる。

金色の髪は、透き通るような白に。

碧の瞳は、深く輝くような真紅に。

そして、真紅の瞳からツーンと血涙が流れていく。

「ツーン!? ……うん」

正直、体への負担が大きすぎて辛い……。。

じゃが、大切な友人が悲しんでる方がもっと辛いんじゃない!!

「 被え」

荒ぶる劫火がレーヴァテインより放たれ、
全てを焼き尽くしながら三人へと向かった。

そこでワシの意識は、途絶えた。

第八十七話「大切な人」（前書き）

相変わらず、「、」「や」「や」「…」が多いです。

読みにくい場合は、是非文句を言ってください。
そのほうが、作者わたしの為になります。はい。

第八十七話「大切な人」

第八十七話「大切な人」

アビスSide

龍姫の姿が変わると同時に、途轍もないほどの力を感じた。

そして、劫火が私達三人に向かって放たれる。

あの焔は、マズイ。

いくらメディスでも散りも残らず焼かれてしまつかもしれない。

その死にかけの人間は尚更だ。

逃げる暇も、ない。

ならば

「はあああああああ！！！」

私一人を犠牲にして受け止める。

そうしたら二人は助かるはず。

「お姉様!？」

「っ……あ……?」

私は二人の前に立ちほだかり、全身で劫火を受け止める。

ジリジリと体を焼いていき、肉の焦げる臭いすらも焼いていく。

激痛が私の全身を走り、心がくじけそうになる。

でも、後ろで泣きそうな表情をしている妹の為だ。

私は心を奮い立たせ、苦痛に耐えながらも抑える。

「お姉様、止めて! 死んじゃう!？」

「ぐう……私は、大丈夫、だから。」

貴女は……早く、その子連れて
「

メデイスは必死に私を止めようとする。

……メデイスが、こういう心をはっきりと持つようになった。

それは、クリームのおかげかもしれない。

メデイスには貴女が必要だ。

だから

「逃げて！」

生き延びてください！

劫火はさらに激しく燃え盛った。

クリムSide

……………。

ここは、私のいた場所。

そっか、私はアイツに負けたのね…………。

幾ら体が馴染み切っていなかったとはいえ、油断のしすぎね。

折角、外の世界に出て友達もできたのに。

………… 私も、死ぬのか…………。

私^{コナ}からしたらもう悪夢ね。

怪我して寝てて、いつの間にか精神を破壊され体を奪われ。

いつの間にか、ギルドを裏切ってハンターをやめさせられ。

いつの間にか、死の淵に立っているもの。

私が最後に見た景色は、龍姫が劫火を放っているところだった。

あの劫火は、私のアマテラスに匹敵するレベルだ。

私を含めた、メデイスとメデイスの姉も死ぬだろう。

もう、どうしようもない。

ごめんなさい。

私が無力だったばかりに、貴方達を死なせてしまう。

……ごめんなさい。

ユミナにも悪いけど、もう、諦めた。

手遅れだ。

！！

え……？ 今のは……。

け よ！！

私の知っている声。

よく耳にする馴染のある声。

ふけ　　でよー!!

だんだんと大きくなっていく声に、私は驚いた。

だって、その声の主は

『ふざけないでよー!!』

心が壊れたはずの、私^{ユミナ}だったのだから。

突然目の前に現れたユミナは、

私の胸ぐらを掴み上げて立ち上がらせると

ズガアンツ!!

思いつきり頭突きをした。

「っ!?!　　痛い!」

『人の心を滅茶苦茶にしといて、揚句に勝手に勝手に暴れて、ハンターをクビになって、死にかけて諦めるう!?!　　ふざけないでっ!?!』

「　　ツ!?!?」

『アンター一人の行動で、どれだけの人に迷惑が掛かったと思ってるの?』

しかも、その当人はとっくに諦めて死のうとしてるし……。

アンタ馬鹿なの？ 本当にふざけないでよね！』

「……じゃあ、どうすればいいのよ!？」

私は既に死にかけ、相手の大技を防ぐのも逃げるのも無理。
諦める以外に選択肢h ー

ズガアンツ!!

鋭い頭突きが私の脳天を再び揺らした。

『だから！ アンタがしたいようにすればいいのよ！
諦める以外の選択肢でね』

「そんなもの……」

『これを見なさい』

そういつてユミナは私の脳に直接映像を流し込んできた。

それは

体を張って劫火を止めて、私とメデイスを守っているアビスの姿だ
った。

「嘘……なん、で？」

アビスは守るところか、メデイスに私を連れて逃げるように促して
いた。

『大切な人を守るためよ』

「大切な人を……守るため？」

『アビス？ という人は、貴女の為に体を張っているわけではないわ。』

自分の為……そして、大切な妹の為に貴女と妹を守っているのよ』

「メデイスの為……」

『詳しいことは知らないけど、あの子に貴女が必要だと思ったんでしょ』

「……」

『それで？ 貴女はどうするのかしら？』

「私は……」

私は……どうしたいんだろう？

アビスの頑張りを無駄にして二人を裏切り、
このままここで死ぬの……？

それとも

それとも？

私は……今、何を？

脳裏に浮かぶのは、私に初めてできた友達。

メディアスのどこか照れたようににかむ笑顔だった。

私……私は

『貴女はこのままでいいの？ 貴女が自分で外に出て、初めてあなたが作った。他でもない貴女自身の友人の命が、救えるのにそこで尽きようとしているのよ？』

「……………」

『貴女は、本当に、これでいいの？』

「……………」

そんなの……………」

この私が……………」

「よくない……！」

許せるはずがない。

『もうこの際、私の事はどうでもいいわ。』

貴方の好きなように、思いつきりやりなさい！』

「……………」ありがとうユミナ。そして、ごめん」

『はあ。……………」いつてらっしやい』

ユミナは優しく微笑みながら告げた。

『クリム』

友人の名づけてくれた、最愛の名前を。

私はもう、逃げないし諦めない。

絶対に助かって見せる。

そして、私は激痛とともに目覚め、咆哮した。

「ガアアアアアアアアアア！！！」

「クリム！？」

馴染まない内はと避けていたけど、

死にかけの今はそうは言ってられない。

悪いけど、全力全開よ！

内に秘めていた狂気を全開放して、禍々しい空気が辺りに満ちた。

体に黒い紋章が一部現れる。

傷がふさがり、流れていた血がとまる。

右手には折れた太刀を握り、左手は空へ向けて掲げた。

集まるは、狂気と漆黒の魔力。

生み出されるは、黄金と漆黒の弾丸。

「カートリッジ・装填^{リロード}!!」

煉獄の太陽の弾丸…アマテラス。

「煉獄……アマテラス!!」

装填されると漆黒の業火が、折れた太刀から滲み出てきた。

「うわあああああああ 燃えろおおおおお!!!!!!!!」

劫火を私の炎が激突し、拮抗する。

私にはその一瞬だけで十分事足りた。

「逃げるわよ!!」

私は倒れたアビスを背負い、

メデイスをお姫様抱っこで抱えてその場から逃げた。

向かった先は城内である。

確か、メデイスの話では“マスター”と呼ばれる奴がいたはず。

その人ならアビスの傷を治療できるはず……。

アビスの傷は酷い。

皮膚が焼け、肉まで焼け爛れている。

まだ、辛うじて意識がある状態だ。

早く、早くしないと！

私は城内を全力疾走で走っていく。

「メデイス！ そのマスターって人の部屋は何処だ！？」

「えっと、……その角を右。そして、真っ直ぐ進んで、次の角を左に曲がったところにある！」

「了解！」

私は言われた通り左に曲がると、急に目の前に人影が現れた。

「うわっ！？」

「ふむ、城内を走るのは感心しないな」

慌ててその人影を避けると、メデイスが慌てたように声を上げた。

「ああ！！ マスター！？」

「……メデイス！？ 何故君がここに……それに後ろのは」

「マスター！ お姉様を直して！ マスターならできるんですよ！？」

「どれ、見せてみなさい」

私はマスターと呼ばれた男の前にアビスを降ろすと、男はすぐにアビスの怪我の具合などを見始めた。

「……………これは」

「ま、すたー」

「……………アビス」

「申し、わけあり、ません。命令を、遂行で、きませんでした」

「気にしなくていい」

「それで、お願いが……………あるの、ですが」

「……………なんだね？」

「私の、“アレ”を……………ゴホゴホ！ そのの、人間に託したい」

「……………」

「メデイス、には……………ガハッ！？ その子が、必要、です。

だから、私の……………最初で、最後の、我儘をお許してください」

「わかった」

「ああ……………ありがとうございます。マスター」

マスターは立ち上がりアビスから一步後ろへと離れた。

「マスター！？ 何をしているの！ 早くお姉様を！！」

「め、でいす……」

「お姉様！？」

アビスの表情は、別れを告げるような悲しいものではなく、明るく優しく微笑んだものだった。

「だいすき、だったよ……わたしの。さいあいの、いもつとよ」

「うう……ぐすつ。おねえさまあ。しなないでえ」

「わたしは、もうむりだけど。ゴホゴホッ！？」

あなたのあねとして、さいごまで、みまもっているから」

「うわああああん」

マスターも、私も、メディスも解ってしまった。

理解をしてしまった。

アビスはもう助からない

「くりむ……だったかしら？」

「……はい」

「めでいすの、こと……たのんだわよ？ なかせたりしたら、ゆるさないから」

「……はい！」

私は最後のアビスの言葉を強く心に刻み込んだ。

「ますたー。いままで、ありがとうございました」

「礼を言いたいの私の方だよ。私の為に、ありがとう」

「わたしは、そのことばがきけただけで……しあわせです。

ゴホゴホッ！？ じかんがありません。はじめてください」

「……ああ。すまない」

「いえ。あやまらないでください。わたしのえらんだみちです」

「……ああ！」

突然、アビスの体が淡い光に包まれた。

「うわああああああん、お姉様あああああ！……！？」

「……一体、何を？」

一瞬、眩く輝くとアビスは、宝玉にへと姿を変えた。

深く色鮮やかに輝く宝玉。

男はそれを手に取ると、私に手渡してきた。

「……君が誰だか知らないが。我が娘の最初で最後の我儘だ。受け取ってくれたまえ。この【深淵の虹玉】を」

「【深淵の虹玉】……？」

「使い方は君次第だが……まずは、状況を整理したい。今起こっていることをすべて話してくれないか？」

「わかりました。実は」

私がつ知っている限りのことをすべて話した。

私とメデイスが友達になったこと。

私がハンターを裏切ったこと。

アビスがやられた相手。

それを、全て聞くと男は「全て理解した」と頷いた。

「……この先の私の部屋に脱出用の隠し通路がある。

それを使いメデイスを連れて東へと逃げる」

「東……？」

「ここから東に行くと言海があり、そこを抜けると港町がある。

そこから乗る船に乗って東の大陸【ウィンブル】に行く。

そして、その大陸のまたさらに東の島【流浪島】の刀鍛冶を訪ね

るといい」

「何故ですか……？」

「伝説の鍛冶屋と言われるのがいてな。

その【深淵の虹玉】で刀を鍛えなおして貰え。

恐らく、アビスもそのために渡したのだろう。

それまでは、研究所にある予備の太刀を持って行け」

「……わかりました。ありがとうございます」

「メデイス……我がもう一人の子よ。強く、幸せに生きてくれ」

それだけ言うと、男はどこかへと消えて行ってしまった。

残されたのは、座り込んで泣き続けるメデイスと死んだアビス。

それと、私だけだった。

「……メデイス」

「うっ……うっ。お姉様……」

「……行こう、メデイス。お姉さんを、

ここに置いたままにはしておけないでしょ？」

「……うん」

「急いで此処を出て、ちゃんとした場所で埋葬しよう」

「……うん」

「……ごめんね。私のせいで　「クリームは悪くないっ！！」……
メデイス」

「私が！　私が弱かったせいで！　お姉様は死んだ。

私が強ければクリームも傷つかず、お姉様も死ななかった！！

私が弱かったから　！！」

私はメデイスの頭をそつと抱いた。

そして、優しく撫でていく。

「ごめん。私も弱かった。二人をちゃんと守りたかった！

初めてできた大切な人を悲しませなくなかった！！　だから

最初から、体なんて気遣わずに全力で行けたら、

アビスも死ぬこともなかったのかな……？

ううん、たればなんてどうでもいい。

大事なのは結果とその後……。

アビスは死んだ。　私が弱かったから。

メデイスは泣いている。　私が弱かったから！

マスターと呼ばれた男も悲しんだだろう　私が弱かったから！！

だから

「だから、二人で強くなる？ 今度は後悔しないために、大切な人を守り切れるように！！」

「うん！」

私は強くなる！ ここで立ち止まってなんかいられない。

後押ししてくれたユミナの為。

死んでしまったアビスの為。

大切な友達のメデイスの為。

なによりも、 私自身の為に！！

私は、冷たいアビスの体を抱き上げて隠し通路へと向かった。

もう、私達の表情に涙も迷いも、後悔すらも存在していなかった。

マスター Side

アビスが、死んだ。

私の責任だ……。

でも、最後は私に笑顔を見せて笑いながら逝った。

アビス。

馬鹿な、私を許してくれ。

ハンターへの憎しみがお前たちを生み、
戦争へまでと拡大していった。

私の大切な家族を奪った、ハンター達に復讐をしてやりたかった。

ただそれだけだった……。

しかし、そんな私をお前はいつもそばにいて支えてくれた。

そう……まるで本物の家族のように。

ああ。私はなんて大馬鹿者なんだ。

失ってから本当の理由に気づくなんて……。

本当は、復讐のためにお前たちを造ったのではない。

もう一度、欲しかったんだ……あの温かな。

家族というものが。

だが、私は間違えた。

選択を誤ったのだ。

もう後戻りなどできない。

だから、残されたもう一人の家族の為に私自身で挑もうではないか！

アビス。お前を一人では逝かせはしない。

私も共に逝こうではないか。

「……貴様が、今回の主犯か？」

ようやく、来たか。

「その通りだ。君が夜桜かね？」

「そうよ。……このくだらない戦争を終わらせるわ」

「ふっ……別にもう戦争なんてどうでもいい。

だが、私の家族の分の敵はとらせてもらう！」

私は懐に潜ませていた拳銃を素早く引き抜くと引き金を引いた。

しかし、銃弾は夜桜によって弾かれた。

そのまま返しの刃で私を切り裂くと、静かに鞘へと納めた。

「ぐっ……ゴホッ！？ ガハッ！？」

大量の血が流れていき、意識がだんだんと薄れる。

待っていたまえアビス。

父がすぐに会いに行くからな。

そして……また、

一緒に

お父さん！

どうした？ アビス。

私、お父さんのこと大好きだよ！

おお、そうか。私もアビスの事大好きだぞ。

えへへ、一緒だね。

そうだな。一緒だ。ずっと、ずっとな！

うん！……お父さん、泣いてるの？ 悲しいの？

！？ 違う……悲しいんじゃない。嬉しいんだ。

？……変なお父さん。

はは、そうだな。私は変人だ。

私は構わないよ。変なお父さんも大好き！

ありがとう。私達はずっと一緒だ。家族、だからな。

うん！

大国デルヴィナートは制圧された。

主戦力を失ったデルヴィナート兵では、
王を守りきることが出来ず降伏。

そして、すぐに降伏した情報が伝わり、
ドンドルマに送られた兵士たちもその動きを止めた。

戦争は、
終結した。

第八十七話「大切な人」（後書き）

全体的に見て短かった気がします。

……戦争編は一応、次回かその次位で終わりの予定です。

あと、私の小説で初めて？ キャラが死にました。

アビスとマスターです。

短い間でしたが、二人が安らかに眠れるよう祈りましょう。
二人とも、ありがとうございました。

今回のことについて、何かご意見やご感想を下されると、
今後とても参考になります。
よろしくお願いします。

さて、いらぬような気がする補足です。

Q・何故、致命傷のクリムことユミナは生きているのか？

A・体の悪影響を考えずに、狂気と魔力を全開放したため、
体の治癒力が高まり傷が治ったのです。

でも、治っただけで血や体力は戻っていませんから……。

Q・マスターの死後のあれはなにか？

A・マスターの幼い頃のアビスとの思い出。
最後に、大切なものを思い出せたのです。

さて、それではまた次話にてお会いしましょう

第八十八話「終戦後」(前書き)

凄く……短い、です……。

第八十八話「終戦後」

第八十八話「終戦後」

「今から、ギルド緊急会議を始める」

とある部屋の一室。

そこには、ギルドマスターと二つ名持ちの面々がいた。

それぞれが何とも言えない位表情をしており、
空気は一段と重くなっていく。

「議題は、……裏切り者。ユミナ・アリアスの処遇についてだ。
夜桜。詳細について……」

「はい。わかっています」

ギルドマスターに促されて、席を立つ夜桜。

「私とエレンの二人がデルヴィナートで敵主力と交戦中に、
その妹と思われる人と現れ、私達と敵対。
本人ははつきりと、こちらを裏切ると告げました。
致命傷を負わせて始末するという寸前で逃げられ、

消息は一切不明。エレンは力の使い過ぎで昏倒。追跡は不可でした。」

「ああ。……さて、彼女の処罰についてだが」

ハンター資格の剥奪。及びに、ギルドナイトを派遣し抹殺

夜桜、龍姫、双月の四人を除く全員が息をのんだ。

「閃光」

「……はい。……すぐに各ギルド。及びに、ギルドナイトの手配を」

閃光は席を立ち、すぐに部屋から去ろうとすると、勢いよく剣聖が声を上げた。

「マスター！ 何かの間違いとかはないのでしょうか？

半年近く彼女と、彼女の仲間と共に過ごしましたが、彼女がハンターを止める選択をするとは思えません！」

「……現に、彼女は裏切ったわ」

「だから！ 何か理由があったのかもしれないだろ！」

「仮に理由があったとしても、……裏切った事実は覆らないわ」

剣聖と夜桜は激しく口論を繰り返す。

「お前が一番あの子を気にかけていただろ！

何か変な所なんかなかったのか!？」

「 知ったような口を！」

夜桜は、怒りに思わず太刀へと手が伸びる。

「 やめんか！！」

龍姫が大きく声を荒げ、机を右腕で思いっきり叩きつけた。

大きな音が鳴り机は木端微塵に砕ける。

「 剣聖。いくら何でも言い過ぎじゃ……もっと弁えよ。

……それと、桜華よ。流石に抜刀はマズイ。

ハンターとしての暗黙の了解を忘れたかのお？ 少し落ち着くが
よい」

「 ええ。ごめんなさい」

夜桜は、柄から手を放して椅子にドカリと座った。

「 ……済まない。言い過ぎた」

「 ……」

謝る剣聖に、夜桜は返事をするどころか視界にすら入れない。

嫌な沈黙が室内に流れる。

そして、再び口を開いたのは夜桜だった。

「彼女は、自分の名をクリムと言っていたわ」

『?????』

「……自分はもう一人のユミナ。二重人格みたいなものだとも」

「なんだと？ それじゃあ……」

「でも、……結果は変わらないわ」

再び沈黙。

「……閃光。抹殺は取消だ。捕縛に切り替えて搜索しろ」

『!?!?』

「!?!?……直ちに!?!?」

閃光はすぐに部屋から飛び出していった。

「何はともあれ、決めつけて殺すわけにはいかない。

ハンターの資格は剥奪するが、その後は事情を聴いてからでもいいだろう」

ギルドマスターのその一言でわずかに、部屋の空気は軽くなり明るくなった。

そして、ギルドマスターの最後の言葉により自然と解散していった。

アイSide

ユミナちゃん……。

私は自分の宿の一室で、最愛の親友の名を呟く。

一体、どうして？

ユミナちゃんに何があったの？

デルヴィナートとの戦争が終わってから、私の思考はずっとこれだけを占めていた。

夜桜さんから聞いた、衝撃の一言。

ユミナ・アリアスは裏切った

あのユミナちゃんが私達を裏切る？ ……そんなのありえない。

ねえ、ユミナちゃん。貴女は今一体どこにいるの……？

クリムSide

へつくしょん！

んんう？ なんだろ……風邪かな？

いや、誰かが噂をしているのかも……まあユミナのだと思うけど。

「大丈夫？」

「うん、平気だよ」

メデイスが心配そうに顔を覗き込んでくる。

私はそれを安心させようと、笑顔で返す。

それにしても、

「あと少しで港町に着くね」

「うん！ あそこに見えるのがそうなの？」

「多分ねー」

樹海を三日三晩も休まずに歩き続けて、

ようやく切り立った崖のようなところに出た。

今は、そこから少し遠くに見える港町を眺めて休憩している。

「ふう……こんなに歩いたのは初めてかも」

「あはは、私もなんだよねえ」

メデイスはちゃんと笑えている。

まだ少し、表情に影が差したり元気がないときもあるけど、私に笑顔を見せてくれる。

大切な、大切な友達だ……。

【 もうちょっとシャキっとしなさい！ 】

「うおわああっ!?!?」

「ど、どうしたの？ クリム？」

突然聞こえてきた声に跳びあがる私。

そんな私に驚いて尋ねてくるメデイス。

「こ、声が……」

「え!?!? ……おばけ？」

「嘘ッ!?!? おばけって実在したの……?」

「知らないよお！ わたし、見たことないもん」

「そんなの、私もだよ!」

……おばけ? ……幽霊?

どうやって倒せばいいのかな!?

【貴女、バカね……】

「また聞こえた!？」

「ひうつ!？」

再び聞こえた北声に私とメデイスは冷静さを失う。

【はあ……私。私よクリム。ユミナよ!】

「え……ユミナ？」

「ゆみな？」

【そうよ。ハンターを首になったユミナ・アリアスよ】

「うつ!？ ……ごめんなさい。というか、

一体どうやって話しかけてるの?」

「???」

はたから見たら私は独り言の怪しい人なんだろうね。

メデイスが何か変なものを見るような目で私を見てるしね。

【私は貴方。貴女は私でしょ? 心に直接話しかけるくらいいわけな
いわ。

貴女のせいで負った精神的傷も大分癒えてきたしね】

「うぐぐ……そ、そっか」

「ねえ、どうしたのクリムっ……？」

「えっと、もう一人の私……ユミナと喋ってるの」

「ほへえ……」

あまり、よくわかってないみたいだ。

【まあ、完全に立ち直ったわけでもないからもう少し寝てるけどね。大切な友達なんでしょ？ 貴女がしっかりしないでどうするの！】

ユミナはそれだけ言うと、

眠ったのか声が聞こえてくることはなくなった。

「うん、そっだよねー！」

ありがとう、ユミナ。

「お話、終わった？」

「うん。そろそろ行くっか」

「……うん！ その前に、最後にお姉様に祈るの」

「そっだね……うん、そうしよっ！ー！」

この見晴らしのいい場所にアビスの墓を建てた。

二人で交代しながら運び、一緒に掘って埋めた。

……ありがとう。どうか、やすらかに。

メデイスは絶対に私が守ります！

。

「！？ ……気のせい、か」

一瞬、アビスの声が聞こえた気がした。

でも私は頭を振り、その考えを振り払う。

「……いこっか」

「……うん」

祈りを捧げていたメデイスにそう告げて、私は再び進みだした。

新たな決意と、大切なものを胸に。

未知の大地へと足を踏み出した。

私の妹を、
お願いね

第八十八話「終戦後」(後書き)

今回は、短すぎますね。

それなのに、この更新速度の遅さ……。

私は絶望した!!

はい。さらっと流して下さって結構です。

最近、腰が痛みが末期で頭がおかしくなってます。

まあ……生まれつきおかしかったような気もしますが……。

そこはスルースキルでキニシナイ!

次回からは、新しい土地でクリム(ユミナ)が大暴れます。

つまり、まだ出てないモンスターや、

オリジナルモンスターなどを新しい土地で倒していくよ。

……的な?

狩場も新しく考えようかなと思う今日この頃。

ハイそこお! ハンター首になったでしょとか言わない!

御都合主義……この五文字に限ります。

(本編では、ちゃんとした理由? を載せますからね?)

心配しないでください)

因みに、いまさらですが……この作品は公式設定などは、
ほぼ無視していますからね！

……というか、私自身が知りません。

だから、矛盾点や公式とは違うぞ！

と言ったことが多々あるでしょう。

これらのことを踏まえ、理解したうえで楽しんでください

あ、あと。

最初とクリムの性格や口調が違うと思っただ方。

現在、体の方を気遣い狂気を抑え込んでいます。

そのため性格や口調に若干、差異が生まれています。

ユミナを完全に乗っ取れなかったことも関係しています。

まあ、狂気を抑えているから、

性格も変わっていると考えればokです！

それでは、また次話にてお会いしましょう

第八十九話「大迷走！ 東の大陸【ウィンブル】」（前書き）

お久しぶりです。

【鈴花 澪】改めまして【朱里奈】です。

諸事情により名前を少し変えました。

ご迷惑？ というか、ややこしい事してすみません。

（諸事情と言っても特に意味はありませんが……）

それと、祝100部（100話）です！

サブタイトルの方で100話を超えましたら、

何かさせて頂きたいと思います

えっ？ そんなことより、とっとと本編進めろって？

……それでは、本編です

第八十九話「大迷走！ 東の大陸【ウィンプル】」

第八十九話「大迷走！ 東の大陸【ウィンプル】」

鬱蒼と生い茂る木々の中、二人の少女が並んで歩いていた。

一人は自身と同じくらいの大きさの太刀を背負った、
黒髪紅眼のポニテ少女。

もう一人は、少女というには少し幼すぎる。

両手両足についでいる重りを気にせず歩く、
金髪紅眼のショート少女。

二人の服は薄汚れてボロボロになっていた。

それは、かれこれ一か月近くもの間、

この密林か樹海がよく判らない所を彷徨っていたからである。

飢えは、道中にいた草食竜や食べられるキノコや草でしのぎ、
水を見つけてはこまめに水筒へと入れた。

そう、ここは……東の大陸【ウィンプル】。

二人の少女……クリムとメデイスの目指している、
【流浪島】のある大陸である。

しかし、二人は慣れない土地と生い茂る木々に完全に迷ってしまっていた。

そもそも、クリムは記憶に在るものの、初めての外である。

メデイスも、初めての外の世界。

二人に長旅などと言った経験は皆無であった。

「……ここ、本当にどこだろう」

「……わかんないや」

「旅どころか、外に出たのも初めてだったのに……」

「私もだよお……」

二人は深いため息をつきながら、重い脚を引き摺って進んでいく。

「せめて、経験のあるユミナが目覚めてくれれば。

或いは何とかなるかもしれないのにね……」

「うう、もう全部壊しちゃえばいいと思うよ」

「……それは駄目」

「今、迷ったよね？」

「……ソ、ソナナコト、ナイヨ？」

「かーたーこーとー！」

「……」

「……」

『……はあ』

二人は疲れたように再びため息をついた。

木々が少し開けた場所に出た二人は、足を止めて辺りを見回した。

「今日は、このくらいで休憩しよっか？」

「うん、そうしょ！ もうクタクタだよお」

「ははは、私も…… 『グギヤアアアアオ！！！！』……えっ？」

休憩しようとした二人の前に、巨大なモンスターが叫びながら現れた。

モンスターは二足歩行で歩き、鋭つい顔と傷だらけの体の特徴だった。

体表は緑で腕が小さく、尻尾が丸太よりも太い。

この樹海もどきに入ってから何度か見かけたモンスター。

二人は、安全を考えて全く手を出さなかったが、ついに目の前へと現れて敵意を示している。

(くっ……疲れているのに！ ユミナの記憶にないモンスターだから、

できれば相手にしたくないのに……どうする!?)

クリムは身構え、何時でも動けるようにモンスターを見据えた。

クリムの隣に立っていたメデイスは、口を三日月のように歪めて嗤った。

「アハッ……アレ、壊しても良いよね？ ね？」

「……」

「クリム？」

「やるしか、ない……ねっ!!!」

そういつてクリムは、モンスターの顔面に回し蹴りを叩き込んだ。

ゴッ！ と鈍い音を立ててモンスターの顔面に足がめり込む。

しかし、モンスターはケロツとしたままクリムを睨みつける。

「 コワレチャエ！」

続いて、メデイスが懐に潜り込み拳を振るう。

拳がめり込み、僅かにモンスターは宙へと浮いた。

「アハハハハハハハハハハ！！！」

メデイスは次々と拳を叩き込んでいく。

その一撃一撃にかなりの威力が込められており、激しい音が辺りに響き渡る。

ガッ！！

モンスターは一鳴きし、尻尾をメデイスに向かって振るう。

のっしりとした動きだが、かなりの威力を持った一撃。

メデイスはそれを正面から両手で受け止めようとした。

ズシンッ！！

「ッ！？」

衝撃が全身を襲い、足が地面へとめり込んだ。

そのまま徐々に後ろへ通されていく。

「ハアアアアアア！！！」

クリムが声を上げながらモンスターの背中を蹴る。

ビクともしなかったが注意を惹くには充分であった。

クリームは空中で体制を直しながら、モンスターの顔面を蹴る。

しかし、その一撃は空を切った。

「うりゃあああああああ！！！！」

メデイスがモンスターの尻尾をがっしりと掴み、
思いっきり投げ飛ばしたからである。

全長が20メートル以上はありそうなモンスターをだ。

「……………え？ ……マジ？」

ズシイイイイン！！！！！！

投げ飛ばされたモンスターは地響きを立てながら倒れ伏した。

蹴りが空を切ったクリームは、慌てて体制を直しながら着地した。

「えへへ……………まだまだ行くよ」今のうちに逃げるよ！！」「あうっ！！」

クリームはメデイスの襟首を掴み、全力で走り去ろうとした。

「重ッ！？」

「く、くるしいよおクリーム」

だが、メデイスのつけている重りが想像以上の重さで、メデイスを引つ張ることが出来ずに躓いた。

そうこうしている間にモンスターは起き上がり、二人の前へと再び立ちはだかった。

「げっ……！？ もう起き上がったの！？」

「私は重くないよお！ この重りが重いの！」

「わ、分かったから！ というか、今はそれどころじゃないよ！」

モンスターは涎を垂らしながら、獰猛な号でクリームに噛みつく。

「うわっ！？」

紙一重でそれを躲すと、地面を思い切りけり一気に距離を取る。

グルルルルウ……。

モンスターは低く唸り声を上げたかと思うと、踵を返してその場を立ち去って行った。

呆気にとられた二人はしばしばその姿を見送っていた。

「えっ？ ……逃げたの？ なんで？」

「涎がだらつだらつたね！ お腹でも空いてたのかな？」

「うっん。あれが疲労状態もとい、腹減り状態って奴だね」

「ちえ……せつかく遊べると思ったのに」

「まあまあ。また今度、リベンジしよう……人里に着ければね」

「うん！」

「まあ、まずはこの場所から離れてから今日は休みましょう」

クリームが空を見上げる。

木々に遮られ見難かったが、すっかり日は沈み星がちらほらと見え始めていた。

二人は再び歩き始め、本日の寢床を探し始めたのであった。

……のだが、

グガアアアアアアア！！？

「ちよっ！？まさか、もう来たの！？」

「よし！今度こそボツコボコにしてあげるよ！」

「違うよ！？逃げるんだよ！ほら、急いでえー！……！」

「あ、待ってよクリーム！」

グガアアアアアアア！！？

緑の巨体が木々の間を疾走して戻ってきたのであった。

クリーム達も咆哮が聞こえると同時に全力で走りだした。

発達した二本足による速さは、尋常ではなく、

あっという間にすぐ近くまで追いつかれてしまった。

「近い近い近い!!」

「凄く、速いよ?」

「メデイス! 振り返っちゃ駄目!」

「そんなこと言っても……」

「とにかく、全力ダッシュ!」

グガアアアアアア!?!?

モンスターは大きく跳躍し、クリーム達の前へと回りこんだ。

「うわっ!? クソ、やるしかないか!」

「戦うんだね!」

「仕方がない。全力でやるから、ちょっと時間を稼いで」

「うん、任せて! クリムの出番がないくらい頑張る!」

クリームは一步後ろへと下がり、代わりにメデイスは前へと進み出た。

「行くよ！」

力強く一步を踏み込むと同時に、腕についている鉄球を叩きつけた。流れるように四つの鉄球を連続でぶつけていく。

鈍い音が響き、堪らずモンスターは仰け反る。

「まだ……まだまだあああああ！！！」

ドゴオ……ドガ、バキィ、ドス！！！！

鉄球がモンスターの肉へと食い込み、血が滲み零れだす。

圧倒的威力と手数にモンスターは圧されていた。

ガアアアアアアア！！！！

「うわっ！？」

突然、辺り一面を埋め尽くすような方向を上げた。

体表の一部が紅く染まり、沢山の傷跡が浮かび上がった。

それは、斬る、貫く、など様々な古い傷。

幾多の敵の攻撃に耐え、葬ってきた証であった。

口からは黒い雷が迸る。

怒り状態だ。

しかし、モンスターが自身のペースに出来たのはその一瞬だけだった。

辺りが、不気味なまでに静まり返る。

「廻レ」

クリームは一言つぶやき、柄を握って引き抜いた。

根元から刀身が折れた蒼い刃の太刀。

漆黒の煙が立ち上り、クリームを包み込んでいく。

それは、悍ましいほどの狂気であり、

真紅の瞳がより、深く紅く妖しく輝く。

そして、体に黒い紋章が浮かび上がっていった。

「メデイス、下ガツテ」

「うん」

メデイスは素直にクリームの後ろへと下がる。

「カートリッジ・装填^{ローテ}」

空いていた掌の中に出て来たのは、黄金と漆黒の弾丸。

煉獄『アマテラス』

折れた刀身から漆黒の業火が漏れ出した。

業火は球状に固められ、モンスター目掛けて放たれる。

グギヤアアアアアアアアアア!!?

モンスターは耐えられずに絶叫する。

業火が皮を、肉を、骨すらも蝕み燃やす。

必死に暴れて消そうとするが、衰えるどころかさらに燃え盛る。

「チツ……シブトイ。コレで決メル!」

左手に力を込めて魔力と狂気を収束させ、
一つの弾丸を創りだす。

「カートリッジ・装填^{リロード}」

漆黒と真紅が混じり合った色。

魔槍の紅黒の弾丸…グングニル。

魔槍『グングニル』

「トツテオキダ! 精々、派手二壊レロ!」

光速で飛来した大槍は、胴体を貫通して体ごと消し飛ばした。

「グツ……アア……カハツ!？」

突然クリムは地面に膝をつき、吐血した。

「クツ……やつぱり、まだこの状態は危険ね」

そう呟き、ふっと紋章が消えて禍々しい狂気も消え去った。

「クリム、大丈夫？」

「うん、大丈夫。少し疲れただけ。

さっ！ アレを剥ぎ取って速く休めるところまで移動しよう？」

「うん！」

そういつて、死体の元まで近づいてみたが、

「……あちゃー。碌に取れそうな素材がないね」

先ほど消し飛ばしてしまったせいで、

使えそうな素材がほとんど消えてしまっていた。

「仕方がない」と諦めて、ほんの少しだけ剥ぎ取ると、二人はその場を後にした。

第八十九話「大迷走！ 東の大陸【ウィンブル】」（後書き）

なんか、文の終わりが単調な感じがします。

『オラに文章力をわけてくれー！！』

……まあ、練習あるのみですね！

ところで皆さん。

今話に出てきた緑のモンスター。

……一体、なんだか分かりますか？

そう、知っている人は知っているアイツです。

えっ？ 文章が拙すぎてなんだかわからなかったって？

いやいやいや、緑で怒ったら少し赤っぽくなって、

古傷が出てくる二足歩行の敵つい顔と言ったら……

スライムじゃないじゃないですか（笑）

えっ？ 違う……？

そもそも、スライムなんて存在しない？

あれえ……私の知っているモンハンと違いますねー？

冗談ですが……冗談ですよ？

まあ、あれはイビルジョーです。

知らない人は、ググってみてください。

それでは、また次話にてお会いしましょう

第九十話「荒らされる村、森の中の異変」(前書き)

更新遅くてごめんね！

第九十話「荒らされる村、森の中の異変」

第九十話「荒らされる村、森の中の異変」

「……とりあえず村に着いたわけだけど？」

あれからさらに三日ほど樹海もどきを彷徨い、ようやく樹海もどきから抜けることが出来た。

そして、近くに村を見つけたのであったのだが。

「わ、これが村なんだあ。人が……あれ？」

少ない……というかいらないよ？」

昼間だというのにメデイスの言うとおり、外に人がいないのである。

一体何があつたんだろ？

「とにかく！ 誰かいないか探してみようメデイス」

「うん、わかった！」

メデイスと二手に……別れるのはいろいろと危険だからやめて、

二人で家の窓を覗いていく。

.....。

うーん、人がいないってことはなさそう。

ざっと覗いてみたけど、家の中は生活感が溢れていた。

つまり、今もなおここで人が生活している証

それなのに、なぜこんなにも人気がないの？

「ねえねえクリーム」

「ん、何？ メディアス」

「あれって畑かな？」

そう言つてメディアスが指を差した先には、
確かに畑らしきものがあった。

何者かに荒らされた跡を残して。

私は畑に近づき、よく目を凝らして調べる。

.....この足跡は、モンスターのものかな？ えっと確か

【これは恐らく、鳥竜種のものね】

「うわぁっ！？」

「な、何？ どどどうしたのクリーム!？」

「脅かさないでよユミナ!？」

思考に更けていると突然、

頭の中にユミナの声が流れてきたのであった。

メデイスは突然悲鳴を上げて飛びのいた私に驚き、あたふたとして
いる。

【失礼ね、全く。人が折角手伝ってあげようと起きて来たのに……】

「だから！ 急に話しかけたら誰だつて驚くでしょ!？」

【直接話しかけているんだから、そんなこと言われてもねー】

「……何か性格が、大分変わってない？」

【貴女と中途半端に混ざり合ったせいね。

貴女も最初のころからは考えられないほど変わってるでしょ?】

「……そうかも」

狂気を抑えているからと思っていたけど、

そついう可能性もあったのか……。

大切な友人もできたし、私は変わってしまったんだ。

……うん、悪くない。

「クリーム？ 大丈夫？」

「うん。ユミナが起きてきて驚いただけ」

「ゆみなー！」

「うん。手伝ってくれるみたいだよ」

「ゆみな！ありがとうー」

【ん……どういたしまして】

ユミナが答えただけ伝わってないだろうね。

「それで？ この足跡は鳥竜種のものって言うてたけど……」

【多分ね。見たことのない奴だから特定まではできないけど、
少なくとも、この地特有のか、 新種ね】

うーん、ハンターであるユミナがそういうのなら、
きっとそうなんだろうね。

「つまり、この村は正体不明のモンスターに襲われたり、
畑とか荒らされて困っているってこと？」

「ふえ……なるほど」

【そだね。まずは村人を探すべきね……
無理やりにも家に押し入って、ね】

黒い……ユミナが黒いよ!?

あれ? 黒いのって私の方じゃなかったけ?

どっだけ影響出てるの!?

【とりあえず、私はもう辛いから眠る。

また何かあれば出てくるかも……】

「ん、ありがと。おやすみ」

「ゆみな寝るの?」

「うん。疲れたから後は任せるって。

また何かあれば出てくるみたいだけどね」

「おやすみ! またねっ」

【……おやすみ】

ユミナの声もメデイスに聞こえればいいのに……。

「ユミナも、「おやすみ」って言ってたよ」

「うん!」

「さあて、何はともあれまずは村人を探そう」

そう言っって私達は村の中を歩き回る。

そして、一番大きな家を見つけて恐らくこれが村長の家だと当りを付けた。

「さあ、乗り込むよ」

「うおおーうおおー！」

私は扉を開けて乗り込もうとしたら。

バギイツ！？

メデイスが思いつきり扉を蹴破った。

中心から横に真っ二つに砕け、吹き飛んでいく扉。

ぱらぱらと破片が辺り一面に舞っていく。

「ちょ！？ な、何してるのメデイス！？」

「え？ 無理矢理にでも押し入るんじゃないの？」

「ユミナと同じこと言ってるよこの子！？ というか、

扉の先に人がいたら大惨事だよ！？」

……弁償もしなきゃいけないし」

「うー、ごめんなさい」

「……お邪魔しまーす。誰かいませんかー？」

扉壊してすみませーん」

「せんかー？」

扉だったものを避けながら部屋へと踏み入っていく。

入ってすぐが広間で、奥には上へ続く階段と部屋。

唐突に声がかけられた。

「誰じゃ？」

階段の上から覗き込むように声をかけてきたのは、初老の男性であった。

男性は厳しい眼差しでこちらと壊れた扉を見ながら、ゆっくりと階段を下りてくる。

「えっと、扉壊してすみません！」

あの、私は流れのハンター何ですけど、できればいろいろと聞きたいことがあるんですけど」

「ふむ、ハンターであったか。扉の事は……あとで言おう。それで一体こんな村で何が聞きたいのじゃ？」

「この村の状況と、こちら辺のモンスターの生態。それと、極東【流浪島】の情報です」

「……」

「それで、私から提案があります。」

今この村は、鳥竜種が何かのモンスターに襲われて困っていますよね？

宿と情報を提供していただければ、私達が問題を解決します。

どうですか？」

そういうと、男性は数分深く考え込んだ。

そして、

「ふむ。寧ろこちらからお願いしたいくらいだ。頼めるか？」

男性は笑みを浮かべながら了承した。

「はい」

「私はこの村の村長じゃ。村の皆は怯えて滅多に家からは出てこないから、今日は私の家に泊まっていくといい」

「ありがとうございます」

「クリームー!!」

「どうしたの？」

今までずっと黙っていたメデイスが私の袖を引っ張りながら呼んだ。

振り返ると訳が分かっている様子メデイス。

「何がどうなったのー？」

「つまりね。私達が欲しい情報をあの村長さんが教えてくれて、代わりに私たちがモンスターを倒すんだよ?」

「遊べるの?」

「うん。力いっぱいね」

そういうとメデイスは目を輝かせながらはしゃいでいた。

「……その子も戦うのか?」

「はい。メデイスは今の私よりもずっと強いですから」

「……そうか。そんな子供でも戦っているのか……」

村長は沈痛な面持ちでそう呟く。

それを聞いたメデイスが怒りながら抗議する。

「ぶうー！ メデイスは子供じゃないよー」

「悪い悪い。そうじゃの……私達に分まで戦ってくれ」

「うん? よく分からないけど、任せてよ!」

「部屋は、二階の私以外の部屋なら好きに使ってくれて構わない。食事の準備をしておくから、風呂にでも入ってくるといい」

「ああ……何から何まですみません」

「気にしなくてもいい。これが今私に出来る事じゃからな」

私はメデイスを連れて、風呂にへと向かった。

「食事は口に合ったかの？」

「美味しかったよー！」

「ええ、美味しかったです」

風呂に入り食事も負えた私達は、村長に詳しく話を聞いた。

「村を襲っているのは、ハンター殿の言うとおり、鳥竜種のジャギイ。それも、群れの長のドスジャギイもいる」

「ジャギイ……ドスジャギイ……」

【……どこかで聞いたことがあるかな？

少なくとも新種ではなく、地方特有の奴だったね】

(ユミナ。起きてたのね)

【ええ。まあ、詳しくは知らないから私からは何も言えないわね】

「すみません。一か月前にこの大陸に来たばかりで、ここらのモンスターは知らないんです。できたら、教えてほしいんですけど……」

「ふむ。ジャギイは、雄雌で名前と体格が違つての。」

雄で小さいのがジャギイ。雌で大きいのがジャギイノス。さつきも言ったとおり群れの長がドスジャギイじゃ」

「特徴とかありますか？」

「大きなエリマキが一番の特徴と言えるじゃろうな。あと、ドスジャギイは異なる鳴き声を使い分けて、ジャギイとジャギイノスを呼ぶ厄介なやつじゃ」

【ふーん、そこらへんは他の奴らとあまり変わらないのね】

(つまり……?)

【その、ドスジャギイって奴だけなら比較的楽に勝てるね。……油断はできないけど】

(どういふこと?)

【今からいふことを村長さんに聞いてみて】

(……わかった)

「村長さん。聞きたいことがあるんですけど？」

「なんじゃ？」

「そのドスジャギイは昔にも襲ってきたことはありますか？」

「……いや、ここ最近　一週間前　が初めてじゃの」

「つまり、それまでジャギイ達を見かけたことはなかった？」

「いや、森の方に集落があるのは知っていた。

じゃが、森は資源が豊富じゃからの。」

……私達の村も襲われることはなかったの。」

【そう。……これは一筋縄ではいかなかったかもね】

(何かわかったの?)

【ドスジャギイ達は森を追われたのよ。圧倒的強者によってね。今まで襲ってないのに急に襲いだしたのが証拠。

極め付けには、恐らく肉食であるうものが畑を襲ってる事ね】

「村長さん。これは簡単には終わらないかもしれません」

「何故じゃ？」

「ドスジャギイ以外に強力なモンスターが、生息している可能性があります。」

それも倒さないと、この村の脅威は去りません」

「……なんとかならんかの？」

【下手したらモンスターを二頭同時に相手にすることになるわね。

まあ、こちららも二人……私もいるから大丈夫かも】

「私達が何とかします。明日の朝一にその森の探索をします。そして、可能ならばどちららも討伐してきます」

「お願いします！」

その後、村長にこのあたりの地形、生態などの情報をもらい、ぼーっとしてるメデイスにも説明して眠りについた。

第九十一話「荒れ狂う双頭の狼」(前書き)

久々の連続更新！

所謂、連投って奴ですかね？
……あれ？ ちょっと違う？

第九十一話「荒れ狂う双頭の狼」

第九十一話「荒れ狂う双頭の狼」

早朝のまだ日も登り切っていない暗闇の森の中。

私とメデイスは、ジャギイ達の群れを探していた。

草木をかき分けて、足跡をたどる地道な作業である。

何故こんな探し方かというと、ユミナの提案である。

曰く、何者かによって住処を荒らされていた場合、前と同じところには近寄らずに新しい巣を作る可能性がある。

だから、こうやって地道に足跡を探しているのだ。

「どうメデイス？」

「うん、あっちの方に続いているかな？」

そういつてメデイスが指差したのは、森が浅い方であった。

「……やっぱり追い出されたのか。それとも」

「あゝこっちにもある！ 二手に分かれた感じかな？」

「ん、流石メデイス。頼りにしてるよ」

「うんー！」

「さて、どっちに行こうか」

片方はさっき言った森が浅い方向。もう片方は森が深い方向。

どちらの足跡も同じくらいで区別はできそうにない。

やっぱりここは……。

「こっちを探そう」

「うん」

森が浅い方へと歩いていく私達。

深い方はいざというとき危険なので、こっちを選んだ。

いつでも離脱できるようにと。

一か月間彷徨い続けた樹海とは違い、
光りもとおって暗い雰囲気もない。

複雑に木々が絡まって方向を見失うこともない比較的楽な森だった。

村長が言ったとおり、資源が豊富で、
至る所に薬草類やキノコといったものを見かける。

うーん、結構彷徨ってたからな。こういうのは採っておきたいね。

「メデイス」

「なに？」

「今から私が教えるものを集めてほしいの」

そういうと、近くにあった薬草とアオキノコを教えて、
集めてくるように頼んだ。

メデイスは笑顔で快く引き受けると、辺りをウロウロし始める。

私もメデイスとは反対側の方を探す。

「薬草、アオキノコ、……げどく草もあるのか」

ネンチャク草、マヒダケ、ねむり草、石ころ、砥石……。

使えそうなものを取りすぎないように片っ端からとっていく。

あれ、ユミナは調合とかできたけど……私はできるのかな？

したことがないぞ？

……。

まあ、何とかなるよね！

あらかた取り終えると、メデイスも帰ってきて戦利品を出した。

「沢山採れたよー」

薬草とアオキノコ両方20本づつ差し出してきた。

うーん、取り過ぎな様な……まあいつか。

「ありがとうね」

「えへへ」

頭を軽く撫でてあげると、嬉しそうに笑った。

さて、本番はこれからだけど……どうしよう？

えっと……回復薬の調合は、まず薬草をすりつぶして、

その後にアオキノコのエキスを抽出して混ぜ合わせるんだったよね。

ハチミツがあれば効果も増して、ついでに苦味も取れるんだけどね。

警沢は言ってもらえない。

まずは薬草をすりつぶそう。

私のとったのと合わせて30本。10本だけ残してすりつぶしていく。

「これ10本すりつぶしてね」

「ん〜！ わかった。こりこり〜」

メディスにも手伝わってもらい手ごろな石を使ってすりつぶす。

ん〜、アオキノコのエキスはどうやって抽出するんだろ？

手で絞るのかな……？ というか、一つの量がこれじゃあ凄く少ないよな。

ビンって結構大きかったよね。

【……ハア。見てられないね】

ユミナ！

丁度よかった。これ私やり方わからないから教えてくれない？

作れる量とビンの大きさが釣り合っていないんだけど？

【貴女、原液で飲むつもり？ 飲めないこともないし、

効果も普通よりは数倍いいけどかなり苦いよ？

綺麗で新鮮な水で薄めなさい】

あ、そつか。水で量増しすればいいんだ。

【効果を重視するなら、ポーチの中に小瓶があるでしょ？

それに入れてちよっとだけ水を足せばいいよ】

回復薬って飲めば効果が出るんだよね？

【傷口にかけてもいいよ。薬草も同じね。

食べてもいいし、傷口に張り付けてもいい】

ふむふむ。

私はユミナの丁寧な説明を聞きながら、

メディスに伝えながら作業を続けていった。

そして。

「できたー！！」

「わーい。ぱちぱち」

10本のビンに詰まった回復薬。

薬草の量の方が本数より多かったので、二倍にして入れてある。

効果も苦味も普通よりは大きいらしい。

【貴女は私でもあるんだから、一度ハンターとして教える必要があるね】

うっ！？ ……お手柔らかにお願いします。

【まだハンターとして働けているとは思ってなかったけどね。

……まあ、ギルドを通しての依頼は受けられないだろうね。

自称ハンターとして、ギルドナイトに抹殺されないといいわ

……「じめん。」

【……過ぎたことはしょうがない！　これから挽回しなさい】

うん、名誉返上、汚名挽回だね！

【……逆よ逆。ハア】

あれ？

【一から勉強する必要があるね。メデイスも一緒に】

ぐっ……返す言葉もないわ！

【そこで威張らないでよ。それじゃ、また眠る】

それだけいうと、声は途絶えて静かになった。

私はビンをすべてポーチの中に入れて、立ち上がった。

「さあ。早く探そう」

「はぁーいー」

私達は再び足跡を追う作業へと戻る。

それから数十分して辿り着いたのは少し開けた、切り立った崖がある場所であった。

辺りには瓦礫がたくさん積み重なっていて隠れる場所はたくさんあった。

「行き止まり……ここで終わり？ いや、もしかして登っていくの？」

「どうするの？」

「まずはここを探して いや、どうやらアタリのような」

瓦礫で積まれた岩陰から、見たこともない小型のモンスターが、威嚇しながら現れた。

恐らく、これが鳥竜種のジャギイという奴なんだろう。

ランポスよりも小型な体系に、

ランポスのトサカとは違ったエリマキが目立つ。

ジャギイの隣にいる一回り大きいのがジャギイノスだろう。

こちらは、ランポスと同程度の大きさだ。

親玉であるドスジャギイの姿は見えない。

此処を留守にしているのか、そもそもここが群れじゃないのか。

そのどちらかであると私は予測した。

ならば。

「メデイス。片付けるよ」

「うん！」

私はポーチから一つの弾丸カートリッジを取り出すと、鞘から太刀を抜きつつ接近した。

「カートリッジ・装填リロード！！」

ジャギイ達は急に接近してきた私に反応できず、ただただ目で私の姿を追うだけであった。

「エクスプロージョン！！」

ガチャン！！

紅い弾丸が装填口に吸い込まれて、閉じられる。

そして、折れた刀身から紅蓮の炎が舞い上がる。

「飛焰一閃！！」

大振りな横への一閃。

斬線をなぞるように炎が飛び、ジャギイ達を焼き斬った。

折れても使えるなんて……やっぱり凄い武器なんだねコレ。

それを折ってしまうなんて、ユミナやっぱり凄く怒ってるよね。

「もういつちよー!!」

再び回転するように斬炎を叩きつける。

ギヤアアアアアア!?

悲鳴をあげながら、暴れ狂うジャギイ達。

メデイスが炎から逃れた数匹に、拳や重りを叩きつけて葬っていく。

メデイスは凄く黒い笑みを浮かべながら、楽しそうにしている。

あれー? うちのメンバー全員黒い人?

アハハ、先が思いやられるなー。

と、軽く現実逃避を混ぜながらもキチンと敵を葬っていく。

あらかた片付くと。

グギヤアグギヤアアアア!!!

突如、上から大きな鳴き声が聞こえてきた。

「メデイス! 上よ、注意して!」

上から飛び降りてきたそれは、大きなエリマキを持った巨大なジャギイであった。

「もしかして、これがドスジャギイ!?!」

「クリーム、来るよ！」

ドスジャギイは大きな体を揺らし、全身で体当たりしてきた。

私はそれを横に転がって躲すと、太刀を振るう。

炎がドスジャギイを斬る。

しかし、ジャギイ達を倒した残りの力だった為、大したダメージにはならなかった。

ドスジャギイは天に向かい大きく吠える。

すると、ジャギイが群れを成して現れた。

「……増援を呼んだのね。厄介な」

ジャギイは私達二人を囲むように並び、威嚇してくる。

ギャオ！

ドスジャギイの一鳴きによってそれらは一斉に突進してきた。

次々と迫りくるジャギイを躲していく。

私はこの状況を脱するためにポーチを漁り、一つの弾丸を上弾き飛ばした。

落ちてくる弾丸に合わせて、太刀を振るい装填口に納める。

ガチャン！！

背が閉じられ、雷撃が辺りに迸る。

「カートリッジ・装填^{リロード} ヴォルテック」

ヴオンつと雷撃が爆ぜ、ジャギイ達を焦がす。

雷に全身を焼かれたジャギイ達は次々と倒れ伏していく。

これはユミナの知識に合った弾丸^{カートリッジ}の形態変化の応用である。

刀身がなくても、自分の周り全域に攻撃できる。

攻撃と防御を同時に行えることが魅力的だ。

ダメージも純粋な属性ダメージが通り、弱点の敵には大きく効く。

これを考えて実践したユミナは凄いと思う。

どれだけの才能と努力が必要な事か……。

「獅子雷迅！！」

獅子を模した雷の衝撃波で目の前のドスジャギイを吹き飛ばす。

雷が触れた部位は焦げ、勢いよく瓦礫にぶつかり埋もれた。

ユミナの努力は、本当に凄い。

それを私の我儘で潰したとなると、少しだけ……ほんの少しだけ。

私は後悔しているのかもしれない。

【……】

でも、私にはメデイスがいる。

もう後には引けないし戻れない。

「……私は、私に出来ることをやる!」

【（……気にしてないって言ってるのに。馬鹿ね。

もう……本当に大馬鹿。……私だって、本当は）】

「メデイス! アレやるよ!」

「うん!」

そういつてメデイスに合図を送ると、

私は瓦礫から這い出してきたドスジャギイの背後に回る。

「もう一度、獅子雷迅!」

大きく一步を踏み出して接近して、大きく太刀を振りぬいた。

また吹き飛ばされたドスジャギイはメデイスの方へと飛んで行った。

「よし、来た!」

メデイスは半身をずらしてドスジャギイを躲すと、尻尾の辺りを両手でつかみその勢いで回る。

そして、遠心力と共に私目掛けて投げ返してきた。

「紫電一閃!!」

凄いい勢いで飛んできたドスジャギイを、雷の刃で切り裂く。

肉を焦がしながら真つ二つに切り裂かれたドスジャギイは、そのまま私の後ろへと飛んでいき、グシャッと音を立てて潰れた。

「ナイスよ！ メデイス。いい連携だった」

「うん。楽しかったよー」

私はメデイスに近づき、ハイタッチを交わす。

「後は、ジャギイ達だけだね」

そういつて、太刀を構える。

すると、ジャギイ達は頭を失ったことに狼狽えたのか、一目散に背を向けて逃げて行った。

「あゝ逃げたんなら負う必要はないかな？」

「ええ〜？ ……まあいつか」

「さて、後は今回の元凶を 『グギャアアオオオオ!!?』
ッ!?!」

突如、巨大な咆哮が崖の上から響き渡ってきた。

私とメデイスは慌てて上を見て警戒する。

ウガアアアア!!

咆哮をあげながら下りてきたのは

頭が二つある巨大な狼であった。

「なっ!? あんなの全く情報になかった。

もしかして、 新種!?!」

村長に見せてもらったこの大陸のモンスターの生態に、
双頭の巨狼なんてものはなかった。

つまり、突然変異。もしくは、全くの新種である。

二つそれぞれが思考を持つ頭。

ずらりと並んだ大きな牙。

射抜くような金色の瞳。

紺に近い剛毛ともいえる毛皮。

15メートルはありそうな巨体。

鋭く研ぎ澄まされた爪。

鎌のように鋭く硬そうな尻尾。

双頭の巨狼は、涎を垂らしながらグルルと低く呻いて威嚇している。

腹が減って気が立っているのか、
それとも縄張りを荒らされて怒り狂っているのか。

巨狼はすでに私とメデイスの二人を敵とみなしていた。

日がすでに傾き、夜へと差し掛かる中。

私とメデイスの戦いは、寧ろこれから本番であった。

第九十一話「荒れ狂う双頭の狼」（後書き）

はい、皆さんおはよう！ こんにちはわー！ こんばんわー！
作者こと朱里奈です。

今回。調合が具体的にでてきましたが、
……全て、私の想像で描いているだけで、
実際の所は私も知りません。

公式設定なんて知らないからね
（そもそも、調合一つ一つの仕方に、
公式設定なんて存在するのでしょうか……？）

爆薬は危険物、ポーチに入らないアイテムは、
荷車で運ぶのがリアルですね。

（本小説では、不思議ポーチに全部入りますが、
ゲームのも四次元ポケット張りの凄さです）
調合とか、ちゃんと専用のキットがありそうですね。
（調合書があっても器具がないと出来そうにないですね？）

味とかも結構気になりますよね？
珍味と言われる魚竜のキモやポポタンとか……。
料理食材で言えば、リュウノテールとか幻獣チーズとか、ね？

モンハンは不思議が一杯ですね

そして、今回MHP3の鳥竜種、ドスジャギイに登場してもらいました。

今、ユミナ達がいる大陸のモンスターは基本3rdよりですね。2ndGのも出るには出ますが……。

あと、新モンスターの登場です。

何かモンスターを出す予定でしたが、急に閃いたので急遽、今話に出しました。

双頭の竜か双頭の狼のどちらかで迷いましたが、狼の方がしっくりくるかなと思ったのでこちらを選びました。

モンハンはMHF以外は基本していますが、狼系のモンスターっていないですよね？

ジンオウガ以外には私は多分知りません。

MHFでそんなのがあるっぽいですが、どうなんでしょう？
誰か、教えて下さると嬉しいです

この新モンスターの名前は……フェン
ゴホツゴホツ！

……失礼。

まだ決まっていますませんが、双狼獣
『的な

感じでいきたいと思います！

それでは、また次話にてお会いしましょう

た。

ある程度距離を取って振り向くと、巨狼はいなかった。

「くそっ……どこに、どこにいった!？」

辺りを見回しても影すら見つからない。

「クリーム、上!！」

「ッ!？」

15メートルほどの巨体は軽々と飛び跳ね、私に降り注ぐ。

私は何とか後ろへ跳び、回避すると巨狼は私がいた場所に爪を突き立てた。

バギーン!!

腕が岩盤にめり込み、辺りを砕き陥没させた。

巨狼はめりこんだ腕を引き抜くのに苦戦して身動きが取れない。

「メデイス! 今のうちに一旦引くよ!！」

「う、うん!！」

グガアアアアアア!!!

ボゴォ!

巨狼が叫ぶと同時に、腕が引き抜かれた。

そして、逃げる私達をかなりの速度で追いかけてくる。

「カートリッジ・装填^{リロード}!!」

走りながら、ポーチから翠の弾丸^{カートリッジ}を取り出し装填する。

「ヴォルテック!!」

すっかり夜になった闇の中、雷光が眩く迸る。

「メデイス私の手を握って、目を瞑りなさい。

行くよ！ 閃光滅殺！」

ツ!!!??

暗闇に眩い極光が満ち溢れ、辺り一面を照らし輝く。

グギャオオオオオオ!!??

巨狼は閃光に目が眩み、仰け反り怯んだ。

上手くいった！ あとはこのまま逃げるだけ

私はメデイスの手を引きながら、出せる全速力で森の中へと入り疾走する。

木の根などに足を取られないように気を付けながら走る。

しかし、

グガアアアアアア！！！

巨狼は再び私達の前に立ちはだかった。

「ッ！？ な、なんで？ 閃光は成功したはずなのに……！？」

巨狼はクンクンと鼻を鳴らしながら威嚇を続けていた。

「……！ 嗅覚か……！？」

嗅覚だけを頼りに私達を追い越したって言うの……？

ますます、厄介すぎる敵ね。

せめて、後を気にせずに武器も万全ならば……勝てるかもしれないのに！

ここは私達にとっては知らない土地。

未開の地だ。いくら事前に情報を仕入れても何が起こるかはわからない。

コイツ以外にまだほかに厄介なのが現れる可能性が少しでもあるのなら、

狂気を全開放して全力で排除するわけにはいかない。

メデイスだけでは、私を連れて戦うことはできないからだ。

速さは明らかに相手の方が上。そのうえ、夜目が聞き嗅覚も優れている。

最悪だ。考えうる限り最悪の敵と条件だ！

そして、恐らく個人としても私よりも強いであろう。

回復アイテムも回復薬と薬草程度で、心許ない。

……か、勝てない。

勝てる要素が、生き残る術が見つからない。

一体どうすれば!？

私が思考の渦に吞まれている間も、巨狼は容赦なく攻撃を繰り返してくる。

私とメデイスはそれをただただ避ける続けるしかなかった。

メデイスの方は偶に攻撃後の隙について反撃するが、巨狼は特に効いた様子もなく平然としていた。

あの毛皮、打撃にも斬撃にも耐性があるみたい……。

狼……獣だから……もしかしたら、火が弱点！

私は起死回生の一手を望み、弾丸を装填する。

「エクスプロージョン!!」

爆ぜる爆炎が巨狼を飲み込んだが、いとも簡単に一蹴された。

「まだ、それなら水はどう!? オーシャン!!」

刀身から放たれた高圧水流は、巨狼の爪によって引き裂かれる。

どの攻撃も一撃のもとに粉碎される。

くっ……通じない。どうする? どうすればいい!?

最悪、出し惜しみなしで全力でぶつかってみる?

いや……それで勝てればいい。だけど、勝てなかった場合は?

考えれば考えるほどに悪い方へと思考が辿り着いてしまった。

全力で逃げる……?

いや、嗅覚で追ってきて村まで来られたら最悪。

相手の攻撃を躲し続けながら、必死に策を練っていく。

巨狼の爪は木々をなぎ倒し、牙は噛み砕いていく。

私達は徐々に追い詰められていった。

私は、私はどうすれば……どうすればメデイスを守る!!

【 邪魔よ】

(えっ?)

ユミナがそう呟くと、私の思考が反転したような錯覚に陥った。

「……私が戦うわ」

【ユミナ!? ツ!? 入れ替わってる……?】

「久々の外ね。……全く」

私とユミナの主導権が入れ替わったのであった。

今、私クリムでなくユミナが主人格……表になっている。

【ユミナ!】

「……煩いわ。私が何とかするから黙って見てなさい」

ユミナSide

「久々の外ね。……全く」

私はピンチに陥っていた二人を助けるために、

久しぶりに私の体へと戻り表に出た。

久しぶりすぎて少し違和感を感じる。

まあ、体を動かしながら慣らすしかないかな？

【ユミナ！】

私の中でクリームが私の名前を叫ぶ。

「……煩いわ。私が何とかするから黙って見てなさい」

そついうと、クリームは黙った。

私に全てを託すようだ。

「メデイス」

「？ クリム 違う。誰？」

「流石ね。私はユミナ。ユミナ・アリアスよ」

「ゆみな！？ クリムは何処に？」

「私と少し代わって貰ったよ。この事態を何とかするためだね。協力してくれるかな……？」

「うん！」

「じゃあ、私が合図したら全力で攻撃してね。」

それまでは後ろに下がっててもらえるかな？」

「わかった」

メデイスは素直に私の指示に従い後ろへ下がる。

必然的に、私と巨狼が対峙することになった。

手で握る太刀を見つめる。

蒼い刀身が見事に根元から折れていた。

「……私の武器を無茶してくれちゃって。ハア」

グギャアアアア！！

巨狼は天高く咆哮しながら、私に大量の殺気を放つ。

何かが変わったことに気づいたのだろうか？

……だとしたら、かなりの知能を持った狼ね。

巨狼は警戒しながらジリジリと間合いを詰めていく。

私はただただそれを見つめているだけ。

場に緊迫した空気が満ち、自然と静寂が舞い降りる。

先に動いたのは、巨狼だった。

ウガアアアアア！！！

跳び込むと同時に右の頭が私に喰らいつく。

それを紙一重で躲すと、頭部に太刀の柄を叩き込む。

巨狼は怯んだ様子を見せず、今度は左の頭が私に噛みつこうとした。

私は垂直に高く跳ぶと、巨狼の上を駆け抜けていく。

ガアツ！！

巨狼は気合と共に鎌のような尻尾で私を薙ぎ払う。

私はもう一度跳ぶと、軽やかに地面へと着地した。

「今度は、私の番！！」

巨狼の背後へと接近する私に、巨狼は尻尾を振り回す。

「カートリッジ・装填リロード！！」

ポーチから取り出した弾丸カートリッジを装填し振るう。

「リミテッド」

ガキンツ！！

甲高い金属音が辺りに響いた。

私の太刀が、巨狼の尻尾を弾いたのである。

そして、私の姿は掻き消えた。

ガッ！？

巨狼は突然消えた私に慌てたように振り返る。

「こつちだよ　デスペアレンス！！」

巨狼の上に跳んだ私は、その頭目掛けて太刀を振り下ろす。

ドゴオン！！

かなりの衝撃が巨狼を襲い、巨狼は地に叩きつけられた。

私は着地すると新たな弾丸を取り出す。

吸収の紅白の弾丸…ヴァーミリオン。

「　ヴァーミリオン　」

装填すると途端に私の折れた太刀が禍々しい雰囲気を放つ。

「吸血一閃」

虚構の斬撃が、巨狼の体を切り裂き鮮血が舞う。

鮮血は太刀に吸収されるように、気化して消え去った。

そして、私の体は力に溢れていく。

「狂い咲け、血染めの華！ 紅華咲裂！！」

リミテッドにより最大限に引き出された私の力と、
カートリッジの能力を合わせた全力攻撃。

吸収の紅白の弾丸…ヴァーミリオン。

それは、相手の力を奪い自分のものにする力。

狂ったように繰り出される連続攻撃に、
巨狼は耐えられず悲鳴を上げる。

鮮血が舞ったびに気化し私の力となる。

巨狼の紺色の毛皮はどす黒い血の色へと染まっていく。

リミテッドの効果時間はあと少しね……これ以上は反動が大きすぎて、

前みたいに寝込み続けることになる。

今でも結構きついんだけどね……ヴァーミリオンの効果のおかげかな？

じゃあ、これで一気に決める！

切り刻まれて怯む巨狼の懐へと潜り込む。

「 サンドリイラバイ 」

私は折れた刀身を、巨狼の腹の傷口に深く突き立てる。

そして、弾丸の力をすべて開放する。

「昏睡一滴!!」

グウ……ガアガ……

強制的な睡眠により、巨狼の体は地面へと崩れ落ちた。

なんとか巨狼の下から出ると、私はメデイスに合図した。

「メデイス！ 私に合わせて全力で攻撃して!!」

「う、うん！ 任せて!!」

私もポーチから紅い弾丸を取り出して、頭部へと近づぐ。

「メデイスは右！ 私は左!!」

「うん!!」

「カートリッジ・装填^{リロード} エクスプロージョン!!」

装填すると大きく振りかぶって、全力で振り下ろした。

「轟炎、爆碎ツ!!!」

「つりゃあああああ!!!」

メデイスも私に合わせるように拳を振り下ろす。

ドゴオオオオオオンン！！！！！！

バギイイイ！！！！

互いに全力を注ぎこんだ一撃は、絶大な威力を誇った。

右の頭は地面にめり込み、左の頭は半分ほど消し炭になっていた。

グウ……ガアガア、ガアアアアア！！！！？

それでも、巨狼は懸命に立ち上がり私達と三度対峙した。

「……これでもまだ生きてるなんて。正直、結構自信はあったんだけどな」

「ど、どうするの！？」

「まあ、様子見ね。退くなら負わない。でも、戦うのなら」

私の中で何かが一気に冷えていった。

「……今度こそ殺す」

私　いや、私達　の中で渦巻く力を引き出していく。

多分、これが狂気って奴なんだろうね。

狂って何もかもを壊してしまいたいそうになる。

でも、出し惜しみはしない。出来る状況でもない！

さあ……^{アナタ}巨狼はどうする！？

グルルウ……ガッ！！

巨狼は私達に背を向けると、そのまま走り去って行ってしまった。

……懸命な、判断ね。

【ユミナ！？ 貴女の体なんだよ！？ 無茶すぎでしょ！！】

「ああ……今は貴方の体でもあったね。次からは気を付ける。
でも、それよりも」

【？ どうしたの】

「疲れた……代わるね。後は、お願い……い……」

「ユミナ！？」

クリムSide

「疲れた……代わるね。後は、お願い……い……」

「ユミナ!？」

ユミナがそれだけ言うと、私はまた反転したような感じを味わった。

そして、私がまた表へと出ていた。

「あれ？ クリム……ゆみなは？」

「メデイス……。うん、疲れたから眠っちゃったみたい」

「そっか、お疲れ様ー！ だねっ」

「うん。ありがとうユミナ」

それにしても、結構無茶するねユミナ。

リミテッドの副作用と狂気を少し解放したおかげで、
体も心もボロボロじゃない……。

心と言ってもユミナの精神の方だけど。

しばらく、動くことも無理ね。

「メデイス。私は副作用でしばらく動けない。

だから、私を連れて村まで戻るか、此処で野営の準備をしましよ
う」

「ん〜。じゃあ、私がクリムを抱えて連れて帰るよー！」

「……了解」

そういつて、メディスは私の体を持ち上げた。

慎重に上に持ち上げると、走り出した。

村に着くまでの間、私は休むために眠らせてもらった。

もっと強くなりたい。

そう、胸に思いを抱きながら。

こうして双頭の巨狼と私達の戦いは、両者痛み分けの引き分けに終わった。

第九十二話「双狼獣ウエルガロン」(後書き)

あれ、おかしい……。

引き籠っていたはずのユミナの方が強いだと……？

と、思った方も多いでしょう。

皆さん、おはよう、こんにちは、こんばんわ。
作者の朱里奈です。

今回はそんな皆さんの疑問にお答えしましょう。
そう、それは

ユミナには迷いがなかったから、ですね。

え？ よく分からない？

そうですね、私もこれだけ聞くと意味が解りません。

簡単に説明しましょう。

クリムは、圧倒的不利な状況で経験不足な点もあり、悪い方向にはかり思考が偏ってしまい、大きな決断に踏み込めなくなってしまいました。

前見たく、狂気を使えばいい勝負になったかもしれません。

ですが、それによる副作用と負けた時の可能性を考え、実行に踏み出せなかったのです。

ユミナと性格などが混ざり合い、大切な人もできてしまったために、自然と自身を大切にするようになった感じですね。

逆にユミナは前よりもさらにアグレッシブに攻めるようになりました。

まあ、別にユミナが極端に強くなったわけではありません。むしろ、クリムが弱くなった気が……。

あと、狼がとても強くて賢かったせいでもありますね。

これは、再戦フラグ！？

あ、狼の名前は決まりました。
フェンリルとかでもよかったですけど……。
ありがちな感じで「双狼獣『ウエルガロン』」です。

戦闘シーンが一話だけで、折角出したのに、
あまり活躍させられなかったし魅力も引き出せなかった気が……。

作者は描写などといったシーンが特に苦手なもので、
分かり難かったら、すみませんね。

最後に、テストが近いので更新がまた遅れるかもしれません。

（え？ いつも遅いだろうがって？ ……ソナナコトアリマセンヨ
？）

今回は結構やばいので、ご容赦ください。

それでは、また次話にてお会いしましょう

第九十三話「終わりの始まり」(前書き)

更新遅くて済みません><

漸くテストも終わったので、

頑張って更新していきたいと思います！

第九十四話に掲載しようとしていた内容を、
取りやめてこちらの途中に付け加えました。

改稿前と違っていますので、読むことをお勧めします。

(まあ、読まなくても大丈夫ですが)

あと、途中空白が多くなっていますので、

携帯などで読む方などは大変読みにくいと思います。
すみません。

第九十三話「終わりの始まり」

第九十三話「終わりの始まり」

メディスSide

む。クリムは寝ちゃったから、わたしが頑張らないと！

わたしは眠っているクリムを背負い、
引きずらないように気をつけながら歩いていく。

さっきの狼との戦いでゆみなが出て来て、
クリムの代わりに戦って狼を追い払った。

ゆみなは、ハンターさんだったね。

モンスターと戦うならわたしやクリムよりもずっと強いね。

わたしは、クリムを守るために強くなりたい。

何かを壊す為じゃなく、自分の為にクリムの為に強くなりたい。

ゆみなに頼めば強くなる方法を教えてくれるかな？

わたしは暗い森の中、思考に更けながらも出口を目指して進んでいく。

もっと、クリームと遊びたい。

ゆみなとも友達になりたい。

いろんなことを見聞きたい。

わたしはできるかな？ マスター、お姉さま。

夜が明け、朝日が村全体に広がるうとする。

人が寝静まり、静寂に満ちた村に、

一人の少女が自分よりも大きな少女を背負い歩いていた。

少女　メデイス　は、一際大きな家の前まで来ると、おもむろに扉を蹴破った。

バギイツ！？　　ドガツ！

扉は碎け吹き飛んでいく。その音に驚き、中にいた住人が慌てて階段を下りてきた。

「な、何事じゃ！？」

「村長さん！ 帰ってきたよー！」

「またか！？ お前等は普通に入ってこれんのか？
扉を直すのもタダじゃないんだぞ！」

「むー！ だって両手が塞がってるんだもん」

「？ だからって」

村長はメデイスを直視して初めて気づいた。

メデイスに背負われて眠っているクリムの姿を。

「どうしたんじゃ？ もしかしてやられたのか！？

治療が必要かもしれん。すぐに中に入れ！」

そついつて、村長は家の中へと招く。

メデイスがクリムを背負って二階に上がるのが無理そつに思えた村長は、

リビングの空いたスペースにクリムを寝かせるように言い、
一人二階へと上がっていった。

しばらくして降りてくるとその手には、救急箱と寝具一式が抱えられていた。

「何があつたのじゃ？」

「ドスジャギイを倒した後に凄く大きくて頭が二つある狼が出てきたの。」

それでねクリームとゆみなが入れ替わって、ゆみなが狼を撃退した！でも、疲れちゃって動けないからわたしが運んできた！」

村長はメデイスの話を聞きながら、いくつか理解できないところがあつたが、

必要なところだけは理解したようだった。

「怪我などは……」

「んー、多分ないよ！」

「そうか。では、寝かせておくだけで良いか。

ハンター殿が元気になるまでうちで面倒を見よう」

「ありがとう！」

「なーに、ドスジャギイを倒してくれたんじゃ。

私にはこれぐらいしかしてやれんからの」

そういつて、村長はクリームを持ってきた布団に寝かせて毛布を掛けた。

「じゃあ、私は朝飯を作ってくるから任せたぞ」

「ごはんー！ うん、わたしに任せて！」

「……………ぐ……………うっ……………」

「クリーム！？」 「ハンター殿！？」

クリームは目を覚ましゆっくりと体を引き起こす。

弾丸弾丸の反動か、体の動きが鈍く顔を顰めている。

「村長……さん」

「なんじゃ?」

「まだ、……まだ終わってない!」

「……どういうことじゃ?」

「狩りの途中に乱入してきた巨狼をまだ倒していない。あれは、ドスジャギイなんかよりずっと危険です」

「しかし、その体じゃ 「教えてください」 何?」

「今の私達では、あの巨狼には勝てない。でも、この太刀さえ治れば……倒せるかもしれない。だから」

村長もメデイスもクリームの雰囲気雰囲気に吞まれて言葉がでない。

「 極東【流浪島】の場所を、教えてください!」

クリームは村長に頭を下げ頼んだ。

「……」

「……」

「……」

全員が黙り、辺りに静寂で包まれる。

「……ここからさらに東に三日ほど歩いたところで、大きな砂浜に出る。そして、その海を渡った先の島」

『!?!?』

「そこが、【流浪島】。ハンター殿が求めている伝説の鍛冶職人がいる島だ」

「村長さん……」

「ありがとう!」

「必ず帰ってきて、私達を守ってくれよ?」

「はい! 必ず!」

そういうと、クリムは無理矢理立ち上がると荷物を確認し始めた。

「何をしているんじゃない?」

「……ただでさえ往復に六日以上かかります。」

そして、太刀を打つとなると素材集めや打つための時間が必要で、下手したら一か月もかかってしまうかもしれません。

この村があつた巨狼に襲われる前に帰ってくるために、今は少しでも時間が惜しいです」

「しかし、その体では……」

「大丈夫です。無理・無茶・無謀はユミナの専売特許ですから」

【こらー！】

そこでユミナが話を聞いていたのか、起きてきてクリムの言葉に突っ込む。

【誰が、無理・無茶・無謀が専売特許だつて！？】

貴女も私なんだから、貴女には言われたくはないよ！【】

(いや、でも……事実でしょ?)

【うぐっ!?!? ……今日はこれくらいにしとくわ】

ユミナは自分に不利を感じたのか、そそくさと眠りについていった。

「ふむ……よく分からないが、大丈夫なんじゃな?」

「はい」

「……せめて、家で朝食を食べてから行きなさい」

「ありがとうございます」

村長は台所に入ると、すぐに料理を作りだす。

数分後、簡単に食べられそうな料理が出てきて、ユミナとメデイスはそれを食べていく。

食べ終わると、準備を終わらせた二人は急いで村を出ていった。

東、極東【流浪島】を目指して。

とある部屋にて、ある議題についての会議が行われていた。

凄く大きい長机を囲むようにギルドのトップたちが座っている。

その面々は、各地のギルドマスターや大手支援者、
スポンサー 国王や貴族など、権力の塊が一堂に会していた。

「しかし、それではあまりにも!!」

ドンドルマのギルドマスターが、抗議の声を上げる。

「ならん。それは私見だ……個人の思いで前例を作るなど、
全く持ってあってはならないことだ。そうだろ？ シン」

ギルドマスター シン の抗議は簡単にも一蹴されてしまった。

抗議を一蹴したのは、ギルド総帥のダン・タリアン。

しかし、シンは諦めずにさらに抗議する。

「で、ですが！ 彼女はまだ若く、とても優秀な」

「だが、我らを裏切った」

「その場にいた者達の証言によると、何か理由があったと」

「理由がなんであれ、裏切ったことには変わりないでしょう総帥？」

シンの言葉に横やりを入れてきたのは、

西の方にあるギルドのギルドマスターであった。

「うむ。裏切りは許されない。

その裏切りでどれだけの命を危険にさらす？

シン……主はその責任を一人でとり切れるか？」

「……」

「ハンターに大切なのは強い輩の個人プレイではない。

最も大切なのは、チームプレイ……仲間を大切にすることだ。

主もハンターであったんだ、わかるであろう？」

「……はい。ですが、彼女は自分より仲間の方を優先して、

いつも仲間を友を守っていました。その彼女が！」

「……既に決まったことだが、もう一度確認する。

裏切り者を処罰するのに賛成なものは手を上げる」

ダン・タリアンのその言葉を聞いて、

を除くほぼ全てのものが手を上げて賛同する。

「見る、これが現実だ。たとえ儂らが許したとしても、

先の戦争で仲間を失ったものは許せるであろうか？」

儂らがそういえば、従うしかないかもしれない。
だが、従うだけだ……根本の解決にはならん」

「……」

圧倒的な状況にシンは言葉を発することが出来ず、
ただただ黙り続けることしか出来なかった。

「それに、この裏切りを特例で許すという前例ができ、
それによりまた同じような過ちを繰り返す輩が、
現れるかもしれない。そうすれば皆が疑心暗鬼になり、
ハンターとして仕事をしていけなくなる。
つまり、守るべきものが守れなくなる」

「……」

「彼女の仲間にはつらい選択かもしれないが、仕方がない事だ。
……これにて、今会議は終了だ。すべてのものに伝える。
裏切り者……ユミナ・アリアスの抹殺を」

ダン・タリアンがそう言うと、全てのものが席を立ち、
次々と会議室を後にしていく。

広い会議室に残ったのはダン・タリアンだけだった。

「……」

ダン・タリアンはガタイの良い体を狭めて、溜息を吐く。

色素が抜け白くなった髪と髭が、窓から入る月の光で

弱々しく輝く様は、屈強な老戦士をさらに衰えて見せた。

ダン・タリアン……彼の者は、伝説級の二つ名持ち。

彼が持つ二つ名は墮帝。墮帝ダン・タリアン。

単騎で古龍と死闘を果たし、重傷を負いながらも撃退する。

竜の群れに自らを囿にして跳び込み、商隊と村人を逃がす。

などといった数々の伝説を残す。

それらの事や年齢の事も踏まえて、総帥の仕事に着かされた。

史上最年長のハンターで、今もなお現役で戦い続ける彼は、彼らしくないため息をつき、顔に影がさしていた。

「……ユミナ・アリアス。アリアス（……）」

ダン・タリアンは窓から見える月を見上げ、遙か過去の懐かしい記憶を思い起こす。

『うわ〜モジャモジャ！……あれ？顔が怖いよ？』

『やかましい！何だ主は、いきなり』

『私？私の名前は、アリアスだよ』

『誰もそんなことは聞いとらん!』

『むむむ!』

『むむむ! じゃない! ……お主もしかして』

『私がモジヤモジヤの担当生徒の一人だよ!』

『モジヤモジヤ言うな! 儂の名はダン・タリアンだ。
というか、教官と呼べ! 後敬語も忘れるな!』

『固い事は気にしない方向で!』

『……ハア』

『……何してるの?』

『桜華ちゃん!? え、えっとこれはね〜』

『問答無用！ なにいきなり教官を困らせているの！』

『キヤアア〜！！』

『…………ハア』

「…………ふむ、懐かしい記憶だ。儂が教官を引き受けた時の。アリアスか…………あやつは確か、アレ（・・）にやられたかの。主の娘は死んだと聞いていたのだが…………もしや」

そう呟き、頭を振った。

「いや、今や詮無きことだ。仮にそうだとしても…………儂だけを恨め…………夜桜…………いや、十六夜にはちとキツイかもしれんな。しかし、主も多分同じ思いだろうな」

そこには、もはや弱った老人の姿はなく、屈強の老戦士の姿が現れていた。

「…………主の娘の間違った道は、儂等で正す。それがたとえ、命を摘むことになろうとな」

「運命とは酷なものよ…………どこで歯車が狂ったのやら。全ては、奴が…………あの悪魔が現れてからかの？ あの悪魔も、必ず見つけ出してこの命を賭してでも、儂が必ず討つ…………」

ダン・タリアンは踵を返すと、そのまま会議室を後にした。

アイSide

「嘘……ですよね？」

私は突然宿にやってきて告げたジークハルトさんの言葉を、理解することができなかった。

その言葉は自信の心が壊れてしまいそうになるほど、絶望的なものであった。

「……すまない。マスターは最後まで掛け合っただが……皆の総意で、」

「だって！ 助けるって、……大丈夫って言ったじゃないですかあ……」

責めても仕方がない。

ジークハルトさん達は悪くないのに、
それどころか最後までがんばったはずなのに！

でも、何も出来ない自分に……失う物の大きさに、
心が壊れてしまわないように。

誰かを責めずには居られなかった。

零れ落ちる涙を止める術など、

……在るはずがなかった。

「うっ……ぐすっ……そんなぁ、あああああ！」

「……」

ジークハルトさんは泣く私を見ながら辛そうな表情をする。

そして、口を開いた。

「……まだだ」

「……ぐすっ……う……？」

「まだ、諦めては駄目だ」

「……でも、どうしようも、ない……ことなんですよね？」

「……マスターは極秘で俺や閃光、魔弾に彼女を討伐隊より早く探させるつもりだ。」

俺達が先に見つけることが出来れば、或いは「

「本当ですか!？」

「……わからない」

「……」

確証も保証も無い、そんな一言であった。

だが、

消えてしまいそうなほど淡い光だけど、

私に、私達に希望の光が射した気がした。

でも、……

「……それって、マスターやジークハルトさんの立場が」

「……悪くなるだろうね。最悪。除名処分じゃすまないかもしれないな
い」

「……」

「……
」

「……」

「彼女からは、何かを感じるんだ。カイトに出会い、
大切な仲間を得て、数々の苦難を乗り越えてきた。
運命とか勘とかそんな曖昧なものだけけど、この先彼女が必要だ
と思う」

「……」

「これは、マスターも閃光も魔弾も同意見だ。」

カイトも……だから、彼女を助けたんじゃないかな？
アイツは人が嫌いなのにな」

前に聞いたカイト君の言葉が甦る。

『月は……いつ見ても綺麗だな。

……人の心もこれくらい綺麗なら、もう少し好きになれるんだが
な』

……やっぱり。

カイト君は人が好きじゃないんだね。

でも、 ユミナちゃん だから。

ユミナちゃんだから、カイト君を少し変えることが、……出来る
のかな？

うん……私達には、まだまだユミナちゃんが必要だよ。

私は絶対に失いたくない。

大切な仲間を、大好きな親友を、私を変えてくれた恩人を！！

「私も 探すのに協力させて下さい」

「……駄目だ。それは、出来ない」

私が決意すると、それはいともたやすく否定された。

「……何故ですか？」

「現状、君たちにも監視処置がなされている。

ユミナさんの仲間なんだ、放っておかれるはずがない。

今はまだ大丈夫だが、直にギルドナイトによって監視されて、

ユミナさんを探しているのがばれてしまう。

そうになると君たちも裏切り者扱いで、俺達も動き難くなる」

「……そう、ですね」

ジークハルトさんが言うとおり、素人の私達が如何こう出来ること
じゃない。

寧ろ、状況が悪化する可能性もある。

それでも、何もできないことを悔しく思い、憤りを感じた。

「だから、今は我慢してくれ。俺たちが必ず先に見つけ出す。

君はいつユミナさんが帰ってきてもいいように、

いつも通りハンターとして過ごしてくれればいい」

「……はい」

やっぱり、私には何もできないのかな……？

私に出来る事って、私がするべきことって一体何？

ユミナちゃん。私達は何時までもどんなことがあっても友達だよね？

私は、貴女を、信じてるから。

???.? S.i.d.e.?

【 の手記】

【 】【

x
x

究 して最悪。

恐な始原の悪魔。

あまりにも突然　　現し、かなりの被害　　ると、

な情報も残　　忽然と姿を消した。

今は、　　丈夫なようだが。

こ　以上、被害を増や　　ために。

……悪魔を　　すための戦力を確認せねばならん。

いっどこ　　現れてもい

我らが　　もってしての力を、下記へと記す。

“伝説の二つ名持ち”　　8名の名を……

他の才を動かない風のように思わせる、神から与えられし太刀の才
神風

祖の龍の王の末裔にして、全ての罪を焼き滅ぼす姫君
龍姫

伝説中の伝説にして最強で最古の英雄
墮帝

絶対零度の凍てつく氷結人形
氷燐

死と破壊をもたらす、不滅の劇毒
壊毒

護りの要、鉄壁にして難攻不落の玉座
堅王

幾千の知識を得し、
発明と創造の術師
錬金

孤独にして聖と邪の力を持つ獣
天狼

過去を ても、これほどの戦力はない。

我ら てる で最強の一手。

で勝てぬなら、……奴を など存在せん。

英雄、 に龍人 出すのだ。

……負けなどありはしない。あるものか。

出 ば、争うことなどなけ が、

かの伝説、古龍ミ　　すらも凌　　る災厄など、

存在し　　ならんだ……

手記はボロボロで字などがかすれており、
これ以上読むことはできない。

月明かり照らされる深淵の森のなか。

湧き出でる泉の中央に立つ大樹。

そこに一人の少女と一人の少年がいた。

少年は深い眠りに誘われ、少女は少年に膝を貸して微笑む。

幻想的な光景の中、少女は小さく呟く。

「
」

その小さな眩きは誰の耳にも届くことなく、暗闇に溶けて消えていった。

相変わらず少女は少年の寝顔を眺め続ける。

……少女は告げた、終わりの始まりを。

【始まる】と……

第九十三話「終わりの始まり」(後書き)

ハイ！ 皆様、おはよう、こんにちは、こんばんは。
作者の朱里奈です。

一人称も三人称も難しいですね……。
なんとというか、見るべき場所と言いますか視点と言いますか。
描写が苦手で下手なので、分かりにくいですね。

まあ、練習して直していきたいところですが。

そろそろ、伏線？ とかも回収していきたいですね。
まあ、偉い人は「伏線は張れるだけ張り巡らせるもの！」
とか言っていたので、まだ大丈夫な気もしますが(笑)

今回は、伝説級の二つ名持ち……墮帝ダン・タリアン
が登場しましたね。

あとギルドマスターに名前が与えられました。

ユミナが完全に指名手配されてしまいました。
これから彼女はどのようなのでしょうか？
(作者にもよく分かりません)

今回は、皆さんお待ちかねの【流浪島】ですかね？

3rd系のモンスターや新種などのモンスターを
出していきたいところですね！

それでは、また次話にてお会いしましょう

第九十四話「戦慄の海魔」(前書き)

こんなに早く更新したよ！(´・`・´)(トヤア

え？ ……四日もかかって遅い？

……(´・`・´)

第九十四話「戦慄の海魔」

第九十四話「戦慄の海魔」

クリムSide

「うわーすごい!!」

メデイスが眼前に広がる光景に声を上げてはしゃぐ。

透き通るような青。

小波の音が耳を撥る。

そう、私達は海を前にしていた。

「これが、……“海”」

【初めて見た。凄い……うん】

私もユミナすらも目の前の海の美しさに目を奪われ、言葉がうまく出てこない。

【思えば、随分と遠くまで来た。あまり時間は経ってないんだけどね】

「……うん」

本当はこの大陸に来るときに一度海を渡っているが、あの時はユミナは寝ていて私とメデイスはそんな余裕がなかった。

だから、こうやってゆっくりと見るのは初めてである。

海ってこんなに凄い物だったんだ。

……さあ！ あと少し急いでいきますか。

「メデイス。遊んでないで行くよー」

「わかったー！ でも、どうやってこれを渡るの？」

「うーん、……！ あそこにある小舟を使おう」

そう言っつて私は棧橋の先に止めてあるいくつかの小舟を指さした。

メデイスは私が指した先を追うと目を輝かした。

「アレって、船って奴だよね！ わたし知ってる！」

「うん。じゃあ行こう」

小舟は以外に古い物だったが、頑丈そうでまだ使えそうだった。

オールを二つ手に取ると、メデイスの手を引きながら乗り込んだ。

「わたしがやるー！」

「えっ、漕ぎ方分かるの？」

「わからな〜い！」

元気に宣言するメデイスに私は転けそうになった。

【そういう貴女はわかるの？】

(ううん、残念ながらさっぱり……ユミナは?)

【海を見たのは初めてだけど、漕ぎ方は本か何かで読んだような……?】

そういつて、ユミナは知っていることを全部話してくれた。

(ううん、以外と難しそう)

【一応、メデイスにも教えてあげなさい】

目を輝かせて、今か今かと待ちかまえるメデイスを宥めて、
教えて貰ったことをそのまま教えた。

「うん！ やりたい！ わたしにやらせて」

(ユミナ、どうしよう?)

【どうせ誰もよく知らないんだから、

誰がやっても変わらないでしょ。やらしてあげれば？】

「じゃあ、メデイスに任せるよ。がんばってね」

「うん！」

メデイスにオールを渡す。メデイスは受け取ると、左右の水面につけて

全力で漕ぎ出した！

「ちょ！？ メデイ 速い速い速い速い！？」

「アハハハハハハハ！！ 楽しいねクリム！！」

メデイスはオールをひたすら回して、水を切り裂くように漕ぐ。

あまりの速さに、小舟が着いていけず、波の上を若干跳ね出していた。

「もう、ちょっと、スピードを、落として！」

「ええ〜」

「お願いだから！」

「うーん、わかった……あれ？」

渋々といった感じに漕ぐのをやめて、

止めようとしたところでメデイスから不吉な声が拳がった。

私は嫌な予感がしながらも、メデイスに問いかけた。

「ど、どうしたの!？」

「止め方がわかんない」

「え、!？」

「どっしりクリーム？」

「ユミナー！ー!？ こんな時はどうすればいいの?!」

【……ハア】

ユミナは深くため息をついた。

頭を抱えている姿が容易に目に浮かぶ。

【……知らない。自分達で何とかして。おやすみ】

「ちよっ!？ ユミナー!？ 見捨てないでよー!？」

「はわわわ、ど、どっしりクリーム？」

「ユミナー！ー!？ 私達が悪かった。謝るから助けてよー!？」

【……】

「本当に寝ちゃった!？」

完全に切り札がなくなってしまった。

どうしよう。

どうすれば、この暴走した小舟は止まる

ドゴオーン!!!!

「きゃっ!?!？」

「わっ!?!？」

突然の衝撃で小舟は止まり、私たちは倒れ込んでしまった。

「痛た……なに、なんなの?」

私は体を起こして目の前を見やるとそこには、

巨大な化け物の姿があった。

「!?!?!」

私とメデイスは慌てて体制を立て直して、

何時でも攻撃や回避が行えるように化け物と対峙する。

こんな水上でこんな化け物と遭遇するなんて……ついてない!

化け物は堅そうな外殻に覆われていて、いくつもの触手を持っているた。

触手は海水と体液でぬめりと輝き、沢山の吸盤がついている。

外殻の上にはさらになにかの大きな頭蓋骨を被っており、生半可な攻撃じゃビクともしなさそうであった。

……戦うか、逃げるか？

でも、どちらにしてもどうする？

此処は水上……それも小さな小舟の上。

二人で立っているのがやっとで、波に揺らされて足場も最悪。

地の利も敵にある。

水中に入り込んだら絶対に逃げきれない。

……どうする。

「ねえねえ、クリム」

「……何？」

「あれって、タコ？ イカ？」

「へっ？」

「いや、だからさ。あれってタコなの？ それともイカなの？」

……うん、メデイスはいつも通りだね。

というか、今がどれだけ危険な状態か本当に分かっているのかな？

ちょっと心配になってきた……。

それにしても、うむ。

あれはイカなのか、それともタコなのか。

個人的にはタコっぽくみえるような…… 実際には見たことないけど。

ユミナに聞いてみたいところだけど、寝てるしな。

って、そんな場合じゃないよ！

「わたしはタコだと思うんだ！ 図鑑で見たのと少し似てる」

「あ、そうなの？ 私もタコだと思ってたところなんだ」

「うん、じゃあやっぱりあれはタコさんなんだね！」

「いやいやいや、今はそれどころじゃないから！」

「ほえ？」

やっぱりあまりよく分かってなかった！？

ボオオオオオオオ!!!

そんなこんなでくだぐだとしていたら、
敵さんもぶつかられた怒りからか戦闘態勢に入った。

触手の一つを高く上げ、小舟へと叩きつけようとする。

「!? メデイス、弾くよ!!!」

「うん!!!」

私は抜刀と共に弾丸カートリッジをとりだして、装填する。

「カートリッジ・装填リロード デスペアレンス!!!」

「うりゃあああああ!!!」

メデイスは力の限り鉄球を振り回して薙ぐ。

私はそれに合わせて、折れた太刀をあてて敵の攻撃の軌道をずらした。

逸らされた触手は大きな水飛沫を上げて水に叩きつけられる。

大きな揺れが小舟を襲い、足元がふらつく。

「メデイス! 今のうちに方向転換して全速で逃げるよ!」

「えっ? 戦わないの?」

「私達が陸地にいるのならまだしも、此処じゃ戦えないよ！
あいつが陸地にまで追ってきたら相手しよう」

「うー、……わかった」

残念そうに呟くと、オールを片方だけ漕いで方向転換する。

巨大タコを迂回するように追い越すと、再び全力で漕ぎ出した。

タコはそれをみると、逃がさないとばかりに泳ぎだして触手を伸ばす。

「メデイスは漕ぐのに集中して。触手は私になるべく何とかするか
ら」

船とタコ……やはりタコの方が速く、どンドンと接近する。

伸ばされた触手は、私が一つずつ全力で叩き落としていく。

足場も悪く、敵は手数も多く、一つのミスが致命傷となる状況。

全神経を敵の攻撃に集中し、弾丸をつかい迎撃する。

しかし、私達は徐々に圧されていった。

タコは徐々に私達との間を詰めていき、
ついにはゼロ距離と言えるほどの位置まで追いつかれた。

「させないよ！ 爆ぜろ！ー！」

伸びてくる触手を躲すように海に太刀を突き立てて、
エクストラージョン
弾丸の力を解放する。

海が爆ぜて、凄まじい勢いで小舟は大きく飛び出していった。

伸ばされた触手は空を切り海へと浸かる。

タコはさらに速度を上げて追ってくる。

そして、ついに

タコは小舟に触手を絡ませて、動きを完全に止めた。

グツと急に動きが止まった小舟についていけず、
私達は前のめりになり態勢を崩す。

そこに、巨大な影が差す。

「!?!」

見上げると触手が小舟に向かって振り下ろされていた。

私は慌てて、隣で体制を崩しているメデイスを海へ突き飛ばすと、
自分も船の上を転がって海の中へと逃げた。

小舟は砕かれ、海の藻屑となってしまう。

うつ……この水、辛くて目に染みる。

私は霞みゆく視界を何とかこらえながら、水中でメデイスの姿を探

す。

メデイスは少し離れたところで沈んで行っていた。

重りのせいで上手く浮けないのね!?

慌てて泳いでメデイスのそばまで行くと、体を支えながら水面を指す。

ぐっ……重い、うまく泳げない……でも、あと少し!!

泳ぐこと自体が初めてだが、何とか知識と運動神経をフル稼働して水面へと出ることが出来た。

「ぶはっ!!」

「ごほごほっ!?! う……うー」

「大丈夫、メデイス? 泳げる……というか浮ける?」

「いきなり落とすなんて酷いよー。うー……たぶん大丈夫」

「ごめんごめん。ちょっと余裕がなくてね。

っと、あまり話している暇はないようね」

タコは小舟を完全に粉々にすると、私達に狙いを定めて触手を伸ばす。

「仕方がないから、泳いで全力で逃げるよ!!」

それを躲しながら水中へと逃げていく。

私達は小舟を失い、相手に絶対的有利な条件下で逃げることになった。

陸地に戻るにはあまりにも遠く、進むのなんて論外なもの。

逃げ切れるだろうか？

いや、逃げなきゃ……絶対に。

ポオオオオオオオオ!!!

巨大タコの咆哮が辺りに響き渡った。

第九十四話「戦慄の海魔」(後書き)

皆さん、おはよう、こんにちは、こんばんは。
作者の朱里奈です。

お知らせは読みましたでしょうか？

今回は、あのお知らせ通りに更新しました。
こ、これでも作者的には早めに更新したんだよ？ だよ？

今回のエリアは“海”
つまり、水中戦にスポットを当ててみました。

……別に3Gの影響じゃないんだからねっ！
感化された訳じゃないんだからっ！！ バカっ！

と、ツンデレてみたり……。

(実際は感化されてるかも……です)

まあ、水中戦ってモンハンの小説を書いていて、
書きたいものベスト3ぐらいに入りますよね？
え？ 入らない……そうですか。orz

この小説なら、いつか空中戦とかも書けるかも……。

(収拾がつかない、ヤメテ!?)

世界観完全崩壊のお知らせですね、わかります。

(もともと崩壊してるといっつか、在って無いようなものですが)

そして、この触手である……この小説は健全路線ですよ？
卑猥なものは存在しませんのであしからず。(多分)

いや、ただ単に水中の敵を考えた結果がコレだよ!!
鮫系と触手系……どちらにしようか迷ったんですけど、
ぶっちゃけるとどっちでも良かったと言っつか……。

あまり書きそうにない、触手系を選びました。

(因みに、執筆途中に思い付いたのは秘密)

あ、あとアメーバで友人に半強制的に、
ブログを描かされることになりました。

(一か月ほど前から)

この小説と同じで亀更新ですが、宜しければ覗いてください。

(基本的に、作者の最近の話や小説更新のお知らせなどが、
書かれているだけの駄文の羅列です)

名前：朱里奈

ブログタイトル：『朱里奈公式ブログ「稀更新の駄文列」』

URLって張っていいものなんですかね？

<http://profile.ameba.jp/syurin-a-novelist/>

(とか言いつつ、張ってみる)

それでは、また次話にてお会いしましょう

第九十五話「初めての水中戦、海の中の激突」

第九十五話「初めての水中戦、海の中の激突」

水中を必死に泳ぐクリム達に容赦なく触手が襲いかかる。

クリムは迫る触手を確認すると、左へ回転しながらやり過ごす。

メデイスは、重りをぶつけて触手の軌道を変える。

(ぐっ……しっこい。一回上に上がらないとキツイ)

しばらく避けるのに徹していたクリムだが、流石に息が持たなくなってきた。

「(メデイス、一旦上がるよ)」

「(? うん)」

クリムはメデイスにアイコンタクトで指示すると、水面に向かって浮上し始めた。

触手の追撃をかわしながら水面へと出たクリムは、大きく息を吸って呼吸を整える。

「ハアハア……息が持たない。それに、地上とは違う体の使い方をするから、消耗も激しい」

そこに遅れてメデイスが現れた。

「プハツ……クリーム、どうしたの？」

「どうしたの……って、メデイスは息持つの？」

「うん？ クリームは持たないの？ そんなにきつくないけど」

「水中って疲れない？ 動き難いよね？」

「うーん、少し動き難いけど疲れてはないよ！」

その言葉を聞いて、クリームは驚愕した。

（体の基本スペックからして違いすぎる！？

あんなに小さい体なのに……っ！？）

クリームが思考に更けていると、急に足にぬらりとした感触が当たった。

（しまっ
）

足首を触手に絡め捕られると、そのまま海中に引きずり込まれた。

「クリーム!？」

驚いたようなメデイスの声が遠くで響くように聞こえた。

メデイスはクリムを追って潜る。

クリムは物凄い力で引きずられ、身動きがとれなかった。

（くっ……不味い。このままじゃ息も持たないし、何とかしないと！）

体にかかる水圧に耐えながら、何とか動かない体を動かそうとするクリム。

ようやく伸ばした手は触手をつかんだ。

クリムは力づくで外そうと試みるが、人間の力で抗うには強すぎて、ぬるりとした体液で滑り上手くないかない。

そうこうしていると、タコは動きを止めた。

止まったときの衝撃で海中を回るクリム。

タコは更に触手を伸ばしてクリムの四肢を絡め捕る。

大の字に開かれて固定される体。

（嘘っ……凄い力、動けない!?）

タコはクリムに頭を近づけていき、正面で相対する形になった。

顔が大きく裂けると、ずらりと並んだ牙が現れた。

(私の知っているタコと違うよ?!)

長い舌がクリームへと伸び、体の上を這いずる。

まるで、味を確かめるかのようだ。

(ひっ!?! き、気持ち悪い……や、やめて。誰か)

【……】

タコは一通り舐め回すと、大きく口を開いて絡め捕っているクリームを近付ける。

(っ……こんな、こんな所で! こんな意味が分からない化け物に、
負けたく)

「ガボガボガガバー! (訳: クリームを離せえ!)」
クリームが食べられそうになった直前。

突然、メデイスが飛び込んできてタコの頭を殴った。

かなりの力なのか、タコが被っていた頭骨が歪み、ひびが入る。

タコはそのまま吹き飛ばされ拘束していたクリームを離した。

「ガバガボガガボ! (訳: クリームを虐める奴は、わたしが許さない!)」

(助かった……メデイスのお陰で……!?)

【……退きなさい】

クリムの頭の中に声が響き渡った。

ユミナの怒気を含んだ低い声が。

(ユミナ!? ど、どうしたの?)

【いいから退きなさいクリム。アイツを……殺せない!!】

強制的に、二人は入れ替わった。

紅かった瞳が、透き通るような空色に変わる。

艶掛かった黒髪も、見る見るうちに空色へと変わった。

その表情は険しいもので、かなりの怒気と殺気をはらんでいた。

(……気持ちが悪い。女の子の体を不躰に舐め回すなんて。絶対に許さない)

メデイスの方もクリムを襲ったことに怒り心頭のように、タコに威嚇していた。

吹き飛ばされたタコが体勢を立て直して、ユミナとメデイスの前に立ちはだかった。

戻ってくる一瞬の間に二人はアイコンタクトを交わした。

(メデイス、全力で殺りなさい！)

(うん、八つ裂きにするよ！)

二人はタコを挟むように二手に分かれて囲む。

タコは泳ぐ二人に触手を伸ばして捕らえようとする。

それをかわしながら、ユミナの初撃が叩き込まれた。

(海中で雷は自滅。火や水とかもあまり通じない。じゃあ　！！)

ポーチから透明な弾丸、白銀の弾丸、紅白の弾丸、それぞれ三つの弾丸カートリッジを取り出した。

装填口に順番に込めると、その力を解放する。

(カートリッジ・装填リローテ)

ガチャン！　ガチャン！　ガチャン！

(リミテッド！　デスペアレンス！！　ヴァーミリオン！！！！)

突き出された折れた刀身が、頭骨に直撃する。

メデイスによってつけられた罅がさらに広がり破片が散った。

そして、そのまま姿勢をくるりと反転して構える。

(魔神、)

ユミナはもう一度くるりと反転すると、大振りな一撃を叩きつけた。

(一閃ッ!!!)

漆黒の一閃が頭骨を大きく砕き、鮮血が海中へと滲みだした。

ユミナは追撃とばかりに、蹴りを入れて距離を取った。

そこでメデイスが攻撃を始める。

「ガボボガボ!!! (壊れちゃえ!!!)」

叩きつけるように腕を振るい、タコを沈める。

間を開けずにもう一撃と、追いかけて蹴りを叩き込む。

ゆっくりと沈んでいく巨大タコ。

ユミナは新しく弾丸カートリッジを装填する。

(カートリッジ・装填リロード!!!)

装填されたのは、紅い弾丸と黄金と漆黒の弾丸。

(エクスプロージョン!!! 煉獄『アマテラス』!!!)

【ちよっ!? それ、私の技なんだけど!? というか、危k】

(爆ぜろ!!)

漆黒の焰が水を焼き、一瞬にしてユミナの周りの海が蒸発して消えた。

海水による浮遊がなくなり、ユミナもメデイスも巨大タコも、

地面へと真つ逆さまに落ちていく。

「メデイス！ 貴女は何とかして海に戻りなさい！！」

「!?!? う、うん」

落下していく中、メデイスは体を動かして何とか海の方へと行こうとする。

ユミナは重心を下に傾けてさらに落下のスピードを上げていく。

【あ、ああああ危ないよ!? 一体、ど、どうするつもり!?!?】

「そんなもの、 アイツを倒してから考える!?!」

【……っ!?!? ええええええええええええ!?!?】

「燃えるお おおおおおおおお!!!! 轟炎、」

タコに追いつくと、太刀を振りかぶって思いっきり振り下ろした。

「爆碎ッ！！！」

ズガアアアアアン！！！！！！

折れた刀身が纏う焰が爆ぜ、大爆発を巻き起こす。

タコが被る頭骨に大きな亀裂が奔ると、大きな音をあげながら砕け散った。

その勢いのままタコは落下速度を上げて地面へと叩きつけられた。

ユミナは爆風と衝撃で、上に吹き飛ばされる。

そして、丁度その時に蒸発していた海が流れ込んできて元へ戻る。

海水の流れに少し流されたユミナだったが、しばらくして態勢を立て直すと、水面へと目指して泳ぎ始める。

「ぶはっ！ ハア……ハア…… ふう」

（ほら、何とかなっただでしょ？）

【結果的にね！？ 一歩間違えたら叩きつけられてそのまま死んだよ！】

（クリーム、覚えておきなさい）

【！？ な、何……？】

急に真剣な空気を出しだしたユミナに、たじろぎ息をのむクリーム。

(世の中そんなものよ)

【 そんなわけないよ!?!? 】

「 ……それより、代わるよ 」

【 あ、うん 】

ユミナの髪と瞳は透き通る空色から、
艶やかな漆黒と血のような紅に変わった。

そして、二人も入れ替わる。

入れ代ったところでメディスが水中から顔を出した。

「 ゆみ、 ……クリム? ……倒したの? 」

(倒したの?)

【 うーん、 ……まあ一応、ね。 ……殺し損ねたけど 】

「 倒したんだって。じゃあ今のうちに急いで島を探そう 」

「 うん! ……でも、泳いで探すの? 」

「 え!?!? ……あああああ!?!? 船をあのタコに壊されたんだ
つた!?!? 」

ぐう ……仕方がない。疲れてると思うけど、頑張って泳ごう? 」

「わたしは全然大丈夫だよ！ ちょっと、お腹が空いたくらいかな？」

「はあ。じゃあ泳ぎましょうか！」

クリムとメデイスは、二人ならんで広い海を泳ぎ始めた。

島国【流浪島】を目指して。

【（……）。それにしても、リミテッドを使わなければならない敵が、こんなにも頻繁に出てくるなんてね。これは、私達が思っている以上に、

追い詰められていっているのかもしれない……注意しないと）】

（ん？ ユミナ、何か言った？）

【別に、何も言ってない。私はまたしばらく寝るわ】

（そう、おやすみ）

【（……早く、使わなくてもいいほど強くならないと。
この子達もそうだけど、……私も時間を無駄にはいられない）】

【（……もっと……強く……！）】

第九十六話「伝説の鍛冶職人」

第九十六話「伝説の鍛冶職人」

「ようやく、陸地にたどり着いた……」

「流石に疲れたよー」

「うん、早く村か何かを探して休ませて貰おう」

クリムとメデイスは泳いで大陸を挟んだ海を渡り切り、
漸く、極東【流浪島】へとたどり着くことが出来た。

しかし、二人は慣れない水中と戦闘によりかなり疲弊していた。

二人は重い体を引き摺りながら、砂浜の先の竹林を進んでいく。

竹林の中は、程よく光が通っており、とても綺麗な景色となっていた。

道なき道で竹林をかき分けながら進んでいくと、
白いもやのようなものに当りがつつまれた。

「まっしろー！ー！ー」

「霧……？ いや、違う。これは」

さらに進むと、辺りの気温が上がるのを感じた。

そして、白いもやのようなものは足元にある水から出ていた。

クリームは慎重にそれに指を突っ込んでみる。

「あたたかい。これは、お湯？ じゃあこの白いのは湯気で、
は温泉ってこと？」

「おんせん？」

「自然に湧き出るお湯の事だよ。簡単に言えば、お風呂だね」

「おおー！」

（ユミナの知識だと、火山地帯の近くに多いみたいだけど。
この近くに火山があるってこと？）

クリームは首をかしげながら辺りを見回すが、

見えてくるのは白いもやと温泉、それと竹林ぐらいである。

そして、クリームがメディスから一瞬目を離すと。

「ダーク！！」

ドッポオオオオオン！！

派手に着水する音が響いた。

「え？ ちよっ」

「あはは、温かーい！ クリムも入ろうよ」

メデイスが服を着たまま温泉へと飛び込んだのである。

メデイスは笑いながらクリムを引き摺りこもつと、服の裾の部分を引っ張る。

突然の不意打ちに、クリムは反応できず温泉へと落ちた。

ドボンッ！！

「ゴホッ、ゲホッ！？ め、メデイス……お風呂は服を、脱いでか
ら」

「ほえ？ そうなの？」

「後、マナー的に飛び込んだり暴れたりしたら駄目だよ」

「はーい！」

元気よく笑顔で返事をするメデイス。

それを見てクリムは苦笑する。

「折角服が乾いてきたのにね、また一から乾かさないと」

「あははー」

「さ、遊んでないで行くよ」

「ええ〜！ お風呂入っていかないの？」

「まずは村を探すの。村さえ見つければお風呂なんていくらでも入れるから」

「そっか〜。うん、わかった！」

温泉から上がると、二人は服に浸み込んだお湯を絞りだす。

ある程度服が乾くと、再び竹林の中を歩きだした。

再び歩き始めて五分くらいのところで、竹林を抜けて、村が見えた。

村はそんなに大きくないが、至る所に温泉が沸き出ている。

家屋は全てほぼ木できており、自然と一体となった趣を感じられる。

村の入り口に二人の男が立っており、門番であることが一目見て感じられた。

クリムはメディスの手を引きながら片方の門番に近寄る。

「余所者だな？ 此処へは何の用で来た？」

男は口を開くと厳しい口調で詰問した。

クリムはそれに淡々と返していく。

「伝説の鍛冶職人と呼ばれる人に用があってきた」

「　　っ！？　　…カイエン殿に何の用だ」

「折れた太刀を直してもらいに」

「……………」

門番は厳しい顔でクリム達を見やる。

「……………我らに、この村に害意はないのだな？」

「勿論です」

門番二人は互いに見やると、頷き合いクリムと向き合った。

「うむ、それでは。ようこそ【流浪島】へ！」

「何もない平和な所だが。問題は起こすなよ？」

「わかってます」

「はい！」

入り口をくぐると、村の中はそこそこ賑わっていた。

すれ違う人に鍛冶職人……………カイエンの居場所を尋ねた。

カイエンはこの道をずっと先に進んでいった村外れに住んでいた。人々によると、頼りになり腕は確かだが、面倒臭がり変わった男。

そんなカイエンにクリームは心配を抱き始めた。

(ちゃんと、直してもらえるのかな?)

お金などはほぼ持っておらず、

珍しい素材は修復・強化使う【深淵の虹玉】だけである。

(……うつ、なんか普通に考えて無理じゃない? お金ないとか……)

そんな考えが頭の中で渦巻きながらも、家の前にたどり着いた。

クリームは名前を呼びつつドアを叩いた。

「すみませーん。カイエンさんいますか?」

しばらくすると、背の高い男が不機嫌そうな表情で現れた。

「俺が、カイエンだ。てめえは一体誰だ?」

不機嫌そうな表情をさらに歪めながら、低い声で訪ねられる。

クリームとメディスはあまり歓迎されていない雰囲気の中、用件を伝えようとする。

しかし、

カーンカーンカーン!!

突然の村の方から警鐘が鳴り響いてきた。

「!?!? 一体何が……?」

「ちっ……モンスターか」

そういつて、カイエンは家の中へと戻っていく。

しばらくすると、大きな太刀を背に飛び出してきた。

「てめえらはそこで待ってやがれ!」

「 私達も行きます!」

村に向かって走るカイエンの背を追い、
クリムとメデイスも遅れて走り出す。

ついてくる二人に気づいたカイエンは表情を歪めた。

「待ってるって言っただろ!」

「村に襲撃があつたのなら、私達でも戦えます!」

「足手まといだ!」

「なっ!?!」

「うー! わたしとクリムは強いよ!」

「ほう……面白い冗談だ。小娘共。てめえらは俺についてこれるか!?!」

カイエンはさらに速度を上げて疾走していく。

それに続いて速度を上げるクリム達。

しかし、カイエンの方が速くどんどんと離されていく。

「……速いつ!! メデイス、先に行つて。私に合わせなくていい」

「……うん。わかった!」

クリムがそう告げると、メデイスはさらにスピードを上げてカイエンを追う。

そして、三人は村の中心へと飛び込んでいった。

村を襲っていたのは、一頭の飛竜らしきモンスターと、小型モンスターの群れであった。

「ちっ……クルペッコか、やっかいな!」

飛竜……クルペッコと呼ばれたモンスター。

鮮やかな羽、特徴的な嘴、翼についている大きな石。

どちらかと言えば、鳥竜種に近いモンスターであった。

村を荒らしている小型モンスターは、ジャギイとジャギイノス。

カイエンは迷わず群れに足を踏み入れると、

背負っていた太刀を引き抜き一閃。

空気に触れ、焔が迸る紅い刀身。

ジャギイ達は次々と切り落とされていく。

「喰らいな!!」

カイエンは刀身を寝かせて、一回転するように切り裂いた。

ジャギイ達をなぎ倒していき、白い闘気が刀身に吸い込まれていく。

刀身全体が白い闘気で包まれたと思うと、カイエンは鞘へと達を仕舞う。

カチリ

そして、もう一度刀身が姿を覗かせると……モンスターの群れは全滅した。

残されたのはクルペッコだけである。

クルペッコは慌てたように空へと逃げようと翼を広げる。

しかし、その動作を読んでいたかのようにカイエンが動いた。

紅と白の残光を描きながら、左翼に向かって放たれる一閃。

正確無比で音速を超えた一撃は、大きな石のようなものを砕き、翼を大きく切り裂いてあたりには鮮血が舞う。

ギヤアアアアアア!!??

逃げようとしていたクルペッコは態勢を崩して、倒れ伏してしまふ。

カイエンは容赦なく攻撃を積み重ねていき、
またもや刀身を寝かせて、大きく一閃。

大量の血飛沫が飛び散ると同時に、黄の闘気が刀身に纏われる。

鞘へと達を仕舞うと瞬時に抜刀して、黄の闘気を纏い連撃。

鱗が砕かれ。

羽は散り。

体は刻まれていく。

「終わりだ……馬鹿野郎」

カイエンはそう呟くと同時に、三度目の大きな一閃を繰り出す。

首を刎ねられたクルペッコは断末魔を上げながら絶命した。

紅の鬨気が刀身へと集まり、弾けて散っていった。

集まっていた鬨気が一気に霧散していき。

辺りには静寂だけと死体だけが残された。

「何も出来なかった……あの人、ただの鍛冶職人じゃない？」

「……嘘。わたし達よりずっと強い」

【（……今の一閃。あの時の夜桜さんも似たようなものを使ってた。そして集まってたあの鬨気……アレは、一体……？）】

驚いて呆然としていたクリム達に、声が掛かる。

「よお、小娘共。遅い到着じゃねえか」

「……」

愉快そうな表情で、カイエンがクリム達に話しかける。

クリムは何も言えずに押し黙る。

「結局、何もできなかったな？」

「……」

「うるさい！ オジサンちよつと黙って！！」

「オジツ！？ オイ、小娘！ 誰がオジサンだ誰が！？」

「うるさい！ 聞こえてないの？ 耳が遠いの、オ・ジ・サ・ン！
！」

「つてめえ！？ 俺はまだ30代だ！ オジサンなんかじゃねえ！！
“ カイエンさん ” つて呼びやがれ！」

「30代って十分オジサンだよ！ というか、オジサンはオジサン
で十分」

「生意気な小娘だなオイ！」

カイエンとメデイスの二人はギャーギャーと、
互いに下らないことを言い合う。

傍から見ていたらただの子供の喧嘩にしか見えない内容である。

クリムは考え事しながらも、内心二人の様子に苦笑する。

そこに、村長らしき人が割り込んできてカイエンに礼を言う。

「カイエン殿。いつも、ありがとうございます」

「何、村に住まして貰ってるんだ。これ位しないと罰が当たる」

「ありがとうございます」

「頭を上げろって、めんどくさい。何か修理が必要なものがあつた
よ、

俺の工房にまで持ってきてくれ。いつも通り修理してやるから」

「はい、お願いします」

村長らしき人は深々とお辞儀をすると、
村の人たちに色々と指示を飛ばし始めた。

「……さて、てめえら。なんか俺に用があつたみたいだな。
工房にまでついてきて話しな。茶ぐらいは入れてやるよ」

そう言い残して、足早に帰っていく。

クリーム達は呆気にとられながらも、その背を追いかけていった。

第九十七話「鍛冶と修行」

第九十七話「鍛冶と修行」

「それで？ てめえらは俺に何の用があってきたんだ？」

カイエンが湯呑に茶をいれてクリームとメデイスの前に置きながら聞く。

自分の分のお茶を取ると、クリーム達の向かい側の椅子にどかりと座った。

「あ、実は……」

そういつて、クリームは背中の中を太刀を引き抜いて前に差し出した。

カイエンは目を細め、折れた蒼い刀身を見やる。

「コイツは……」

「私が折っちゃって、この武器の事は私は詳しく知らないけど、ある人にもらったこれで、伝説の鍛冶職人と呼ばれている貴方に、直してもらえないかと……」

そう言いながら、ポーチにしまっていた【深淵の虹玉】を見せる。

「……………」

カイエンは黙って二つを眺め、思考に更ける。

(コイツは、ただの武器じゃねえな。太刀というには少しおかしい。工房の方で新しいものでも作ったのか？ それに、この玉は………すげえ！

未だかつて、これほどまでの素材は見たことがない)

「……………触ってもいいか？」

「え、はい」

カイエンはまず太刀を手に取り、様々な角度から眺めたり、立ちあがって軽く振って見たりした。

「この、装填口みたいなのはなんだ？」

「えっと、」

(ユミナ！！ 私じゃわからないから代わってー!?)

【……………丁度いいわ】

クリムがユミナに助けを求めると、ユミナは丁度いいといった感じに頷いた。

(え?)

【退きなさい】

二人は反転して、黒から空へ、紅から空へ。

『!?!』

突然、クリムの姿が変わったことに驚くメデイスとカイエン。

「……代わりました。初めましてカイエンさん。」

私の名前は、ユミナ・アリアス。さっきの娘はクリムと言います」

「ああ、何か知らんが。お前が説明してくれるんだな？」

「はい」

ユミナは、変幻刀・蒼のこととカートリッジシステムについてを説明した。

カートリッジ
弾丸と呼ばれる特殊な弾丸を使い、

一時的に絶大な力や特殊な力を得る工房の秘密最新技術。

装填口に弾丸を詰めて起動することで力を発揮する。

弾丸を使い切ると自動で、排出、冷却を行う。

現在、最大装填数は3つだが、同時に起動することはできない。

しかし、リミテッドを使うことでそれが可能となるので、可能性や技術的には使わずにできるようになるはずである。

ユミナは弾丸カートリッジの種類や特性。

知っている限りのカートリッジシステムについての知識を説明した。

「ほお……なるほどな。興味深い」

「わかりましたか？」

「ああ。……だが、工房の最新技術の結晶でそれほどまでの太刀が、何故こうも無残に叩き折れているのかがわからん」

「……」

「言えないことか？」

ユミナは一瞬だけ考えると、口を開いた。

「……夜桜さんとクリムの戦いで砕けました。クリムは太刀を折られ敗北」

「……なんだと？ アイツと戦ったのか！？」

「はい」

「しかし、てめえらはハンター同士だろうが。一体何が……」

「私……いや、クリムが。ハンターズギルドに反逆したからです」

「はあ！？」

ユミナが告げた突然の事実にも、カイエンは口を大きく上げて驚いた。
なおも説明を続けるユミナ。

「クリムはもう一人の私で、外に出るために私の心を壊しました。
そして、体をのっとなって外に出ると丁度戦争の最中で、
クリムは暴れまわりながら敵国に乗り込みました。
そこでメデイス……その子に出会い友達になり。
この子のために夜桜さんと敵対した結果が、今の私です」

「……」

あまりに壮大な話で、カイエンはついでに行けず頭を掻く。

大きく息を吸って吐き出すカイエン。

「なるほどな……折れた理由も夜桜ってなら、納得だ。
アイツの太刀は俺の最高傑作だからな……技能はともかく、
性能や純粋な強さならその太刀よりも数倍以上も強い」

「……そうですか。それで、お願いがあるのですが」

「わかってる。この太刀をこの素晴らしい素材で、
俺に直してほしいんだろ？」

「それだけではありません」

「……何？」

「太刀だけじゃなく、装備の方も。私だけじゃなく勿論メデイスの分も。」

そして、クリムとメデイスをハンターとして徹底的に鍛えてほしいんです」

「クリムってのはもう一人のお前か。メデイスはその嬢ちゃん。しかし、なんで鍛えてほしいんだ？ お前が戦えばいいだろうが」

「それでは、駄目なんです……。私も、まだまだ弱い。強くなるのに時間が必要だから、クリム達にも強くなってもらわないと」

「うん！ わたしも二人を守るために、私の為に強くなりたいよ！ オジサン、わたしを強くしてほしい……負けな位」

【ユミナ……メデイス……】

「……」

カイエンは静かに目を閉じると、黙り込んでしまった。

誰も動かないまま時間が過ぎていく。

静寂に包まれた室内の空気はどんどん重くなる。

そして、カイエンは静かに目を開くと答えた。

「……武器も」

『？』

「武器も防具も、夜桜の時を超える最高傑作を作ってやる。そして、ついでだ！ てめえらも鍛えてやんよ！！」

『！？』

「伝説の鍛冶職人と呼ばれたこの俺カイエンが、てめえらを鍛えてやる。

武器も防具身体も精神もな！ ……ありがたく思いな」

ユミナ達はそれを聞くと、笑顔でお礼を言った。

「カイエンさん。お聞きしたいことが……」

「あ？ なんだ？」

「一つ目。あのモンスターを倒した時に使ったあの技。

あれは、一体なんですか？ 練気みたいなものを使っていましたけど」

「お前、知らねえのか？ あれは、太刀使いにとっての奥義みたいなもんだろ」

「え、！？ そ、そんなの習ったことない！ それは、こつちの大陸だけなんじゃ？」

「こつちの大陸……ああ、そうか。

てめえらはドンドルマの方から来たんだっただな。

じゃあ、知らねえわけだ」

そう納得しながら、一通り説明をしてくれた。

「あれは、“気刃大回転斬り”という太刀の奥義の一つ。自身の練気を使い、気刃切りの後に出す型が一般的だ。夜桜の奴は居合抜きとして使える分、発動がクソ速い」

「……」

「特徴としては、使うたびに練気の質が上がっていく」

「質、ですか？」

「ああ、白から黄色。黄色から紅へとな。」

俺や夜桜ぐらいになると自分の練気を持っている」

「自分の練気？」

「練気とは本来は自分自身の力だ。それを武器と技によって、無理矢理な形で引き出して使っているに過ぎない。」

お前も、慣れない頃は凄く疲労していなかったか？」

ユミナは初めて気刃切りを使った時のことを思い出していた。

あの時は気を失い、目覚めた後もかなりの疲労が残っていた。

「一流の太刀使い達は、みんな自分の練気を知っている。」

それは、武器や技に頼ることなく自分自身で操る力。

故にそれぞれ色や質が違うが、普通の練気の10倍以上は強い」

「10倍!？」

ユミナは大声を上げて身を乗り出す。

カイエンはそれとなく押し戻すと、にやりと笑う。

「お前が何を考えているのかは知らんが、自分の練気を探したいのなら、

まずは気刃大回転斬りを習得してからの方が探しやすい。

練気の扱いにさらに慣れ、同時に練気の質を上げていくのにはうってつけだからな」

それを聞いたユミナは、変わった。

空色の髪と瞳が、漆黒と紅に。

「ゆ、ユミナ？ あれ、どうしたの？」

【カイエンさんの言うことをちゃんと聞いて、修行に励みなさい。私は私でやる事が出来たから。後は、任せたまよ】

それだけ言い残すと、ユミナから声が聞こえてくることはなかった。

「あ？ あのユミナとかいう嬢ちゃんはどうした？」

「なんだか、やる事が出来たとか言っつて、引き籠りました」

「ほう………」

(あの嬢ちゃん、一人で全部習得するつもりか。

……おもしれえ！ こっちも負けてらんねえな!!！)

「てめえら！」

『は、はい！？』

「さっそく修行だ。俺の言うことをちゃんとこなせ。

あと、その太刀と弾丸^{カートリッジ}、玉は俺に預けてくれ。

最高の武器を作るには、知らないといけないことが山ほどあるからな」

そういつて太刀を奪い取ると、代わりの太刀と装備を差し出された。

メデイスの方には、小さ目な装備と片手剣らしきものが。

「これは？」

「あっちのユミナって嬢ちゃんならまだしも、

てめえらは装備の重さに慣れてないだろ。

アイツはハンターとして徹底的に鍛えろつと言ったんだ。

それに、修行に重りはつきものだろ？」

「でも、オジサン。わたしは武器使ったことないよ？」

「いつつも殴ったり蹴ったりしてたから」

「……装備らしきものを持ってなかったから、まさかとは思ったが、

本当に素手でモンスターと渡り合ってたのかよ……ありえねえ。

まあ、片手剣はともかくナイフの扱い方は覚えてもらっぞ！

ハンターとしては絶対に必要な技能の一つだからな」

「うん、わかった〜！ オジサンは煩いけどいい人だね」

「んだと、コリアア!? オジサンと煩いは余計だバカ!」

「バカって言った人がバカなんだよ! やーい、バーカ!」

「それならてめえも言ってるじゃねえか! てめえもバカだ!」

「なにおう!」?

「あ、ああ!」?

(どっちもどっちだと思っけど……。はあ)

子供みたいに言い争う二人を見て、クリムはそつとため息を吐いた。

「……ちっ、まあいい。とりあえず、今からいう準備運動をこなしてもらっつ」

「はい、よろしく願います」「うん!」

「じゃあ、まずは村の外周を1000は走ってこい。

それから、
、
!
も、
、
。まあこんなもんだ
な

『え!』?

「あ、どうした?」

「多くないかな?」

「うん、多いよね」

「はあ！？ 少なすぎるぐらいだろうが！ 甘えてないでとっととやってこい！」

早く消化していかないとどんどん増えていくからな」

『鬼畜————！！』

二人は慌てて家を飛び出していった。

「さて、俺はこれらの解析と調査をしますかね」

白と黒の世界。

静寂に満ちたこの世界の中心で、ユミナは目を瞑り立つ。

（ここは、私とクリムの世界。想像で創造が成り立つ夢。だから……きっと出来るはず……）

ユミナの頭に一つの姿が浮かぶ。

蒼く煌めく強靱な太刀。

様々な力を使いこなす、変幻の刀。

（お願い、私に応えて。変幻刀・蒼）

静かに目を開くユミナ。

その目の前には蒼くきらめく強靱な太刀の姿が。

ユミナは柄を握り、構える。

「……できた。あとは、^{カートリッジ}弾丸も……」

左手を上にして念じる。

左手の上に紅い弾丸が3つ転がる。

「使えるか ^{カートリッジ}カートリッジ・^{リロト}装填 エクスプロージョン!!」

ゴオオツ!!

刀身から炎が吹き出る。

「……うん、使える」

太刀を振り、炎を払った。

「まずは“気刃大回転斬り”……習得してみせる」

ユミナは両手で太刀を振るい、素振りを始めた。

第九十八話「【荒山】と修行、そして探掘」(前書き)

あけましておめでとつございます！

今年もよろしく願いますね

年明け、初投稿？ です。

第九十八話「【荒山】と修行、そして採掘」

第九十八話「【荒山】と修行、そして採掘」

クリム達がカイエンの下で修業を始めてから一週間後の事だった。

カイエンはクリムとメデイスの二人を修行の後、居間に集めて話を始めた。

「この“変幻刀・蒼”の事だが、直すのに……いや、さらに強く強化するのにある素材たちを使いたい」

「？ 別に強くなるなら何でもいいけど……一体何を使うの？」

「わたしの武器はー？」

「嬢ちゃんの武器にも使う予定だ。

しかし、一つどころか結構な問題がな……」

『問題……？』

珍しく歯切れの悪い言い方のカイエンに首を傾げる二人。

「強化に必要な素材は五つ」

【螺旋竜の鋭角】

【属竜の鋼玉】

【死骸竜の絶骨】

【自然結晶】

【属性石】

「この五つが必要なんだ」

どれも聞いたこともない素材に、二人は疑問が浮かび戸惑う。

「どれも聞いたことない素材ばかりだけど……、
そのどこに問題があるの？」

「最後二つは量がとんでもなく必要なだけで、たいした問題じゃない。
い。」

むしろ問題なのは、 前の三つだ」

「その三つがなにかあるのー？」

「恐ろしく強い。今のお前らじゃ絶対に倒せないほどにな。」

奴らは個体数が極限までに少ない。が、代わりに特殊な個体だ。
下手をすれば古龍と同格と言っても差支えがない」

「古龍!?」「こりゆう……?」「

古龍が分かっているメディスに、軽く説明を施し話を続けた。

「見つけるのが難しい。倒すのも今のお前らじゃ無理。そして、お目当ての素材が手に入るかもわからない。……これが、主な理由だな」

「古龍並の強さ……具体的に、どれくらい強いのか？」

「G級ハンターが幾人も葬られた。討伐されたって話も聞いたことがねえな。

生き残った事例も少ないから、情報が少ないのも強さに拍車をかけている」

「……でも、その素材を使った武具なら、確かに強い」

「だろ？ まあ、戦うのは当分先だがな。戦うときは俺も行く。

今はとりあえず修行だ！ この話を聞いたんだ、昨日の倍はやれ

「！」

『え！？』

「いいから、とつとと行けやー！！」

『は、はいいい！！？』

カイエンの一喝に、慌てて二人は部屋から飛び出していった。

次の日。

「今日は修行はやらん。が、代わりに昨日言った素材のうち、【自然結晶】と【属性石】の二つを取りに行く」

夜も明けない頃、カイエンはそう言って二人を叩き起こした。

眠いのを我慢しながら、不満そうに聞く。

「……それは、どうやって手に入れるんですか？」

「勿論手掘りだ……あ、流石にピッケルは使うぞ？」

「……どこで？」

「【自然結晶】は【庭園】で、【属性石】は【荒山】だ」

やはり聞いたこともない場所で二人は、首を傾げる。

そんな二人にお構いなしに、カイエンは準備するように促した。

5分後、クリムとメデイスは武具を纏い家の前に集まった。

クリムの武器は飾り気がなく、

頑丈さと切れ味を重視した鉄刀の様な太刀。

防具は、強化繊維と鉱石で作られた着物に近いもの。

防具の方は作られるものをイメージして、

なるべく近い形で着慣れさせるためのものらしい。

対してメデイスの武器は、手甲と大型ナイフである。

防具は、強化繊維を使った服そのもので、
防御力より動きを重視してある。

主に戦闘で使うのは両手の手甲で、
大型ナイフはサバイバルや剥ぎ取りようであった。

「敵も出てくるが、ただの採掘じゃあ修行にならない。
コレを着けておけ……」

そついつて、小さな輪状のものを一人に5つほど手渡した。

「これは……?」

「重りだ。手足首と首に着ければいい」

「ええーわたしも? もう着いてるよー?」

「お前はそれに慣れているからな、特別性でクリームよりさらに重い」

「ぶう」

文句を言いながらも、素直に体に付けていくメデイス。

二人が重りを付けた瞬間、重りは先ほどとは比べ物にならないくらい重くなった。

「なっ……!?!?」

「お、重いよー……」

「数が数だから、効率重視でいきたいんだが……」。

まあ、そうも言つてられない状況だからな。

……一つ20kg以上はある。メデイスはその倍だからな」

少なくともクリームは合わせて100kg以上、メデイスは200kg以上。

「ま、前付けてた防具もそこそ重い方だから大丈夫だろ？」

「む、無茶な……動くのがやっとだ」

「もともとが、重いのに……オジサンのバカア」

「誰がオジサンだ！ 誰が馬鹿だ！

数が多いから時間もない。早くいくぞ！

まずは、【荒山】からだ」

「因みに何個くらい必要なんですか……？」

クリームのその質問にカイエンはにやりと妖しく笑った。

「【属性石】は最低でも100個以上だ。

【自然結晶】も最低でも50は必要だからな。

しかも、どちらも希少鉱石の類に分類されるものだ」

『そ、そんなの無理！？』

「つべこべ言ってるねえで、とつとと行くぞ！」

三人は竜車で5日かけて、【荒山】へと辿り着いた。

そこは緑が全く見受けられなかった。

荒れに荒れて、石と岩に砂……自然は枯れ木と枯草だけ。

水は、淀んでいるが川が山の上の方から流れていた。

確かに採掘には向いている地形と言える。

しかし、あまりの荒廃具合に不吉な空気を醸し出していた。

「ここの山の表面や内部……坑道で採掘を行う。

危険だが、一応手分けしてやるつもりだ。……何か質問は？」

はい、とクリムが手を上げてから質問する。

「気を付ける事などは……？」

「……モンスターがでる。後は元・採掘場だから、

有毒ガスとかに気を付けておけ。崩れるかもしれないから、
足元や周りにも気を付けて、あまり派手に暴れるなよ」

「いやいや、碌に動き回れないから……」

「モンスターは何が出るの？」

「……一体だけ、現れたら絶対に逃げるべきモンスターがいる」

『…………』

カイエンは急にまじめな声で念を押すように告げた。

「ここには、 属竜『ディエルノトス』がでる」

『！？ 属竜『ディエルノトス』！？ …… ってなに？』

「あん！？」

肩透かしを食らったようにカイエンはガクツとなった。

「……昨日言ってたヤバイ奴の一体だ。

様々な属性を扱う古龍もびっくりな能力だ。

三人でやりあっても 殺される」

最後の言葉に背筋がぞつとしたクリムとメデイス。

カイエンは念入りに釘を打ちつつ、説明していった。

「滅多に御目に掛かれないから大丈夫だと思いが、

もし出会ったら気づかれる前に全力でその場から逃げる。

奴の体格はイビルジョーに近く、とても尻尾が長く、

そして、四色の巨大な角が特徴だ」

「イビルジョーってあの緑っぽいアレですか？」

「じゃあ、翼がないから飛ばないのか……」

「ああ。速さもそこまで速くはない。

距離があれば十分逃げ切れる……はずだ」

あつたこともない恐ろしいモンスターに不安が募る二人。

そして、あることに気が付くクリム。

「あ！でも私達重りを着けてるけど……」

そこまで言って、メディスも自分にかかる重さを思い出した。

「うん、これじゃあいつもよりだいぶ遅いよー」

メディスにまでそういわれて、冷や汗を流し始めるカイエン。

「……もしかして、忘れてた？」

「（ギクッ!?!）」

「オジサン、妖しいよ？」

「（ギクウギクッ!?!）　　ハハ、ナニヲオツシャルノヤラ……?」

カタコトで白々しく答えるカイエン。

その反応に、思わずため息を吐く二人。

「……うるせー。どうせ忘れてたよ！」

それに、相手はでかいから坑道では多分合わない！
まあ、外さずに何とかしやがれ、これも修行の一環だ！！」

「ええー！？」

「ゴチャゴチャ言っでねえで、とっとと行きやがれ！」

「横暴だー！っ！！！」

二人は分かれて採掘へと走って向かった。

「……あ、【属性石】がどんなのか教えてねえや。

……まあ大丈夫だろ……多分な」

と、呑気に頭を掻きながらカイエンも進み始めたのであった。

第九十八話「【荒山】と修行、そして探掘」（後書き）

誰かー！ 私に文才と、ネーミングセンスと、お金と、やる気と、特殊能力を下さーい！！

あ、ムリか……（、・・・、）

因みに、作中で出てきた【荒山】は誤字じゃないですよ？
決して、【鉦山】の誤字ではありません。
……ほんとですよ？

もう一度、

新年、明けましておめでとーございます！

今年も、『モンスターハンター ～漆黒の業火～』とともに、
よろしく願いしますね！！

それでは皆さん、今年一年頑張ってくださいね！
皆さんの一年が最上となることを心より願っています！！

次話にてまたお会いしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1383/>

モンスターハンター ～漆黒の業火～

2012年1月3日00時53分発行